黒 Yajurveda 散文における Sattra 儀礼

—行者たちの 1 年の共同生活—

廣瀬 勤

目次

略号表 xiii

1 序論 1

1.1 はじめに 1

1.2 Sattra の概要 1

1.3 研究史 2

1.4 原典と研究方法 5

2 KS の Sattra 章の記述の構成 7

2.1 概観 7

2.2 個別の儀礼の記述 11

2.2.1 9 日間と 21 日間の儀礼 11

2.2.1.1 9 日間の儀礼（春分祭） 11

2.2.1.2 21 日間の儀礼（夏至祭） 14

2.2.2 Dvādaśāha（12 日間の儀礼） 18

2.2.2.1 Ekādaśinī と人間犠牲 19

2.2.2.2 Soma 祭 27

2.2.2.3 Mahāvrata 祭（1 年の締めくくりの祭り） 29

2.3 KS のまとめ 33

3 TS の Sattra 章の記述の構成 35

3.1 概観 35

3.2 個別の儀礼の内容 40

3.2.1 Trirātra における 1000 頭目の雌牛 40

3.2.2 Ṣaḍrātra における Sārasvata Sattra 48

3.2.3 Devasattra 49

3.2.4 Dvādaśarātra における Graha 汲みの順序 50

3.2.5 食事制限の意味での Mahāvrata 52

3.2.6 1 年 Sattra 54

3.2.7 1 年 Sattra の開始時期と終了時期 55

3.2.8 Daśarātra 56

3.2.8.1 個別的な Daśarātra 56
3.2.8.2 1 年 Sattra の最後の儀礼としての Daśarātra 59
3.3 TS のまとめ 60
3 KS の記述と TS の記述の対応 63
3.1 比較・考察 67
4 春分祭と夏至祭に関する記述 69
4.1 春分と夏至に関連する可能性がある 3 つのグループ 69
4.2 各グループにおける特徴的な語あるいは内容の出現の有無 69
4.3 Divākīrtya, Viśvajit, Abhijit, Viṣuvant の説明と用例 70
4.3.1 Divākīrtya 70
4.3.2 Viṣuvant 71
4.3.3 Viśvajit と Abhijit 72
4.4 各グループにおける春分あるいは夏至に関する祭式の特徴 73
4.4.1 第 1 グループ（KS 33.4-5, TB 1.2.2.1-4）（春分） 73
2.4.4.2 第 2 グループ（KS 33.6; TS 7.3.10; TB 1.2.4）（夏至） 76
2.4.4.3 第 3 グループ（MS 4.8.10; KS 30.5; TB 1.2.3）（夏至） 82
4.5 春分祭と夏至祭のまとめ 85
5 結論 87
6 原文と訳注 93
KS Sattra 章（KS 33−34） 93
KS 33.1: 雌牛の Sattra（≈ TS 7.5.1–2） 93
KS 33.2: 1 年 Sattra において使用される祭式次第の導入と説明（≈TS 7.4.10; 7.4.11; 7.5.1; TB 1.2.2.5） 94
KS 33.2(1):): Atirātra を最初に行うことで Agniṣṭoma, Ukthya, Atirātra を順番に行っていることになる（≈TS 7.4.10(1)） 95
KS 33.2(2): Atirātra において Jyotiṣṭoma を最初に用いる（≈TS 7.4.10(2) ） 96
KS 33.2(3): 2 つの Rathantara-Sāman と Sobhari の Brahma-Sāma（≈TS 7.4.10(3) ） 96
KS 33.2(4): Caturviṁśa-Stoma を用いる日は 1 年 Sattra の導入の日（TS 7.5.1(3) ） 97
KS 33.2(5): 導入の日においてあちらからこちら向きに（Stoma の数を減らす方式で）一年間の Sattra を始める 98
KS 33.3: 1 年 Sattra の基本要素（≈ TS 7.4.11） 99

KS 33.3(1): Ṣaḍaha の 1 日ごとに Jyotiṣṭoma、Goṣṭoma、Āyuṣṭoma を順番に用いる（TS 7.4.11(1) ） 99

KS 33.3(2): Ṣaḍaha の繰り返し：6、12、18、24、30 日間（≈TS 7.4.11(2) ） 100

KS 33.4: 9 日間の儀礼（≈TB 1.2.2） 101

KS 33.4(1): 9 日間の儀礼の導入 101

KS 33.4(2): Agniṣṭoma たちが Para[s]-Sāman をもつべきか 102

KS 33.4(3): Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma を用いる 2 つ Agniṣṭoma 102

KS 33.4(4): 9 日間の中の Ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる Sāman たち 103

KS 33.4(5): 9 日間の中の Ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる Atigrāhya たち 103

KS 33.4(6): 9 日間の中の 5 日目（中心の日）に用いられる Atigrāhya 104

KS 33.5: 春分から夏至までの 3 か月間における Pṛṣṭha について（≈TS 7.5.3） 105

KS 33.5(1): Pṛṣṭha［-Sāman］を最後の月に用いる（≈TS 7.5.3(1) ） 105

KS 33.5(2): 1 年 Sattra 参加者は岸のない海を泳いでいるかのようである（≈TS 7.5.3(2) ） 105

KS 33.6: 21 日間の儀礼（≈TB 1.2.4） 106

KS 33.6(1): 神々が太陽の落下を恐れた話（1） 106

KS 33.6(2): 神々が太陽の落下を恐れた話（2） 107

KS 33.6(3): 神々が太陽の落下を恐れた話（3） 107

KS 33.6(4): 神々が太陽の落下を恐れた話（4） 108

KS 33.6(5): Spara-Sāman と Para-Sāman（≈TS 7.3.10 Ekaviṃśatirātra, Para-Sāman と Paras-Sāman） 109

KS 33.7: （21 日間の儀礼（夏至祭）の中の）開放日についての議論（≈ TS 7.5.6; 7.5.7） 109

KS 33.7(1): 新月の夜・満月の夜・Vyaṣṭakā の夜において開放日があるべし（≈TS 7.5.7(1) ） 109

KS 33.7(2): 開放日がある場合には、Puroḍāśa を準備し、Soma 祭の代替としての Iṣṭi 献供を行う（≈TS 7.5.7(2) ） 110

KS 33.7(3): 21 日祭（夏至祭）後の後半の 6 か月の開始（≈TS 7.5.7(3) ） 111

KS 33.8: 一年 Sattra の後半について 112

KS 33.8(1): Para[s]-Sāman（≈TS 7.3.10） 112

KS 33.8(2): 一年の後半 5 か月間に使われる Stoma 113

KS 33.8(3): 一年の後半の 6 番目の月の 3 つの Abhiprava と Go と Āyus の日 113

KS 33.8(4): Dvādaśāha における Chandoma の日（Dvādaśāha の 7、8、9 日目） 114

KS 33.8(5): （Dvādaśāha の）10 日目 114

KS 33.8(6): Mahāvrata の日（Dvādaśāha の 11 日目） 114

KS 33.8(7): Mahāvrata において使われる Graha たち 115

KS 34.1: 11 頭の動物犠牲（Ekādaśinī） 116

KS 34.1(1): Ekādaśinī の開始 116

KS 34.1(2) : 1 日目：1 頭目 Indra-Agni 117

KS 34.1(3): 2-5 日目：2 頭目（Rathaṃtara-Sāman, Agni）、3 頭目（bṛhat-sāman, Indra あるいは Indra-Agni）、4 頭目（Rathaṃtara-Sāman, Agni-Indra）、5 頭目（Bṛhat-Sāman, Indra-Agni） 117

KS 34.1(4): 6 日目：6 頭目（Bṛhaspati, śitipṛṣṭha） 118

KS 34.1(5): 7 日目（第一 Chandoma）：7 頭目（神格 Dyāvāpṛthivī, 犠牲獣 dhenu） 118

KS 34.1(6): 8 日目（第二 Chandoma）：8 頭目（神格 Vāyu, vatsa） 118

KS 34.1(7): 9 日目（第三 Chandoma）：9 頭目（Vāc, pṛśni） 119

KS 34.1(8): 10 日目：10 頭目（Aditi, vaśā） 119

KS 34.1(9): Mahāvrata の日（11 日目）：11 頭目（Viśvakaraman, ṛṣabha） 119

KS 34.2: Ekādaśinī の贖罪儀礼（≈TB 1.4.6.5−7; 1.4.7.1） 120

KS 34.2(1): Tvaṣṭar への動物犠牲 120

KS 34.2(2): Sarparājñī 讃歌 121

KS 34.3: Soma の購入および代用品の使用（≈TB 1.4.7.5−7） 123

KS 34.3(1): Soma の購入 123

KS 34.3(2): Soma の購入の対価 123

KS 34.3(3): Soma の代用品：Pūtīka 123

KS 34.3(4): Soma の代用品：Ārjuna 124

KS 34.3(5): Soma の代用品：Pūtīka 124

KS 34.4: 競争相手のいる Soma 祭（≈TS 7.5.5; PB 9.4） 125

KS 34.4(1): 2 つの Soma 祭が同時に行われる場合（≈TS 7.5.5(1) ） 125

KS 34.4(2): 水瓶が割れた場合の贖罪儀礼（≈TS 7.5.5(2) ） 126

KS 34.5: 一年の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（≈TS 7.5.8−10; TB 1.2.6.6−7; PB 5.5） 126
KS 34.5(1): 祭官たちの儀礼行為（≈TS 7.5.8(3) ） 126
KS 34.5(2): 賞賛者と非難者（≈TS 7.5.9(8) ） 127
KS 34.5(3): Śūdra と Ārya の毛皮の引っ張り合い（≈TS 7.5.9(7) ） 127
KS 34.5(4): 太鼓を鳴らす（≈TS 7.5.9(5) ） 127
KS 34.5(5): 管楽器を演奏する（≈TS 7.5.9(3) ） 127
KS 34.5(6): Brahmacārin と Puṁścalī の喧嘩（TS 7.5.9(2); (9) ） 128
KS 34.5(7): 女たちの歌と鎧を着た者たちの踊り（TS 7.5.10(2) ） 128
KS 34.6 Prajāpati が Dvādaśāha を 1 年と同等のものとして創造する神話 128
KS 34.6(1): Dvādaśāha を Soma 祭の進行になぞらえる 128
KS 34.6(2): Prajāpati が創造した Dvdāśāha のそれぞれの日と対応する諸々の Sāman 129
KS 34.7: Prajāpati が諸生物の創造のために Dvādaśāha を創造する神話 130
KS 34.7(1): 6 季節と 12 か月は 1 年の 2 つの形、Gāyatrī は Brahman、Dvādaśāha は Kṣatra 130
KS 34.7(2): Bṛhatī 韻律と 36 夜 (≈TS 7.4.6) 130
KS 34.7(3): 神々は Dvādaśāha（＝Dīkṣā＋Upasad たち＋Soma 搾り）によって人間と分離した 131
KS 34.8: Dvādaśāha における食人行為性と人間犠牲性の示唆 131
KS 34.8(1): Prajāpati が繁殖を求めて Dvādaśāha を開催する神話 （TS 7.2.9(1)） 131
KS 34.8(2): 犠牲に適した水と適さない水（血） 131
KS 34.8(3): Sattriya を受け取ることは人間（犠牲）に等しい 132
KS 34.8(4): Dvādaśāha の構造、Atirātra と Agniṣṭoma の順序（TS 7.2.9(2)） 133
KS 34.9: 潔斎の主題 134
KS 34.9(1): Prajāpati が成就を求めて Dvādaśāha を開催する神話 134
KS 34.9(2): （Dvādaśāha においては）太った者が潔斎すべし 134
KS 34.9(3): 潔斎の日数：12, 13, 15, 17, 21, 24, 27, 30, 33, 44, 48, 無限 135
KS 34.9(4): 13 番目の月の暗示、寒期（śiśira-）は出発（prayāṇa-）、春は滞在（avasāna-） 136
KS 34.10: Brahmavādin たちの議論：Dvādaśāha の各日による果報について（≈TS 7.3.2） 137

KS 34.11: Dvādaśāha において 12 夜の間潔斎することと食人行為の同一視（≈TS 7.2.10.3−4） 137
KS 34.11(1): 3 つずつの清めが 4 つある（＝12 日間） 137
KS 34.11(2): Dvādaśāha における食物は人間の象徴である 137
KS 34.12: Dvādaśāha における食物は人間の象徴である（≈TS 7.2.10.3） 138
KS 34.12(1): 12 夜の間潔斎する者は誕生していることになる 138
KS 34.12(2): 犠牲祭に適さない人間の 12 の部位あるいは排泄物 138
KS 34.12(3): (12 の潔斎の夜) + (12 の Upasad) + (12 夜の駆り立て) = Bṛhatī (36 音節) 139
KS 34.12(4): Bṛhatī 36 音節 – 4 音節=Anuṣtubh 32 音節 139
KS 34.13: Sattra 参加者の人数に関して 139
KS 34.13(1): Prajāpati が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 1 名） 139
KS 34.13(2): 3 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 3 名） 140
KS 34.13(3): 6 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 6 名） 140
KS 34.13(4): 12 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 12 名） 140
KS 34.13(5): Upasad においては 13 番目の者が潔斎すべし:13 番目の月の暗示（Sattra 参加者 13 名） 141
TS Sattra 章（TS 7） 142
TS 7.1 142
TS 7.1.1 142
TS 7.1.1(1): Jyotis の繁殖、Agni、Virāj への等置（≈JB 1.66:1－2; PB 6.3.5－6） 142
TS 7.1.1(2): Stoma の Savana 運び（≈JB 1.66:2－4; cf. PB 16.1.6） 142
TS 7.1.1(3): púruṣasammita-であり ásthūri-である祭式（JB 1.67:1－2; cf. PB 16.1.6;6.3.2） 143
TS 7.1.1(4): Agniṣṭoma によって Prajāpati が創出したもの（≈JB 1.67:3－16; PB 6.1.1－5） 143
TS 7.1.1(5): Prajāpati からの 4 段階の創出神話（≈JB 1.68-69; PB 6.1.6－13） 144
TS 7.1.2: Stoma に Jyotis を置いていく（≈JB 1.66.5−12） 145
TS 7.1.3: Sarvastoma 145
TS 7.1.4: Dvirātra 146
TS 7.1.4(1): Aṅgiras たちの Sattra、Haviṣmant と Haviṣkṛt 146
TS 7.1.4(2): 前後の日は出発と到着の日、Abhiplava と Gati 147

TS 7.1.4(3): 前後の日の Stoma と Yajñakratu： Jyotis を Stoma としてもつ Agniṣṭoma、すべての Stoma をもつ Atirātra 147

TS 7.1.4(4): 前後の日の Sāman：Gāyatra→Traiṣṭubha、Rathaṃtara→Bṛhat、Vaikhānasa→Ṣoḍaśin 147

TS 7.1.4(5): 前後の日の前の日を新月の夜、後ろの日を翌日にする 148

TS 7.1.5: Trirātra (1) 148

TS 7.1.5(1): 原初の水たちと Prajāpati による大地拡大 148

TS 7.1.5(2): Prajāpati による Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群の創出 148

TS 7.1.5(3): Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群による 1 頭の雌牛の創出と繁殖 148

TS 7.1.5(4): Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群による Agniṣṭoma、Ukthya、Atirātra の開催 149

TS 7.1.5(5): 中空の分離と Trirātra の真ん中の日の固定、Triṣṭubh の Ājya-Śastra、Saṃyāna-Sūkta、Ṣoḍaśin-Śastra の詠唱、Agniṣṭoma、Ukthya、Atirātra を順番に使用する 149

TS 7.1.5(6): Indra と Viṣṇu による 1000 番目の雌牛の奪い合い 149

TS 7.1.5(7): 残りものの 1000 番目の雌牛を残りものの祭官に与える 150

TS 7.1.6: Trirātra (2) 151

TS 7.1.6(1): Soma、Indra、Yama による 1000 頭の雌牛の分け合い：導入 151

TS 7.1.6(2): Soma と赤茶色の 1 歳の雌牛 151

TS 7.1.6(3): Indra と赤色の吉兆のある 4 歳の Vṛtra 殺しに属する雌牛 151

TS 7.1.6(4): Yama と年老いた愚かなその中で最低の雌牛、Anustaraṇī 牛 152

TS 7.1.6(5): 1000 番目の雌牛は Vāc である 152

TS 7.1.6(6): 望みの雌牛は美しくあるべきである 152

TS 7.1.6(7): 雌牛を Agnīdh 祭官の場所の北に連れて、Āhavanīya 祭火のそばで木桶をかがせる 153

TS 7.1.6(8): 雌牛が東で西向きに立っている間に献供する 153

TS 7.1.6(9): 雌牛の名前を雌牛の耳に囁く 153

TS 7.1.7: Trirātra (3) 154

TS 7.1.7(1): 1000 番目の雌牛は祭主を天界に行かせる 154

TS 7.1.7(2): 1000 番目の雌牛を祭官に与える 154

TS 7.1.7(3): 1000 番目の雌牛についての Brahmavādin たちの議論 155

TS 7.1.8: Atri による Catūrātra の開催 155
TS 7.1.9: Jamadagni による Catūrātra の開催 156
TS 7.1.10: Pañcarātra 156
TS 7.1.10(1): 1 年（Saṃvatsara）による Pañcarātra の開催 156
TS 7.1.10(2): Sārvaseni Śauceya による Pañcarātra の開催 157
TS 7.1.10(3): Babara Prāvāhaṇi による Pañcarātra の開催 157
TS 7.1.10(4): Catūrātra は不足、Ṣaḍrātra は過分、Pañcarātra が適切な祭式 157
TS 7.1.10(5): Pañcarātra の基本構造 157
TS 7.2 158
TS 7.2.1: Ṣaḍrātra 158
TS 7.2.1(1): Sādhya 神たちによる Ṣaḍrātra の開催 158
TS 7.2.1(2): Ṣaḍrātra は神々の Sattra である 158
TS 7.2.1(3): Ṣaḍrātra の基本構造 158
TS 7.2.1(4): Sārasvata-Sattra 159
TS 7.2.2: Saptarātra 160
TS 7.2.2(1): Kusurubinda Auddālaki による Saptarātra の開催 160
TS 7.2.2(2): Saptarātra の基本構造 160
TS 7.2.2(3): Saptarātra の最後の日（Viśvajit-Stoma の日）に Pr̥ṣṭha を用いること 161
TS 7.2.3: Aṣṭarātra 161
TS 7.2.3(1): Bṛhaspati による Aṣṭarātra の開催 161
TS 7.2.3(2): Aṣṭarātra の基本構造 161
TS 7.2.4: Navarātra 162
TS 7.2.4(1): Prajāpati が Navarātra によって飢えた生き物たちを救った神話 ... 162
TS 7.2.4(2): Navarātra は長い間病気の者のために行うべし 163
TS 7.2.5: Daśarātra 163
TS 7.2.5(1): Daśarātra は繁殖、Prajāpati、Virāj に関する祭式である、Daśarātra のために潔斎するなら Daśahotar を献供すべし 163
TS 7.2.5(2): Indra が Daśarātra によって他の神格たちから分け隔てられた神話164
TS 7.2.5(3): Daśarātra は Trikakud（3 つの峰をもつ）祭式である 164
TS 7.2.5(4): 神々が Daśarātra を城壁として Asura たちを退けた神話 164
TS 7.2.5(5): 詩節数の多い Stoma から詩節数の少ない Stoma へ行くことは Jāmi の原因 165

TS 7.2.5(6): Daśarātra の基本構造 165
TS 7.2.6: Ekādaśarātra 166
TS 7.2.6(1): 季節たちが Ekādaśarātra によって子孫（時節たち）を手に入れた神話 166
TS 7.2.6(2): Ekādaśarātra の基本構造 166
TS 7.2.7: Dvādaśarātra（様々な Graha の配列）（≈KS 30.3; KpS 45.6; TB 2.4.3） 167
TS 7.2.7(1): Indra-Vāyu の Graha 167
TS 7.2.7(2): Mitra-Varuṇa の Graha 167
TS 7.2.7(3): 両 Aśvin の Graha 167
TS 7.2.7(4): Śukra の Graha 167
TS 7.2.7(5): Manthin の Graha 168
TS 7.2.7(6): Āgrayaṇa の Graha 168
TS 7.2.7(7): Ukthya の Graha 168
TS 7.2.7(8): Puroruc を唱える 168
TS 7.2.8: Dvādaśarātra（Graha の順序）（≈KS 30.2; KpS 45.5） 169
TS 7.2.8(1): 10 日間で使われる Graha の種類と順序（1≈9 日目） 169
TS 7.2.8(2): 10 日間で使われる Graha の種類と順序（10 日目） 170
TS 7.2.8(3): 3 日間ごとの最初と最後の日の Graha を同じ Graha にする 170
TS 7.2.9: 171
TS 7.2.9(1): Prajāpati が繁殖を求めて Dvādaśāha を開催する神話（≈KS 34.8(1)） 171
TS 7.2.9(2): Dvādaśarātra の構造、Atirātra と Agniṣṭoma の順序（≈KS 34.8(4)） 171
TS 7.2.10: Dvādaśāha 172
TS 7.2.10(1): 片側だけに Agni Vaiśvānara を含む祭式としての Dvādaśāha 172
TS 7.2.10(2): Dvādaśāha において 12 夜の間潔斎することと食人行為の同一視（≈KS 34.2; 34.1; 34.11） 172
TS 7.3 173
TS 7.3.1: Dvādaśarātra（10 日目、Avivākya の日） 173
TS 7.3.2: Dvādaśāha（各日に獲得できるもの） 175
TS 7.3.3: Trayodaśarātra 175
TS 7.3.4: Āditya たちによる Caturdaśarātra の開催 176

TS 7.3.5: Prajāpati による Caturdaśarātra の開催 176
TS 7.3.6: Indra による Pañcadaśarātra の開催 177
TS 7.3.7: Indra が Pañcadaśarātra を Vajra として Asura たちを打ち負かした神話 178
TS 7.3.8: Saptadaśarātra 179
TS 7.3.9: Viṃśatirātra 179
TS 7.3.10: Ekaviṁśatirātra 180
TS 7.4（≈JB 2.355−358; 365−367; PB 23.21−28; 24.1−17） 182
TS 7.4.1: Caturviṃśarātra 182
TS 7.4.2: 第 2 の Caturviṃśarātra 183
TS 7.4.3: Triṃśadrātra 184
TS 7.4.4: Dvātriśaṃdrātra 186
TS 7.4.5: Trayastriṃśadrātra 187
TS 7.4.5(1): Dvādaśāha と Trayastriṃśadaha は神々の Sattra である 187
TS 7.4.6: Ṣaṭtriṃśadrātra 189
TS 7.4.7: Ekasmānnapañcāśa[-rātra/-aha] 190
TS 7.4.8: 一年 Sattra の開始と終了の時期について 191
TS 7.4.9: Dīkṣā は火の準備、Upasad は自分の料理、Sattra は自分を Dakṣiṇā とするものである 192
TS 7.4.10: 使用される祭式次第の導入と説明（≈KS 33.2） 192
TS 7.4.10(1): Atirātra を最初に行うことで Agniṣṭoma, Ukthya, Atirātra を順番に行っていることになる（≈KS 33.2(1)） 192
TS 7.4.10(2): Atirātra において Jyotiṣṭoma を最初に用いる（≈KS 33.2(2)） ... 192
TS 7.4.10(3): 2 つの Rathaṃtara-Sāman と Sobhari の Brahma-Sāma（≈KS 33.2(3)） 193
TS 7.4.11: 1 年 Sattra の基本要素（≈KS 33.2; 33.3） 193
TS 7.4.11(1): Ṣaḍaha の 1 日ごとに Jyotiṣṭoma、Goṣṭoma、Āyuṣṭoma を順番に用いる（≈KS 33.3:28.15－29.3） 193
TS 7.4.11(2): Ṣaḍaha の繰り返し、6、12、18、24 日間（≈KS 33.3(2)） 194
TS 7.5 (≈JB 4.1; 9.4 etc. ; PB 2.374 etc.) 194
TS 7.5.1: 雌牛たちの Sattra 194
TS 7.5.1(1) : 雌牛たちの Sattra（≈KS 33.1） 194
TS 7.5.1(2): 1 年の前半と後半の話（≈KS 33.5(2) 195
TS 7.5.1(3): Caturvimŝa-Stoma を用いる日＝1 年 Sattra の導入の日（≈KS 33.2(4)） 195

TS 7.5.2: 雌牛たちの Sattra（≈KS 33.1） 196
TS 7.5.3: 春分から夏至までの 3 か月間における Pr̥ṣṭha について（≈KS 33.5） 197
TS 7.5.3(1): Pr̥ṣṭha［-Sāman］を最後の月に用いる 197
TS 7.5.3(2): 1 年 Sattra 参加者は岸のない海を泳いでいるかのようである 197
TS 7.5.4: Daśarātra (≈KS 33.8(7)) 197
TS 7.5.5: 競争相手のいる Soma 祭（≈KS 34.4; PB 9.4） 198
TS 7.5.5(1): 2 つの Soma 祭が同時に行われる場合（≈KS 34.4(1)） 198
TS 7.5.5(2): 水瓶が割れた場合の贖罪儀礼（≈KS 34.4(2)） 198
TS 7.5.6: 開放日の議論（≈KS 33.7） 199
TS 7.5.7: 開放日についての議論（≈KS 33.7） 200
TS 7.5.7(1): 新月の夜・満月の夜・Vyaṣṭakā の夜（≈KS 33.7(1)） 200
TS 7.5.7(2): 開放日がある場合には、Puroḍāśa を準備し、Soma 祭の代替としての Iṣṭi 献供を行う（≈KS 33.7(2)） 201
TS 7.5.7(3): 21 日祭（夏至祭）後の後半の 6 か月の開始（≈KS 33.7(3)） 201
TS 7.5.8: 1 年 Sattra の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（1） 202
TS 7.5.8(1): Mahāvrata 祭で使用されるさまざまな Sāman（≈KS 34.5; TB 1.2.6.6－7） 202
TS 7.5.8(2): Mahāvrata 祭において Pañcaviṃśa-Stoma を用いる 203
TS 7.5.8(3): Udgātar 祭官が Udgītha を歌う 203
TS 7.5.8(4): Udgātar 祭官が玉座に座る 203
TS 7.5.8(5): Hotar 祭官がぶらんこに乗る 203
TS 7.5.8(6): Adhvaryu 祭官が 2 つの草束に乗る 203
TS 7.5.9: 1 年 Sattra の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（2） 204
TS 7.5.9(1): Arkya-Sāman によって Prajāpati が生き物たちを創出した神話 204
TS 7.5.9(2): 大きな声を出す 204
TS 7.5.9(3): 100 の弦をもつ琴を演奏する 204
TS 7.5.9(4): 競争する 204
TS 7.5.9(5): 太鼓を叩く 205
TS 7.5.9(6): 全ての声たちを出す 205
TS 7.5.9(7): 2 人が新鮮な獣の革を巡って競う 205
TS 7.5.9(8): 褒める者と貶す者 205

TS 7.5.9(9): 1 年 Sattra を行う者は雌雄一対であることから離れているが、Mahāvrata 祭では Vedi の内側で雌雄一対となる 205
TS 7.5.10: 1 年 Sattra の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（3）（≈KS 34.5; TB 1.2.6.6−7） 206
TS 7.5.10(1): 獣の皮を突き刺す 206
TS 7.5.10(2): 女奴隷（dāsī´-）たちが Mārjālīya 火の回りで地面を踏みつつ歌いながら踊る 206
MS Soma 祭章の 1 年 Sattra の要素（MS 4.8.10） 207
KS Soma 祭章の 1 年 Sattra の要素（KS 30.5） 209
TB Gavāmayana 章（TB 1.2.2−6） 211
TB 1.2.2: 9 日間の儀礼（≈KS 33.4） 211
TB 1.2.3: 21 日間の儀礼の真ん中の日に用いる Graha（≈MS 4.8.10; KS 30.5） 212
TB 1.2.4: 21 日間の儀礼（≈KS 33.6） 213
TB 1.2.5: 11 頭の動物犠牲（ekādaśinī）（≈KS 34.1） 214
TB 1.2.6: 一年の締めくくりとしての Mahāvrata（≈KS 34.5; PB 5.5） 215
TB 1.2.6.6−7: 神々と Asura、Brāhmaṇa と Śūdra の革を巡った争い（≈KS 34.5; TS 7.5.8-10） 216
7 参考文献 219
7.1 一次文献 219
7.1.1 Saṁhitā 文献 219
7.1.2 Brāhmaṇa 文献 222
7.1.3 Śrautasūtra 文献 224
7.1.4 その他 224
7.2 二次文献 224

略号表

一次文献

A	Pāṇini による Aṣṭāḍhyāyī
AB	Aitareya-Brāhmaṇa
ĀpŚS	Āpastamba-Śrautasūtra
AV	Atharvaveda
AVP	Atharvaveda-Paippalāda
AVŚ	Atharvaveda-Śaunaka
JB	Jaiminīya-Brāhmaṇa
KpS	Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṁhitā
KS	Kāṭhaka-Saṁhitā
Mbh	Patañjali による Mahābhāṣya
MS	Maitrāyaṇī Saṁhitā
PB	Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa (=Tāṇḍya-Mahā-Brāhmaṇa)
RV	Ṛgveda
ŚB	Śatapatha-Brāhmaṇa
ŚBK	ŚB, Kāṇva-Recension
ŚBM	ŚB, Mādhyandina-Recension
ṢaḍB	Ṣaḍviṃśa-Brāhmaṇa
SV	Sāmaveda
TB	Taittirīya-Brāhmaṇa
TS	Taittirīya-Saṁhitā
VS	Vājasaneyi-Saṁhitā
VSK	Vājasaneyi-Saṁhitā, Kāṇva-Recension
VSM	Vājasaneyi-Saṁhitā, Mādhyandina-Recension
YV	Yajurveda
vt	Kātyāyana による vārttika → Mbh に含まれている

二次文献

AiG	Altindische Grammatik → Wackernagel/Debrunner
EWAia	Mayrhofer Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen → Mayrhofer
PW	"Petersburger Wörterbuch (großes)" → Böhtlingk/Roth Sanskrit-Wörterbuch
LIV	Lexikon der indogermanischen Verben
Schr	Schroeder の MS と KS の校訂本→Schroeder
VC	Vedic Concordance → Bloomfield
VWC	Vedic Word Concordance → Vishva Bandhu

凡例

Ch	KS の写本の一つ、Chambers 40 (Schroeder 1900: viii)
Ed	底本における原文の Skt.の表記
n.	注釈（note）
［］	訳文の補足
（）	説明等の補足
$^{+}$□	テキストの読みの修正
°	一般的な省略記号
=	連声（sandhi）を解いたことを示す記号
≈	文献間のパラレル箇所を示す記号
-	Skt.の単語あるいは形態素あるいは音素の境界を示す記号
√	Skt.の動詞語根を示す記号

’	母音省略（avagraha）を示す記号
" "	引用符
ø	ゼロ形態素あるいはゼロ音素を示す記号

文法事項の略号

abl.	ablative
absol.	absolutive
acc.	accusative
act.	active
adj.	adjective
adv.	adverb
aor.	aorist
caus.	causative
dat.	dative
denom.	denominative
desid.	desiderative
du.	dual
encl.	enclitic
f.	feminine
fut.	future
gen.	genitive
ind.	indicative
inf.	infinitive
inj.	injunctive
inst.	instrumental
impf.	imperfect
impv.	imperative
loc.	locative
m.	masculine
mid.	middle
n.	neuter
nom.	nominative
opt.	optative
pass.	passive
perf.	perfect
pl.	plural
pres.	present
prev.	preverb
pron.	pronoun
part.	participle
redupl.	reduplicated; reduplication
Skt.	Sanskrit
sg.	singular
subj.	subjunctive
voc.	vocative
1st sg. etc.	the first person singular etc.

1　序論

1.1　はじめに

本論文は、古代インドの Veda 祭式において Sattra と呼ばれる儀礼について取り上げ、その最古の説明となる文献の箇所の読解と考察を通して、最古の段階の Sattra の姿を明らかにすることを目指したものである。その最古の記述は、Veda 祭式の実務・執行を司った、Adhvaryu と呼ばれる祭官家系が伝える黒 Yajurveda 文献に見られる。具体的には Kāṭhaka-Saṁhitā（以下 KS）の第 33 巻と第 34 巻、Taittirīya-Saṁhitā（以下 TS）の第 7 巻に、Sattra 章と呼ばれるセクションがある。本論文は基本的にはこの二つの文献の Sattra 章を取り上げたが、加えて、これら Sattra 章との平行箇所を部分的に持っている Maitrāyaṇī Saṁhitā（以下 MS）4.8.10、KS 30.5、Taittirīya-Brāhmaṇa（以下 TB）1.2.2−6 についても取り上げた。

1.2　Sattra の概要

Veda 文献において Śrauta 祭式[1]として分類される Sattra は、通常、辞書類において、「12 日ないし 13 日以上からなる Soma 祭[2]」として理解される[3]。「1 年間からなる Soma 祭」は Gavāmayana と呼ばれる。

Śrautasūtra において Sattra がどのように分類されているのかを、Āpastamba-Śrautasūtra（ĀpŚS）を例に概観する。ĀpŚS において日数別にまとめられた Soma 祭の各章を以下に並べる。

21. 1-14　Dvādasaha (12 日間)
　15-23　Gavāmayana (1 年間)
　24-25　Utsargināmayana (1 年間)[4]
22. 1-13　Ekāha (1 日間)
　14-24　Ahīna (2−12 日間)

---

[1] Veda 祭式の分類の一つであり、祭主と多数の祭官と祭式行為で構成される大規模祭式のこと。

[2] Soma と呼ばれる植物から汁を絞り出し、その汁を諸神格に献じた後に祭官同士で飲み合う祭式のこと。

[3] Sattra に加え、「1 日からなる Soma 祭」は Ekāha、「2 日以上（12 日まで）からなる Soma 祭」は Ahīna、「12 日からなる Soma 祭」は Dvādaśāha、「1 年からなる Soma 祭」は Gavāmayana（「牛たちの歩行」）と呼ばれる。以上のように、Śrauta 祭式においては、Sattra 並びに Ekāha、Ahīna、Dvādaśāha、Gavāmayana はそれぞれある日数から構成される Soma 祭として別々に分類されている。

[4] Utsarga（開放日）を含む Gavāmayana を指す。Mylius [1995: 48] 参照。

25-28　Sava (1 日間)[5]
23　　Sattra (12 日間−1000 年間)

以上のように、ĀpŚS では、第 21 章 Dvādaśāha 及び Gavāmayana では 12 日間と 1 年間の Soma 祭が記述され、第 22 章 Ekāha 及び Ahīna では 1 日間の Soma 祭が記述され、第 23 章 Sattra では、12 日間から 1000 年間に至るまでの様々な期間の祭式を Sattra の名称の下に記述している。

このような Sattra の起源を考える時、Parpola（2015: 250）や，Amano（2017: 1）は、その原型は Soma 祭にあるのではなく、一年周期の共同生活あるいはそれに基づく一年周期の儀礼にあると考察する。Sattra の性質として，通常の Śrauta 祭式にあるような祭主の概念が見られず、村を離れての共同生活ないし略奪行の性格があること、苦行的要素を含むことが、Falk（1986）によっても知られており、これらは Sattra の非正統的（あるいは非 Śrauta 的）な起源を示唆するものである。Parpola、Amano の研究では、この 1 年間からなる Sattra は、Daśarātra（十夜祭）ないし Dvādaśāha（十二日祭）という儀礼によって締めくくられると考察されている。1 年間からなる Sattra の起源に関して以上のように考察はされているが、1 年 Sattra[6]に関して最古と思われる記述全体を翻訳し吟味した研究は未だにない。この研究を通して、Veda 文献古層の 1 年 Sattra の記述のされ方が明らかになるであろう。具体的な目的としては、文献・箇所同士の比較によって、黒 YV 内での Sattra の姿を再建することと、黒 YV 内での祭式思想の発展・展開を解明することが挙げられる。

1.3　研究史

Sattra の起源に関する研究は、Vrātya の起源に関する研究との関わりの中で進められてきたという側面が強い[7]。インド学の歴史において、Vrātya と呼ばれる人々とその文化の起源がどのようなものであったかという問題は古くから関心の的であった（例えば Charpentier [1911]; Winternitz [1925]; Hauer [1927]; Biswas [1955]; Choudary [1964] など）。

とりわけ、Heesterman は Vrātya に関する多くの研究を行っている（例えば Heesterman 1962; 1964; 1982; 1985; 1993; 1995; 2012）。特に Vrātya と Sattra との関係を示した彼の論文として、先行する Biswas [1955] の論文をより前進させた Heesterman [1962] が挙げられる。彼 [1962: 3] は、Vrātyastoma が Ekāha であるのにもかかわらず、Sattra の特徴も持っていることを指摘した。そして彼 [1962: 36] は、Vrātya たちが真正の Veda 的 Ārya 人たちである（"the Vrātyas are authentic Vedic Aryans"）と結論付けた。彼らの諸儀礼は、略奪のための遠征の最中に行われたものであり、Śrauta 儀礼の前身であり、Vrātya は

[5] Abhiṣeka（灌頂儀礼）、つまり、Rājasūya（王権儀礼）に関係する Ekāha を指す。Mylius [1995: 132] 参照。

[6] 「12 日以上からなる Soma 祭」を意味する Sattra との混同を避けるために、1 年間からなる Sattra を「1 年 Sattra」と呼ぶことにする。

[7] Vrātya 研究の概観に役立つ参考資料として、Pontillo and Dore [2016]を参照した。

Dīkṣita（「潔斎した者」）の前身であると結論付けた。このように Heesterman は Śrauta 祭式における Soma 祭の区分を用いながら、Vrātya と Sattra との間に強い関連があるという重要な指摘をしたが、Vrātya 文化の古い層を顕著に示すと思われる黒 Yajurveda の Sattra 章を、部分的に取り上げはしたものの、それを中心に取り扱わなかった。

一方、Falk も Vrātya と Sattra の研究に大きく携わっている（例えば Falk 1985; 1986; 1997; 2001; 2002; 2012）。特に Falk [1985] は、Sattra 儀礼の起源について論じたものであり、本論文と関わりが深いと思われるので詳しく取り上げることとする。彼はまず 3 種類の Soma 祭、即ち、Ekāha（1 日間の Soma 圧搾日からなるもの）、Ahīna（2 日間から 12 日間の Soma 圧搾日からなるもの）、Sattra（12 日間から 61 日間の Soma 圧搾日からなるもの）の説明を行う。そして、彼以前の先行研究において、3 つ目の Sattra が Ekāha と Ahīna とは全く異なる 4 つの特徴をもっているとされることを挙げた。つまり、（1）参加者として考慮されるのはバラモンのみであること、（2）通例の祭主が存在しておらず、Ekāha の枠組みに則って祭主が行動を起こさなければならない場合には常にバラモンの祭官の 1 人が祭主の役割を引き受けること、（3）祭官職を依頼する祭主が欠如しているので、Dakṣiṇā（祭官に対する祭式の報酬）もないこと、（4）Sattra の基本形は Dvādaśāha であること、である。以上の 4 つの特徴がどのような目的で存在しているのかについての Hillebrandt [1897: 155]（一種の願望の魔法が背景にあると推測した）、Oldenberg [1894: 371]（古い「部族的 gentilicisch」祭式の名残であると推測した）、Heestermann [1962: 34]（Sattra は Vrātya たちの元来的な儀礼であると推測した）、Heestermann [1964: 21]（バラモンたちが布施の受け取りによって自身の儀礼的清浄さを失うことから、Dakṣiṇā と分配者を祭式から排除することになったのであろうと推測した）に触れた上で、Saṃhitā 文献、Brāhmaṇa 文献、Sūtra 文献における sattrá- と sattrín-（Sattra 参加者）という語が現れる箇所およびその関連個所を調査し、4 つの特徴について異なる主張を述べた[8]。彼は特筆すべき指摘をいくつかしている。例えば、Sattra 参加者たちが祭式を行う場が非常に珍しく、そして危険に満ちた森林地帯に這っていく（upa-gam, upā-syand）者たちであること、また、Sattra が通常の祭式とは異なる用語として、祭式を開始するときは sattram āste（「Sattra を座る」）や、nisīdati（「座り込む」）を使い、終了するときは、ud-sthā（「立ち上がる」）を使うということ、そしてまた、Sattra 参加者の中の一人が、代表的存在として、mukha、śreṣṭha、varṣiṣṭha、gṛhapati などの名称で呼ばれることなどがある。そして、彼 [1985: 281] は最終的に Sattra 儀礼の起源について次のように述べた。つまり、Sattra は、そこで RV の詩の大部分が生み出されたような諸々の儀式の伝統を引き継ぐものであり、比較的若い Śrauta 的 Sattra は儀礼の長さのみを引き継ぐものである。つまり、後者は数日間 Soma 圧搾を行うものの、詩を

[8] 実際に Falk [1985] が本文で取り上げた文献の箇所は以下のとおりである：Aitareya-Brāhmaṇa (AB) 2.19; 4.26; 4.32.7; 5.14.3; 6.1.1; 6.3; Āpastamba-Śrautasūtra (ĀpŚS) 22.17.1−4; Atharvaveda-Śaunaka (AVŚ) 5.6; 12.1.39; 17.1.14; Atharvaveda-Paippalāda (AVP) 2.52.1; 16.103.11; Jaiminīya-Brāhmaṇa (JB) 2.299; 2.374; Jaiminīya-Mīmāṃsā-Sūtra (JMS) 10.2.37; 10.6.56; Kauṭilya Arthaśāstra (KA) 7.17.56; 10.2.15; Kauśītaki-Brāhmaṇa (KB) 12.3.20;15.1; 23.8; 23.9.3−6; 26.5; 28.8; Kāṭhaka-Saṃhitā (KS) 10.2; 10.6; 33.1; Maitrāyaṇī Saṃhitā (MS) 1.2.4; 2.1.4; 3.3.9; 4.2.12; 4.5.9; Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa (PB) 4.1.1−2; 6.7.9−12; 22.3.2; 23.8.2; 25.13.4; Ṛgveda (RV) 6.8; 6.32; 6.35; 6.49; 7.33.13; 8.6; Taittirīya-Saṃhitā (TS) 1.6.11.3; 2.3.3.1; 4.7.13.2; 7.1.4.1; 7.2.10.2; 7.4.9; 7.4.11.2; 7.5.9.1; Vājasaneyi-Saṃhitā (VS) 34.55

生み出す必要はなくなった、ということである。以上のように Falk [1985] は Sattra の起源について非常に重要な示唆を示しているが、黒 Yajurveda の Sattra 章にはさほど注意を払わなかったようである。次に、Vrātya と Sattra に関する研究の代表として Falk [1986] がある。そこで彼は黒 Yajurveda の Sattra 章にみられるいろいろな特徴について取り上げている。そして、Vrātya 文化の一般的な社会的文脈を詳述している。これにより、Heesterman によってなされていなかった黒 Yajurveda の Sattra 章の記述に注目し Vrātya 問題に取り掛かるという試みは彼によってなされた。この研究書は Vrātya あるいは Sattra の起源について語る上で無視することのできない重要なものではあるが、黒 Yajurveda の Sattra 章の記述から Vrātya 的特徴のある要素を取り上げたものであり、その記述全体を網羅的に翻訳し、考察したものではない。

Parpola もまた、Vrātya についての研究を行っている（例えば Parpola [1983; 2012; 2015]）。Parpola [1983; 2012; 2015] は、Indo-Ārya 人のインド亜大陸への移住に複数の異なる波（第一波と第二波）があったという説を提唱している[9]。Parpola の考えでは、Vrātya たちは第一波に属する Indo-Ārya 移住民の名残である[10]。第一波の勢力の文化は Atharvaveda における記述に代表され、第二波の勢力の文化は Ṛgveda における記述に代表される。第一波の勢力の文化はやがて第二波の勢力の文化の伸長により勢いを失い、飲み込まれていったと推測される。Parpola [1983: 51] は、Heesterman が示した Vrātya 儀礼の元来的なサイクル性に同意しつつ、さらにそのサイクルが二つの相反する性格を持つ半分ずつに分けられる 1 年からなるものであると主張した[11]：Śrauta 祭式において、1 年間からなる Sattra（Gavāmayana）は左右対称的である。前半の 6 か月間は Viṣuvant の日に最高点に達し、後半の 6 か月間は Mahāvrata の日に最高点に達する。そしてこの 2 つの祭日は太陽の折り返し点と交わる[12]。また、Mahāvrata は、馬を犠牲にする儀礼である Aśvamedha と、人間犠牲（Puruṣamedha）とも深いかかわりをもつと Parpola は述べる。以上のように、Parpola の研究は Vrātya たちとその儀礼の起源、ひいては Sattra の起源について、重要な指摘と示唆を含んでいる。

その他の Sattra 研究については、以下のものがある。

---

[9] Parpola 以前には Hoernle [1880]; Grierson [1903] がこの仮説を支持した。Pontillo and Dore [2016: 10] 参照。

[10] この考えは、Indo-Ārya 人に二つの波があったということを想定しなかった、「Vrātya たちが真正の Veda 的 Ārya 人」だとする Heesterman [1963] の主張とは異なる。

[11] Parpola [1983: 51] によれば、若い男たちにより戦争に費やされる春から夏の半年（uttarāyaṇa-）と、耕作に費やされる秋から冬の半年（dakṣiṇāyana-）を指す。前者は PB 17.1.17 において神々（deva-）と「若い Vrātya たち」と「３３」という数によって特徴づけられ、後者は、ŚB において父祖たち（pitaraḥ）、つまり、死んだ祖先たち、すなわち「先人の Vrātya」によって特徴づけられる。

[12] Parpola は Viṣuvant の日を春分の日、Mahāvrata の日を秋分の日として意図しているようである。しかし、本博論における考察では、Viṣuvant の日を夏至の日、Mahāvrata の日を冬至の日として解釈した。それについては、本論第 4 章を参照せよ。

Tsuchida [1979] は Sāmaveda 文献に属する Jaiminīya-Brāhmaṇa の Sattra 章（JB 2.334–370）のテキストの校訂をし、それに対して翻訳と注釈を付した。

Murakawa [2000; 2007] は Sāmaveda 文献に属する Jaiminīya-Brāhmaṇa の Gavāmayana 章を取り扱った。Murakawa [2007] は JB の Gavāmayana 章のテキストの正しい順序を写本を用いて明らかにした。また、Gavāmayana 章の 1 年間の表を作り上げ、記述内容の箇所を挙げている。

古い文献、特に黒 Yajurveda の MS の中にみられる Sattra について取り上げたものとして、Amano [2016] "Ritual contexts of sattra myths in the Maitrāyaṇī Saṁhitā" 、Amano [2017] "A Ritual Explanation Concealing Its Name: Maitrāyaṇī Saṁhitā I 9 (caturhotṛ Chapter)" がある。

Rolland [1973] は Mahāvrata の研究をした。

その他の最近の Vrātya あるいは Sattra の研究としては、Edholm [2017] "Recent Studies on the Ancient Indian Vrātya"、Pontillo [2023] "When the sattrins “offer themselves”: The plural agency in Vedic sacrifice"などがある。

1.4　原典と研究方法

現存する黒 Yajurveda の諸文献は主に 3 つの学派からなる：Maitrāyaṇīya 派、Kaṭha 派（および記述内容をほぼ同じくする Kapiṣṭhala-Kaṭha 派）、Taittirīya 派である。

Maitrāyaṇīya:	Maitrāyaṇī Saṁhitā	
Kaṭha:	Kāṭhaka-Saṁhitā	
(Kapiṣṭhala-Kaṭha:	Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṃhitā)	
Taittirīya:	Taittirīya-Saṁhitā	Taittirīya-Brāhmaṇa

黒 Yajurveda の諸文献は、他学派と異なり、Mantra 部分と Brāhmaṇa 部分を別々の文献にせずに°-Saṁhitā あるいは°-Brāhmaṇa という名称をもつ文献の中に一括して編集するという方針をとっている[13]。

本論文において中心となる作業は、黒 Yajurveda 学派の Saṁhitā（MS、KS、TS）と Brāhmaṇa（TB）のテキストの確定と翻訳とそれに対する注釈、そして、それらに基づく考察や解釈である。Sattra に関する記述がみられる箇所について以上の作業を行った。以下にそれらの文献箇所一覧を示す。なお、1 年 Sattra 全体の記述がみられるものと 1 年 Sattra の要素が部分的にみられるものとに分けた。

1 年 Sattra 全体の記述がみられるもの：

Kāṭhaka-Saṁhitā	33.1–34.13（Sattra 章）[14]
Taittirīya-Saṁhitā	7.1.1–7.5.10（Sattra 章）

1 年 Sattra の要素が部分的にみられるもの：

[13] 西村 [2006: 17]。

[14] Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṁhitā には KS の Sattra 章との対応箇所がない。なお、KS の Sattra 章（KS 33–34）については、KS 33.1–34.13 までを考察対象とする。34.14–19 については Soma 祭の贖罪法に関する記述であり、1 年 Sattra の記述とは関係がない。

Maitrāyaṇī Saṁhitā	4.8.10（Soma 章）
Kāṭhaka-Saṁhitā	30.5（Soma 章）
Taittirīya-Brāhmaṇa	1.2.2−6（Gavāmayana 章）

なお、これらのテキストの校訂に関しては、MS に関しては Schroeder [1881, 1883, 1885, 1886]、Sātavalekar [1983]と Mittwede [1986]、KS に関しては Schroeder [1900, 1909, 1910]、Sātavalekar [1983]と Mittwede [1989]を参照した。

また、本論において引用される原文とその訳注については、原則的に「6 原文と訳注」よりそのままの形で引用することとする（本論の考察に影響を与えない程度に脚注が省かれた箇所もある）。

2　KS の Sattra 章の記述の構成

2.1　概観

KS における Sattra 章（KS 33.1−34.13）の内容を概観するために、以下に目次を示す。

KS Sattra 章（KS 33−34）

KS 33.1: 雌牛の Sattra（≈ TS 7.5.1–2）

KS 33.2: 1 年 Sattra において使用される祭式次第の導入と説明（≈TS 7.4.10; 7.4.11; 7.5.1; TB 1.2.2.5）　KS 33.2(1):): Atirātra を最初に行うことで Agniṣṭoma, Ukthya, Atirātra を順番に行
っていることになる（≈TS 7.4.10(1)）
KS 33.2(2): Atirātra において Jyotiṣṭoma を最初に用いる（≈TS 7.4.10(2) ）
KS 33.2(3): 2 つの Rathantara-Sāman と Sobhari の Brahma-Sāma（≈TS 7.4.10(3) ）
KS 33.2(4): Caturviṁśa-Stoma を用いる日は 1 年 Sattra の導入の日（TS 7.5.1(3) ）
KS 33.2(5): 導入の日においてあちらからこちら向きに（Stoma の数を減らす方式で）一年間の Sattra を始める

KS 33.3: 1 年 Sattra の基本要素（≈ TS 7.4.11）
KS 33.3(1): Ṣaḍaha の 1 日ごとに Jyotiṣṭoma、Goṣṭoma、Āyuṣṭoma を順番に用いる（TS 7.4.11(1) ）
KS 33.3(2): Ṣaḍaha の繰り返し：6、12、18、24、30 日間（≈TS 7.4.11(2) ）

KS 33.4: 9 日間の儀礼（≈TB 1.2.2）
KS 33.4(1): 9 日間の儀礼の導入
KS 33.4(2): Agniṣṭoma たちが Para[s]-Sāman をもつべきか
KS 33.4(3): Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma を用いる 2 つ Agniṣṭoma
KS 33.4(4): 9 日間の中の Ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる Sāman たち
KS 33.4(5): 9 日間の中の Ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる Atigrāhya たち
KS 33.4(6): 9 日間の中の 5 日目（中心の日）に用いられる Atigrāhya

KS 33.5: 春分から夏至までの 3 か月間における Pṛṣṭha について（≈TS 7.5.3）
KS 33.5(1): Pṛṣṭha［-Sāman］を最後の月に用いる（≈TS 7.5.3(1) ）
KS 33.5(2): 1 年 Sattra 参加者は岸のない海を泳いでいるかのようである（≈TS 7.5.3(2) ）

KS 33.6: 21 日間の儀礼（≈TB 1.2.4）
KS 33.6(1): 神々が太陽の落下を恐れた話（1）

KS 33.6(2): 神々が太陽の落下を恐れた話（2）
KS 33.6(3): 神々が太陽の落下を恐れた話（3）
KS 33.6(4): 神々が太陽の落下を恐れた話（4）
KS 33.6(5): Spara-Sāman と Para-Sāman（≈TS 7.3.10 Ekaviṃśatirātra, Para-Sāman と Paras-Sāman）

KS 33.7: （21 日間の儀礼（夏至祭）の中の）開放日についての議論（≈ TS 7.5.6; 7.5.7）
KS 33.7(1): 新月の夜・満月の夜・Vyaṣṭakā の夜において開放日があるべし（≈TS 7.5.7(1) ）
KS 33.7(2): 開放日がある場合には、Puroḍāśa を準備し、Soma 祭の代替としての Iṣṭi 献供を行う（≈TS 7.5.7(2) ）
KS 33.7(3): 21 日祭（夏至祭）後の後半の 6 か月の開始（≈TS 7.5.7(3) ）

KS 33.8: 一年 Sattra の後半について
KS 33.8(1): Para[s]-Sāman（≈TS 7.3.10）
KS 33.8(2): 一年の後半 5 か月間に使われる Stoma
KS 33.8(3): 一年の後半の 6 番目の月の 3 つの Abhiprava と Go と Āyus の日
KS 33.8(4): Dvādaśāha における Chandoma の日（Dvādaśāha の 7、8、9 日目）
KS 33.8(5): （Dvādaśāha の）10 日目
KS 33.8(6): Mahāvrata の日（Dvādaśāha の 11 日目）
KS 33.8(7): Mahāvrata において使われる Graha たち

KS 34.1: 11 頭の動物犠牲（Ekādaśinī）
KS 34.1(1): Ekādaśinī の開始
KS 34.1(2) : 1 日目：1 頭目 Indra-Agni
KS 34.1(3): 2-5 日目：2 頭目（Rathaṃtara-Sāman, Agni）、3 頭目（bṛhat-sāman, Indra あるいは Indra-Agni）、4 頭目（Rathaṃtara-Sāman, Agni-Indra）、5 頭目（Bṛhat-Sāman, Indra-Agni）
KS 34.1(4): 6 日目：6 頭目（Bṛhaspati, śitipṛṣṭha）
KS 34.1(5): 7 日目（第一 Chandoma）：7 頭目（神格 Dyāvāpṛthivī, 犠牲獣 dhenu）
KS 34.1(6): 8 日目（第二 Chandoma）：8 頭目（神格 Vāyu, vatsa）
KS 34.1(7): 9 日目（第三 Chandoma）：9 頭目（Vāc, pṛśni）
KS 34.1(8): 10 日目：10 頭目（Aditi, vaśā）
KS 34.1(9): Mahāvrata の日（11 日目）：11 頭目（Viśvakarman, ṛṣabha）

KS 34.2: Ekādaśinī の贖罪儀礼（≈TB 1.4.6.5−7; 1.4.7.1）
KS 34.2(1): Tvaṣṭar への動物犠牲
KS 34.2(2): Sarparājñī 讃歌

KS 34.3: Soma の購入および代用品の使用（≈TB 1.4.7.5−7）
KS 34.3(1): Soma の購入

KS 34.3(2): Soma の購入の対価
KS 34.3(3): Soma の代用品：Pūtīka
KS 34.3(4): Soma の代用品：Ārjuna
KS 34.3(5): Soma の代用品：Pūtīka

KS 34.4: 競争相手のいる Soma 祭（≈TS 7.5.5; PB 9.4）
KS 34.4(1): 2 つの Soma 祭が同時に行われる場合（≈TS 7.5.5(1) ）
KS 34.4(2): 水瓶が割れた場合の贖罪儀礼（≈TS 7.5.5(2) ）

KS 34.5: 一年の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（≈TS 7.5.8−10; TB 1.2.6.6−7; PB 5.5）
KS 34.5(1): 祭官たちの儀礼行為（≈TS 7.5.8(3) ）
KS 34.5(2): 賞賛者と非難者（≈TS 7.5.9(8) ）
KS 34.5(3): Śūdra と Ārya の毛皮の引っ張り合い（≈TS 7.5.9(7) ）
KS 34.5(4): 太鼓を鳴らす（≈TS 7.5.9(5) ）
KS 34.5(5): 管楽器を演奏する（≈TS 7.5.9(3) ）
KS 34.5(6): Brahmacārin と Puṁścalī の喧嘩（TS 7.5.9(2); (9) ）
KS 34.5(7): 女たちの歌と鎧を着た者たちの踊り（TS 7.5.10(2) ）

KS 34.6 Prajāpati が Dvādaśāha を 1 年と同等のものとして創造する神話
KS 34.6(1): Dvādaśāha を Soma 祭の進行になぞらえる
KS 34.6(2): Prajāpati が創造した Dvādaśāha のそれぞれの日と対応する諸々の Sāman

KS 34.7: Prajāpati が諸生物の創造のために Dvādaśāha を創造する神話
KS 34.7(1): 6 季節と 12 か月は 1 年の 2 つの形、Gāyatrī は Brahman、Dvādaśāha は Kṣatra
KS 34.7(2): Bṛhatī 韻律と 36 夜 (≈TS 7.4.6)
KS 34.7(3): 神々は Dvādaśāha（＝Dīkṣā＋Upasad たち＋Soma 搾り）によって人間と分離した

KS 34.8: Dvādaśāha における食人行為性と人間犠牲性の示唆
KS 34.8(1): Prajāpati が繁殖を求めて Dvādaśāha を開催する神話 （TS 7.2.9(1)）
KS 34.8(2): 犠牲に適した水と適さない水（血）
KS 34.8(3): Sattriya を受け取ることは人間（犠牲）に等しい
KS 34.8(4): Dvādaśāha の構造、Atirātra と Agniṣṭoma の順序（TS 7.2.9(2)）

KS 34.9: 潔斎の主題
KS 34.9(1): Prajāpati が成就を求めて Dvādaśāha を開催する神話
KS 34.9(2): （Dvādaśāha においては）太った者が潔斎すべし
KS 34.9(3): 潔斎の日数：12, 13, 15, 17, 21, 24, 27, 30, 33, 44, 48, 無限
KS 34.9(4): 13 番目の月の暗示、寒期（śiśira-）は出発（prayāṇa-）、春は滞在（avasāna-）

KS 34.10: Brahmavādin たちの議論：Dvādaśāha の各日による果報について（≈TS 7.3.2）

KS 34.11: Dvādaśāha において 12 夜の間潔斎することと食人行為の同一視（≈TS 7.2.10.3−4）
KS 34.11(1): 3 つずつの清めが 4 つある（＝12 日間）
KS 34.11(2): Dvādaśāha における食物は人間の象徴である

KS 34.12: Dvādaśāha における食物は人間の象徴である（≈TS 7.2.10.3）
KS 34.12(1): 12 夜の間潔斎する者は誕生していることになる
KS 34.12(2): 犠牲祭に適さない人間の 12 の部位あるいは排泄物
KS 34.12(3): (12 の潔斎の夜) + (12 の Upasad) + (12 夜の駆り立て) = Bṛhatī (36 音節)
KS 34.12(4): Bṛhatī 36 音節 – 4 音節=Anuṣtubh 32 音節

KS 34.13: Sattra 参加者の人数に関して
KS 34.13(1): Prajāpati が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 1 名）
KS 34.13(2): 3 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 3 名）
KS 34.13(3): 6 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 6 名）
KS 34.13(4): 12 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 12 名）
KS 34.13(5): Upasad においては 13 番目の者が潔斎すべし:13 番目の月の暗示（Sattra 参加者 13 名）

KS の Sattra 章（KS 33−34）の記述を概観すると、もっとも顕著な特徴として、1 年単位の祭式が、1 年の開始から終了まで、時系列順に述べられているという点が挙げられる。まず、KS の Sattra 章は「牝牛たちが Sattra を行った」（KS 33.1 ≈ TS7.5.1−2）という神話的記述から開始される。その内容は、10 か月間歩み進んだ牝牛たちには角を獲得し、12 か月間歩み進んだ牝牛たちは栄養を獲得したという結果で締めくくられている。この記述は、KS の Sattra 章が 1 年間を基本単位とする Sattra についてまとめられていることを最初に宣言しているものと思われる。

その記述の後に、この 1 年 Sattra を構成する要素として Ṣaḍaha（6 日間のサイクル）の説明が導入される（KS 33.2 ≈ TS 7.4.10−11; 7.5.1; TB 1.2.2.5）。まず Ṣaḍaha の中で用いられる祭式次第（Yajñakratu）が説明され、どの Stoma や Sāman が用いられるかが説明される。その後、1 年 Sattra の導入の日の説明が述べられる。その次に Ṣaḍaha において用いられる要素として Jyotiṣṭoma、Goṣṭoma、Āyuṣṭoma が（Ṣaḍaha の 1 日目、2 日目、3 日目に）順番に用いられることが述べられる（KS 33.3）。次に、Ṣaḍaha が「神々の車輪（devacakra-）」として、Sattrin たちを天界に到着させることが述べられる。

その次に、このような Ṣaḍaha を基礎として、6 日間、12 日間、18 日間、24 日間、30 日間からなる儀礼が行われることが述べられる。これらの儀礼の日数を合計してみると、ちょうど 90 日間となる。これは、1 年の約 4 分の 1 に相当する。そしてそれは、1 年の節目である春分、夏至、秋分、冬至のいずれかに対応するものと思われる。（その考察については、本論の 2.4 にて詳細に論じることとする。）それに続く KS 33.4 では、9 日間の儀礼（春分祭）、KS 33.6 では 21 日間の儀礼（夏至祭）が記述される。

KS 33. 7 から 1 年 Sattra の後半が記述される。KS 33. 8 では最後の月に Dvādaśāha が行われることが述べられる。KS 33.8−34. 5 は Dvādaśāha 中に行われる儀礼に関する記述である。Ekādaśinī、Tvaṣṭar への動物犠牲、Soma の購入、競合する 2 つの Soma 祭、Mahāvrata 祭などは Dvādaśāha の期間中に行われるものとして記述されている。このように、KS の Sattra 章における Sattra とは、Dvādaśāha を締めくくりとする、1 年間からなる Sattra であることが明白である。

最後に、Dvādaśāha によって何が獲得できるか、象徴的な人間犠牲、象徴的な食人儀礼、Sattra 参加者の数と 13 番目の月と関連付けた記述などの秘教的な内容の記述がみられる。

2.2 個別の儀礼の記述

2.2.1 9 日間と 21 日間の儀礼

KS にみられる特徴のある儀礼として、9 日間の儀礼と 21 日間の儀礼が挙げられる。9 日間の儀礼は、1 年 Sattra の開始日から数えて 90 日が経過した後の儀礼として記述されている。特徴的な祭式行為として Graha を汲む行為が述べられている。21 日間の儀礼は、独自の神話、つまり神々が太陽の落下を恐れるという神話が何度も繰り返し述べられるという特徴がある。また、Divākīrtya-Sāman という夏至に関係すると思われる Sāman が記述されている。そのことから、21 日間の儀礼が夏至の際に行われる儀礼である可能性があることがわかる。そして、21 日間の儀礼に先行する記述であることと、一年の開始から 90 日が経過したころに行われる儀礼の記述として 9 日間の儀礼が記述されていることから、9 日間の儀礼は春分の際に行われる儀礼であると推測される。9 日間の儀礼が春分の儀礼、21 日間の儀礼が夏至の儀礼である可能性については、「2.4 春分と夏至」の項において詳細に述べる。

2.2.1.1 9 日間の儀礼（春分祭）

KS 33.4: 9 日間の儀礼[15]（≈TB 1.2.2）

KS 33.4(1): 9 日間の儀礼の導入

(33.4:29.15–17) navaitāny ahāni. nava vai svargā lokāś. catasro diśaś. catvāro ’ntardeśā. ūrdhvā navamī. yad etāny ahāny upayanti, navasv eva tat svargeṣu lokeṣu sattriṇaḥ pratitiṣṭhanto yanty.

例の 9 日間（について）。天界は 9 つあるのだ、（つまり）4 方位、4 つの中間の方位、上方に向かう 9 つ目の［方位］。これら［9］日間を行うことで、Sattrin たちは

[15] 直前の記述で、６日間、１２日間、１８日間、２４日間、３０日間という祭式が述べられており、それらを合計すると９０日間となることから、ここで述べられる 9 日間の儀礼は、１年が冬至始まりであると仮定すれば、春分に行われるものと推測される。

9 個の天界においてしっかりと立ち続けることになる。

KS 33.4(2): Agniṣṭoma たちが Para[s]-Sāman をもつべきか

(33.4:29.17–20) "agniṣṭomāḥ parasāmānaḥ[16] kartavyā" ity āhur, "agniṣṭomasaṃmito vai svargo loka" iti. dvādaśāgniṣṭomastotrāṇi. dvādaśa māsās saṃvatsaras. saṃvatsaras svargo lokas. tasmāt tad āhus. "tan na sūrkṣyam. ukthyā eva parasāmānaḥ kartavyā" iti.[17] paśavo vā ukthāni. paśūnām avaruddhyai.

「Agniṣṭoma たちは Para[s]-sāman をもつものとして行われるべきである」と［人々は］言っている、「天界は Agniṣṭoma と等しいものである」と。 Agniṣṭoma には 12 の Stotra がある。一年は 12 ヶ月である。天界は一年である。それゆえ［人々は］そのことについて言っている。［しかし、他の人々は言っている、］「それは懸念されるべきことではない。Ukthya たちだけが Para[s]-Sāman をもつものとして行われるべきである」と。Uktha は家畜たちなのだ。家畜たちの獲得のために。

KS 33.4(3): Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma を用いる 2 つ Agniṣṭoma

(33.4:29.20–30.1) viśvajidabhijitā agniṣṭomā. ukthyās saptadaśāḥ parasāmāna. ekaviṁśaṃ divākīrtyaṃ. te saṁstutā virājam abhisaṃpadyante. dve ca rcā atiricyete. svargo vai loko virāḍ. dvipādo yajamānās. svarga eva tal loke virāji dvipādo yajamānāḥ pratitiṣṭhanti. //

2 つの Agniṣṭoma［-Yajñakratu］は Viśvajit［-Stoma］と Abhijit［-Stoma］［を用いる］。Ukthya［-Yajñakratu］たちは 17 の詩節からなる［Stoma］を用い、Para［s-Sāman］を［最初の日の］Sāman として用いる[18]。Divākīrtya［-Sāman の日］は Ekaviṁśa-Stoma を用いる。それらは共に歌われて Virāj[19]の数へと合計される[20]。そして 2 つの詩節が過剰である[21]。Virāj は天界なのだ。祭主たちは 2 本足である。そうして天界において、Virāj において 2 本足である祭主たちはしっかりと立っていることになる。

KS 33.4(4): 9 日間の中の ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる sāman たち

(33.4:30.1–3) yat paro rathantaraṃ tat prathame ’han kartavyam. bṛhad dvitīye. vairūpaṃ tṛtīye. vairājaṃ caturthe. śākvaraṃ pañcame. raivataṁ ṣaṣṭhe. tad u pṛṣṭhebhyo na yanti.

---

[16] TB 1.2.2.1 páraḥsāmānaḥ ...

[17] Cf. TB.1.2.2.1 tát tán ná sū́rkṣyam / ukthyà evá saptadaśā́ḥ páraḥsāmānaḥ kāryàḥ //

[18] 9 日間のうち、2 日目，3 日目，4 日目、6 日目，7 日目，8 日目の六日間の中で最初の日に paras-sāman を用いるという意味である。2 日目（paras）、3 日目（bṛhat）、4 日目（vairūpa）、6 日目（vairāja）、7 日目（śākvara）、8 日目（raivata）という並びになっている。これが Pṛṣṭha（盛り上がり）をもつ 6 日間である。TS では Pṛṣṭhya Ṣaḍaha と呼ばれるものがこれと同様の考え方で構成されていると考えられる。

[19] virāj は「各１０音節ずつの 4 pāda からなるヴェーダの韻律」であり、それゆえに「１０という数の象徴的な名前」でもある。また、「韻律学においては 2 音節分が欠如している韻律に対して適用される」とされる（MW s. v. virāj）。Mylius [1995: 117]によると、「10 または 10 の倍数の pāda で構成される韻律」である。

[20] 2 つの Agniṣṭoma、Saptadaśa-Stoma、Ekaviṁśa-Stoma の数字だけ抜き出して、足し合わせると、2+17+21=40 となり、10 の倍数であることになる。

[21] Divākīrtya の日の前後 3 日ずつに用いられる Saptadaśa-Stoma を掛け合わせると、17×6＝102 となり、10 で割ると 2 つの詩節が余ることになる。

Rathantara［-Sāman］ である Paras［-Sāman］であるところのもの、それが 1 日目において行われるべきである。Bṛhat［-Sāman］は 2 日目において。Vairūpa［-Sāman］は 3 日目において。Vairāja［-Sāman］は 4 日目において。Śākvara［-Sāman］は 5 日目において。Raivata［-Sāman］は 6 日目において。そのようにして彼らは Pṛṣṭha（山の稜線、盛り上がり）たちから逸脱しないことになる。

KS 33.4(5): 9 日間の中の ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる atigrāhya たち

(33.4:30.3–6) saṃtataya ete grahā gṛhyante. ’tigrāhyāḥ parasāmasu. yad ete gṛhyanta, imān evaital lokān saṃtatya svargaṃ lokaṃ yajamānā ārohanti. mithunā ete grahā gṛhyante. ’tigrāhyāḥ parasāmasu. yad ete gṛhyante, mithunam evaitair avarundhate.

Saṃtati（「一繋ぎ」）という例の Graha たちが汲まれる、Atigrāhya[22]たちとして、Para[s]を Sāman とする［Stoma］において。これらが汲まれることで、これら世界を一繋ぎにして天界へ祭主たちは登っていることになる。Mithuna（「雌雄のつがい」）という例の Graha たちが汲まれる、Atigrāhya たちとして、Para[s-Sāman] を Sāman とする［Stoma］において。これらが汲まれることで、彼らはこれらによってつがいを獲得していることになる。

KS 33.4(6): 9 日間の中の 5 日目（中心の日）に用いられる Atigrāhya

(33.4:30.6–10) saurya eṣa graho gṛhyate. ’tigrāhya ekaviṁśe ’haṁs. tasya pratyakṣaṃ nāma na grahītavai. tejasvitara iva vāśratarаḥ. pradāhād vā bhayyaṃ kilāsaṃbhavād vā=. "ayā viṣṭhā janayan karvarāṇi="[23] ity eṣa prājāpatyo ’nirukto graho gṛhyate, ’tigrāhya ekaviṁśe ’han. samanta āyuṣyaḥ paśavyo. yo ha khalu vāva prajāpatis, sa evendras. tad u devebhyo na yanti. //

Saurya（「Sūrya に関する」）という例の Graha が汲まれる、Atigrāhya として、Ekaviṁśa[-Stoma] を用いる日において[24]。彼の名前は公然と捉えられてはならない[25]。［彼は］より威光をもつ（tejasvitara-）、より吠える者（vāśratara-）かのようである。焼けること（＝日焼けすること）あるいは皮膚病になることを恐れるべきである。「［彼は］この仕方で行為たちを生み出しながら」と［唱えて］Prajāpati のための、［対象神格が］はっきりと言われない[26]例の Graha が汲まれる、Atigrāhya として、

[22] Mylius [1995: 27]: atigrāhya m, drei zusätzliche Somaschöpfungen für Agni, Indra und Sūrya im agniṣṭoma und am caturviṃśa-Tag.

[23] AVŚ.7.3.1a; TS.1.7.12.2a; MS.1.10.3a: 143.10; KS.9.6a; 14.3a; 33.4; 36.13; KSA.5.12a; AŚ.2.19.32a; ŚŚ.3.17.1a; KŚ.25.6.10a; ApŚ.8.16.5; 18.2.3; BŚ.11.3: 67.5; ŚG.5.8.2. P: ayā viṣṭhā MS.1.11.4: 166.6; Vait.9.15; MŚ.1.1.2.15; 7.1.1.43; 7.2.5.3; Kauś.15.11.

[24] Ekaviṁśa をもつ日は、Divākīrtya の日である。

[25] この個所では、太陽の名前、つまりその正体が秘密にしておかれるべきであるという考えが示されている。その秘密にされている正体は、次の箇所を見ると、Prajāpati のことを指しているが、実際にはそれが Indra であることも明かされている。

[26] 「対象神格がはっきり言われない」というのは、一般的には、Prajāpati のために用いられる詩節について言われることである。

Ekaviṁśa[-Stoma] を用いる日に。［この Graha は］果てを備えた[27]、寿命に関する、家畜に関するものである。他ならぬ Prajāpati である者は実際には Indra なのだ。そしてそのようにして彼らは神々から逸脱しないことになる。

2.2.1.2 21 日間の儀礼（夏至祭）

KS 33.6: 21 日間の儀礼（≈TB 1.2.4）

KS 33.6(1): 神々が太陽の落下を恐れた話（1）

(33.6:31.4–7) ekaviṁśa eṣa. etena vai devā ekaviṁśenādityam itas svargaṃ lokam ārohayan. sa eṣa ita ekaviṁśas. tasya daśāvastād ahāni daśa parastāt. sa eṣa ubhayato virāji pratiṣṭhita. ubhayato hi vā eṣa virāji pratiṣṭhitas. tasmād antaremau lokau yan sarveṣu svargeṣu lokeṣu pratitiṣṭhann eti.

この［祭式］は Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）。神々はこの Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）［祭式］によって太陽をここ（大地）から天界へ昇らせた。そのような例のもの（太陽）はここから 21 番目なのだ。それ（太陽=Ekaviṁśa-Stoma をもつ日）にはこちらから 10 日があり、あちらから 10 日がある。そのようなこれ（太陽）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っている。というのもこれ（祭式）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っているから。それゆえ［彼は］この 2 つの世界（大地と天界）の間を行き続け、全ての天界において都度都度しっかりと立ち続ける。

KS 33.6(2): 神々が太陽の落下を恐れた話（2）

(33.6:31.8–14) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ triṣu svargeṣu lokeṣv ādadhus. tasya parāco ’tipādād abibhayus. taṃ parastāt tribhis svargair lokaiḥ pratyastabhnuvan. sa eṣa ubhayataṣ ṣaṭsu svargeṣu lokeṣu pratiṣṭhito. dhṛtyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. // devā vai saptadaśānāṃ pravlayād abibhayus. tān sarvais stomair avastāt paryārṣan sarvais stomaiḥ parastāt. tasmād abhijit sarvastomo ’vastāt saptadaśānāṃ viśvajit sarvastomaḥ parastāt. saptadaśānāṃ dhṛtyā apravlayāya.

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らはそれ（太陽）を 3 つの天界に置いた。彼らはそれ（太陽）があちら側に超えて落ちることを恐れた。彼らはあちら側で 3 つの天界によってそれを固定した。そのようなかのもの（太陽）は両側から（支えられて）6 つの天界においてしっかりと立っている。固定のために、安立のために、落下しないために、超えて落ちないために。神々は（Ekaviṁśa-Stoma をもつ日、つまり、21 日間の祭式の真ん中の日の前後 3 日間ずつに使う）Saptadaśa[-Stoma]たちが押し潰されることを恐れた。彼らはそれら（Saptadaśa-Stoma たち）を

[27] ここで行われていると考えられる春分の祭式と関連していると考えると、ある種の「果て」、例えば春分点などが意識されている可能性がある。

完全な Stoma たちによって[28]こちら側から（真ん中の日より前の日から）突き支え、完全な Stoma たちによってあちら側から（真ん中の日より後の日から）［突き支えた］。それゆえ Abhijit[-Stoma]は完全な Stoma として、［3 つの］Saptadaśa[-Stoma]よりこちら側で（真ん中の日より前の日に）用いられ、Viśvajit[-Stoma]は完全な Stoma として、あちら側から（真ん中の日より後の日に）用いられる。保つために、押し潰さないために。

KS 33.6(3): 神々が太陽の落下を恐れた話（3）

(33.6:31.14–20) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ, ye ⁺varṣman[29] svargāṇāṃ lokānām adhipatayas, teṣv ādadhuś. catustriṁśā vai stomā ⁺varṣman[30] svargāṇāṃ lokānām adhipatayas. tad, yad ekaviṁśasyāhnas trayo ’vastāt saptadaśās trayaḥ parastāt, te trayaś catustriṁśā dvaudvau. teṣu vā eṣa āhito. dhr̥tyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. // varṣman hi vā eṣa svargāṇāṃ lokānām āhitas. tasmād bhūtebhyobhūtebhya uttaro. varṣma svānām ādhipatyaṃ paryeti, ya evaṃ veda.

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らは彼を、天界たちの頂点において首長である者たちに置いた。Trayastriṁśa-Stoma たちが天界たちの頂点における首長たちなのだ。Ekaviṁśa[-Stoma] をもつ日のこちら側から 3 つの Saptadaśa[-Stoma] があり、［その日の］あちら側から 3 つの Saptadaśa[-Stoma] があるということは、それらは 3 つの Catustriṁśa[-Stoma] が 2 つに分かれてあるということである((17×3)+(17×3)=(34×3))[31]。例のもの（太陽）はそれら（Stoma）の上に置かれている。保つことのために、しっかりと立つことのために、落下しないために、超えて落ちないために。例のもの（太陽）は諸天界の頂点に置かれているから、それゆえ［太陽は］どの諸存在よりも上位である。このように知っている者は、頂点に、自分に属する者たちの首長の地位に至る。

KS 33.6(4): 神々が太陽の落下を恐れた話（4）

(33.6:31.20–32.3) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ pañcabhī raśmibhir udavayan. raśmayo divākīrtyāni. tasmād ekaviṁśe ’han pañca divākīrtyāni kriyante. ye gāyatre, te gāyatrīṣūttarayoḥ pavamānayor. mahādivākīrtyaṁ hotuḥ. pr̥ṣṭhaṃ vikarṇaṃ brahmasāmaṃ. bhāsam agniṣṭomas. tad, yad ekaviṁśe ’han pañca divākīrtyāni kriyanta, ādityam eva tat pañcabhī raśmibhir udvayanti. dhr̥tyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. //

神々は太陽が天界から落下することを恐れた彼らはそれ（太陽）を 5 本の太陽光線

---

[28] Abhijit-Stoma を使う日を含んだ最初の 7 日間、Viśvajit-Stoma を使う日を含んだ最後の 7 日間の中で使われる Stoma のことを総称して、「完全な stoma たち」と呼んでいる。

[29] 訂正した。Ed varṣma

[30] 訂正した。Ed varṣma

[31] 折り返しの日は Ekaviṁśa-Stoma があり、その前後三日ずつにはそれぞれの日に Saptadaśa-Stoma が使われるという構造のことを述べている。つまり、 stoma の並びが、17 17 17 21 17 17 17（数字は stoma に含まれる詩節の数） という構造になっている。

で編み上げた（ud-avayan[32]）。Divākīrtya［-Sāman］たちは太陽光線たちである。それゆえ Ekaviṁśa-Stoma をもつ日に 5 つの Divākīrtya［-Sāman］が用いられる[33]。2 つの Gāyatra［-Sāman］は Gāyatrī 詩節たちにおいて［歌われ］後半二つの Pavamāna［-Stotra］に属する[34]。Mahādivākīrtya［-Sāman］は Hotar に属する[35]。Vikarṇa［-Sāman］は Pṛṣṭha［-Stotra］であり Brahmasāma である[36]。Bhāsa［-Sāman］が Agniṣṭoma［-Stotra］[37]として使用される。Ekaviṁśa-Stoma をもつ日に 5 個の Divākīrtya［-Sāman］が用いられることで、彼らは太陽を 5 本の太陽光線によって編み上げることになる。固定のために、安立のために、落下しないために、超過しないために。

KS 33.6(5): Spara-Sāman と Para-Sāman（≈TS 7.3.10 Ekaviṃśatirātra, Para-Sāman と Paras-Sāman）

(33.6:32.3–9) athaitāni sparāṇi. sparair vai devā ādityāya svargaṃ lokam aspṛṇvan. yad aspṛṇvaṁs, tat sparāṇāṃ sparatvaṃ. spṛṇvanty asmai sparāṇi svargaṃ lokaṃ, ya evaṃ vidvān etais stute. ’thaitāni parāṇi. parair vai devā ādityaṁ svargaṃ lokam apārayan. yad apārayaṁs, tat parāṇāṃ paratvaṃ. pārayanty enaṃ parāṇi svargaṃ lokaṃ, ya evaṃ vidvān etais stute. ’nuṣṭubho vai, yad ayātayāmarūpaṃ, tāni parāṇi. tasmād anuṣṭupsu parāṇi kriyante. yad anuṣṭupsu parāṇi kriyante, ’nuṣṭubham eva tat savīryāṃ kurvanti. svargasya lokasya samaṣṭyai. //

次に例の Spara［-Sāman］たち［について］。神々は Spara［-Sāman］たちによって Āditya のために天界を確保した（aspṛṇvan）。彼らが確保した（aspṛṇvan）ということが Spara［-Sāman］たちが Spara［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知ってこれらを歌うならば、Spara［-Sāman］たちが彼（祭主）のために天界を確保する。次に例の Para［-Sāman］たち［について］。神々は Para［-Sāman］たちによって Āditya を天界に渡らせた。彼らが渡らせた（apārayan）ということが、Para［-Sāman］たちが Para［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知ってこれらを歌うならば、Para［-Sāman］たちは彼（祭主）を天界に渡らせる。Anuṣṭubh の使い古されていない形であるものが Para［-Sāman］たちである。それゆえ Anuṣṭubh 詩節たちのところで Para［-Sāman］たちが用いられる。Anuṣṭubh 詩節

---

[32] udavayan は ud-vaya[ti] の 3rd pl. impf.（PW s.v. vā; EWAia s.v. *o* ‘weben’; LIV s.v. **Heu-* ‘weben’）である。

[33] 5 つの divākīrtya-sāman とは、次に述べられる（1-2）2 つの gāyatra-sāman、（3）mahādivākīrtya-sāman、（4）vikarṇa-sāman、（5）bhāsa-sāman を指している。

[34] pavamānastotra は朝、昼、夕方の最初の stotra として用いられる。後半 2 つの pavamānastotra は昼と夕方の最初の stotra、つまり、6 番目と 11 番目の stotra を指している。Cf. Parpola [1969: 13].

[35] mahādivākīrtya-sāman が使われる stotra に対応する śastra を唱える祭官が hotṛ であることを指しているのかもしれない。Cf. Parpola [1969: 13].

[36] pṛṣṭha-stotra は 7, 8, 9, 10 番目の stotra であり、brahmasāma は、brahmaṇācchaṃsin 祭官が śastra を唱えるときに使われる sāman である。brahmaṇācchaṃsin 祭官が śastra を唱えるのは、９番目の stotra が歌われた後である。Cf. Parpola [1969: 13].

[37] agniṣṭoma-stotra は１２番目に用いられる stotra である。

たちのところで Para［-Sāman］たちが用いられることで、彼らは Anuṣṭubh 詩節を勇力をもつものにしていることになる。天界への完全な到達のために。

KS 33.7: （21 日間の儀礼（夏至祭）の中の）開放日についての議論（≈ TS 7.5.6; 7.5.7）

KS 33.7(1): 新月の夜・満月の夜・Vyaṣṭakā の夜において開放日があるべし（≈TS 7.5.7(1)）

(33.7:32.10−17) "utsr̥jyā3n notsr̥jyā3m" iti mīmāṁsante. tad āhur, "utsr̥jyam eva. prāṇāpānā vā ete saṃvatsarasya, yat pūrṇamāsā. yan notsr̥jeyus, saṃvatsaram apinahyeyur, amehena sattriṇo mriyeran. paurṇamāsyāṃ cāmāvasyāyāṃ cotsr̥jyam" ity āhur "ete hi yajñaṃ vahata" iti. tad āhur, "etayos tvāva notsr̥jyaṃ, ye avāntarā yajñaṃ bhejāte" iti. "yā prathamā vyaṣṭakā, tasyām utsr̥jyam" ity āhur, "eṣa hi māso viśara" iti. nādiṣṭam utsr̥jeyur. yad ādiṣṭam utsr̥jeyur, yādr̥śe punaḥ paryāplāve madhye ṣaḍahasya saṃpadyata iti, ṣaḍahair māsaṁ saṃpādya, yat saptamam ahas, tad utsr̥jeyus. saṁ ṣaḍahaṃ tanvanty, ut saṃvatsaraṁ śvāsayanti.

「［21 日間の儀礼（夏至祭）の中の一日が］開放されるべきか、開放されるべきでないか」と彼らは互いに吟味している。それについて［人々は］言っている、「まさに手放されるべきである。満月というのは、一年にとって吐く息と吸う息である。開放しないなら、彼らは一年を塞いでしまうことになる。排尿障害（ameha-）によって Sattrin たちは死んでしまうことになる。満月の時と新月の時に［1 日が］開放されるべきである」と彼らは言っている、「というものこの 2 つは祭式を運ぶから」と。それについて［人々は］言っている、「祭式の内側で分け前をもつ（bhejāte[38]）2 つ（満月の夜と新月の夜）の時に［1 日が］開放されるべきではない」と。「最初の Vyaṣṭakā[39]の時に［1 日が］開放されるべきである」と［ある人々は］言っている、「というのも例のそれは月にとって[40]viśara（裂け目の日）であるから」と。【Vyaṣṭakā において開放しないことへの反論】彼らは指定された［日］を開放すべきではない。「次に 6 日の paryāplāva（転換期？）となる真ん中で数が合うように」と［考えて］、指定された［日］を彼らが開放する場合は、6 日たちによって［1 か］月を数え上げてから（6 日×5 回=30 日間）、7 番目の日を彼らは開放すべきである。彼らは 6 日を一つに繋げて、一年に息を吹き出させる。

KS 33.7(2): 開放日がある場合には、Puroḍāśa を準備し、Soma 祭の代替としての Iṣṭi 献供を行う（≈TS 7.5.7(2)）

(33.7:32.17–22) yad ahas tūtsr̥jeyus, tad agnaye vasumate ’ṣṭākapālaṃ puroḍāśaṃ prātar nirvapeyur, aindraṃ dadhi=, indrāya marutvata ekādaśakapālaṃ madhyandine, viśvebhyo devebhya ṛtumadbhyo dvādaśakapālam aparāhṇe. prājāpatyaḥ paśus syād. agner vai vasumataḥ prātassavanaṃ. yad agnaye vasumate ’ṣṭākapālaṃ puroḍāśaṃ prātar nirvapanti, devatām eva tad bhāginīṃ kurvanty. ananusargāya. (33.7:32.22–33.7) somo vā eṣa oṣadhīṣu praviṣṭo. yad aindraṃ dadhi bhavati=, indram eva tad bhāgadheyān na cyāvayanti. savanam aṣṭābhir upayanti. ye khalu vāva prātaḥ paśava upākriyante, te vasava. indrasya vai

[38] bhejāte bhaj 3rd du. perf. mid. Cf. Kümmel [2000] s.v. bhaj.

[39] vyaṣṭakā は、黒半月（kr̥ṣṇapakṣa, 満月から新月までの期間）における最初の日 (“der erste Tag in der dunklen Monatshälfte") のことである。PW s.v. vyaṣṭakā.

[40] Cf. TS 7.5.7.2 māsó = mā́s- gen.sg.

marutvato mādhyandinaṁ savanaṃ. yad indrāya marutvata ekādaśakapālaṃ puroḍāśaṃ madhyandine nirvapanti, devatām eva tad bhāginīṃ kurvanty. ananusargāya. // savanam ekādaśabhir upayanti. viśveṣāṃ vai devānām ṛtumatāṃ tritīyasavanaṃ. yad viśvebhyo devebhya ṛtumadbhyo dvādaśakapālaṃ puroḍāśam aparāhṇe nirvapanti, devatām eva tad bhāginīṃ kurvanty. ananusargāya. savanaṃ dvādaśabhir upayanti. prājāpatyaḥ paśur bhavati. yajño vai prajāpatir. yajñasyānanusargāya=.

一方、彼らが一日を開放するときは、彼らは Vasu たちを伴った Agni のために 8 皿分の Puroḍāśa を、Indra のための酸乳（dadhi）を、早朝に準備するべきである、Marut たちを伴った Indra のために 11 皿分の［Puroḍāśa］を真昼に、適切な時間をもつ（ṛtumant-）Viśve Devās のために 12 皿分の［Puroḍāśa］を午後に。Prajāpati のための犠牲獣が用いられるべきである。早朝の Soma 搾りは Vasu たちを伴った Agni のためにあるのだ。Vasu たちを伴った Agni のために 8 皿分の［Puroḍāśa］を早朝に振る舞うことで、彼らは神格（Vasu たちを伴った Agni）を分け前をもつ者にしていることになる。［神格を開放日に］続けて（倣って）手放さないように。これ（酸乳）は Soma として植物の中に入っているのだ。Indra のための酸乳が用いられることで、彼らは Indra を分け前（つまり Soma）から動かさない（遠ざけない）ことになる。彼らは Soma 搾りを 8［皿分の Puroḍāśa］を用いて行う[41]。早朝に連れてこられる家畜たちは､実は、Vasu たちである。真昼の Soma 搾りは、Marut たちを伴った Indra のためのものである。Marut たちを伴った Indra のために 11 皿分の Puroḍāśa を真昼に準備することで、彼らは神格を分け前をもつ者にしていることになる。続け様に手放さないために。彼らは Soma 搾りを 11［皿分の Puroḍāśa］を用いて行う。3 番目の Soma 搾りは、適切な時間をもつ Viśve Devās のためのものである。適切な時間をもつ Viśve Devās のために 12 皿分の Puroḍāśa を午後に準備することで、彼らは神格を分け前をもつ者にしていることになる。続け様に手放さないために。彼らは Soma 搾りを 12［皿分の Puroḍāśa］を伴って行う。Prajāpati のための家畜が用いられる。Prajāpati は祭式なのだ。祭式を続け様に手放さないために。

2.2.2 Dvādaśāha（12 日間の儀礼）

KS 33.8 の記述によれば、Dvādaśāha が開始されるのは、1 年の後半の 6 か月の 6 番目の月の、3 つ Abhiprava（18 日間）と 2 日間の Go と Āyus の日の後である。その後、Chandoma の日々（おそらく 12 日間の 7、8、9 日目のことを指している）と、10 日目、Mahāvrata の日（11 日目）に進むことが述べられる。KS 33.8 以降の記述は、KS 34.13 に至るまで、Dvādaśāha 中に行われる個別的な祭式行為か、Dvādaśāha に関する神話か、Dvādaśāha に関する秘儀の説明である。この記述の順序から、Dvādaśāha が 1 年の最後に行われていたことがわかる。そして、33.8–34.13 まで多くの記述が Dvādaśāha にささげられており、重要な儀礼として認識されていたことがわかる。Dvādaśāha はのちの時代に Sattra の基本形として別個の儀礼として確立された。Dvādaśāha の具体的な儀礼の記述は以下に述べる Ekādaśinī 儀礼と Soma 祭と Mahāvrata 祭である。

[41] 実際に行っていることは，Soma 絞りではなく，雌牛の乳搾りであると考えられる．

2.2.2.1 Ekādaśinī と人間犠牲

KS には Ekādaśinī と呼ばれる儀礼についての記述がある。Ekādaśinī とは、11 頭の犠牲動物を用いる動物犠牲の一種である。Ekādaśinī（「11 頭からなる」）犠牲の記述は、KS 33−34 の Sattra 章 に記述されている 1 年間の Sattra を締めくくる Dvādaśāha（「12 日間」）儀礼に関する部分に含まれている。加えて、Tvaṣṭar 神にささげるための犠牲動物がおそらく 12 頭目として述べられている。この動物犠牲はおそらく本来的な人間犠牲の代わりに行われたものとして述べられている。ただし補足として述べるが、KS の記述では動物の肉や穀物などを食べることが人間を食べることと同じことであると述べられているので、実際に人間を食べるという行為が行われているのではないことがわかる。また、驚くべきことに、この犠牲者として述べられるのは、Dvādaśāha で潔斎する一人のことである。このことに対し、KS 34.11 ははっきりと否定していないが、TS 7.2.10 ははっきりと Dvādaśāha は行われるべきではないと否定している。

KS 34.1: 11 頭の動物犠牲（Ekādaśinī）

KS 34.1(1): Ekādaśinī の開始

(34.1:35.8–12) ekādaśinībhir yanti. prāṇā vā ekādaśinīḥ. prāṇeṣv eva tat pratitiṣṭhanto yanti. tad āhur, "yad ekādaśinībhir iyur, ahāni vātiricyeran, paśavo vā. nottamenāhnottamaḥ paśus saṃpadyeta=" iti. tad, yad ekādaśinīkāmās syuḥ, prathame māsy ekādaśinīm upeyur, uttame ca. prāṇā vā ekādaśinī. prāṇān eva mukhataḥ pratipadyante. prāṇeṣv antataḥ pratitiṣṭhanty.

11 頭の犠牲獣祭を用いて彼らは行く[42]。11 頭の犠牲獣祭は感覚器官たちなのだ。彼らはそうして身体諸機能においてしっかりと立ち続けることになる。それについて［人々は］言っている、「11 頭の犠牲獣祭を用いて行くことで、日々が余ることになるだろう、あるいは犠牲獣たちが。最後の日と最後の犠牲獣が合わせられるべきではない」と[43]。彼らが 11 頭の犠牲獣祭を望む者たちであるなら、最初の月に 11 頭の犠牲獣祭を行うべきである、そして最後の［月］に。11 頭の犠牲獣祭は身体諸機能たちなのだ。彼らは身体諸機能たちに先頭から踏み込んでいることになる。彼らは身体諸機能たちにおいて最後にしっかりと立っていることに

---

[42] ekādaśinī- が女性形となっている理由は、本来は、raśanā- f.「ロープ」の形容詞であることが挙げられる。その場合、「11 頭の犠牲獣を繋ぐロープ」という意味で解釈される。その意味で使われていると思われる例は以下の通り：MS 3.4.8:55.13: yád ekādaśínīṃ minuyā́d vájraḥ purástād ávagr̥hṇīyād.; MS 4.7.8:103.10−11: tád yá evā́m̐ vidvā́n etā́m ekādaśinīm̐ vibadhnīté yád evā́syātmána ūnáṃ tád ā́prīṇīte. 一方、「11 頭の犠牲獣を用いる祭式」の意味で使われていると思われる例は以下の通り：MS 4.8.1:108.5: vyávavlināti vā́ ekādaśínī yajñáṃ. KS の当該箇所では、ekādaśinī-は、「ロープ」ではなく「祭式」の意味で使われていると思われる。ekādaśinībhir yanti は、11 頭の犠牲獣が 11 日間毎日 1 頭ずつ用いられるということを表している。当該箇所では単数形ではなく ekādaśinībhir という複数形が用いられている。

[43] 12 日祭において 11 頭の犠牲獣を 1 日に 1 頭ずつ当てはめていくと、最後の 1 日が余ってしまう。あるいは、10 夜祭において 11 頭の犠牲獣を 1 日に 1 頭ずつ当てはめていくと、最後の 1 頭が余ってしまう。

なる[44]。

KS 34.1(2) : 1 日目：1 頭目 Indra-Agni

(34.1:35.12–15) aindrāgnaḥ khalv evācyutaḥ paśus syāt. prāṇāpānau vā indrāgnī. prāṇāpānayor eva tat pratitiṣṭhanto yanti. tejo vā indrāgnī. tejasy eva tat pratitiṣṭhanto yanty. ojo vai vīryam indrāgnī. tejasy eva tad vīrye pratitiṣṭhanto yanti=. indrāgnī sarvā devatā. yad aindrāgnaḥ paśur bhavati, sarvā eva tad devatāḥ prīṇanto yanti. //

実際には Indra-Agni のための、動かされていない[45]犠牲獣が使われるべきである。Indra-Agni は吐く息と吸う息なのだ。彼らはそうして吐く息と吸う息においてしっかりと立ち続けることになる。Indra-Agni は鋭い光なのだ。彼らはそうして鋭い光においてしっかりと立ち続けることになる。Indra-Agni は活力、勇力なのだ。彼らはそうして活力、勇力においてしっかりと立ち続けることになる。全神格たちは Indra-Agni である。Indra-Agni のための犠牲獣が使われることで、彼らは全神格たちを満足させ続ける。

KS 34.2(3): 2-5 日目：2 頭目（Rathaṃtara-Sāman, Agni）、3 頭目（bṛhat-sāman, Indra あるいは Indra-Agni）、4 頭目（Rathaṃtara-Sāman, Agni-Indra）、5 頭目（Bṛhat-Sāman, Indra-Agni）

(34.1:35.15–36.3) yad aho rathaṃtaraṁ sāma syād, āgneyaṃ tad ahaḥ paśum ālabheran. yad ahar bṛhad, aindraṃ tad ahas. tad vaindrāgnam[46] eva. yad aho rathaṃtaraṁ sāma syād, āgnendraṃ tad ahaḥ paśum ālabheran. yad ahar bṛhad, aindrāgnaṃ tad ahas. tad anupūrvaṃ devate kalpayanti. yathāpūrvaṃ paśūn ālabhanta. indrāgnibhyām eva yanti.

Rathaṃtara-Sāman が使われる日、その日に彼らは Agni のための犠牲獣を捕まえて献じるべきである。Bṛhat［-Sāman］が使われる日、その日に Indra のための［犠牲獣］を［彼らは捕まえて献じるべきである］。あるいは Indra-Agni のための［犠牲獣］を。Rathaṃtara-Sāman が使われる日、その日に彼らは Agni-Indra のための犠牲獣を捕まえて献じるべきである。Bṛhat［-Sāman］が使われる日、その日に Indra-Agni のための犠牲獣を［捕まえて献じるべきである］。彼らはそうして順に両神格を整える。彼らは順に犠牲獣たちを捕まえて献じる。彼らは Indra-Agni と共に行っていることになる。

KS 34.1(4): 6 日目：6 頭目（Bṛhaspati, śitipṛṣṭha）

(34.1:36.3–5) bārhaspatyaṁ śitipṛṣṭhaṁ ṣaṣṭhe ’hann ālabheran. brahma vai bṛhaspatir. brahmaṇy eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanti. bārhaspatyaḥ khalu vāva śitipṛṣṭho devatayā.

彼らは Bṛhaspati のための、白い背中をもつ［犠牲獣］を 6 番目の日に捕まえて献じるべきである。Bṛhaspati は Brahman なのだ。彼らはそうして Brahman において祭式の最後にしっかりと立っていることになる。神格に関しては、白い背中をもつ［家畜］は Bṛhaspati に属する。

---

[44] ここで述べられていることは、11 頭の犠牲獣祭が年末と年始をまたいでもよいということであると考えられる。

[45] acyuta- 「動かされていない」の意味について、Āp 9.9.6 に対する Caland の訳注は次のように述べている：「その場所から動かされていない（acyuta）」ものは、祭主が前もって自身のところに保持するつもりであった貴重なものである。 (Das “nicht von der Stelle bewegte (acyuta)" ist der Wertgegenstand, welchen der Yajamāna vorher bei sich zu behalten gedachte) 。
ĀpSŚ 9.9.6: yadi sāyam ahute 'gnihotre pūrvo 'gnir anugacched adhiśrityāgnihotram unnīya vāgninā ca sahāgnihotreṇa cānuddravet / yo brāhmaṇo bahuvit sa uddharet / yat purā dhanam adāyī syāt tad dadyāt / acyutenainaṃ cyāvayatīti vijñāyate

[46] 訂正した。Ed vaindrāgna

KS 34.1(5): 7 日目（第一 Chandoma）: 7 頭目（神格 Dyāvāpṛthivī, 犠牲獣 dhenu）

(34.1:36.5–7) dyāvāpṛthivyāṃ dhenuṁ saptame ’hann ālabheran, prathame chandome. dyāvāpṛthivī vai yajñasya pratiṣṭhā. dyāvāpṛthivyor eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanti. dyāvāpṛthivyā khalu vāva dhenur devatayā.

彼らは天と地のための乳牛を 7 番目の日に捕まえて献じるべきである、（すなわち）最初の Chandoma において。天と地は祭式にとって安定した基盤なのだ。彼らはそうして天と地において祭式の果てでしっかりと立っていることになる。神格に関しては、乳牛は天と地に属する。

KS 34.1(6): 8 日目（第二 Chandoma）: 8 頭目（神格 Vāyu, vatsa）

(34.1:36.7–9) vāyavyaṃ vatsam aṣṭame ’hann ālabheran, madhyame chandome. prāṇo vai vāyuḥ. prāṇa eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanti. // vāyavyaḥ khalu vāva vatso devatayā.

彼らは Vāyu のための子牛を 8 番目の日に捕まえて献じるべきである、（すなわち）真ん中の Chandoma において。Vāyu は気息なのだ。彼らはそうして気息において祭式の最後に立っていることになる。神格に関しては、子牛は Vāyu に属する。

KS 34.1(7): 9 日目（第三 Chandoma）: 9 頭目（Vāc, pṛśni）

(34.1:36.9–11) vāce pṛśniṃ navame ’hann ālabherann, uttame chandome. vāg vai pṛśniḥ pratiṣṭhā. vācy eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanti. vāgdevatyā khalu vāva pṛśnir devatayā=.

Vāc のためにまだら牛を 9 番目の日に捕まえて献じるべきである、最後の Chandoma において。まだら牛は Vāc、安定した基盤なのだ。彼らはそうして Vāc において祭式の果てにしっかりと立っていることになる。神格に関しては、まだら牛は Vāc を神格とするものである。

KS 34.1(8): 10 日目：10 頭目（Aditi, vaśā）

(34.1:36.11–13) ādityāṃ vaśāṃ daśame ’hann ālabherann. iyaṃ vā aditir. iyaṃ pratiṣṭhā=. asyām eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanty. ādityā khalu vāva vaśā devatayā.

彼らは Aditi のための牛（vaśā[47]）を 10 番目の日に捕まえて献じるべきである。Aditi はこの［大地］なのだ。この大地が安定した基盤なのだ。彼らはそうしてこの［大地］において祭式の果てにしっかりと立っていることになる。神格に関しては、牛は Aditi に属する。

KS 34.1(9): Mahāvrata の日（11 日目）: 11 頭目（Viśvakarman, ṛṣabha）

(34.1:36.13–19) vaiśvakarmaṇam ṛṣabhaṃ mahāvratīye ’hann ālabherann. indro vai vṛtraṁ hatvā viśvakarmābhavat. prajāpatiḥ prajās sṛṣṭvā viśvakarmābhavat. "saṃvatsaro viśvakarmā=" ity āhur "yam imāḥ prajā anuprajāyanta" iti. trirūpas syād ubhayataeto. yat prathamaṃ rūpaṃ, tenaindro. yad dvitīyaṃ, tena prājāpatyo. yat tṛtīyaṃ, tat saṃvatsarasya rūpam. "indro vṛṣā. prajāpatir vṛṣā. saṃvatsaro ’sya vṛṣā=" ity āhur "yam imāḥ prajā anuprajāyanta" iti. tasmād ṛṣabhas syāt. //

Viśvakarman のための雄牛を、Mahāvrata の日に捕まえて献じるべきである。Indra は Vṛtra を殺した後、Viśvakarman（「全ての義務を果たした者」）になった。Prajāpati は生き物たちを創り出した後、Viśvakarman になった。「Viśvakarman は一年である」と［人々は］言っている、「この生き物たちが（Viśvakarman）の後に繁殖するところの」と。3 つの色をもつ、両側にまだらがある［雄牛］が使われるべきである。最初の色であるもの、それによって［雄牛は］Indra に属する。2 つ目

[47] vaśā-は乳牛ではない雌牛のこと、つまり、子牛を産む前であったり、産んで子牛を育てた後にしばらくして母乳が出なくなった雌牛のことを指す。これについては、Amano [2009: 566 n.2492] を参照せよ。

の［色］であるもの、それによって ［雄牛は］Prajāpati に属する。3 つ目の［色］であるもの、それは一年の色である。「雄牛は Indra、雄牛は Prajāpati、彼の雄牛は一年である」と［人々は］言っている、「この生き物たちが彼(雄牛)の後に繁殖するところの」と。それゆえ雄牛が使われるべきである。

KS 34.2: Ekādaśinī の贖罪儀礼（≈TB 1.4.6.5−7; 1.4.7.1）[48]

KS 34.2(1): Tvaṣṭar への動物犠牲[49]

(34.2:36.20–23) asuryaṃ vā etasmād varṇaṃ kr̥tvā teja indriyaṃ vīryaṃ prajā paśavo ’pakrāmanti. yasya yūpo virohati, sa īśvara ījānaḥ pāpīyān +bhavitos.[50] tvāṣṭraṃ bahurūpam ālabheta. tvaṣṭā vai rūpāṇāṃ vikartā. tam eva bhāgadheyenopadhāvati. so ’smai teja indriyaṃ vīryaṃ prajāṃ paśūn punar upāvartayaty.

Asura に属する色[51]を作った後、彼から、鋭い光、Indra 力、勇力、子孫、家畜たちは遠ざかる。その者の祭柱がそびえ立つ[52]ところの者は、祭式を行なった後に、より悪い者になる可能性がある。Tvaṣṭar のための、多くの色をもつ［家畜］を捕まえて献じるべきである。Tvaṣṭar は色たちを変える者[53]なのだ。彼（祭主）は彼のもとへ分け前を伴って（助けを求めて）走り寄っていることになる。彼は彼（祭主）のために鋭い光、Indra 力、勇力、子孫、家畜たちを、再び取り戻して

---

[48] Mantra は KS 4.11 (Soma)と KS 7.13 (Agnyādheya)にある。

[49] MS 4.8.1 と TS 6.6.6.1−2 に Pātnīvata Tvāṣṭra Paśu と呼ばれる、Manu が自分の妻の代わりに Tvaṣṭar のために動物犠牲を行うという話が述べられている。KS においてこの箇所の続きで述べられる人間犠牲的な記述と合わせて考えると、人間犠牲の代わりに Tvāṣṭra Paśu を行うという観念がみえてくる。MS 4.8.1:107.3−108.3: tā́ abrūtāṃ. máno yájvā vái śraddhā́devo ’sy anáyā tvā pátnyā yājayāvéti. tā́ṃ prókṣya páryagniṃ kr̥tvédhmā́barhír áchaitāṁ. sá índro ’ved. imé vái té asuramāyé mánuṃ pátnyā vyàrdhayatā íti. tám índro brāhmaṇó bruvāṇá upáit. sò ’bravīn. máno yájvā vái śraddhā́devo ’si yājáyāni tvā. katamás tvám asi brāhmaṇáḥ. // kíṃ brāhmaṇásya pitáraṃ kím u pr̥chasi mātáraṃ. śrutáṃ céd asmin védyaṁ sá pitā́ sá pitāmaháḥ. // kénéty. ābhyā́ṃ brāhmaṇā́bhyām íti=. ī́śe ’háṃ brāhmaṇayor íti=. ī́śiṣa hī́ty abravīd. átithipatir vā́vātithīnām īṣṭā íti. sá dvitī́yāṁ védim úddhantum úpāpadyata. tā́ idhmā́barhír bíbhratā áitāṃ. tā́ abrūtāṃ. kím idáṃ karoṣī́ti=. imáṃ manuṁ yājayiṣyāmī́ti. kénéti. yuvā́bhyām íti. tā́ avittām. índro vā́véti. táu nyásyedhmā́barhíḥ pálāyetām. táu yád ádhāvatāṃ parástād evéndraḥ pratyáut. // táu vr̥śaś cáivāṣaś cābhavatāṃ. tád vr̥śasya cáivāṣasya ca jánma. sá mánur índram abravīt. sáṃ me yajñáṁ sthāpaya. mā́ me yajñó víkr̥ṣṭo bhūd íti. sò ’bravīd. yátkāma etā́m ā́labdhāḥ, sá te kā́maḥ sámr̥dhyatām. áthótsr̥jéti. tā́ṁ vā́ údasr̥jat. tád ŕ̥ddhyā evá. TS 6.6.6.1−2: índraḥ pátniyā mánum ayājayat. tā́m páryagnikr̥tām údasr̥jat. táyā mánur ārdhnot. yát páryagnikr̥tam pātnīvatám utsr̥játi. yā́m evá mánur ŕ̥ddhim ā́rdhnot. tā́m evá yájamāna r̥dhnoti. yajñásya vā́ ápratiṣṭhitād yajñáḥ párābhavati. yajñám parābhávantaṃ yájamānó ’nu párā bhavati. yád ā́jyeṇa pātnīvatáṁ saṁsthāpáyati yajñásya prátiṣṭhityai. yajñám pratitíṣṭhantaṃ yájamānó ’nu prátitiṣṭhati. iṣṭáṃ vapáyā // bhávati ániṣṭaṃ vaśáyā́tha pātnīvaténa prácarati. tīrthá evá prácarati. átho, etárhy evā́sya yā́mas. tvāṣṭró bhavati. tvā́ṣṭā vái rétasaḥ siktásya rūpā́ṇi víkaroti. tám evá vr̥ṣāṇam pátnīṣv ápi sr̥jati. sò ’smai rūpā́ṇi víkaroti.

[50] 訂正した。Ed bhavati. Mittwede [1989: 141] と Keith [1912: 1098]と Caland [1918: 18]に倣って bhavitos に訂正した。Oertel [1938b: 62; 74]は、īśvara-が定動詞とともに用いられる場合が他にあることを根拠に訂正しないが、同時に bhavitoḥ と使われる平行箇所（PB 9.10.2; JB 1.134; 2.46）を参照している。

[51] 「Asura に属する色」は動物犠牲による出血の色、すなわち「血の色」であると考えられる。

[52] 犠牲獣祭のための祭柱（yūpa-）がそびえたつということは犠牲獣祭が行われるということを示している。

[53] Tvaṣṭar は Asura 的なものをそうでないものに変える力をもっているように見える。

いることになる。

KS 34.2(2): Sarparājñī 讃歌

(34.2:36.23–37.3) ārtiṃ vā ete niyanti, yeṣāṃ dīkṣitānāṃ pramīyate. taṃ yad avavṛjeyuḥ, krūrakṛtām ivaiṣāṃ lokas syād. "āhara. daha=" iti brūyus.[54] taṃ dakṣiṇārdhe +vedyā[55] nidhāya sarparājñyā ṛgbhis stuyur. iyaṃ vai sarparājñy. asyā evainam adhisamīrayanti. (34.2:37.3–7) tad āhur, "vyṛddhaṃ vā etad, yat stutam ananuśastam" iti. hotā prathamo dīkṣitānāṃ prācīnāvītaṃ kṛtvā mārjālīyaṃ parīyād. yāmīr anubruvan sarparājñyā ṛcāṃ kīrtayann.[56] iyaṃ vai sarpato rājñy. asyā evainam adhisamīrayanti. dhuvanty evainam etad. atho ny evāsmai hnuvate. (34.2:37.7–9) tama iva[57] vā ete niyanti, yeṣāṃ dīkṣitānāṃ pramīyate. //[58] "agna āyūṁṣi pavasa" ity etāṁ somasya pratipadaṃ kurvīran. punata evātmānam. āyur evātman dadhate. ’tho jyotiṣmanta eva yanty. (34.2:37.9–11) apratiṣṭhitā vā ete, yeṣāṃ dīkṣitānāṃ pramīyate. rathaṃtarasāmaiṣāṁ somas syād. iyaṃ vai pṛthivī rathaṃtaram. asyām eva pratitiṣṭhanti. //

危難に例の者たちは陥っているのだ、潔斎者たちの［一人］が衰弱死するところの（例の者たちは）。彼（潔斎者たちの一人）を彼らが除外するなら[59]、彼らの世

---

[54] Cf. TB 1.4.6.5: ā́rtiṃ vā́ eté níyanti / yéṣāṃ dīkṣitā́nāṃ pramī́yate / táṃ yád avavárjeyuḥ / krūrakṛ́tām ivaiṣāṃ lokáḥ syāt / ā́hara dahéti brūyāt //

[55] 訂正した。Ed vedyāṃ. Mittwede [1989: 141] 参照。

[56] Cf. KS.22.11:67.9, KpS.35.5:210.23, TB.1.4.6.6

[57] 最初の筆跡では Ch tama eva となっているが、その後訂正されている。[Schr 37 n. 4].

[58] YV のマントラにおいては、通常母音 e と o の後で母音 a が脱落せずに残る。Cf. Macdonell [1916: 23]. Schroeder は、pramīyate と agne の間にサンディ（-e a- > -e ’-）が生じていないことから、//を書き足したという注を付している。[Schr 37 n. 5].

[59] Gotō [1987: 101] は、KS 34.2 avavṛjeyuḥ とその並行箇所である TB 1.4.6.5 avavárjeyuḥ について、+avarjeyuḥ ‘dürften (einen Toten) liegenlassen, verlassen’（「（死者を）放置しておく、放っておくことになるであろう」）という訂正形を示している（Mittwede [1989: 141] は Gotō の訂正形を示すのみである）。+avarjeyuḥ という語形は、ava-arj ‘entlassen’（「解放する」）のゼロ階梯の現在語幹 ava-ṛja-^{ti} の 3rd pl. opt.と分析される。ava-arj のゼロ階梯の現在語幹 ava-ṛja-^{ti} は ŚBK と PB と JB において在証されている（cf. Gotō [1987: 101]）。しかし、この訂正形については 3 つの問題がある。まず 1 つ目は、「（死者を）放置しておく、放っておくことになるであろう」という意味が、当該箇所の文脈において適切であるかどうか。2 つ目は、ava-arj のゼロ階梯の現在語幹 ava-ṛja-^{ti} は、ŚBK, PB, JB においてのみ現れるものであるということである。 3 つ目として、訂正部分が多すぎるという点が挙げられる。つまり、KS は訂正部分が 2 箇所（-v-を削除し、-ṛ-を-r-に訂正する）あり、TB は訂正部分が 2 箇所（-vá-を削除し、代わりのアクセントは置かない）ある。では、avavṛjeyuḥ という語形をどのように理解すべきか。もしこれが ava-varj「ねじり外す abdrehen、分離する abtrennen」（PW s.v. varj + ava）に帰せられるなら、varj の第 7 類の現在語幹 vṛṇak-^{ti} から+avavṛñjyuḥ が期待されるだろう（varj には*varja-^{ti} という第 1 類の現在語幹も *vṛja-^{ti} という第 6 類の現在語幹もない）。しかし、avavṛjeyuḥ から+avavṛñjyuḥ への訂正を認めることは、訂正部分が多すぎるため困難であると思われる。では、もしこれが ava-varj の代わりに ava-varh「引きちぎる」に帰せられるなら、varh の第 6 類の現在語幹 vṛha-^{ti} から+avavṛheyuḥ が期待されるだろう。しかし、avavṛjeyuḥ から+avavṛheyuḥ への訂正は、TB avavárjeyuḥ についても+avavárheyuḥ としなければいけなくなる（varh に*varha-^{ti} という第 1 類の現在語幹はない）。また、varh が ava と共に用いられる用例は Veda 文献において他に存在しない（VWC 参照）。そしてまた、varh はし

界は残酷なことをする者たちの［世界］のようになってしまうだろう。「お前は［家畜の肉を］取ってきて焼け」と彼らは言うべきである。彼らはその一人を Vedi の南半分に[60]置いた後、Sarparājñī の詩節たち[61]を使って歌うべきである。Sarparājñī はこの［大地］なのだ。彼らはこの［大地］を土台として彼を動き出させていることになる。それについて［人々は］言っている、「Stotra の続きに Śastra がないものは失敗だ」と。Hotar は潔斎した者たちの中で最初の者として右肩に聖紐をかけた後、Mārjālīya を周るべきである。Yama に属する［詩節たち］[62]を唱えながら、Sarparājñī の（３つの）詩節たちに言及しながら[63]。蛇の女王はこの［大地］なのだ。彼らはこの［大地］を土台として彼（衰弱死した者）を動き出させていることになる。こうして彼を（生き返らせようとして）揺さぶっていることになる。そしてまた彼に（彼が死んだことについて）謝罪していることになる。（Agni のための詩節の導入部の詠唱）そのうちの一人が衰弱死しつつあるとき、潔斎した者たちは実にあたかも暗闇に陥っているかのようである。「Agni よ、お前は自分の寿命を清めている」[64]という Soma に関係するこの詩節の入り（pratipad-）を彼らは唱えるべきである。彼らは自分自身を清めていることになる。彼らは寿命を自分自身の中に置いていることになる。そしてまた、彼らは光をもつ者として行っていることになる。潔斎した者たちの一人が衰弱死しつつある、そういう彼らは実に安定した基盤をもたない。彼らの Soma は Rathaṃtara-Sāman を用いて行われるべきである。Rathaṃtara［-Sāman］はこの大地なのだ。彼らはこの大地においてしっかりと立っていることになる。

KS 34.8: Dvādaśāha における食人行為性と人間犠牲性の示唆

KS 34.8(1): Prajāpati が繁殖を求めて Dvādaśāha を開催する神話 （TS 7.2.9(1)）

(34.8:41.13–18) prajāpatir akāmayata "prajāyeya=" iti. sa dvādaśāhenāyajata. tena

---

ばしば「（根 mūla-を）引き抜く」というニュアンスをもつ（cf. EWAia s.v. *VARH*, mūla-várhaṇī- f. Wurzelausreißerin (TB)）。したがってこれも認められがたい。上記のどの訂正形も認められないとすれば、底本にある通りに avavṛjeyuḥ とする他なくなる。そうすると、avavṛjeyuḥ は ava-varj と ava-varh が重なり合った形式である可能性がある（いくつかの形式において varj「ねじる」と varh「ちぎる」が混同されることが Narten [1959: 39−52 = 1995: 1−10] で取り上げられている）。つまり、形式的には vṛha-^{ti} に従って第 1 類であるが、意味的には varj の意味で解釈するということである。そして、TB avavárjeyuḥ については、caus. *avavárjayeyuḥ からの haplology（重音脱落 *-ay-e- > -ø-e-）のような短縮の結果の形式であると説明されうる。そして、脱落したアクセントの代わりに、-várj-の方にアクセントが置かれた可能性がある。

[60] ...dakṣiṇārdhe vedyā... の場合、「Vedi の（gen.）南半分において」という意味になる。あるいは、Ed dakṣiṇārdhe vedyāṃ の場合、「南半分において、Vedi において（loc. ）」という意味になり、その場合南半分とは Vedi を指すという解釈になる。祭場の設計図については、Mylius [1995: 146f]を参照せよ。

[61] Sarparājñī の詩節たちとは RV 10.189.1–3 (=SV 2.726–728; cf. KS 7.13:75.9) のことである。MS では 10 番目の日に caturhotṛ と呼ばれるマントラが唱えられ、その場面で Sarparājñī が言及される。Amano [2009: 346f] MS I 9,7(3) 参照。

[62] おそらく Yama と Yamī の対話の讃歌（RV 10.10.1-14）のことか？

[63] sarparājñyā ṛcāṃ kīrtayann. kīrtaya-は gen.とともに用いられる。Cf. MS 2.2.12(3)

[64] KS 4.11:36.6 = RV 9.66.19a, VC s.v. agna āyūṁṣi pavase. RV 9.66.19: ágna áyūṁṣi pavasa ā́ suvórjam íṣaṃ ca naḥ | āré bādhasva duchū́nām || Geldner: “O Agni, du läuterst uns Lebenskraft zu; weise uns Stärkung und Labung zu! Halte das Unheil weit ab!"

prājāyata. praiva jāyate, ya evaṃ veda=.

Prajāpati は望んだ、「私は繁殖したい」と。彼は Dvādaśāha を使って祭った。それによって彼は繁殖した。このように知っている者は繁殖していることになる。

KS 34.8(2): 犠牲に適した水と適さない水（血）

āpo vai yad yajñiyā medhyā asr̥jyanta, tad ekā api nāsr̥jyanta=. asr̥g vāva tan nāsr̥jyata. tad asno ’sr̥ktvaṃ. tasmād, +yadaivāsr̥k[65] chidyate, ’tha yajñiyo medhyo bhavati.

祭式に適した、犠牲祭に適した水たちが創り出されたとき、ある［水たち］は創り出されなかったのだ。そのとき実際には血（asr̥j-）が創り出されなかった（nāsr̥jyata）のだ。それが、血（asr̥j-）が血（asr̥j-）と呼ばれる由縁である。それゆえ、血が切り取られるやいなや、［犠牲獣は］祭式に適した、犠牲祭に適したものになる。

KS 34.8(3): Sattriya を受け取ることは人間（犠牲）に等しい

puruṣasaṃmito vā eṣa. yas sattriyaṃ pratigr̥hṇāti, puruṣaṃ vai so ’tti. yaṃ khalu vai puruṣam atti, na tasyāsmiṃl loke nāmuṣminn apibhavati.

例の［祭式］（＝Dvādaśāha）は人間［犠牲］に等しい。Sattra に属するもの（人間の肉か[66]）を受け取る者は人間を食べているのだ。実をいうと、彼が食べる人間であるところの者には、この世界においても、あの［世界］においても分け前がないのだ[67]。

---

[65] 訂正した。Ed yad evāsr̥k. 主節に atha が現れているので、従属節は yad ではなく、yadā であろう。もし訂正しなければ、yadā+iva となるが、その例は KS には在証されていない。「≈のように」を意味する iva は形容詞・名詞に意味を添えるときに、その形容詞・名詞の直後に置かれる。しかし、ここでは yadā の直後に置かれているので、その用法とは異なり、文全体に意味を添えていると考えられる。その場合には、yadevāsr̥k chidyate「血が切り取られるかのようになるやいなや」という意味となる。次に、yadā+eva と訂正する場合には、従属節と主節全体が祭式行為の帰結文として解釈される。

[66] Falk [1986: 38] は sattriya を「Sattra に属する（犠牲人間）」と解釈している。Cf. TS 7.2.10.2−3: eṣá ha vái kuṇápam atti yáḥ sattré pratigr̥hṇā́ti puruṣakuṇapám aśvakuṇapáṃ. gáur vā́ ánnaṃ. yéna pā́treṇā́nnam bíbhrati, yát tán ná nirṇénijati, tátó ’dhi málaṃ jāyate. 人間の死肉と馬の死肉を sattra で受け取る者は、死肉を食べているのだ。食べ物は牛なのだ。食べ物を運ぶ器を洗わなければ、そこから不浄が生まれる。

[67] Falk [1986: 38]: "Einem (bestimmten) Menschen zugeordnet ist der, der den zum Sattra gehörenden (Opfermenschen als Dakṣiṇā) annimmt. Einen Menschen fürwahr ißt er." （「ある（特定の）人間に関連している、Sattra に属する[犠牲人間を Dakṣiṇā として］受け取る者は。人間を実に彼は食べている」)。以上の Falk の訳は、本文の区切り方を、puruṣasaṃmito vā eṣa, yas sattriyaṃ pratigr̥hṇāti. puruṣaṃ vai so ’tti. と解釈していると思われるが、まず、この文脈で eṣa が指す語は、「例の祭式」すなわち「Dvādaśāha」のことであると考えられるため、eṣa ... yas ... の間の対応はない。むしろ関係代名詞 yas は、次の指示代名詞 so と対応していると考える方が妥当である。 次に、puruṣasammito の解釈を"Einem (bestimmten) Menschen zugeordnet"としているが、sammita-の正しい解釈は「（他のものの）量に沿うようにする、（大きさ、数などについて）同等にする、模造する」("nach dem Maasse (eines Andern) machen, gleichmachen (an Grösse, Zahl u. s. w.), nachbilden", PW s.v. mā + sam）の過去分詞「同等にされた」である。したがって puruṣa-sammita-の正しい解釈は、「人間と同等にされた」であり、この文脈では特

KS 34.11: Dvādaśāha における潔斎者は犠牲（≈TS 7.2.10.3–4）

KS 34.11(1): 3 つずつの清めが 4 つある（＝12 日間）

(34.11:44.11–14) catur vai tās tisrastisras. tāsāṃ yāḥ prathamā, ātmānaṃ tābhiḥ punīte. yā dvitīyā, medhyas tābhir yajñiyo bhavati. yās tr̥tīyā, gātrāṇi tābhir nirṇenikte. ’tha, yāś caturthīr, yad evāsyāntarato, yad bahiṣṭāc, chamalaṃ tat tābhir dhūnute.

3 つずつのそれら（Dīkṣā か）が 4 つある。それらのうちで 1 番目の［3 つ］、それらによって彼は自分自身を清める。2 番目の［3 つ］、それらによって［祭主が］犠牲祭に適した、祭式に適したものになる。3 番目の［3 つ］、それらによって彼は衣服を清潔にする。そして、4 番目の［3 つ］、それらによって、内側から、外側から、彼の汚れはふるい落とされていることになる。

KS 34.11(2): Dvādaśāha における食物は人間の象徴である

(34.11:44.14–19) puruṣaṃ khalu vā ete ’danti, yad dvādaśāhena yājayanti. yaḥ pāśavam atti, māṁsaṁ so ’tti. yo vājinaṃ, lohitaṁ sa. yo dhānā, asthi sa. ya ājyaṃ, majjānaṁ sa. yaḥ parivāpaṃ, keśān sa. yaḥ puroḍāśaṃ, mastiṣkaṁ sa. yo rājānaṃ bhakṣayati, svedaṁ sa. yaḥ karambhaṃ, niṣpadaṁ sa. eṣa ha khalu vai sattriyam atti, yo ’nr̥taṃ vadati. svaditam asya sattriyaṃ bhavati nāsya sattriyaṃ jagdhaṃ bhavati, ya evaṃ veda. //

例の者たちは実は人間を食べている、すなわち Dvādaśāha を使って祭らせる者たちは。家畜の［肉］を食べる者は、［彼（人間）の］肉を食べる。凝乳を［食べる］者は、［彼の］赤いもの（=血）を［食べる］。穀粒を［食べる］者は、［彼の］骨を［食べる］。バターを［食べる］者は、［彼の］骨髄を［食べる］。炒られた米粒を［食べる］者は、［彼の］髪を［食べる］。Puroḍāśa を［食べる］者は、［彼の］脳を［食べる］。王（=Soma）を飲む者は、汗を［飲む］。煮粥を［食べる者は］、糞を［食べる］。間違ったことを言う者は、実は Sattra 食を食べている。このように知っている者にとって、Sattra 食はおいしいものになり、彼の Sattra 食は食べられたことにならない。

KS 34.12: Dvādaśāha における食物は人間の象徴である（≈TS 7.2.10.3）

KS 34.12(1): 12 夜の間潔斎する者は誕生していることになる

(34.12:44.20–21) dvādaśa dīkṣito bhavati. jāyata eva tat. tad dhi jātaṃ, yat tapaso ’dhi jāyate, na yat striyā.

12［の夜の間］彼は潔斎した者になる[68]。彼はそのようにして生まれていることになる。というのも苦行（熱）から生まれることが誕生であり、女から［生まれる］ことは［そう］ではないから。

KS 34.12(2): 犠牲祭に適さない人間の 12 の部位あるいは排泄物

(34.12:44.21–45.2) dvādaśa dīkṣito bhavati. dvādaśa vai puruṣe ’medhyāni. loma ca tanūś[69] cāsr̥k ca māṁsaṃ cāsthi ca majjā ca sehuś ca plīhā[70] cāśru ca dūṣīkā ca svedaś ca yac ca prasrāvayata. etāni vai puruṣe dvādaśāmedhyāni. yad dvādaśa dīkṣito bhavati, tāny evāpahate.

12［の夜の間］彼は潔斎した者になる。人間においては犠牲祭に適さないものが

に「例の祭式、即ち Dvādaśāha が、人間と同等にされたものである」という意味で解釈されるべきである。

[68] TS の平行箇所から「夜」という意味を補った：TS 7.2.10.3 dvā́daśa rātrīr dīkṣitáḥ syāt.

[69] Mittwede [1989: 143] 参照.

[70] Mittwede [1989: 143] 参照.

12 あるのだ。体毛と体（皮？）[71]と血と筋肉と骨と骨髄と鼻水[72]と脾臓と涙と目やにと汗と流れ出るものと。これらが人間において犠牲祭に適さない 12 のものなのだ。彼が 12［の夜の間］潔斎した者となることで、彼はそれらを排除していることになる。

2.2.2.2 Soma 祭

Dvādaśāha 中に行われる Soma 祭は、まず Soma の購入あるいは代用品の使用について述べられ、次に、競争相手がいる場合について述べられる。

KS 34.3: Soma の購入および代用品の使用（≈TB 1.4.7.5–7）

KS 34.3(1): Soma の購入

(34.3:37.12–13) yady akrītam apahareyur, anyaḥ kretavyo.[73] yadi krītaṃ, yo nediṣṭhaṁ syāt, sa āhr̥tyābhiṣutyas.

もし彼らが取引していない（ただで手に入れた？）［Soma］を離れた場所に運ぶなら、他の［Soma］が取引されるべきである。もし取引された［Soma を離れた場所に運ぶなら］、もっとも近くにあるその［Soma］は取ってこられた後、絞られるべきである。

KS 34.3(2): Soma の購入の対価

(34.3:37.13) rājāhārāya tu kiṃcid deyaṃ. tenāsya[74] sa parikrīto bhavati.

しかし王（=Soma）の調達者に何かが与えられるべきである。それ（何か）を使って彼（購入者）によってそれ（Soma）が購入済みになる。

KS 34.3(3): Soma の代用品：Pūtīka

(34.3:37.14–17) yadi somaṃ na vindeyuḥ, pūtīkān abhiṣuṇuyur. yadi na pūtīkān, ārjunāni. gāyatrī vai somam apāharac, chyeno bhūtvā. +tasya[75] somarakṣir anuvisr̥jya nakham acchinat. tato yo ’ṁśur amucyata, sa pūtīko ’bhavad. ūtīkā vai nāmaite. yad ūtīkān abhiṣuṇvanty, ūtim eva yajñāya kurvanty.

もし Soma を手に入れられなければ、 Pūtīka[76]を絞るべきである。もし Pūtīka を［手に入れられ］なければ、Ārjuna を［絞るべきである］。Gāyatrī は Soma を（はるか）遠くに運んだ、鷹（śyena-）となった後に。Soma 護衛者は［その鷹（＝Gāyatrī）］の後を追って［矢を］放って、そ（鷹＝Gāyatrī）の爪を切った[77]。そこからはずさ

---

[71] 当該箇所の tanū-は「身体全体」を指しているとは考えにくく、並べて述べられている人体の部位と同じように、いずれかの人体部位と対応すると思われる。おそらくは「体皮」のことを指しているのではないかと思われる。

[72] EWAia s. v. *sebhu-*.

[73] 訂正した。Ed krītavyas. Mittwede [1989: 141]. Cf. KS 24.3:91.19: somaḥ kretavyo

[74] 訂正した。Ed dīyate nāsya. Ch dīyaṃte [Schr 37 n. 9]. Mittwede [1989: 141]. Ed rājahārāya tu kiṃcid dīyate nāsya sa parikrīto bhavati の意味は「しかし王（＝soma）の調達者に何かが与えられる。彼（購入者）によってそれ（王 soma）は購入されていないことになる」となる。

[75] 訂正した。Ed tasyāḥ. Mittwede [1989: 142]を参照。

[76] pūtīka はマメ科植物の一種（*Caesalpinia bonduc* Roxb. ）とされる。Kuiper [1984] 参照。

[77] Cf. PB 9.5.4: gāyatrī somam āharat. tasyā anuvisr̥jya somarakṣiḥ parṇam acchinat. tasya yo 'ṃśuḥ parāpatat, sa pūtīko 'bhavat. tasmin devā ūtim avindann. ūtīko vā eṣa, yat pūtīkān abhiṣuṇvanty. ūtim evāsmai vindanti. Caland による翻訳[1931 : 212f] : 4. The Gāyatrī fetched the soma ; a soma-guard

れた茎が Pūtīka となった。例の Ūtīka という名前である。Ūtīka を絞ることで、彼らは祭式のために援助（ūti-）をしていることになる。

KS 34.3(4): Soma の代用品：Ārjuna

(34.3:37.17–20) indro vai vṛtram ahaṁs. tasya yal lohitam āsīt, tāny ārjunāni lohitatūlāny abhavann. atha, yo grīvābhyaḥ pravṛḍhābhyo rasas samasravat, tāny ārjunāni babhrutūlāny abhavan. somo vā eṣo, ’surya iva tu. tasmān nābhiṣutyaḥ.

Indra は実に Vṛtra を殺した。彼の赤銅色であったもの（つまり血）が Ārjuna という赤銅色の草束になった。そして、［Vṛtra の］切り取られた頸たちから一気に流れ出た液が、Ārjuna という赤茶色の草束になった。これ（Ārjuna という草束）は Soma であるが、少し Asura よりのものである。それゆえ［それ（Ārjuna という草束）は］絞られるべきではない。

KS 34.3(5): Soma の代用品：Pūtīka

(34.3:37.20–38.3) pratidhuk ca prātaḥ pūtīkāś ca. dadhi madhyandine pūtīkāś ca. śṛtaṃ cāparāhṇe pūtīkāś ca=. indriyeṇa vā eṣa somapīthena vyṛdhyate, yasya somam apāharanti. sa oṣadhīś ca paśūṁś ca praviśati. yad etad ubhayam abhiṣuṇvanty, oṣadhibhyaś caiva paśubhyaś cādhi somapīthaṃ punar avarunddhe. //

搾りたての乳と Pūtīka は早朝に。酸乳と Pūtīka は真昼に。加熱された［乳］と Pūtīka は午後に。その人の Soma を（はるか）遠くに運ぶ者、そういう者は Indra 力を、Soma 飲み［の効力］を失う。それ（Soma）は植物と家畜たちの中に入る。この両方（植物と家畜）［の性質をもっているもの］を絞ることで、彼らは植物と家畜たちから Soma の効力を再び獲得していることになる。

KS 34.4: 競争相手のいる Soma 祭（≈TS 7.5.5; PB 9.4）

KS 34.4(1): 2 つの Soma 祭が同時に行われる場合（≈TS 7.5.5(1) ）

(34.4:38.4–13) yadi somau saṁsutau syātāṃ, mahati rātryāḥ prātaranuvākam upākuryāt. pūrva eva yajñaṃ, pūrvo devatāḥ, pūrvaś chandāṁsi vṛṅkte. vṛṣaṇvatīṃ pratipadaṃ kuryād. indro vai vṛṣā. prātassavanād evaiṣām indraṃ vṛṅkte. tad āhus, "savanamukhe-savanamukhe kartavyā=" iti. savanamukhātsavanamukhād evaiṣām indraṃ vṛṅkte. "saṃveśāyopaveśāya gāyatryai chandase ’bhibhuve svāhā. saṃveṣāyopaveśāya triṣṭubhe jagatyā anuṣṭubhe chandase ’bhibhuve svāhā=" ity. etāvanti vai chandāṁsi. chandobhir devā asurāṇāṃ chandāṁsy avṛñjata. cchandobhir evaiṣāṃ chandāṁṣi vṛṅkte. // sajanyaṁ śasyaṃ. vihavyaṁ śasyam. agastyasya kayāśubhīyaṁ śasyam. etāvad vāvāsti, yāvad evāsty. antarikṣād divaḥ pṛthivyā ahorātrābhyāṃ, tebhya enān sarvebhyo nirbhajati.

もし 2 つの Soma が同時に絞られることがあるなら、夜の大部分（夜更け）において早朝復唱（Prātaranuvāka）に取り掛かるべきである。彼は（競争相手より）先の者として祭式を、先の者として神格たちを、先の者として韻律たちをもぎとっていることになる。 vṛṣaṇ-（雄牛）［という語］を含む詩節[78]の導入部を唱えるべきである。雄牛は Indra なのだ。彼は彼らの早朝の Soma 搾りから Indra をもぎとってい

---

discharged an arrow after her and cut off a feather of her (off Gāyatrī) ; that shoot of it (of the soma) which fell down, became the pūtīka(-plant) ; in it the Gods found help (ūti) ; it verily is the pūtīka ; in that they press out the pūtīkas, they find help for him.

[78] Caland [1931: 210−211] によれば、朝の Soma 絞りにおいて 1−3 番目の Sāman が pavasendo vṛṣā suta (SV 2.128−130) から始まるものとされ、昼の Soma 絞りにおいて 1−3 番目の Sāman が vṛṣā pavasva dhārayā (SV 2.153−155) で、10−12 番目の Sāman が vṛṣā śoṇaḥ (SV 2.156−158)で始まるものとされ、夜の Soma 絞りにおいて 1−3 番目の Sāman が acikradad vṛṣā hariḥ (SV 2.392−394)で始まるものとされる。

ることになる。それについて［人々は］言っている、「1 つ 1 つの Soma 搾り（朝、昼、夕）の冒頭において［vṛṣaṇ-（雄牛）を含む詩節の入りが］唱えられるべきである」と。彼は彼らの 1 つ 1 つの Soma 搾りの冒頭から Indra をもぎとっていることになる。「入場に、休憩に、Gāyatrī に、韻律に、克服に、Svāhā。入場に、休憩に、Triṣṭubh に、Jagatī に、Anuṣṭubh に、韻律に、克服に、Svāhā」と。韻律はこれくらい多くある。韻律たちによって神々は Asura たちの韻律たちをもぎとった。彼は韻律たちによって彼らの韻律たちをもぎとっていることになる。Sajanya［-Sūkta］[79]が唱えられるべきである。Vihavya［-Sūkta］[80]が唱えられるべきである。Agastya の Kayāśubhīya［-Sūkta］[81]が唱えられるべきである。［Sūkta］の分だけ、その分だけのもの（祭主の敵対者への防御）がある。中空から、天から、大地から、日夜から、それら全ての分け前から、彼ら（祭主の敵対者たち）を排除する。

KS 34.4(2): 水瓶が割れた場合の贖罪儀礼（≈TS 7.5.5(2)）

(34.4:38.13–18) yadi prātassavane kalaśo dīryeta, vaiṣṇavīṣu śipiviṣṭavatīṣu mādhyandine pavamāne stuyur. yad vai yajñasyātiricyate, viṣṇuṃ tac chipiviṣṭam abhyatiricyate. ’tiriktaṃ vā etad. atiriktaṁ śipiviṣṭam. atiriktenaivātiriktam āpnoti. yadi madhyandina ārbhavasya pavamānasya purastād, vaṣaṭkāranidhanaṁ sāma kuryur. yadi tṛtīyasavana, etad eva. vaṣaṭkāro vai yajñasya pratiṣṭhā. pratiṣṭhām evainaṃ gamayanti. //

もし早朝の Soma 搾りにおいて水瓶が割れた場合、Viṣṇu に関する、śipiviṣṭa-［という語］を含む［詩節］[82]に合わせて、真昼の Pavamāna において、彼ら（Udgātṛ たち）は［Stotra を］歌うべきである。祭式の余る［一部］、それは Viṣṇu Śipiviṣṭa のために余る。この［Stotra］は余分なものである。［Viṣṇu］ Śipiviṣṭa は余分なものである。彼は余ったものによって余ったものに達していることになる[83]。もし真昼において Ārbhava-Pavamāna［-Stotra］[84]の前に［水瓶が割れた場合］、Vaṣaṭ の発声を最終部として Sāman を歌うべきである。もし第 3 の Soma 搾りにおいて［水瓶が割れた場合］、同じように［すべきである］。Vaṣaṭ の発声は祭式の安定した基盤である。彼らはそれ（祭式）を安定した基盤に行かせていることになる。

2.2.2.3 Mahāvrata 祭（1 年の締めくくりの祭り）

Mahāvrata 祭の記述は KS 33.8(6)–(7); 34.5 においてみられる。

KS 33.8(6): Mahāvrata の日（Dvādaśāha の 11 日目）

(33.8:34.8–18) te mahāvratīyam ahar upayanti. tad āhur, "viṣuvān vā etad ahar, yan mahāvratīyaṃ. viṣuvaty upetyam" ity. athāhuḥ, „prājāpatyaṃ vā etad ahar, yan mahāvratīyaṃ. tad uttamārdhe saṃvatsarasyopetyam" iti. yo vai ṣaṇmāsyo jāyate, yas saptamāsyaḥ, pra vai sa mīyate. na tena bhogam aśnute. // saṃvatsare khalu vāva reto hitaṃ prajāyate. tad, yad uttamārdhe saṃvatsarasya mahāvratīyam ahar upayanti, saṃvatsara etad reto hitaṃ prajanayanti. yathartv evartūn kalpayanti. yathāpūrvaṃ prajāṃ prajanayanti. te pañcaviṁśaṁ stomam upayanti puruṣastomaṃ. daśa hastyā aṅgulayo. daśa padyā. dvau bāhū. dve sakthyā. ātmā pañcaviṁśo. yad etaṁ stomam upayanti, svād eva tat stomāt sattriṇa ātmānaṃ prajanayanti. bhūtyai. tad āhuḥ, "prājāpatyaṃ vā etad ahar,

[79] Cf. RV 2.12.

[80] Cf. RV 10.128; 西村 [2015].

[81] Cf. RV 1.165.

[82] Cf. RV 7.100.5; 6; 99.7 (=SV 2.975-977). Cf. Amano MS 1.11.9(5) n.1667 (Vājapeya)

[83] Cf. KS 14.10

[84] 夕方のソーマ絞りで最初に用いられる stotora である。また、夕方のソーマ絞り全体のことも指す。

yan mahāvratīyaṃ. tasmin sarve grahā grahītavyās. sarvam iva hi prajāpatir vivyāca=" ity.

彼らは Mahāvrata の日に向かう。それについて［人々は］言っている、「Mahāvrata の［日］というのは折り返しの日なのだ。折り返しにおいて向かわれるべきである[85]」と。それから［人々］は言っている、「Mahāvrata の［日］というのは Prajāpati に関係する日なのだ。それは一年の最後の半［月］において行われるべきである」と。6 ヶ月で生まれる者、7 ヶ月で生まれる者は衰弱死するのだ[86]。彼はそれ（衰弱死）によって享受に至らない。実際には置かれた精液は一年経った時に繁殖する。一年の最後の半［月］において Mahāvrata の日に向かうことで、彼らは置かれた精液を一年経った時に繁殖させていることになる。季節の通りに季節たちを整わせていることになる。順番通りに子孫を繁殖させていることになる[87]。彼らは Pañcaviṁśa-Stoma を使う、Puruṣa-Stoma（「人間の Stoma」）として。手の指は 10 本。足の指は 10 本。腕は 2 本。腿は 2 本。25 番目は胴体。この Stoma を使うことで、自分の Stoma から Sattrin たちは自分自身を繁殖させる。成就[88]のために。それについて［人々は］言っている、「Mahāvrata の［日］というのは Prajāpati に関係する日なのだ。そのとき全ての Graha が汲まれるべきである。というのも Prajāpati は全体を含んでいるかのようであるから」と。

KS 33.8(7): Mahāvrata において使われる Graha たち

(33.8:34.18–35.5) eko grahītavya. eko hi prajāpatis. trayo grahītavyās. traya ime lokā. eṣv eva lokeṣv ṛdhnuvanti. // pañca grahītavyāḥ. pāṅkto yajño. yajñam evāvarundhate. sapta grahītavyās. sapta grāmyāḥ paśavas. tān evāvarundhate. nava grahītavyā. nava prāṇāḥ. prāṇeṣv eva pratitiṣṭhanti. pañcadaśa grahītavyāḥ. pañcadaśārdhamāsasya rātrayo. ’rdhamāsaśas saṃvatsara āpyate. ardhamāsaśa eva tat saṃvatsaram āpnuvanti. saptadaśa grahītavyāḥ. prajāpatis saptadaśaḥ. prajāpatim evāpnuvanty. ekaviṁśatir grahītavyā. asā āditya ekaviṁśo. ’mum evādityam āpnuvanti. saptaviṁśatir grahītavyās. triṇavā ime lokā. eṣv eva lokeṣv ṛdhnuvanti. trayastriṁśad grahītavyās. trayastriṁśad devatā. devatāsv eva pratitiṣṭhanti. //

1 つの［Graha］が汲まれるべきである。というのも Prajāpati は唯一であるから。3 つの［Graha］が汲まれるべきである。これら世界は 3 つである。彼らはこれら世界において成功していることになる。5 つの［Graha］が汲まれるべきである。祭式は 5 つからなる。彼らは祭式を獲得していることになる。7 つの［Graha］が汲まれるべきである。村の家畜たちは 7 つ（種類）[89]である。彼らはそれらを獲

---

[85] Mahāvrata 儀礼が一年の折り返しの日、つまり夏至か冬至の日に行われるべきであるということが述べられていると考えられる。

[86] 6 か月あるいは 7 か月、つまり夏至の期間は Mahāvrata を行う時期ではないということを示唆している。

[87] 早産などによって子孫が生まれるべき順番が狂うことを避けるようにするということが示唆されている可能性がある。

[88] Amano [2009: 638 s.v. bhav^{i}-] によれば、行為名詞 bhūti-は「なりたい何かになること」、つまり、「成就すること」を意味する。

[89] MS 1.8.1(4) には、人間、馬、牛、羊、ヤギ、大麦、米の 7 種類が村の家畜として述べられている。Cf. Amano [2009: 280].

得していることになる。9 つの［Graha］が汲まれるべきである。身体諸機能は 9 つである。彼らは身体諸機能においてしっかりと立っていることになる。15 の［Graha］が汲まれるべきである。半月には 15 の夜がある。半月ごとに一年は満たされる。彼らはそうして半月ごとに一年を満たしていることになる。17 の［Graha］が汲まれるべきである。17 番目は Prajāpati である[90]。彼らは Prajāpati に到達していることになる。21 の［Graha］が汲まれるべきである。21 番目はあの Āditya（太陽）である[91]。彼らはあの Āditya に到達していることになる[92]。27 の［Graha］が汲まれるべきである。これら世界は 27（3×9）ある[93]。彼らはこれら世界において成功していることになる。33 の［Graha］が汲まれるべきである。神格たちは 33 柱である[94]。彼らは神格たちにおいてしっかりと立っていることになる。

KS 34.5: 一年の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（≈TS 7.5.8–10; TB 1.2.6.6–7; PB 5.5）

KS 34.5(1): 祭官たちの儀礼行為（≈TS 7.5.8(3)）

(34.5:38.19–39.1) āsandīm āruhyodgātā mahāvratenodgāyati. preṅkham āruhya hotā mahad uktham anuśaṁsaty. adhiṣṭhāne ’dhiṣṭhāyādhvaryū pratigr̥ṇītaḥ. kūrceṣv itara āsate. ’ntarikṣaṃ vā annam. amuto vai pradīyate, ’syāṃ prajāyate. tad antarikṣāya jāyate. yad antarikṣa āsīnā mahāvratena caranty, annādyasyopāptyā. atho, devasākṣya $^{+}$evopariṣadyaṃ jayanti.[95] svargam u lokam ākramamāṇā yanty.

玉座（āsandī）に登った後、Udgātar は Mahāvrata［-Sāman］によって Udgītha[96]を歌う。ぶらんこに登った後、Hotar は Mahad Uktha（「偉大な Uktha」）を続けて唱える。立ち場所に立った後、二人の Adhvaryu が応じて唱える（prati-gar）[97]。草束の上に他の者たちは座る。食べ物は中空なのだ。彼はあそこ（天界）から与えられ、ここ（大地）に繁殖する。そのとき彼は中空に向かって生まれる。彼らが中空に座りながら Mahāvrata を行うことは食べ物を得るためである。そしてまた、彼らは神々による証（お墨付き）において（中空の）上に座ることを勝ち取っていることになる。そして彼らは天界へと歩み続けていることになる。

---

[90] MS 1.11.6(1); (5) には、Vājapeya 祭の文脈で Prajāpati と 17 という数が関係づけられている。Cf. Amano [2009: 412; 415].

[91] KS 33.4:30.6 において、Ekaviṁśa-Stoma と Indra が関係づけられている。

[92] Amano [2022] は、Sattra の文脈においてインドラが 21 番目の太陽として記述されている箇所を扱っている。Cf. TS 7.3.10.4.

[93] MS 1.9.4(2)に、27 の神々が Sattra に参加するという話があり、27 という数が Triṇava-Stoma にかけられていると思われる。Cf. Amano [2009: 330f].

[94] MS 1.9.5(1)に、33 の神々が Sattra に参加するという話が述べられている。Cf. Amano [2009: 334ff].

[95] 訂正した。Ed evo pariṣadya yājayanti. Ch: yaṃjayaṃti. Cf. Mittwede [1989: 142].

[96] Sāman（歌詠）の中で Udgātr̥ 祭官が歌う部分のことを Udgītha と呼ぶ。

[97] PW s.v. pratigará は hotr̥ の呼びかけに adhvaryu が答えるときに用いられる言葉であるという解釈をしている。他の可能性としては、2 人の adhvaryu が互いに応酬しあう、つまり、後で述べられる abhigara と apagara のことについて言っているという解釈も考えられる。

KS 34.5(2): 賞賛者と非難者（≈TS 7.5.9(8)）

(34.5:39.1–3) abhigarāpagarau bhavataḥ. pra vā anyas sattriṇaś śaṁsati, nindaty anyo. yaḥ praśaṁsati, yad evaiṣāṁ suṣṭutaṁ suśastaṃ, tat sa praśaṁsaty. atha, yo nindati, yad evaiṣāṁ duṣṣtutaṃ duśśastaṃ,[98] tat so ’pahanti.

称賛者（Abhigara）と非難者（Apagara）が登場する。一方は Sattrin たちを称賛し、他方は非難する。称賛する者は、彼ら（Sattrin たち）によってよく歌われ、よく唱えられたものを称賛する。また、非難する者は、彼らによって悪く歌われ、悪く唱えられたものを排撃する。

KS 34.5(3): Śūdra と Ārya の毛皮の引っ張り合い（≈TS 7.5.9(7)）

(34.5:39.3–6) śūdrāryau carman vyāyacchete. // devāś ca vā asurāś cāditye vyāyacchanta. taṃ devā abhyajayann. āryaṃ varṇam ujjāpayaty. ātmānam evojjāpayaty. (antarvedy āryas syād, bahirvedi śūdraś. śvetaṃ carma parimaṇḍalaṁ syād. ādityasya rūpaṃ.

Śūdra と Ārya が毛皮を引っ張り合う。神々と Asura たちは Āditya（太陽）を引っ張りあった。神々がそれを勝ち取った。Ārya-varṇa（階級）を勝たせる。自分自身を勝たせていることになる。祭場の内側には Ārya がいるべきであり、祭場の外側には Śūdra がいるべきである。白い毛皮は円形であるべきである。［それは］Āditya（太陽）の形である。

KS 34.5(4): 太鼓を鳴らす（≈TS 7.5.9(5)）

(34.5:39.6–7) sarvāsu sraktiṣu dundubhayo vadanti. yā dikṣu vāk, tāṃ tenāvarundhate. bhūmidundubhir bhavati. yāsyāṃ vāk, tāṃ tenāvarundhate.

［祭場の］全ての角において太鼓が鳴る。諸方角にある音、それをそうすることで獲得していることになる。大地の太鼓が使われる。この［大地］にある音、それをそうすることで獲得していることになる。

KS 34.5(5): 管楽器を演奏する（≈TS 7.5.9(3)）

(34.5:39.7–11) vīṇā vadanti. yā paśuṣu vāk tāṃ tenāvarundhate. kāṇḍavīṇā vadanti. yauṣadhiṣu vāk tāṃ tenāvarundhate. nāḍītūṇavā vadanti. yā vanaspatiṣu vāk tāṃ tenāvarundhate. vāṇaś śatatantur bhavati. śatāyur vai puruṣaś śatavīrya. āyur eva vīryam avarunddhe. //

Vīṇā が鳴る。家畜たちにある音、それをそうすることで獲得していることになる。Kāṇḍavīṇā が鳴る。植物にある音、それをそうすることで獲得していることになる。フルートが鳴る。木々にある音、それをそうすることで獲得していることになる。100 の弦をもつ琴が使われる。人間は 100［年］の寿命をもち、100 の勇力をもつ。寿命、勇力を獲得していることになる。

KS 34.5(6): Brahmacārin と Puṁścalī の喧嘩（TS 7.5.9(2); (9)）

(34.5:39.11–14) brahmacārī ca puṁścalī[99] cartīyete. sarvā hi bhūte vāco vadanti. mithunaṃ caranti. saṃvatsaraṃ vā ete prajāyamānās sattram āsate. teṣāṁ saṃvatsareṇaiva prajananam antardhīyate. yan mithunaṃ caranti, saṃvatsarasyaiva prajananasyopāptyai.

---

[98] 訂正した。Ed suṣṭutaṁ suśastaṃ. Cf. Mittwede [1989: 142].

[99] 訂正した。Ed puṁśacalī.

Brahmacārin と Puṁścalī（「売春婦」[100]）とが喧嘩する。というのも存在物における全ての音が鳴るから。彼らは一対をなす（性交を行う）。1 年の間、例の者（Sattrin）たちは繁殖している者たちとして Sattra を行う。一年によって彼らの繁殖は中断されていることになる。彼らが一対をなすことは、一年［分］の繁殖の獲得のためである。

KS 34.5(7): 女たちの歌と鎧を着た者たちの踊り（TS 7.5.10(2)）

(34.5:39.14−18) kumbhinīr upācaranti. saṃṛddhyā. idaṃmadhuraṃ gāyantīs saṃnaddhakavacāḥ pariyanti. mahāvratam eva mahayanty. atho, sendratāyā eva. brahmaṇo vā anyā tviṣiḥ, kṣatrasyānyā. yad dīkṣito ’dhikṛṣṇājinas, sā brahmaṇas tviṣir. yat saṃnaddhakavaco ’dhijyadhanus, sā kṣatrasya tviṣis. tad ubhayaṃ bhavaty. ubhayos tviṣyor avaruddhyai. //

水瓶をもつ女たちが召し使える。成功のために。『この蜜』を歌っている女たちの周りを、鎧を着た者たちが回る。彼らは Mahāvrata を高揚させていることになる。そしてまた、彼らは Indra 性を備えていることになる。Brahman には一方の激しさ（tviṣi）があり、支配権には他方の［激しさ］がある。潔斎した者が黒羚羊の皮を着ていること、そのことが Brahman の激しさである。鎧を着た者が弦を張った弓を持っていること、そのことが支配権の激しさである。その両方が行われる。両方の激しさの獲得のために。

2.3　KS のまとめ

KS の Sattra 章は、いわゆる「12 日間以上からなる Soma 祭」である様々な諸 Sattra を記述するための章ではなく、左右対称的な 2 つの半年間からなる、たった一つの 1 年間の Sattra を、1 年の開始から順に 1 年の終わりまでを記述したものであることがわかった。途中に春分や夏至における祭日について述べたり、一年の後半の最後に Dvādaśāha が行われるという記述からも、1 年を一つの儀礼サイクルとしていることが理解される。

Dvādaśāha についての記述（KS 33.8−34.13）は KS の Sattra 章の最後に置かれる最も大きなセクションである。実際の儀礼行為は前半部分（KS 33.8−34.5）に置かれる Ekādaśinī や競合者のいる Soma 祭や Mahāvrata などである。後半部分（KS 34.6−34.13）は、Prajāpati と Dvādaśa の神話や、Dvādaśāha の隠された意義などである。例えば、Dvādaśāha が Dīkṣā、Upasad、Soma 搾りという Soma 祭の基本的な進行になぞらえられたり、Dvādaśāha における潔斎者が食人行為や人間犠牲の対象であることが示唆されたりすることが述べられている。

Ekādaśinī は、Dvādaśāha の内の最初の 11 日間に行われる動物犠牲祭である。1 日 1 頭ずつ犠牲動物が供えられる大きな祭式であったものと推測される。さらに、おそらく Dvādaśāha の最後の日である 12 日目にも動物犠牲が行われていたことが推測される。隠された 12 日目の犠牲動物は、象徴的ではあるが、人間であったようであり、Tvaṣṭar 神

[100] PW s.v. puṃścalī: adj. f. und subst. den Männern nachlaufend, Hure

のための動物犠牲がその代替手段であった可能性がある。これは、Dvādaśāha が人間犠牲を裏のテーマとしてもっていたことを示している。

Mahāvrata 祭は Dvādaśāha の 11 日目に行われた大規模な祭りであったと思われる。その際にいろいろな種類の Graha 汲みが行われていた。それから、祭官たちによる象徴的な儀礼行為や Sāman の詠唱などがあった。それ以外にも、儀礼とは言い難いような、大騒ぎのような行為が行われていた。Sattrin たちの歌を非難したり褒めたり、Śūdra と Ārya が毛皮の取り合いをしたり、Brahmacārin と Puṃścalī が喧嘩したり、太鼓を叩いたり、笛を吹いたり、水瓶をもつ女たちが歌いながら踊ったりする記述がある。

Graha を汲む行為（Soma 汁を杯に汲む行為）は、9 日間の儀礼（春分祭）と Mahāvrata 祭の記述にのみ現れる。おそらく、Sattra の全期間を通じて Soma 搾りを行っていたのではなく、このような特別な儀礼や祭式の期間にのみ Soma 搾りが行われていた可能性がある。では、そのほかの日は何をしているのかと言うと、Stoma などを詠唱していることが記述されている。KS の Sattra 章の記述の範囲内では、必ずしも Stoma の詠唱とともに Soma 搾りが行われていたとは言えないことがわかる。

3　TS の Sattra 章の記述の構成

3.1　概観

TS における Sattra 章（TS 7.1.1−7.5.10）の内容を概観するために、以下に目次を示す。

TS 7.1
TS 7.1.1(1): Jyotis の繁殖、Agni、Virāj への等置（≈JB 1.66:1−2; PB 6.3.5−6）
TS 7.1.1(2): Stoma の Savana 運び（≈JB 1.66:2−4; cf. PB 16.1.6）
TS 7.1.1(3): púruṣasammita-であり ásthūri-である祭式（JB 1.67:1−2; cf. PB 16.1.6;6.3.2）
TS 7.1.1(2): Agniṣṭoma によって Prajāpati が創出したもの（≈JB 1.67:3−16; PB 6.1.1−5）
TS 7.1.1(3): Prajāpati からの 4 段階の創出神話（≈JB 1.68-69; PB 6.1.6−13）
TS 7.1.2: Stoma に Jyotis を置いていく（≈JB 1.66.5−12）
TS 7.1.3: Sarvastoma
TS 7.1.4: Dvirātra
TS 7.1.4(1): Aṅgiras たちの Sattra、Haviṣmant と Haviṣkṛt
TS 7.1.4(3): 前後の日の Stoma と Yajñakratu： Jyotis を Stoma としてもつ Agniṣṭoma、すべての Stoma をもつ Atirātra
TS 7.1.4(4): 前後の日の Sāman：Gāyatra→Traiṣṭubha、Rathaṃtara→Bṛhat、Vaikhānasa→Ṣoḍaśin
TS 7.1.4(5): 前後の日の前の日を新月の夜、後ろの日を翌日にする
TS 7.1.5: Trirātra (1)
TS 7.1.5(1): 原初の水たちと Prajāpati による大地拡大
TS 7.1.5(2): Prajāpati による Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群の創出
TS 7.1.5(3): Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群による 1 頭の雌牛の創出と繁殖
TS 7.1.5(4): Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群による Agniṣṭoma、Ukthya、Atirātra の執行
TS 7.1.5(5): 中空の分離と Trirātra の真ん中の日の固定、Triṣṭubh の Ājya-Śastra、Saṃyāna-Sūkta、Ṣoḍaśin-Śastra の詠唱、Agniṣṭoma、Ukthya、Atirātra を順番に使用する
TS 7.1.5(6): Indra と Viṣṇu による 1000 番目の雌牛の奪い合い
TS 7.1.5(7): 残りものの 1000 番目の雌牛を残りものの祭官に与える
TS 7.1.6: Trirātra (2)
TS 7.1.6(1): Soma、Indra、Yama による 1000 頭の雌牛の分け合い：導入
TS 7.1.6(2): Soma と赤茶色の 1 歳の雌牛
TS 7.1.6(3): Indra と赤色の吉兆のある 4 歳の Vṛtra 殺しに属する雌牛
TS 7.1.6(4): Yama と年老いた愚かなその中で最低の雌牛、Anustaraṇī 牛
TS 7.1.6(5): 1000 番目の雌牛は Vāc である
TS 7.1.6(6): 望みの雌牛は美しくあるべきである

TS 7.1.6(7): 雌牛を Agnīdh 祭官の場所の北に連れて、Āhavanīya 祭火のそばで木桶をかがせる
TS 7.1.6(8): 雌牛が東で西向きに立っている間に献供する
TS 7.1.6(9): 雌牛の名前を雌牛の耳に囁く
TS 7.1.7: Trirātra (3)
TS 7.1.7(1): 1000 番目の雌牛は祭主を天界に行かせる
TS 7.1.7(2): 1000 番目の雌牛を祭官に与える
TS 7.1.7(3): 1000 番目の雌牛についての Brahmavādin たちの議論
TS 7.1.8: Atri による Catūrātra の開催
TS 7.1.9: Jamadagni による Catūrātra の開催
TS 7.1.10: Pañcarātra
TS 7.1.10(1): 1 年（Saṃvatsara）による Pañcarātra の開催
TS 7.1.10(2): Sārvaseni Śauceya による Pañcarātra の開催
TS 7.1.10(3): Babara Prāvāhaṇi による Pañcarātra の開催
TS 7.1.10(4): Catūrātra は不足、Ṣaḍrātra は過分、Pañcarātra が適切な祭式
TS 7.1.10(5): Pañcarātra の基本構造

TS 7.2
TS 7.2.1: Ṣaḍrātra
TS 7.2.1(1): Sādhya 神たちによる Ṣaḍrātra の開催
TS 7.2.1(2): Ṣaḍrātra は神々の Sattra
TS 7.2.1(3): Ṣaḍrātra の基本構造
TS 7.2.1(4): Sārasvata-Sattra
TS 7.2.2: Saptarātra
TS 7.2.2(1): Kusurubinda Auddālaki による Saptarātra の開催
TS 7.2.2(2): Saptarātra の基本構造
TS 7.2.2(3): Saptarātra の最後の日（Viśvajit-Stoma の日）に Pr̥ṣṭha を用いること
TS 7.2.3: Aṣṭarātra
TS 7.2.3(1): Br̥haspati による Aṣṭarātra の開催
TS 7.2.3(2): Aṣṭarātra の基本構造
TS 7.2.4: Navarātra
TS 7.2.4(1): Prajāpati が Navarātra によって飢えた生き物たちを救った神話
TS 7.2.4(2): Navarātra は長い間病気の者のために行うべし
TS 7.2.5: Daśarātra
TS 7.2.5(1): Daśarātra は繁殖、Prajāpati、Virāj に関する祭式である、Daśarātra のために潔斎するなら Daśahotar を献供すべし
TS 7.2.5(2): Indra が Daśarātra によって他の神格たちから分け隔てられた神話
TS 7.2.5(3): Daśarātra は Trikakud（3 つの峰をもつ）祭式である
TS 7.2.5(4): 神々が Daśarātra を城壁として Asura たちを退けた神話
TS 7.2.5(5): 詩節数の多い Stoma から詩節数の少ない Stoma へ行くことは Jāmi の原因
TS 7.2.5(6): Daśarātra の基本構造
TS 7.2.6: Ekādaśarātra
TS 7.2.6(1): 季節たちが Ekādaśarātra によって子孫（時節たち）を手に入れた神話

TS 7.2.6(2): Ekādaśarātra の基本構造
TS 7.2.7: Dvādaśarātra（様々な Graha の配列）（≈KS 30.3; KpS 45.6; TB 2.4.3）
TS 7.2.7(1): Indra-Vāyu の Graha
TS 7.2.7(2): Mitra-Varuṇa の Graha
TS 7.2.7(3): 両 Aśvin の Graha
TS 7.2.7(4): Śukra-Graha
TS 7.2.7(5): Manthin の Graha
TS 7.2.7(6): Āgrayaṇa の Graha
TS 7.2.7(7): Ukthya の Graha
TS 7.2.7(8): Puroruc を唱える
TS 7.2.8: Dvādaśarātra（Graha の順序）（≈KS 30.2; KpS 45.5）
TS 7.2.8(1): 10 日間で使われる Graha の種類と順序（1≈9 日目）
TS 7.2.8(2): 10 日間で使われる Graha の種類と順序（10 日目）
TS 7.2.8(3): 3 日間ごとの最初と最後の日の Graha を同じ Graha にする
TS 7.2.9: Dvādaśarātra（最初の 11 日間）（≈KS 34.8）
TS 7.2.10: Dvādaśāha
TS 7.2.10(1): Agni Vaiśvānara を含む祭式としての Dvādaśāha
TS 7.2.10(2): Dvādaśāha において潔斎する者は食べられる（≈KS 34.2; 34.1; 34.11）

TS 7.3
TS 7.3.1: Dvādaśarātra（10 日目、Avivākya の日）
TS 7.3.2: Dvādaśāha（各日に獲得できるもの）
TS 7.3.3: Trayodaśarātra
TS 7.3.4: Āditya たちによる Caturdaśarātra の開催
TS 7.3.5: Prajāpati による Caturdaśarātra の開催
TS 7.3.6: Indra による Pañcadaśarātra の開催
TS 7.3.7: Indra が Pañcadaśarātra を Vajra として Asura たちを打ち負かした神話
TS 7.3.8: Saptadaśarātra
TS 7.3.9: Viṃśatirātra
TS 7.3.10: Ekaviṃśarātra

TS 7.4（≈JB 2.355−358; 365−367; PB 23.21−28; 24.1−17）
TS 7.4.1: Caturviṃśarātra
TS 7.4.2: 第 2 の Caturviṃśarātra
TS 7.4.3: Triṃśadrātra
TS 7.4.4: Dvātriśaṃdrātra
TS 7.4.5: Trayastriṃśadrātra
TS 7.4.5(1): Dvādaśāha と Trayastriṃśadrātra は神々の Sattra である
TS 7.4.6: Ṣaṭtriṃśadrātra
TS 7.4.7: Ekasmānnapañcāśa[-rātra]
TS 7.4.8: 1 年 Sattra の開始と終了の時期について
TS 7.4.9: Sattrin の潔斎と Upasad、Sattra は自分を Dakṣiṇā とするものである
TS 7.4.10: 導入（≈KS 33.2）
TS 7.4.10(1): 祭式次第（yajñakratu）について（Atirātra を最初に行う意味）

TS 7.4.10(2): Atirātra において Jyotiṣṭoma を最初に用いることについて
TS 7.4.10(3): 2 つの Rathaṃtara-Sāman と Sobhari の Brahma-Sāma（≈KS 33.2(3)）
TS 7.4.11: 1 年 Sattra における前半の 6 か月（≈KS 33.2; 33.3）
TS 7.4.11(1): 1 年 Sattra の基本説明: ≈KS 33.3:28.15−29.3
TS 7.4.11(2): 6、12、18、24 日間の祭式: ≈KS 33.3:29.3−14

TS 7.5 (≈JB 4.1; 9.4 etc.; PB 2.374 etc.)
TS 7.5.1: 雌牛の Sattra
TS 7.5.1(1): 雌牛の Sattra（≈KS 33.1）
TS 7.5.1(2): 1 年の前半と後半の話（≈KS 33.5）
TS 7.5.1(3): 1 年の開始の祭式（≈KS 33.2）
TS 7.5.2: 雌牛の Sattra（≈KS 33.1）
TS 7.5.3: Pṛṣṭha を最後の月に用いる（≈KS 33.5）
TS 7.5.4: Daśarātra
TS 7.5.5: 競争相手のいる Soma 祭（≈KS 34.4; PB 9.4）
TS 7.5.5(1): 2 つの soma 祭が同時に行われる場合
TS 7.5.5(2): 水瓶が割れた場合の贖罪儀礼
TS 7.5.6: 解放日の議論（≈KS 33.7）
TS 7.5.7: 解放日についての議論（≈KS 33.7）
TS 7.5.7(1): 新月の夜・満月の夜・Vyaṣṭakā の夜
TS 7.5.7(2): Soma 祭の代替としての Iṣṭi 献供
TS 7.5.7(3): 1 年の後半で Abhivarta
TS 7.5.8: Mahāvrata 祭
TS 7.5.8(1): Mahāvrata 祭で使用されるさまざまな Sāman（≈KS 34.5; TB 1.2.6.6−7）
TS 7.5.8(2): Mahāvrata 祭において Pañcaviṃśa-Stoma を用いる
TS 7.5.8(3): Udgātar 祭官が Udgītha を歌う
TS 7.5.8(4): Udgātar 祭官が玉座に座る
TS 7.5.8(5): Hotar 祭官がぶらんこに乗る
TS 7.5.8(6): Adhvaryu 祭官が 2 つの草束に乗る
TS 7.5.9: Mahāvrata 祭（≈KS 34.5; TB 1.2.6.6−7）
TS 7.5.9(1): Arkya-Sāman によって Prajāpati が生き物たちを創出した神話
TS 7.5.9(2): 大きな声を出す
TS 7.5.9(3): 100 の弦をもつ琴を演奏する
TS 7.5.9(4): 競争する
TS 7.5.9(5): 太鼓を叩く
TS 7.5.9(6): 大地を太鼓にして叩く
TS 7.5.9(7): 全ての声たちを出す
TS 7.5.9(8): 2 人が新鮮な獣の革を巡って競う
TS 7.5.9(9): 褒める者と貶す者

TS 7.5.9(10): 1 年 Sattra を行う者は雌雄一対であることから離れているが、Mahāvrata 祭では Vedi の内側で雌雄一対となる
TS 7.5.10: Mahāvrata（≈KS 34.5; TB 1.2.6.6−7）
TS 7.5.10(1): 獣の皮を突き刺す
TS 7.5.10(2): 女奴隷（dāsī-）たちが Mārjālīya 火の回りで地面を踏みつつ歌いながら踊る

TS の Sattra 章を概観すると、まず明らかになるのは、Dvirātra（２夜からなる儀礼）、Trirātra（３夜からなる儀礼）、Catūrātra（４夜からなる儀礼）というように、数詞に-rātra-（「夜」）を付加した複合語の形式で、最小の夜の数から段々と大きい数の夜からなる儀礼へと記述が続いていくということである。数詞を名称に含む儀礼は Ekānnapañcāśadrātra（49 夜からなる儀礼）までである。Śrautasūtra においては、これらの内の 2 日間から 11 日間（あるいは 12 日間）までが Ahīna[101]として呼ばれ、12 日間以上のものは Sattra と呼ばれる。これらが完全に独立した儀礼であるか、それとも連続した儀礼であるかは定かではないものの、試みにそれらの儀礼の日数を総計してみると 381 日となる[102]。そして、その後に 1 年 Sattra の記述が続く。この 1 年 Sattra は、Śrautasūtra において単に日数によって区別されるものとして、雌牛たちが Sattra を行ったという伝説をもとに、Gavāmayana（「雌牛たちの進行」）と呼ばれる。

次に、Tryaha（3 日サイクル）や Ṣaḍaha（6 日サイクル）と呼ばれる単位が多く記述に使用されていることや、3 という数を基本としている Stoma が多くみられる[103]ことから、TS の Sattra 章は 3 という数ないし 3 の倍数を念頭に置いて Sattra の儀礼を行っている可能性がある。これは、おそらく、非常に大きな数からなる日数の間行うことになる Sattra にあるパターンの繰り返しを設けることで祭式を行いやすくするためではないかと考えられる。あるいは、単に観念的に 3 という数が重要であったからかもしれない。

また、用いられる詩節の数に応じて名称が決まる Stoma の順序に関する記述が TS の Sattra 章においては顕著に多くみられた。TS の Sattra 章に記述されている、その名称が数詞から作られる Stoma は、Trivṛt（9 詩節）、Pañcadaśa（15 詩節）、Saptadaśa（17 詩節）、Ekaviṃśa（21 詩節）、Caturviṃśa（24 詩節）、Triṇava（27 詩節）、Trayastriṃśa（33 詩節）、Catuścatvāriṃśa（44 詩節）、Aṣṭācatvāriṃśa（48 詩節）である。また、Jyotis、Go、Āyus と呼ばれる Stoma も記述されている。また、おそらく Viśvajit と記述されているものも Stoma ではないかと思われる。数詞を名称に含まない Stoma の詩節数に関しては不明で

[101] Sen [1978: 44]: "*Ahīna* mfn. "lasting several days" Pāṇ. VI.4.145; the name of a class of *Soma* rite in which the pressing days last 2 to 12 days, and always end with an *Atirātra*; and together with *dīkṣā* and *upasad* days it must not extend beyond a month Āp. Śr. XXII. 14.1, e.g. Gargatrirātra (3 days), Pañcarātra (5), Ṣaḍah (6) etc. *Dvādaśāha* is both an a° and a *sattra* Āśv. Śr. X. 5.2. for a° & s° Mī. X. 6. 59−61."

[102] 2+3+4+5+6+7+8+9+10+11+12+13+14+15+17+20+21+24+30+32+33+36+49=381. この 381 という数は、太陰暦の 13 か月分（29.5×13=383.5 日）と凡その一致を示す。

[103] Trivṛt (3 つ組（3×3=9）の詩節からなる Stoma), Pañcadaśa（15 の詩節からなる Stoma）, Ekaviṃśa（21 の詩節からなる Stoma）, Caturviṃśa（24 の詩節からなる Stoma）, Triṇava（27（「3 つの 9」）の詩節からなる Stoma）, Trayastriṃśa（33 の詩節からなる Stoma）などの Stoma。

ある。しかし、TS の Sattra の記述に見られる傾向として、詩節数の少ない Stoma から詩節数の多い Stoma の順（昇順）に並べたり、あるいはその逆の順（降順）に並べたりするというものがある。その傾向から、Jyotis、Go、Āyus、Viśvajit の詩節数を Stoma 同士の比較によってどちらの Stoma がより詩節数が多いか、あるいは少ないかということは推測することはできる。すなわち、Jyotis、Go、Āyus は、昇順では、Jyotis→Go→Āyus の順に述べられているので、Jyotis が最も詩節数が少なく、Go がそれよりは詩節数が多く、Āyus が最も詩節数が多いであろうということは推測できる。一方、Viśvajit については、Pañcarātra[104]、Saptarātra[105]、Aṣṭarātra[106]、Daśarātra[107]において、最後の Stoma として述べられており、おそらくは Pañcaviṃśa (25) よりは詩節数が多い Stoma ではないかと考えられる。

3.2　個別の儀礼の内容

TS にみられる特徴ある要素がみられる儀礼について取り上げる。

3.2.1　Trirātra における 1000 頭目の雌牛

Trirātra（TS 7.1.5–7）は記述としては長いが、その大半が神話的であり、「1000 頭目の雌牛」についての物語が語られる。

TS 7.1. 5 のあらすじは次のようになる。Prajāpati による原初の水からの大地創生と Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちの創出から始まる。Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちは 1 頭の雌牛から 3 者それぞれのために 333 頭ずつの雌牛を繁殖させ、最初の 1 頭は 1000 頭目の雌牛（sahasratamī́-）と呼ばれることになった。Indra と Viṣṇu が 1000 頭の

---

[104] 1. Trivṛt (9) → 2. Pañcadaśa (15) → 3. Saptadaśa (17) → 4. Pañcaviṃśa (25) の順に Stoma が述べられている。

[105] 1. Trivṛt (9) → 2. Pañcadaśa (15) → 3. Saptadaśa (17) → 4. Triṇava (27) → 5. Pañcaviṃśa (25) の順に Stoma が述べられている。

[106] 1. Trivṛt (9) → 2. Pañcadaśa (15) → 3. Saptadaśa (17) → 4. Pañcaviṃśa (25) → 5. Trayastriṃśa (33) → 6. Pañcaviṃśa (25) の順に Stoma が述べられている。

[107] Daśarātra の Stoma の構造については特殊な記述のされ方がされている：Pañcadaśa (15) と Ekaviṃśa (21) と Trayastriṃśa (33) は三つのこぶ（trikakúd-）であり、他の Stoma は城壁（púr-）である、とされる。それぞれのこぶに対して両側に 2 つの城壁が置かれるという解釈をすれば、他の Stoma とは、おそらくは最初の 2 つの城壁は Trivṛt (9)、次の 2 つの城壁は Saptadaśa (17)、最後の 2 つの城壁は Pañcaviṃśa (25) あるいは Triṇava (27) であると思われる。Pañcarātra、Saptarātra、Aṣṭarātra の記述をもとに考えると、おそらく最後の 2 つの城壁は Pañcaviṃśa (25) であろう。これをまとめると次のような Stoma の順序になる：1. Trivṛt (9) → 2. Pañcadaśa (15) → 3. Trivṛt (9) → 4. Saptadaśa (17) → 5. Ekaviṃśa (21) →6. Saptadaśa (17) → 7. Pañcaviṃśa (25) → 8. Trayastriṃśa (33) → 9. Pañcaviṃśa (25)

雌牛を得る手段である 1000 頭目の雌牛を互いに自分のものにしようとして争い、結局両者はその雌牛を共有し、1000 頭の 3 分の 2（666 頭）は Indra のものになり、3 分の 1（333 頭）は Viṣṇu のものになった。ここから残りの 1 頭はどうするべきかという議論が始まる。この余った 1 頭は余りものとされる祭官のだれかに与えられるべきであるという話が行われる。

TS 7.1. 6 のあらすじは次のようになる。Soma、Indra、Yama のそれぞれが 1000 頭の雌牛の分け前を欲しがっていた。Yama が 1 頭の雌牛に 1000 頭の雌牛に匹敵するほどの力があることを見出し、他の二者に 1000 頭を渡す代わりにその 1 頭の雌牛を自分のものにしてくれと言い出した。しかし、Soma、Indra の二者もその 1 頭にそのような力があることを認め、その 1 頭を巡って分け前を取り合う。まず、彼らがその雌牛を水の中に入らせてから「Soma のためにでてこい」と言うと、その雌牛は赤茶色の 1 歳の雌牛となり、333 頭の雌牛と共に現れた。次に彼らがその雌牛を水の中に入らせてから「Indra のために出てこい」と言うと、その雌牛は赤色の吉兆のある 4 歳の Vr̥tra 殺しに属する雌牛となり、333 頭の雌牛と共に現れた。次に彼らがその雌牛を水の中に入らせてから「Yama のために出てこい」と言うと、その雌牛は年老いた、愚かな、最低の雌牛である Anustraṇī 牛となり、333 頭の雌牛と共に現れた。

TS 7.1.6 はその後にその雌牛が「ことば」（Vāc）であり、美しくあるべきであり、（祭式に）完全に合致したものであるべきであると言い、具体的な祭式行為について述べる：その雌牛を Agnīdh 祭官の場所の北に連れていき、Āhavanīya 祭火のそばで木桶をかがせ、雌牛が東で西向きに立っている間に献供し、雌牛の名前を雌牛の耳に囁く。

TS 7.1.7 は、1000 頭目の雌牛が祭主を天界に行かせるということ、1000 番目の雌牛をいずれかの祭官、つまり、Agnīdh か、Brahman か、Hotar か、Udgātar か、Adhvaryu かに与えるべきであるということ、その雌牛についての Brahmavādin たちの議論が述べられる。「1000 頭目が 1000 頭の後を追うのか、1000 頭が 1000 頭目の後を追うのか」と。雌牛たちを東へと放つなら、1000 頭目が 1000 頭の後を追うことになり、1000 頭は天界への道がわからないから、天界に行くことができない。しかし、西へ放つなら、1000 頭目は天界への道を知っているから、天界に行くことができる、と述べられる。

TS 7.1.5: Trirātra (1)

TS 7.1.5(1): 原初の水たちと Prajāpati による大地拡大

(7.1.5.1) ā́po vā́ idám ágre salilám āsīt. tásmin prajā́patir vāyúr bhūtvā́carat. sá imā́m apaśyat. tā́ṃ varāhó bhūtvā́harat. tā́ṃ viśvákarmā bhūtvā́ vyàmārṭ. sā́prathata. sā́ pr̥thivy àbhavat. tát pr̥thivyái pr̥thivitvā́ṃ.

この［世界全体］は原初において水たち（ā́pas）、海（salilám）であった。その中で Prajāpati は Vāyu になった後、動き回った。彼はこの［大地］を見た。猪（varāhá-）となってその［大地］を取ってきた。Viśvakarman になってその［大地］を擦った。それは拡大した（aprathata）。それは大地（pr̥thivī-）になった。それが大地が大地である所以である。

TS 7.1.5(2): Prajāpati による Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群の創出

tásyām aśrāmyat prajā́patiḥ. sá devā́n asr̥jata, vásūn rudrā́n ādityā́n. té devā́ḥ prajā́patim abruvan. "prájāyāmahā" íti. sò ’bravīt. // (7.1.5.2) "yáthāháṃ yuṣmā́ṁs tápasāsr̥kṣy, evā́ṃ tápasi prajánanam ichadhvam" íti. tébhyo ’gním āyátanam prā́yachad. "eténāyátanena śrāmyata=" íti. tè ’gnínāyátanenāśrāmyan.

その［大地］で Prajāpati は修行をした。彼は神々を創出した、Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちを。彼ら神々は Prajāpati に言った。「我々は繁殖したい」と。彼は言った。「私がお前たちを苦行によって創出したように、お前たちは苦行において繁殖を望め」と。彼らに Agni を拠点（āyátana-）として与えた。「この拠点でお前たちは修行せよ」と。彼らは拠点である Agni によって修行した。

TS 7.1.5(3): Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群による 1 頭の雌牛の創出と繁殖

té saṃvatsará ékāṃ gā́m asr̥janta. tā́ṃ vásubhyo rudrébhya ādityébhyaḥ prā́yachann. "etā́ṁ rakṣadhvam" íti. tā́ṃ vásavo rudrā́ ādityā́ arakṣanta. sā́ vásubhyo rudrébhya ādityébhyaḥ prā́jāyata trī́ṇi ca // (7.1.5.3) śatā́ni tráyastriṁśataṃ ca=. átha, sáivá sahasratamy àbhavat.

彼らは一年後一頭の雌牛を創出した。その［雌牛］を（他の）Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちに与えた。「お前たちはこの［雌牛］を守れ」と。その［雌牛］を Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちは守った。その［雌牛］は Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちのために（それぞれ）333（頭ずつ）へと繁殖した。そして、その［雌牛］は 1000 番目［の雌牛］となった。

TS 7.1.5(4): Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群による Agniṣṭoma、Ukthya、Atirātra の開催

té devā́ḥ prajā́patim abruvant. "sahásreṇa no yājaya" íti. sò ’gniṣṭoména vásūn ayājayat. tá imā́ṃ lokám ajayan. tác cādaduḥ. sá ukthyèna rudrā́n ayājayat. tè ’ntárikṣam ajayan. tác cādaduḥ. sò ’tirātréṇādityā́n ayājayat. tè ’muṃ lokám ajayan. tác cādadus.

彼ら神々は Prajāpati に言った。「1000 頭［の雌牛たち］によって我々に（祭主として）祭らせよ」と。彼は Vasu たちに Agniṣṭoma を使わせて祭らせた。彼らはこの世界を勝ち取った。そして彼らはそれを与えた。彼は Rudra たちに Ukthya を使わせて祭らせた。彼らは中空を勝ち取った。そして彼らはそれを与えた。彼は Āditya たちに Atirātra を使わせて祭らせた。彼らはあの世界を勝ち取った。そして彼らはそれを与えた。

TS 7.1.5(5): 中空の分離と Trirātra の真ん中の日の固定、Triṣṭubh の Ājya-Śastra、Saṃyāna-Sūkta、Ṣoḍaśin-Śastra の詠唱、Agniṣṭoma、Ukthya、Atirātra を順番に使用する

tád antárikṣam // (7.1.5.4) vyávairyata. tásmād rudrā́ ghā́tukā. anāyatanā́ hí. tásmād āhuḥ, "śithilā́ṃ vái madhyamám áhas trirātrásya. ví hí tád aváiryata=" íti. tráiṣṭubham madhyamásyā́hna ā́jyam bhavati. saṃyā́nāni sūktā́ni śaṁsati. ṣoḍaśínaṁ śaṁsaty. áhno dhŕ̥tyā áśithilambhāvāya. tásmāt trirātrásyāgniṣṭomá evá prathamám áhaḥ syād, áthokthyó, ’thātirātrá. eṣā́ṃ lokā́nāṃ vídhr̥tyai.

そのとき中空は分離した。それゆえ Rudra たちは殺す可能性のある者（ghā́tuka-）たちである。というのも［彼らは］拠点をもたないから。それゆえ人々は言う、「Trirātra の中間の日はゆるんでいるのだ。というのもそれは分離したから」と。真ん中の日には、Triṣṭubh 韻律の Ājya［-Śastra］が使われる。彼は Saṃyāna-Sūkta た

ちを唱える。Ṣoḍaśin[-Śastra] を唱える。（中間の）日が堅固となるように、ゆるんだものとならないように。それゆえ Trirātra について、Agniṣṭoma こそが最初の日に用いられるべきであり、次に Ukthya、次に Atirātra が［用いられるべきである］。これら世界を分けて保つために。

TS 7.1.5(6): Indra と Viṣṇu による 1000 番目の雌牛の奪い合い

trī́ṇitrīṇi śatā́ny anūcīnāhám ávyavachinnāni dadāti. // (7.1.5.5) eṣā́ṃ lokā́nām ánu sáṃtatyai. daśátaṃ ná víchindyād. "virā́jaṃ néd vichinádāni=" íty. átha, yā́ sahasratamy ā́sīt, tásyām índraś ca víṣṇuś ca vyā́yachetāṃ. sá índro ’manyata=, "anáyā vā́ idáṃ víṣṇuḥ sahásraṃ varkṣyata" íti. tásyām akalpetāṃ. dvíbhāga índras tṛ́tīye víṣṇus. tád vā́ eṣā́bhyánūcyata, "ubhā́ jigyathur" íti. tā́ṃ vā́ etā́m achāvākáḥ // (7.1.5.6) evá śaṁsaty.

彼は 300［頭ずつの雌牛］をつづいているそれぞれの日に途切れずに与える。これら諸世界が次々と一繋ぎであるために。彼は 10 という数（daśát-）を崩すべきではない[108]。「私は Virāj を崩さないように」と（考えて）。そして、1000 番目の［雌牛］であったものを求めて Indra と Viṣṇu が争った。その時 Indra は思った、「この［雌牛］によってここで Viṣṇu は 1000［頭の雌牛］を自分のものとしてもぎ取ってしまうだろう（fut.）」と。両者はその［雌牛］を共有した。Indra は［3 分の］2 を分け前にし、Viṣṇu は 3 分の 1 を分け前にした。そのことに関して例の［詩節］が暗唱されている、「お前たち 2 人は勝ち取った」[109]と。そのような例の［詩節を］他ならぬ Acchāvāka 祭官が（Śastra として）唱えるのだ。

TS 7.1.5(7): 残りものの 1000 番目の雌牛を残りものの祭官に与える

átha "yā́ sahasratamī́, sā́ hótre deyā́=" íti. hótāraṃ vā́ abhy átiricyate, yád atirícyate. hótā́nāptasyāpayitā́=. áthāhur, "unnetré déyā=" íty. átiriktā vā́ eṣā́ sahásrasya=. átirikta unnetártvíjām. áthāhuḥ, "sárvebhyaḥ sadasyèbhyo déyā=" íty. áthāhur, "udākṛ́tyā sā́ váśaṃ cared" íty. áthāhur, "brahmáṇe cāgnī́dhe ca déyā=" íti // (7.1.5.7) dvíbhāgam brahmáṇe tṛ́tīyam agnī́dha. aindró vái brahmā́. vaiṣṇavò ’gnī́d. "yáthaivá tā́v ákalpetām" íty. áthāhur, "yā́ kalyāṇī́ bahurūpā́, sā́ déyā=" íty. áthāhur, "yā́ dvirūpóbhayátaenī, sā́ déyā=" íti. sahásrasya párigṛhītyai. tád vā́ etát sahásrasyā́yanaṃ. sahásraṁ stotrī́yāḥ. sahásraṃ dákṣiṇāḥ. sahásrasammitaḥ suvargó lokáḥ. suvargásya lokásyābhíjityai. //

次に、「1000 番目の［雌牛］であるもの、それは Hotar 祭官に与えられるべきである」と［言う］。残されるものは、Hotar 祭官に対して残されているのだ。Hotar 祭官は獲得されなかったものの獲得者（ánāptasyāpayitā́）である。また［人々は］言う、「Unnetar 祭官に与えられるべきである」と。この［雌牛］は 1000［頭の雌牛］の中の残りもの（余分なもの）である[110]。Unnetar 祭官は祭官の中の残りものである。また人々は言う、「Sadas［小屋］に属する祭官たち全員に与えられるべきであ

---

[108] つまり総数が Virāj（10 で割り切れること）であることを守るということ。この場合雌牛の総数について言っていると思われる。

[109] ubhā jigyathur na parā jayethe # RV.6.69.8a; AVŚ.7.44.1a; TS.3.2.11.2a; 7.1.6.7a; MS.2.4.4a: 41.21; KS.12.14a; AB.6.15.6; JB.2.243a; GB.2.4.17; BŚ.16.26: 271.16a. P: ubhā jigyathuḥ TS.7.1.5.5; MS.4.12.5: 192.3; KS.23.11; Vait.25.2; ApŚ.19.27.19; 22.16.4; BŚ.13.42: 149.14; MŚ.9.4.1.20; Kauś.42.6. VC を参照した。

[110] 1000 番目の雌牛は、3 人で 1000 頭を分け合ったときに、どうしても余ってしまう余分な 1 頭であることが意図されている。

る」と。また人々は言う、「その［雌牛］は追い払われて、好きなように動き回るべきである」と。また［人々は］言う、「Brahman 祭官と Agnīdh 祭官に与えられるべきである」と。3 分の 2 は Brahman 祭官に、3 分の 1 は Agnīdh 祭官に。Brahman 祭官は Indra に関係し、Agnīdh 祭官は Viṣṇu に関係するから。「まさにその両者（Indra と Viṣṇu）が同意したように」と（考えて）。また［人々は］言う、「美しく多くの色をもつような［雌牛］が与えられるべきである」と。また［人々は］言う、「2 つの色をもち、両側にまだらのあるような［雌牛］が与えられるべきである」と。1000［の雌牛］を得るために。そのようなこれが 1000［の雌牛］の歩みである。Stotra に使う［詩節］は 1000 である。報酬（Dakṣiṇā）は 1000［頭の雌牛］である。天界は 1000［頭の雌牛］と等しい。天界を勝ち取るために。

TS 7.1.6: Trirātra (2)

TS 7.1.6(1): Soma、Indra、Yama による 1000 頭の雌牛の分け合い：導入

(7.1.6.1) sómo vái sahásram avindat. tám índró ’nv avindat. táu yamó nyā́gachat. tā́v abravīd, "ástu mé ’trā́pi=" íty. "ástu hī́3" íty abrūtāṃ. sá yamá ékasyāṃ vīryàm páryapaśyad. "iyáṃ vā́ asyá sahásrasya vīryàm bibharti=" íti tā́v abravīd. "iyám mámā́stv etád yuváyor" íti tā́v abrūtāṃ. "sárve vā́ etád etásyāṃ vīryàm. // (7.1.6.2) páripaśyāmó. ’ṁśam ā́harāmahā" íti tásyām áṁśam ā́haranta.

Soma は 1000［頭の雌牛］を見つけた（入手した）のだ。彼の後に Indra が見つけた（入手した）。その 2 人の方へ Yama は降りてきた。その 2 人に言った。「ここで私の［分け前も］あるべきだ」と。「実にそうだ」と 2 人は言った。Yama は一頭の中に英雄的な力を認めた。「この［雌牛］はこの 1000 の［雌牛に相当するほどの］英雄的な力を持っているのだ」と。その 2 人に言った。「この［雌牛］は私のものであれ、その［1000 頭の雌牛］はお前たち 2 人のものであれ」と。その 2 人は言った。「私たち全員がこのようにこの一頭に英雄的な力を認めている。分け前を取り合おう」と。彼らはその［雌牛］を巡って分け前を取り合った。

TS 7.1.6(2): Soma と赤茶色の 1 歳の雌牛

tā́m apsú prā́veśayaṁ. "sómāyodéhi=" íti. sā́ róhiṇī piṅgaláikahāyanī rūpáṃ kr̥tvā́ tráyastriṁśatā ca tribhíś ca śatáiḥ sahódáit. tásmād róhiṇyā piṅgaláyáikahāyanyā sómaṃ krīṇīyād. yá evā́ṃ vidvā́n róhiṇyā piṅgaláyáikahāyanyā sómaṃ krīṇā́ti, tráyastriṁśatā caivā́sya tribhíś ca. // (7.1.6.3) śatáiḥ sómaḥ krītó bhavati. súkrītena yajate.

彼らはその［雌牛］を水の中に入らせた。「Soma のために出てこい」と。その［雌牛］は、赤茶色の 1 歳の雌牛として姿を現し、333［頭の雌牛］と共に出てきた。それゆえ赤茶色の 1 歳の［雌牛］を使って Soma を買うべきである。このように知って赤茶色の 1 歳の［雌牛］を使って Soma を買う者は、333［の雌牛］を使って［買っていることになる］。彼によって Soma が買われていることになる。［祭主は］よく（＝良い値段で）買われた［Soma］を使って祭っていることになる。

TS 7.1.6(3): Indra と赤色の吉兆のある 4 歳の Vr̥tra 殺しに属する雌牛

tā́m apsú prā́veśayann. "índrāyodéhi=" íti. sā́ róhiṇī lakṣmaṇā́ paṣṭhauhī́ vā́rtraghnī rūpáṃ kr̥tvā́ tráyastriṁśatā ca tribhíś ca śatáiḥ sahódáit. tásmād róhiṇīṃ lakṣmaṇā́m paṣṭhauhī́ṃ vā́rtraghnī́ṃ dadyād. yá evā́ṃ vidvā́n róhiṇīṃ lakṣmaṇā́m paṣṭhauhī́ṃ vā́rtraghnīṃ dádāti, tráyastriṁśac caivā́sya trī́ṇi ca śatā́ni. sā́ dattā́ // (7.1.6.4) bhavati.

彼らはその［雌牛］を水に入らせた。「Indra のために出てこい」と。その［雌牛］は、赤色の、吉兆のある、4 歳の、Vr̥tra 殺し（Indra）に属する［雌牛］として姿を現し、333［の雌牛］と共に出てきた。それゆえ赤色の、吉兆のある、4 歳の、Vr̥tra 殺しに属する［雌牛］を与えるべきである。このように知って赤色の、吉兆のある、4 歳の、Vr̥tra 殺しに属する［雌牛］を与える者は、333［の雌牛］として。その［雌牛］が与えられることになる。

TS 7.1.6(4): Yama と年老いた愚かなその中で最低の雌牛、Anustaraṇī 牛

tā́m apsú prā́veśayan. "yamā́yodéhi=" íti. sā́ járatī mūrkhā́ tajjaghanyā́ rūpáṃ kr̥tvā́ tráyastriṁśatā ca tribhíś ca śatáiḥ sahódáit. tásmāj járatīm mūrkhā́ṃ tajjaghanyā́m anustáraṇīṃ kurvīta. yá evā́ṃ vidvā́ñ járatī́m mūrkhā́ṃ tajjaghanyā́m anustáraṇīṃ kuruté, tráyastriṁśac caivā́sya trī́ṇi ca śatā́ni sā́múṣmiṃ loké bhavati.

彼らはその［雌牛］を水に入らせた。「Yama のために出てこい」と。その［雌牛］は、年老いた、愚かな、その中で最低の［雌牛］として姿を現し、333［の雌牛］と共に出てきた。それゆえ年老いた、愚かな、その中で最低の［雌牛］を Anustaraṇī とするべきである。このように知って年老いた、愚かな、その中で最低の［雌牛］を Anustaraṇī とする者のためにその［雌牛］があの世界で 333［の雌牛］となることになる。

TS 7.1.6(5): 1000 番目の雌牛は Vāc である

vā́g evá sahasratamī́. tásmāt // (7.1.6.5) váro déyaḥ. sā́ hí váraḥ. sahásram asya. sā́ dattā́ bhavati. tásmād váro ná pratigŕ̥hyaḥ. sā́ hí váraḥ. sahásram asya prátigr̥hītam bhavati=. "iyáṃ vára" íti brūyād.

1000 番目の［雌牛］は他ならぬ Vāc である。それゆえ望みの物が与えられるべきである。その［雌牛］は望みの物であるから。1000［頭の雌牛］として彼によってその［雌牛］は与えられたことになる。それゆえ望みの物は受け取られるべきでない。その［雌牛］は望みの物であるから。1000［頭の雌牛］が彼によって受け取られたことになる[111]。「この［雌牛］が望みの物である」と言うべきである。

TS 7.1.6(6): 望みの雌牛は美しくあるべきである

áthānyā́m brūyād, "iyám máma=" íti. táthāsya tát sahásram ápratigr̥hītam bhavaty. ubhayataenī́ syāt. tád āhur, "anyataenī́ syāt. sahásram parástād étam" íti. yáivá váraḥ // (7.1.6.6) kalyāṇī́ rūpásamr̥ddhā, sā́ syāt. sā́ hí váraḥ. sámr̥ddhyai.

また他の［雌牛］について言うべきである。「この［雌牛］は私のものである」と。そのように［言うことによって］その 1000［頭の雌牛］は彼によって受け取られなかったものとなる。［その雌牛は］両側にまだらのある［雌牛］であるべきである。それについて［人々は］言う。「［その雌牛は］片側だけまだらのある［雌牛］であるべきである。1000［頭の雌牛］は逆側にまだらがあるべきである」と。望みの物である［雌牛］は美しく、完全に合致したものであるべきである。というのもその雌牛が望みの物だから。完全に合致するために。

[111] 1000 頭の雌牛は受け取るにはもらいすぎるほど多いので受け取るべきではないということが含意されているか。

TS 7.1.6(7): 雌牛を Agnīdh 祭官の場所の北に連れて、Āhavanīya 祭火のそばで木桶をかがせる

tā́m úttareṇā́gnīdhram paryāṇī́yāhavanī́yasyā́nte droṇakalaśám ávaghrāpayed. "ā́ jighra kaláśam mahy urúdhārā páyasvaty. ā́ tvā viśantv índavaḥ samudrám iva síndhavaḥ. sā́ mā sahásra ā́ bhaja prajáyā paśúbhiḥ sahá. púnar mā́ viśatād rayír" íti. prajáyaiváinam paśúbhī rayyā́ sám // (7.1.6.7) ardhayati. prajā́vān paśumā́n rayimā́n bhavati, yá evā́m véda.

その［雌牛］を Agnīdh 祭官の場所の北に引き摺り回して、Āhavanīya 祭火のそばで木桶を嗅がせるべきである[112]。「桶を嗅げ、偉大で、幅広く［乳汁を］流れ出す、豊富な乳汁をもつ［雌牛］よ。滴たちがお前に入れ、河川たちが海に［入る］ように。そのようなお前は私に 1000 の中に分け前を預からせよ、子孫と家畜たちと共に。富が再び私に入って来い」[113]と［唱える］。彼を子孫、家畜たち、富と融合させることになる。このように知っている者は子孫に富み、家畜に富み、富に富む者になる。

TS 7.1.6(8): 雌牛が東で西向きに立っている間に献供する

táyā sahā́gnīdhram parétya purástāt pratī́cyāṃ tíṣṭhantyāṃ juhuyād, "ubhā́ jigyathur ná párā jayethe ná párā jigye kataráś canáinoḥ / índraś ca viṣṇo yád ápaspṛ́dhethāṃ tredhā́ sahásraṃ ví tád airayethām" íti. tredhāvibhaktáṃ vái trirātré sahásraṃ. sāhasrī́m eváināṃ karoti. sahásrasyaiváināṃ mā́trāṃ // (7.1.6.8) karoti. rūpā́ṇi juhoti. rūpáir eváināṁ sámardhayati.

その［雌牛］と共に Agnīdh 祭官の場所を過ぎた後、［その雌牛が］東で西向きに立っている間に、献供すべきである。「お前たち 2 人は打ち勝った、お前たち 2 人は負けていない、お前たち 2 人のうちどちらも負けなかった、Indra と Viṣṇu よ、お前たち 2 人が競争した時、お前たちはその 1000 を 3 つに分割した」[114]と［唱える］。Trirātra において 1000 は 3 つに分けられた。当該の［雌牛］を 1000 に関するものにすることになる。当該の［雌牛］を 1000 と同等のものにすることになる。形（rūpá-）たちを献供する。形たちと当該の［雌牛］を融合させることになる。

TS 7.1.6(9): 雌牛の名前を雌牛の耳に囁く

tásyā upotthā́ya kárṇam ā́japed. "íḍe, ránté, ’dite, sárasvati, príye, préyasi, máhi, víśruty. etā́ni te aghniye nā́māni. sukṛ́tam mā devéṣu brūtād" íti devébhya eváinam ā́vedayaty. ánv enaṃ devā́ budhyante.

立ち上がってその雌牛の耳に囁くべきである。Iḍā よ、Ranti よ、Aditi よ、Sarasvatī よ、Priyā よ、Preyasī よ、Mahī よ、Viśrutī よ。殺されるべきでない［雌牛］（aghnyā́-）[115]よ、これらがお前の名前である。お前は私のことを善行者であると

---

[112] Dakṣiṇā のための牛は祭場の中を連れ回される。雌牛の状態がよいことを示すためか。

[113] ā jighra kalaśaṃ mahi VS.8.42a; TS.7.1.6.6a; BŚ.16.26: 271.10a; MŚ.9.4.1.27a. PS: ā jighra kalaśam ŚB.4.5.8.6; ApŚ.22.16.1; ā jighra KŚ.13.4.18. VC を参照。

[114] indraś ca viṣṇo yad apaspṛ́dhethām RV.6.69.8c; AVŚ.7.44.1c; TS.3.2.11.2c; 7.1.6.7c; MS.2.4.4c: 42.1; KS.12.14c; AB.6.15.10; JB.2.243c; BŚ.16.26: 271.17c. VC を参照。índraś ca: índraś は nom. だが voc.として使われている。その現象の詳細については、Klein [1981] を参照せよ。

[115] aghnyā-（「殺されるべきでない［雌牛］」）について、Narten [1971: 120−134] (= [1995: 175−189]) は、「乳を吸う子牛を連れた雌牛」の意味で解釈している。しかし、後藤（大島、

神々のところで話してくれ」と。神々に当該の者（祭主）のことを知らせていることになる。神々は彼のことに気がつく。

TS 7.1.7: Trirātra (3)

TS 7.1.7(1): 1000 番目の雌牛は祭主を天界に行かせる

(7.1.7.1) sahasratamyā̀ vái yájamānaḥ suvargáṃ lokám eti. sáinaṁ suvargáṃ lokáṃ gamayati. "sā́ mā suvargáṃ lokáṃ gamaya=" íty āha. suvargám eváinaṃ lokáṃ gamayati. "sā́ mā jyótiṣmantaṃ lokáṃ gamaya=" íty āha. jyótiṣmantam eváinaṃ lokáṃ gamayati. "sā́ mā sárvān púṇyāṁ lokā́n gamaya=" íty āha. sárvān eváinam púṇyāṁ lokā́n gamayati. "sā́ // (7.1.7.2) mā pratiṣṭhā́ṃ gamaya prajáyā paśúbhiḥ sahá púnar mā́ viśatād rayír íti. prajáyaiváinam paśúbhī rayyā́m práti ṣṭhāpayati. prajā́vān paśumā́n rayimā́n bhavati, yá evā́ṃ véda.

1000 番目の［雌牛］によって祭主は天上の世界へ行く。その雌牛は彼を天上の世界へ行かせる。「その［雌牛である］お前は私を天上の世界へ行かせよ」と［祭主は］言う。［その雌牛は］彼を天上の世界へ行かせることになる。「その［雌牛である］お前は私を光ある世界に行かせよ」と言う。［その雌牛は］彼を光ある世界へ行かせることになる。「その［雌牛である］お前は私を全ての徳ある世界へ行かせよ」と［人は］言う。［その雌牛は］彼を全ての徳ある世界へ行かせることになる。「その［雌牛である］お前は私を安定したところへ行かせよ、子孫と家畜たちと共に、再び私に富が入れ」と。［その雌牛は］彼を子孫、家畜たちによって富の上に安定させることになる。このように知っている者は子孫に富み、家畜に富み、富に富む者となる。

TS 7.1.7(2): 1000 番目の雌牛を祭官に与える[116]

tā́m agnī́dhe vā brahmáṇe vā hótre vodgātré vādhvaryáve vā dadyāt. sahásram asya sā́ dattā́ bhavati. sahásram asya prátigr̥hītam bhavati, yás tā́m ávidvān // (7.1.7.3) pratigr̥hṇā́ti, tā́m prátigr̥hṇīyād. "ékāsi ná sahásram. ékāṃ tvā bhūtā́m prátigr̥hṇāmi ná sahásram. ékā mā bhūtā́ viśa mā́ sahásram" íty. ékām eváinām bhūtā́m prátigr̥hṇāti, ná sahásraṃ, yá evā́ṃ véda. "syonā́si, suṣádā, suśévā. syonā́ mā́ viśa. suṣádā mā́ viśa. suśévā mā́ viśa" //(7.1.7.4) íty āha. syonáiváinaṁ suṣádā suśévā bhūtvā́ viśati. náinaṁ hinasti.

彼はその［雌牛］を Agnīdh に、あるいは Brahman に、あるいは Hotar に、あるいは Udgātar に、あるいは Adhvaryu に与えるべきである。1000［頭の雌牛］としてその［雌牛］は彼（祭主）によって（祭官に）与えられたことになる。その雌牛のことを知らずに受け取る者によって 1000［頭の雌牛］が受け取られたことになる。彼はその［雌牛］を受け取るべきである、「お前は 1 頭［の雌牛］である、1000 頭ではなく、お前を 1 頭であるものとして私は受け取る、1000 頭ではなくお前は 1 頭

西村、後藤 [2012: 11 n.8] ）は、雌牛と雄牛両方の語形を考慮して、「繁殖に重要な優良個体（Zuchtkuh, Zuchtstier）」の意味で解釈している。

[116] この文脈では、1 頭の雌牛を 1000 頭分の雌牛として与えることが話題になっている。祭主は、正しい知識を持たない祭官に対して 1 頭を 1000 頭分の雌牛として与えるが、正しい知識を持っている、この場合は唱えるべきマントラを知っている祭官には 1 頭を 1 頭分として与えることになる。

の［雌牛］として私に入れ、1000 頭としてでなく」と［言って］。このように知っている者は、その［雌牛］を 1 頭のものとして受け取る、1000 頭ではなく。「お前は Syonā（「柔和な」）、Suṣadā（「落ち着きのある」）、Suśevā（「愛着がある」）である。Syonā として私に入れ、Suṣadā として入れ、Suśevā として入れ」と唱える[117]。彼（祭主）に［その雌牛は］柔和で落ち着きがあり、愛着があるものとなって入り、彼（祭主）を傷つけない。

TS 7.1.7(3): 1000 番目の雌牛についての Brahmavādin たちの議論

brahmavādíno vadant, "sahásraṁ sahasratamy ánv etī̆3, sahasratamī́ṁ sahásrā̆3m" íti. yát prā̆cīm utsr̥jét, ṣahásraṁ sahasratamy ánviyāt. tát sahásram aprajñātráṃ. suvargáṃ lokáṃ ná prájānīyāt. pratī̆cīm útsr̥jati. tā̆ṁ sahásram ánu paryā̆vartate. sā̆ prajānatī̆ suvargáṃ lokám[118] eti. yájamānam abhy útsr̥jati. kṣipré sahásram prájāyata. uttamā̆ nīyáte prathamā̆ devā́n gachati. //

Brahman を議論する者たちは議論する。「1000 番目の雌牛が 1000 頭を追うのか？1000 頭が 1000 番目の雌牛を追うのか？」と。もし東へと放つなら、1000 頭を 1000 番目の雌牛が追うだろう。その 1000 頭は旗印を持たない。［その 1000 頭は］天上の世界へ［の道が］わからないだろう。西へと放つ。その雌牛を 1000 頭が追う。その雌牛は［天上の世界への道が］わかっている。天上の世界へ行く。祭主に向かって放つ。瞬時に 1000 頭が繁殖する。［その雌牛は］最後のものとして連れられ、最初のものとして神々のもとへ行く。

3.2.2 Ṣaḍrātra における Sārasvata Sattra

Ṣaḍrātra（TS 7.2.1）にはいわゆる Sārasvatasattra[119]と呼ばれる Sattra の記述がみられる。以下に本文を示す。Sārasvatasattra については、Einoo "Is the Sārasvatasattra the Vedic pilgrimage?"が詳しく論じている。

TS 7.2.1(4): Sārasvata-Sattra
sadohavirdhānína eténa ṣaḍrātréṇa yajerann. ā́śvatthī havirdhā́naṃ cā́gnīdhraṃ ca bhavatas. tád dhí suvargyáṃ. cakrī́vatī bhavataḥ. suvargásya lokásya sámaṣṭyā. ulū́khalabudhno yū́po bhavati. prátiṣṭhityai. prā́ñco yānti. prā́ṅ iva hí suvargáḥ // (7.2.1.4) lokáḥ. sárasvatyā yānty. eṣá vái devayā́naḥ pánthās. tám evā́nvā́rohanty. ākróśanto yānty. ávartim evā́nyásmin pratiṣájya pratiṣṭhā́ṃ gachanti. yadā́ dáśa śatáṃ kurvánty, átháikam utthā́naṃ. śatā́yuḥ púruṣaḥ śaténdriya. ā́yuṣy evéndriyé prátitiṣṭhanti. yadā́ śatáṁ sahásraṃ kurvánty, átháikam utthā́naṃ. sahásrasammito vā́ asáu lokò. ’múm evá lokám abhíjayanti. yadáiṣām pramī́yeta. yadā́ vā jī́yerann, átháikam utthā́naṃ. tád dhí tīrthám. //

---

[117] 新しい牛を群に入れると群が荒れるので、その群れを落ち着かせるためにこのような名前をつけることが意図されている。Cf. MS 2.3.3(1); KS 28.3 pratiṣṭhitān paśūn pracyāvayati「安定した家畜たちを動かしてしまう」

[118] 訂正した。Ed lokáṃ.

[119] Cf. PB 25.10−12; JB 2.297−299; ŚāṅkhŚS 13.29.1−26; ĀśvŚS 12.6.1−35; LāṭyŚS 10.15.1−18.9; DrāhŚS 31.1.1−3.10; MānŚS 9.5.4.1−25; BaudhŚS 16.29; ĀpŚS 23.12.4−13.10; HirŚS 18.4.21−46; KātyŚS 24.5.25−6.31.

Sadas と Havirdhāna[120]をもつ者たちは、この Ṣaḍrātra を使って祭るべきである。Havirdhāna と Agnīdh の場所の 2 つは Aśvattha（神聖な木）から作られる。というのもそれ（Agnīdh の場所）が天界に向かうものだから[121]。［その 2 つは］車輪を備える。天界へ完全に到達するために。臼を基礎とする（ulū́khalabudhno）[122]支柱が用いられる。しっかりと立つために。彼らは東へ（車で）行く。というのも東は天界のようであるから。川[123]に沿って（車で）行く[124]。この［川］が神々の通る道である。それを追って彼らは登っていることになる。騒ぎながら（戦車に）乗って行く[125]。不幸を他者にくっつけてから安定へと行っていることになる[126]。彼らが 10［頭］を 100［頭］にしたら、一度［この略奪行を］終了する。人は 100（年）の寿命、100 の Indra 力をもつ。寿命、Indra 力の上にしっかりと立っていることになる。彼らが 100［頭］を 1000［頭］にしたら、一度［この略奪行を］終了する。かの世界は 1000 と同等である。あの世界を勝ち取っていることになる。これらのうちの 1 人が衰弱死したら、あるいは略奪されたら、一度［この略奪行を］終了する。というのもそれが過渡期（略奪行の潮時）であるから。

3.2.3 Devasattra

TS には Devasattra（「神々の Sattra」）と呼ばれるものが 3 つある。

TS 7.2.1(2): Ṣaḍrātra は神々の Sattra である

devasattrā́m vái ṣaḍrātrā́ḥ. pratyákṣaṁ hy ètā́ni pr̥ṣṭhā́ni. yá evā́m vidvā́ṁsaḥ ṣaḍrātrám ā́sate, sākṣā́d evá devátā abhyā́rohanti.

Ṣaḍrātra は神々の Sattra なのだ。見るからに（pratyákṣam）例の Pr̥ṣṭha たちが［用

---

[120] 圧搾されるための Soma 草が載せられた荷車のことを指す。

[121] 笠松 [2011] 参照。

[122] ulū́khala-はすり鉢、músala-はすりこぎである。

[123] Sarasvatī という特定の河川を指すのではなく、TS 編纂当時には川一般のことを指していたかもしれない。Ṛgveda の時代（紀元前 1200 頃）は川が干上がるところに沿って移動していたと考えられている。後藤・山田・永ノ尾 [2009] 参照。

[124] Sārasvata-Sattra の伝説。Sarasvatī 川はインドアーリア人にとっての故郷であり、そこへ行くことが聖地巡礼の始まりであったと考えられていたが、Einoo によれば、聖地巡礼とは関連しない。Sārasvata-Sattra は家畜（特に雌牛）を連れて、1000 頭に増えるまで一年間 Sarasvatī へ行くことを意味していたとされる（後藤・山田・永ノ尾 [2009] 参照）。しかし、１年間で牛を 10 頭を 100 頭に、100 頭を 1000 頭にすることは、普通の飼育によっては不可能であろう。したがって、この文脈では略奪行あるいは野良牛の確保を指していると考えるのが妥当である。

[125] 他人の土地に行くので、威嚇の意味で騒ぐということが含意されているか。後藤・山田・永ノ尾 [2009] 参照。

[126] 「不幸を他者にくっつけてから安定へと行く」という記述は、当時あるいはより古い時代にインドアーリア人による家畜の略奪があったことを示唆している。後藤・山田・永ノ尾 [2009] 参照。

いられている］から。このように Ṣaḍrātra を正しく行う者たちは明らかに神々に昇っていることになる。

TS 7.4.5(1): Dvādaśāha と Trayastriṃśadaha は神々の Sattra である

dvé vā́vá devasattré, dvādaśāháś ca trayastriṁśadaháś ca. yá evā́m vidvā́ṁsas trayastriṁśadahám ā́sate, sākṣā́d evá devátā abhyā́rohanti. yáthā khálu vái śréyān abhyā́rūḍhaḥ kāmáyate, táthā karoti. yády avavídhyati, pā́pīyān bhavati. yádi nā́vavídhyati, sadṛ́ṅ. yá evā́m vidvā́ṁsas trayastriṁśadahám ā́sate, ví pāpmánā bhrā́tṛvyeṇā́ vartante. ’harbhā́jo vā́ etā́ devā́ ágra ā́harann. áhar ékó ’bhajatā́har ékas. tā́bhir vái té prabā́hug ā́rdhnuvan. yá evā́m vidvā́ṁsas trayastriṁśadahám ā́sate, sárva evá prabā́hug ṛdhnuvanti. sárve grā́maṇīyam prā́pnuvanti.

神々の Sattra は 2 つある。Dvādaśāha と Trayastriṃśadaha である。このように知って Trayastriṃśadaha を座る者たちは、明らかに神格たちに向かって登っていることになる。実際に、より栄光ある者として［神格たちに］向かって登った者のように、そのようにする。もし彼がぐらつき落ちる なら彼はより悪くなる。もし彼がぐらつき落ちないなら、（より栄光ある者と）同じになる。このように知って Trayastriṃśadaha を座る者たちは悪、敵対者から区別される。日を分け前として持つ 神々は太初においてこの［夜］たちを取ってきた。1 柱 1 柱［の神］が 1 日 1 日を分け前として受け取った。それら（夜）によって彼らは平等に成功した。このように知って Trayastriṃśadaha を座る者たちは全員平等に成功していることになる。全員が村のリーダーになる。

Ṣaḍrātra、Dvādaśāha、Trayastriṃśāha が神々の Sattra と呼ばれる理由について考察する。これら 3 つは古くから重要な要素として Sattra に組み込まれていた可能性がある。TS における Sattra の名称は基本的に-rātra-で終わるものがほとんであるが、Dvādaśāha と Trayastriṃśāha だけは-aha-で終わるものである。-aha-で終わる Sattra は、おそらく古くから用いられてきた Sattra の名称であり、-rātra-は TS が採用した名称であると思われる。

3.2.4 Dvādaśarātra における Graha 汲みの順序

Dvādaśarātra において、12 日間ではなく 10 日間が Graha を汲む行為に使われることが述べられている。そして、この 10 日間は、3 日 1 組×3=9 日間と 10 日目という構造が意図されている。

KS の Ekādaśinī（KS 34.1）において、11 頭の犠牲動物が 11 日の間に 1 日 1 頭ずつささげられることが述べられているが、ここでも 10 日の間に 1 日 1 Graha 汲みをするということが述べられており、共通点がある。

TS 7.2.8: Dvādaśarātra（Graha の順序）（≈KS 30.2; KpS 45.5）

TS 7.2.8(1): 10 日間で使われる Graha の種類と順序（1≈9 日目）

(7.2.8.1) gāyatró vā́ aindravāyavó. gāyatrám prāyaṇī́yam áhas. tásmāt prāyaṇī́yé ’hann aindravāyavó gṛhyate. svá eváinam āyátane gṛhṇāti. tráiṣṭubho vái śukrás. tráiṣṭubham dvitī́yam áhas. tásmād dvitī́yé ’hañ chukró gṛhyate. svá eváinam āyátane gṛhṇāti. jā́gato vā́

āgrayaṇó. jā́gataṃ tr̥tī́yam áhas. tásmāt tr̥tī́yé ’hann āgrayaṇó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāty. etád vái // (7.2.8.2) yajñám āpad, yác chándāṁsy āpnóti. yád āgrayaṇáḥ śvó gr̥hyáte, yátraivá yajñám ádr̥śan. táta eváinam púnaḥ práyuṅkte. jáganmukho vái dvitī́yas trirātró. jā́gata āgrayaṇó. yác caturthe ’hann āgrayaṇó gr̥hyáte, svá eváinam āyátane gr̥hṇāty. átho, svám evá chándó ’nu paryā́vartante. rā́thaṃtaro vā́ aindravāyavó, rā́thaṃtaram pañcamám áhas. tásmāt pañcamé ’han // (7.2.8.3) aindravāyavó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāti. bā́rhato vái śukró, bā́rhataṁ ṣaṣṭhám áhas. tásmāt ṣaṣṭhé ’hañ chukró gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāty. etád vái dvitī́yaṃ yajñám āpad, yác chándāṁsy āpnóti. yác chukráḥ śvó gr̥hyáte, yátraivá yajñám ádr̥śan, táta eváinam púnaḥ práyuṅkte. triṣṭúṅmukho vái tr̥tī́yas trirātrás. tráiṣṭubhaḥ // (7.2.8.4) śukró. yát saptamé ’hañ chukró gr̥hyáte, svá eváinam āyátane gr̥hṇāty. átho, svám evá chándó ’nu paryā́vartante. vā́g vā́ āgrayaṇó. vā́g aṣṭamám áhas. tásmād aṣṭamé ’hann āgrayaṇó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāti. prāṇó vā́ aindravāyaváḥ, prāṇó navamám áhas. tásmān navamé ’hann aindravāyavó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāti.

Indra と Vāyu のための［杯］は Gāyatrī に属する。導入の日は Gāyatrī に属する。それゆえ、導入の日に Indra と Vāyu のための［杯］が手に取られる（あるいは汲まれる）。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。Śukra は Triṣṭubh に属する。2 日目は Triṣṭubh に属する。それゆえ、2 日目に Śukra が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。Āgrayaṇa は Jagatī に属する。3 日目は Jagatī に属する。それゆえ、3 日目に Āgrayaṇa が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。次のようにして彼は祭式に到達した、つまり韻律たちに到達するようにして。Āgrayaṇa が翌日手に取られる（あるいは汲まれる）ならば、彼らが祭式を見た場所、その場所で彼はそれを再び用いていることになる。2 番目の 3 夜は Jagatī で始まる。Āgrayaṇa は Jagatī に属する。4 日目に Āgrayaṇa が手に取られるならば、自分の拠点でそれを手に取っていることになる。そしてまた彼らは自分の韻律の周りを回っていることになる。Indra と Vāyu の［杯］は Rathaṃtara に関係している。5 日目は Rathaṃtara に関係している。それゆえ 5 日目に Indra と Vāyu の［杯］が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。Śukra は Bṛhat に関係している。6 日目は Bṛhat に関係している。それゆえ 6 日目に Śukra が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。韻律たちに到達する仕方で 2 つ目の祭式に到達した。Śukra が翌日手に取られるならば、彼らが祭式を見た場所でそれを再び用いていることになる。3 番目の 3 夜は Triṣṭubh で始まる。Śukra は Triṣṭubh に関係している。7 日目に Śukra が手に取られるならば、自分の拠点でそれを手に取っていることになる。そしてまた自分の韻律の周りを回っていることになる。Āgrayaṇa はことばである。8 日目はことばである。それゆえ 8 日目に Āgrayaṇa が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。Indra と Vāyu の［杯］は呼息である。9 日目は呼息である。それゆえ 9 日目に Indra と Vāyu の［杯］が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。

TS 7.2.8(2): 10 日間で使われる Graha の種類と順序（10 日目）

etát // (7.2.8.5) vái tritī́yaṃ yajñám āpad, yác chándāṁsy āpnoti. yád aindravāyaváḥ śvó gr̥hyáte, yátraivá yajñám ádr̥śan, táta eváinam púnaḥ práyuṅkté. ’tho svám evá chándó ’nu paryā́vartante. pathó vā́ eté ’dhy ápathena yanti, yè ’nyénaindravāyavā́t pratipádyanté. ’ntaḥ khálu vā́ eṣá yajñásya, yád daśamám áhar. daśamé ’hann aindravāyavó gr̥hyate. yajñásya // (7.2.8.6) evā́ntaṃ gatvā́pathāt pánthām ápiyanty. átho, yáthā váhīyasā pratisā́raṃ váhanti, tādr̥g evá tát. chándāṁsy anyò’nyasya lokám abhyàdhyāyan. tā́ny eténaivá devā́

vyàvāhayann.

彼は例のようにして 3 番目の祭式に到達した（aor.）、つまり韻律たちに到達するようにして。Indra と Vāyu の［杯］が翌日に手に取られるならば、彼らが祭式を見たとき、それからそれを再び用いていることになる。そしてまたその韻律自身（同じ韻律）に続いて次の一周を行うことになる。Indra と Vāyu 以外の［杯］で開始する者たちというのは道から離れて道無き道を通って進んでいく。例のものは祭式の果てである、つまり 10 日目は。10 日目に Indra と Vāyu の［杯］が手に取られる。彼らは祭式の終わりに達してから、道のないところから道の中に進んでいくことになる。そしてまた、彼らがよりよく運ぶ［牛］を使って、［ある場所から別の場所へ］移動しつつ運ぶように、それはまさにそのようになっている。韻律たちは互いが互いの世界に向かって寄っていった。それら（韻律たち）を他ならぬ例のもの（10 日目）によって神々は互いに結婚させた。

TS 7.2.8(3): 3 日間ごとの最初と最後の日の Graha を同じ Graha にする

aindravāyavásya vā́ etád āyátanaṃ, yác caturthám áhas. tásminn āgrayaṇó gr̥hyate. tásmād āgrayaṇásyāyátane navamé ’hann aindravāyavó gr̥hyate. śukrásya vā́ etád āyátanaṃ, yát pañcamám // (7.2.8.7) áhas. tásminn aindravāyavó gr̥hyate. tásmād aindravāyavásyāyátane saptamé ’hañ chukró gr̥hyata. āgrayaṇásya vā́ etád āyátanaṃ, yát ṣaṣṭhám áhas. tásmiñ chukró gr̥hyate. tásmāc chukrásyāyátane ’ṣṭamé ’hann āgrayaṇó gr̥hyate. chándāṁsy evá tád vívāhayati. prá vásyaso vivāhám āpnoti, yá evā́ṃ véda=. átho, devátābhya evá yajñé saṃvídaṃ dadhāti. tásmād idám anyò’nyásmai dadhāti. //

4 日目とは Indra と Vāyu の［杯］の拠点である。そこで Āgrayaṇa の［Graha］は汲まれる。それゆえ Āgrayaṇa の拠点である 9 日目に Indra と Vāyu の［Graha］が汲まれる。5 日目とは Śukra の拠点である。そこで Indra と Vāyu の［Graha］が汲まれる。それゆえ Indra と Vāyu の［Graha］の拠点である 7 日目に Śukra の［Graha］が汲まれる。6 日目とは Āgrayaṇa の拠点である。そこで Śukra の［Graha］が汲まれる。それゆえ Śukra の拠点である 8 日目に Āgrayaṇa の［Graha］が汲まれる。そうして韻律たちを結婚させていることになる。このように知っている者はよりよい者との結婚へ到る。そしてまた神々のために祭式に共有物を置いていることになる。それゆえこれを互いが互いのために置いている。

3.2.5 食事制限の意味での Mahāvrata

TS において、1 年 Sattra の最後に記述される Mahāvrata 祭とは別の個所で、Mahāvrata が用いられる。これらの Mahāvrata は 1 年 Sattra の Mahāvrata 祭とは異なるものであると考えられる。いずれの箇所にも共通して「食べ物を得るために」という文言があるため、おそらくは、食べ物に関する Vrata を行う、つまり、食事の制限あるいは断食を行うということが言われているのではないかと推測される。

TS 7.1.10(5): Pañcarātra の基本構造

pañcarātró bhavati. páñca vā́ ṛtávaḥ saṃvatsará. // (7.1.10.4) ṛtúṣv evá samvatsaré prátitiṣṭhaty. átho páñcākṣarā paṅktíḥ. pā́ṅkto yajñó. yajñám evā́varunddhe. trivŕ̥d

agniṣṭomó bhavati. téja evā́varunddhe. pañcadaśó bhavati=. indriyám evā́varunddhe. saptadaśó bhavati. annā́dyasyā́varuddhyai. átho, práivá téna jāyate. pañcaviṁśò ’gniṣṭomó bhavati. prajā́pater ā́ptyai. mahāvratávān annā́dyasyā́varuddhyai. viśvajít sárvapṛṣṭho ’tirātró bhavati. sárvasyābhíjityai. //

Pañcarātra が用いられる。一年は 5 つの季節たちである。季節たちに、つまり一年にしっかり立っていることになる。また Paṅkti は 5 音節からなる。祭式は 5 つからなる。彼は祭式を得ていることになる。Trivṛt[-Stoma] (9) が Agniṣṭoma として用いられる。彼は光を得ていることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15) が用いられる。彼は Indra 力を得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17) が用いられる。食べ物を得るために。またそれによって彼は繁殖していることになる。Pañcaviṃśa[-Stoma] をもつ Agniṣṭoma が用いられる。Prajāpati に達するために。［Pañcarātra は］Mahāvrata（特別なヴラタ）を伴っている。食べ物を得るために。Viśvajit［-Stoma を用いる日］として全ての Pṛṣṭha[-Sāman] をもつ Atirātra が用いられる。全てを得るために。

TS 7.2.2(2): Saptarātra の基本構造

saptarātró bhavati. saptá grāmyā́ḥ paśávaḥ, saptā́raṇyā́ḥ, saptá chándāṁsy. ubháyasyā́varuddhyai. trivṛ́d agniṣṭomó bhavati. téjaḥ // (7.2.2.2) evā́varunddhe. pañcadaśó bhavati=. indriyám evā́varunddhe. saptadaśó bhavaty. annā́dyasyā́varuddhyai. átho, práivá téna jāyata. ekaviṁśó bhavati. prátiṣṭhityā. átho, rúcam evā́tmán dhatte. triṇavó bhavati. víjityai. pañcaviṁśò ’gniṣṭomó bhavati. prajā́pater ā́ptyai. mahāvratávān. annā́dyasyā́varuddhyai. viśvajít sárvapṛṣṭho ’tirātró bhavati. sárvasyābhíjityai.

Saptarātra が行われる。村にいる家畜は 7［種類］、荒地にいる［家畜］は 7［種類］、韻律は 7［種類］ある。両方を得るために。Trivṛt[-Stoma] (9) が Agniṣṭoma として行われる。光を得ていることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15) が行われる。Indra 力を得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17) が行われる。食べ物を得るために。またそれによって彼は繁殖する。Ekaviṃśa[-Stoma] (17) が行われる。しっかりと立つために。また彼は輝きを自分に置く。Triṇava[-Stoma] (27) が行われる。勝ち取るために。Pañcaviṃśa［-Stoma］が Agniṣṭoma として行われる。Prajāpati に到達するために。［Saptarātra は］Mahāvrata をもつ。食べ物を得るために。全ての Pṛṣṭha を含む Viśvajit が Atirātra として行われる。全てを得るために。

TS 7.2.3(2): Aṣṭarātra の基本構造

aṣṭarātró bhavaty. aṣṭā́kṣarā gāyatrī́. gāyatrī́ brahmavarcasám. gāyatriyáivá brahmavarcasám ávarunddhe. aṣṭarātró bhavati. cátasro vái díśaś, cátasro ’vā́ntaradiśā́. digbhyá evá brahmavarcasám ávarunddhe. (7.2.3.2) trivṛ́d agniṣṭomó bhavati. téja evā́varunddhe. pañcadaśó bhavati=. indriyám evā́varunddhe. saptadaśó bhavati. annā́dyasyā́varuddhyā. átho, práivá téna jāyata. ekaviṁśó bhavati. prátiṣṭhityā. átho, rúcam evā́tmán dhatte. triṇavó bhavati. víjityai. trayastriṁśó bhavati. prátiṣṭhityai. pañcaviṁśò ’gniṣṭomó bhavati. prajā́pater ā́ptyai. mahāvratávān. annā́dyasyā́varuddhyai. viśvajít sárvapṛṣṭho ’tirātró bhavati. sárvasyābhíjityai.

Aṣṭarātra が行われる。Gāyatrī（24 音節の韻律）は［1 Pāda］8 音節からなる。Brahman の栄光は Gāyatrī である。彼は Gāyatrī を使って Brahman の栄光を得ている

ことになる。Aṣṭarātra が行われる。方位（東・南・西・北）は 4 つ、間の方位（南東・南西・北西・北東）は 4 つ。彼は方位たちを使って Brahman の栄光を得ていることになる。Trivṛt[-Stoma] (9) が Agniṣṭoma［の最初の Stoma（？）］として用いられる。彼は光を得ていることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15) が用いられる。彼は Indra 力を得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17) が用いられる。食べ物を得るために。また彼はそれによって繁殖していることになる。Ekaviṃśa[-Stoma] (21) が用いられる。しっかりと立つために。また彼は輝きを自分に置いていることになる。Triṇava[-Stoma] (27) が用いられる。勝ち取るために。Trayastriṃśa[-Stoma] (33) が用いられる。しっかりと立つために。Agniṣṭoma［の Stoma］として Pañcaviṃśa[-Stoma] (25) が用いられる。Prajāpati に達するために。［Aṣṭarātra は］Mahāvrata を含む。食べ物を得るために。Atirātra［の Stoma］として完全な Pṛṣṭha（最高潮）をもつ Viśvajit［-Stoma］が用いられる。全てを勝ち取るために。

3.2.6 1 年 Sattra

KS と同様に TS の 1 年 Sattra にも雌牛たちが Sattra を行うという神話があり、これがおそらく Gavāmayana という名称の元であると考えられる。しかし、KS と同様に、Śrautasūtra におけるように 1 年 Sattra 自体が Gavāmayana（「雌牛たちの進行」）と呼ばれる例はない。

TS 7.5.1(1): 雌牛たちの Sattra（≈KS 33.1）

(7.5.1.1–6) gā́vo vā́ etát sattrám āsatāśṛ̥ṅgā́ḥ satī́ḥ. "śṛ̥ṅgāṇi no jāyantā" íti kā́mena. tā́sāṃ dáśa mā́sā níṣaṇṇā āsann, átha śṛ̥ṅgāny ajāyanta. tā́ údatiṣṭhan. "árātsma=" íti. átha yā́sāṃ nā́jāyanta, tā́ḥ saṃvatsarám āptvódatiṣṭhan. "árātsma=" íti. yā́sāṃ cā́jāyanta, yā́sāṃ ca ná, tā́ ubháyīr údatiṣṭhann. "árātsma=" íti. gosattrám vái // saṃvatsaró. yá evā́ṃ vidvā́ṁsaḥ saṃvatsarám upayánty, ṛ̥dhnuvánty evá. tásmāt tūparā́ vā́rṣikau mā́sau pártvā carati. sattrā́bhijitaṁ hy àsyai. tásmāt saṃvatsarasádo, yát kíṃ ca gṛ̥hé kriyáte, tád āptám, ávaruddham, abhíjitaṃ kriyate.

雌牛たちはこの Sattra を行った、角がないから。「我々に角が生えますように」という望みを伴って。それら（雌牛）が 10 カ月間座り込んでいると、それらに角が生えた。それらは立ち上がった。「我々は（目的を）達成した」と考えて。それから、生えなかった雌牛たちは一年に達してから立ち上がった。「我々は達成した」と考えて。生えた雌牛たちも生えなかった雌牛たちも両方が立ち上がった。「我々は達成した」と考えて。一年は雌牛の Sattra なのだ 。このように知って一年間の［Sattra］を行う者たちは成功していることになる。それゆえ角がない［雌牛］は雨季の 2 カ月間を越してから 動く。というのもそれ（雌牛）にとって［角は］Sattra で勝ち取られたものであるから。それゆえ一年間座る者の［Sattra 用の］家でなされることはなんであれ（Sattra 行者によって）到達され、獲得され、勝ち取られたものとなされる。

TS 7.5.2: 雌牛たちの Sattra（≈KS 33.1）

(7.5.2.1–2) gā́vo vā́ etát sattrám āsatāśṛ̥ngā́ḥ satī́ḥ śṛ̥ngāṇi síṣāsantīs. tā́sāṃ dáśa mā́sā níṣaṇṇā āsann. átha śṛ̥ngāṇy ajāyanta. tā́ abruvan. "árātsma=. úttiṣṭhāma=. áva táṃ kā́mam arutsmahi, yéna kā́mena nyáṣadāma=" íti. tā́sām u tvā́ abruvann, ardhā́ vā yā́vatīr vā. "ā́samahā evémáu dvādaśáu mā́sau saṃvatsarā́m̐ sampā́dyóttiṣṭhāma=" íti. tā́sām // dvādaśé māsí śṛ̥ngāṇi prā́vartanta, śraddháyā vā́śraddhayā vā. tā́ imā́, yā́s tūparā́s. ubháyyo vā́vá tā́ ārdhnuvan, yā́ś ca śṛ̥ngāṇy ásanvan, yā́ś córjam avā́rundhata. ṛ̥dhnóti daśásu māsū́ttíṣṭhann, ṛ̥dhnóti dvādaśásu, yá evā́ṃ véda. padéna khálu vā́ eté yanti. vindáti khálu vái padéna yán. tád vā́ etád ṛ̥dhhám áyanam. tásmād etád gosáni. //

雌牛たちはこの Sattra を座った、角がないときに、角を欲しがりながら。それらは 10 カ月間座り込んだ。するとそれらに角が生えた。それらは言った。「我々は（ちょうど今）達成した。立ち上がろう、我々はそのために座り込んだ望みを（ちょうど今）得た」と。しかし、それらの半分かそれくらいが言った。「この 11 番目と 12 番目の月の間も座ろう。一年を完全に数えてから立ち上がろう」と。12 カ月目にそれらに角が生じた、信心によってか、信心以外によってか。角のない［雌牛］たちというのはこれらである。（12 カ月かけて）角を獲得した［雌牛］たちも（10 カ月で Sattra をやめて）栄養を得た［雌牛］たちも両方が成功したのだった。このように知っている者は 10 カ月で立ち上がって成功し、12 カ月で［立ち上がっても］成功する。実際にこれらは足を使って行っている。実際に足を使って行きつつある者は見出す。そのようなこれは成功した歩みである。それゆえこうした牛の獲得がある。

3.2.7 1 年 Sattra の開始時期と終了時期

TS の Sattra 章には、最後に 1 年 Sattra の記述がある。中でも、1 年 Sattra の開始と終了時期をどの月にすべきかという議論があることは興味深い。Weber [1860: 329; 352] は、Brāhmaṇa 文献においては Phālguna 月が一年の最初の月であることは明白であると述べている。一方で、Weber [1860: 329] は、後代の記述（例えば Āśvalāyana-Śrautasūtra 2.14 phālgunyām paurṇamāsyāṃ caitryāṃ vā.）において、一年の最初の月が Caitra 月に移り変わっていくことも述べている。ただし、TS 7.4.8 を見るとわかるように、TS でもすでに Phālguna 月と並んで Caitra 月が最初であることが述べられている。このことから、TS が編纂された時期にはすでにこのような移り変わりが生じていたことが示唆される。

TS 7.4.8: 一年 Sattra の開始と終了の時期について

(7.4.8.1) saṃvatsarā́ya dīkṣiṣyámāṇā ekāṣṭakā́yāṃ dīkṣerann. eṣā́ vái saṃvatsarásya pátnī, yád ekāṣṭakā́=. etásyāṃ vā́ eṣá etā́m̐ rā́triṃ vasati. sākṣā́d evá saṃvatsarám ārábhya dīkṣanta. ā́rtaṃ vā́ eté saṃvatsarásyābhídīkṣante, yá ekāṣṭakā́yāṃ dī́kṣanté. ’ntanāmānāv ṛ̥tū́ bhavato. vyàstaṃ vā́ eté saṃvatsarásyābhídīkṣante, yá ekāṣṭakā́yāṃ dī́kṣanté. ’ntanāmānāv ṛ̥tū́ bhavataḥ. phalgunīpūrṇamāsé dīkṣeran. múkhaṃ vā́ etát // (7.4.8.2) saṃvatsarásya, yát phalgunīpūrṇamāsó. mukhatá evá saṃvatsarám ārábhya dīkṣante. tásyáikaivá niryā́, yát sā́mmeghye viṣūvā́nt sampádyate. citrāpūrṇamāsé dīkṣeran. múkhaṃ vā́ etát saṃvatsarásya, yác citrāpūrṇamāsó. mukhatá evá saṃvatsarám ārábhya dīkṣante. tásya ná kā́ caná niryā́ bhavati. caturahé purástāt paurṇamāsyái dīkṣeran. téṣām ekāṣṭakā́yāṃ krayáḥ sámpadyate. ténáikāṣṭakā́m̐ ná chambáṭkurvanti. téṣām // (7.4.8.3) pūrvapakṣé sutyā́ sámpadyate.

pūrvapakṣám mā́sā abhí sámpadyante. té pūrvapakṣá úttiṣṭhanti. tā́n uttíṣṭhata óṣadhayo vánaspátayó ’nū́ttiṣṭhanti. tā́n kalyāṇī́ kīrtír ánū́ttiṣṭhaty. "árātsur imé yájamānā" íti. tád ánu sárve rādhnuvanti. //

一年のために潔斎しようとしている者たちは Ekāṣṭakā において潔斎すべきである。Ekāṣṭakā とは一年の妻なのだ。これ（Ekāṣṭakā）においてこれ（一年）はこの夜を過ごしているのだ。彼らは直接一年を獲得して潔斎していることになる。Ekāṣṭakā において潔斎している者たちは一年の困難に向かって潔斎しているのだ。「終わり」という名前の 2 つの季節がある。Ekāṣṭakā において潔斎している者たちは一年の細切れになったものに向かって潔斎しているのだ。「終わり（anta）」を含む名前をもつ 2 つの季節がある（Vasanta と Hemanta か）。Phalgunī の満月（昔の年初）において彼らは潔斎すべきである。Phalgunī の満月とは一年の最初なのだ。最初に一年を獲得して彼らは潔斎していることになる。それには曇りの季節に（sā́mmeghye）折り返し点が（viṣūvā́n）合致するという一つの不都合がある。Citrā の満月（TS の年初）において彼らは潔斎すべきである。Citrā の満月とは一年の最初なのだ。最初に一年を獲得して彼らは潔斎していることになる。それにはなんの不都合もない。満月の夜の 4 日前に潔斎すべきである。彼らにとって Ekāṣṭakā に［Soma の］売買［の日］が合致する。それによって彼らは Ekāṣṭakā を無駄にしない。彼らにとって前半月に Soma 搾りが合致する。前半月に対して月たちが合致する。彼らは前半月に［Sattra から］立ち上がる（Sattra を終了する）。立ち上がった彼らに続いて植物たち、林木たちが立ち上がる。それらに続いて美しい名声が立ち上がる。「（ちょうど今）この祭主たちは成功した」と。それに続いて全ての者が成功する。

3.2.8 Daśarātra

また、Daśarātra と呼ばれる Sattra の記述が 2 か所にある。1 つは、Navarātra と Ekādaśarātra の間に述べられるものである。これは、TS の Sattra 章の構造の中で、別々の日数で構成される個別的な Sattra の一つとして挙げられているものであり、1 年 Sattra との関わりは薄いと思われる。もう 1 つは、1 年 Sattra の最後で Mahāvrata の日の前の 10 日間として記述されている。後者の Daśarātra は Dvādaśāha の中に含まれるものとは直接述べられてはいないが、おそらくは本来 Dvādaśāha に含まれるものであっただろう。というのも、12 日間の中に 10 日間が含まれることが、Dvādaśarātra の中に 10 日間のことに関する記述があることからも推測することができるからである。

3.2.8.1 個別的な Daśarātra

TS 7.2.5: Daśarātra

TS 7.2.5(1): Daśarātra は繁殖、Prajāpati、Virāj に関する祭式である、Daśarātra のために潔斎するなら Daśahotar を献供すべし

(7.2.5.1) prajā́patir akāmayata, "prájāyeya=" íti. sá etáṃ dáśahotāram apaśyat. tám ajuhot.

téna daśarātrám asr̥jata. téna daśarātréṇa prā́jāyata. daśarātrā́ya dīkṣiṣyámāṇo dáśahotāraṃ juhuyād. dáśahotraivá daśarātrā́m̐ sr̥jate. téna daśarātréṇa prájāyate. vairājó vā́ eṣá yajñó, yád daśarātráḥ. // (7.2.5.2) yá evā́ṃ vidvā́n daśarātréṇa yájate, virā́jam evá gachati. // prājāpatyó vā́ eṣá yajñó, yád daśarātró. yá evā́ṃ vidvā́n daśarātréṇa yájate, práiva jāyate.

Prajāpati は望んだ、「私は繁殖したい」と。彼はこの Daśahotar[127]を見た。それを（Agni に）献供した。それによって Daśarātra を創った。その Daśarātra を使って繁殖した。Daśarātra のために潔斎しようと思う者は Daśahotar を献供すべきである。彼は Daśahotar によって Daśarātra を創り出していることになる。その Daśarātra によって繁殖する。Daśarātra とは Virāj（10 の倍数）に関する祭式である。このように知って Daśarātra を使って祭る者は Virāj に達する。Daśarātra とは Prajāpati に関する祭式である。このように知って Daśarātra を使って祭る者は繁殖する。

TS 7.2.5(2): Indra が Daśarātra によって他の神格たちから分け隔てられた神話

índro vái sadr̥ṅ devátābhir āsīt. sá ná vyāvr̥tam agachat. sá prajā́patim úpādhāvat. tásmā etáṃ daśarātrám prā́yachat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sò ’nyā́bhir devátābhir vyāvr̥tam agachad. yá evā́ṃ vidvā́n daśarātréṇa yájate, vyāvr̥tam evá pāpmánā bhrā́tr̥vyeṇa gachati.

Indra は神格たちと同じような者だったのだ。彼は［彼らと］分離された（格別の）［状態］に達していなかった。彼（Indra）は（助けを求めて）Prajāpati のもとまで走った。［Prajāpati は］彼にこの Daśarātra を授けた。彼（Indra）はそれを取ってきた。それを使って祭った。それから彼（Indra）は他の神格たちと分離された［状態］に達した。このように知って Daśarātra を使って祭る者は悪、敵対者と分離された［状態］に達していることになる。

TS 7.2.5(3): Daśarātra は Trikakud（3 つの峰をもつ）祭式である

trikakúd vái // (7.2.5.3) eṣá yajñó, yád daśarātráḥ. kakút pañcadaśáḥ. kakúd ekaviṁśáḥ. kakút trayastriṁśó. yá evā́ṃ vidvā́n daśarātréṇa yájate, trikakúd evá samānā́nām bhavati. yájamānaḥ pañcadaśó. yájamāna ekaviṁśó. yájamānas trayastriṁśáḥ. púra ítarā. abhicaryámāṇo daśarātréṇa yajeta. devapurā́ evá páryūhate. tásya ná kútaś canópāvyādhó bhavati. náinam abhicárant str̥ṇute.

Daśarātra とは 3 つの峰をもつ祭式である。Pañcadaśa[-Stoma] (15)は峰、Ekaviṃśa[-Stoma] (17)は峰、Trayastriṃśa[-Stoma] (33)は峰。このように知って Daśarātra を使って祭る者は、同類の者たちの中の 3 つの峰を持つ者となっていることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15)は祭主、Ekaviṃśa[-Stoma] (17)は祭主、Trayastriṃśa[-Stoma] (33)は祭主、他の［Stoma］たちは城壁。呪術をかけられている者は Daśarātra を使って祭るべきである。彼は神々の城壁を自分の周りに築いていることになり、彼にはどこからも突き崩すところがなくなる。呪術使いは彼を屈服させない。

TS 7.2.5(4): 神々が Daśarātra を城壁として Asura たちを退けた神話

devāsurā́ḥ sáṃyattā āsan. té devā́ etā́ḥ // (7.2.5.4) devapurā́ apaśyan, yád daśarātrás. tā́ḥ páryauhanta. téṣāṃ ná kútaś canópāvyādhò ’bhavat. táto devā́ ábhavan párāsurā. yó

[127] 森に行ってこっそり唱えるような秘匿性のある Mantra を指す。Amano [2019] を参照。これは Caturhotar に対応する祭式儀礼である。Caturhotar-では 4 名の祭官（Agnīdh、Adhvaryu、Hotar、Upavaktar）が言及される。

bhrā́tṛvyavānt syā́t, sá daśarātréṇa yajeta. devapurā́ evá páryūhate. tásya ná kútaś canópāvyādhó bhavati. bhávaty ātmánā, párāsya bhrā́tṛvyo bhavati. stóma[s] stómasyópastir bhavati. bhrā́tṛvyam evópastiṃ kurute.

神々と Asura たちが拮抗していた。神々はその例の神々の城壁を見た、すなわち Daśarātra であるところのものを。彼らはそれらの［城壁］を自分たちの周りに築いた。それらには全くどこからも突き崩すところがなくなった。それから神々は栄え、Asura たちは敗退した。敵対者をもつ者は Daśarātra を使って祭るべきである。彼は神々の城壁を自分の周りに築いていることになり、彼にはどこからも突き崩すところがなくなる。彼は栄え、彼の敵対者は敗退する。Stoma は Stoma の配下である。彼は敵対者を自分の配下にしていることになる。

TS 7.2.5(5): 詩節数の多い Stoma から詩節数の少ない Stoma へ行くことは Jāmi の原因

jāmí vā́ etát kurvanti, yáj jyā́yāṁsaṁ stómam upétya kánīyāṁsam upayánti. (7.2.5.5) yád agniṣṭomasāmā́ny avástāc ca parástāc ca bhávanty, ájāmitvāya.

彼らは、より大きい（詩節数の多い）Stoma を行った後、より小さい（詩節数の少ない）Stoma を行うことで、Jāmi を作っているのだ。Agniṣṭoma の Sāman たちがこちら側とあちら側にあるということは、Jāmi をなくすためである。

TS 7.2.5(6): Daśarātra の基本構造

trivṛ́d agniṣṭomò. ’gniṣṭúd āgneyī́ṣu bhavati. téja evā́varunddhe. pañcadaśá ukthyà aindrī́ṣv. indriyám evā́varunddhe. trivṛ́d agniṣṭomó vaiśvadevī́ṣu. púṣṭim evā́varunddhe. saptadaśò ’gniṣṭomáḥ prājāpatyā́su tīvrasomò. ’nnā́dyasyā́varuddhyā. átho, práivá téna jāyate. // (7.2.5.6) ekaviṁśá ukthyàḥ saurī́ṣu. prátiṣṭhiyā. átho, rúcam evā́tmán dhatte. saptadaśò ’gniṣṭomáḥ prājāpatyā́sūpahavyà. upahavám evá gachati. triṇavā́v agniṣṭomā́v abhíta aindrī́ṣu. víjityai. trayastriṁśá ukthyò vaiśvadevī́ṣu. prátiṣṭhityai. viśvajít sárvapṛṣṭho ’tirātró bhavati. sárvasyābhíjityai. //

Trivṛt[-Stoma] (9)をもつ Agniṣṭoma が、Agni への称讃として、Agni のための［詩節が唱えられる］ときに用いられる[128]。彼は鋭い輝きを得ていることになる。また、Pañcadaśa[-Stoma] (15)をもつ Ukthya が Indra のための［詩節が唱えられる］ときに用いられる。彼は Indra 力を得ていることになる。Trivṛt[-Stoma] (9)をもつ Agniṣṭoma が、一切神[129]に関する［詩節が唱えられる］ときに用いられる。彼は増大を得ていることになる。Agniṣṭoma としての Saptadaśa［-Stoma］(17)は、Prajāpati のための［詩節］が唱えられるとき、Tīvra-Soma（鋭い Soma）として用いられる[130]。食べ物を得るために役立ち、彼はそれによって繁殖していることになる。Ekaviṃśa［-Stoma］(21)は、Sūrya のための詩節が唱えられるとき、Ukthya として用いられる。しっかりと立つために役立ち、彼は輝きを自分に置いていることになる。Agniṣṭoma としての Saptadaśa［-Stoma］(17)は Prajāpati のための詩節が唱えられる

[128] stav + ṛc- (loc.) ：「ある ṛc に合わせてある Stotra を唱える」。

[129] Vaiśya の神格。MS 1.11.9.5

[130] tīvrasoma, -sut: ukthya 型の ekāha（1 日で終わる Soma 祭）の名前とされる．Soma 飲みに難儀する者に対して勧められる．Cf. Mylius [1995: 72].

とき Upahavya[131]として用いられる。彼は招待されていることになる。2 つの Agniṣṭoma として 2 つの Triṇava[-Stoma] (27)が、両側で(＝Śastra の前後で)Indra のための詩節が朗唱されるとき、用いられる。勝ち取るために。Trayastriṃśa[-Stoma] (33)は全ての神々に関する［讃歌］たちが［朗唱される］とき Ukthya と呼ばれる。しっかりと立つために。Viśvajit として全ての Pr̥ṣṭha をもつ Atirātra が使われる。全てを勝ち取るために。

3.2.8.2 1 年 Sattra の最後の儀礼としての Daśarātra

TS 7.5.4: Daśarātra (≈KS 33.8(7))

(7.5.4.1) samānyà ŕ̥co bhavanti. manuṣyalokó vā́ ŕ̥co. manuṣyalokā́d evá ná yanty. anyádanyat sā́ma bhavati. devalokó vái sā́ma. devalokā́d evā́nyámanyam manuṣyalokám pratyavaróhanto yanti. jágatīm ágra úpayanti. jágatīṃ vái chándāṁsi pratyávarohanty, āgrayaṇáṃ gráhā, bṛhát pr̥ṣṭhā́ni, trayastriṁśáṁ stómās. tásmāj jyā́yāṁsaṃ kánīyān pratyávarohati. vaiśvakarmaṇó gr̥hyate. víśvāny evá téna kármāṇi yájamānā ávarundhata. ādityáḥ // (7.5.4.2) gr̥hyata. iyáṃ vā́ áditir. asyā́m evá prátitiṣṭhanty. anyò'nyo gr̥hyete. mithunatvā́ya prájātyā. avāntaráṃ vái daśarātréṇa prajā́patiḥ prajā́ asr̥jata. yád daśarātró bhávati, prajā́ evá tád yájamānāḥ sr̥janta. etā́ṁ ha vā́ udaṅkáḥ śaulbāyanáḥ sattrásyárddhim uvāca, yád daśarātro. yád daśarātró bhávati, sattrásyárddhyai. átho, yád evá pū́rveṣv áhaḥsu víloma kriyáte, tásyaiváiṣā́ śā́ntiḥ. //

同じ詩節たちが用いられる。詩節たちは人間の世界なのだ。人間の世界から彼らは出ていかないことになる。別々の Sāman が用いられる。Sāman は神々の世界なのだ。神々の世界から別々の人間の世界へ彼らは降りて戻って行っていることになる。彼らは初めに Jagatī（12）を用いる。Jagatī に韻律たちは降りて戻っているのだ、Āgrayaṇa に杯たちが、Bṛhat に Pr̥ṣṭha たちが、Trayastriṃśa に Stoma たちが。それゆえより大きなものにより小さなものが降りて戻る。Viśvakarman の［杯］が汲まれる。全ての［祭式］行為をそれによって祭主たちは得ていることになる。Aditi の［杯］が汲まれる。Aditi はこの［大地］なのだ。この［大地］において彼らはしっかりと立っていることになる。別々の［杯］2 つが汲まれる。一対になるために、繁殖するために。内側で Daśarātra によって Prajāpati は生き物たちを創り出した。Daśarātra が用いられるとき、生き物たちをそうして祭主たちが創り出していることになる。Udaṅka Śaulbāyana は Daśarātra のことを Sattra の成功であると言っていた。Daśarātra が用いられるというのは、Sattra の成功のためである。そしてまた最初の日々において逆側に向かって（毛に逆らって）なされるとき、これがそれの鎮めであることになる。

[131] upahavya- は Agniṣṭoma 型の 1 日 Soma 祭（Ekāha）の名前のことである。この祭式中に唱えられる神格の名前ははっきり言われない (anirukta) 。Indra が Śakra という別名で呼ばれることなどは anirukta の例であるが、最もよくある場合は、Prajāpati の名前がはっきり言われない場合である。

3.3　TS のまとめ

TS の Sattra 章は、日数の異なる個々の Sattra を、数詞＋-rātra-（「夜」）という名称で呼称し、日数の少ない順から多い順へと並べて、記述するという傾向がみられる。この枠組みにおいては、例えば Dvirātra（2 夜祭）も 1 年 Sattra も、連なりのない別々の異なる Sattra として列挙されているものとして理解される。

あるいはまた、Dvirātra から Ekānnapañcāśa（49 夜祭）までを 1 つの連続した Sattra であると仮定すると、その合計日数は 381 日となり、1 年間の日数を多少超過したものとなり、これはほぼ太陰暦における 13 か月分に対応するので、このように解釈することができる可能性もある。

また、全体的な傾向として、Tryaha や Ṣaḍaha などの、3 あるいは 6 の日からなるサイクルを、特に大きな日数からなる Sattra の構造を記述する際に多用している。Tryaha は、1 日目には Jyotis、2 日目には Go、3 日目には Āyus と呼ばれる特徴的な Stoma が用いられる。Ṣaḍaha は Tryaha を 2 つ組み合わせたものであると思われる。そして、Tryaha の記述回数は Ṣaḍaha の記述回数より断然多いので、TS の Sattra 章では 6 よりはむしろ 3 という数が強調される傾向にあると言えるだろう。

3 あるいは 3 の倍数が強調されることは、Trirātra、Navarātra、Dvādaśarātra あるいは Dvādaśāha などの 3 の倍数の日数からなる Sattra において、実際の儀礼行為に関する記述よりは、その Sattra にまつわる伝説や神話や哲学などの記述が多いことからも推察される。それらの Sattra の記述内容においても 3 という数が強調されていることがわかる。例えば、Trirātra の 1000 頭の雌牛に関する記述や Dvādaśarātra の Graha の順序に関する記述では、10 の倍数を 3 で割るということが意図されている。

他にも個別の Sattra において特徴ある要素がみつかる。

Ṣaḍrātra において Sārasvatasattra と呼ばれる、Sarasvatī 川に向かって巡礼することを目的とした Sattra のことが述べられている。また、Ṣaḍrātra は Devasattra（「神々の Sattra」）と称される。Ṣaḍrātra とは別に Dvādaśāha と Trayastriṃśāha も Devasattra と称される。これら 3 者に共通するのは、いずれも TS よりも前からよく知られていた Sattra であることかもしれない。というのも、まず Sārasvatasattra は、より古い時代において Indo-Ārya 人にとっての故郷であった Sarasvatī 川に関するものであるし、Dvādaśāha や Trayastriṃśāha は TS の仕組みでは異例である数詞＋-aha-（「日」）という名称をもつ Sattra である。おそらくは、-aha-で終わる Sattra は、TS の Sattra 章の編纂以前から存在した Sattra の名残ではないかと考えられる。Devasattra という名称は、「神々の時代から知られている Sattra」という意味を示唆する。

Pañcarātra、Saptarātra、Aṣṭarātra には、「Mahāvrata をもつ」という共通した表現がある。おそらくこれは 1 年 Sattra の最後に行われる Mahāvrata 祭とは異なる性格をもつものであると推測される。その意味について考察するとすれば、その表現の後に「食べ物を食べるために」という表現が共通していることから、おそらくはこれら Sattra に食事制限あるいは断食の要素が含まれていることが推測される。

TS における 1 年 Sattra は、Śrautasūtra におけるように Gavāmayana という名称がつけられない。「雌牛たちが Sattra を行った」という神話的伝説が述べられていることと、TS が Sattra を個別のものとして分けて並べるという編纂方針を取ったことから、ここから発して Śrautasūtra では Gavāmayana という名称で呼ばれることになったのであろうと推測される。

TS における 1 年 Sattra は、開始時期と終了時期について述べる箇所がある。「Ekāṣṭakā において潔斎するべきである」、つまり、Ekāṣṭakā（1 年最後の月である Māgha 月の黒半月の 8 日目、おそらく冬至にあたる）においておそらくは Dvādaśāha を行い、1 年 Sattra を締めくくるということが意図されている。つまり、冬至が 1 年 Sattra を行う上での区切りになっていることがわかる。また、1 年の始まりは、Phalgunī の満月の日か、Citrā の満月の日かということが述べられている。これはおそらく過去には Phalgunī の満月の日が年初とされ、現在、つまり TS の 1 年 Sattra の編纂の時期には Citrā の満月の日が年初とされていたことが推測される。

Daśarātra という記述が 2 か所にみられる。1 つは、個別の Sattra として Navarātra と Ekādaśarātra の間に記述されるものであり、もう 1 つは 1 年 Sattra の最後に行われる Mahāvrata の前に記述されるものである。Dvādaśarātra において 10 日間のことが強調して語られることからも推測されるように、おそらくは KS で記述されている 1 年 Sattra の最後の Dvādaśāha と同様に、11 日目の Mahāvrata 祭の前の 10 日間のことを Daśarātra と呼んでいるのではないかと思われる。

KS と TS で共通しているのは、1 年の最後に 12 日間ないし 10 日間の儀礼をおこなっていることである。KS では Dvādaśāha として記述されており、TS では Daśarātra として記述されている。そしてこのことから、TS において 1 年の締めくくりの祭式を行っていることがわかる。

4　KS の記述と TS の記述の対応

項目	KS の箇所	TS（および TB）の箇所
雌牛たちの Sattra	KS 33.1	TS 7.5.1(1); 7.5.2
1 年 Sattra において使用される祭式次第の導入と説明	KS 33.2	TS 7.4.10
Atirātra を最初に行うことで Agniṣṭoma, Ukthya, Atirātra を順番に行っていることになる	KS 33.2(1)	TS 7.4.10(1)
Atirātra において Jyotiṣṭoma を最初に用いる	KS 33.2(2)	TS 7.4.10(2)
2 つの Rathantara-Sāman と Sobhari の Brahma-Sāma	KS 33.2(3)	TS 7.4.10(3)
Caturviṁśa-Stoma を用いる日は 1 年 Sattra の導入の日	KS 33.2(4)	TS 7.5.1(3)
導入の日においてあちらからこちら向きに（Stoma の数を減らす方式で）一年間の Sattra を始める	KS 33.2(5)	
Ṣaḍaha の 1 日ごとに Jyotiṣṭoma、Goṣṭoma、Āyuṣṭoma を順番に用いる	KS 33.3(1)	TS 7.4.11(1)
6 日間、12 日間、18 日間、24 日間、30 日間（6 日間の繰り返し、合計 90 日間）	KS 33.3(2)	TS 7.4.11(2)
9 日間の儀礼（春分祭）	KS 33.4	(TB 1.2.2)
春分から夏至までの 3 か月間における Pr̥ṣṭha について	KS 33.5	TS 7.5.3
Pr̥ṣṭha［-Sāman］を最後の月に用いる	KS 33.5(1)	TS 7.5.3(1)
1 年 Sattra 参加者は岸のない海を泳いでいるかのようである	KS 33.5(2)	TS 7.5.3(2); TS 7.5.1(2)
21 日間の儀礼（夏至祭）	KS 33.6	TS 7.3.10 (Ekaviṃśatirātra) ; (TB 1.2.4)
神々が太陽の落下を恐れた神話(1)–(4)	KS 33.6(1)–(4)	
Spara-Sāman と Para-Sāman	KS 33.6(5)	TS 7.3.10 (Ekaviṃśatirātra)

		Para-Sāman と Paras-Sāman
開放日についての議論	KS 33.7(1)	TS 7.5.7(1) (Gavāmayana)
開放日がある場合には、Puroḍāśa を準備し、Soma 祭の代替としての Iṣṭi 献供を行う	KS 33.7(2)	TS 7.5.7(2)
21 日間の儀礼（夏至祭）後の後半の 6 か月の開始	KS 33.7(3)	TS 7.5.7(3)
Para[s]-Sāman	KS 33.8(1)	TS 7.3.10
一年の後半 5 か月間に使われる Stoma	KS 33.8(2)	
一年の後半の 6 番目の月の 3 つの Abhiprava と Go と Āyus の日	KS 33.8(3)	
Dvādaśāha における Chandoma の日（Dvādaśāha の 7、8、9 日目）	KS 33.8(4)	
（Dvādaśāha の）10 日目	KS 33.8(5)	
Mahāvrata の日（Dvādaśāha の 11 日目）	KS 33.8(6)	
Mahāvrata において使われる Graha たち	KS 33.8(7)	TS 7.5.4: Daśarātra
11 頭の動物犠牲（Ekādaśinī）	KS 34.1	
Ekādaśinī の贖罪儀礼	KS 34.2	(TB 1.4.6.5−7; 1.4.7.1)
Tvaṣṭar への動物犠牲	KS 34.2(1)	
Sarparājñī 讃歌	KS 34.2(2)	
Soma の購入および代用品の使用	KS 34.3	(TB 1.4.7.5−7)
競争相手のいる Soma 祭	KS 34.4	TS 7.5.5
2 つの Soma 祭が同時に行われる場合	KS 34.4(1)	TS 7.5.5(1)
水瓶が割れた場合の贖罪儀礼	KS 34.4(2)	TS 7.5.5(2)
一年の締めくくりとしての Mahāvrata 祭	KS 34.5	TS 7.5.8−10(; TB 1.2.6.6−7)
祭官たちの儀礼行為	KS 34.5(1)	TS 7.5.8(3)
賞賛者と非難者	KS 34.5(2)	TS 7.5.9(8)
Śūdra と Ārya の毛皮の引っ	KS 34.5(3)	TS 7.5.9(7)

張り合い		
太鼓を鳴らす	KS 34.5(4)	TS 7.5.9(5)
管楽器を演奏する	KS 34.5(5)	TS 7.5.9(3)
Brahmacārin と Puṁścalī の喧嘩	KS 34.5(6)	TS 7.5.9(2); (9)
女たちの歌と鎧を着た者たちの踊り	KS 34.5(7)	TS 7.5.10(2)
Prajāpati が Dvādaśāha を 1 年と同等のものとして創造する神話	KS 34.6	
Dvādaśāha を Soma 祭の進行になぞらえる	KS 34.6(1)	
Prajāpati が創造した Dvādaśāha のそれぞれの日と対応する諸々の Sāman	KS 34.6(2)	
Prajāpati が諸生物の創造のために Dvādaśāha を創造する神話	KS 34.7	
6 季節と 12 か月は 1 年の 2 つの形、Gāyatrī 韻律は Brahman、Dvādaśāha は Kṣatra	KS 34.7(1)	
Bṛhatī 韻律と 36 夜	KS 34.7(2)	TS 7.4.6
神々は Dvādaśāha（＝潔斎＋Upasad たち＋Soma 搾り）によって人間と分離した	KS 34.7(3)	
Dvādaśāha における食人行為性と人間犠牲性の示唆	KS 34.8	
Prajāpati が繁殖を求めて Dvādaśāha を開催する神話	KS 34.8(1)	TS 7.2.9
犠牲に適した水と適さない水（血）	KS 34.8(2)	
Sattriya を受け取ると、人間を食べることになる	KS 34.8(3)	TS 7.2.10(2)
潔斎の主題	KS 34.9	
Prajāpati が成就を求めて Dvādaśāha を開催する神話	KS 34.9(1)	
（Dvādaśāha においては）	KS 34.9(2)	

太った者が潔斎すべし		
潔斎の日数：12, 13, 15, 17, 21, 24, 27, 30, 33, 44, 48, 無限	KS 34.9(3)	TS Dvādaśarātra≈Ekānnapañcāśa までの記述の原型か？
13 番目の月の暗示、寒期（śiśira-）は出発（prayāṇa-）、春は滞在（avasāna-）	KS 34.9(4)	
Brahmavādin たちの議論：Dvādaśāha の各日による果報について	KS 34.10	TS 7.3.2
Dvādaśāha における潔斎者は犠牲になる	KS 34.11	TS 7.2.10(2)
3 つずつの清め（Dīkṣā）が４つある（＝12 日間）	KS 34.11(1)	
Dvādaśāha における食物は人間の象徴である	KS 34.12	
12 夜の間潔斎する者	KS 34.12(1)	
犠牲祭に適さない人間の 12 の部位あるいは排泄物	KS 34.12(2)	
(12 の潔斎の夜) +(12 の Upasad)+(12 夜の駆り立て (=Soma 搾り))=Bṛhatī (36 音節)	KS 34.12(3)	
Bṛhatī 36 音節 – 4 音節 =Anuṣtubh 32 音節	KS 34.12(4)	
Sattra 参加者の人数に関して	KS 34.13	
Prajāpati が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 1 名）	KS 34.13(1)	
3 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 3 名）	KS 34.13(2)	
6 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 6 名）	KS 34.13(3)	
12 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 12 名）	KS 34.13(4)	

Upasad においては 13 番目の者が潔斎すべし:13 番目の月の暗示（Sattra 参加者 13 名）	KS 34.13(5)	

4.1 比較・考察

以上の対応を比較することからわかることについて、以下にまとめる。

・1 年 Sattra の枠組みについて（基本的な Stoma や Sāman、Ṣaḍaha の使用など）は、KS と TS に対応がみられる。

・雌牛たちの Sattra（KS 33.1≈TS 7.5.1(1); 7.5.2）は、KS と TS に共通している。TS においては TS 7.5.1(1)と 7.5.2 の間の箇所（TS 7.5.1(2); (3)）を挟んで両側に配置されている。

・1 年 Sattra の導入は KS においては雌牛たちの Sattra（KS 33.1）から始まるが、TS においては雌牛たちの Sattra（TS 7.5.1(1); 7.5.2）の前に 1 年 Sattra に用いられる祭式次第や要素の紹介、説明から入る（TS 7.4.10−11）。

・KS 33.4 の 9 日間の儀礼（春分祭）は TS にはない[132]。

・KS の 21 日間の儀礼（夏至祭）は、TS 7.3.10 (Ekaviṃśatirātra)と TS 7.5.7 (Gavāmayana の中の Daśarātra の記述)に対応する。開放日（Soma 搾りを行わない日）についての議論は、KS では 21 日間の儀礼に関して言われているものであるが、TS 7.5.7 では、Daśarātra に関して言われているものである。

・1 年の後半に関する記述は KS にはあるが、TS にはない。

・KS における Dvādaśāha に含まれる Ekādaśinī は、TS に対応がない。ただし、Mahāvrata における Graha 汲み（KS 33.8(7)、TS 7.5.4）、及び、競争相手が同時に Soma 祭を開催している場合に関する記述は KS と TS で共通している。

・Mahāvrata 祭の記述は少しの記述順序と内容の違いを除けばほぼ一致する。1 年 Sattra の終わりに行われる Mahāvrata 祭は、KS の場合、Dvādaśāha の中の Mahāvrata 祭として記述されていて、TS の場合、Daśarātra の後の Mahāvrata 祭として記述されている。

・KS と TS の両方において Mahāvrata 祭が最後の具体的な祭式行為として記述されている。KS の場合は、その後に Dvādaśāha の象徴性が記述されるが、TS には対応がない。

・KS にみられる Dvādaśāha に関する Prajāpati の神話の大部分は TS における対応がない。

・KS（KS 34.6(1); 34.7(3); 34.12(3) ）では、Dvādaśāha を Dīkṣā、Upasad、Soma 搾りという Soma 祭に共通する要素になぞらえる議論がみられる。TS には二か所（TS 7.2.10(2); TS 7.4.9）ある。

・KS では、Dvādaśāha の象徴性に関する議論の中で人間犠牲的あるいは人肉食な要素（KS 34.8）がみられるが、これは TS では見当たらない。TB でもこれについては見当たらない。ただし、人肉食に対する批判が TS 7.2.10(2) にみられる。

---

[132] その一方で、TB にはみられるが、それについては本論第 4 章を参照せよ。

・KS 34.9(3)において様々な日数（12, 13, 15, 17, 21, 24, 27, 30, 33, 44, 48, 無限）の潔斎の記述があるが、これは TS の Dvādaśarātra 以降の一連の儀礼（Dvādaśarātra から Ekānnapañcāśa）の記述の原型の可能性がある。
・TS には Daśarātra と呼ばれる Sattra の記述があるが、KS に対応する記述はない。

5　春分祭と夏至祭に関する記述

一年 Sattra の原型を探るために、分点（春分点・秋分点）や至点（夏至点・冬至点）など、太陽の運行と関係する記述を考察することで、どのように 1 年 Sattra が 1 年間を通して経過していったのかについて理解を深めることができると思われる。この考察の結果、9 日間の儀礼は春分に行われるものであり、21 日間の儀礼は夏至に行われるものであるという結論へ至った。

5.1　春分と夏至に関連する可能性がある 3 つのグループ

春分と夏至に関係すると思われる記述がみつかる箇所は、MS 4.8.10, KS 30.5; 33.2; 33.4—5; KS 33.6, TS 7.3.10 TB 1.2.2—3; 1.2.4 である。そしてこれらを内容の区別に応じて、3 つのグループに分類した。

第 1 グループは、KS 33.4-5, TB 1.2.2.1-4（図表で最も左のグループ）で、Sattra の章に含まれ、おそらく春分に関する内容が述べられているのではないかと考えられる。

第 2 グループは、TS 7.3.10, KS 33.6, TB 1.2.4（図表で左から二番目のグループ）で、Sattra 祭の章に含まれ、夏至に関する内容がみられる。特筆すべきは、共通する太陽の神話をもっていることである。

第 3 グループは、MS 4.8.10, KS 30.5, TB 1.2.3（図表で最も右のグループ）で、MS と KS についてソーマ祭の章の最後に置かれる。1 年 Sattra の夏至にあたると推測される内容が記述されている。

5.2　各グループにおける特徴的な語あるいは内容の出現の有無

（その語あるいは内容が現れる箇所は○、現れない箇所は×で示した）

	KS 33.4-5	TB 1.2.2.1-4	TS 7.3.10	KS 33.6	TB 1.2.4	MS 4.8.10	KS 30.5	TB 1.2.3
祭式の日数	9 日(春分)	9 日(春分)	21 夜(夏至)	21 日(夏至)	21 日(夏至)	不明(夏至)	不明(夏至)	不明(夏至)
divākīrtya-	○(sg.)	×	○(sg.)	○(saman, pl)	○(sāman, pl.)	○(日・祭式)	○（日・祭式）	○（日・祭式）
viṣuvant-	×	×	×	×	×	×	×	○（一年の中心）
viśvajit-	○	○	×	○	×	×	×	×

abhijit-	○	○	×	○	×	×	×	×
para-/paras-sāman- adj.	○ (para-)	○ (paras-)	○ (paras-)	×	×	×	×	○(paras-)
ekaviṃśa[-stoma]	○	×	○	○	○	×	×	○
saṃtati-graha-	○	○	×	×	×	×	○	○
śukra-graha-	×	×	×	×	×	śukra-agra	śukra-agra	śukra-agra
mithuna-graha-	○	○	×	×	×	×	×	×
saurya-graha-	×	×	×	×	×	saurya	saurya	saurya (atigrāhya)
他の graha-	×	×	×	×	×	6 (atigrahya なし)	6 (atigrāhya)	7 (atigrāhya)
太陽の神話	×	×	○	○	○	×	×	×

5.3 Divākīrtya, Viśvajit, Abhijit, Viṣuvant の説明と用例

divākīrtya-, viśvajit-, abhijit-, viṣuvant-というこれらの語は、春分と夏至に関係する可能性があるため、それぞれの語の辞書的理解を示した後に、今回扱った箇所でどのような意味で用いられているのかを、用例を見ながら、考察する。

5.3.1 Divākīrtya

divākīrtya-について、PW[133]は TS 7.3.10.1 という箇所を示すのみで、意味については何も述べていない。Monier-Williams[134]においては、「日中唱えられるべき」という意味の形容詞として、また、中性形で特定の歌詠（Sāman のこと）の名前、そのような歌詠（Sāman）をもっている日という意味で使われることが述べられている。Mylius[135]にはいくつかの Sāman の名前という意味が述べられている。

divākīrtya-という語を検討した結果、春分と夏至に関係すると思われる文脈において用いられる。その意味は 2 つのグループに分けられる：（1）Divākīrtya という名前の Sāman、（2）Divākīrtya という名前の Sāman を用いる日のことを指している可能性があるもの。

また、Divākīrtya に関する特徴として、夏至の文脈で用いられる用例がほとんどであり、春分に関係するとみられる箇所（KS 33.4）でみられる用例は例外的である。

[133] PW s.v. divākīrtya: 1) Ts. 7, 3, 10, 1. — Vgl. mahā°.
[134] Monier-Williams s.v. divākīrtya: mf. to be recited by day; n. N. of partic. recitations, Br.; (a day) having such a r[ecitation], AitBr. iv, 18; [...]
[135] Mylius [1995: 78]: divākīrtya n, Name mehrerer sāmans.

（1）「Divākīrtya という名前の Sāman」という意味で用いられていると思われる箇所は以下の通りである：

TB 1.2.4.2 : tásmād ekaviṁśé 'han páñca divākīrtyàni kriyante / raśmáyo vái divākīrtyàni /
「それゆえ２１の［詩節からなる Stoma］をもつ日に５つの Divākīrtya[-Sāman]たちは用いられる。Divākīrtya[-Sāman] たちは光線たちなのだ」

以下は、（2）Divākīrtya という名前の Sāman を用いる日のことを指している可能性がある用例である：

MS 4.8.10 (cf. KS 30.5): yáthā vaí śālaiváṁ saṁvatsarás. tásya yáthā pákṣasī, eváṃ pákṣasī. yáthā madhyamó vaṁśá, eváṃ divākīrtyàm. yáthā vā́ idáṁ śā́lāyāḥ pákṣasī madhyamáṁ vaṁśám abhisamāgáchanty, eváṁ vā́ etát saṁvatsarásya pákṣasī divākīrtyàm abhisáṃtanoti.

一年は小屋と同様である。［小屋に］両翼があるのと同様に、それ（一年）には両翼がある。［小屋にとって］屋根の梁が中心であるのと同様に、［１年にとって］Divākīrtya が［中心である］。彼らが小屋の両翼を中心である屋根の梁に結合させるのと同様に、彼は１年の両翼を Divākīrtya に接合する[136]。

TB 1.2.3.1: sáṃtatir vā́ eté gráhāḥ, / yát páraḥsāmānaḥ. / viṣūvā́n divākīrtyàm. /

例の Graha たちは継続することなのだ、即ち Paras[-Sāman]を Sāman とする[Graha]たちは。Divākīrtya は折り返し点（viṣūvánt- m.）なのだ。

5.3.2 Viṣuvant

viṣuvant-[137]は、PW においては、形容詞として「(両側に同じ量の部分を取る)、真ん中を保つ、真ん中に位置する」という意味が最初に書かれ、それから、１年間の祭式の真ん中の日、さらには、春分点・秋分点を指すと書いてある。Mylius は Gavāmayana の真ん中の日であると述べ、この日が Ekaviṁśastoma と太陽に対する atigrāhya によって特徴づけられていると述べている。

検討された箇所において、viṣuvant-という語は、ほぼ全ての用例で男性名詞で用いられている。おそらくどの用例においても、「その両側に同じ量の部分をもつ、真ん中に位置するもの」という意味は含まれていると思われるが、文脈的にそれが具体的に指している対象は、次のように異なる：（1）「夏至」、（2）「冬至」、（3）「祭式の折り返し点（あるいは中心点)」。

viṣuvant-が（1）「夏至」の意味で使われていると思われる箇所は以下の通りである：

---

[136] この例で、一年の中心が divākīrtya と同置されていることは重要である。divākīrtya が夏至（一年の中心）と関連付けられることの証拠となるからである。

[137] PW s.v. viṣuvant: 1) adj. (an beiden Seiten gleichmässig Theil nehmend u. s. w.) die Mitte haltend, in der Mitte befindlich: — 2) m. Mitteltag (in einer best. Jahresfeier), — 3) m. N. eines Ekāha — 4) m. n. Aequinoctium — 5) m. Scheitelpunkt, vertex überh. Mylius [1995: 118]: m, mittlerer Tag eines Einjahres-(→)sattra (→gavām ayana), der also das Ritualjahr scheidet; er ist gekennzeichnet durch einen ekaviṁśastoma und eine Zusatzschöpfung(→atigrāhya) an die Sonne.

TB 1.2.3.1 sáṃtatir vā́ eté gráhāḥ, / yát páraḥsāmānaḥ. / viṣūvā́n divākīrtyàm. / これら、即ち Paras[-Sāman] を Sāman としてもつ Graha たちは継続（sáṃtati-）なのだ。Divākīrtya は折り返し点（viṣūvánt- m.）なのだ。

viṣuvant-が（２）「冬至」を指す言葉として使われていると思われる箇所は以下の通りである：

KS 33.8:34.8–14 te mahāvratīyam ahar upayanti. tad āhur, ‘viṣuvān vā etad ahar, yan mahāvratīyaṃ. viṣuvaty upetyam’ iti. | 彼らは Mahāvrata の日に近づく。それについて［ある人々は］言っている、「この日、即ち Mahāvrata の［日］は折り返し点なのだ。折り返し点において行われるべきである」と。

viṣuvant-が（３）「祭式の折り返し点」を指す用例は以下の通りである：

TS 7.4.3.4 átho eṣá vái viṣūvā́n. viṣūvánto bhavanti yá evā́ṃ vidvā́ṁsa etā́ ā́sate.

（Triṃśadrātra の記述）そしてまたこれ（24 の詩節からなる stoma が用いられる日）は折り返し点である。このように知ってこの［30 夜の］間座る者たちは折り返し点になる。

5.3.3 Viśvajit と Abhijit

viśvajit-は PW[138]と Mylius [1995][139]において一年 sattra（gavāmayana）における viṣuvant の四日後の日と考えられている。

abhijit-[140]は PW において viṣuvant-の四日前の日として記載されている[141]。Mylius [1995][142]は Agniṣṭoma か Atirātra として行うことができる一日からなる Soma 祭（Ekāha）の名前であると述べている。abhijit-はどちらの辞書にも Gavāmayana を構成する 1 日からなる Soma 祭ということが書いてある。

検討された箇所において、viśvajit-と abhijit-は、Stoma の名称として用いられている。９日祭（春分）で用いられるが、KS では２１日祭（夏至）にも用いられ、PB では夏至の文脈で用いられる。

春分と思われる箇所における用例：

---

[138] PW s.v. viśvajit: 1) adj. allbesiegend, allgewinnend [...] — 2) m. a) N. eines Ekāha in der Feier Gavāmayana, der 4te Tag nach dem Viṣuvant (Abhijit heisst der 4te vor demselben).

[139] Mylius [1995: 118]: m, Name eines Eintages-Somaopfers (→ekāha); es kann entweder als → agniṣṭoma oder als →atirātra vollzogen werden. Im Einjahres-(→)sattra (→gavām ayana) ist der vierte Tag nach dem →viṣuvat ein v[iśvajit].

[140] PW s.v. abhijit: 1) adj. a) siegreich: a̱bhi̱jitā̱ tejàsā̱ tejò jinva Vs. 15, 7. — b) unter dem Sternbilde Abhijit geboren P. 4, 3, 36. — 2) m. a) N. eines eintägigen Soma-Opfers, eine Unterabtheilung der grossen Opferfeier des Gavām-ayana.

[141] つまり、９日祭の最初の日と最後の日に使うと考えられている、ということになる。

[142] Mylius [1995: 32]: m, Name eines Eintages-Somaopfers (→ekāha), das einen Bestandteil des → gavām ayana bildet.

KS 33.4:29.20 viśvajidabhijitā agniṣṭomau. 2 つの agniṣṭoma は viśvajit[-stoma] と abhijit[-stoma] をもつ。

夏至と思われる箇所における用例：

KS 33.6:31.11−14 devā vai saptadaśānāṃ pravlayād abibhayus. tān sarvais stomair avastāt paryārṣan sarvais stomaiḥ parastāt. tasmād abhijit sarvastomo 'vastāt saptadaśānāṃ, viśvajit sarvastomaḥ parastāt saptadaśānāṃ. dhṛtyā apravlayāya.

神々は［折り返し点の前後それぞれにある 3 つの］17［詩節］からなる［Stoma］が押し潰されることを恐れた。彼らはそれら（17 詩節からなる Stoma たち）を完全な Stoma たちによってこちら側から（折り返し点より前の日から）突き支え、完全な Stoma たちによってあちら側から（折り返し点より後の日から）［突き支えた］。それゆえ Abhijit は完全な Stoma として、［3 つの］１７詩節からなる［Stoma］よりこちら側から（折り返し点より前の日から）用いられ、viśvajit は完全な Stoma として、あちら側から（折り返し点より後の日から）用いられる。保つために，押し潰さないために。

5.4　各グループにおける春分あるいは夏至に関する祭式の特徴

3 グループにまとめた春分と夏至と関係する祭式の特徴をまとめる。

（1）第 1 グループ（KS 33.4-5, TB 1.2.2.1-4）：春分と思われる箇所。

（2）第 2 グループ（TS 7.3.10, KS 33.6, TB 1.2.4）：夏至と思われる箇所。

（3）第 3 グループ（MS 4.8.10, KS 30.5, TB 1.2.3）：夏至と思われる箇所。

5.4.1　第 1 グループ（KS 33.4-5, TB 1.2.2.1-4）（春分）

第 1 グループ（KS 33.4-5, TB 1.2.2.1-4）は以下のように記述されている。

KS 33.4: 9 日間の儀礼 （≈TB 1.2.2）

KS 33.4(1): 9 日間の儀礼の導入

(33.4:29.15–17) navaitāny ahāni. nava vai svargā lokāś. catasro diśaś. catvāro ’ntardeśā. ūrdhvā navamī. yad etāny ahāny upayanti, navasv eva tat svargeṣu lokeṣu sattriṇaḥ pratitiṣṭhanto yanty.

例の 9 日間（について）。天界は 9 つあるのだ、（つまり）4 方位、4 つの中間の方位、上方に向かう 9 つ目の［方位］。これら［9］日間を行うことで、Sattrin たちは 9 個の天界においてしっかりと立ち続けることになる。

KS 33.4(2): Agniṣṭoma たちが Para[s]-Sāman をもつべきか

(33.4:29.17–20) "agniṣṭomāḥ parasāmānaḥ kartavyā" ity āhur, "agniṣṭomasaṃmito vai svargo loka" iti. dvādaśāgniṣṭomastotrāṇi. dvādaśa māsās saṃvatsaras. saṃvatsaras svargo lokas. tasmāt tad āhus. "tan na sūrkṣyam. ukthyā eva parasāmānaḥ kartavyā" iti. paśavo vā

ukthāni. paśūnām avaruddhyai.

「Agniṣṭoma たちは Para[s]-sāman をもつものとして行われるべきである」と［人々は］言っている、「天界は Agniṣṭoma と等しいものである」と。 Agniṣṭoma には 12 の Stotra がある。一年は 12 ヶ月である。天界は一年である。それゆえ［人々は］そのことについて言っている。［しかし、他の人々は言っている、］「それは懸念されるべきことではない。Ukthya たちだけが Para[s]-Sāman をもつものとして行われるべきである」と。Uktha は家畜たちなのだ。家畜たちの獲得のために。

KS 33.4(3): Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma を用いる 2 つ Agniṣṭoma

(33.4:29.20–30.1) viśvajidabhijitā agniṣṭomā. ukthyās saptadaśāḥ parasāmāna. ekaviṁśaṃ divākīrtyaṃ. te saṁstutā virājam abhisaṃpadyante. dve ca rcā atiricyete. svargo vai loko virāḍ. dvipādo yajamānās. svarga eva tal loke virāji dvipādo yajamānāḥ pratitiṣṭhanti. //

2 つの Agniṣṭoma［-Yajñakratu］は Viśvajit［-Stoma］と Abhijit［-Stoma］［を用いる］。Ukthya［-Yajñakratu］たちは 17 の詩節からなる［Stoma］を用い、Para［s-Sāman］を［最初の日の］Sāman として用いる 。Divākīrtya［-Sāman の日］は Ekaviṁśa-Stoma を用いる。それらは共に歌われて Virāj の数へと合計される 。そして 2 つの詩節 が過剰である 。Virāj は天界なのだ。祭主たちは 2 本足である。そうして天界において、Virāj において 2 本足である祭主たちはしっかりと立っていることになる。

KS 33.4(4): 9 日間の中の Ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる Sāman たち

(33.4:30.1–3) yat paro rathantaraṃ tat prathame ’han kartavya. bṛhad dvitīye. vairūpaṃ tṛtīye. vairājaṃ caturthe. śākvaraṃ pañcame. raivataṁ ṣaṣṭhe. tad u pṛṣṭhebhyo na yanti.

Rathantara［-Sāman］ である Paras［-Sāman］であるところのもの、それが 1 日目において行われるべきである。Bṛhat［-Sāman］は 2 日目において。Vairūpa［-Sāman］は 3 日目において。Vairāja［-Sāman］は 4 日目において。Śākvara［-Sāman］は 5 日目において。Raivata［-Sāman］は 6 日目において。そのようにして彼らは Pṛṣṭha（山の稜線、盛り上がり）たちから逸脱しないことになる。

KS 33.4(5): 9 日間の中の Ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる Atigrāhya たち

(33.4:30.3–6) saṃtataya ete grahā gṛhyante. ’tigrāhyāḥ parasāmasu. yad ete gṛhyanta, imān evaital lokān saṃtatya svargaṃ lokaṃ yajamānā ārohanti. mithunā ete grahā gṛhyante. ’tigrāhyāḥ parasāmasu. yad ete gṛhyante, mithunam evaitair avarundhate.

Saṃtati（「一繋ぎ」）という例の Graha たちが汲まれる、Atigrāhya たちとして、Para[s]を Sāman とする［Stoma］において。これらが汲まれることで、これら世界を一繋ぎにして天界へ祭主たちは登っていることになる。Mithuna（「雌雄のつがい」）という例の Graha たちが汲まれる、Atigrāhya たちとして、Para[s-Sāman] を Sāman とする［Stoma］において。これらが汲まれることで、彼らはこれらによってつがいを獲得していることになる。

KS 33.4(6): 9 日間の中の 5 日目（中心の日）に用いられる Atigrāhya

(33.4:30.6–10) saurya eṣa graho gṛhyate. ’tigrāhya ekaviṁśe ’haṁs. tasya pratyakṣaṃ nāma na grahītavai. tejasvitara iva vāśrataraḥ. pradāhād vā bhayyaṃ kilāsaṃbhavād vā=. "ayā viṣṭhā janayan karvarāṇi=" ity eṣa prājāpatyo ’nirukto graho gṛhyate, ’tigrāhya ekaviṁśe ’han. samanta āyuṣyaḥ paśavyo. yo ha khalu vāva prajāpatis, sa evendras. tad u devebhyo na yanti. //

Saurya（「Sūrya に関する」）という例の Graha が汲まれる、Atigrāhya として、Ekaviṁśa[-Stoma] を用いる日において 。彼の名前は公然と捉えられてはならない 。［彼は］より威光をもつ（tejasvitara-）、より吠える者（vāśratara-）かのようである。燃えることか、あるいは皮膚病になることを恐れるべきである。「［彼は］この仕

方で行為たちを生み出しながら」と［唱えて］Prajāpati のための、［対象神格が］はっきりと言われない 例の Graha が汲まれる、Atigrāhya として、Ekaviṁśa[-Stoma] を用いる日に。［この Graha は］果てを備えた 、寿命に関する、家畜に関するものである。他ならぬ Prajāpati である者は実際には Indra なのだ。そしてそのようにして彼らは神々から逸脱しないことになる。

TB 1.2.2: 9 日間の儀礼（≈KS 33.4）

návaitā́ny áhāni bhavanti. / náva vái suvargā́ lokā́ḥ. / yád etā́ny áhāny upayánti, / navásv evá tát suvargéṣu lokéṣu satríṇaḥ pratitíṣṭhanto yanti. / "agniṣṭomā́ḥ páraḥsāmānaḥ kā́ryā" íty āhuḥ / "agniṣṭomásaṃmitaḥ suvargó loká" íti. / dvā́daśāgniṣṭomásya stotrā́ṇi. / dvā́daśa mā́sāḥ saṃvatsaraḥ. / tát tán ná sū́rkṣyam. / ukthyà̀ evá saptadaśā́ḥ páraḥsāmānaḥ kāryà̀ḥ. // paśávo vā́ ukthā́ni. / paśūnā́m ávarudhyai. / viśvajidabhijítāv agniṣṭomáu. / ukthyà̀ḥ saptadaśā́ḥ páraḥsāmānaḥ. / té sáṁstutā virā́jam abhí sáṃpadyante. / dvé cárcāv átiricyete. / ékayā gáur átiriktaḥ. / ékayā́yur ūnáḥ. / suvargó vái lokó jyótiḥ. / ū́rg virā́ṭ. // suvargám evá téna lokám abhíjayanti. /

例の 9 日間が開催される。天界は 9 つなのだ。Sattrin たちが例の 9 日間を執り行うとき、9 つの天界の上にしっかりと立ち続けていることになる。「Paras-Sāman を持つ Agniṣṭoma が行われるべきである」と［ある者たちは］言っている、「天界は Agniṣṭoma と同等のものである」と。Agniṣṭoma には 12 の Stotra がある。1 年は 12 ヶ月である。だから、それは問題にされるべきではない。Saptadaśa[-Stoma] を持ち、Paras-Sāman を持つ Ukthya たちが行われるべきである。Uktha たちは家畜たちなのだ。家畜たちの獲得のために。Viśvajit[-Stoma]と Abhijit[-Stoma]が 2 つの Agniṣṭoma として［用いられる］143。Paras[-Sāman] を Sāman とする Saptadaśa[-Stoma] (17) が、Ukthya として［用いられる］。それらは共に Stotra として歌われて Virāj に対して数え合わされる。そして 2 つの詩節が余分となる144。Go[-Stoma] は 1 つの［詩節が］余分となる。Āyus[-Stoma] は 1 つの［詩節が］足りない。Jyotis[-Stoma] は天界なのだ。Virāj は滋養なのだ。彼らはそれによって天界を勝ち取っていることになる。

yát páraṁ rā́thantaram, / tát prathamé 'han kāryàm. / bṛhád dvitī́ye. / vairūpáṃ tṛtī́ye. / vairājáṃ caturthé. / śākvaráṃ pañcamé. / raivatáṁ ṣaṣṭhé. / tád u pṛṣṭhébhyo ná yanti. / saṃtátaya eté gráhā gṛhyante, // atigrāhyà̀ḥ páraḥsāmasu. / imā́n eváitáir lokā́n sáṃ tanvanti. / mithunā́ eté gráhā gṛhyante, / atigrāhyà̀ḥ páraḥsāmasu. / mithunám evá táir yájamānā ávarundhate. / bṛhát pṛṣṭháṃ bhavati. / bṛhád vái suvargó lokáḥ. / bṛhatáivá suvargáṃ lokáṃ yanti. / trayastriṁśí nā́ma sā́ma. / mádhyandine pávamāne bhavati. // tráyastriṁśad vái devátāḥ. / devátā evā́varundhate. / yé vā́ itáḥ párāñcaṁ saṃvatsarám upayánti, / ná hainaṃ té svastí sámaśnuvate. / átha ye 'muto 'rvā́ñcam upa yánti, / té hainaṁ svastí sámaśnuvate. / etád vā́ amúto 'rvā́ñcam úpa yanti. / yád evám. / yó ha khálu vā́vá prajā́patiḥ. / sá uv evéndraḥ. / tád u devébhyo ná yanti. //

Rathantara[-Sāman]に属する Para[-Sāman] であるところの［Sāman］が 1 日目に使用されるべきである。Bṛhat[-Sāman] が 2 日目に［使用されるべきである］。Vairūpa[-Sāman] が 3 日目に［使用されるべきである］。Vairāja[-Sāman] が 4 日目に［使用されるべきである］。Śākvara[-Sāman] は 5 日目に[使うべきである]。Raivata[-Sāman] は 6 日目に使うべきである。そして、そのようにして、彼らは Pṛṣṭha たちから逸脱

143 おそらく 9 日間の 1 日目に用いられる Viśvajit-Stoma と 9 日目に用いられる Abhijit-Stoma のことを指している。Agniṣṭoma は 9 日間の最初と最後の日に用いられる形式として述べられている。

144 おそらく 9 日間の 2、3、4、6、7、8 日目に用いられる 6 つの Saptadaśa-Stoma (17) の詩節を足し合わせたとき、102 詩節となることから、それを Virāj（10 の倍数）で割ったときの余りの 2 詩節のことを指していると思われる。

しない。途切れることのない連続（saṃtati-）という例の Graha たちが汲まれる、Para-Sāman たちが［歌われる］とき Atigrāhya[-Graha] として。彼らは、例の [Graha] たちによってこれらの世界を途切れなくしている。一対（mithuna-）という例の Graha たちが汲まれる、Para-Sāman が[歌われる]とき Atigrāhya[-Graha] として。生け贄はこれらの [Graha] との対を得る。Pṛṣṭha[-Sāman] は Pṛṣṭha として適用される。天界は Bṛhat[-Sāman] である。彼らは Brahman を持って天界に進む。真昼の Pavamāna[-Stotra]では、Trayastriṁśi という名前の Sāman が使用される。神々は 33 である。彼らは神々を得る。ここから 1 年［Sattra］を行う者は、安全にそれを達成しない。一方、向こう側からこちら側へ［1 年 Sattra を］行う者は、安全にそれを達成する。このようにして、彼方から彼方を引き受ける。実をいうと Prajāpati である者は、まさに Indra である。そのようにして、彼らは神々から逸脱しない。

以上の記述の特徴をまとめると次の点が挙げられる：

- 一年 Sattra が一年の最初の日から順に記述されていることを前提としたとき、夏至と思われる記述より前に記述されていることから、春分であることが推測される。
- 祭式が 9 日からなることを最初に明示している。
- Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma が用いられる。
- Para-Sāman- (KS) / Paras-Sāman- (TB)が用いられる。
- Graha が saṃtati-（「継続、一繋ぎ」）であると述べられる。
- KS と TB の違いとしては、KS には Divākīrtya と Ekaviṃśa[-Stoma]への言及がみられるが、TB にはないことが挙げられる。

5.4.2 第 2 グループ（KS 33.6; TS 7.3.10; TB 1.2.4）（夏至）

第 2 グループ（KS 33.6, TS 7.3.10, TB 1.2.4）は以下のように記述されている。

KS 33.6: 21 日間の儀礼（≈TB 1.2.4）

KS 33.6(1): 神々が太陽の落下を恐れた話（1）

(33.6:31.4–7) ekaviṁśa eṣa. etena vai devā ekaviṁśenādityam itas svargaṃ lokam ārohayan. sa eṣa ita ekaviṁśas. tasya daśāvastād ahāni daśa parastāt. sa eṣa ubhayato virāji pratiṣṭhita. ubhayato hi vā eṣa virāji pratiṣṭhitas. tasmād antaremau lokau yan sarveṣu svargeṣu lokeṣu pratitiṣṭhann eti.

この［祭式］は Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）。神々はこの Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）［祭式］によって太陽をここ（大地）から天界へ昇らせた。そのような例のもの（太陽）はここから 21 番目なのだ。それ（太陽=Ekaviṁśa-Stoma をもつ日）にはこちらから 10 日があり、あちらから 10 日がある。そのようなこれ（太陽）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っている。というのもこれ（祭式）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っているから。それゆえ［彼は］この 2 つの世界（大地と天界）の間を行き続け、全ての天界において都度都度しっかりと立ち続ける。

KS 33.6(2): 神々が太陽の落下を恐れた話（2）

(33.6:31.8–14) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ triṣu svargeṣu lokeṣv ādadhus. tasya parāco ’tipādād abibhayus. taṃ parastāt tribhis svargair lokaiḥ pratyastabhnuvan. sa eṣa ubhayataṣ ṣaṭsu svargeṣu lokeṣu pratiṣṭhito. dhṛtyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. // devā vai saptadaśānāṃ pravlayād abibhayus. tān sarvais stomair avastāt paryārṣan sarvais stomaiḥ parastāt. tasmād abhijit sarvastomo ’vastāt saptadaśānāṃ viśvajit sarvastomaḥ parastāt. saptadaśānāṃ dhṛtyā apravlayāya.

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らはそれ（太陽）を 3 つの天界に置いた。彼らはそれ（太陽）があちら側に超えて落ちることを恐れた。彼らはあちら側で 3 つの天界によってそれを固定した。そのようなかのもの（太陽）は両側から（支えられて）6 つの天界においてしっかりと立っている。固定のために、安立のために、落下しないために、超えて落ちないために。神々は（Ekaviṁśa-Stoma をもつ日、つまり、21 日間の祭式の真ん中の日の前後 3 日間ずつに使う）Saptadaśa[-Stoma]たちが押し潰されることを恐れた。彼らはそれら（Saptadaśa-Stoma たち）を完全な Stoma たちによって[145]こちら側から（真ん中の日より前の日から）突き支え、完全な Stoma たちによってあちら側から（真ん中の日より後の日から）［突き支えた］。それゆえ Abhijit[-Stoma]は完全な Stoma として、［3 つの］Saptadaśa[-Stoma]よりこちら側で（真ん中の日より前の日に）用いられ、Viśvajit[-Stoma]は完全な Stoma として、あちら側から（真ん中の日より後の日に）用いられる。保つために、押し潰さないために。

KS 33.6(3): 神々が太陽の落下を恐れた話（3）

(33.6:31.14–20) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ, ye +varṣman[146] svargāṇāṃ lokānām adhipatayas, teṣv ādadhuś. catustriṁśā vai stomā +varṣman [147] svargāṇāṃ lokānām adhipatayas. tad, yad ekaviṁśasyāhnas trayo ’vastāt saptadaśās trayaḥ parastāt, te trayaś catustriṁśā dvaudvau. teṣu vā eṣa āhito. dhṛtyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. // varṣman hi vā eṣa svargāṇāṃ lokānām āhitas. tasmād bhūtebhyobhūtebhya uttaro. varṣma svānām ādhipatyaṃ paryeti, ya evaṃ veda.

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らは彼を、天界たちの頂点において首長である者たちに置いた。Trayastriṁśa-Stoma たちが天界たちの頂点における首長たちなのだ。Ekaviṁśa[-Stoma] をもつ日のこちら側から 3 つの Saptadaśa[-Stoma] があり、［その日の］あちら側から 3 つの Saptadaśa[-Stoma] があるということは、それらは 3 つの Catustriṁśa[-Stoma] が 2 つに分かれてあるということである((17×3)+(17×3)=(34×3))[148]。例のもの（太陽）はそれら（Stoma）の上に置かれている。保つことのために、しっかりと立つことのために、落下しないために、超えて

[145] Abhijit-Stoma を使う日を含んだ最初の 7 日間、Viśvajit-Stoma を使う日を含んだ最後の 7 日間の中で使われる Stoma のことを総称して、「完全な stoma たち」と呼んでいる。

[146] 訂正した。Ed varṣma

[147] 訂正した。Ed varṣma

[148] 折り返しの日は Ekaviṁśa-Stoma があり、その前後三日ずつにはそれぞれの日に Saptadaśa-Stoma が使われるという構造のことを述べている。つまり、 stoma の並びが、17 17 17 21 17 17 17（数字は stoma に含まれる詩節の数） という構造になっている。

落ちないために。例のもの（太陽）は諸天界の頂点に置かれているから、それゆえ［太陽は］どの諸存在よりも上位である。このように知っている者は、頂点に、自分に属する者たちの首長の地位に至る。

KS 33.6(4): 神々が太陽の落下を恐れた話（4）

(33.6:31.20–32.3) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ pañcabhī raśmibhir udavayan. raśmayo divākīrtyāni. tasmād ekaviṁśe ’han pañca divākīrtyāni kriyante. ye gāyatre, te gāyatrīṣūttarayoḥ pavamānayor. mahādivākīrtyaṁ hotuḥ. pṛṣṭhaṃ vikarṇaṃ brahmasāmaṃ. bhāsam agniṣṭomas. tad, yad ekaviṁśe ’han pañca divākīrtyāni kriyanta, ādityam eva tat pañcabhī raśmibhir udvayanti. dhṛtyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. //

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らはそれ（太陽）を 5 本の太陽光線で編み上げた（ud-avayan[149]）。Divākīrtya［-Sāman］たちは太陽光線たちである。それゆえ Ekaviṁśa-Stoma をもつ日に 5 つの Divākīrtya［-Sāman］が用いられる[150]。2 つの Gāyatra［-Sāman］は Gāyatrī 詩節たちにおいて［歌われ］後半二つの Pavamāna［-Stotra］に属する[151]。Mahādivākīrtya［-Sāman］は Hotar に属する[152]。Vikarṇa［-Sāman］は Pṛṣṭha［-Stotra］であり Brahmasāma である[153]。Bhāsa［-Sāman］が Agniṣṭoma［-Stotra］[154]として使用される。Ekaviṁśa-Stoma をもつ日に 5 個の Divākīrtya［-Sāman］が用いられることで、彼らは太陽を 5 本の太陽光線によって編み上げることになる。固定のために、安立のために、落下しないために、超過しないために。

KS 33.6(5): Spara-Sāman と Para-Sāman（≈TS 7.3.10 Ekaviṃśatirātra, Para-Sāman と Paras-Sāman）

(33.6:32.3–9) athaitāni[155] sparāṇi. sparair vai devā ādityāya svargaṃ lokam aspṛṇvan. yad aspṛṇvaṁs, tat sparāṇāṃ sparatvaṃ. spṛṇvanty asmai sparāṇi svargaṃ lokaṃ, ya evaṃ vidvān etais stute. ’thaitāni parāṇi. parair vai devā ādityaṁ svargaṃ lokam apārayan. yad apārayaṁs, tat parāṇāṃ paratvaṃ. pārayanty enaṃ[156] parāṇi svargaṃ lokaṃ, ya evaṃ

---

[149] udavayan は ud-vaya[ti] の 3rd pl. impf.（PW s.v. vā; EWAia s.v. *o* ‘weben’; LIV s.v. **Heu-* ‘weben’）である。

[150] 5 つの divākīrtya-sāman とは、次に述べられる（1-2）2 つの gāyatra-sāman、（3）mahādivākīrtya-sāman、（4）vikarṇa-sāman、（5）bhāsa-sāman を指している。

[151] pavamānastotra は朝、昼、夕方の最初の stotra として用いられる。後半 2 つの pavamānastotra は昼と夕方の最初の stotra、つまり、6 番目と 11 番目の stotra を指している。Cf. Parpola [1969: 13].

[152] mahādivākīrtya-sāman が使われる stotra に対応する śastra を唱える祭官が hotṛ であることを指しているのかもしれない。Cf. Parpola [1969: 13].

[153] pṛṣṭha-stotra は 7, 8, 9, 10 番目の stotra であり、brahmasāma は、brahmaṇācchaṃsin 祭官が śastra を唱えるときに使われる sāman である。brahmaṇācchaṃsin 祭官が śastra を唱えるのは、９番目の stotra が歌われた後である。Cf. Parpola [1969: 13].

[154] agniṣṭoma-stotra は１２番目に用いられる stotra である。

[155] そのように Schroeder は訂正している。Ch || thaitāni [Schr 32 n. 1].

[156] そのように Schroeder は訂正している。Ch tyenasparāṇi [Schr 32 n. 2].

vidvān etais stute. ’nuṣṭubho vai, yad ayātayāmarūpaṃ, tāni parāṇi. tasmād anuṣṭupsu parāṇi kriyante. yad anuṣṭupsu parāṇi kriyante, ’nuṣṭubham eva tat savīryāṃ kurvanti. svargasya lokasya samaṣṭyai. //

次に例の Spara［-Sāman］たち［について］。神々は Spara［-Sāman］たちによって Āditya のために天界を確保した（aspṛṇvan）。彼らが確保した（aspṛṇvan）ということが Spara［-Sāman］たちが Spara［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知ってこれらを歌うならば、Spara［-Sāman］たちが彼（祭主）のために天界を確保する。次に例の Para［-Sāman］たち［について］。神々は Para［-Sāman］たちによって Āditya を天界に渡らせた。彼らが渡らせた（apārayan）ということが、Para［-Sāman］たちが Para［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知ってこれらを歌うならば、Para［-Sāman］たちは彼（祭主）を天界に渡らせる。Anuṣṭubh の使い古されていない形であるものが Para［-Sāman］たちである。それゆえ Anuṣṭubh 詩節たちのところで Para［-Sāman］たちが用いられる。Anuṣṭubh 詩節たちのところで Para［-Sāman］たちが用いられることで、彼らは Anuṣṭubh 詩節を勇力をもつものにしていることになる。天界への完全な到達のために。

TS 7.3.10: Ekaviṁśatirātra

(7.3.10.1) asā́v ādityò ’smíṀ loká āsīt. táṃ devā́ḥ pṛṣṭháiḥ parigṛ́hya suvargáṃ lokám agamayan. párair avástāt páry agṛhṇan divākīrtyèna suvargé loké práty asthāpayan. páraiḥ parástāt páry agṛhṇan pṛṣṭháir upā́varohant. sá vā́ asā́v ādityò ’múṣmiṀ loké párair ubhayátaḥ párigṛhīto. yát pṛṣṭhā́ni bhávanti. suvargám evá táir lokáṃ yájamānā yanti. párair avástāt pári gṛhṇanti. divākīrtyèna // (7.3.10.2) suvargé loké práti tiṣṭhanti. páraiḥ parástāt pári gṛhṇanti pṛṣṭháir upā́varohanti. yát páre parástān ná syúḥ párāñcaḥ suvargā́l lokā́n níṣ padyeran. yád avástān ná syúḥ prajā́ nír daheyur. abhíto divākīrtyàm páraḥsāmāno bhavanti. suvargá eváināṀ loká ubhayátaḥ pári gṛhṇanti. yájamānā vái divākīrtyàṃ. saṃvatsaráḥ páraḥsāmāno. ’bhíto divākīrtyàm páraḥsāmāno bhavanti. saṃvatsará evóbhayátaḥ // (7.3.10.3) práti tiṣṭhanti. pṛṣṭháṃ vái divākīrtyàm pārśvé páraḥsāmāno. ’bhíto divākīrtyàm páraḥsāmāno bhavanti. tásmād abhítaḥ pṛṣṭhám pārśvé. bhū́yiṣṭhā gráhā gṛhyante. bhū́yiṣṭhaṁ śasyate. yajñásyaivá tán madhyató granthíṃ grathnanty. ávisraṁsāya. saptá gṛhyante. saptá vái śīrṣaṇyā̀ḥ prāṇā́ḥ. prāṇā́n evá yájamāneṣu dadhati. yát parācī́nāni pṛṣṭhā́ni bhávanty. amúm evá táir lokám abhyā́rohanti. yád imáṃ lokáṃ ná // (7.3.10.4) pratyavaróheyur úd vā mā́dyeyur, yájamānāḥ prá vā mīyeran. yát pratīcī́nāni pṛṣṭhā́ni bhávanti=, imám evá táir lokám pratyávarohanty. átho asmínn evá loké práti tiṣṭhanty. ánunmādāya=. índro vā́ ápratiṣṭhita āsīt. sá prajā́patim úpādhāvat. tásmā etám ekaviṁśatirātrám prā́yachat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sá práty atiṣṭhad. yé bahuyājínó ’pratiṣṭhitāḥ // (7.3.10.5) syús tá ekaviṁśatirātrám āsīran. dvā́daśa mā́sāḥ páñcartávas tráya imé lokā́ asā́v ādityá ekaviṁśá etā́vanto vái devalokā́s. téṣv evá yathāpūrvám práti tiṣṭhanty. asā́v ādityó ná vy àrocata. sá prajā́patim úpādhāvat. tásmā etám ekaviṁśati rātrám prā́yachat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sò ’rocata. yá eváṃ vidvā́ṁsa ekaviṁśatirātrám ā́sate rócanta evá=. ekviṁśatirātró bhavati. rúg vā́ ekaviṁśó. rúcam evá gachanty. átho pratiṣṭhā́m evá. pratiṣṭhā́ hy èkaviṁśó. ’tirātrā́v abhíto bhavato. brahmavarcasásya párigṛhītyai. //

あの（天上の）太陽はこの（地上の）世界にあった。それを神々は Pṛṣṭha たちによって取り囲んでから天界へ行かせた。Para［-Sāman］たちによって下から彼らは取り囲んだ。Divākīrtya［-Sāman］によって天界においてしっかりと立たせた。Para［-Sāman］たちによって上から彼らは取り囲んだ。Pṛṣṭha たちによって下へ降りた。そのようなあの太陽はこの世界において Para たちによって両方から取り囲まれている。Pṛṣṭha たちがあるなら、祭主たちはそれらを使って天界へ進んでいることにな

る。Para たちによって下から彼らは取り囲む。Divākīrtya によって彼らは天界においてしっかりと立つ。Para たちによって彼らは上から取り囲む。Pr̥ṣṭha たちによって彼らは下へ降りた。Para たちが上にないと、あちらに向いた者たちが天界から足を踏み出してしまうだろう。［Para たちが］下にないと、生き物たちを焼き尽くしてしまうだろう。Divākīrtya の両側で Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちが用いられる。彼らはそれらを天界において両方から取り囲んでいることになる。Divākīrtya は祭主たちなのだ。Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちは一年なのだ。Divākīrtya の両側で Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちが用いられる。彼らは一年の上に両方からしっかりと立っていることになる。Divākīrtya は背（山頂）なのだ。Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちは両脇（山の両側面）なのだ。Divākīrtya の両側で Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちが用いられる。それゆえ背の両側に両脇がある。最大数の Graha たちが［Soma を］汲まれる。最大数の Śastra が唱えられる。彼らはそうして祭式の中間に結び目を結んでいることになる。緩んで落ちないように。7 つの［Graha］たちが汲まれる。頭にある身体諸機能は 7 つある。彼らは息たちを祭主たちに置いていることになる。あちら側を向いた Pr̥ṣṭha たちが用いられているなら、彼らはそれらによってあの世界に向かって昇っていることになる。彼らがこの世界へ降りて戻らないなら、祭主たちは狂ってしまうか、衰弱してしまうだろう。こちら側を向いた Pr̥ṣṭha たちが用いられているなら、彼らはそれらによってこの世界に降りて戻っていることになる。そしてまたこの世界において彼らはしっかりと立っていることになる。狂わないように。Indra は不安定であったのだ。彼は Prajāpati のもとに駆け寄った。彼は彼に Ekaviṃśatirātra を与えた。彼はそれを取ってきた。それを使って祭った。それから彼はしっかりと立ったのだ。多く祭式を行うものの不安定な者たちは Ekaviṃśatirātra を行うべきである。月は 12 ある。季節は 5 つある。この世界たちは 3 つある。21 番目はあの太陽である。神々の世界たちはこれくらい多くある。彼らは順序に沿ってしっかりと立っていることになる。あの太陽は輝いていなかった。彼は Prajāpati のもとへ駆け寄った。彼は彼にこの Ekaviṃśatirātra を与えた。彼はそれを取ってきた。それを使って祭った。それから彼は輝いたのだ。このように知って Ekaviṃśatirātra を行っている者は輝いていることになる。Ekaviṃśatirātra が用いられる。Ekaviṃśa[-Stoma] (21) は輝きである。彼らは輝きに達していることになる。そしてまた安定に［達している］ことになる。というのも Ekaviṃśa[-Stoma] (21) は安定であるから。2 つの Atirātra が両側で用いられる。Brahman の威光を取り囲むために。

TB 1.2.4: 21 日間の儀礼（≈KS 33.6）

ekaviṁśá eṣá bhavati. / eténa vái devā́ ekaviṁśéna. / ādityám itá uttamáṁ suvargáṃ lokám ā́rohayan. / sá vā́ eṣá itá ekaviṁśáḥ. / tásya dáśāvástād áhāni. / dáśa parástāt. / sá vā́ eṣá virā́jy ubhayátaḥ prátiṣṭhitaḥ. / virā́ji hí vā́ eṣá ubhayátaḥ prátiṣṭhitaḥ. / tásmād antarémáu lokáu yán, / sárveṣu suvargéṣu lokéṣv abhitápann eti. //

この［祭式］は Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）。神々はこの Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）［祭式］によって太

陽をここ（大地）から天界へ昇らせた。そのような例のもの（太陽）はここから 21 番目なのだ。それ（太陽＝Ekaviṁśa-Stoma をもつ日）にはこちらから 10 日があり、あちらから 10 日がある。そのようなこれ（太陽）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っている。というのもこれ（祭式）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っているから。それゆえ［彼は］この 2 つの世界（大地と天界）の間を行き続け、全ての天界において都度都度しっかりと立ち続ける。

devā́ vā́ ādityásya suvargásya lokásya / párāco 'tipādā́d abibhayuḥ. / táṃ chándobhir adṛ̥ṁhan dhṛ̥tyai. / devā́ vā́ ādityásya suvargásya lokásya / ávāco 'vapādā́d abibhayuḥ. / táṃ pañcábhī raśmíbhir údavayan. / tásmād ekaviṁśé 'han páñca divākīrtyā̀ni kriyante. / raśmáyo vái divākīrtyā̀ni. / yé gāyatré, / té gāyatrī́ṣū́ttarayoḥ pávamānayoḥ. // mahā́divākīrtyaṁ hótuḥ pṛ̥ṣṭhám. / vikarṇáṃ brahmasāmá. / bhā́so 'gniṣṭomáḥ. / áthaitā́ni párāṇi. / párair vái devā́ ādityáṁ suvargáṃ lokám apārayan. / yád ápārayan, / tát párāṇāṃ paratvám. / pāráyanty enaṃ párāṇi, / yá eváṃ véda. / áthaitā́ni spárāṇi. / spárair vái devā́ ādityáṁ suvargáṃ lokám aspārayan. / yád áspārayan, / tát spárāṇāṁ sparatvám. / spāráyanty enaṁ spárāṇi, / yá eváṃ véda. // mahā́divākīrtyaṁ hótuḥ pṛ̥ṣṭhám. / vikarṇáṃ brahmasāmá. / bhā́so 'gniṣṭomáḥ. /

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らはそれ（太陽）に向かって 5 本の太陽光線を編み上げた。Divākīrtya［-Sāman］たちは太陽光線たちである。それゆえ Ekaviṁśa-Stoma をもつ日に 5 つの Divākīrtya［-Sāman］が用いられる。2 つの Gāyatra［-Sāman］は Gāyatrī 詩節たちにおいて［歌われ］後半二つの Pavamāna［-Stotra］に属する。 Mahādivākīrtya［-Sāman］は Hotar に属する。Vikarṇa［-Sāman］は Pṛ̥ṣṭha［-Stotra］であり Brahmasāma である。Bhāsa［-Sāman］が Agniṣṭoma［-Stotra］として使用される。

áthaitā́ni párāṇi. / párair vái devā́ ādityáṁ suvargáṃ lokám apārayan. / yád ápārayan, / tát párāṇāṃ paratvám. / pāráyanty enaṃ párāṇi, / yá eváṃ véda. / áthaitā́ni spárāṇi. / spárair vái devā́ ādityáṁ suvargáṃ lokám aspārayan. / yád áspārayan, / tát spárāṇāṁ sparatvám. / spāráyanty enaṁ spárāṇi, / yá eváṃ véda. //

次に例の Para［-Sāman］たち［について］。神々は Para［-Sāman］たちによって Āditya を天界に渡らせた。彼らが渡らせた（apārayan）ということが、Para［-Sāman］たちが Para［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知っているならば、Para［-Sāman］たちは彼（祭主）を天界に渡らせる。次に例の Spara［-Sāman］たち［について］。神々は Spara［-Sāman］たちによって Āditya のために天界を確保した（aspārayan）。彼らが確保させた（asprārayan）ということが Spara［-Sāman］たちが Spara［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知っているならば、Spara［-Sāman］たちが彼（祭主）に天界を確保させる。

上記の記述にみられる特徴は以下のとおりである：

- Ekaviṃśa-Stoma、Divākīrtya、Para-Sāman、Spara-Sāman、Paras-Sāman はこのグループに共通する単語である。
- 神々が太陽の落下を恐れるという話は KS にのみ現れる。
- TS においては 21 夜の間祭式が開催されることが述べられている（21 夜祭 ）。

・ 21 日間の中心の日は、ekaviṃśa-（21 番目あるいは Ekaviṃśa-Stoma を用いる日）と呼ばれる。そして、両側にある 2 つの 10 日によって支えられるという構造になっている。この記述は KS と TB には共通するが、TS においては現れない。

・ KS にのみ Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma が述べられる。

5.4.3 第 3 グループ（MS 4.8.10; KS 30.5; TB 1.2.3）（夏至）

第 3 グループ（MS 4.8.10, KS 30.5, TB 1.2.3）の記述は以下の通りである。

MS Soma 祭章の 1 年 Sattra の要素（MS 4.8.10）

（夏至祭と思われる個所）

yáthā vái śālaiváṁ saṁvatsarás. tásya, yáthā pákṣasī, eváṃ pákṣasī.
yáthā madhyamó vaṁśá, eváṃ divākīrtyàm.
yáthā vā́ idáṁ śā́lāyāḥ pákṣasī madhyamáṁ vaṁśám abhisamāgáchanty, eváṁ vā́ etát saṁva tsarásya pákṣasī divākīrtyàm abhisáṃtanoti. yád eṣá śithiráḥ syā́d, ávaśīryeta.
yáthā madhyamó vaṁśá, eváṃ divākīrtyàm.

一年は小屋と同様である。［小屋に］両翼があるのと同様に、それ（一年）には両翼がある。［小屋にとって］屋根の梁が真ん中であるのと同様に、［1 年にとって］Divākīrtya は［真ん中である］。彼らが小屋の両翼を中心である屋根の梁に結合させるのと同様に、彼は 1 年の両翼を Divākīrtya に接続する。これ（真ん中）が緩んでいたら、［1 年は］壊れてしまうだろう。［小屋にとって］屋根の梁が真ん中であるのと同様に、［1 年にとって］Divākīrtya は［真ん中である］。

yád etásminn áhany eté gráhā gṛhyánté, ’hno draḍhimné ’śithiratvāya.
śukrā́grā etád áhar gráhā bhavanti. traíṣṭubho vaí śukrás. traíṣṭubham etád áhaḥ.
pratyúttabdhyai +sayattvā́ya.[157] sauryó gráho gṛhyáte. sauryáḥ paśúr ā́labhyate.
asā́ ādityá etád áhas. táṁ sākṣā́d ṛdhnoti.

例の日（Divākīrtya の日）に例の Graha たちが汲まれるのは、日が堅固となるためであり、緩まないことのためである[158]。例の日、Śukra（「白く輝くもの」、太陽を示唆）を先頭とする Graha たちが献じられる。Śukra（-Graha あるいは「太陽」）は Triṣṭubh に属するのだ。この日は Triṣṭubh に属するのだ。［それは日が］（1 年の真ん中に）支え留められるためであり、（前後の日々と）拮抗していることのためである（sayattvā́ya）[159]。Sūrya（太陽神）のための Graha が汲まれる。Sūrya のための犠

[157] 訂正した。Ed sayatvā́ya.

[158] KS aśithilatvāya.

[159] sayattvā́ya について、この訂正の根拠を次に述べる。まず、sayatvā́ya という語形を認める場合、saya-tvā́ya という分析が成り立つ。そして、saya-という語形は√sā 「結ぶ binden、結びつける festbinden、縛る fesseln」（EWAia s. v. *SĀ*）から形成されるものと解釈される（例えば、PW において saya は√sā から二次的に解釈された√si からの形成とみなされている）が、ヴェーダ語において√si は想定されず、他に saya-という用例はない。 -a- で終わる行為

牲獣が捕まえ献じられる。例の日はあの太陽である。彼はそれ（太陽）に明らかに到達していることになる。

ṣáḍ gráhā gr̥hyánte. paśúḥ saptamá ā́labhyate. saptá vaí śīrṣán prāṇā́s. asā́ ādityáḥ śíraḥ. śīrṣán vā́ etát prāṇā́n dadhāti.

６つの Graha が献じられる。犠牲獣が 7 番目として献じられる。頭部には 7 つの prāṇa があるのだ[160]。頭部はあの太陽である。彼はこのようにして頭部に［7 つの］prāṇa を置いていることになる。

KS Soma 祭章の 1 年 Sattra の要素（KS 30.5）

（夏至祭と思われる個所）

saṃtatir vā ete grahā. yathā vai śālaivaṁ saṃvatsaro. yathā śālāyāḥ pakṣasī, evaṁ saṃvatsarasya pakṣasī. yathā madhyamo vaṁśa, evaṃ divākīrtyaṃ. yad ete na gr̥hyeran, viṣūcī saṃvatsarasya pakṣasī vyavasraṁseyātām. ārtim ārcheyur, yad ete gr̥hyante. yathā śālāyāḥ pakṣasī madhyamaṃ vaṁśam abhisamāyacchanty, evam evaitat saṃvatsarasya pakṣasī divākīrtyam abhisaṃtanvanti. te sarve saha divākīrtye gr̥hyante. yathā vai madhyamo vaṁśa, evaṃ divākīrtyam. yad vai saubalas syād, avaśīryeta. yad ete na gr̥hyante, draḍhimna evānunaddhyā aśithilatvāya. śukrāgrā etad ahar gr̥hyante. traiṣṭubho vai śukras. traiṣṭubham etad ahaḥ. pratyuttabdhyai +sayatvāya.[161] saurya etad ahaḥ paśur ālabhyate. sauryo graho gr̥hyate. asau vā āditya. etad ahas tam eva pratyakṣam r̥dhnuvanti. ṣaḍ etad ahar atigrāhyā gr̥hyante. paśus saptamas. sapta prāṇās. asā ādityaś. śiraḥ prajānām. sīrṣann eva prāṇān dadhāti. tasmāt sapta śīrṣaṇyāḥ prāṇās.

例の Graha たちは継続（saṃtati-）である。一年は小屋と同様である。［小屋に］両翼があるのと同様に、一年には両翼がある。［小屋にとって］屋根の梁が真ん中であるのと同様に、［1 年にとって］Divākīrtya は［真ん中である］。もし例の［Graha］たちが汲まれなければ、一年の両翼は両方向に向かってばらばらになり、災難に遭うだろう。もし例の［Graha］たちが汲まれれば、小屋の両翼を真ん中の屋根の梁に固定するように、一年の両翼を Divākīrtya[-Sāman]に一体化させ、災難に遭わな

者名詞（あるいは形容詞）に -tvá- を付けて抽象名詞を形成する用例もない。AiG II 1 p. 74 によれば、Saṃhitā 文献と TB にみられる sayatvāya は、sa-yat-tvā́ya（「結合していることのために zum Zweck des Verbundenseins」）というように解釈される。sa-yát- f. は、動詞前接辞 sa-（sam-のゼロ階梯*sm̥-）「一緒に、伴って、同時に」（EWAia s. v. *sám*）と、√yat「並ぶ sich aufstellen、しっかりとした仕方で姿勢をとる in fester Weise eine Stellung einnehmen」（EWAia s. v. *YAT*）から作られる語根複合語（Wurzelkompositum）である。この sa-yát-に、（「≈であること」を意味する）抽象名詞を形成する接辞 -tvá-（語根部分は常に標準階梯になり、高ピッチアクセントは常に -tvá- に置かれる。AiG II 2 711−713 を参照）を付加した結果、sa-yat-tvá-という語形が生まれる。そして、sayattvā́ya は第一義的には「一緒に並んでいることのために」、あるいは、「整列していることのために」という意味であろう。この文脈においては、Divākīrtya の日を中心にして、その前後の日々が互いにバランスを崩さずに拮抗している様が表現されていると思われる。

[160] Cf. 伊澤 [2020].

[161] 訂正した。Ed sayatvāya.

い。それらすべての［Graha］は一緒に Divākīrtya において汲まれる。［小屋にとって］屋根の梁が真ん中であるのと同様に、［1 年にとって］Divākīrtya は［真ん中である］。Saubala が用いられるなら、崩壊してしまうだろう。例の［Graha］が汲まれないのは、堅固となるためであり、縫い合わせられるためであり、緩まないためである。Śukra[-Graha]を先頭とする［Graha］たちが例の日に汲まれる。Śukra[-Graha]は Triṣṭubh に属するものなのだ。例の日（Divākīrtya の日）は Triṣṭubh に属するものなのだ。支え留められるために、拮抗していることのために。Sūrya のための犠牲獣が例の日に捕まえ献じられる。Sūrya のための Graha が汲まれる。太陽はあの［世界］なのだ。彼らは例の日に明らかにそれに到達していることになる。6 つの Atigrāhya たちがこの日に汲まれる。犠牲獣は 7 番目として［捕まえ献じられる］。生体諸機能（prāṇa-）は 7 つ。太陽はあの［世界］。頭（śiras-）は生物たちのものである。彼は頭に生体諸機能を置いていることになる。それゆえ 7 つの頭の生態諸機能がある。

TB 1.2.3: 21 日間の儀礼の真ん中の日に用いる Graha（≈MS 4.8.10; KS 30.5）

sáṃtatir vā́ eté gráhāḥ. / yát páraḥsāmānaḥ, / viṣūvā́n divākīrtyàm. / yáthā śā́lāyai pákṣasī, / evā́m̐ saṃvatsarásya pákṣasī. / yád eté ná gr̥hyéran, / víṣūcī saṃvatsarásya pákṣasī vyávasram̐seyātām. / ā́rtim ā́rcheyuḥ. / yád eté gr̥hyánte, / yáthā śālāyai pákṣasī madhyamáṃ vam̐śám abhí samāyácchati, // evā́m̐ saṃvatsarásya pákṣasī divākīrtyàm abhí sáṃtanvanti. / nā́rtim ā́rchanti. / ekaviṁśám áhar bhavati. / śukrā́grā gráhā gr̥hyante. / práty úttabdhyai +sayattvā́ya.[162] / sauryà etád áhaḥ paśúr ā́labhyate. / sauryò 'tigrāhyò gr̥hyate. / áhar evá rūpéṇa sámardhayanti. / átho, áhna eváiṣá balír hriyate. / saptáitád áhar atigrāhyā̀ gr̥hyante. // saptá vái śīrṣaṇyā̀ḥ prāṇā́ḥ. / asā́v ādityáḥ śíraḥ prajā́nām. / śīrṣánn evá prajā́nāṃ prāṇā́n dadhāti. / tásmāt saptá śīrṣán prāṇā́ḥ. / índro vr̥trā́m̐ hatvā́, / ásurān parābhā́vya, / sá imā́n lokā́n abhyàjayat. / tásyāsáu lokó 'nabhijita āsīt. / táṃ viśvákarmā bhūtvā́bhyajayat. / yád vaiśvakarmaṇó gr̥hyáte, // suvargásya lokásyābhíjityai. / prá vā́ etè 'smā́l lokā́c cyavante, / yé vaiśvakarmaṇáṃ gr̥hṇáte. / ādityáḥ śvó gr̥hyate. / iyáṃ vā́ áditiḥ. / asyā́m evá práti tiṣṭhanti. / anyò'nyo gr̥hyete. / víśvāny evā́nyéna kármāṇi kurvāṇā́ yanti. / asyā́m anyéna prátitiṣṭhanti. / tā́v ā́parārdhāt saṃvatsarásyānyò'nyo gr̥hyete. / tā́v ubháu sahá mahāvraté gr̥hyete. / yajñásyaivā́ntaṃ gatvā́. / ubháyor lokáyoḥ prátitiṣṭhanti. / arkyàm ukthā́m bhavati. / annā́dyasyā́varudhyai. //

Paras-Sāman を［Sāman として］もつ例の Graha たちは継続（saṃtati-）である。Divākīrtya［の日］は中心（viṣūvā́n）である。小屋に両翼があるように、一年には両翼がある。もし例の［Graha］たちが汲まれなければ、一年の両翼は両方向に向かってばらばらになるだろう。彼らは災難に遭うだろう。もし例の［Graha］たちが汲まれれば、小屋の両翼を真ん中の屋根の梁に固定するように、彼らは一年の両翼を Divākīrtya[-Sāman] に対して完全に繋ぐ。彼らは災難に遭わない。［Divākīrtya の日は］Ekaviṁśa[-Stoma] を用いる日として開催される。Śukra[-Graha] を先頭とする Graha が汲まれる。支え留めるために、拮抗していることのために。 Sūrya のための犠牲動物はこの日に捕まえ献じられる。Sūrya のための Atigrāhya[-Graha]が汲まれる。彼らは日を［Sūrya の］姿に合致させていることになる。そしてまた、例のものは日の貢ぎ物として支払われる。この日、7 つの Atigrāhya[-Graha]が汲まれる。

[162] 訂正した。Ed sayatvā́ya.

頭の生体諸機能は 7 つである。諸生物の頭はあの太陽である。彼は諸生物の生体諸機能を頭の上に置く。それゆえ、生体諸機能は頭の上に 7 つある。Indra は Vṛtra を殺し、Asura を倒した後、これら（三つの）世界を勝ち取った。あの世界は彼によって勝ち取られていないものであった。彼はそれを Viśvakarman になってから勝ち取ったのだ。Viśvakarman の[Graha]が汲まれるのは、天界を勝ち取るためである。Viśvakarman の[Graha]を汲む者たちは、この世界から前進する。Aditi の[Graha]は翌日に汲まれる。Aditi はこの［大地］である。彼らはこの［大地］の上にしっかりと立っている。2 つの Graha は交互に汲まれる。彼らは一方の［Graha］によって各々の諸行為を行い続ける。彼らはもう一方の［Graha］によってこの［大地］にしっかりと立つ。その 2 つの Graha は 1 年の後半が始まるまで交互に汲まれる。その 2 つの[Graha]は共に Mahāvrata において汲まれる。Arka に関する Uktha が使用される。食べ物の獲得のために。

以上の記述の特徴は以下のとおりである：

- MS, KS の箇所に関しては、Soma 祭の章の最後に置かれるものである。
- おそらく第 2 グループとは別系統の夏至を示す記述である。というのも、21 日間の祭式という記述がみられないからである。
- Divākīrtya と一年の中心（夏至）とを同置する記述がみられる。
- Śukra（「白く輝く」もの、「太陽」を示唆）を先頭（agra-）とする Graha、「Sūrya のための」（saurya）Graha が献じられる。
- MS, KS にみられない TB の特徴は、明確に Viṣuvant と Divākīrtya が同置される文があり、Paras-Sāman と、Ekaviṃśa[-Stoma]への言及がみられる点である。
- KS と TB は Divākīrtya の日に汲まれる Graha たちのことを saṃtati-（一繋ぎ、継続）と述べている。

5.4.4 春分祭と夏至祭のまとめ

以上、黒 Yajuruveda 文献（MS, KS, TS, TB）の Sattra における春分と夏至と思われる箇所の検討を行った。これらの箇所は 3 つのグループに分けられる：

第 1 グループ（KS 33.4–5, TB 1.2.2.1–4）は、Sattra 祭の章に含まれる箇所であり、春分に関する 9 日間の祭式の記述がある。

第 2 グループ（TS 7.3.10, KS 33.6, TB 1.2.4）は、Sattra 祭の章に含まれる箇所であり、夏至に関する 21 日間からなる祭式の記述がある。

第 3 グループ（MS 4.8.10, KS 30.5, TB 1.2.3）には、夏至に関する祭式の記述があるが、MS, KS の該当箇所はソーマ祭の章の最後に置かれるもので、Sattra 祭の章における夏至に関する祭式の記述とは系統が別であると考えられる。

KS は、Sattra 章の中で 9 日からなる祭式と２１日からなる祭式を記述しており、この２つは順に春分と夏至のことを述べていると考えられる。また、KS は Soma 祭の章においても夏至と思われる記述を残しているが、この箇所の夏至は、saṃtati-（「一繋ぎ」）

と言われている Graha を献じるという記述は共通しているが、全体的には別系統の記述と考えられる。

MS は、Soma 祭の章の最後に、夏至に関する記述をもっている。

TS の Sattra 祭の章は、春分の記述がみられず[163]、夏至に関する記述をもっている。

TB は、MS, KS, TS の記述を前提としている。KS の Sattra 章と同様に春分と夏至の記述を順にならべ、最後に MS と KS のソーマ祭章の夏至と共通した記述を置いている。また、以下のような発見があった。今回扱った Sattra における春分と夏至の記述の中では、直接、「夏至」あるいは「春分」を意味する語彙が確認されなかった。Divākīrtya は強く夏至と関連付けられるが、KS 33.4 の用例は春分の文脈であると考えられ、夏至との関連だけで用いられるとは言えない。Viṣuvant は、後代の天文学文献（Jyotiṣa）では、「春分点・秋分点」の意味で使われるが、検討された箇所では、「春分点・秋分点」の意味では使われておらず、夏至を示唆するものとして使われる。KS では viṣuvant-は冬至を指す言葉としても使われる。Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma は春分に行われる 9 日間の祭式の最初の日と最後の日にそれぞれ使われる。

[163] TS 7.2.7 Dvādaśarātra の 10 日間の Graha 汲みの記述が、春分祭と関係している可能性はある。

6　結論

以上で、黒 Yajurveda 散文における Sattra 章の記述に基づいて、様々な問題を考察した。以下で、それぞれの節で考察したことをまとめ、原初の Sattra の姿がどのようなものだったのか、Sattra 章において黒 YV 内での祭式思想の発展・展開がどのように起こっていったのかを述べていきたい。

「2 KS の Sattra 章の記述の構成」では、KS における Sattra 章の概観および個別の儀礼に関する記述についてまとめ、その内容から推測されることについて考察を行った。

もっとも顕著な特徴として、1 年かけて行われる祭式が、1 年の開始から終了まで、時系列順に述べられているという点が挙げられる。KS の Sattra 章は、いわゆる「12 日間以上からなる Soma 祭」である様々な諸 Sattra を記述するための章ではなく、左右対称的な 2 つの半年間からなる、たった一つの 1 年間の Sattra を、1 年の開始から順に 1 年の終わりまでを記述したものであることがわかる。途中に春分や夏至における祭日について述べたり、一年の後半の最後に Dvādaśāha が行われるという記述からも、1 年を一つの儀礼サイクルとしていることが理解される。

Dvādaśāha についての記述（KS 33.8−34.13）は KS の Sattra 章の最後に置かれる最も大きなセクションである。実際の儀礼行為は前半部分（KS 33.8−34.5）に置かれる Ekādaśinī や競合者のいる Soma 祭や Mahāvrata などである。後半部分（KS 34.6−34.13）は、Prajāpati と Dvādaśa の神話や、Dvādaśāha の隠された意義などである。例えば、Dvādaśāha が Dīkṣā、Upasad、Soma 搾りという Soma 祭の基本的な進行になぞらえられたり、Dvādaśāha における潔斎者が食人行為や人間犠牲の対象であることが示唆されたりすることが述べられている。

Ekādaśinī は、Dvādaśāha の内の最初の 11 日間に行われる動物犠牲祭である。1 日 1 頭ずつ犠牲動物が供えられる大きな祭式であったものと推測される。さらに、おそらく Dvādaśāha の最後の日である 12 日目にも動物犠牲が行われていたことが推測される。隠された 12 日目の犠牲動物は、象徴的ではあるが、人間であったようであり、Tvaṣṭar 神のための動物犠牲がその代替手段であった可能性がある。これは、Dvādaśāha が人間犠牲を裏のテーマとしてもっていたことを示している。

Mahāvrata 祭は Dvādaśāha の 11 日目に行われた大規模な祭りであったと思われる。その際にいろいろな種類の Graha 汲みが行われていた。それから、祭官たちによる象徴的な儀礼行為や Sāman の詠唱などがあった。それ以外にも、儀礼とは言い難いような、大騒ぎのような行為が行われていた。Sattrin たちの歌を非難したり褒めたり、Śūdra と Ārya が毛皮の取り合いをしたり、Brahmacārin と Puṃścalī が喧嘩したり、太鼓を叩いたり、笛を吹いたり、水瓶をもつ女たちが歌いながら踊ったりする記述がある。

Graha を汲む行為（Soma 汁を杯に汲む行為）は、9 日間の儀礼（春分祭）と Mahāvrata 祭の記述にのみ現れる。おそらく、Sattra の全期間を通じて Soma 搾りを行っていたのではなく、このような特別な儀礼や祭式の期間にのみ Soma 搾りが行われていた可能性がある。では、そのほかの日は何をしているのかと言うと、Stoma などを詠唱

していることが記述されている。KS の Sattra 章の記述の範囲内では、必ずしも Stoma の詠唱とともに Soma 搾りが行われていたとは言えないことがわかる。

「3 TS の Sattra 章の記述の構成」では、TS における Sattra 章の概観および個別の儀礼に関する記述についてまとめ、その内容から推測されることについて考察を行った。

TS の Sattra 章は、日数の異なる個々の Sattra を、数詞＋-rātra-（「夜」）という名称で呼称し、日数の少ない順から多い順へと並べて、記述するという傾向がみられる。この枠組みにおいては、例えば Dvirātra（2 夜祭）も 1 年 Sattra も、連なりのない別々の異なる Sattra として列挙されているものとして理解される。

あるいはまた、Dvirātra から Ekānnapañcāśa（49 夜祭）までを 1 つの連続した Sattra であると仮定すると、その合計日数は 381 日となり、1 年間の日数（太陰暦の場合 354 日）を多少超過したものとなり、これはほぼ太陰暦における 13 か月分（29.5 日×13 か月=383.5 日）に対応するので、このように解釈することができる可能性もある。

また、全体的な傾向として、Tryaha や Ṣaḍaha などの、3 あるいは 6 の日からなるサイクルを、特に大きな日数からなる Sattra の構造を記述する際に多用している。Tryaha は、1 日目には Jyotis、2 日目には Go、3 日目には Āyus と呼ばれる特徴的な Stoma が用いられる。Ṣaḍaha は Tryaha を 2 つ組み合わせたものであると思われる。そして、Tryaha の記述回数は Ṣaḍaha の記述回数より断然多いので、TS の Sattra 章では 6 よりはむしろ 3 という数が強調される傾向にあると言えるだろう。

3 あるいは 3 の倍数が強調されることは、Trirātra、Navarātra、Dvādaśarātra あるいは Dvādaśāha などの 3 の倍数の日数からなる Sattra において、実際の儀礼行為に関する記述よりは、その Sattra にまつわる伝説や神話や哲学などの記述が多いことからも推察される。それらの Sattra の記述内容においても 3 という数が強調されていることがわかる。例えば、Trirātra の 1000 頭の雌牛に関する記述や Dvādaśarātra の Graha の順序に関する記述では、10 の倍数を 3 で割るということが意図されている。

他にも個別の Sattra において特徴ある要素がみつかる。

Ṣaḍrātra において Sārasvatasattra と呼ばれる、Sarasvatī 川に向かって巡礼することを目的とした Sattra のことが述べられている。また、Ṣaḍrātra は Devasattra（「神々の Sattra」）と称される。Ṣaḍrātra とは別に Dvādaśāha と Trayastriṃśāha も Devasattra と称される。これら 3 者に共通するのは、いずれも TS よりも前からよく知られていた Sattra であることかもしれない。というのも、まず Sārasvatasattra は、より古い時代において Indo-Ārya 人にとっての故郷であった Sarasvatī 川に関するものであるし、Dvādaśāha や Trayastriṃśāha は TS の仕組みでは異例である数詞＋-aha-（「日」）という名称をもつ Sattra である。おそらくは、-aha-で終わる Sattra は、TS の Sattra 章の編纂以前から存在した Sattra の名残ではないかと考えられる。Devasattra という名称は、「神々の時代から知られている Sattra」という意味を示唆する。

Pañcarātra、Saptarātra、Aṣṭarātra には、「Mahāvrata をもつ」という共通した表現がある。おそらくこれは 1 年 Sattra の最後に行われる Mahāvrata 祭とは異なる性格をもつものであると推測される。その意味について考察するとすれば、その表現の後に「食べ物を食

べるために」という表現が共通していることから、おそらくはこれら Sattra に食事制限あるいは断食の要素が含まれていることが推測される。

TS における 1 年 Sattra は、Śrautasūtra におけるように Gavāmayana という名称がつけられない。「雌牛たちが Sattra を行った」という神話的伝説が述べられていることと、TS が Sattra を個別のものとして分けて並べるという編纂方針を取ったことから、ここから発して Śrautasūtra では Gavāmayana という名称で呼ばれることになったのであろうと推測される。

TS における 1 年 Sattra は、開始時期と終了時期について述べる箇所がある。「Ekāṣṭakā において潔斎するべきである」、つまり、Ekāṣṭakā（1 年最後の月である Māgha 月の黒半月の 8 日目、おそらく冬至にあたる）においておそらくは Dvādaśāha を行い、1 年 Sattra を締めくくるということが意図されている。つまり、冬至が 1 年 Sattra を行う上での区切りになっていることがわかる。また、1 年の始まりは、Phalgunī の満月の日か、Citrā の満月の日かということが述べられている。これはおそらく過去には Phalgunī の満月の日が年初とされ、現在、つまり TS の 1 年 Sattra の編纂の時期には Citrā の満月の日が年初とされていたことが推測される。

Daśarātra という記述が 2 か所にみられる。1 つは、個別の Sattra として Navarātra と Ekādaśarātra の間に記述されるものであり、もう 1 つは 1 年 Sattra の最後に行われる Mahāvrata の前に記述されるものである。Dvādaśarātra において 10 日間のことが強調して語られることからも推測されるように、おそらくは KS で記述されている 1 年 Sattra の最後の Dvādaśāha と同様に、11 日目の Mahāvrata 祭の前の 10 日間のことを Daśarātra と呼んでいるのではないかと思われる。

KS と TS で共通しているのは、1 年の最後に 12 日間ないし 10 日間の儀礼をおこなっていることである。KS では Dvādaśāha として記述されており、TS では Daśarātra として記述されている。そしてこのことから、TS において 1 年の締めくくりの祭式を行っていることがわかる。

「4 KS の記述と TS の記述の対応」では、KS の Sattra 章と TS の Sattra 章の記述内容の対応を示し、その比較から推測されることについてまとめた。以下に比較と考察を列挙する。

・1 年 Sattra の枠組みについて（基本的な Stoma や Sāman、Ṣaḍaha の使用など）は、KS と TS に対応がみられる。

・雌牛たちの Sattra（KS 33.1≈TS 7.5.1(1); 7.5.2）は、KS と TS に共通している。TS においては TS 7.5.1(1)と 7.5.2 の間の箇所（TS 7.5.1(2); (3)）を挟んで両側に配置されている。

・1 年 Sattra の導入は KS においては雌牛たちの Sattra（KS 33.1）から始まるが、TS においては雌牛たちの Sattra（TS 7.5.1(1); 7.5.2）の前に 1 年 Sattra に用いられる祭式次第や要素の紹介、説明から入る（TS 7.4.10−11）。

・KS 33.4 の 9 日間の儀礼（春分祭）は TS にはない。

・KS の 21 日間の儀礼（夏至祭）は、TS 7.3.10 (Ekaviṃśatirātra)と TS 7.5.7 (Gavāmayana の中の Daśarātra の記述)に対応する。開放日（Soma 搾りを行わない日）についての議論

は、KS では 21 日間の儀礼に関して言われているものであるが、TS 7.5.7 では、Daśarātra に関して言われているものである。
・1 年の後半に関する記述は KS にはあるが、TS にはない。
・KS における Dvādaśāha に含まれる Ekādaśinī は、TS に対応がない。ただし、Mahāvrata における Graha 汲み（KS 33.8(7)、TS 7.5.4）、及び、競争相手が同時に Soma 祭を開催している場合に関する記述は KS と TS で共通している。
・Mahāvrata 祭の記述は少しの記述順序と内容の違いを除けばほぼ一致する。1 年 Sattra の終わりに行われる Mahāvrata 祭は、KS の場合、Dvādaśāha の中の Mahāvrata 祭として記述されていて、TS の場合、Daśarātra の後の Mahāvrata 祭として記述されている。
・KS と TS の両方において Mahāvrata 祭が最後の具体的な祭式行為として記述されている。KS の場合は、その後に Dvādaśāha の象徴性が記述されるが、TS には対応がない。
・KS にみられる Dvādaśāha に関する Prajāpati の神話の大部分は TS における対応がない。
・KS（KS 34.6(1); 34.7(3); 34.12(3) ）では、Dvādaśāha を Dīkṣā、Upasad、Soma 搾りという Soma 祭に共通する要素になぞらえる議論がみられる。TS には二か所（TS 7.2.10(2); TS 7.4.9）ある。
・KS では、Dvādaśāha の象徴性に関する議論の中で人間犠牲的あるいは人肉食な要素（KS 34.8）がみられるが、これは TS では見当たらない。TB でもこれについては見当たらない。ただし、人肉食に対する批判が TS 7.2.10(2) にみられる。
・KS 34.9(3)において様々な日数（12, 13, 15, 17, 21, 24, 27, 30, 33, 44, 48, 無限）の潔斎の記述があるが、これは TS の Dvādaśarātra 以降の一連の儀礼（Dvādaśarātra から Ekānnapañcāśarātra）の記述の原型の可能性がある。

「2.4 9 日間の儀礼（春分祭）と 21 日間の儀礼（夏至祭）の考察」では、夏至と春分の儀礼に関する記述と思われる、MS、KS、TS、TB の平行箇所を比較し、考察を行った。この考察の結果、 9 日間の儀礼は春分に行われるものであり、21 日間の儀礼は夏至に行われるものであるという結論へ至った。

検討した箇所については、以下のように 3 つのグループに分け、記述の特徴を述べた。

第 1 グループ（KS 33.4–5, TB 1.2.2.1–4）は、Sattra 祭の章に含まれる箇所であり、春分に関する 9 日間の祭式の記述がある。

第 2 グループ（TS 7.3.10, KS 33.6, TB 1.2.4）は、Sattra 祭の章に含まれる箇所であり、夏至に関する 21 日間からなる祭式の記述がある。

第 3 グループ（MS 4.8.10, KS 30.5, TB 1.2.3）には、夏至に関する祭式の記述があるが、MS, KS の該当箇所はソーマ祭の章の最後に置かれるもので、Sattra 祭の章における夏至に関する祭式の記述とは系統が別であると考えられる。

KS は、Sattra 章の中で 9 日からなる祭式と２１日からなる祭式を記述しており、この２つは順に春分と夏至のことを述べていると考えられる。また、KS は Soma 祭の章においても夏至と思われる記述を残しているが、この箇所の夏至は、saṃtati-（「一繋ぎ」）と言われている Graha を献じるという記述は共通しているが、全体的には別系統の記述と考えられる。

MS は、Soma 祭の章の最後に、夏至に関する記述をもっている。

TS の Sattra 祭の章は、春分祭の記述がみられず、夏至祭に関する記述をもっている。

TB は、MS, KS, TS の記述を前提としている。KS の Sattra 章と同様に春分祭と夏至祭の記述を順にならべ、最後に MS と KS のソーマ祭章の夏至祭と共通した記述を置いている。

また、以下のような発見があった。今回扱った Sattra における春分と夏至の記述の中では、直接、「夏至」あるいは「春分」を意味する語彙が確認されなかった。Divākīrtya は強く夏至と関連付けられるが、KS 33.4 の用例は春分の文脈であると考えられ、夏至との関連だけで用いられるとは言えない。Viṣuvant は、後代の天文学文献（Jyotiṣa）では、「春分点・秋分点」の意味で使われるが、検討された箇所では、「春分点・秋分点」の意味では使われておらず、夏至を示唆するものとして使われる。KS では viṣuvant-は冬至を指す言葉としても使われる。Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma は春分に行われる 9 日間の祭式の最初の日と最後の日にそれぞれ使われる。

本論のまとめは以上である。本論の中で最も重要な発見を述べるとすれば、それは、KS の Sattra 章と TS の Sattra 章の記述の枠組みには大きな隔たりがあるということである。すなわち、KS の Sattra 章は全体の記述を 1 年 Sattra のみに捧げているが、TS の Sattra 章は 1 年 Sattra を個別の様々な Sattra の最も長いヴァージョンとして述べられているかのように映る。

TS は人間犠牲的な記述を前提にして述べていると思われる。KS における人間犠牲を示唆する記述は TS では非難されているからである。KS にみられるような Dvādaśāha における人間犠牲を TS が批判していることからわかるように、TS がこの人間犠牲に関する議論をより発展しているように思われる。ここから推測できるのは、KS の Sattra 章が TS より古い形態のものに属することである。

また、1 年 Sattra の 1 年周期性を顕著に示すと思われる春分祭（9 日祭）と夏至祭（21 日祭）について、KS では詳しく記述されているが、TS では明確な記述がない。春分祭と夏至祭の二つに関しては、Taittirīya 派は、おそらく MS の Soma 章及び KS の Sattra 章と Soma 章からの記述を基に TB によってその記述を補完していると思われる。

Dvādaśāha は、KS では明らかに 1 年の最後に行われる儀礼として述べられる。TS では Dvādaśāha を否定し、Daśarātra を 1 年の締めくくりの儀礼としている。また、KS における Dvādaśāha も、TS における Daśarātra も、Mahāvrata の記述をもっている。そして、Mahāvrata の記述は KS と TS 両者の記述を比較してみても非常に似通っている。このことから、TS は 1 年 Sattra に対する改革を施したが、同時に 1 年 Sattra の伝統も保持していたものと推測される。

KS の Sattra 章の記述の枠組みを大きく変形させた TS の Sattra 章の記述の枠組みが、最終的に ĀpŚS の第 21 章から第 23 章でみられるような、Dvādaśāha、Ekāha、Sattra という順序でまとめられることになった経緯について、その発展段階の間に、JB や PB にあると思われる。したがって、それらを考察することで、その発展を明らかにすることができると思われる。

なぜこのような変革を TS が行ったのかについて暫定的な意見を述べる。おそらくは、TS を編纂した集団が KS を編纂した集団よりは Indo-Ārya 人の文明の中心地にいたこと

によって、祭式内容の定型化や、人間犠牲などの野蛮で残虐な要素を示唆するものを排除しなければならないという必要に駆られていた可能性がある。TS の編纂の時期は KS より後であるので、その時代の変化を反映しているということも考えられる。

Sattra と Soma 祭の関係について述べる。Sattra は Soma 祭の一種であると一般的には（Śrauta 祭式に基づいて）語られる。しかし、KS では、Soma 祭（Graha 汲み）が行われるのは、9 日間の儀礼（春分祭）と Mahāvrata 祭（1 年 Sattra の締めくくりの祭り）のみである。Soma 祭以外の日は基本的に Stoma などの詠唱のことが述べられているだけである。ここから推測されるのは、KS の Sattra 章では、１年中行われていると考えられるのは Stoma の詠唱であり、Graha 汲みは特別な日にのみ行われたということである。そして、Graha 汲みが行われる Mahāvrata を含む Dvādaśāha が Sattra の代表的なものとしてみなされるようになったと考えられる。その Dvādaśāha が Soma 祭に分類されるので、Sattra 全体が Soma 祭に分類されるようになったのであろう。以上のことから、現存する最古の Sattra 章における Sattra は、Falk [1985] が Sattra の起源であると推測した RV の詩を生み出す会合というよりは、すでに確立された RV の詩節を Stoma として暗唱しながら 1 年間の中で重要な時節に Soma 祭を含んだ会合であることが推測される。

7　原文と訳注

KS Sattra 章（KS 33−34）

KS 33.1: 雌牛の Sattra（≈ TS 7.5.1–2）

(33.1:27.1–10) gāvo vai sattram āsata, ⁺śṛ̥ṅgāṇi ⁺siṣāsantīs.[164] tāsāṃ daśame māsi śṛ̥ṅgāṇy ajāyanta. tā abruvann, "arātsma=. ⁺uttiṣṭhāma=. ava[165] taṃ kāmam ⁺arutsmahi,[166] yasmai kāmāya nyasadāma=" iti. tāsām u tvā abruvann ardhā vā ⁺yāvatīr[167] vā=. "āsāmahā eva dvādaśau māsau. saṃvatsaraṁ sampādyottiṣṭhāma=" ity. uttiṣṭhantīr u tvā abruvan, "neva=. asmāsu śraddhābhūd" iti. tāsāṃ,[168] yā dvādaśau ⁺māsā[169] āsata, tāsāṁ ⁺śṛ̥ṅgāṇi[170] prāvartanta, śraddhayā vāśraddhayā vā. tā imā, yās tūparās. tasmād dvādaśa māsās[171] tūparāḥ pretvarīś[172] caranti, daśa ⁺śṛ̥ṅgiṇīr. ubhayīr ⁺vāva[173] tā ārdhnuvan, yāś ⁺śṛ̥ṅgāṇy ⁺asanvan, yāś corjam avārundhata=. ⁺ṛ̥dhnuvanti[174] daśasu māssūttiṣṭhanta, ṛ̥dhnuvanti dvādaśasu, ya evaṃ vidus. tad etad ṛ̥ddham ayanaṃ. tasmād etena yanti. padena vā etad yanti. vindati[175] ha khalu vai padena yaṁs.[176] tasmād etad gosani. //

---

[164] そのように Schroeder は訂正している。Ch. śṛ̥ṅgāni miṣā° [Schr 27 n. 1].

[165] そのように Schroeder は訂正している。Ch uttiṣṭhamāva [Schr 27 n. 2].

[166] そのように Schroeder は訂正している。Ch kāmasarutmahi あるいは kāmamarutsahi [Schr p. 27 n. 3].

[167] そのように Schroeder は訂正している。Ch. yāvatī [Schr 27 n. 4].

[168] 同じ文に tāsām が二度繰り返されている。

[169] māsā は Ch にはなく、Schroeder により補われている。[Schr 27 n. 5].

[170] そのように Schroeder は訂正している。Ch śṛ̥ṅgāni [Schr 27 n. 6].

[171] Mittwede [1989: 140] に従って、 Caland による māsas への訂正を必要なしと判断した。

[172] pretvarī-は、動詞 pra-ay（「進む」）から来ている（pra-i-t-var-ī-）。MS 4.1.1:2.7 に pretvarīpā́- という語が現れる 。-varī-は接辞-van-の女性形である（AiG II 2 p. 902）。-van-/-varī-は行為者名詞を作る接辞であり、短い母音で終わる動詞語根の後に-t-が付け加えられる（AiG II 2 p. 894）。例えば、-bhṛ̥tvan- 'tragend'などがある。Mittwede は、Caland [1927b: 253] と Hoffmann [1982: 76] に倣い、prertvarī-への訂正を行っているが、-van-/-varī-は通常動詞語根に付けられる接辞であるから、動詞語根 ar-（「動かす」EWAia s. v. AR[1]）の重複現在語幹 īr-[te] （「動く」）に-van-/-varī-が付けられるとすれば、それは異例なことである。さらに、īr の後に-t-が挿入されるということも異例なことである（cf. AiG II 2 p. 896 „mit abnormem *t*“）。Mahābhāṣya において、語形 prertvarī-が在証されている（Patañjali on vārttika 1 on Pāṇ 4.1.7）が、このことは伝承の比較的早い段階において pretvarī-から prertvarī-への変化が起きたことを示唆する。西村 [2006: 68] は prertvarī-として解釈している。

[173] そのように Schroeder は訂正している。Ch śṛ̥ṅgināīr ubhayīr vāvā [Schr 27 n. 7].

[174] そのように Schroeder は訂正している。Ch śṛ̥ṅgārāyasannnanyāścorjamavāruṃdhatabruvaṃti [Schr 27 n. 8].

[175] そのように Schroeder は訂正している。Ch vindaṃti; TS 7.5.2.2 [Schr 27 n. 9].

[176] Cf. TS 7.5.2.2 padéna yán [Schr 27 n. 10].

雌牛たちは Sattra を座った（＝Sattra を行った）[177]、角を獲得したがっていたから[178]。彼女たちには 10 ヶ月目に角が生えた。彼女たちは言った、「私たちは（今）成功した[179]、私たちは［Sattra を］終えよう。私たちがその望みのために［Sattra の場に］座り込んだところの望みを私たちは（今）獲得した[180]」と。しかし、彼女たちの半分かそれくらいが言った、「私たちは 11 番目と 12 番目の月の間（dvādaśau māsau）[181]［Sattra を］行おう。一年を完全に数え上げてから［Sattra から］立ち上がろう（＝Sattra を終えよう）」と。しかし、立ち上がりつつある［雌牛］たちは言った、「もう［私たちは座るつもりは］ない[182]。私たちには信心が（今）生じた」と。11 番目と 12 番目の月の間（Sattra を）座った（行った）彼女たち（雌牛）には、彼女たちには角が見えてきた（prāvartanta）、信心によってか、信心以外によってか。そのようなこの［雌牛たち］が無角牛（tūpara-）[183]である。それゆえ無角牛たちは 12 ヶ月の間前進して（pretvarīs）歩く、有角牛たちは 10［ヶ月］の間［前進して歩く］。角を獲得した［雌牛たち］（有角牛）と栄養を獲得した［雌牛たち］（無角牛）の両方が成功した。このように知っていれば、10 ヶ月後に（Sattra から）立ち上がる（＝Sattra を終える）者たちは成功し、12 ヶ月後に［（Sattra から）立ち上がる（＝Sattra を終える）］者たちは成功することになる。そのようなこの成功した歩みがある。それゆえ彼らはこれを通って行く。彼らは足跡を通ってこれを行く。足跡を通って行く者たちは（牛を）発見する。それゆえこのような牛の獲得がある。

KS 33.2: 1 年 Sattra において使用される祭式次第の導入と説明（≈TS 7.4.10; 7.4.11; 7.5.1; TB 1.2.2.5）

以下において、最初に述べられるのは、1 年 Sattra 全体において使用されることになる祭式次第（Yajñakratu）と諸々の要素についての導入と説明である。その後に、Ṣaḍaha と呼ばれる 6 日間という一定の期間からなるサイクルの基本構造についての説明が述べ

---

[177] 文字通りには「彼らは Sattra を座った」（sattram āsata）だが、Sattra 儀礼の文脈では「Sattra を行う」という定型句として理解される。PW s. v. sattra.

[178] siṣāsantīs: san[i] ‘gewinnen, erlangen’ desid. part. nom. pl. f., cf. EWAia s.v. *SAN*[I]; Gotō [2013: 125f].

[179] arātsma: rādh, s-aor., cf. Narten [1964: 222f].

[180] arutsmahi: rudh, s-aor., cf. Narten [1964: 228].

[181] Delbrück [1888: 98] によれば、dvādaśau māsau（「11 月と 12 月））は序数の場合の「省略の双数（elliptischer Dual）」の一種である。Cf. TS 7.4.11.3; 5.2.1; KS 33.3:29.5

[182] Schrapel [1970: 33–34] は na+iva の用例を集めて、「もはや...ない」 (“nicht mehr", “nicht weiter")と訳している。

[183] tūpara: 全く角がないわけではなく，矮小な角しか生えていないということか．文脈的に「これら雌牛には角が生じた」と言っていることから，その雌牛たちに全く角がないというのは合わない．

られる。TS では gavām ayana の箇所（TS 7.4.10）でこのことが述べられる。TS では gavām ayana の記述の前にも ṣaḍaha は用いられるが、それぞれの日数の祭式を構成するためのものとして述べられている。一方、KS は Ṣaḍaha の基本構造の説明から記述が始まる。

KS 33.2(1):): Atirātra を最初に行うことで Agniṣṭoma, Ukthya, Atirātra を順番に行っていることになる（≈TS 7.4.10(1)）184

(33.2:27.12–14) "atirātraḥ paramo yajñakratūnām" ity āhur brahmavādinaḥ, "kasmāt taṃ prathamam upayanti=" iti. yad vā atirātram upayanty, agniṣṭomaṃ prathamam upayanty, athokthyam,[185] atha ṣoḍaśinam, athātirātraṃ. yathāpūrvam eva yajñakratūn upetyaitān ālabhya parigṛhya somaṃ pibanta āsate.

「祭式次第[186]の中で Atirātra は最後のもの（parama-）である」と Brahman について議論する者たちは言う、「何故彼らはそれ（Atirātra）を最初のものとして執り行う[187]のか」と。彼らが Atirātra を執り行うということは[188]、彼らは Agniṣṭoma を最初のものとして執り行い、次に Ukthya を、次に Ṣoḍaśin を、次に Atirātra を［執り行う、ということである］[189]。彼らは先行のものから順に[190]祭式次第たちを執り行って、これらをつかみ取って、取り囲んでから、Soma を飲みながら座っていることになる。

---

[184] Soma 祭における祭式次第は、Stotra を朝、昼、晩の Soma 搾りに分けて、用いられる Stoma（合計詩節数）Stotra や Stoma の構成は基本的に変えずに Agniṣṭoma、Ukthya、Ṣoḍaśin、Atirātra という順序で行われていく。Atirātra は祭式次第の中で最も多くの詩節を用いるものなので、最初に Atirātra を行うと、Atirātra より合計詩節数が少ない Agniṣṭoma, Ukthya、Ṣoḍaśin も Atirātra の中に含まれることになる。

[185] そのように Schroeder は訂正している。Ch °thottham° [Schr 27 n. 11].

[186] Yajñakratu（祭式次第）とは祭式形式（Agniṣṭoma, Ukthya, Ṣoḍaśin, Atirātra）の総称であると考えられる。

[187] upa-ay の文字通りの意味は、「...に行く; (友好的・敵対的に)接近する(acc.)、...に近づいていく、ある場所に行く、到着する; 近づく、乗り込む」(‘hinzugehen; an Jmd (acc.) herankommen (freundlich und feindlich), hinzutreten zu, an einen Ort hingehen, gelangen zu; sich nähern, gerathen in’)だが、Sattra の文脈では「（祭式行為・祭式を）始める、挙行する、引き受ける、専念する」(‘antreten, begehen (eine Handlung, Feier u. s. w.), unternehmen, sich widmen’) という意味で用いられることがある。PW s.v. i + upa.

[188]主題化（Topikalisierung）としての機能をもつ yad 節（`was angeht, daß …’「...ということについては」）が使われていると思われる。Cf. Durkin [1991: 205ff.]; Amano [2009: 113ff.].

[189] Atirātra を行うということは、一日の中で Agniṣṭoma, Ukthya, Ṣoḍaśin, Atirātra という祭式次第を順番に行っていることになるという意味であろう。

[190] 「Agniṣṭoma, Ukthya, Ṣoḍaśin, Atirātra の順に」という意味であろう。

KS 33.2(2): 最初の Atirātra を Jyotiṣṭoma 形式で用いる（≈TS 7.4.10(2)）

(33.2:27.15–19) jyotiṣṭomaṃ prathamam upayanti. jyotiṣṭomo vai stomānāṃ mukhaṃ. mukhata eva tat stomān prayuñjate. virājaṃ jyotiṣṭomo ’bhisaṃpanna. ekayā gaur atirikta. ekayāyur ūnas.[191] te saṁstutā virājam abhisaṃpadyante. dve ca rcā atiricyete. svargo vai loko virāḍ. dvipādo yajamānās. svarga eva tal loke virāji dvipādo yajamānāḥ pratitiṣṭhanti. //

彼らは Jyotiṣṭoma[192]形式で最初の［Atirātra］を執り行う。Jyotis という Stoma は Stoma たちの先頭なのだ。彼らはそうすることで先頭から Stoma たちを起動していることになる。Virāj[193]に（つまり 10 の倍数になるように）Jyotiṣṭoma［の詩節数］は合計されている[194]。Go［-Stoma］（の合計詩節数）[195]は［Jyotiṣṭoma（の合計詩節数）より］1［詩節］分過剰である。Āyus［-Stoma］（の合計詩節数）[196]は（Jyotiṣṭoma（の合計詩節数）より）1［詩節］分不足している。それら（Jyotiṣṭoma、Go、Āyus）は共に歌われたときに Virāj になるように合計される。そして、（Go の合計詩節数は Āyus の合計詩節数より）2 詩節が過剰である。Virāj は天界なのだ。祭主たちは二本足の者たちなのだ。そうすることによって天界において、Virāj において、二本足の祭主たちはしっかりと立っていることになる。

KS 33.2(3): 2 つの Rathantara-Sāman と Sobhari の Brahma-Sāma（≈ TS 7.4.10(3)）

(33.2:27.20–28.3) rathantaraṃ pṛṣṭhaṃ bhavati=. iyaṃ vai pṛthivī rathantaram. imām eva tad ālabhyāsate. "rathantaraṃ divā bhavati, rathantaraṃ naktam" ity āhur brahmavādinaḥ "kena tad

---

[191] そのように Schroeder は訂正している。Ch ekayāyuktanas; cf KS 33.3; TS 7.4.10.2 [Schr 27 n. 12].

[192] Jyotiṣṭoma とは、Jyotis と呼ばれる Stoma を用いる祭式次第（Yajñakratu）の一種である。もしくは、Jyotis という Stoma のことを指す。

[193] Virāj は、1 pāda（詩節の 4 分の 1）10 音節からなる韻律を指すが、10 の倍数一般のことを指すか、２音節が欠けている韻律一般のことも指すことがある。Cf. MW s. v. virāj

[194] 参考として、Parpola [1969: 13] によると、Agniṣṭoma（祭式次第）において用いられる総詩節数は 190 であり、10 の倍数となっている。Ukthya の詩節数は 253、Ṣoḍaśin の総詩節数は 274、Atirātra の総詩節数は 463、Aptoryāma の総詩節数は 525 である。しかし、Jyotis-Stoma、Go-Stoma、Āyus-Stoma（いずれも祭式次第の名前としてのもの）の総詩節数については不明である。ただし、Jyotis、Go、Āyus と呼ばれる Stoma（祭式次第全体ではなく 1 回分の Stoma の意）については、本論 3.1 を参照せよ。

[195] Go は、ここでは、Go という Stoma を用いる祭式次第を指している。また、Go という Stoma を指す場合もある。

[196] Āyus は、ここでは、Āyus という Stoma を用いる祭式次第を指している。また、Āyus という Stoma を指す場合もある。

ajāmi=" iti. saubharaṃ tr̥tīyasavane brahmasāmaṃ bṛhad bhavati. tan madhyato dadhāti. rathantarasya vidhr̥tyai. +tenājāmy.[197]

（Atirātra において）Rathantara［-Sāman］が Pr̥ṣṭha（最高潮）として用いられる。Rathantara はこの大地なのだ。彼らはそうすることによってこの［大地］をつかみ取って座っていることになる。「Rathantara が日中に用いられる、Rathantara が夜中に用いられる」と Brahman を議論する者たちは言っている、「何によってそれを近親相姦がないもの（ajāmi）にするのか」と。第三の Soma 搾りにおいて Sobhari[198]に由来する Brahma-Sāma[199]が Bṛhat［-Sāman］として（代わりに) 用いられる。彼はそれを真ん中に置く。Rathantara を分けるために。それによって近親相姦がないものに［する］。

以下において、1 年 sattra の開始の日の記述が始まる。

KS 33.2(4): Caturviṁśa-Stoma を用いる日は 1 年 Sattra の導入の日（TS 7.5.1(3) ）

(33.2:28.3–9) +atirātrāc[200] caturviṁśam ahar upayanti. caturviṁśatis saṃvatsarasyārdhamāsā. ardhamāsaśas saṃvatsara āpyate. ’rdhamāsaśa eva tat saṃvatsaram āpnuvanti. tasya ṣaṣṭiś ca trīṇi ca śatāni stotrīyāṣ. ṣaṣṭiś ca vai trīṇi ca śatāni saṃvatsarasyāhāny. ahaśśas saṃvatsara āpyate. ’haśśa eva tat saṃvatsaram āpnuvanty. ukthyo[201] bhavati. paśavo vā ukthāni.[202] paśūn evāvarundhate. bṛhat pr̥ṣṭhaṃ bhavati. svargo vai loko bṛhat. svargam eva tena lokam āpnuvanti. trayastriṁśo nāma sāma mādhyandine pavamāne bhavati. trayastriṁśad devās. tad devān āpnuvanty.

彼らは Atirātra から（つまり、Atirātra を始めとして）Caturviṁśa[-Stoma] (24)をもつ日を執り行う[203]。一年には 24 個の半月がある。半月ごとに一年が満たされていく。彼らはそうすることによって半月ごとに一年を満たしていることになる。それ（Caturviṁśa-

---

[197] そのように Schroeder は訂正している。Ch tadaṭāmīti [Schr 28 n. 1].

[198] Sobhari は、Kāṇva 家に属する詩人で、RV 8.19; 8.103 の作者であると考えられている。Macdonell [1912: 474] 参照。

[199] brahmasāma-: 複合語（brahma-sām-á-, n. ‘brahman という sāman’）。Cf. Pāṇ 5.4.103 anasantān napuṁsakāc chandasi: 「chandas の領域において tatpuruṣa 複合語の最後に-an-か-as-で終わる中性の名詞語幹の後に taddhita 接辞 ṬaC が導入される」。 determinativ 複合語の実体詞の場合にも、kollektiv 複合語（「...の総体」）との類推により、複合語の後部要素の接尾辞-an-の代わりに-a-が現れる（Cf. AiG II 1 p. 117）。

[200] そのように Schroeder は訂正している。Ch tenāṭāsyatirātrāścatu° [Schr 28 n. 1].

[201] そのように Schroeder は訂正している。Ch ntyukto [Schr 28 n. 2].

[202] そのように Schroeder は訂正している。Ch uktāni [Schr 28 n. 3].

[203] 24 詩節からなる Stoma をもつ日は、導入の祭式（Prāyaṇīya）が開催される日であると思われる。Cf. TS 7.5.1.3 caturviṁśáḥ prāyaṇíyo bhavati 「導入の［祭式］は 24［詩節］からなる［Stoma］をもつものとして開催される」

Stoma をもつ日）には 360 個の Stotrīyā（Stotra 用の詩節）がある。そして実に一年には 360 個の日がある。一日毎に一年が満たされていく。彼らはそうすることによって一日毎に一年を満たしていることになる。（Caturviṁśa-Stoma をもつ日において Atirātra に含まれるものとして）Ukthya が用いられる。［3 つの］Uktha［-Stotra］は家畜たちなのだ。彼らは家畜たちを獲得していることになる。Bṛhat［-Sāman］が Pṛṣṭha（「最高潮」）として用いられる。Bṛhat は天界なのだ。彼らはそれを通って天界へ到達していることになる。Trayastriṁśa （m.「33 の［詩節（？） ］からなる...」）[204]という名前の Sāman が真昼の Pavamāna［-Stotra］において用いられる。神々は 33 である。彼らはそのようにして神々に到達する。

KS 33.2(5): 導入の日においてあちらからこちら向きに（Stoma の数を減らす方式で）一年間の Sattra を始める

(33.2:28.10–14) etasmai vai saṃvatsaram upayanty. āpan devān. +āpan svargaṃ[205] lokam. ava paśūn +arutsata=.[206] āpan saṃvatsaram ardhamāsaśa. āpann ahaśśas. tac caturviṁśe ’han sarvā devatāḥ parigṛhya somaṃ pibanta āsate. ye vā itaḥ parāñcaṁ saṃvatsaram upayanti, nainaṃ te svasti samaśnuvate. ’tho ye ’muto ’rvāñcam upayanti. te hainaṁ svasti saṃtaranty. etad vā amuto ’rvāñcam upayanti, yad evam. //

このことのために彼らは一年［Sattra］を始めるのだ。彼らは神々に到達した。彼らは天界に到達した。家畜たちを獲得した。半月ごとに一年を満たした。一日ごとに満たした。そうして Caturviṃśa[-Stoma] (24) をもつ日に全ての神格たちを取り囲んでから彼らは Soma を飲みながら座っている。こちらからあちら向きに一年［Sattra］を始める者たちは、それ（一年 Sattra）を無事にやり遂げない。だが一方、あちらからこちら向きに［一年 Sattra を］始める者たちは、それを無事に渡り切る。このように、つまり上述のように、彼らはあちらからこちら向きに［一年 Sattra を］始める[207]。

---

[204] TB では、中性の Trayastriṃśi という名前の Sāman が現れる。TB 1.2.2.4 trayastriṁśí nā́ma sā́ma / mádhyandine pávamāne bhavati //

[205] そのように Schroeder は訂正している。Ch patsvargaṃ [Schr 28 n. 3].

[206] そのように Schroeder は訂正している。Ch rutsatā° [Schr 28 n. 4].

[207] 「こちらからあちら向きに一年間 Sattra を始める」あるいは「あちらからこちら向きに一年 Sattra を始める」というのは、Caturviṃśa-Stoma をもつ日、すなわち、一年間の Sattra の導入の日において、朝から夜にかけて、Stoma の詩節数を順々に増やしていく、あるいは減らしていく形式をとることを指していると考えられる。あるいはまた、1 日ごとに 1 日に使う合計詩節数を増やしていく、あるいは減らしていくという形式をとることを指していると考えられる。

KS 33.3: 1 年 Sattra の基本要素（≈ TS 7.4.11）

KS 33.3(1): Ṣaḍaha の 1 日ごとに Jyotiṣṭoma、Goṣṭoma、Āyuṣṭoma を順番に用いる（TS 7.4.11(1)）

(33.3:28.15–21) jyotiṣṭomaṃ prathamam upayanty. asmiṁs tena loke pratitiṣṭhanti. goṣṭomaṃ dvitīyam upayanty. antarikṣe tena pratitiṣṭhanty. āyuṣṭomam uttamam upayanty. amuṣmiṁs[208] tena loke pratitiṣṭhanty. ayaṃ vai loko jyotir, antarikṣaṃ gaur, asā evāyur. yad etān stomān upayanty, eṣv eva tal lokeṣu sattriṇaḥ pratitiṣṭhanto yanti. virājaṃ jyotiṣṭomo ’bhisaṃpanna. ekayā gaur atirikta. ekayāyur ūnas. te[209] saṁstutā virājam abhisaṃpadyanta. ūrg vai virāḍ. yad etais stomair yanty, ūrjam evaitat sattriṇo ’varundhānā yanti. te na kṣudhārtim ārchanty. akṣodhukā bhavanti. kṣutsaṃbādhamānā[210] iva hi sattriṇo. (33.3:28.22–29.3) agniṣṭomā abhitaḥ. pradhī tā. ukthyā[211] madhye. nabhyaṃ tad. etad vai pariyad devacakraṃ. yad etena ṣaḍahena yanti, devacakram eva tat samārohanty. ariṣṭyai. te svasti samaśnuvata. ubhayatojyotiṣā[212] yanti. svargo vai loko jyotir. ubhayata eva tat svarge loke sattriṇaḥ pratitiṣṭhanto yanti.

彼らは Jyotiṣṭoma を最初のものとして（1 日目に）執り行う。彼らはそれによってこの世界においてしっかりと立つ。Goṣṭoma を 2 番目のものとして（2 日目に）行う。彼らはそれによって中空にしっかりと立つ。Āyuṣṭoma を最後のものとして（3 日目に）行う。彼らはそれによってあの世界においてしっかりと立つ。Jyotis はこの世界、Go は中空、Āyus はあの［世界］なのだ。これら Stoma を行うことで、Sattrin たちはこれら世界においてしっかりと立ち続けることになる[213]。Jyotiṣṭoma は Virāj の数に合致している[214]。

---

[208] 訂正した。Ed asmiṁs. Cf. TS.7.4.11.1 amúṣminn. Mittwede [1989: 141] は、Caland [1918: 18] と Klaus [1986: 25] と AB 4.15 に基づいて、asmiṁs ではなく amuṣmiṁs に訂正している。

[209] そのように Schroeder は Caland と共に訂正している。Ch gauritirikta ekayāyuste; cf. KS 33.2 [Schr 28 n. 5].

[210] そのように Schroeder は訂正している。Ch kṣutsaṃbādhamāṇa; [Schr 28 n. 6]. Cf. TS 7.4.11.2 kṣútsaṃbādhā iva hí sattríṇas. Mittwede [1989: 141] は、Keith [1912: 1102] によれば saṃbādhamānā は誤りであると述べている。Keith [1912: 1102 n. 5] は、kṣutsaṃbādhamānāḥ という複合語はより古い文献になく、その意味は受動である必要があると述べている。しかし、saṃbādhamāna- (sam-bādh mid. pres. part.) の意味を patientive（mid. の表す 5 つの意味の 1 つで、受動の意味を表す。Gotō [2013: 79]を参照）として理解すれば、 問題はないと思われる。

[211] そのように Schroeder は訂正している。Ch utthyā; cf. TS 7.4.11.2. [Schr 28 n. 7].

[212] Cf. TS 7.4.11.3.

[213] Grassmann [1873: 192] によると、動詞 ay（「行く」）は、「一部は元来の意味で、一部は動作の持続時間を表現するために、分詞とともに使用されうる」(‘mit einem Particip theils in eigentlichem Sinne, theils um die Dauer der Handlung auszudrücken.’)。それについて、Delbrück [1888: 390ff] は、動詞 ay に加え、car, ās, bhū を分詞とともに使用される助動詞（Hilfsverb）としているが、ay については、いくつかの散文における用例ではもはや元来の意味、つまり「行く」という意味として理解することができないと述べている。Delbrück が挙げている例として以下の箇所がある: TS 7.4.11.1; AB 6.19.7: yád etā́n stómān upayánti eṣv èvá tál lokéṣu sattríṇaḥ pratitiṣthanto yanti 「彼らがこれら Stoma を執り行うなら、彼らはこれら諸世界にお

Go は 1［詩節］分過剰である。Āyus は 1［詩節］分不足である[215]。それらは一緒に歌われて Virāj の数に合致する。Virāj は栄養である。これら Stoma を伴って行くことで、Sattrin たちは栄養を獲得し続けることになる。彼らは飢餓の災難に遭わない。彼らは飢餓に苦しまない者たちになる。というのも Sattrin たちはちょうど飢餓によって抑圧されている者たちのようであるから。二つの Agniṣṭoma が両側（6 日間の内の 2 日目と 5 日目）[216]にある[217]。その二つは車輪の外縁部である。二つの Ukthya は真ん中（6 日間の内の 3 日目と 4 日目）にある[218]。その二つは車輪の中心部である。これ（Ṣaḍaha）は回転する神々の車輪（devacakra-）なのだ[219]。この Ṣaḍaha によって行くことで、彼らは神々の車輪に乗っていることになる。［車が］故障しないために。彼らは無事に到着する。彼らは両側の Jyotis によって行く。Jyotis は天界なのだ。Sattrin たちはそうして両側で天界においてしっかりと立ち続けることになる。

春分（90 日）まで 6 日を単位として祭式を行う。

KS 33.3(2): Ṣaḍaha の繰り返し：6、12、18、24、30 日間（≈TS 7.4.11(2)）

(33.3:29.3–14) ṣaḍahena yanti. ṣaḍ vā ṛtava. ṛtuṣv eva tat pratitiṣṭhanto yanti. dvau ṣaḍahau bhavatas. tāni dvādaśāhāni saṃpadyante. daśa vai puruṣe prāṇās. stanau dvādaśau. tat puruṣam anuparyāvartante. trayaṣ ṣaḍahā bhavanti. tāny aṣṭādaśāhāni saṃpadyante. navānyāni navānyāni.[220] nava prāṇās.[221] tat prāṇān anuparyāvartante. catvāraṣ ṣaḍahā bhavanti. tāni caturviṁśatir ahāni saṃpadyante. caturviṁśatis saṃvatsarasyārdhamāsā. ardhamāsaśas saṃvatsara āpyate. tat saṃvatsaram anuparyāvartante. pañca ṣaḍahā bhavanti. tāni triṁśadahāni saṃpadyante. daśa hastyā aṅgulayo, daśa padyā, daśa prāṇās. tat triṁśat. triṁśadakṣarā virāḍ.

いてしっかりと立ち続けることになる」。このように、当該箇所における ay の用法も、助動詞的用法（「...し続ける」）として解釈しうるものと思われる。

[214] Agniṣṭoma の合計詩節数 190 と同じように Virāj、つまり 10 の倍数にぴったり合うということか。

[215] Jyotiṣṭoma の合計詩節数は Agniṣṭoma と同じであると仮定し、Jyotis, Go, Āyus の順に合計詩節数が増えると仮定すれば、Jyotis 190, Go 201, Āyus 209 のようになる可能性はある。

[216] 「両側に」（abhitas）を 6 日間の中心、つまり 3 日目と 4 日目から見て、両側の 2 日目と 5 日目で Agniṣṭoma が用いられるというように解釈した。6 日間の 1 日目と 6 日目には、Atirātra が用いられるものと思われる。というのも、KS 33.2(1)で、Ṣaḍaha の最初の日に Atirātra が用いられることが述べられているからである。また、Agniṣṭoma と Ukthya は隣接した日に用いられるのが自然であると思われるから。

[217] この Agniṣṭoma は Jyotiṣṭoma の形式である。

[218] この Utkhya は Āyuṣṭoma の形式である。

[219] Cf. TS 7.4.11.2.

[220] 訂正した。Ed navānyāni. Cf. TS 7.4.11.4

[221] Cf. TS 7.4.11.4 náva vái púruṣe prāṇā́s 「人間には 9 つの身体諸機能があるのだ」

vairājaḥ puruṣas. tat puruṣam anuparyāvartante=. "apratiṣṭhitas saṃvatsara" iti khalu vā āhur, "varṣīyān pratiṣṭhāyā" ity. etāvad vai saṃvatsarasya brāhmaṇaṃ, yāvan māso. māsimāsy eva pratitiṣṭhanto yanti, ya evaṃ viduḥ. //

彼らは Ṣaḍaha によって行く。季節は 6 つなのだ。彼らはそうして季節たちにしっかりと立ち続けることになる。2 つの Ṣaḍaha が用いられる。その合計は 12 日間になる。人間において感覚器官（身体部位）は 10 個ある。11 番目と 12 番目は両乳首である。彼らはそうして人間にならって向きを変える。3 つの Ṣaḍaha が用いられる。その合計は 18 日になる。一方は 9［日］、他方は 9［日］。感覚器官は 9 つ。彼らはそうして感覚器官たちにならって向きを変える。4 つの Ṣaḍaha が用いられる。その合計は 24 日になる。一年には 24 の半月がある。半月ごとに一年は満たされる。彼らはそうして一年にならって向きを変える。5 つの Ṣaḍaha が用いられる。その合計は 30 日になる。手の指は 10 本、足の指は 10 本、感覚器官は 10 個ある。そうすると 30 になる。virāj は 30 音節からなる。人間は virāj に関係する。彼らはそうして人間にならって向きを変える。「一年はしっかりと立っていない」と［人々は］実際には言っている、「［一年は］土台よりも大きい[222]」と。月があるくらい、それくらい一年の Brāhmaṇa（秘密）がある。このように知っている者たちは一月一月においてしっかりと立ち続けることになる。

1 年間の最初（冬至の日）から数えて 90 日を経たあたりで、春分の日が訪れる。したがって、以下に記述される 9 日祭は、春分に行われる祭式であると思われる。この 9 日祭の記述は TS には欠けている。代わりに、TB が 9 日祭の記述をもっている。

KS 33.4: 9 日間の儀礼223（≈TB 1.2.2）

KS 33.4(1): 9 日間の儀礼の導入

(33.4:29.15–17) navaitāny ahāni. nava vai svargā lokāś. catasro diśaś. catvāro ’ntardeśā. ūrdhvā navamī. yad etāny ahāny upayanti, navasv eva tat svargeṣu[224] lokeṣu sattriṇaḥ pratitiṣṭhanto yanty.

---

[222] 土台（pratiṣṭhā-）というのは、月の満ち欠けによって計算された年月のことと考えられる。月の満ち欠け（太陰暦）で数えられた 1 年の日数は 354 日である（29.5 日×12 か月）。この 354 日という日数は、1 月を 30 日で数えた場合の 1 年の日数である 360 日より少ない。このような太陰暦による日数の欠乏を、毎月を 6 日ごとで数えることによって補正することを Brāhmaṇa と呼んでいるのではないかと考えられる。

[223] 直前の記述で、６日間、１２日間、１８日間、２４日間、３０日間という祭式が述べられており、それらを合計すると９０日間となることから、ここで述べられる 9 日間の儀礼は、１年が冬至始まりであると仮定すれば、春分に行われるものと推測される。

[224] そのように Schroeder は訂正している。Ch utsva° [Schr 29 n. 2].

例の 9 日間（について）。天界は 9 つあるのだ、（つまり）4 方位、4 つの中間の方位、上方に向かう 9 つ目の［方位］。これら［9］日間を行うことで、Sattrin たちは 9 個の天界においてしっかりと立ち続けることになる。

KS 33.4(2): Agniṣṭoma たちが Para[s]-Sāman をもつべきか

(33.4:29.17–20) "agniṣṭomāḥ parasāmānaḥ[225] kartavyā" ity āhur, "agniṣṭomasaṃmito[226] vai svargo loka" iti. dvādaśāgniṣṭomastotrāṇi.[227] dvādaśa māsās saṃvatsaras. saṃvatsaras svargo lokas. tasmāt tad āhus. "tan na sūrkṣyam. ukthyā[228] eva parasāmānaḥ kartavyā" iti.[229] paśavo vā ukthāni.[230] paśūnām avaruddhyai.

「Agniṣṭoma たちは Para[s]-sāman をもつものとして行われるべきである」と［人々は］言っている、「天界は Agniṣṭoma と等しいものである」と。 Agniṣṭoma には 12 の Stotra がある。一年は 12 ヶ月である。天界は一年である。それゆえ［人々は］そのことについて言っている。［しかし、他の人々は言っている、］「それは懸念されるべきことではない。Ukthya たちだけが Para[s]-Sāman をもつものとして行われるべきである」と。Uktha は家畜たちなのだ。家畜たちの獲得のために。

KS 33.4(3): Viśvajit-Stoma と Abhijit-Stoma を用いる 2 つ Agniṣṭoma

(33.4:29.20–30.1) viśvajidabhijitā agniṣṭomā. ukthyās saptadaśāḥ parasāmāna. ekaviṁśaṃ divākīrtyaṃ. te saṁstutā virājam abhisaṃpadyante. dve ca rcā[231] atiricyete. svargo vai loko virāḍ. dvipādo yajamānās. svarga eva tal loke virāji dvipādo yajamānāḥ pratitiṣṭhanti. //

2 つの Agniṣṭoma［-Yajñakratu］は Viśvajit［-Stoma］と Abhijit［-Stoma］［を用いる］。Ukthya［-Yajñakratu］たちは 17 の詩節からなる［Stoma］を用い、Para［s-Sāman］を［最初の日の］Sāman として用いる[232]。Divākīrtya［-Sāman の日］は Ekaviṁśa-Stoma を

---

[225] TB 1.2.2.1 páraḥsāmānaḥ ...

[226] そのように Schroeder は訂正している。Ch sasmito [Schr 29 n. 4].

[227] そのように Schroeder は訂正している。Ch maḥ sto° [Schr 29 n. 5]. Cf. TB 1.2.2.1 agniṣṭomásya stotrā́ṇi

[228] そのように Schroeder は訂正している。Ch muktyā [Schr 29 n. 6].

[229] Cf. TB.1.2.2.1 tát tán ná sū́rkṣyam / ukthyā̀ evá saptadaśā́ḥ páraḥsāmānaḥ kāryā̀ḥ //

[230] そのように Schroeder は訂正している。Ch uktāni [Schr 29 n. 7].

[231] du. の dve ... atiricyete と並んで ṛcau（ṛc- du. ）が用いられていると考えられる。Cf. TS 7.4.10.2 dvé ca rcā́v áti ricyete; TB 1.2.2.2 dvé cá rcāv áti ricyete.

[232] 9 日間のうち、2 日目，3 日目，4 日目、6 日目，7 日目，8 日目の六日間の中で最初の日に paras-sāman を用いるという意味である。2 日目（paras）、3 日目（bṛhat）、4 日目（vairūpa）、6 日目（vairāja）、7 日目（śākvara）、8 日目（raivata）という並びになっている。これが Pṛṣṭha（盛り上がり）をもつ 6 日間である。TS では Pṛṣṭḥya Ṣaḍaha と呼ばれるものがこれと同様の考え方で構成されていると考えられる。

用いる。それらは共に歌われて Virāj[233]の数へと合計される[234]。そして 2 つの詩節[235]が過剰である[236]。Virāj は天界なのだ。祭主たちは 2 本足である。そうして天界において、Virāj において 2 本足である祭主たちはしっかりと立っていることになる。

KS 33.4(4): 9 日間の中の Ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる Sāman たち

(33.4:30.1–3) yat paro rathantaraṃ tat prathame ’han kartavya. bṛhad dvitīye. vairūpaṃ tṛtīye. vairājaṃ caturthe. śākvaraṃ pañcame. raivataṁ ṣaṣṭhe. tad u pṛṣṭhebhyo[237] na yanti.

Rathantara［-Sāman］ である Paras［-Sāman］であるところのもの、それが 1 日目において行われるべきである。Bṛhat［-Sāman］は 2 日目において。Vairūpa［-Sāman］は 3 日目において。Vairāja［-Sāman］は 4 日目において。Śākvara［-Sāman］は 5 日目において。Raivata［-Sāman］は 6 日目において。そのようにして彼らは Pṛṣṭha（山の稜線、盛り上がり）たちから逸脱しないことになる。

KS 33.4(5): 9 日間の中の Ukthya で行われる 6 日間（2,3,4,6,7,8 日目）の中で用いられる Atigrāhya たち

(33.4:30.3–6) saṃtataya ete grahā gṛhyante. ’tigrāhyāḥ[238] parasāmasu. yad ete gṛhyanta, imān evaital lokān saṃtatya svargaṃ lokaṃ yajamānā ārohanti. mithunā ete grahā gṛhyante. ’tigrāhyāḥ[239] parasāmasu. yad ete gṛhyante, mithunam evaitair avarundhate.

---

[233] virāj は「各１０音節ずつの 4 pāda からなるヴェーダの韻律」であり、それゆえに「１０という数の象徴的な名前」でもある。また、「韻律学においては 2 音節分が欠如している韻律に対して適用される」とされる（MW s. v. virāj）。Mylius [1995: 117]によると、「10 または 10 の倍数の pāda で構成される韻律」である。

[234] 2 つの Agniṣṭoma、Saptadaśa-Stoma、Ekaviṁśa-Stoma の数字だけ抜き出して、足し合わせると、2+17+21=40 となり、10 の倍数であることになる。

[235] dve carcā atiricyete での carcā は carca- m. / carcā- f. （「思考反復の中で吟味・検討すること」PW s.v. carca）の nom.du. ではなく、ca_ṛcā（接続詞 ca と ṛc-の nom.du.）として分析されるべきである。dve ca_ṛcā …というように、ca が Wackernagel の位置（文の第二番目の位置）に置かれていることも考慮されるべきである。TS と TB の平行箇所に関しては、アクセント位置以外は一致しており、ca と ṛcáu を分かち書きしている。Cf. TS 7.4.10.2 dvé ca rcā́v átiricyete; TB 1.2.2.2 dvé cá rcāv átiricyete.

[236] divākīrtya の日の前後 3 日ずつに用いられる Saptadaśa-Stoma を掛け合わせると、17×6＝102 となり、10 で割ると 2 つの詩節が余ることになる。

[237] そのように Schroeder は訂正している。Ch pṛṣṭetyo; TB 1.2.2.3 [Sch 30 n. 1].

[238] そのように Schroeder は訂正している。Ch gṛhyante grāhyāḥ; cf. TB 1.2.2.4. [Schr 30 n. 2].

[239] そのように Schroeder は訂正している。Ch atigrāhyā [Schr 30 n. 3].

Saṃtati（「一繋ぎ」）という例の Graha たちが汲まれる、Atigrāhya[240]たちとして、Para[s] を Sāman とする［Stoma］において。これらが汲まれることで、これら世界を一繋ぎにして天界へ祭主たちは登っていることになる。Mithuna（「雌雄のつがい」）という例の Graha たちが汲まれる、Atigrāhya たちとして、Para[s-Sāman] を Sāman とする［Stoma］において。これらが汲まれることで、彼らはこれらによってつがいを獲得していることになる。

KS 33.4(6): 9 日間の中の 5 日目（中心の日）に用いられる Atigrāhya

(33.4:30.6–10) saurya eṣa graho gṛhyate. ’tigrāhya ekaviṁśe ’haṁs. tasya pratyakṣaṃ nāma na grahītavai. tejasvitara iva vāśrataraḥ. pradāhād vā bhayyaṃ kilāsaṃbhavād[241] vā=. "ayā viṣṭhā janayan karvarāṇi="[242] ity eṣa prājāpatyo ’nirukto graho gṛhyate, ’tigrāhya ekaviṁśe ’han. samanta āyuṣyaḥ paśavyo. yo ha khalu vāva prajāpatis, sa evendras. tad u devebhyo na yanti. //

Saurya（「Sūrya に関する」）という例の Graha が汲まれる、Atigrāhya として、Ekaviṁśa[-Stoma] を用いる日において[243]。彼の名前は公然と捉えられてはならない[244]。［彼は］より威光をもつ（tejasvitara-）、より吠える者（vāśratara-）かのようである。燃えることか、あるいは皮膚病になることを恐れるべきである。「［彼は］この仕方で行為たちを生み出しながら」と［唱えて］Prajāpati のための、［対象神格が］はっきりと言われない[245]例の Graha が汲まれる、Atigrāhya として、Ekaviṁśa[-Stoma] を用いる日に。［この Graha は］果てを備えた[246]、寿命に関する、家畜に関するものである。他ならぬ

---

[240] Mylius [1995: 27]: atigrāhya m, drei zusätzliche Somaschöpfungen für Agni, Indra und Sūrya im agniṣṭoma und am caturviṃśa-Tag.

[241] Ch kilāsaṃbhavād. Schroeder [Schr 30 n. 4] は Caland と共に kilāsaṃbhāvād に訂正している。一方、Mittwede [1989: 141]は、kilāsaṃbhāvād に訂正する必要はなく、kilāsaṃbhavād で読むことができると述べており、その根拠として、Oertel [1941: 58]と、AiG II 2 p. 67（Kāṭh. 33, 4 (30,8) *kilāsaṃ-bhava-* „d. Räudigwerden“）を挙げている。AiG II 2 p.67 には、-bhava-と-bhāva-の両方の例が挙げられている（P 3.2.45 āśitaṃ-bhavá- “Sattsein”, TS 7.2.4.2; TB 3.3.3.5 á-śithilaṃ-bhāva- “d. Festwerden”）。Wackernagel（AiG II 2 p. 66）は RV より後では-ā-が使われる傾向があると述べている。彼は、前部要素が acc. -m で終わるときに、リズム的な理由で、短い-a-が好まれると指摘している（AiG II 2 p. 66 (f)）。

[242] AVŚ.7.3.1a; TS.1.7.12.2a; MS.1.10.3a: 143.10; KS.9.6a; 14.3a; 33.4; 36.13; KSA.5.12a; AŚ.2.19.32a; ŚŚ.3.17.1a; KŚ.25.6.10a; ApŚ.8.16.5; 18.2.3; BŚ.11.3: 67.5; ŚG.5.8.2. P: ayā viṣṭhā MS.1.11.4: 166.6; Vait.9.15; MŚ.1.1.2.15; 7.1.1.43; 7.2.5.3; Kauś.15.11.

[243] Ekaviṁśa をもつ日は、Divākīrtya の日である。

[244] この個所では、太陽の名前、つまりその正体が秘密にしておかれるべきであるという考えが示されている。その秘密にされている正体は、次の箇所を見ると、Prajāpati のことを指しているが、実際にはそれが Indra であることも明かされている。

[245] 「対象神格がはっきり言われない」というのは、一般的には、Prajāpati のために用いられる詩節について言われることである。Amano [2009: 357 n.1267]を参照。

[246] ここで行われていると考えられる春分の祭式と関連していると考えると、ある種の「果て」、例えば春分点などが意識されている可能性がある。

Prajāpati である者は実際には Indra なのだ。またそのようにして彼らは神々から逸脱しないことになる。

KS 33.5: 春分から夏至までの 3 か月間における Pṛṣṭha について（≈TS 7.5.3）

KS 33.5(1): Pṛṣṭha［-Sāman］を最後の月に用いる（≈TS 7.5.3(1)）

(33.5:30.11–31.3) prathame māsi pṛṣṭhāny upayanti. madhyama upayanty. uttama upayanti. yat prathame māsi pṛṣṭhāny upayanty, asmiṁs tena loke pratitiṣṭhanti. yan madhyama upayanty, antarikṣe tena pratitiṣṭhanti. yad uttama upayanty, amuṣmiṁs tena[247] loke pratitiṣṭhanti. "māsimāsi pṛṣṭhāny upetyāni=" ity āhuḥ, "pṛṣṭhāni vai yajñasya doha" iti. tad āhur, "ekaṃ vā etad devānām ahar, yat saṃvatsaro. yāṃ vai trir ekasyāhna upasīdanti,[248] dahraṁ sāparābhyāṃ dohābhyāṃ duhe. tat kutas sā[249] dhokṣyati, yāṃ dvādaśa kṛtva upasīdeyur" iti. sakṛt pṛṣṭhāny upeyur uttame māsi.

最初の月において彼らは Pṛṣṭha［-Sāman］たちを行う。真ん中の［月］において行う。最後の［月］において行う。最初の月において Pṛṣṭha［-Sāman］たちを行うことで、彼らはこの世界においてしっかりと立つ。真ん中の［月］において行うことで、彼らは中空においてしっかりと立つ。最後の［月］において行うことで、あの世界においてしっかりと立つ。「毎月 Pṛṣṭha［-Sāman］たちは行われるべきものである」と［人々は］言っている、「Pṛṣṭha［-Sāman］たちは祭式にとって乳搾りなのだ」と。それについて［人々は］言っている、「一年というのは、神々にとっては一日なのだ。彼ら（祭官たち）が 1 日の間に 3 回（乳を絞るために）近くに座る［雌牛］は、後半の 2 回の乳搾りのためには少量しか乳を出さない。そうするとどうやって彼らが 12 回[250]（乳を絞るために）近くに座る［雌牛］は乳を出すだろうか（いや出さない）」と。彼らは最後の月に一度 Pṛṣṭha たちを行うべきである。

KS 33.5(2): 1 年 Sattra 参加者は岸のない海を泳いでいるかのようである（≈TS 7.5.3(2)）

samudraṃ khalu vā ete ’navāram apāraṃ prasnānti, ye saṃvatsaram upayanti. bṛhadrathantarābhyām etavyaṃ. bṛhadrathantare vai devānāṃ plavas. tad devānāṃ plavena samudram arṇavaṃ taranti. yathā madhye samudrasya plavam anvarjeyur evaṃ tad, yat purā

---

[247] そのように Schroeder は訂正している。Ch yad uttamam upayanty amuṣmiṃ tena [Schr 30 n. 5].

[248] そのように Schroeder は訂正している。Ch tapa° [Schr 30 n. 6].

[249] そのように Schroeder は訂正している。Ch taktutassā; cf. TS 7.5.3.1. [Schr 30 n. 7].

[250] ３か月と春分、夏至、秋分、冬至の４つをかけて１２回ということで、つまり、冬至から春分の３か月、春分から夏至までの３か月、夏至から秋分までの３か月、秋分から冬至までの３か月を足し合わせた１２か月のことを述べていると考えられる。

saṃvatsarād bṛhadrathantare utsṛjeyur. anutsargaṃ[251] bṛhadrathantarābhyāṃ gatvā pratiṣṭhāṃ gatvā,[252] sakṛt pṛṣṭhāny upeyur uttame māsi. sarvebhyo vai kāmebhyas saṃdhir duhe.[253] tat sarvān kāmān yajñaṃ pṛṣṭhāni saṃvatsarād duhre.[254] //

一年［Sattra］を行う者たちは実質的にはこちら側の岸もあちら側の岸もない海を泳いでいることになる。 Bṛhat［-Sāman］と Rathantara［-Sāman］を用いて（一年 Sattra を）進むべきである。Bṛhat［-Sāman］と Rathantara［-Sāman］は神々の船なのだ。彼らはそうして神々の船を使って海を渡る。一年［が経つ］より前に Bṛhat と Rathantara を手放すというのは、まるで海の真ん中で船を手放すようなものである。手放さずに Bṛhat［-Sāman］と Rathantara［-Sāman］によって進んだ後、安定した状態（pratiṣṭhā-）に達した後、彼らは最後の月にはずっと Pṛṣṭha たち[255]を行うべきである[256]。全ての望みのために［一年の］つなぎ目（saṃdhi-）が乳を出す。そうして［Sattrin たちは］全ての望みを、すなわち祭式として、Pṛṣṭha［-Sāman］たちとして、一年［Sattra］から（乳として）得る[257]。

KS 33.6: 21 日間の儀礼（≈TB 1.2.4）

KS 33.6(1): 神々が太陽の落下を恐れた話（1）

(33.6:31.4–7) ekaviṁśa eṣa. etena vai devā ekaviṁśenādityam itas svargaṃ lokam ārohayan. sa eṣa ita ekaviṁśas. tasya daśāvastād ahāni daśa parastāt. sa eṣa ubhayato virāji pratiṣṭhita. ubhayato hi vā eṣa virāji pratiṣṭhitas. tasmād antaremau lokau yan sarveṣu svargeṣu lokeṣu pratitiṣṭhann eti.

この［祭式］は Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）。神々はこの Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）［祭式］によって太陽をここ（大地）から天界へ昇らせた。そのような例のもの（太陽）はここから 21 番目なのだ。それ（太陽=Ekaviṁśa-Stoma をもつ日）にはこちらから 10 日があり、あちらから 10 日がある。そのようなこれ（太陽）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っている。というのもこれ（祭式）は両側から［支えられて］Virāj においてしっか

---

[251] そのように Schroeder は訂正している。Ch utsṛje° [Schr 31 n. 1].

[252] Cf. TS 7.5.3.2: itvā́ pratiṣṭhā́ṃ gachanti.

[253] そのように Schroeder は訂正している。Ch saṃdhirmuhe; TS 7.5.3.2 [Schr 31 n. 2].

[254] そのように Schroeder は訂正している。Ch rānmuhre [Schr 31 n. 3].

[255] pṛṣṭha-sāman と、「山場、盛り上がり」を意味する pṛṣṭha がかけられていると考えられる。

[256] 3 か月間の中で、最初の月と 2 番目の月には、bṛhat と rathantara を使い、3 か月目に pṛṣṭha たちを使うということであると推測される。

[257] もう一つの可能性として、「そうして pṛṣṭha たちがすべての望みを祭式として一年[sattra] から（乳として）出す」。

りと立っているから。それゆえ［彼は］この 2 つの世界（大地と天界）の間を行き続け、全ての天界において都度都度しっかりと立ち続ける。

KS 33.6(2): 神々が太陽の落下を恐れた話（2）

(33.6:31.8–14) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ triṣu svargeṣu lokeṣv ādadhus. tasya parāco[258] ’tipādād abibhayus. taṃ parastāt[259] tribhis svargair lokaiḥ pratyastabhnuvan. sa eṣa ubhayataṣ ṣaṭsu svargeṣu lokeṣu pratiṣṭhito. dhr̥tyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. // devā vai saptadaśānāṃ pravlayād abibhayus. tān sarvais stomair avastāt paryārṣan sarvais stomaiḥ parastāt. tasmād abhijit sarvastomo ’vastāt saptadaśānāṃ viśvajit sarvastomaḥ parastāt. saptadaśānāṃ dhr̥tyā apravlayāya.

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らはそれ（太陽）を 3 つの天界に置いた。彼らはそれ（太陽）があちら側に超えて落ちることを恐れた。彼らはあちら側で 3 つの天界によってそれを固定した。そのようなかのもの（太陽）は両側から（支えられて）6 つの天界においてしっかりと立っている。固定のために、安立のために、落下しないために、超えて落ちないために。神々は（Ekaviṁśa-Stoma をもつ日、つまり、21 日間の祭式の真ん中の日の前後 3 日間ずつに使う）Saptadaśa[-Stoma]たちが押し潰されることを恐れた。彼らはそれら（Saptadaśa-Stoma たち）を完全な Stoma たちによって[260]こちら側から（真ん中の日より前の日から）突き支え､完全な Stoma たちによってあちら側から（真ん中の日より後の日から）［突き支えた］。それゆえ Abhijit[-Stoma]は完全な Stoma として、［3 つの］Saptadaśa[-Stoma]よりこちら側で（真ん中の日より前の日に）用いられ、Viśvajit[-Stoma]は完全な Stoma として、あちら側から（真ん中の日より後の日に）用いられる。保つために、押し潰さないために。

KS 33.6(3): 神々が太陽の落下を恐れた話（3）

(33.6:31.14–20) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ, ye +varṣman[261] svargāṇāṃ lokānām adhipatayas, teṣv ādadhuś. catustriṁśā vai stomā +varṣman[262] svargāṇāṃ lokānām adhipatayas. tad, yad ekaviṁśasyāhnas trayo ’vastāt saptadaśās trayaḥ parastāt, te trayaś catustriṁśā dvaudvau. teṣu vā eṣa āhito. dhr̥tyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. // varṣman hi vā eṣa svargāṇāṃ lokānām āhitas. tasmād bhūtebhyobhūtebhya[263] uttaro. varṣma svānām ādhipatyaṃ paryeti, ya evaṃ veda.

---

[258] そのように Schroeder は訂正している。Ch dadhastasya parāce [Schr 31 n. 4]. Cf. TB 1.2.4.2.

[259] そのように Schroeder は訂正している。Ch pura° [Schr 31 n. 5].

[260] Abhijit-Stoma を使う日を含んだ最初の 7 日間、Viśvajit-Stoma を使う日を含んだ最後の 7 日間の中で使われる Stoma のことを総称して、「完全な stoma たち」と呼んでいる。

[261] 訂正した。Ed varṣma.

[262] 訂正した。Ed varṣma.

[263] そのように Schroeder は訂正している。Ch bhūtetya [Schr 31 n. 6].

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らは彼を、天界たちの頂点において首長である者たちに置いた。Catustriṁśa -Stoma たちが天界たちの頂点における首長たちなのだ。Ekaviṁśa[-Stoma] をもつ日のこちら側から 3 つの Saptadaśa[-Stoma] があり、［その日の］あちら側から 3 つの Saptadaśa[-Stoma] があるということは、それらは 3 つの Catustriṁśa[-Stoma] が 2 つに分かれてあるということである((17×3)+(17×3)=(34×3))[264]。例のもの（太陽）はそれら（Stoma）の上に置かれている。保つことのために、しっかりと立つことのために、落下しないために、超えて落ちないために。例のもの（太陽）は諸天界の頂点に置かれているから、それゆえ［太陽は］どの諸存在よりも上位である。このように知っている者は、頂点に、自分に属する者たちの首長の地位に至る。

KS 33.6(4): 神々が太陽の落下を恐れた話（4）

(33.6:31.20–32.3) devā vā ādityasya svargāl lokād avapādād abibhayus. taṃ pañcabhī raśmibhir udavayan. raśmayo divākīrtyāni. tasmād ekaviṁśe ’han pañca divākīrtyāni kriyante. ye gāyatre, te gāyatrīṣūttarayoḥ pavamānayor. mahādivākīrtyaṁ hotuḥ. pṛṣṭhaṃ vikarṇaṃ brahmasāmaṃ. bhāsam agniṣṭomas. tad, yad ekaviṁśe ’han pañca divākīrtyāni kriyanta, ādityam eva tat pañcabhī raśmibhir udvayanti. dhṛtyai pratiṣṭhāyā anavapādāyānatipādāya. //

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らはそれ（太陽）を 5 本の太陽光線で編み上げた（ud-avayan[265]）。Divākīrtya［-Sāman］たちは太陽光線たちである。それゆえ Ekaviṁśa-Stoma をもつ日に 5 つの Divākīrtya［-Sāman］が用いられる[266]。2 つの Gāyatra［-Sāman］は Gāyatrī 詩節たちにおいて［歌われ］後半二つの Pavamāna［-Stotra］に属する[267]。Mahādivākīrtya［-Sāman］は Hotar に属する[268]。Vikarṇa［-Sāman］は Pṛṣṭha［-Stotra］であり Brahmasāma である[269]。Bhāsa［-Sāman］が Agniṣṭoma［-Stotra］[270]として使用される。Ekaviṁśa-Stoma をもつ日に 5 個の Divākīrtya［-Sāman］が用いられる

---

[264] 折り返しの日は Ekaviṁśa-Stoma があり、その前後三日ずつにはそれぞれの日に Saptadaśa-Stoma が使われるという構造のことを述べている。つまり、 stoma の並びが、17 17 17 21 17 17 17（数字は stoma に含まれる詩節の数） という構造になっている。

[265] udavayan は ud-vaya^{ti} の 3rd pl. impf.（PW s.v. vā; EWAia s.v. *o* ‘weben’; LIV s.v. **Heu*- ‘weben’）である。

[266] 5 つの Divākīrtya-Sāman とは、次に述べられる（1-2）2 つの Gāyatra-Sāman、（3）Mahādivākīrtya-Sāman、（4）Vikarṇa-Sāman、（5）Bhāsa-Sāman を指している。

[267] Pavamāna-Stotra は朝、昼、夕方の最初の Stotra として用いられる。後半 2 つの Pavamāna-Stotra は昼と夕方の最初の stotra、つまり、6 番目と 11 番目の stotra を指している。Cf. Parpola [1969: 13].

[268] Mahādivākīrtya-Sāman が使われる Stotra に対応する Śastra を唱える祭官が Hotar であることを指しているのかもしれない。Cf. Parpola [1969: 13].

[269] Pṛṣṭha-Stotra は 7, 8, 9, 10 番目の Stotra であり、Brahma-Sāma は、Brahmaṇācchaṃsin 祭官が Śastra を唱えるときに使われる Sāman である。Brahmaṇācchaṃsin 祭官が Śastra を唱えるのは、９番目の Stotra が歌われた後である。Cf. Parpola [1969: 13].

[270] Agniṣṭoma-Stotra は１２番目に用いられる Stotra である。Cf. Parpola [1969: 13].

ことで、彼らは太陽を 5 本の太陽光線によって編み上げることになる。固定のために、安立のために、落下しないために、超過しないために。

KS 33.6(5): Spara-Sāman と Para-Sāman（≈TS 7.3.10 Ekaviṃśatirātra, Para-Sāman と Paras-Sāman）

(33.6:32.3–9) athaitāni[271] sparāṇi. sparair vai devā ādityāya svargaṃ lokam aspṛṇvan. yad aspṛṇvaṁs, tat sparāṇāṃ sparatvaṃ. spṛṇvanty asmai sparāṇi svargaṃ lokaṃ, ya evaṃ vidvān etais stute. ’thaitāni parāṇi. parair vai devā ādityaṁ svargaṃ lokam apārayan. yad apārayaṁs, tat parāṇāṃ paratvaṃ. pārayanty enaṃ[272] parāṇi svargaṃ lokaṃ, ya evaṃ vidvān etais stute. ’nuṣṭubho vai, yad ayātayāmarūpaṃ, tāni parāṇi. tasmād anuṣṭupsu parāṇi kriyante. yad anuṣṭupsu parāṇi kriyante, ’nuṣṭubham eva tat savīryāṃ kurvanti. svargasya lokasya samaṣṭyai. //

次に例の Spara［-Sāman］たち［について］。神々は Spara［-Sāman］たちによって Āditya のために天界を確保した（aspṛṇvan）。彼らが確保した（aspṛṇvan）ということが Spara［-Sāman］たちが Spara［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知ってこれらを歌うならば、Spara［-Sāman］たちが彼（祭主）のために天界を確保する。次に例の Para［-Sāman］たち［について］。神々は Para［-Sāman］たちによって Āditya を天界に渡らせた。彼らが渡らせた（apārayan）ということが、Para［-Sāman］たちが Para［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知ってこれらを歌うならば、Para［-Sāman］たちは彼（祭主）を天界に渡らせる。Anuṣṭubh の使い古されていない形であるものが Para［-Sāman］たちである。それゆえ Anuṣṭubh 詩節たちのところで Para［-Sāman］たちが用いられる。Anuṣṭubh 詩節たちのところで Para［-Sāman］たちが用いられることで、彼らは Anuṣṭubh 詩節を勇力をもつものにしていることになる。天界への完全な到達のために。

KS 33.7: （21 日間の儀礼（夏至祭）の中の）開放日についての議論（≈ TS 7.5.6; 7.5.7）

KS 33.7(1): 新月の夜・満月の夜・Vyaṣṭakā の夜において開放日があるべし（≈TS 7.5.7(1)）

(33.7:32.10−17) "utsr̥jyā3n notsr̥jyā3m" iti mīmāṁsante. tad āhur, "utsr̥jyam eva. prāṇāpānā vā ete saṃvatsarasya, yat pūrṇamāsā. yan notsr̥jeyus, saṃvatsaram apinahyeyur, amehena sattriṇo mriyeran. paurṇamāsyāṃ cāmāvasyāyāṃ cotsr̥jyam" ity āhur "ete hi yajñaṃ vahata" iti. tad āhur, "etayos tvāva[273] notsr̥jyaṃ, ye avāntarā yajñaṃ bhejāte" iti. "yā prathamā vyaṣṭakā, tasyām

[271] そのように Schroeder は訂正している。Ch || thaitāni [Schr 32 n. 1].

[272] そのように Schroeder は訂正している。Ch tyenasparāṇi [Schr 32 n. 2].

[273] tvāva = tu + vāva.

utsr̥jyam" ity āhur, "eṣa[274] hi māso viśara" iti. nādiṣṭam utsr̥jeyur. yad ādiṣṭam utsr̥jeyur, yādr̥śe punaḥ paryāplāve madhye ṣaḍahasya saṃpadyata[275] iti, ṣaḍahair māsaṁ[276] saṃpādya, yat saptamam ahas, tad utsr̥jeyus. saṁ ṣaḍahaṃ[277] tanvanty, ut saṃvatsaraṁ śvāsayanti.

「［21 日間の儀礼（夏至祭）の中の一日が］開放されるべきか、開放されるべきでないか」と彼らは互いに吟味している。それについて［人々は］言っている、「まさに手放されるべきである。満月というのは、一年にとって吐く息と吸う息である。開放しないなら、彼らは一年を塞いでしまうことになる。排尿障害（ameha-）によって Sattrin たちは死んでしまうことになる。満月の時と新月の時に［1 日が］開放されるべきである」と彼らは言っている、「というのもこの 2 つは祭式を運ぶから」と。それについて［人々は］言っている、「祭式の内側で分け前をもつ（bhejāte[278]）2 つ（満月の夜と新月の夜）の時に［1 日が］開放されるべきではない」と。「最初の Vyaṣṭakā[279]の時に［1 日が］開放されるべきである」と［ある人々は］言っている、「というのも例のそれは月にとって[280]viśara（裂け目の日）であるから」と。【Vyaṣṭakā において開放しないことへの反論】彼らは指定された［日］を開放すべきではない。「次に 6 日の paryāplāva（転換期？）となる真ん中で数が合うように」と［考えて］、指定された［日］を彼らが開放する場合は、6 日たちによって［1 か］月を数え上げてから（6 日×5 回=30 日間）、7 番目の日を彼らは開放すべきである。彼らは 6 日を一つに繋げて、一年に息を吹き出させる。

KS 33.7(2): 開放日がある場合には、Puroḍāśa を準備し、Soma 祭の代替としての Iṣṭi 献供を行う（≈TS 7.5.7(2)）

(33.7:32.17–22) yad ahas tūtsr̥jeyus, tad agnaye vasumate ’ṣṭākapālaṃ puroḍāśaṃ prātar nirvapeyur, aindraṃ dadhi=, indrāya marutvata ekādaśakapālaṃ madhyandine, viśvebhyo devebhya[281] r̥tumadbhyo dvādaśakapālam aparāhṇe.[282] prājāpatyaḥ paśus syād. agner vai vasumataḥ prātassavanaṃ. yad agnaye vasumate ’ṣṭākapālaṃ puroḍāśaṃ prātar nirvapanti, devatām eva tad bhāginīṃ kurvanty. ananusargāya. (33.7:32.22–33.7) somo vā eṣa oṣadhīṣu praviṣṭo. yad aindraṃ dadhi bhavati=, indram eva tad bhāgadheyān na cyāvayanti. savanam aṣṭābhir upayanti. ye khalu vāva prātaḥ paśava upākriyante, te vasava. indrasya vai marutvato mādhyandinaṁ savanaṃ. yad indrāya marutvata ekādaśakapālaṃ puroḍāśaṃ madhyandine nirvapanti, devatām eva tad bhāginīṃ kurvanty. ananusargāya. // savanam ekādaśabhir upayanti. viśveṣāṃ vai devānām r̥tumatāṃ tritīyasavanaṃ. yad viśvebhyo devebhya r̥tumadbhyo

---

[274] そのように Schroeder は訂正している。Ch reṣā; TS 7.5.7.1. [Schr 32 n. 3].

[275] TS の平行箇所では opt.が用いられている（TS 7.5.7.2 yādr̥śe ... sampádyeta）。

[276] そのように Schroeder は訂正している。Ch rmāse [Schr 32 n. 4]. Cf. TS 7.5.7.2 mā́sān.

[277] そのように Schroeder は訂正している。Ch ṣaḍahe [Schr 32 n. 5].

[278] bhejāte bhaj 3rd du. perf. mid. Cf. Kümmel [2000] s.v. bhaj.

[279] vyaṣṭakā は、黒半月（kr̥ṣṇapakṣa, 満月から新月までの期間）における最初の日 (“der erste Tag in der dunklen Monatshälfte") のことである。PW s.v. vyaṣṭakā.

[280] TS 7.5.7.2: māsó = mā́s- gen.sg.

[281] そのように Schroeder は訂正している。Ch devebhyo [Schr 32 n. 6].

[282] そのように Schroeder は訂正している。Ch parāhṇe [Schr 32 n. 7].

dvādaśakapālaṃ puroḍāśam aparāhṇe[283] nirvapanti, devatām eva tad bhāginīṃ kurvanty. ananusargāya. savanaṃ dvādaśabhir upayanti. prājāpatyaḥ paśur bhavati. yajño vai prajāpatir. yajñasyānanusargāya=.

一方、彼らが一日を開放するときは、彼らは Vasu たちを伴った Agni のために 8 皿分の Puroḍāśa を、Indra のための酸乳（dadhi）を、早朝に準備するべきである、Marut たちを伴った Indra のために 11 皿分の［Puroḍāśa］を真昼に、適切な時間をもつ（ṛtumant-）Viśve Devās のために 12 皿分の［Puroḍāśa］を午後に。Prajāpati のための犠牲獣が用いられるべきである。早朝の Soma 搾りは Vasu たちを伴った Agni のためにあるのだ。Vasu たちを伴った Agni のために 8 皿分の［Puroḍāśa］を早朝に振る舞うことで、彼らは神格（Vasu たちを伴った Agni）を分け前をもつ者にしていることになる。［神格を開放日に］続けて（倣って）手放さないように。これ（酸乳）は Soma として植物の中に入っているのだ。Indra のための酸乳が用いられることで、彼らは Indra を分け前（つまり Soma）から動かさない（遠ざけない）ことになる。彼らは Soma 搾りを 8［皿分の Puroḍāśa］を用いて行う[284]。早朝に連れてこられる家畜たちは､実は、Vasu たちである。真昼の Soma 搾りは、Marut たちを伴った Indra のためのものである。Marut たちを伴った Indra のために 11 皿分の Puroḍāśa を真昼に準備することで、彼らは神格を分け前をもつ者にしていることになる。続け様に手放さないために。彼らは Soma 搾りを 11［皿分の Puroḍāśa］を用いて行う。3 番目の Soma 搾りは、適切な時間をもつ Viśve Devās のためのものである。適切な時間をもつ Viśve Devās のために 12 皿分の Puroḍāśa を午後に準備することで、彼らは神格を分け前をもつ者にしていることになる。続け様に手放さないために。彼らは Soma 搾りを 12［皿分の Puroḍāśa］を伴って行う。Prajāpati のための家畜が用いられる。Prajāpati は祭式なのだ。祭式を続け様に手放さないために。

KS 33.7(3): 21 日祭（夏至祭）後の後半の 6 か月の開始（≈TS 7.5.7(3) ）

(33.7:33.7–18) abhīvarta itaṣ ṣaṇ māso brahmasāmaṃ bhavati. brahma vā abhīvarto. brahmaṇaiva tat svargaṃ lokam abhivartayanto yanti. // pratikūlam iva hītas[285] svargo lokas. samānāḥ[286] pragāthā bhavanty. anyāny-anyāni sāmāni. lokā vai sāmāni. svargā ṛco. lokair eva tat svargāṃl lokān[287] abhyārohanto yanti. samānaṁ sāma bhavaty. anyā-anyā ṛcas. svargā vai sāmāni. lokā ṛco. lokair eva tat svargāṁl lokān abhyārohanta āyanti. // "indra kratuṃ na ābhara pitā putrebhyā yathā / śikṣā ṇo asmin puruhūta yāmani jīvā jyotir aśīmahi" // ity. amuta āyatāṁ[288] ṣaṇ māso brahmasāmaṃ bhavaty. ayaṃ vai loko jyotiḥ. prajā jyotir. imam eva tal lokaṃ paśyanto ’bhivadanta āyanty. ayaṁ hi loko lokānāṃ pratiṣṭhā. //

---

[283] そのように Schroeder は訂正している。Ch parāhṇe [Schr 33 n. 1].

[284] 実際に行っていることは Soma 絞りではなく雌牛の乳搾りであると考えられる。

[285] そのように Schroeder は訂正している。Ch miva vahītissva° [Schr 33 n. 2]. Cf. TS 7.5.7.4.

[286] そのように Schroeder は訂正している。Ch samānaḥ [Schr 33 n. 3].

[287] そのように Schroeder は訂正している。Ch svargālokā° [Schr 33 n. 4].

[288] そのように Schroeder は訂正している。Ch āyāto, 最初の筆跡は āyatau となっている。[Schr 33 n. 5]. Cf. TS 7.5.7.4: amúta āyatā́ṁ ṣáṇ māsó ...

Abhīvarta［-Sūkta］[289]において、これ以降 6 ヶ月の間、Brahma-Sāma が用いられる。Abhīvarta は Brahman なのだ。彼らはそうして Brahman によって天界を勝ち続けることになる。というのも天界はこれ以降は対岸にあるかのようであるから。同じ Pragātha[290]たちが使われる。別々の Sāman たちが使われる。Sāman たちは諸世界なのだ。Ṛc たちは諸天界なのだ。彼らはそうして諸世界によって諸天界を昇り続けることになる。同じ Sāman が使われる。別々の Ṛc たちが使われる。Sāman たちは諸天界なのだ。Ṛc たちは諸世界なのだ。彼らはそうして諸世界によって諸天界を昇って来ることになる。「Indra よ、意志力を我らにもたらせ、父が息子らにするように。この道において我らを助けよ、多くの者から呼ばれる者よ。我らは生きて光に至りたい」[291]と［唱える］。あそこ（夏至祭）からやってきている者（Sattrin）たちのために、6 ヶ月の間、Brahma-Sāma が用いられる。光はこの世界なのだ。光は生き物たちなのだ。彼らはそうしてこの世界を見ながら、話しかけながら、やって来ることになる。というのもこの世界は諸世界にとって土台であるから。

KS 33.8: 一年 Sattra の後半について

KS 33.8(1): Para[s]-Sāman（≈TS 7.3.10）

(33.8:33.19–21) athaite parasāmānas. teṣāṃ parasāmnāṃ, yat prathamaṃ, tad uttamaṃ, yad uttamaṃ, tat prathamaṃ, yan madhye, madhya eva tat. tad, yenaivaite yanti, tenāmutaḥ punar āyanty. eṣāṃ lokānāṁ saṃtatyai pratijñātyai.

次にこれら Para[s]-Sāman をもつ［Stoma］[292]が［説明される］。それら Para[s]-Sāman をもつ［Stoma］の中で最初のものは最後のもの最後のものは最初のもの、真ん中にあるものは真ん中にある。それ（Para[s]-Sāman）を使って行くものを使って、あそこから再びやってきていることになる。これら世界をつなげるために、［対応するもの同士が］認識するために。

---

[289] abhī́vartena で始まる、abhi-vart という動詞に由来する語形が繰り返し現れる RV 10.174 讃歌全体のことを abhīvarta と呼んでいる。Cf. PW s.v. abhīvarta.

[290] pragātha とは、韻律 bṛhatī (8 8 | 12 8 ||) あるいは kakubh (8 12 | 8 ||) が satobṛhatī (12 8 | 12 8 ||) と組み合わせられた 2 つの詩節の形式のことを指す。つまり、bṛhatī + satobṛhatī = 8 8 | 12 8 || + 12 8 | 12 8 ||; kakubh + satobṛhatī = 8 12 | 8 || + 12 8 | 12 8 ||というようになっている。

[291] RV 7.32.26: índra krátuṃ na ā́ bhara pitā́ putrébhyo yáthā | śíkṣā ṇo asmín puruhūta yā́mani jīvā́ jyótir aśīmahi ||

[292] TS 7.3.10.2 páraḥsāmānas.

KS 33.8(2): 一年の後半 5 か月間に使われる Stoma

(33.8:33.21–34.1) te viśvajita upariṣṭāt pratyavarohiṇas stomān upayanti. tad āhur, "jitaṃ vā ete parājayante. +nivṛttān[293] pratyavarohiṇas stomān upayanti. nivartante svargāl lokāt. pratyañcam u yajñaṃ tanvata" iti. te tathā pañca māso yanti.

彼らは Viśvajit の後で降りて戻る Stoma たちを行う。それについて［人々は］言っている、「例の者（Sattrin）たちは勝ち取られたものを手放していることになる。彼らは［天界から］下に向かって降りて戻る Stoma たちを行う。彼らは天界から下に向かう。そして逆向きの祭式を展開する」と。彼らはそのように 5 ヶ月の間行く。

KS 33.8(3): 一年の後半の 6 番目の月の 3 つの Abhiprava と Go と Āyus の日

(33.8:34.1–5) ṣaṣṭhasya ca māsas trīn abhipravān. dve[294] cāhanī goāyuṣī. te pṛṣṭhāny upayanti. "pṛṣṭhāni vai yajñasya doho. yajñaṃ dohāmahai, paśūṁś[295] cāmṛtaṃ ca. prāñcam u yajñam tanavāmahā" ity. ṛtavo[296] vai pṛṣṭhāny. ṛtuṣv eva tat pratitiṣṭhanto yanti. svargo vai lokaḥ pṛṣṭhāni. svarga eva tal loke pratitiṣṭhanto yanti. // devakṣatraṃ vā āyuṣas[297] stomā. devakṣatram eva tad abhyārohanto yanti.

そして 6 番目の月には 3 つの Abhiprava を［行う］[298]。そして 2 日の間 Go［-Stoma］と Āyus［-Stoma］を［行う］。彼らは Pṛṣṭha たちを行う[299]。「Pṛṣṭha たちは祭式の乳搾りなのだ。私たちは祭式を絞って家畜たちと不死を得よう（subj.）。そして私たちは前（あるいは東）向きの祭式を展開しよう（subj.）」と。Pṛṣṭha たちは季節たちなのだ。彼らはそうして季節たちにおいてしっかりと立ち続けることになる。Pṛṣṭha たちは天界なのだ。彼らはそうして天界においてしっかりと立ち続けることになる。Āyus という Stoma たちは神々の支配権なのだ。彼らはそうして神々の支配権に向かって昇り続けることになる。

---

[293] 訂正した。Ed nirvṛttān.

[294] Ch nabhipravāṃ dve [Schr 34 n. 1]. Cf. Böhtlingk, Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung s.v. abhiprava.

[295] そのように Schroeder は訂正している。Ch paśūṃcā° [Schr 34 n. 2].

[296] そのように Schroeder は訂正している。Chityṛtavo [Schr 34 n. 3].

[297] そのように Schroeder は訂正している。Ch āyuja° [Schr 34 n. 4].

[298] abhiprava は一回に 6 日間（ṣaḍaha）かかる。これが 3 回行われるので、18 日間経過するということである。Cf. Mylius [1995: 31–33].

[299] 3 つの Abhiprava と 2 つの Go と Āyus の日によって Pṛṣṭha（盛り上がり）たちを作ることで、jyotis-go-āyus-āyus-go-jyotis（第一の abhiprava）、jyotis-go-āyus-āyus-go-jyotis（第二の abhiprava）、jyotis-go-āyus-āyus-go-jyotis（第三の abhiprava）、go-āyus という Stoma を使用する日の並びが意図されている可能性がある。

KS 33.8(4): Dvādaśāha における Chandoma の日（Dvādaśāha の 7、8、9 日目）

(33.8:34.6) te chandomān upayanti. paśavo[300] vai chandomāḥ. paśūn evāvarundhate.

彼らは Chandoma たちを行う。Chandoma たちは家畜たちなのだ。彼らは家畜たちを獲得していることになる。

KS 33.8(5): （Dvādaśāha の）10 日目

(33.8:34.6–8) te daśamam ahar upayanti. prajananaṃ prājāpatyaṃ +pratiṣṭhā.[301] prajananam eva tat prajāṃ pratiṣṭhām avarundhate.

彼らは 10 番目の日に近づく。安定した基盤は Prajāpati に属する繁殖である。彼らはそうして繁殖を、子孫を、安定した基盤を獲得していることになる。

KS 33.8(6): Mahāvrata の日（Dvādaśāha の 11 日目）

(33.8:34.8–18) te mahāvratīyam ahar upayanti. tad āhur, "viṣuvān vā etad ahar, yan mahāvratīyaṃ. viṣuvaty upetyam" ity. athāhuḥ, "prājāpatyaṃ vā etad ahar, yan mahāvratīyaṃ. tad uttamārdhe[302] saṃvatsarasyopetyam" iti. yo vai ṣaṇmāsyo jāyate, yas saptamāsyaḥ, pra vai sa mīyate. na tena bhogam aśnute. // saṃvatsare khalu vāva reto hitaṃ prajāyate. tad, yad uttamārdhe saṃvatsarasya mahāvratīyam ahar upayanti, saṃvatsara etad reto hitaṃ prajanayanti. yathartv evartūn kalpayanti. yathāpūrvaṃ prajāṃ prajanayanti. te pañcaviṁśaṁ stomam upayanti puruṣastomaṃ. daśa hastyā aṅgulayo. daśa padyā. dvau bāhū. dve sakthyā.[303] ātmā pañcaviṁśo. yad etaṁ[304] stomam upayanti, svād eva tat stomāt sattriṇa ātmānaṃ prajanayanti. bhūtyai. tad āhuḥ, "prājāpatyaṃ vā etad ahar, yan mahāvratīyaṃ. tasmin sarve grahā grahītavyās. sarvam iva hi prajāpatir vivyāca=" ity.

彼らは Mahāvrata の日に向かう。それについて［人々は］言っている、「Mahāvrata の［日］というのは折り返しの日なのだ。折り返しにおいて向かわれるべきである[305]」と。それから［人々］は言っている、「Mahāvrata の［日］というのは Prajāpati に関係する日なのだ。それは一年の最後の半［月］において行われるべきである」と。6 ヶ月で生まれる者、7 ヶ月で生まれる者は衰弱死するのだ[306]。彼はそれ（衰弱死）によって享受に至らない。実際には置かれた精液は一年経った時に繁殖する。一年の最後の半［月］に

---

[300] そのように Schroeder は訂正している。Ch paśavai [Schr 34 n. 5].

[301] 訂正した。Ed pratiṣṭhāṃ

[302] そのように Schroeder は訂正している。Ch tad uttesārdhe [Schr 34 n. 6].

[303] そのように Schroeder は訂正している。Ch saktyā [Schr 34 n. 7].

[304] そのように Schroeder は訂正している。Ch yadeta [Schr 34 n. 8].

[305] Mahāvrata 儀礼が一年の折り返しの日、つまり夏至か冬至の日に行われるべきであるということが述べられていると考えられる。

[306] 6 か月あるいは 7 か月、つまり夏至の期間は Mahāvrata を行う時期ではないということを示唆している。

おいて Mahāvrata の日に向かうことで、彼らは置かれた精液を一年経った時に繁殖させていることになる。季節の通りに季節たちを整わせていることになる。順番通りに子孫を繁殖させていることになる[307]。彼らは Pañcaviṁśa-Stoma を使う、（すなわち）Puruṣa-Stoma（「人間の Stoma」）を。手の指は 10 本。足の指は 10 本。腕は 2 本。腿は 2 本。25 番目は胴体。この Stoma を使うことで、自分の Stoma から Sattrin たちは自分自身を繁殖させる。成就[308]のために。それについて［人々は］言っている、「Mahāvrata の［日］というのは Prajāpati に関係する日なのだ。そのとき全ての Graha が汲まれるべきである。というのも Prajāpati は全体を含んでいるかのようであるから」と。

KS 33.8(7): Mahāvrata において使われる Graha たち

(33.8:34.18–35.5) eko grahītavya.[309] eko hi prajāpatis. trayo grahītavyās. traya ime lokā. eṣv eva lokeṣv ṛdhnuvanti. // pañca grahītavyāḥ. pāṅkto[310] yajño. yajñam evāvarundhate. sapta grahītavyās. sapta grāmyāḥ paśavas. tān evāvarundhate. nava grahītavyā. nava[311] prāṇāḥ. prāṇeṣv eva pratitiṣṭhanti. pañcadaśa grahītavyāḥ. pañcadaśārdhamāsasya rātrayo. ’rdhamāsaśas saṃvatsara āpyate. ardhamāsaśa eva tat saṃvatsaram āpnuvanti. saptadaśa grahītavyāḥ. prajāpatis saptadaśaḥ. prajāpatim evāpnuvanty. ekaviṁśatir grahītavyā. asā āditya ekaviṁśo. ’mum evādityam āpnuvanti. saptaviṁśatir grahītavyās. triṇavā[312] ime lokā. eṣv eva lokeṣv ṛdhnuvanti. trayastriṁśad grahītavyās. trayastriṁśad devatā. devatāsv eva pratitiṣṭhanti. //

1 つの［Graha］が汲まれるべきである。というのも Prajāpati は唯一であるから。3 つの［Graha］が汲まれるべきである。これら世界は 3 つである。彼らはこれら世界において成功していることになる。5 つの［Graha］が汲まれるべきである。祭式は 5 つからなる。彼らは祭式を獲得していることになる。7 つの［Graha］が汲まれるべきである。村の家畜たちは 7 つ（種類）[313]である。彼らはそれらを獲得していることになる。9 つの［Graha］が汲まれるべきである。身体諸機能は 9 つである。彼らは身体諸機能においてしっかりと立っていることになる。15 の［Graha］が汲まれるべきである。半月には 15 の夜がある。半月ごとに一年は満たされる。彼らはそうして半月ごとに一年を満たしていることになる。17 の［Graha］が汲まれるべきである。17 番目は Prajāpati であ

---

[307] 早産などによって子孫が生まれるべき順番が狂うことを避けるようにするということが示唆されている可能性がある。

[308] Amano [2009: 638 s.v. bhav^{i}-] によれば、行為名詞 bhūti-は「なりたい何かになること」、つまり、「成就すること」を意味する。

[309] そのように Schroeder は訂正している。Ch vyā [Schr 34 n. 9].

[310] そのように Schroeder は訂正している。Ch pāṃkte [Schr 34 n. 10].

[311] そのように Schroeder は訂正している。Ch vyā rdhaprāṇāḥ [Schr 34 n. 11].

[312] そのように Schroeder は訂正している。Ch ṇava [Schr 35 n. 1].

[313] MS 1.8.1(4) には、人間、馬、牛、羊、ヤギ、大麦、米の 7 種類が村の家畜として述べられている。Cf. Amano [2009: 280].

る[314]。彼らは Prajāpati に到達していることになる。21 の［Graha］が汲まれるべきである。21 番目はあの Āditya（太陽）である[315]。彼らはあの Āditya に到達していることになる[316]。27 の［Graha］が汲まれるべきである。これら世界は 27（3×9）ある[317]。彼らはこれら世界において成功していることになる。33 の［Graha］が汲まれるべきである。神格たちは 33 柱である[318]。彼らは神格たちにおいてしっかりと立っていることになる。

(33.8:35.6–7) iti śrīmadyajuṣi kāṭhake carakaśākhāyām orimikāyāṃ sattrāṇi nāma trayastriṃśaṃ sthānakaṃ saṃpūrṇam. //

以上で、吉兆ある Yajus をもつ Kāṭhaka における、Caraka[319]学派における、Orimikā における Sattra たちという名前の 33 番目の Sthānaka が終了した。

KS 34.1: 11 頭の動物犠牲（Ekādaśinī）

KS 34.1(1): Ekādaśinī の開始

(34.1:35.8–12) ekādaśinībhir yanti. prāṇā vā ekādaśinīḥ. prāṇeṣv eva tat pratitiṣṭhanto yanti. tad āhur, "yad ekādaśinībhir iyur, ahāni vātiricyeran, paśavo vā. nottamenāhnottamaḥ paśus saṃpadyeta=" iti. [320] tad, yad ekādaśinīkāmās syuḥ, prathame māsy ekādaśinīm upeyur, uttame ca. prāṇā vā ekādaśinī. prāṇān eva mukhataḥ pratipadyante. prāṇeṣv antataḥ pratitiṣṭhanty. [321]

11 頭の犠牲獣祭を用いて彼らは行く[322]。11 頭の犠牲獣祭は感覚器官たちなのだ。彼らはそうして身体諸機能においてしっかりと立ち続けることになる。それについて［人々

---

[314] MS 1.11.6(1); (5) には、Vājapeya 祭の文脈で Prajāpati と 17 という数が関係づけられている。Cf. Amano [2009: 412; 415].

[315] KS 33.4:30.6 において、Ekaviṁśa-Stoma と Indra が関係づけられている。

[316] Amano [2022] は、Sattra の文脈においてインドラが 21 番目の太陽として記述されている箇所を扱っている。Cf. TS 7.3.10.4

[317] MS 1.9.4(2)に、27 の神々が Sattra に参加するという話があり、27 という数が Triṇava-Stoma にかけられていると思われる。Cf. Amano [2009: 330f].

[318] MS 1.9.5(1)に、33 の神々が Sattra に参加するという話が述べられている。Cf. Amano [2009: 334ff].

[319] Caraka は黒 Yajurveda の最古の学派の名前とされる． PW s.v. caraka.

[320] そのように Schroeder は訂正している。Ch paśussaṃpadyateti [Schr 35 n. 2].

[321] そのように Schroeder は訂正している。Cf pratiṣṭhaṃ° [Schr 35 n. 3].

[322] ekādaśinī- が女性形となっている理由は、本来は、raśanā- f.「ロープ」の形容詞であることが挙げられる。その場合、「11 頭の犠牲獣を繋ぐロープ」という意味で解釈される。その意味で使われていると思われる例は以下の通り：MS 3.4.8:55.13: yád ekādaśínīṃ minuyā́d vájraḥ purástād ávagr̥hṇīyād.; MS 4.7.8:103.10−11: tád yá evā́m̐ vidvā́n etā́m ekādaśinīm̐ vibadhnīté yád evā́syātmána ūnáṃ tád ā́prīṇīte. 一方、「11 頭の犠牲獣を用いる祭式」の意味で使われていると思われる例は以下の通り：MS 4.8.1:108.5: vyávavlināti vā́ ekādaśínī yajñáṃ. KS の当該箇所では、ekādaśinī-は、「ロープ」ではなく「祭式」の意味で使われていると思われる。

は］言っている、「11 頭の犠牲獣祭を用いて行くことで、日々が余ることになるだろう、あるいは犠牲獣たちが。最後の日と最後の犠牲獣が合わせられるべきではない」と[323]。彼らが 11 頭の犠牲獣祭を望む者たちであるなら、最初の月に 11 頭の犠牲獣祭を行うべきである、そして最後の［月］に。11 頭の犠牲獣祭は身体諸機能たちなのだ。彼らは身体諸機能たちに先頭から踏み込んでいることになる。彼らは身体諸機能たちにおいて最後にしっかりと立っていることになる[324]。

KS 34.1(2) : 1 日目：1 頭目 Indra-Agni

(34.1:35.12–15) aindrāgnaḥ khalv evācyutaḥ paśus syāt. prāṇāpānau vā indrāgnī. prāṇāpānayor eva tat pratitiṣṭhanto yanti. tejo vā indrāgnī. tejasy eva tat pratitiṣṭhanto yanty. ojo vai vīryam indrāgnī. tejasy eva tad vīrye pratitiṣṭhanto yanti=. indrāgnī sarvā devatā. yad aindrāgnaḥ paśur bhavati, sarvā eva tad devatāḥ prīṇanto yanti. //

実際には Indra-Agni のための、動かされていない[325]犠牲獣が使われるべきである。Indra-Agni は吐く息と吸う息なのだ。彼らはそうして吐く息と吸う息においてしっかりと立ち続けることになる。Indra-Agni は鋭い光なのだ。彼らはそうして鋭い光においてしっかりと立ち続けることになる。Indra-Agni は活力、勇力なのだ。彼らはそうして活力、勇力においてしっかりと立ち続けることになる。全神格たちは Indra-Agni である。Indra-Agni のための犠牲獣が使われることで、彼らは全神格たちを満足させ続ける。

KS 34.1(3): 2-5 日目：2 頭目（Rathaṃtara-Sāman, Agni）、3 頭目（bṛhat-sāman, Indra あるいは Indra-Agni）、4 頭目（Rathaṃtara-Sāman, Agni-Indra）、5 頭目（Bṛhat-Sāman, Indra-Agni）

(34.1:35.15–36.3) yad aho rathaṃtaraṁ sāma syād, āgneyaṃ tad ahaḥ paśum ālabheran. yad ahar bṛhad, aindraṃ tad ahas. tad vaindrāgnam[326] eva. yad aho rathaṃtaraṁ sāma syād, āgnendraṃ tad

---

ekādaśinībhir yanti は、11 頭の犠牲獣が 11 日間毎日 1 頭ずつ用いられるということを表している。当該箇所では単数形ではなく ekādaśinībhir という複数形が用いられている。

[323] 12 日祭において 11 頭の犠牲獣を 1 日に 1 頭ずつ当てはめていくと、最後の 1 日が余ってしまう。あるいは、10 夜祭において 11 頭の犠牲獣を 1 日に 1 頭ずつ当てはめていくと、最後の 1 頭が余ってしまう。

[324] ここで述べられていることは、11 頭の犠牲獣祭が年末と年始をまたいでもよいということであると考えられる。

[325] acyuta- 「動かされていない」の意味について、Āp 9.9.6 に対する Caland の訳注は次のように述べている：「その場所から動かされていない（acyuta）」ものは、祭主が前もって自身のところに保持するつもりであった貴重なものである。 (Das “nicht von der Stelle bewegte (acyuta)" ist der Wertgegenstand, welchen der Yajamāna vorher bei sich zu behalten gedachte) 。Āp 9.9.6: yadi sāyam ahute 'gnihotre pūrvo 'gnir anugacched adhiśrityāgnihotram unnīya vāgninā ca sahāgnihotreṇa cānuddravet / yo brāhmaṇo bahuvit sa uddharet / yat purā dhanam adāyī syāt tad dadyāt / acyutenainaṃ cyāvayatīti vijñāyate.

[326] 訂正した。Ed vaindrāgna.

ahaḥ paśum ālabheran. yad ahar bṛhad, aindrāgnaṃ tad ahas. tad anupūrvaṃ devate kalpayanti. yathāpūrvaṃ paśūn ālabhanta. indrāgnibhyām eva yanti.

Rathaṃtara-Sāman が使われる日、その日に彼らは Agni のための犠牲獣を捕まえて献じるべきである。Bṛhat［-Sāman］が使われる日、その日に Indra のための［犠牲獣］を［彼らは捕まえて献じるべきである］。あるいは Indra-Agni のための［犠牲獣］を。Rathaṃtara-Sāman が使われる日、その日に彼らは Agni-Indra のための犠牲獣を捕まえて献じるべきである。Bṛhat［-Sāman］が使われる日、その日に Indra-Agni のための犠牲獣を［捕まえて献じるべきである］。彼らはそうして順に両神格を整える。彼らは順に犠牲獣たちを捕まえて献じる。彼らは Indra-Agni と共に行っていることになる。

KS 34.1(4): 6 日目：6 頭目（Bṛhaspati, śitipṛṣṭha）

(34.1:36.3–5) bārhaspatyaṁ śitipṛṣṭhaṁ ṣaṣṭhe ’hann ālabheran. brahma vai bṛhaspatir. brahmaṇy eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanti. bārhaspatyaḥ khalu vāva śitipṛṣṭho devatayā.

彼らは Bṛhaspati のための、白い背中をもつ［犠牲獣］を 6 番目の日に捕まえて献じるべきである。Bṛhaspati は Brahman なのだ。彼らはそうして Brahman において祭式の最後にしっかりと立っていることになる。神格に関しては、白い背中をもつ［家畜］は Bṛhaspati に属する。

KS 34.1(5): 7 日目（第一 Chandoma）：7 頭目（神格 Dyāvāpṛthivī, 犠牲獣 dhenu）

(34.1:36.5–7) dyāvāpṛthivyāṃ dhenuṁ saptame ’hann ālabheran, prathame chandome. dyāvāpṛthivī vai yajñasya pratiṣṭhā. dyāvāpṛthivyor eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanti. dyāvāpṛthivyā khalu vāva dhenur devatayā.

彼らは天と地のための乳牛を 7 番目の日に捕まえて献じるべきである、（すなわち）最初の Chandoma において。天と地は祭式にとって安定した基盤なのだ。彼らはそうして天と地において祭式の果てでしっかりと立っていることになる。神格に関しては、乳牛は天と地に属する。

KS 34.1(6): 8 日目（第二 Chandoma）：8 頭目（神格 Vāyu, vatsa）

(34.1:36.7–9) vāyavyaṃ vatsam aṣṭame ’hann ālabheran, madhyame chandome. prāṇo vai vāyuḥ. prāṇa eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanti. // vāyavyaḥ khalu vāva vatso devatayā.

彼らは Vāyu のための子牛を 8 番目の日に捕まえて献じるべきである、（すなわち）真ん中の Chandoma において。Vāyu は気息なのだ。彼らはそうして気息において祭式の最後に立っていることになる。神格に関しては、子牛は Vāyu に属する。

KS 34.1(7): 9 日目（第三 Chandoma）：9 頭目（Vāc, pṛśni）

(34.1:36.9–11) vāce pṛśniṃ[327] navame ’hann ālabherann, uttame chandome. vāg vai pṛśniḥ pratiṣṭhā. vācy eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanti. vāgdevatyā[328] khalu vāva pṛśnir devatayā=.

Vāc のためにまだら牛を 9 番目の日に捕まえて献じるべきである、最後の Chandoma において。まだら牛は Vāc、安定した基盤なのだ。彼らはそうして Vāc において祭式の果てにしっかりと立っていることになる。神格に関しては、まだら牛は Vāc を神格とするものである。

KS 34.1(8): 10 日目：10 頭目（Aditi, vaśā）

(34.1:36.11–13) ādityāṃ vaśāṃ daśame ’hann ālabherann. iyaṃ vā aditir. iyaṃ pratiṣṭhā=. asyām eva tad yajñasyāntataḥ pratitiṣṭhanty. ādityā khalu vāva vaśā devatayā.

彼らは Aditi のための牛（vaśā[329]）を 10 番目の日に捕まえて献じるべきである。Aditi はこの［大地］なのだ。この大地が安定した基盤なのだ。彼らはそうしてこの［大地］において祭式の果てにしっかりと立っていることになる。神格に関しては、牛は Aditi に属する。

KS 34.1(9): Mahāvrata の日（11 日目）：11 頭目（Viśvakarman, ṛṣabha）

(34.1:36.13–19) vaiśvakarmaṇam ṛṣabhaṃ mahāvratīye ’hann ālabherann. indro vai vṛtraṁ hatvā viśvakarmābhavat. prajāpatiḥ prajās sṛṣṭvā viśvakarmābhavat. "saṃvatsaro viśvakarmā=" ity āhur "yam imāḥ prajā anuprajāyanta" iti. trirūpas syād ubhayataeto. yat prathamaṃ rūpaṃ, tenaindro. yad dvitīyaṃ, tena prājāpatyo. yat tṛtīyaṃ, tat saṃvatsarasya rūpam. "indro vṛṣā. prajāpatir vṛṣā. saṃvatsaro ’sya vṛṣā=" ity āhur "yam imāḥ prajā anuprajāyanta" iti. tasmād ṛṣabhas syāt. //

Viśvakarman のための雄牛を、Mahāvrata の日に捕まえて献じるべきである。Indra は Vṛtra を殺した後、Viśvakarman（「全ての義務を果たした者」）になった。Prajāpati は生き物たちを創り出した後、Viśvakarman になった。「Viśvakarman は一年である」と［人々は］言っている、「この生き物たちが（Viśvakarman）の後に繁殖するところの」と。3 つの色をもつ、両側にまだらがある［雄牛］が使われるべきである。最初の色であるもの、それによって［雄牛は］Indra に属する。2 つ目の［色］であるもの、それによって ［雄牛は］Prajāpati に属する。3 つ目の［色］であるもの、それは一年の色である。「雄牛は Indra、雄牛は Prajāpati、彼の雄牛は一年である」と［人々は］言っている、

---

[327] そのように Schroeder は訂正している。Ch pṛśnirnavame [Schr 36 n. 1].

[328] そのように Schroeder は訂正している。Ch vatyaḥ [Schr 36 n. 2].

[329] vaśā は乳牛ではない雌牛のこと、つまり、子牛を産む前であったり、産んで子牛を育てた後にしばらくして母乳が出なくなった雌牛のことを指す。これについては、Amano [2009: 566 n.2492] を参照せよ。

「この生き物たちが彼(雄牛)の後に繁殖するところの」と。それゆえ雄牛が使われるべきである。

KS 34.2: Ekādaśinī の贖罪儀礼（≈TB 1.4.6.5−7; 1.4.7.1）[330]

KS 34.2(1): Tvaṣṭar への動物犠牲[331]

(34.2:36.20–23) asuryaṃ vā etasmād varṇaṃ kr̥tvā teja indriyaṃ vīryaṃ prajā paśavo ’pakrāmanti. yasya yūpo virohati, sa īśvara īj̄ānaḥ pāpīyān +bhavitos.[332] tvāṣṭraṃ[333] bahurūpam ālabheta. tvaṣṭā vai rūpāṇāṃ vikartā. tam eva bhāgadheyenopadhāvati. so ’smai teja indriyaṃ vīryaṃ prajāṃ paśūn punar upāvartayaty.

Asura に属する色[334]を作った後、彼から、鋭い光、Indra 力、勇力、子孫、家畜たちは遠ざかる。その者の祭柱がそびえ立つ[335]ところの者は、祭式を行なった後に、より悪い者になる可能性がある。Tvaṣṭar のための、多くの色をもつ［家畜］を捕まえて献じるべ

---

[330] Mantra は KS 4.11 (Soma)と KS 7.13 (agnyādheya)にある。

[331] MS 4.8.1（Soma 祭の章）と TS 6.6.6.1−2（Soma 祭の章）に Pātnīvata Tvāṣṭra Paśu と呼ばれる、Manu が自分の妻の代わりに Tvaṣṭar のために動物犠牲を行うという話が述べられている。KS においてこの箇所の続きで述べられる人間犠牲的な記述と合わせて考えると、人間犠牲の代わりに Tvāṣṭra Paśu を行うという観念がみえてくる。MS 4.8.1:107.3−108.3: tā́ abrūtāṃ. máno yájvā vái śraddhā́devo ’sy anáyā tvā pátnyā yājayāvéti. tā́ṃ prókṣya páryagniṃ kr̥tvédhmā́barhír áchaitāṁ. sá índro ’ved. imé vái té asuramāyé mánuṃ pátnyā vyàrdhayatā íti. tám índro brāhmaṇó bruvāṇá upáit. sò ’bravīn. máno yájvā vái śraddhā́devo ’si yājáyāni tvā. katamás tvám asi brāhmaṇáḥ. // kíṃ brāhmaṇásya pitáraṃ kím u pr̥chasi mātáraṃ. śrutáṃ céd asmin védyaṁ sá pitā́ sá pitāmaháḥ. // kénéty. ābhyā́ṃ brāhmaṇā́bhyām íti=. íśe ’háṃ brāhmaṇayor íti=. íśiṣa hī́ty abravīd. átithipatir vā́vātithīnām īṣṭā íti. sá dvitī́yāṁ védim úddhantum úpāpadyata. tā́ idhmā́barhír bíbhratā áitāṃ. tā́ abrūtāṃ. kím idáṃ karoṣī́ti=. imáṃ manuṁ yājayiṣyāmī́ti. kénéti. yuvā́bhyām íti. tā́ avittām. índro vā́véti. táu nyásyedhmā́barhíḥ pálāyetām. táu yád ádhāvatāṃ parástād evéndraḥ pratyáut. // táu vŕ̥śaś cáivāṣaś cābhavatāṃ. tád vŕ̥śasya cáivāṣasya ca jánma. sá mánur índram abravīt. sáṃ me yajñáṁ sthāpaya. mā́ me yajñó víkr̥ṣṭo bhūd íti. sò ’bravīd. yátkāma etā́m ā́labdhāḥ, sá te kā́maḥ sáṃr̥dhyatām. áthótsr̥jéti. tā́ṁ vā́ údasr̥jat. tád ŕ̥ddhyā evá. TS 6.6.6.1−2: índraḥ pátniyā mánum ayājayat. tā́m páryagnikr̥tām údasr̥jat. táyā mánur ārdhnot. yát páryagnikr̥tam pātnīvatám utsr̥játi. yā́m evá mánur ŕ̥ddhim ā́rdhnot. tā́m evá yájamāna r̥dhnoti. yajñásya vā́ ápratiṣṭhitād yajñáḥ párābhavati. yajñám parābhávantaṃ yájamānó ’nu párābhavati. yád ā́jyeṇa pātnīvatáṁ saṁsthāpáyati yajñásya prátiṣṭhityai. yajñám pratitíṣṭhantaṃ yájamānó ’nu prátitiṣṭhati. iṣṭáṃ vapáyā // bhávati ániṣṭaṃ vaśáyā́tha pātnīvaténa prácarati. tīrthá evá prácarati. átho, etárhy evā́sya yā́mas. tvāṣṭró bhavati. tváṣṭā vái rétasaḥ siktásya rūpā́ṇi víkaroti. tám evá vr̥ṣāṇam pátnīṣv ápi sr̥jati. sò ’smai rūpā́ṇi víkaroti.

[332] 訂正した。Ed bhavati. Mittwede [1989: 141] と Keith [1912: 1098]と Caland [1918: 18]に倣って bhavitos に訂正した。Oertel [1938b: 62; 74]は、īśvara-が定動詞とともに用いられる場合が他にあることを根拠に訂正しないが、同時に bhavitoḥ と使われる平行箇所（PB 9.10.2; JB 1.134; 2.46）を参照している。

[333] そのように Schroeder は訂正している。Ch tvāṣṭrāṃ [Schr 36 n. 3]. Cf. TB 1.4.7.1

[334] 「Asura に属する色」は動物犠牲による出血の色、すなわち「血の色」であると考えられる。

[335] 犠牲獣祭のための祭柱（yūpa-）がそびえたつということは犠牲獣祭が行われるということを示している。

きである。Tvaṣṭar は色たちを変える者[336]なのだ。彼（祭主）は彼のもとへ分け前を伴って（助けを求めて）走り寄っていることになる。彼は彼（祭主）のために鋭い光、Indra 力、勇力、子孫、家畜たちを、再び取り戻していることになる。

KS 34.2(2): Sarparājñī 讃歌

(34.2:36.23–37.3) ārtiṃ vā ete niyanti,[337] yeṣāṃ[338] dīkṣitānāṃ pramīyate. taṃ yad avavr̥jeyuḥ, krūrakr̥tām ivaiṣāṃ lokas syād. "āhara. daha=" iti brūyus.[339] taṃ dakṣiṇārdhe +vedyā[340] nidhāya sarparājñyā r̥gbhis stuyur. iyaṃ[341] vai sarparājñy. asyā evainam adhisamīrayanti. (34.2:37.3–7) tad āhur, "vyr̥ddhaṃ vā etad, yat stutam ananuśastam" iti. hotā prathamo dīkṣitānāṃ prācīnāvītaṃ kr̥tvā mārjālīyaṃ parīyād. yāmīr anubruvan sarparājñyā r̥cāṃ kīrtayann.[342] iyaṃ vai sarpato rājñy. asyā evainam adhisamīrayanti. dhuvanty evainam etad. atho ny evāsmai hnuvate. (34.2:37.7–9) tama iva[343] vā ete niyanti, yeṣāṃ dīkṣitānāṃ pramīyate. //[344] "agna āyūm̐ṣi pavasa" ity etām̐[345] somasya pratipadaṃ kurvīran. punata evātmānam. āyur evātman dadhate. 'tho jyotiṣmanta eva yanty. (34.2:37.9–11) apratiṣṭhitā vā[346] ete, yeṣāṃ dīkṣitānāṃ pramīyate. rathaṃtarasāmaiṣām̐ somas syād. iyaṃ vai pr̥thivī rathaṃtaram. asyām eva pratitiṣṭhanti. //

危難に例の者たちは陥っているのだ、潔斎者たちの［一人］が衰弱死するところの（例の者たちは）。彼（潔斎者たちの一人）を彼らが除外するなら[347]、彼らの世界は残酷な

---

[336] Tvaṣṭar は Asura 的なものをそうでないものに変える力をもっているように見える。

[337] そのように Schroeder は訂正している。Ch niyaṃśchaṃti [Schr 37 n. 1]. Cf. TB 1.4.6.5

[338] そのように Schroeder は訂正している。Ch vaiṣā [Schr 37 n. 2]. Cf. TB 1.4.6.5

[339] Cf. TB 1.4.6.5: ā́rtiṃ vā́ eté níyanti / yéṣāṃ dīkṣitā́nāṃ pramī́yate / táṃ yád avavárjeyuḥ / krūrakŕ̥tām ivaiṣāṃ lokáḥ syāt / ā́hara dahéti brūyāt //

[340] 訂正した。Ed vedyāṃ. Mittwede [1989: 141] 参照。

[341] そのように Schroeder は訂正している。Ch riyo [Schr 37 n. 2]. Cf. TB 1.4.6.6

[342] Cf. KS.22.11:67.9, KpS.35.5:210.23, TB.1.4.6.6

[343] 最初の筆跡では Ch tama eva となっているが、その後訂正されている。[Schr 37 n. 4].

[344] YV のマントラにおいては、通常母音 e と o の後で母音 a が脱落せずに残る。Cf. Macdonell [1916: 23]. Schroeder は、pramīyate と agne の間にサンディ（-e a- > -e '-）が生じていないことから、//を書き足したという注を付している。[Schr 37 n. 5].

[345] そのように Schroeder は訂正している。Ch ityetā [Schr 37 n. 6].

[346] そのように Schroeder は訂正している。Ch vā vā [Schr 37 n. 7].

[347] Gotō [1987: 101] は、KS 34.2 avavr̥jeyuḥ とその並行箇所である TB 1.4.6.5 avavárjeyuḥ について、+avarjeyuḥ 'dürften (einen Toten) liegenlassen, verlassen'（「（死者を）放置しておく、放っておくことになるであろう」）という訂正形を示している（Mittwede [1989: 141] は Gotō の訂正形を示すのみである）。+avarjeyuḥ という語形は、ava-arj 'entlassen'（「解放する」）のゼロ階梯の現在語幹 ava-r̥ja-^{ti} の 3rd pl. opt.と分析される。ava-arj のゼロ階梯の現在語幹 ava-r̥ja-^{ti} は ŚBK と PB と JB において在証されている（cf. Gotō [1987: 101]）。しかし、この訂正形については 3 つの問題がある。まず 1 つ目は、「（死者を）放置しておく、放っておくことになるであろう」という意味が、当該箇所の文脈において適切であるかどうか。2 つ目は、ava-arj のゼロ階梯の現在語幹 ava-r̥ja-^{ti} は、ŚBK, PB, JB においてのみ現れるものであるということである。３つ目として、訂正部分が多すぎるという点が挙げられる。つまり、KS は訂正部分が 2 箇所（-v-を削除し、-r̥-を-r-に訂正する）あり、TB は訂正部分が 2 箇所（-vá-を削

ことをする者たちの［世界］のようになってしまうだろう。「お前は［家畜の肉を］取ってきて焼け」と彼らは言うべきである。彼らはその一人を Vedi の南半分に[348]置いた後、Sarparājñī の詩節たち[349]を使って歌うべきである。Sarparājñī はこの［大地］なのだ。彼らはこの［大地］を土台として彼を動き出させていることになる。それについて［人々は］言っている、「Stotra の続きに Śastra がないものは失敗だ」と。Hotar は潔斎した者たちの中で最初の者として右肩に聖紐をかけた後、Mārjālīya を周るべきである。Yama に属する［詩節たち］[350]を唱えながら、Sarparājñī の（３つの）詩節たちに言及しながら[351]。蛇の女王はこの［大地］なのだ。彼らはこの［大地］を土台として彼（衰弱死した者）を動き出させていることになる。こうして彼を（生き返らせようとして）揺さぶっていることになる。そしてまた彼に（彼が死んだことについて）謝罪していることにな

除し、代わりのアクセントは置かない）ある。では、avavr̥jeyuḥ という語形をどのように理解すべきか。もしこれが ava-varj「ねじり外す abdrehen、分離する abtrennen」（PW s.v. varj + ava）に帰せられるなら、varj の第 7 類の現在語幹 vr̥ṇak-^{ti} から $^{+}$avavr̥ñjyuḥ が期待されるだろう（varj には*varja-^{ti} という第 1 類の現在語幹も *vr̥ja-^{ti} という第 6 類の現在語幹もない）。しかし、avavr̥jeyuḥ から $^{+}$avavr̥ñjyuḥ への訂正を認めることは、訂正部分が多すぎるため困難であると思われる。では、もしこれが ava-varj の代わりに ava-varh「引きちぎる」に帰せられるなら、varh の第 6 類の現在語幹 vr̥ha-^{ti} から $^{+}$avavr̥heyuḥ が期待されるだろう。しかし、avavr̥jeyuḥ から $^{+}$avavr̥heyuḥ への訂正は、TB avavárjeyuḥ についても $^{+}$avavárheyuḥ としなければいけなくなる（varh に*varha-^{ti} という第 1 類の現在語幹はない）。また、varh が ava と共に用いられる用例は Veda 文献において他に存在しない（VWC 参照）。そしてまた、varh はしばしば「（根 mūla-を）引き抜く」というニュアンスをもつ（cf. EWAia s.v. *VARH*, mūla-várhaṇī- f. Wurzelausreißerin (TB)）。したがってこれも認められがたい。上記のどの訂正形も認められないとすれば、底本にある通りに avavr̥jeyuḥ とする他なくなる。そうすると、avavr̥jeyuḥ は ava-varj と ava-varh が重なり合った形式である可能性がある（いくつかの形式において varj「ねじる」と varh「ちぎる」が混同されることが Narten [1959: 39−52 = 1995: 1−10] で取り上げられている）。つまり、形式的には vr̥ha-^{ti} に従って第 1 類であるが、意味的には varj の意味で解釈するということである。そして、TB avavárjeyuḥ については、caus. *avavarjáyeyuḥ からの haplology（重音脱落 *-áy-e- > -ø-e-）のような短縮の結果の形式であると説明されうる。そして、脱落したアクセントの代わりに、-várj-の方にアクセントが置かれた可能性がある。

[348] ...dakṣiṇārdhe vedyā... の場合、「Vedi の（gen.）南半分において」という意味になる。あるいは、Ed dakṣiṇārdhe vedyāṃ の場合、「南半分において、Vedi において（loc.）」という意味になり、その場合南半分とは Vedi を指すという解釈になる。祭場の設計図については、Mylius [1995: 146f]を参照せよ。

[349] Sarparājñī の詩節たちとは RV 10.189.1–3 (=SV 2.726–728; cf. KS 7.13:75.9) のことである。MS では 10 番目の日に caturhotr̥ と呼ばれるマントラが唱えられ、その場面で Sarparājñī が言及される。Amano [2009: 346f] MS I 9,7(3) 参照。

[350] おそらく Yama と Yamī の対話の讃歌（RV 10.10.1-14）のことか？

[351] sarparājñyā r̥cāṃ kīrtayann. kīrtaya-は gen.とともに用いられる。Cf. MS 2.2.12(3)

る。（Agni のための詩節の導入部の詠唱）そのうちの一人が衰弱死しつつあるとき、潔斎した者たちは実にあたかも暗闇に陥っているかのようである。「Agni よ、お前は自分の寿命を清めている」[352]という Soma に関係するこの詩節の入り（pratipad-）を彼らは唱えるべきである。彼らは自分自身を清めていることになる。彼らは寿命を自分自身の中に置いていることになる。そしてまた、彼らは光をもつ者として行っていることになる。潔斎した者たちの一人が衰弱死しつつある、そういう彼らは実に安定した基盤をもたない。彼らの Soma は Rathaṃtara-Sāman を用いて行われるべきである。Rathaṃtara［-Sāman］はこの大地なのだ。彼らはこの大地においてしっかりと立っていることになる。

KS 34.3: Soma の購入および代用品の使用（≈TB 1.4.7.5–7）

KS 34.3(1): Soma の購入

(34.3:37.12–13) yady akrītam apahareyur, anyaḥ kretavyo.[353] yadi krītaṃ, yo nediṣṭhaṁ syāt, sa āhr̥tyābhiṣutyas.

もし彼らが取引していない（ただで手に入れた？）［Soma］を離れた場所に運ぶなら、他の［Soma］が取引されるべきである。もし取引された［Soma を離れた場所に運ぶなら］、もっとも近くにあるその［Soma］は取ってこられた後、絞られるべきである。

KS 34.3(2): Soma の購入の対価

(34.3:37.13) rājāhārāya[354] tu kiṃcid deyaṃ. tenāsya[355] sa parikrīto bhavati.

しかし王（=Soma）の調達者に何かが与えられるべきである。それ（何か）を使って彼（購入者）によってそれ（Soma）が購入済みになる。

KS 34.3(3): Soma の代用品：Pūtīka

(34.3:37.14–17) yadi somaṃ na vindeyuḥ, pūtīkān abhiṣuṇuyur. yadi na pūtīkān, ārjunāni. gāyatrī vai somam apāharac, chyeno[356] bhūtvā. +tasya[357] somarakṣir anuvisr̥jya nakham acchinat. tato[358]

---

[352] KS 4.11:36.6 = RV 9.66.19a, VC s.v. agna āyūṁṣi pavase. RV 9.66.19: ágna áyūṁṣi pavasa ā́ suvórjam íṣaṃ ca naḥ | āré bādhasva duchūnām || Geldner: “O Agni, du läuterst uns Lebenskraft zu; weise uns Stärkung und Labung zu! Halte das Unheil weit ab!"

[353] 訂正した。Ed krītavyas. Mittwede [1989: 141]. Cf. KS 24.3:91.19: somaḥ kretavyo

[354] Ed rājāhārāya. Ch rājahārāya [Schr 37 n. 8].

[355] 訂正した。Ed dīyate nāsya. Ch dīyaṃte [Schr 37 n. 9]. Mittwede [1989: 141]. Ed rājahārāya tu kiṃcid dīyate nāsya sa parikrīto bhavati の意味は「しかし王（＝soma）の調達者に何かが与えられる。彼（購入者）によってそれ（王 soma）は購入されていないことになる」となる。

[356] そのように Schroeder は訂正している。Ch aparaś chyeno [Schr 37 n. 10].

[357] 訂正した。Ed tasyāḥ. Mittwede [1989: 142]を参照。

[358] そのように Schroeder は訂正している。Ch acchinatuto [Schr 37 n. 11].

yo ’m̐śur amucyata, sa pūtīko ’bhavad. ūtīkā vai nāmaite. yad ūtīkān abhiṣuṇvanty, ūtim eva yajñāya kurvanty.

もし Soma を手に入れられなければ、 Pūtīka[359]を絞るべきである。もし Pūtīka を［手に入れられ］なければ、Ārjuna を［絞るべきである］。Gāyatrī は Soma を（はるか）遠くに運んだ、鷹（śyena-）となった後に。Soma 護衛者は［その鷹（＝Gāyatrī）］の後を追って［矢を］放って、そ（鷹＝Gāyatrī）の爪を切った[360]。そこからはずされた茎が Pūtīka となった。例の Ūtīka という名前である。Ūtīka を絞ることで、彼らは祭式のために援助（ūti-）をしていることになる。

KS 34.3(4): Soma の代用品：Ārjuna

(34.3:37.17–20) indro vai vṛtram ahaṁs. tasya yal lohitam āsīt, tāny ārjunāni lohitatūlāny abhavann. atha, yo grīvābhyaḥ pravṛḍhābhyo rasas samasravat, tāny ārjunāni babhrutūlāny[361] abhavan. somo vā eṣo, ’surya[362] iva tu. tasmān nābhiṣutyaḥ.

Indra は実に Vṛtra を殺した。彼の赤銅色であったもの（つまり血）が Ārjuna という赤銅色の草束になった。そして、［Vṛtra の］切り取られた頸たちから一気に流れ出た液が、Ārjuna という赤茶色の草束になった。これ（Ārjuna という草束）は Soma であるが、少し Asura よりのものである。それゆえ［それ（Ārjuna という草束）は］絞られるべきではない。

KS 34.3(5): Soma の代用品：Pūtīka

(34.3:37.20–38.3) pratidhuk ca prātaḥ pūtīkāś ca. dadhi madhyandine pūtīkāś ca. śṛtaṃ cāparāhṇe[363] pūtīkāś ca=. indriyeṇa vā eṣa somapīthena vyṛdhyate, yasya somam apāharanti. sa oṣadhīś ca paśūṁś ca praviśati. yad etad ubhayam abhiṣuṇvanty, oṣadhibhyaś caiva paśubhyaś cādhi somapīthaṃ punar avarunddhe. //

搾りたての乳と Pūtīka は早朝に。酸乳と Pūtīka は真昼に。加熱された［乳］と Pūtīka は午後に。その人の Soma を（はるか）遠くに運ぶ者、そういう者は Indra 力 を、Soma 飲み［の効力］を失う。それ（Soma）は植物と家畜たちの中に入る。この両方（植物と家畜）［の性質をもっているもの］を絞ることで、彼らは植物と家畜たちから Soma の効力を再び獲得していることになる。

---

[359] pūtīka はマメ科植物の一種（*Caesalpinia bonduc* Roxb.）とされる。Kuiper [1984] 参照.

[360] Cf. PB 9.5.4: gāyatrī somam āharat. tasyā anuvisṛjya somarakṣiḥ parṇam acchinat. tasya yo 'ṃśuḥ parāpatat, sa pūtīko 'bhavat. tasmin devā ūtim avindann. ūtīko vā eṣa, yat pūtīkān abhiṣuṇvanty. ūtim evāsmai vindanti. Caland による翻訳[1931 : 212f] : 4. The Gāyatrī fetched the soma ; a soma-guard discharged an arrow after her and cut off a feather of her (off Gāyatrī) ; that shoot of it (of the soma) which fell down, became the pūtīka(-plant) ; in it the Gods found help (ūti) ; it verily is the pūtīka ; in that they press out the pūtīkas, they find help for him.

[361] そのように Schroeder は訂正している。Ch babhrū vabhrutūlā° [Schr 37 n. 12].

[362] そのように Schroeder は訂正している。Ch surye [Schr 37 n. 13].

[363] そのように Schroeder は訂正している。Ch parāhṇe [Schr 37 n. 14].

KS 34.4: 競争相手のいる Soma 祭（≈TS 7.5.5; PB 9.4）

KS 34.4(1): 2 つの Soma 祭が同時に行われる場合（≈TS 7.5.5(1) ）

(34.4:38.4–13) yadi somau saṁsutau syātāṃ, mahati rātryāḥ prātaranuvākam upākuryāt. pūrva eva yajñaṃ, pūrvo devatāḥ, pūrvaś chandāṁsi vṛṅkte. vṛṣaṇvatīṃ pratipadaṃ kuryād. indro vai vṛṣā. prātassavanād evaiṣām indraṃ vṛṅkte. tad āhus, "savanamukhe-savanamukhe kartavyā=" iti. savanamukhātsavanamukhād evaiṣām indraṃ vṛṅkte. "saṃveśāyopaveśāya gāyatryai chandase ’bhibhuve svāhā. saṃveṣāyopaveśāya triṣṭubhe jagatyā anuṣṭubhe chandase ’bhibhuve svāhā=" ity. etāvanti vai chandāṁsi. chandobhir devā asurāṇāṃ chandāṁsy avṛñjata. cchandobhir evaiṣāṃ chandāṁṣi vṛṅkte. // sajanyaṁ śasyaṃ. vihavyaṁ śasyam. agastyasya kayāśubhīyaṁ śasyam. etāvad vāvāsti, yāvad evāsty. antarikṣād divaḥ pṛthivyā ahorātrābhyāṃ, tebhya enān sarvebhyo nirbhajati.

もし 2 つの Soma が同時に絞られることがあるなら、夜の大部分（夜更け）において早朝復唱（Prātaranuvāka）に取り掛かるべきである。彼は（競争相手より）先の者として祭式を、先の者として神格たちを、先の者として韻律たちをもぎとっていることになる。vṛṣaṇ-（雄牛）［という語］を含む詩節[364]の導入部を唱えるべきである。雄牛は Indra なのだ。彼は彼らの早朝の Soma 搾りから Indra をもぎとっていることになる。それについて［人々は］言っている、「1 つ 1 つの Soma 搾り（朝、昼、夕）の冒頭において［vṛṣaṇ-（雄牛）を含む詩節の入りが］唱えられるべきである」と。彼は彼らの 1 つ 1 つの Soma 搾りの冒頭から Indra をもぎとっていることになる。「入場に、休憩に、Gāyatrī に、韻律に、克服に、Svāhā。入場に、休憩に、Triṣṭubh に、Jagatī に、Anuṣṭubh に、韻律に、克服に、Svāhā」と。韻律はこれくらい多くある。韻律たちによって神々は Asura たちの韻律たちをもぎとった。彼は韻律たちによって彼らの韻律たちをもぎとっていることになる。Sajanya［-Sūkta］[365]が唱えられるべきである。Vihavya［-Sūkta］[366]が唱えられるべきである。Agastya の Kayāśubhīya［-Sūkta］[367]が唱えられるべきである。［Sūkta］の分だけ、その分だけのもの（祭主の敵対者への防御）がある。中空から、天から、大地から、日夜から、それら全ての分け前から、彼ら（祭主の敵対者たち）を排除する。

---

[364] Caland の PB に対する注 [1931: 210−211] によれば、朝の Soma 絞りにおいて 1−3 番目の Sāman が pavasendo vṛṣā suta (SV 2.128−130) から始まるものとされ、昼の Soma 絞りにおいて 1−3 番目の Sāman が vṛṣā pavasva dhārayā (SV 2.153−155) で、10−12 番目の Sāman が vṛṣā śoṇaḥ (SV 2.156−158)で始まるものとされ、夜の Soma 絞りにおいて 1−3 番目の Sāman が acikradad vṛṣā hariḥ (SV 2.392−394)で始まるものとされる。

[365] Cf. RV 2.12.

[366] Cf. RV 10.128; 西村 [2015]

[367] Cf. RV 1.165.

KS 34.4(2): 水瓶が割れた場合の贖罪儀礼（≈TS 7.5.5(2)）

(34.4:38.13–18) yadi prātassavane kalaśo dīryeta, vaiṣṇavīṣu śipiviṣṭavatīṣu mādhyandine pavamāne stuyur. yad vai yajñasyātiricyate, viṣṇuṃ tac chipiviṣṭam abhyatiricyate. ’tiriktaṃ vā etad. atiriktaṁ śipiviṣṭam. atiriktenaivātiriktam āpnoti. yadi madhyandina ārbhavasya pavamānasya purastād, vaṣaṭkāranidhanaṁ sāma kuryur. yadi tṛtīyasavana, etad eva. vaṣaṭkāro vai yajñasya pratiṣṭhā. pratiṣṭhām evainaṃ gamayanti. //

もし早朝の Soma 搾りにおいて水瓶が割れた場合、Viṣṇu に関する、śipiviṣṭa-［という語］を含む［詩節］[368]に合わせて、真昼の Pavamāna において、彼ら（Udgātṛ たち）は［Stotra を］歌うべきである。祭式の余る［一部］、それは Viṣṇu Śipiviṣṭa のために余る。この［Stotra］は余分なものである。［Viṣṇu］ Śipiviṣṭa は余分なものである。彼は余ったものによって余ったものに達していることになる[369]。もし真昼において Ārbhava-Pavamāna［-Stotra］[370]の前に［水瓶が割れた場合］、Vaṣaṭ の発声を最終部として Sāman を歌うべきである。もし第 3 の Soma 搾りにおいて［水瓶が割れた場合］、同じように［すべきである］。Vaṣaṭ の発声は祭式の安定した基盤である。彼らはそれ（祭式）を安定した基盤に行かせていることになる。

KS 34.5: 一年の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（≈TS 7.5.8−10; TB 1.2.6.6−7; PB 5.5）

KS 34.5(1): 祭官たちの儀礼行為（≈TS 7.5.8(3)）

(34.5:38.19–39.1) āsandīm āruhyodgātā mahāvratenodgāyati. preṅkham āruhya hotā mahad uktham anuśaṁsaty. adhiṣṭhāne ’dhiṣṭhāyādhvaryū pratigṛṇītaḥ. kūrceṣv itara āsate. ’ntarikṣaṃ vā annam. amuto vai pradīyate, ’syāṃ prajāyate. tad antarikṣāya jāyate. yad antarikṣa āsīnā mahāvratena caranty, annādyasyopāptyā. atho, devasākṣya +evopariṣadyaṃ jayanti.[371] svargam u lokam ākramamāṇā yanty.

玉座（āsandī）に登った後、Udgātar は Mahāvrata［-Sāman］によって Udgītha[372]を歌う。ぶらんこに登った後、Hotar は Mahad Uktha（「偉大な Uktha」）を続けて唱える。立ち場所に立った後、二人の Adhvaryu が応じて唱える（prati-gar）[373]。草束の上に他の者たち

---

[368] Cf. RV 7.100.5; 6; 99.7 (=SV 2.975-977). Cf. Amano MS 1.11.9(5) n.1667 (Vājapeya)

[369] Cf. KS 14.10

[370] 夕方のソーマ絞りで最初に用いられる stotora である。また、夕方のソーマ絞り全体のことも指す。

[371] 訂正した。Ed evo pariṣadya yājayanti. Ch: yaṃjayaṃti. Cf. Mittwede [1989: 142].

[372] Sāman（歌詠）の中で Udgātṛ 祭官が歌う部分のことを Udgītha と呼ぶ。

[373] PW s.v. pratigará は hotṛ の呼びかけに adhvaryu が答えるときに用いられる言葉であるという解釈をしている。他の可能性としては、2 人の adhvaryu が互いに応酬しあう、つまり、後で述べられる abhigara と apagara のことについて言っているという解釈も考えられる。

は座る。食べ物は中空なのだ。彼はあそこ（天界）から与えられ、ここ（大地）に繁殖する。そのとき彼は中空に向かって生まれる。彼らが中空に座りながら Mahāvrata を行うことは食べ物を得るためである。そしてまた、彼らは神々による証（お墨付き）において（中空の）上に座ることを勝ち取っていることになる。そして彼らは天界へと歩み続けていることになる。

KS 34.5(2): 賞賛者と非難者（≈TS 7.5.9(8)）

(34.5:39.1–3) abhigarāpagarau bhavataḥ. pra vā anyas sattriṇaś śaṁsati, nindaty anyo. yaḥ praśaṁsati, yad evaiṣāṁ suṣṭutaṁ suśastaṃ, tat sa praśaṁsaty. atha, yo nindati, yad evaiṣāṁ duṣṣtutaṃ duśśastaṃ,[374] tat so ’pahanti.

称賛者（Abhigara）と非難者（Apagara）が登場する。一方は Sattrin たちを称賛し、他方は非難する。称賛する者は、彼ら（Sattrin たち）によってよく歌われ、よく唱えられたものを称賛する。また、非難する者は、彼らによって悪く歌われ、悪く唱えられたものを排撃する。

KS 34.5(3): Śūdra と Ārya の毛皮の引っ張り合い（≈TS 7.5.9(7)）

(34.5:39.3–6) śūdrāryau carman vyāyacchete. // devāś ca vā asurāś cāditye vyāyacchanta. taṃ devā abhyajayann. āryaṃ varṇam ujjāpayaty. ātmānam evojjāpayaty. antarvedy āryas syād, bahirvedi śūdraś. śvetaṃ carma parimaṇḍalaṁ syād. ādityasya rūpaṃ.

Śūdra と Ārya が毛皮を引っ張り合う。神々と Asura たちは Āditya（太陽）を引っ張りあった。神々がそれを勝ち取った。Ārya-varṇa（階級）を勝たせる。自分自身を勝たせていることになる。祭場の内側には Ārya がいるべきであり、祭場の外側には Śūdra がいるべきである。白い毛皮は円形であるべきである。［それは］Āditya（太陽）の形である。

KS 34.5(4): 太鼓を鳴らす（≈TS 7.5.9(5)）

(34.5:39.6–7) sarvāsu sraktiṣu dundubhayo vadanti. yā dikṣu vāk, tāṃ tenāvarundhate. bhūmidundubhir bhavati. yāsyāṃ vāk, tāṃ tenāvarundhate.

［祭場の］全ての角において太鼓が鳴る。諸方角にある音、それをそうすることで獲得していることになる。大地の太鼓が使われる。この［大地］にある音、それをそうすることで獲得していることになる。

KS 34.5(5): 管楽器を演奏する（≈TS 7.5.9(3)）

(34.5:39.7–11) vīṇā vadanti. yā paśuṣu vāk tāṃ tenāvarundhate. kāṇḍavīṇā vadanti. yauṣadhiṣu vāk tāṃ tenāvarundhate. nāḍītūṇavā vadanti. yā vanaspatiṣu vāk tāṃ tenāvarundhate. vāṇaś śatatantur bhavati. śatāyur vai puruṣaś śatavīrya. āyur eva vīryam avarunddhe. //

[374] 訂正した。Ed suṣṭutaṁ suśastaṃ. Cf. Mittwede [1989: 142].

Vīṇā が鳴る。家畜たちにある音、それをそうすることで獲得していることになる。Kāṇḍavīṇā が鳴る。植物にある音、それをそうすることで獲得していることになる。ﾌﾙｰﾄが鳴る。木々にある音、それをそうすることで獲得していることになる。100 の弦をもつ琴が使われる。人間は 100［年］の寿命をもち、100 の勇力をもつ。寿命、勇力を獲得していることになる。

KS 34.5(6): Brahmacārin と Puṁścalī の喧嘩（TS 7.5.9(2); (9)）

(34.5:39.11–14) brahmacārī ca puṁścalī[375] cartīyete. sarvā hi bhūte vāco vadanti. mithunaṃ caranti. saṃvatsaraṃ vā ete prajāyamānās sattram āsate. teṣāṁ saṃvatsareṇaiva prajananam antardhīyate. yan mithunaṃ caranti, saṃvatsarasyaiva prajananasyopāptyai.

Brahmacārin と Puṁścalī（「売春婦」）とが喧嘩する。というのも存在物における全ての音が鳴るから。彼らは一対をなす（性交を行う）。1 年の間、例の者（Sattrin）たちは繁殖している者たちとして Sattra を行う。一年によって彼らの繁殖は中断されていることになる。彼らが一対をなすことは、一年［分］の繁殖の獲得のためである。

KS 34.5(7): 女たちの歌と鎧を着た者たちの踊り（TS 7.5.10(2)）

(34.5:39.14−18) kumbhinīr upācaranti. samṛddhyā. idaṃmadhuraṃ gāyantīs saṃnaddhakavacāḥ pariyanti. mahāvratam eva mahayanty. atho, sendratāyā eva. brahmaṇo vā anyā tviṣiḥ, kṣatrasyānyā. yad dīkṣito ’dhikṛṣṇājinas, sā brahmaṇas tviṣir. yat saṃnaddhakavaco ’dhijyadhanus, sā kṣatrasya tviṣis. tad ubhayaṃ bhavaty. ubhayos tviṣyor avaruddhyai. //

水瓶をもつ女たちが召し使える。成功のために。『この蜜』を歌っている女たちの周りを、鎧を着た者たちが回る。彼らは Mahāvrata を高揚させていることになる。そしてまた、Indra 性を備えていることのために。Brahman には一方の激しさ（tviṣi）があり、支配権には他方の［激しさ］がある。潔斎した者が黒羚羊の皮を着ていること、そのことが Brahman の激しさである。鎧を着た者が弦を張った弓を持っていること、そのことが支配権の激しさである。その両方が行われる。両方の激しさの獲得のために。

KS 34.6 Prajāpati が Dvādaśāha を 1 年と同等のものとして創造する神話

KS 34.6(1): Dvādaśāha を Soma 祭の進行になぞらえる

(34.6:39.19–23) prajāpatir vā ātmano ’dhi dvādaśāhaṃ niramimīta. saṃvatsaraḥ prajāpatis. sa caturṇāṃ māsāṃ tisrastisro rātrīr ādatta. sā dīkṣābhavat. sa uttareṣāṃ caturṇāṃ tisrastisro rātrīr ādatta. tā upasado ’bhavan. sa uttareṣāṃ caturṇāṃ tisrastisro rātrīr ādatta. sā sutyābhavat. tasmād āhur, "yāvān saṃvatsaras, tāvān dvādaśāha" iti. sarvasmād dhy eṣa saṃvatsarād adhi nirmitas.

[375] 訂正した。Ed puṁśacalī.

Prajāpati は自分自身から Dvādaśāha を作ったのだ。Prajāpati は 1 年である。彼は 4 ヶ月から 3 つずつの夜たちを取った。それら（12 夜）は潔斎となった。彼は続きの 4［ヶ月］から 3 つずつの夜たちを取った。それら（12 夜）は Upasad となった。彼は続きの 4［ヶ月］から 3 つずつの夜たちを取った。それら（12 夜）は Soma 搾り（sutyā-）となった。それゆえ［人々は］言っている、「一年の大きさくらい、それくらい Dvādaśāha は大きい」と。というのもこれ（Dvādaśāha）は一年全体から作られたから。

KS 34.6(2): Prajāpati が創造した Dvādaśāha のそれぞれの日と対応する諸々の Sāman

(34.6:39.23–40.12) sa prathamaṃ cāhar asr̥jatehīḍaṃ ca sāmemaṃ lokam agniṃ jyotir. dvitīyaṃ cāhar asr̥jatordhveḍaṃ ca sāmāntarikṣaṃ lokaṃ vāyuṃ jyotis. tr̥tīyaṃ cāhar asr̥jateḍābhir aiḍaṃ ca sāmāmuṃ lokaṁ sūryaṃ jyotiś. caturthaṃ cāhar asr̥jata paristubdheḍaṃ ca sāma yasmiṁś ca loke tejo jyotiḥ. pañcamaṃ cāhar asr̥jatādhyardheḍaṃ ca sāma yasmiṃl loke satyaṃ jyotiṣ. ṣaṣṭhaṃ cāhar asr̥jata hoiḍaṃ ca sāma yasmiṃl loke brahma jyotis. saptamaṃ cāhar asr̥jata punarnitunnāṃ ceḍāṃ yasmiṁś ca loke tapo jyotir. aṣṭamaṃ cāhar asr̥jata viṣvagaiḍaṃ ca sāma yasmiṁś ca loka r̥taṃ jyotir. navamaṃ cāhar asr̥jata hoiḍaṃ ca sāma yasmiṁś ca loke brahma jyotir. daśamaṃ cāhar asr̥jata dvīḍaṃ ca sāma yasmiṃl loke ’mr̥taṃ jyotiḥ. prāṇa eva prāyaṇīyo, ’pāna udayanīyas. tasmād, yāvad eva prāyaṇīye kriyate, tāvad udayanīye kriyate. yāvān hi prāṇas, tāvān apāna. etāṃl lokān etāni sāmāny etāni jyotīṁṣy etāni tejāṁsy avarunddhe, ya evaṃ vidvān dvādaśāhena yajate. //

彼は最初の日を創り出した、そして Ihīḍa-Sāman を、この世界を、火を、光を。2 番目の日を創り出した、そして Ūrdhveḍa-Sāman を、中空の世界を、風を光として。そして 3 番目の日を創り出した、そして Iḍā によって Aiḍa-Sāman を、あの世界を、太陽を光として。そして 4 番目の日を創り出した、そして Paristubdheḍa-Sāman を、ある世界で(?)鋭い光を光として。そして 5 番目の日を創り出した、そして Adhyardheḍa-Sāman を、ある世界で真実を、光を。そして 6 番目の日を創り出した、Hoiḍa-sāman を、ある世界で Brahman を、光を。そして 7 番目の日を創り出した、再び突き刺された Iḍā を、ある世界で熱を光として。そして 8 番目の日を創り出した、Dvīḍa-Sāman を、ある世界で不死を、光を。吐く息は Prāyaṇīya、 吸う息は Udayanīya である。それゆえ Prāyaṇīya においてなされるくらいのことは、Udayanīya においてなされる。というのも吐く息くらいのものが吸う息であるから。このように知って Dvādaśāha を使って祭る者は、これら世界を、これら Sāman を、これら光を、これら鋭い光を獲得していることになる。

KS 34.7: Prajāpati が諸生物の創造のために Dvādaśāha を創造する神話

KS 34.7(1): 6 季節と 12 か月は 1 年の 2 つの形、Gāyatrī は Brahman、Dvādaśāha は Kṣatra

(34.7:40.13–20) prajāpatir akāmayata "prajās sr̥jeya=" iti. sa etam ātman dvādaśāham apaśyat. tam ātmano niramimīta. tena prajā asr̥jata. taṃ gāyatrī chando ’nvasr̥jyata. sākāmayata= „aham imaṁ̆ sarvataḥ paribhaveyam" iti. taṃ tejasā mukhataḥ paryabhavad, ojasā madhyataś, chandasopariṣṭāt. sarvato vai sā taṃ vyatyaśayat. sarvato bhrātr̥vyaṃ vyatiśaye, ya evaṃ veda. dve rūpe saṃvatsarasya. māsā anyad r̥tavo ’nyad. yat ṣaḍ r̥tavas, tenāpto. yad dvādaśa māsās, tenāpta. ubhābhyām eva rūpābhyāṁ̆ saṃvatsaram āpnoti. brahma vai gāyatrī, kṣatraṃ dvādaśāho. ’nv enaṃ kṣatraṃ budhyate. pra purodhām āpnoti ya evaṃ veda. //

Prajāpati は望んだ、「私は生き物たちを創り出したい」と。彼はこの Dvādaśāha を自分自身の内に見た。それを自分自身から測り作った。それによって生き物たちを創り出した。それに続いて Gāyatrī 韻律が創り出された。それ（Gāyatrī）は望んだ、「私はこの［12 夜祭］を全方向から回りたい」と。それを鋭い光によって前から回った、活力によって真ん中から、韻律によって後ろから。全方向からそれ（Gāyatrī）はそれ（12 夜祭）を超えた。このように知っている者は全方向から敵対者を超える。1 年には 2 つの形がある。一方が月々で、他方が季節たちである。6 つの季節たちがあること、それによって［1 年が］到達される。12 の月々があること、それによって到達される。両方の形によって 1 年を到達していることになる。Gāyatrī は Brahman であり、 Dvādaśāha は支配権（kṣatra-）である。それ（Dvādaśāha）の後で支配権が目覚める。このように知っている者は Purohita 職を得る。

KS 34.7(2): Bṛhatī 韻律と 36 夜 (≈TS 7.4.6)

(34.7:40.20–41.4) yajñaṃ vā anyāni cchandāṁ̆sy abhyasr̥jyanta. svārājyam eva bṛhaty abhyasr̥jyata. tasmād bṛhatyā na vaṣaṭkurvanti. yad vaṣaṭkuryuḥ, paśūn agnau pradadhyur. vacasāptvā paśūn avarundhate. vāci vā ete catvāraḥ paśavo gaur aśvo ’jāvis. tasmād vācā hūtāḥ paśava udāyanti. vācā siddhā āvartante.[376] bṛhatīṃ vā eta āpnuvanti, ya etā rātrīr āsate. ṣaṭtriṁ̆śad etā rātrayaṣ. ṣaṭtriṁ̆śadakṣarā bṛhatī. bṛhatī svargaṃ lokaṃ praveda. svargaṃ lokam āpnuvanti, ya etā rātrīr āsate. devalokān vā eta āpnuvanti ya etā rātrīr āsate. ṣaṭtriṁ̆śad etā rātrayaṣ. ṣaṭtriṁ̆śad devalokā. aṣṭau vasava ekādaśa rudrā dvādaśādityā vaṣaṭkāraś ca prajāpatiś ca traya ime lokās. tān sarvān devalokān āpnuvanti ya etā rātrīr āsata.

祭式に対して他の韻律たちが創り出された。自治権に対して Bṛhatī［韻律］が創り出された。それゆえ Bṛhatī のためには彼らは Vaṣaṭ を発声しない。Vaṣaṭ を発声してしまうと、家畜たちを火に捧げてしまうことになるだろう。Vāc（ことば）によって到達したあと、家畜たちを獲得する。Vāc においてこれら 4（種類）の家畜たち、すなわち牛、馬、山羊˚、羊がいるのだ。それゆえ Vāc によって呼ばれて家畜たちは上がってくる。

[376] Cf. JB 3.5; PB 10.3.13; 23.28.8

Vāc によって成功した者たちは方向転換する。これら夜の間座る者たちは Bṛhatī に到達する。これら夜は 36 ある。Bṛhatī は 36 音節からなる。Bṛhatī は天界を知っている。これらの夜の間座る者たちは天界に到達する。これらの夜の間座る者たちは神々の世界を得る。これらの夜は 36 ある。神々の世界は 36 ある。Vasu 神群は 8、Rudra 神群は 11、Āditya 神群は 12、Vaṣaṭ 音と、Prajāpati と 3 つのこれらの世界（8+11+12+1+1+3=36）。これらの夜の間座る者たちはそれら全ての天界に到達する。

KS 34.7(3): 神々は Dvādaśāha（＝Dīkṣā＋Upasad たち＋Soma 搾り）によって人間と分離した

(34.7:41.5–12) ubhaye vai devāś ca manuṣyāś cāvyāvṛttā āsaṁs. te devā etaṃ dvādaśāham upāyaṁs. te dīkṣayaivātmānam apunata=. upasadbhir yajñaṁ samabharanta. hitvā śarīraṁ sutyayā svargaṃ lokam āyan. ya evaṃ vidvān dvādaśāham upaiti dīkṣayaivātmānaṃ punīta upasadbhir yajñaṁ saṃbharate hitvā śarīraṁ sutyayā svargaṃ lokam eti. prajāpatir vā etaṁ svargakāma āharat. sa na prābhavad. ekādaśāho vā eṣa. sa etam atirātram upariṣṭād ubhayataḥ paryaharat. samāno vā eṣa ubhayataḥ parihriyate. svargasya lokasya samaṣṭyai. //

神々と人間の両方は分けられていなかった。すると神々はこの Dvādaśāha を行った。彼らは他ならぬ潔斎によって自分自身を清めた。複数の Upasad によって祭式を準備した。身体を置いた後、Soma 搾りによって天界へ行った。このように知って Dvādaśāha を行う者は潔斎によって自分自身を清め、複数の Upasad によって祭式を準備し、身体を置いた後 Soma 搾りによって天界へ行く。Prajāpati は天界を望む者としてこれを取ってきた。彼は成功しなかった。それは 11 日祭であった。彼はこれの周りに上から両方から Atirātra をもたらした。この同じものが両側にもたらされる。天界への到達のために。

KS 34.8: Dvādaśāha における食人行為性と人間犠牲性の示唆

KS 34.8(1): Prajāpati が繁殖を求めて Dvādaśāha を開催する神話（TS 7.2.9(1)）

(34.8:41.13–18) prajāpatir akāmayata "prajāyeya=" iti. sa dvādaśāhenāyajata. tena prājāyata. praiva jāyate, ya evaṃ veda=.

Prajāpati は望んだ、「私は繁殖したい」と。彼は Dvādaśāha を使って祭った。それによって彼は繁殖した。このように知っている者は繁殖していることになる。

KS 34.8(2): 犠牲に適した水と適さない水（血）

āpo vai yad yajñiyā medhyā asṛjyanta, tad ekā api nāsṛjyanta=. asṛg vāva tan nāsṛjyata. tad asno ’sṛktvaṃ. tasmād, +yadaivāsṛk[377] chidyate, ’tha yajñiyo medhyo bhavati.

---

[377] 訂正した。Ed yad evāsṛk. 主節に atha が現れているので、従属節は yad ではなく、yadā であろう。もし訂正しなければ、yadā+iva となるが、その例は KS には在証されていない。「≈

祭式に適した、犠牲祭に適した水たちが創り出されたとき、ある［水たち］は創り出されなかったのだ。そのとき実際には血（asr̥j-）が創り出されなかった（nāsr̥jyata）のだ。それが、血（asr̥j-）が血（asr̥j-）と呼ばれる由縁である。それゆえ、血が切り取られるやいなや、［犠牲獣は］祭式に適した、犠牲祭に適したものになる。

KS 34.8(3): Sattriya を受け取ることは人間（犠牲）に等しい

puruṣasaṃmito vā eṣa. yas sattriyaṃ pratigr̥hṇāti, puruṣaṃ vai so ’tti. yaṃ khalu vai puruṣam atti, na tasyāsmiṃl loke nāmuṣminn apibhavati.

例の［祭式］（＝Dvādaśāha）は人間［犠牲］に等しい。Sattra に属するもの（人間の肉か[378]）を受け取る者は人間を食べているのだ。実をいうと、彼が食べる人間であるところの者には、この世界においても、あの［世界］においても分け前がないのだ[379]。

のように」を意味する iva は形容詞・名詞に意味を添えるときに、その形容詞・名詞の直後に置かれる。しかし、ここでは yadā の直後に置かれているので、その用法とは異なり、文全体に意味を添えていると考えられる。その場合には、yadevāsr̥k chidyate「血が切り取られるかのようになるやいなや」という意味となる。次に、yadā+eva と訂正する場合には、従属節と主節全体が祭式行為の帰結文として解釈される。

[378] Falk [1986: 38] は sattriya を「Sattra に属する（犠牲人間）」と解釈している。Cf. TS 7.2.10.2−3: eṣá ha vái kuṇápam atti yáḥ sattré pratigr̥hṇā́ti puruṣakuṇapám aśvakuṇapáṃ. gáur vā́ ánnaṃ. yéna pā́treṇā́nnam bíbhrati, yát tán ná nirṇénijati, tátó ’dhi málaṃ jāyate. 人間の死肉と馬の死肉を sattra で受け取る者は、死肉を食べているのだ。食べ物は牛なのだ。食べ物を運ぶ器を洗わなければ、そこから不浄が生まれる。

[379] Falk [1986: 38]: "Einem (bestimmten) Menschen zugeordnet ist der, der den zum Sattra gehörenden (Opfermenschen als Dakṣiṇā) annimmt. Einen Menschen fürwahr ißt er." （「ある（特定の）人間に関連している、Sattra に属する[犠牲人間を Dakṣiṇā として］受け取る者は。人間を実に彼は食べている」)。以上の Falk の訳は、本文の区切り方を、puruṣasaṃmito vā eṣa, yas sattriyaṃ pratigr̥hṇāti. puruṣaṃ vai so ’tti. と解釈していると思われるが、まず、この文脈で eṣa が指す語は、「例の祭式」すなわち「Dvādaśāha」のことであると考えられるため、eṣa ... yas ... の間の対応はない。むしろ関係代名詞 yas は、次の指示代名詞 so と対応していると考える方が妥当である。 次に、puruṣasammito の解釈を"Einem (bestimmten) Menschen zugeordnet"としているが、sammita-の正しい解釈は「（他のものの）量に沿うようにする、（大きさ、数などについて）同等にする、模造する」（"nach dem Maasse (eines Andern) machen, gleichmachen (an Grösse, Zahl u. s. w.), nachbilden", PW s.v. mā + sam）の過去分詞「同等にされた」である。したがって puruṣa-sammita-の正しい解釈は、「人間［犠牲］と同等にされた」であり、この文脈では特に「例の祭式、即ち Dvādaśāha が、人間［犠牲］と同等にされたものである」という意味で解釈されるべきである。

KS 34.8(4): Dvādaśāha の構造、Atirātra と Agniṣṭoma の順序（TS 7.2.9(2)）

(34.8:41.18–42.14) prāṇo vai pūrvo ’tirātro, ’pāna uttara. iyaṃ vai pūrvo ’tirātro, ’sā uttaro. ’gnir vai pūrvo ’gniṣṭomas, sūrya uttaro. ’ntarau vā etā anayos. tasmād antarau prayujyete. tad āhur, "yad agniṣṭomaprāyaṇo yajñaḥ, kasmād atirātrau pūrvau prayujyete" ity. athāhuś, "cakṣuṣī vā ete yajñasya, yad atirātrau. kanīnike agniṣṭomā" iti. yad agniṣṭomau pūrvau prayuñjīran, bahiṣkanīnike nirādadhyur, andhāḥ prajāyeran. yad atirātrau pūrvau prayujyete, cakṣuṣī eva yajñasya pratidhāya madhyataḥ kanīnike pratidadhāti. bhūtaṃ vai pūrvo ’tirātro, bhavyam uttaras. sad imāni daśāhāni madhye. sad bhavati, ya evaṃ veda. yo ha vai gāyatrīṃ jyotiṣpakṣāṃ veda, jyotiṣmatā bhāsā svargaṃ lokam eti. yā atirātrau, tau pakṣau. yā agniṣṭomau, te jyotiṣī. ye ’ṣṭā antara ukthyās, sa ātmā=. eṣā vai gāyatrī jyotiṣpakṣā. ya evaṃ gāyatrīṃ jyotiṣpakṣāṃ veda, jyotiṣmatā bhāsā svargaṃ lokam eti. // pakṣiṇo vā ete bhavanti. pakṣiṇo[380] bhūtvā, yatra kāmayanti, tat parāpātam āsata. eṣa vai prajāpatir dvādaśadhā vinihito, yad dvādaśāhao. yā atirātrau, tau pakṣau. yā agniṣṭomau, te cakṣuṣī. ye ’ṣṭā antara ukthyās, sa ātmā. sa eṣa prajāpatir eva. sad vai sattriṇas spṛṇvanti. tat sattrasya sattratvaṃ. prāṇā vai sat. prāṇān eva tat spṛṇvanti. sarvāsāṃ vā ete prajānāṃ prāṇair āsate, ye sattram āsate. tasmāt pṛcchanti "kim ete sattriṇa" iti. priyaḥ prajānām utthito bhavati, ya evaṃ veda. //

前の Atirātra は吐く息であり、後の［Atirātra］は吸う息である。前の Atirātra はこの［大地］であり、後の Atirātra はあの［太陽］である。前の Agniṣṭoma は Agni であり、後の［Agniṣṭoma］は Sūrya である。この内側の 2 つ（Agniṣṭoma）はこの 2 つ（天地）に属する。それゆえ内側の 2 つが始動する。それについて［人々は］言っている、「Agniṣṭoma を入り口にする祭式があるとき、なぜ 2 つの Atirātra が前［後］の 2 つとして始動されるのか」と。そして［人々は］言っている、「この 2 つ、つまり 2 つの Atirātra は、祭式の両方の目である。2 つの Agniṣṭoma は両方の瞳である」と。2 つの Agniṣṭoma を前［後］の 2 つとして始動させてしまうと、瞳の外側に出して置いてしまい、盲目の者たちが繁殖してしまうだろう。2 つの Atirātra が前［後］の 2 つとして始動されるとき、祭式の両方の目を対置した後、真ん中に両方の瞳を対置していることになる。前の Atirātra は生じたもの（過去）であり、後の［Atirātra］は生じるべきもの（未来）である。（2 つの Atirātra の）間にあるこの 10 日間は存在しているもの（現在）である。このように知っている者は、存在しているものになる。光を翼とする Gāyatrī を知っている者は、光に満ちた輝きによって天界へ行く。2 つの Atirātra、それが両翼である。2 つの Agniṣṭoma、それが両方の光である。8 個の中間の Ukthya、それが胴体である。これが光を翼とする Gāyatrī である。このように光を翼とする Gāyatrī を知っている者は、光に満ちた輝きによって天界に行く。この者たち（Sattrin たち）は翼をもつ者たちになる。彼らは翼をもつ者たちになった後、望むところへ飛んでいって座る。例のもの、つまり Dvādaśāha は、12 通りに分割された Prajāpati なのだ。2 つの Atirātra、それが両翼である。2 つの Agniṣṭoma、それが両方の光である。8 個の中間の Ukthya、それが胴体である。そのようなこれが他ならぬ Prajāpati である。Sattrin たちは存在している

[380] 訂正した。Ed pakṣiṇā. Mittwede [1989: 142].

もの（sat）を確保するのだ。それが Sattra が Sattra と呼ばれる由縁である。存在しているものは息たちである。彼らは息たちをそのようにして確保していることになる。例の者たち、つまり Sattra を行う者たちは、全ての人々の息たちを使って［Sattra を］行っているのだ。それゆえ［人々は］問う、「例の Sattrin たちか」と。このように知っている者は人々の中で好まれ、傑出した者になる。

KS 34.9: 潔斎の主題

KS 34.9(1): Prajāpati が成就を求めて Dvādaśāha を開催する神話

(34.9:42.15–22) prajāpatir akāmayata "syām" iti. sa dvādaśāhenāyajata. tenābhavat. tasmād āhur, "bubhūṣato yajña" iti. taṃ māsā dīkṣitam adīkṣitā ayājayaṁs. tasmād dīkṣitam adīkṣitā yājayanti. tebhya iṣam ūrjam adadāt. seyaṃ māseṣv ārdhnot, prajāpatidattā=.[381] ārdhnuvan, māsāḥ pratigr̥hya=. r̥dhnoti, ya evaṃ vidvān dadāty. r̥dhnoti, yaḥ pratigr̥hṇāti.

Prajāpati は望んだ、「私は成就したい」[382]と。すると彼は Dvādaśāha を使って祭った。それによって彼は成就した。それゆえ［人々は］言っている、「成就したい者のために祭式はある」と。その潔斎した者（Prajāpati）に潔斎していない［月］たちは祭らせた。それゆえ潔斎した者に潔斎していない者たちは祭らせる。彼（Prajāpati）は彼ら（潔斎していない月たち）に飲料、食料を与えた。そのようなこの、Prajāpati によって与えられた［飲料、食料］は月々の中で成功した。月たちは成功した、［飲料、食料を］受け取った後に。このように知って与える者は成功する。［飲料、食料を］受け取る者は成功する。

KS 34.9(2): （Dvādaśāha においては）太った者が潔斎すべし

pīvā dīkṣeta. yad asyāṅgānāṃ mīyate,[383] juhoty eva tat. sa, yathā vasanto navadāvyaś śobhamāna uttiṣṭhaty, evam eva navadāvyaś śobhamāna uttiṣṭhati. tapo vai yajñasya śleṣma. yathā vai rathasya śleṣmaivaṃ yajñasya tapo. yo ’tapasvī bhavaty, asaṁśliṣṭo ’sya yajñas. tapasvī syād. yajñam eva saṁśleṣayate.

太った者（pīvan-）が潔斎するべきである。減っていく彼の肢体たちの［部分］、それを彼は献供していることになる。春が新しい焼き場所をもち（nava-dāvya-）、綺麗になりつつ立ち現れるのと同じように、彼は新しい焼き場所をもち、綺麗になりつつ立ち現れる。苦行（熱）は祭式の接着剤なのだ。祭式にとっての苦行は戦車にとっての接着剤のようなものなのだ。苦行者ではない者の祭式は接着していない。苦行者がいるべきである。彼は祭式［の部分］を互いに接着させていることになる。

---

[381] Mittwede [1989: 142].

[382] syām は√as の opt. 3rd sg.だが、√bhū の opt. 3rd sg. の補充形（suppletion）として用いられる。

[383] 訂正した。Ed asyāṅgānām īyate. Mittwede [1989: 142].

KS 34.9(3): 潔斎の日数：12, 13, 15, 17, 21, 24, 27, 30, 33, 44, 48, 無限

(34.9:43.1–19) ’rdhamāsā vāvāsaṁs. te ’kāmayanta "māsās syāma=" iti. te dvādaśāham upāyaṁs. trayodaśaṃ brahmāṇaṃ kr̥tvā tasmin dr̥ṣṭvodatiṣṭhaṁs.[384] tasmāt so ’nāyatana itarān upajīvati. tasmād dvādaśāhasya trayodaśena na brahmaṇā bhavitavyaṃ. dvādaśa dīkṣeran saṃvatsarāyatanā. dvādaśa māsās saṃvatsaras. saṃvatsarāyatanā evardhnuvanti. trayodaśa dīkṣeran saṃvatsarāyatanās. trayodaśa māsās saṃvatsaras. saṃvatsarāyatanā evardhnuvanti. pañcadaśa dīkṣerann ardhamāsāyatanāḥ. pañcadaśārdhamāsasya rātrayo. ’rdhamāsāyatanā evardhnuvanti. saptadaśa dīkṣeran prājāpatyāyatanāḥ. prajāpatis saptadaśa. prājāpatyāyatanā evardhnuvanty. ekāviṁśatir dīkṣeran rukkāmā. asā āditya ekaviṁśa. eṣa rucaḥ pradātā. sa ebhyo rucaṃ prayacchati. caturviṁśatir dīkṣeran brahmavarcasakāmāś. caturviṁśatyakṣarā gāyatrī. tejo gāyatrī brahmavarcasaṃ. teja eva brahmavarcasam avarundhate. saptaviṁśatir dīkṣeraṁs triṇavāyatanās. triṇavā ime lokās. triṇavāyatanā evardhnuvanti. triṁśad dīkṣeran māsāyatanās. triṁśan māso rātrayo. māsāyatanā evardhnuvanti. trayastriṁśad dīkṣeran devatāyatanās. trayastriṁśad devatā. devatāyatanā evardhnuvanti. catuścatvāriṁśad dīkṣerann ojaskāmā vīryakāmāś. caturścatvāriṁśadakṣarā triṣṭub. ojo[385] vīryaṃ triṣṭub. oja eva vīryam avarundhata. aṣṭācatvāriṁśad dīkṣeran paśukāmā. aṣṭācatvāriṁśadakṣarā jagatī. jāgatāḥ[386] paśavaḥ. paśūn evāvarundhate. ’parimitā dīkṣerann. aparimitasyāvaruddhyā. aparimitaḥ prajāpatiḥ. prajāpatim evāpnuvanty.[387]

半月たち（一年に 24 か月）がいた。彼らは望んだ、「私たちは月たち（1 年に 12 か月）になりたい」と。彼らは Dvādaśāha を行った。Brahman 祭官を 13 番目の［月］にした後、その［月］に、［13 番目の月を］見た後、彼らは［Sattra を］終えた。それゆえ彼（Brahman 祭官）は基軸をもたず[388]、他の［祭官］たちを頼って生きる。それゆえ Dvādaśāha の 13 番目の［月］の間 Brahman 祭官は登場するべきでない。一年を基軸とする者たちは 12［夜の間］潔斎すべきである[389]。一年は 12 ヶ月である。一年を基軸とする者たちは成功していることになる。13［夜の間］一年を基軸とする者たちは潔斎するべきである。一年は 13 ヶ月である。一年を基軸とする者たちは成功していることになる。15［夜の間］半月を基軸とする者たちは潔斎するべきである。半月には 15 夜がある。半月を基軸とする者たちは成功していることになる。17［夜の間］Prajāpati に由来するものを基軸とする者たちは潔斎するべきである。Prajāpati は 17 番目である。

---

[384] 訂正した。Ed dr̥ṣṭodatiṣṭhaṁs. Mittwede [1989: 142].

[385] 訂正した。Ed ājo. Mittwede [1989: 142].

[386] 訂正した。Ed tāgatāḥ. Mittwede [1989: 142].

[387] 訂正した。Ed evārpnuvanti. Mittwede [1989: 143].

[388] 太陰暦の月に関していえば、13 番目の月（閏月である可能性がある）は、毎年あるものではない。祭官に関して言えば、Brahman 祭官は祭式において常に行う役割があるわけではない（祭式に失敗や間違いがあった場合に贖罪法の指示の役割を果たす）。それゆえ、その両者は拠点をもたない（anāyanata-）と呼ばれていると考えられる。

[389] 12 夜の間潔斎をすることが 12 日祭を行うということである。潔斎者自身が、潔斎を通じて、人間犠牲にふさわしい状態になることが、「彼らは潔斎すべきである」（dīkṣeran）という言葉に含意されている。この後に列挙される様々な日数からなる祭式が TS の Sattra 章で列挙される様々な日数の祭式の原型となっていると考えられる。

Prajāpati に由来するものを基軸とする者たちは成功していることになる。21［夜の間］威光を望みとする者たちは潔斎するべきである。あの太陽は 21 番目である。これ（あの太陽）は威光の授与者である。それは彼らに威光を差し与える。24［夜の間］Brāhmaṇa の威光を望みとする者たちは潔斎するべきである。Gāyatrī は 24 音節からなる。Gāyatrī は鋭い光、Brāhmaṇa の威光である。彼は鋭い光、Brāhmaṇa の威光を獲得する。27［夜の間］Triṇava[-Stoma]を基軸とする者たちは潔斎するべきである。これら世界は 27 個ある。Triṇava[-Stoma]を基軸とする者たちは成功していることになる。30［夜の間］月を基軸とする者たちは潔斎するべきである。月には 30 個の夜がある。月を基軸とする者たちは成功していることになる。33［夜の間］神格たちを基軸とする者たちは潔斎するべきである。神格たちは 33 いる。神格たちを基軸とする者たちは成功していることになる。44［夜の間］活力を望みとする者たち、勇力を望みとする者たちは潔斎するべきである。Triṣṭubh は 44 音節からなる。Triṣṭubh は活力、勇力である。彼らは活力、勇力を獲得していることになる。48［夜の間］家畜を望みとする者たちは潔斎するべきである。Jagatī は 48 音節からなる。家畜たちは Jagatī に属する。彼らは家畜たちを獲得していることになる。無限［夜の間］潔斎するべきである。無限の獲得のために。Prajāpati は無限である。彼らは Prajāpati に到達していることになる。

KS 34.9(4): 13 番目の月の暗示、寒期（śiśira-）は出発（prayāṇa-）、春は滞在（avasāna-）

(34.9:43.19–44.2) ṛtavo vāvāsann. anuyāvarā māsās. te māsā akāmayanta= „ṛtūn āpnuyāma=" iti. te dvādaśāham upāyaṁs trayodaśaṃ brahmāṇaṃ kṛtvā, ta ṛtūñ chiśireṇa nibhāyya, vasantam ūrjam eṣām abhyudatiṣṭhan. ya evaṃ vidvāñ chiśire dīkṣate, tapasaiva bhrātṛvyaṃ nibhāyyeṣam ūrjam asyābhyuttiṣṭhati. śiśiraṃ vā etasya prayāṇaṃ, vasanto ’vasānam. ṛdhnoti, ya evaṃ vidvāñ chiśire dīkṣate. //

季節たちがあった。月たちは後から行く者たち（anu-yā-vara-）[390]であった。それら月たちは望んだ、「私たちは季節たちに到達したい」と。彼らは Dvādaśāha を行った。13 番目の［月］を Brahman 祭官にした後、彼ら（月たち）は季節たちを寒期（śiśira-）によって怖がらせた後、春に、生き生きとした（eṣa- adj.）[391]食料に向かって立ち上がった（Sattra を終えた）。このように知って寒期に潔斎する者は、苦行によって敵対者を怖がらせた後、彼の飲料、食料に向かって立ち上がっている（Sattra を終えている）ことになる。寒期が彼（Sattra 参加者）にとって出発（prayāṇa-）であり、春が滞在（avasāna-）である。このように知って寒期に潔斎する者は成功する。

---

[390] anu-yā-vara-の-vara-は-van-から派生した接辞である（AiG II 2 p. 906）。例えば、yāyāvará “umherwankend” （「あちこちうろつき回る」）がある。

[391] EWAia s.v. *EṢ*[2]. あるいは、eṣām を iṣam（iṣ-「滋養、飲料」）に訂正するべきである。

KS 34.10: Brahmavādin たちの議論：Dvādaśāha の各日による果報について（≈TS 7.3.2）

(34.10:44.3–10) brahmavādino vadanti „kiṃ prathamenāhnā dvādaśāhasyāvarunddha" iti. tejo brahmavarcasaṃ. kiṃ dvitīyeneti. vācam annādyaṃ. kiṃ tṛtīyeneti. trīn imāṃl lokān. kiṃ caturtheneti. catuṣpadaḥ paśūn. kiṃ pañcameneti. catasro diśa ūrdhvāṃ pañcamīṃ. kiṁ ṣaṣṭheneti. ṣaḍ ṛtūn. kiṁ saptapameneti. saptapadāṁ śakvarīṃ. kim aṣṭamenety. aṣṭākṣarāṃ gāyatrīṃ. kiṃ navameneti. nava prāṇān. kiṃ daśameneti. daśākṣarāṃ virājaṃ. kim ekādaśenety. ekādaśākṣarāṃ triṣṭubhaṃ. kiṃ dvādaśeneti. dvādaśākṣarāṃ jagatīm. etāvad vāvāsti, yāvad evāsti. tat sarvam āptvāvarunddha. ṛdhnoti vasīyān bhavati ya evaṃ vidvān dvādaśāhena yajate. //

Brahman について議論する者たちは議論する、「Dvādaśāha の 1 番目の日によって何を獲得するのか」と。鋭い光を、Brāhmaṇa の威光を。「2 番目によって何を」と。Vāc を、食べ物を。「3 番目によって何を」と。3 つのこの世界たちを。「4 番目によって何を」と。4 本足の家畜たちを。「5 番目によって何を」と。4 つの方位を、上方の 5 つ目の方位を。「6 番目によって何を」と。6 つの季節を。「7 番目によって何を」と。7 本足からなる Śakvarī［韻律］を。「8 番目によって何を」と。8 音節からなる gāyatrī を。「9 番目によって何を」と。9 つの生体諸機能を。「10 番目によって何を」と。10 音節からなる Virāj［韻律］を。「11 番目によって何を」と。11 音節からなる Triṣṭubh［韻律］を。「12 番目によって何を」と。12 音節からなる Jagatī［韻律］を。存在する限り多くのものが存在する。その全体に到達した後、彼は獲得する。このように知って Dvādaśāha を使って祭る者は、成功し、より良い者（金持ち）になる。

KS 34.11: Dvādaśāha における潔斎者は犠牲（≈TS 7.2.10.3–4）

KS 34.11(1): 3 つずつの清めが 4 つある（＝12 日間）

(34.11:44.11–14) catur vai tās tisrastisras. tāsāṃ yāḥ prathamā, ātmānaṃ tābhiḥ punīte. yā dvitīyā, medhyas tābhir yajñiyo bhavati. yās tṛtīyā, gātrāṇi tābhir nirṇenikte. ’tha, yāś caturthīr, yad evāsyāntarato, yad bahiṣṭāc, chamalaṃ tat tābhir dhūnute.

3 つずつのそれら（Dīkṣā か）が 4 つある。それらのうちで 1 番目の［3 つ］、それらによって彼は自分自身を清める。2 番目の［3 つ］、それらによって［祭主が］犠牲祭に適した、祭式に適したものになる。3 番目の［3 つ］、それらによって彼は衣服を清潔にする。そして、4 番目の［3 つ］、それらによって、内側から、外側から、彼の汚れはふるい落とされていることになる。

KS 34.11(2): Dvādaśāha における食物は人間の象徴である

(34.11:44.14–19) puruṣaṃ khalu vā ete ’danti, yad dvādaśāhena yājayanti. yaḥ pāśavam atti, māṁsaṁ so ’tti. yo vājinaṃ, lohitaṁ sa. yo dhānā, asthi sa. ya ājyaṃ, majjānaṁ sa. yaḥ parivāpaṃ, keśān sa. yaḥ puroḍāśaṃ, mastiṣkaṁ sa. yo rājānaṃ bhakṣayati, svedaṁ sa. yaḥ

karambhaṃ, niṣpadaṁ sa. eṣa ha khalu vai sattriyam atti, yo ’nṛtaṃ vadati. svaditam asya sattriyaṃ bhavati nāsya sattriyaṃ jagdhaṃ bhavati, ya evaṃ veda. //

例の者たちは実は人間を食べている、すなわち Dvādaśāha を使って祭らせる者たちは。家畜の［肉］を食べる者は、［彼（人間）の］肉を食べる。凝乳を［食べる］者は、［彼の］赤いもの（=血）を［食べる］。穀粒を［食べる］者は、［彼の］骨を［食べる］。バターを［食べる］者は、［彼の］骨髄を［食べる］。炒られた米粒を［食べる］者は、［彼の］髪を［食べる］。Puroḍāśa を［食べる］者は、［彼の］脳を［食べる］。王（=Soma）を飲む者は、汗を［飲む］。煮粥を［食べる者は］、糞を［食べる］。間違ったことを言う者は、実は Sattra 食を食べている。このように知っている者にとって、Sattra 食はおいしいものになり、彼の Sattra 食は食べられたことにならない。

KS 34.12: Dvādaśāha における食物は人間の象徴である（≈TS 7.2.10.3）

KS 34.12(1): 12 夜の間潔斎する者は誕生していることになる

(34.12:44.20–21) dvādaśa dīkṣito bhavati. jāyata eva tat. tad dhi jātaṃ, yat tapaso ’dhi jāyate, na yat striyā.

12［の夜の間］彼は潔斎した者になる[392]。彼はそのようにして生まれていることになる。というのも苦行（熱）から生まれることが誕生であり、女から［生まれる］ことは［そう］ではないから。

KS 34.12(2): 犠牲祭に適さない人間の 12 の部位あるいは排泄物

(34.12:44.21–45.2) dvādaśa dīkṣito bhavati. dvādaśa vai puruṣe ’medhyāni. loma ca tanūś[393] cāsṛk ca māṁsaṃ cāsthi ca majjā ca sehuś ca plīhā[394] cāśru ca dūṣīkā ca svedaś ca yac ca prasrāvayata. etāni vai puruṣe dvādaśāmedhyāni. yad dvādaśa dīkṣito bhavati, tāny evāpahate.

12［の夜の間］彼は潔斎した者になる。人間においては犠牲祭に適さないものが 12 あるのだ。体毛と体（皮？）[395]と血と筋肉と骨と骨髄と鼻水[396]と脾臓と涙と目やにと汗と流れ出るものと。これらが人間において犠牲祭に適さない 12 のものなのだ。彼が 12［の夜の間］潔斎した者となることで、彼はそれらを排除していることになる。

---

[392] TS の平行箇所から「夜」という意味を補った：TS 7.2.10.3 dvā́daśa rātrīr dīkṣitáḥ syāt.

[393] Mittwede [1989: 143] 参照.

[394] Mittwede [1989: 143] 参照.

[395] 当該箇所の tanū-は「身体全体」を指しているとは考えにくく、並べて述べられている人体の部位と同じように、いずれかの人体部位と対応すると思われる。おそらくは「体皮」のことを指しているのではないかと思われる。

[396] EWAia s. v. *sebhu-*.

KS 34.12(3): (12 の潔斎の夜) + (12 の Upasad) + (12 夜の駆り立て) = Bṛhatī (36 音節)

(34.12:45.2–5) dvādaśa dīkṣito bhavati. dvādaśopasado dvādaśa prasūtas. tāṣ ṣaṭtriṁśat saṃpadyante. ṣaṭtriṁśadakṣarā bṛhatī. bārhatāḥ paśavo. bṛhatyām evaitat paśūn āpnoti. bṛhatyām evaitat paśūn āptvāvarunddhe.

12［夜の間］彼は潔斎した者になる。12［夜の間］Upasad があり、12［夜の間］駆り立てられた者になる[397]。それらは合計で 36［夜］になる。Bṛhatī は 36 音節からなる。家畜たちは Bṛhatī に属する。このようにして彼は Bṛhatī において家畜たちに到達していることになる。このようにして彼は Bṛhatī において家畜たちに到達した後、獲得していることになる。

KS 34.12(4): Bṛhatī 36 音節 – 4 音節=Anuṣtubh 32 音節

(34.12:45.5–7) tato yāni catvāry akṣarāṇy utkrāmanti, sā catuṣpadānuṣṭub. vāg anuṣṭub. vācy evaitat paśūn āpnoti. vācy evaitat paśūn āptvāvarunddhe. tasmād vācā paśavo nāma jānate. vācā siddhāni vartante. //

それ（Bṛhatī=36 音節）から抜け出る 4 音節、それが 4 本足（pāda-）の Anuṣṭubh（32 音節）である。Anuṣṭubh は Vāc である。このようにして彼は Vāc において家畜たちに到達していることになる。このようにして彼は Vāc において家畜たちに到達した後、獲得していることになる。それゆえ Vāc によって家畜たちが名前で認識される。Vāc によって達成されたことたちが［どんどんと］生み出されていく。

KS 34.13: Sattra 参加者の人数に関して

KS 34.13(1): Prajāpati が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 1 名）

(34.13:45.8–45.11) prajāpatir akāmayata, "bhūyān syāṁ. śreyān syām. ṛdhnuyām" iti. sa dvādaśāhenādīkṣata. tenāyajata. sa ārdhnot. tasmād eko dvādaśāhena yajeta=.[398] eko hi sa ārdhnot prajāpatir eva. prajāpater evarddham anvṛdhnoti, ya evaṃ vidvān eko dvādaśāhena yajate.

Prajāpati は望んだ、「私はより多くなりたい。私はより栄えある者になりたい。私は成功したい」と。すると彼は Dvādaśāha によって潔斎した。それを使って祭った。すると

---

[397] この箇所に関しては、Dīkṣā, Upasad, Soma 絞りのことが意図されている。他の箇所（KS 34.6）でも、Dīkṣā, Upasad, Soma 絞り、つまり、Soma 祭の進行全体となぞらえられている。prasūta-（< pra-sū 「駆り立てられた」）は su（「Soma の液を絞る」）とは異なる語根から形成されるが、音が似ていることから掛詞にされていると思われる。

[398] 訂正した。Ed yajata.

成功した。それゆえ彼（祭主）は一人で Dvādaśāha を使って祭るべきである。というのも彼が一人で成功したから、Prajāpati だけで。このように知って一人が Dvādaśāha を使って祭るならば、Prajāpati の成功に則って成功していることになる。

KS 34.13(2): 3 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者３名）

(34.13:45.11–14) tena tisro devatā rocanā adīkṣanta. tenāyajanta. tā ārdhnuvaṁs. tasmāt trayo dvādaśāhena yajeraṁs. trayo hi ta ārdhnuvann. ima eva lokā. eṣām eva lokānām ṛddham anvṛdhnuvanti, ya evaṃ vidvāṁsas trayo dvādaśāhena yajante.

それを使って光り輝く（rocana-）3 神格は潔斎した。彼らはそれを使って祭った。彼らは成功した。それゆえ 3 人で Dvādaśāha を使って祭るべきである。というのもそれら 3 つは成功したから、［すなわち］ほかならぬこの［3 つの］世界は。このように知って 3 人で Dvādaśāha を使って祭る者たちは、これら世界の成功に則って成功していることになる。

KS 34.13(3): 6 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者６名）

(34.13:45.14–16) tena ṣaḍ devatā adīkṣanta. tenāyajanta. tā ārdhnuvaṁs. tasmāt ṣaḍ dvādaśāhena yajeran. ṣaḍ ḍhi ta ārdhnuvann ṛtava eva=. ṛtūnām evarddham anvṛdhnuvanti, ya evaṃ vidvāṁsaṣ ṣaḍ dvādaśāhena yajante.

それを使って 6 神格は潔斎した。それを使って祭った。すると成功した。それゆえ 6 人で Dvādaśāha を使って祭るべきである。というのもそれら 6 つは成功したから、［すなわち］ほかならぬ季節たちは。このように知って 6 人で Dvādaśāha を祭る者たちは、季節たちの成功に則って成功していることになる。

KS 34.13(4): 12 神格が Dvādaśāha によって成功した神話（Sattra 参加者 12 名）

(34.13:45.16–20) tena dvādaśa devatā adīkṣanta. tenāyajanta. tā ārdhnuvaṁs. te pūrvapakṣeṣv ārdhnuvann. aparapakṣān anupāhvayanta. tasmād dvādaśa dvādaśāhena yajeran. dvādaśa hi ta ārdhnuvan, māsā eva. māsānām evarddham anvṛdhnuvanti, ya evaṃ vidvāṁso dvādaśa dvādaśāhena yajanta.

それを使って 12 神格が潔斎した。それを使って祭った。すると成功した。彼らは前半月たちにおいて成功した。後半月たちを呼び込まなかった。それゆえ 12 人で Dvādaśāha を使って祭るべきである。というのもそれらは 12 人で成功したから、月たちだけで。このように知って 12 人で Dvādaśāha を使って祭る者たちは、月たちに則って成功していることになる。

KS 34.13(5): Upasad においては 13 番目の者が潔斎すべし:13 番目の月の暗示（Sattra 参加者 13 名）

(34.13:45.20–21) upasatsu trayodaśo dīkṣeta=. uta hi taṃ vidur uta na vidur. uta vai trayodaśaṃ māsaṃ vidur uta na viduḥ. //

Upasad たちにおいては 13 番目の［Sattra 参加者］が潔斎すべきである。というのも彼ら（Sattra 参加者たち）のあるものは彼を知っているし、あるものは知っていないからである。彼らのうちのある者は 13 番目の月を知っているし、ある者は知っていない。

TS Sattra 章（TS 7）

TS 7.1

TS 7.1.1

TS 7.1.1(1): Jyotis の繁殖、Agni、Virāj への等置（≈JB 1.66:1−2; PB 6.3.5−6）

(7.1.1.1) prajánanaṃ jyótir. agnír devátānāṃ jyótir. virā́ṭ chándasāṃ jyótir. virā́ḍ vācò ’gnáu sáṃtiṣṭhate. virā́jam abhí sámpadyate. tásmāt táj jyótir ucyate.

Jyotis（「光」）は繁殖（prajánana-）である。Jyotis は神格たちの中では Agni である。Jyotis は韻律たちの中では Virāj である。Virāj は Vāc（ことば）から［始まって？］[399]Agni において完結する[400]。合計すると Virāj（10 の倍数[401]）になる。それゆえそれ（Virāj）は Jyotis と呼ばれる[402]。

TS 7.1.1(2): Stoma の Savana 運び（≈JB 1.66:2−4; cf. PB 16.1.6）

dváu stómau prātaḥsavanáṃ vahato, yáthā prāṇáś cāpānáś ca. dváu mā́dhyaṃdinaṁ sávanaṃ, yáthā cákṣuś ca śrótraṃ ca. dváu tṛtīyasavanáṃ, yáthā vā́k ca pratiṣṭhā́ ca.

2 つの Stoma は早朝の Soma 搾りを運ぶ、呼気（Prāṇa）と吸気（Apāna）が［運ぶ］ように。2 つの Stoma は昼間の Soma 搾りを［運ぶ］、視覚と聴覚が［運ぶ］ように。2 つの Stoma は第 3 の Soma 搾りを［運ぶ］、Vāc と土台が［運ぶ］ように。

---

[399] vācò を abl.で解釈した。gen.で解釈することも可能である。例えば、大島 [2003: 3]:「Virāj（即ち Agniṣṭoma）はことばに属するアグニに完結する」、Keith [1914: 557]: "The Virāj of speech"。

[400] sam-sthā 「（祭式が）完結する、終了する」。大島 [2003: 14 n. 9] によれば、Agniṣṭoma が Agniṣṭoma-Stotra で終わることを意味する。訳者によってこの文の主語の解釈は分かれる：Keith [1914: 557]: "The Virāj of speech", Caland [1931: 102 n. 1 on §6]: "*i.e.* the stotra destined for Agni", Bodewitz [1990: 212 n. 3]: "*i.e.* the Agniṣṭoma".

[401] 大島 [2003: 14 fn. 10]によれば、ここでの Virāj は Stoma の総計が 10 で割り切れることを意味し、Agniṣṭoma で使われる 12 の Stotra の詩節数（Stoma）の総計が 9+15+15+15+15+15+17+17+17+17+17+21=190 であり、10 で割り切れる数になっていることを表している。

[402] 大島 [2003]は、TS 7.1.1（および JB 1.66: 1-2; PB 6.3.5）は、Agniṣṭoma を Jyotiṣṭoma に結び付けるための根拠づけのための記述であると解釈している。大島 [2003: 3]は、tásmāt táj jyótir ucyate における táj (<tát n.)を「そ［の祭式］」として解釈している。その場合、祭式（yajña- m.）が táj n.として示されているのは、述語である jyótir n.への性の一致が起きていることが原因であろう。ただし、táj はこの箇所では Agniṣṭoma を指すわけではなく、直前の Virāj のことを指していると考えられる。一方、JB 1.66: 1−2 tasmād eṣa jyotir ucyate では性の一致が起きていないが、これは eṣa が「例の［祭式］」を指しているからである。

TS 7.1.1(3): púruṣasammita-であり ásthūri-である祭式（JB 1.67:1−2; cf. PB 16.1.6;6.3.2）

púruṣasammito vā́ eṣá yajñó ’sthūriḥ. // (7.1.1.2) yáṃ kā́maṃ kāmáyate, tám eténābhy àśnute. sárvaṁ hy ásthūriṇābhy aśnutè.

例の祭式（Jyotis）は人間と等しく（púruṣasammita-）、安定している（ásthūri-）のだ[403]。どんな望みを望むのであれ、それを彼は例の［祭式］によって得る。というのも彼は一切に向かって安定しているものによって到達するから。

TS 7.1.1(4): Agniṣṭoma によって Prajāpati が創出したもの（≈JB 1.67:3−16; PB 6.1.1−5）

’gniṣṭoména vái prajā́patiḥ prajā́ asr̥jata. tā́ agniṣṭoménaivá páryagr̥hṇāt. tā́sām párigr̥hītānām aśvataró ’tyapravata. tásyānuhā́ya réta ā́datta. tád gardabhé nyàmārṭ. tásmād gardabhó dvirétā. átho āhur, "váḍabāyāṃ nyàmārḍ" íti. tásmād váḍabā dvirétā. átho āhus, "óṣadhīṣu // (7.1.1.3) nyàmārḍ" íti. tásmād óṣadhayó ’nabhyaktā rebhanty. átho āhuḥ, "prajā́su nyàmārḍ" íti. tásmād yamáu jāyete. tásmād aśvataró ná prájāyata. ā́ttaretā hí. tásmād barhíṣy ánavakḷptaḥ, sarvavedasé vā sahásre vā́vakḷptó. ’ti hy ápravata. yá evā́ṃ vidvā́n agniṣṭoména yájate, prā́jātāḥ prajā́ janáyati, pári prájātā gr̥hṇāti. tásmād āhur, "jyeṣṭhayajñá" íti. // (7.1.1.4) prajā́patir vā́vá jyéṣṭhaḥ. sá hy èténāgré ’yajata.

Agniṣṭoma によって Prajāpati は生き物たちを［自分から］創出したのだ。それら（生き物たち）を Agniṣṭoma によって彼は掴んだ（囲い込んだ）。掴まれたそれら（生き物たち）のうち、ラバ（aśvatará-）は飛び超えた（逃げた）。追ってそれの精液を取った。それ（精液）をロバ（gardabhá-）に擦り付けた。それゆえロバは 2 つの精液をもつ（dvirétas-）[404]。また［人々は］言う。「雌馬（váḍabā-）に擦り付けた」と。それゆえ雌馬は 2 つの精液をもつ。また［人々は］言う、「植物に擦り付けた」と。それゆえ植物は塗装されていなくとも輝く。また［人々は］言う。「子孫に擦り付けた」と。それゆえ両方の Yama（Yama と Yamī）が生まれた。それゆえラバは繁殖しない。というのも［ラバは］精液が取られてしまったから。それゆえ［ラバは］（祭式の）敷き草（barhís-）において相応しくない[405]。［ラバは］完全な財産（sarvavedasá-）においてあ

---

[403] TS 7.1.1.2 púruṣasammito vā́ eṣá yajñó ’sthūriḥ. は、KS 34.8(1) puruṣasammito vā eṣa. 「例の［祭式］（＝Dvādaśāha）は人間［犠牲］に等しいのだ」と yajñó 'sthūriḥ の部分を除けば同じ表現である。KS では明らかに人間犠牲のことを述べているが、TS ではその要素を取り去った上で、異なる意味、すなわち、Jyotiṣṭoma 祭式が、直前の節で述べられるように（TS 7.1.1(2)）人間と同等の要素からなるという意味で解釈している。ásthūri- (RV 6.15.19; VS 2.27; ŚB 1.9.3.19; 3.7.4.10 では asthūrí-)は、sthū́ri-を持たないことを意味する。sthū́ri-とは、Sparreboom [1985: 136]によれば、"Drawn by one animal, instead of the usual two or three, and always with an implication of inferiority"（「通常の 2 頭あるいは 3 頭ではなく、1 頭の動物によって［戦車が］牽かれること、そして常に劣等性の意味合いを伴う」）とされる。

[404] dvirétas-（「2 つの精液をもつ」）については、大島 [2003: 15 n.16] を参照せよ。

[405] Cf. JB 1.67; PB 6.1.5

るいは 1000［頭の雌牛］において相応しい[406]。というのも（ラバは Prajāpati の子孫の定義として？）飛び越えたから。このように知って Agniṣṭoma を使って祭る者は生まれない子孫を生まれさせ、生まれた（子孫）を自分のものとして掴む。それゆえ人々は言う、「（Agniṣṭoma は）最高の祭式（jyeṣṭhayajñá-）である」と。Prajāpati は実に最高（jyeṣṭhá-）である。というのも彼が初めに例の［祭式］（＝Agniṣṭoma）を使って祭ったから。

TS 7.1.1(5): Prajāpati からの 4 段階の創出神話（≈JB 1.68-69; PB 6.1.6−13）407

prajā́patir akāmayata, "prájāyeya=" íti. sá mukhatás trivŕ̥taṃ níramimīta. tám agnír devátā́nv asr̥jyata, gāyatrī́ chándo, rathaṃtarā́m̐ sā́ma, brāhmaṇó manuṣyā̀ṇām, ajáḥ paśūnā́ṃ. tásmāt te múkhyā. mukható hy ásr̥jyanta=. úraso bāhúbhyām pañcadaśáṃ níramimīta. tám índro devátā́nv asr̥jyata, triṣṭúp chándo, bṛhát // (7.1.1.5) sā́ma, rājanyò manuṣyā̀ṇām, áviḥ paśūnā́ṃ. tásmāt té vīryā̀vanto. vīryā̀d dhy ásr̥jyanta. madhyatáḥ saptadaśáṃ níramimīta. táṃ víśve devā́ devátā ánv asr̥jyanta, jágatī chándo, vairūpā́m̐ sā́ma, váiśyo manuṣyā̀ṇāṃ, gā́vaḥ paśūnā́ṃ. tásmāt tá ādyà. annadhā́nād dhy ásr̥jyanta. tásmād bhūyā́m̐so ’nyébhyo. bhū́yiṣṭhā hí devátā ánv ásr̥jyanta. pattá ekaviṁśáṃ níramimīta. tám anuṣṭúp chándaḥ // (7.1.1.6) ánv asr̥jyata, vairājā́m̐ sā́ma, śūdró manuṣyā́ṇām, áśvaḥ paśūnā́ṃ. tásmāt táu bhūtasaṃkrāmíṇāv áśvaś ca śūdráś ca. tásmāc chūdró yajñé ’navakḷpto. ná hí devátā ánv ásr̥jyata. tásmāt pā́dāv úpajīvataḥ. pattó hy ásr̥jyetām. prāṇā́ vái trivŕ̥d. ardhamāsā́ḥ pañcadaśáḥ. prajā́patiḥ saptadaśás, tráya imé lokā́, asā́v ādityá ekaviṁśá. etásmin vā́ eté śritā́, etásmin prátiṣṭhitā. yá evā́ṃ véda=, etásminn evá śrayata, etásmin prátitiṣṭhati. //

Prajāpati は望んだ、「私は繁殖したい」と。彼は（自分の）口から（mukhatás）Trivr̥t[-Stoma] (9)を測り作った。それ（Trivr̥t-Stoma）の後に（それにしたがって）、Agni 神が創出された、Gāyatrī 韻律が、Rathaṃtara-Sāman が、人間の中では Brāhmaṇa が、家畜の中では山羊が。それゆえそれらは主要なもの（múkhya-）である。というのも口から（mukhatás）創出されたから。［Prajāpati は自分の］胸と両腕から Pañcadaśa[-Stoma] (15)を測り作った。それの後に、Indra 神が創出された、Triṣṭubh 韻律が、Bṛhat-Sāman が、人間の中では Rājanya が、家畜の中では羊が。それゆえそれらは強力（vīryā̀vant-）である。というのも力から創られたから。腹の真ん中から 17［詩節からなる Stoma］を作り出した。それの後に一切神は創出された、Jagatī 韻律が、Vairūpa-Sāman が、人間の中では Vaiśya が、家畜の中では牛が。それゆえそれらは食べられるものである。というのも食べ物を置く場所（胃腸？）から創られたから。それゆえ他の者たちより数が多い。というのも最も数の多い神格たち（一切神）のあとに創られたから。足から 21［詩節からなる Stoma］を作り出した。Anuṣṭubh 韻律はそれの後に創られた。Vairāja-Sāman として、人間の中では Śūdra として、家畜の中では馬として。それゆえ馬と Śūdra は他のものに依存している。それゆえ Śūdra は祭式に相応しくない。というのも神々の後に創られていないから。それゆえその 2 つは両足に依存して生活する。というのも足から創

[406] 大島 [2003: 15 n. 18]によれば、Sarvavedasa あるいは Sahasra である祭式とは、Viśvajit-Atirātra（PB 9.3.1; JB 1.348; ŚBM 4.6.1.15; 10.2.5.16; 14.2.2.47）または Puruṣamedha（ŚBM 13.6.2.19）などがある。

[407] 大島 [2003: 7] は、この Prājapati からの 4 段階の創出神話は、RV 10.90 の Puruṣa 賛歌を基にしたと考えられると述べている。

られたから。Trivṛt[-Stoma] (9)は息たち（Prāṇa、Apāna、Vyāna）である。15［詩節］からなる Stoma は半月たちである。17［詩節］からなる Stoma は Prajāpati である。これら世界は 3 つである。あの太陽は 21 番目である。これ（21 番目）の中で例のものたちは寄りかかって、例のものの中で彼らはしっかりと立つ。このように知っている者はこれに寄りかかり、例のものにしっかりと立つ。

TS 7.1.2: Stoma に Jyotis を置いていく（≈JB 1.66.5−12）

(7.1.2.1) prātaḥsavané vái gāyatréṇa chándasā trivṛ́te stómāya jyótir dádhad eti. trivṛ́tā brahmavarcaséna pañcadaśā́ya jyótir dádhad eti. pañcadaśénáujasā vīryèṇa saptadaśā́ya jyótir dádhad eti. saptadaśéna prājāpatyéna prajánanenaikaviṁśā́ya jyótir dádhad eti. stóma evá tát stómāya jyótir dádhad ety. átho, stóma evá stómam abhí práṇayati. yā́vanto vái stómās, tā́vantaḥ kā́mās, tā́vanto lokā́s, tā́vanti jyótīṁṣy. etā́vata evá stómān, etā́vataḥ kā́mān, etā́vato lokā́n, etā́vanti jyótīṁṣy ávarunddhe. //

彼は、早朝の Soma 搾りにおいて、Gāyatrī に属する韻律を用いて、Trivṛt-Stoma (9) に、Jyotis（「光」）を置き続けるのだ。Trivṛt[-Stoma] (9) によって、つまり Brahman の威光によって、Pañcadaśa[-Stoma] (15) に Jyotis を置き続ける。 Pañcadaśa[-Stoma] (15) によって、つまり力強さ、英雄的な力によって Saptadaśa[-Stoma] (17) に Jyotis を置き続ける。Saptadaśa[-Stoma] (17) によって、つまり Prajāpati に属する繁殖によって、Ekaviṃśa[-Stoma] (17) に Jyotis に置き続ける。そうして（詩節数がより少ない）Stoma が（詩節数がより多い）Stoma に Jyotis を置き続けていることになる。また（詩節数がより少ない）Stoma が（詩節数がより多い）Stoma を前へ導いていることになる。Stoma と同じくらい多くの欲望があり、世界があり、Jyotis がある。それほど多くの Stoma、それほど多くの欲望、それほど多くの世界、それほど多くの Jyotis を獲得する。

TS 7.1.3: Sarvastoma

(7.1.3.1) brahmavādíno vadanti, "sá tvái yajeta, yò ’gniṣṭoména yájamānó, ’tha sárvastomena yájeta=" íti. yásya trivṛ́tam antaryánti, prāṇā́ṁs tásyāntáryanti. "prāṇéṣu mé ’py asad" íti khálu vái yajñéna yájamāno yajate. yásya pañcadaśám antaryánti, vīryàṃ tásyāntáryanti. "vīryè mé ’py asad" íti khálu vái yajñéna yájamāno yajate. yásya saptadaśám antaryánti, // (7.1.3.2) prajā́ṃ tásyāntáryanti. "prajā́yām mé ’py asad" íti khálu vái yajñéna yájamāno yajate. yásyaikaviṁśám antaryánti, pratiṣṭhā́ṃ tásyāntáryanti. "pratiṣṭhā́yām mé ’py asad" íti khálu vái yajñéna yájamāno yajate. yásya triṇavám antaryánty, ṛtū́ṁś ca tásya, nakṣatríyāṃ ca virā́jam antáryanty. "ṛtúṣu mé ’py asan nakṣatríyāyāṃ ca virā́ji=" íti. // (7.1.3.3) khálu vái yajñéna yájamāno yajate. yásya trayastriṁśám antaryánti, devátās tásyāntáryanti. "devátāsu mé ’py asad" íti khálu vái yajñéna yájamāno yajate. yó vái stómānām avamám paramátāṃ gáchantaṃ véda, paramátām evá gachati. trivṛ́d vái stómānām avamás, trivṛ́t paramó. yá evā́ṃ véda, paramátām evá gachati. //

Brahman について議論する者たちは議論する、「彼は（祭主として）祭るべきなのだ、Agniṣṭoma を使って祭主として［祭り］、次に Sarvastoma[408]を使って祭るべき者は」と

[408] すべての Stoma、すなわち Trivṛt, Pañcadaśa, Saptadaśa, Ekaviṃśa, Triṇava, Trayastriṃśa を伴った祭式次第（Yajñakratu）のことを指しているか。

[409]。あるものの Trivṛṭ[-Stoma] (9) を彼らが中断するなら、そのものの息たち（Prāṇa、Apāna、Vyāna）を彼らは中断する。実際には（khálu）、「息たちの中に私の（分け前が）あれ」と考えて、祭式によって祭主は祭っているのだ。あるものの Pañcadaśa[-Stoma] (15) を中断するなら、そのものの英雄的な力を中断する。実際には「英雄的な力の中に私の（分け前が）あれ」と考えて、祭式を使って祭主は祭っている。あるものの Saptadaśa[-Stoma] (17) を中断するなら、そのものの子孫を中断する。実際には「子孫の中に私の（分け前が）あれ」と考えて、祭式を使って祭主は祭っている。あるものの Ekaviṃśa[-Stoma] (17) を中断するなら、そのものの土台を中断する。実際には「土台の中に（分け前が）あれ」と考えて、祭式を使って祭主は祭る。あるものの Triṇava[-Stoma] (27) を中断するなら、そのものの季節たちと、Nakṣatra に属する Virāj を中断する。実際には「季節たちと、Nakṣatra に属する Virāj の中に私の分け前があれ」と考えて、祭式を使って祭主は祭っている。あるものの Trayastriṃśa[-Stoma] (33) を中断するなら、そのものの神格たちを中断する。実際には「神格たちの中に私の分け前があれ」と考えて、祭式を使って祭主は祭る。Stoma の中の最低（詩節数が最低）のものが最高（詩節数が最高）の場所へと行くことを知っている者は最高の場所へ行く。Stoma の中の最低のものは Trivṛt[-Stoma] (9) である、最高のものは Trivṛt[-Stoma] (9)（実際には「3 つ組、3 倍掛けの Stoma の中で最高のもの」、つまり、Trayastriṃśa[-Stoma] (33) のことを指しているか）である。このように知っているものは最高の場所へと行くことになる。

TS 7.1.4: Dvirātra

TS 7.1.4(1): Aṅgiras たちの Sattra、Haviṣmant と Haviṣkṛt

(7.1.4.1) áṅgiraso vái sattrám āsata. té suvargáṃ lokám āyan. téṣāṁ havíṣmāṁś ca haviṣkṛ́c cāhīyetāṃ. tā́v akāmayetāṃ. "suvargáṃ lokám iyāva=" íti. tā́v etáṃ dvirātrám apaśyatāṃ. tám ā́haratāṃ. ténāyajetāṃ. táto vái táu suvargáṃ lokám aitāṃ. yá evā́ṃ vidvā́n dvirātréṇa yájate, suvargám evá lokám eti.

Aṅgiras たちは Sattra を行った 。彼らは天界へ行った。彼らのうちの Haviṣmant（「穀物祭をもつ者」）と Haviṣkṛt（「穀物祭を行う者」）は残された。その 2 人は望んだ、「私たち 2 人は天界へ行きたい」と。その 2 人は例の Dvirātra を見た、それを取ってきた、それを使って祭った、それからその 2 人は天界へ行った。このように知って Dvirātra を使って祭るものは天界へ行くことになる。

---

[409] Amano [2016] によれば、MS I–II における brahmavādíno vadanti によって導かれる文は基本的に祭式の目的や背景についての疑問文である。一方で、TS の当該箇所では、brahmavādíno vadanti の後の、íti に先行する内容文（"sá tvái yajeta, yò ’gniṣṭoména yájamānó, ’tha sárvastomena yájeta="）は疑問文ではないと思われる。tvái に疑問の意味を付け足す機能があるのだろうか。

TS 7.1.4(2): 前後の日は出発と到着の日、Abhiplava と Gati

tā́v áitām pū́rveṇā́hnā́gachatām úttareṇa. // (7.1.4.2) abhiplaváḥ pū́rvam áhar bhavati. gátir úttaram.

その 2 人は前の日によって行き、後ろの日によって着いた。Abhiplava[410]が前の日に用いられる。Gati が後ろの［日］に用いられる。

TS 7.1.4(3): 前後の日の Stoma と Yajñakratu： Jyotis を Stoma としてもつ Agniṣṭoma、すべての Stoma をもつ Atirātra

jyótiṣṭomo ’gniṣṭomáḥ pū́rvam áhar bhavati. téjas ténā́varunddhe. sárvastomo ’tirātrá úttaraṃ. sárvasyā́ptyai, sárvasyā́varuddhyai.

Jyotis を Stoma としてもつ（jyótis-stoma-）Agniṣṭoma が前の日に用いられる。それによって輝きを獲得する。全ての Stoma をもつ（sárva-stoma-）Atirātra が後ろの［日］に用いられる[411]。完全へ達するために、完全を獲得するために。

TS 7.1.4(4): 前後の日の Sāman：Gāyatra→Traiṣṭubha、Rathaṃtara→Bṛhat、Vaikhānasa→Ṣoḍaśin

gāyatrám pū́rvé ’hant sā́ma bhavati. téjo vái gāyatrī́. gāyatrī́ brahmavarcasáṃ. téja evá brahmavarcasám ātmán dhatte. tráiṣṭubham úttara. ójo vái vīryàṃ triṣṭúg. ója evá vīryàm ātmán dhatte. rathaṃtarám pū́rve // (7.1.4.3) áhant sā́ma bhavati=. iyáṃ vái rathaṃtarám. asyā́m evá prátitiṣṭhati. bṛhád úttare. ’sáu vái bṛhád. amúṣyām evá prátitiṣṭhati. tád āhuḥ, "kvà jágatī cānuṣṭúp ca=" íti. vaikhānasám pū́rvé ’hant sā́ma bhavati. téna jágatyai náiti. ṣoḍaśy úttare. ténānuṣṭúbhó.

前の日に Gāyatra-Sāman が用いられる。Gāyatrī は輝きである。Brahman の威光は Gāyatrī である。輝き、Brahman の威光を自分に置くことになる。次の日に Traiṣṭubha[-Sāman] が用いられる。Triṣṭubh は力強さ、英雄的な力なのだ。力強さ、英雄的な力を自分に置くことになる。最初の日に Rathaṃtara-Sāman が用いられる。Rathaṃtara[-Sāman]はこの大地である。この大地にしっかり立つことになる。次の日に Bṛhat[-Sāman]が用いられる。Bṛhat[-Sāman]はあの（天界）である。あの（天界）においてしっかり立つことになる。それについて人々は言う、「Jagatī と Anuṣṭubh はどこか」と。前の日に Vaikhānasa[-Sāman]が Sāman として用いられる。それによって Jagatī から逸れていかない。後ろの日に Ṣoḍaśin が（Stoma あるいは Stoma として）用いられる。それによって Anuṣṭubh から逸れていかない。

---

[410] 通常 Abhiplava と言えば、Abhiplava Ṣaḍaha を指すが、2 日間の儀礼である Dvirātra に対して 6 日間という期間は合致しない。abhi-plav は「≈の方へ、≈に向かって泳ぐ、出航する」を意味する。到達の対象は天界であると考えられる。Sattra が海を泳ぐことに例えられることと関係しているかもしれない（cf. TS 7.5.1(2) ）。

[411] この箇所に現れる jyótiṣṭoma-, sárvastoma-は、そのアクセント位置からしても、bahuvrīhi 複合語であることは疑いないように思われる。そして文章の意味としても、agniṣṭómá-, atirātrá-に係る形容詞として解釈した方が無理はないと思われる。

TS 7.1.4(5): 前後の日の前の日を新月の夜、後ろの日を翌日にする

’thāhur, "yát samānè ’rdhamāsé syā́tām, anyatarásyā́hno vīryàm ánu padyeta=" íty. amāvāsyā̀yām pū́rvam áhar bhavaty, úttarasminn úttaraṃ. nā́naivā́rdhamāsáyor bhavato. nā́nāvīrye bhavato. havíṣmannidhanam pū́rvam áhar bhavati, haviṣkŕ̥nnidhanam úttaram. prátiṣṭhityai. //

また［人々は］言う、「もし［2 つの日が］同じ半月に生じるなら、彼は一方の日の英雄的な力［だけ］についていってしまうだろう」と。新月の夜（amāvāsyà-）において前の日が用いられる、後ろの［日］において後ろの［日］が。［2 つの日は］様々に 2 つの半月に生じることになる。［2 つの日は］別々の英雄的な力をもつものになる。Haviṣmant［という語］を締め括りの言葉（nidhana-）とする［Sāman］が前の日に用いられる、Haviṣkr̥t［という語］を締め括りの言葉とする［Sāman］が後ろの日に。しっかりと立つために。

TS 7.1.5: Trirātra (1)

TS 7.1.5(1): 原初の水たちと **Prajāpati** による大地拡大

(7.1.5.1) ā́po vā́ idám ágre salilám āsīt. tásmin prajā́patir vāyúr bhūtvā́carat. sá imā́m apaśyat. tā́ṃ varāhó bhūtvā́harat. tā́ṃ viśvákarmā bhūtvā́ vyàmārṭ. sā́prathata. sā́ pr̥thivy àbhavat. tát pr̥thivyái pr̥thivitvā́ṃ.

この［世界全体］は原初において水たち（ā́pas）、海（salilám）であった。その中で Prajāpati は Vāyu になった後、動き回った。彼はこの［大地］を見た。猪（varāhá-）となってその［大地］を取ってきた。Viśvakarman になってその［大地］を擦った。それは拡大した（aprathata）。それは大地（pr̥thivī-）になった。それが大地が大地である所以である。

TS 7.1.5(2): Prajāpati による **Vasu** 神群、**Rudra** 神群、**Āditya** 神群の創出

tásyām aśrāmyat prajā́patiḥ. sá devā́n asr̥jata, vásūn rudrā́n ādityā́n. té devā́ḥ prajā́patim abruvan. "prájāyāmahā" íti. sò ’bravīt. // (7.1.5.2) "yáthāháṃ yuṣmā́ṁs tápasāsr̥kṣy, evā́ṃ tápasi prajánanam ichadhvam" íti. tébhyo ’gním āyátanam prā́yachad. "eténāyátanena śrāmyata=" íti. tè ’gnínāyátanenāśrāmyan.

その［大地］で Prajāpati は修行をした。彼は神々を創出した、Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちを。彼ら神々は Prajāpati に言った。「我々は繁殖したい」と。彼は言った。「私がお前たちを苦行によって創出したように、お前たちは苦行において繁殖を望め」と。彼らに Agni を拠点（āyátana-）として与えた。「この拠点でお前たちは修行せよ」と。彼らは拠点である Agni によって修行した。

TS 7.1.5(3): Vasu 神群、**Rudra** 神群、**Āditya** 神群による **1** 頭の雌牛の創出と繁殖

té saṃvatsará ékāṃ gā́m asr̥janta. tā́ṃ vásubhyo rudrébhya ādityébhyaḥ prā́yachann. "etā́m̐ rakṣadhvam" íti. tā́ṃ vásavo rudrā́ ādityā́ arakṣanta. sā́ vásubhyo rudrébhya ādityébhyaḥ prā́jāyata trī́ṇi ca // (7.1.5.3) śatā́ni tráyastriṁśataṃ ca=. átha, sáivá sahasratamy àbhavat.

彼らは一年後一頭の雌牛を創出した。その［雌牛］を（他の）Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちに与えた。「お前たちはこの［雌牛］を守れ」と。その［雌牛］を Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちは守った。その［雌牛］は Vasu たち、Rudra たち、Āditya たちのために（それぞれ）333（頭ずつ）へと繁殖した。そして、その［雌牛］は 1000 番目［の雌牛］となった。

TS 7.1.5(4): Vasu 神群、Rudra 神群、Āditya 神群による Agniṣṭoma、Ukthya、Atirātra の開催

té devā́ḥ prajā́patim abruvant. "sahásreṇa no yājaya" íti. sò ’gniṣṭoména vásūn ayājayat. tá imáṃ lokám ajayan. tác cādaduḥ. sá ukthyèna rudrā́n ayājayat. tè ’ntárikṣam ajayan. tác cādaduḥ. sò ’tirātréṇādityā́n ayājayat. tè ’muṃ lokám ajayan. tác cādadus.

彼ら神々は Prajāpati に言った。「1000 頭［の雌牛たち］によって我々に（祭主として）祭らせよ」と。彼は Vasu たちに Agniṣṭoma を使わせて祭らせた。彼らはこの世界を勝ち取った。そして彼らはそれを与えた。彼は Rudra たちに Ukthya を使わせて祭らせた。彼らは中空を勝ち取った。そして彼らはそれを与えた。彼は Āditya たちに Atirātra を使わせて祭らせた。彼らはあの世界を勝ち取った。そして彼らはそれを与えた。

TS 7.1.5(5): 中空の分離と Trirātra の真ん中の日の固定、Triṣṭubh の Ājya-Śastra、Saṃyāna-Sūkta、Ṣoḍaśin-Śastra の詠唱、Agniṣṭoma、Ukthya、Atirātra を順番に使用する

tád antárikṣam // (7.1.5.4) vyávairyata. tásmād rudrā́ ghā́tukā. anāyatanā́ hí. tásmād āhuḥ, "śithilā́m vái madhyamám áhas trirātrásya. ví hí tád aváiryata=" íti. tráiṣṭubham madhyamásyā́hna ā́jyam bhavati. saṃyā́nāni sūktā́ni śaṁsati. ṣoḍaśínaṁ śaṁsaty. áhno dhṛ́tyā áśithilambhāvāya. tásmāt trirātrásyāgniṣṭomá evá prathamám áhaḥ syād, áthokthyó, ’thātirātrá. eṣā́ṃ lokā́nāṃ vídhṛtyai.

そのとき中空は分離した（vyávairyata）。それゆえ Rudra たちは殺す可能性のある者（ghā́tuka-）たちである。というのも［彼らは］拠点をもたないから。それゆえ人々は言う、「Trirātra の中間の日はゆるんでいるのだ。というのもそれは分離したから」と。真ん中の日には、Triṣṭubh 韻律の Ājya［-Śastra］が使われる。彼は Saṃyāna-Sūkta たちを唱える。Ṣoḍaśin[-Śastra] を唱える。（中間の）日が堅固となるように、ゆるんだものとならないように。それゆえ Trirātra について、Agniṣṭoma こそが最初の日に用いられるべきであり、次に Ukthya、次に Atirātra が［用いられるべきである］。これら世界を分けて保つために。

TS 7.1.5(6): Indra と Viṣṇu による 1000 番目の雌牛の奪い合い

trī́ṇitrīṇi śatā́ny anūcīnāhám ávyavachinnāni dadāti. // (7.1.5.5) eṣā́ṃ lokā́nām ánu sáṃtatyai. daśátaṃ ná víchindyād. "virā́jaṃ néd vichinádāni=" íty. átha, yā́ sahasratamy ā́sīt, tásyām índraś ca víṣṇuś ca vyā́yachetāṃ. sá índro ’manyata=, "anáyā vā́ idáṃ víṣṇuḥ sahásraṃ varkṣyata" íti. tásyām akalpetāṃ. dvíbhāga índras tṛ́tīye víṣṇus. tád vā́ eṣā́bhyánūcyata, "ubhā́ jigyathur" íti. tā́ṃ vā́ etā́m achāvākáḥ // (7.1.5.6) evá śaṁsaty.

彼は 300［頭ずつの雌牛］をつづいているそれぞれの日に途切れずに与える。これら諸世界が次々と一繋ぎであるために。彼は 10 という数（daśát-）を崩すべきではない[412]。「私は Virāj を崩さないように」と（考えて）。そして、1000 番目の［雌牛］であったものを求めて Indra と Viṣṇu が争った。その時 Indra は思った、「この［雌牛］によってここで Viṣṇu は 1000［頭の雌牛］を自分のものとしてもぎ取ってしまうだろう（fut.）」と。両者はその［雌牛］を共有した。Indra は［3 分の］2 を分け前にし、Viṣṇu は 3 分の 1 を分け前にした。そのことに関して例の［詩節］が暗唱されている、「お前たち 2 人は勝ち取った」[413]と。そのような例の［詩節を］他ならぬ Acchāvāka 祭官が（Śastra として）唱えるのだ。

TS 7.1.5(7): 残りものの 1000 番目の雌牛を残りものの祭官に与える

átha "yā́ sahasratamī́, sā́ hótre deyā́=" íti. hótāraṃ vā́ abhy átiricyate, yád atirícyate. hótā́nāptasyāpayitā́=. áthāhur, "unnetré déyā=" íty. átiriktā vā́ eṣā́ sahásrasya=. átirikta unnetártvíjām. áthāhuḥ, "sárvebhyaḥ sadasyèbhyo déyā=" íty. áthāhur, "udākŕ̥tyā sā́ váśaṃ cared" íty. áthāhur, "brahmáṇe cāgnī́dhe ca déyā=" íti // (7.1.5.7) dvíbhāgam brahmáṇe tŕ̥tīyam agnī́dha. aindró vái brahmā́. vaiṣṇavò ’gnī́d. "yáthaivá tā́v ákalpetām" íty. áthāhur, "yā́ kalyāṇī́ bahurūpā́, sā́ déyā=" íty. áthāhur, "yā́ dvirūpóbhayátaenī, sā́ déyā=" íti. sahásrasya párigr̥hītyai. tád vā́ etát sahásrasyā́yanaṃ. sahásraṁ stotrī́yāḥ. sahásraṃ dákṣiṇāḥ. sahásrasammitaḥ suvargó lokáḥ. suvargásya lokásyābhíjityai. //

次に、「1000 番目の［雌牛］であるもの、それは Hotar 祭官に与えられるべきである」と［言う］。残されるものは、Hotar 祭官に対して残されているのだ。Hotar 祭官は獲得されなかったものの獲得者（ánāptasyāpayitā́）である。また［人々は］言う、「Unnetar 祭官に与えられるべきである」と。この［雌牛］は 1000［頭の雌牛］の中の残りもの（余分なもの）である[414]。Unnetar 祭官は祭官の中の残りものである。また人々は言う、「Sadas［小屋］に属する祭官たち全員に与えられるべきである」と。また人々は言う、「その［雌牛］は追い払われて、好きなように動き回るべきである」と。また［人々は］言う、「Brahman 祭官と Agnīdh 祭官に与えられるべきである」と。3 分の 2 は Brahman 祭官に、3 分の 1 は Agnīdh 祭官に。Brahman 祭官は Indra に関係し、Agnīdh 祭官は Viṣṇu に関係するから。「まさにその両者（Indra と Viṣṇu）が同意したように」と（考えて）。また［人々は］言う、「美しく多くの色をもつような［雌牛］が与えられるべきである」と。また［人々は］言う、「2 つの色をもち、両側にまだらのあるような［雌牛］が与えられるべきである」と。1000［の雌牛］を得るために。そのようなこれが 1000［の雌牛］の歩みである。Stotra に使う［詩節］は 1000 である。報酬（Dakṣiṇā）

---

[412] つまり総数が Virāj（10 で割り切れること）であることを守るということ。この場合雌牛の総数について言っていると思われる。

[413] ubhā jigyathur na parā jayethe # RV.6.69.8a; AVŚ.7.44.1a; TS.3.2.11.2a; 7.1.6.7a; MS.2.4.4a: 41.21; KS.12.14a; AB.6.15.6; JB.2.243a; GB.2.4.17; BŚ.16.26: 271.16a. P: ubhā jigyathuḥ TS.7.1.5.5; MS.4.12.5: 192.3; KS.23.11; Vait.25.2; ApŚ.19.27.19; 22.16.4; BŚ.13.42: 149.14; MŚ.9.4.1.20; Kauś.42.6. VC を参照した。

[414] 1000 番目の雌牛は、3 人で 1000 頭を分け合ったときに、どうしても余ってしまう余分な 1 頭であることが意図されている。

は 1000［頭の雌牛］である。天界は 1000［頭の雌牛］と等しい。天界を勝ち取るために。

TS 7.1.6: Trirātra (2)

TS 7.1.6(1): Soma、Indra、Yama による 1000 頭の雌牛の分け合い：導入

(7.1.6.1) sómo vái sahásram avindat. tám índró ’nv avindat. táu yamó nyā́gachat. tā́v abravīd, "ástu mé ’trā́pi=" íty. "ástu hī́3" íty abrūtāṃ. sá yamá ékasyāṃ vīryàm páryapaśyad. "iyáṃ vā́ asyá sahásrasya vīryàm bibharti=" íti tā́v abravīd. "iyám mámā́stv etád yuváyor" íti tā́v abrūtāṃ. "sárve vā́ etád etásyāṃ vīryàm. // (7.1.6.2) páripaśyāmó. ’m̐śam ā́harāmahā" íti tásyām ám̐śam ā́haranta.

Soma は 1000［頭の雌牛］を見つけた（入手した）のだ。彼の後に Indra が見つけた（入手した）。その 2 人の方へ Yama は降りてきた。その 2 人に言った。「ここで私の［分け前も］あるべきだ」と。「実にそうだ」と 2 人は言った。Yama は一頭の中に英雄的な力を認めた。「この［雌牛］はこの 1000 の［雌牛に相当するほどの］英雄的な力を持っているのだ」と。その 2 人に言った。「この［雌牛］は私のものであれ、その［1000 頭の雌牛］はお前たち 2 人のものであれ」と。その 2 人は言った。「私たち全員がこのようにこの一頭に英雄的な力を認めている。分け前を取り合おう」と。彼らはその［雌牛］を巡って分け前を取り合った。

TS 7.1.6(2): Soma と赤茶色の 1 歳の雌牛

tā́m apsú prā́veśayam̐. "sómāyodéhi=" íti. sā́ róhiṇī piṅgaláikahāyanī rūpáṃ kr̥tvā́ tráyastrim̐śatā ca tribhíś ca śatáiḥ sahódáit. tásmād róhiṇyā piṅgaláyáikahāyanyā sómaṃ krīṇīyād. yá evā́ṃ vidvā́n róhiṇyā piṅgaláyáikahāyanyā sómaṃ krīṇā́ti, tráyastrim̐śatā caivā́sya tribhíś ca. // (7.1.6.3) śatáiḥ sómaḥ krītó bhavati. súkrītena yajate.

彼らはその［雌牛］を水の中に入らせた。「Soma のために出てこい」と。その［雌牛］は、赤茶色の 1 歳の雌牛として姿を現し、333［頭の雌牛］と共に出てきた。それゆえ赤茶色の 1 歳の［雌牛］を使って Soma を買うべきである。このように知って赤茶色の 1 歳の［雌牛］を使って Soma を買う者は、333［の雌牛］を使って［買っていることになる］。彼によって Soma が買われていることになる。［祭主は］よく（＝良い値段で）買われた［Soma］を使って祭っていることになる。

TS 7.1.6(3): Indra と赤色の吉兆のある 4 歳の Vr̥tra 殺しに属する雌牛

tā́m apsú prā́veśayann. "índrāyodéhi=" íti. sā́ róhiṇī lakṣmaṇā́ paṣṭhauhī́ vā́rtraghnī rūpáṃ kr̥tvā́ tráyastrim̐śatā ca tribhíś ca śatáiḥ sahódáit. tásmād róhiṇīṃ lakṣmaṇā́m paṣṭhauhī́ṃ vā́rtraghnī́ṃ dadyād. yá evā́ṃ vidvā́n róhiṇīṃ lakṣmaṇā́m paṣṭhauhī́ṃ vā́rtraghnīṃ dádāti, tráyastrim̐śac caivā́sya trī́ṇi ca śatā́ni. sā́ dattā́ // (7.1.6.4) bhavati.

彼らはその［雌牛］を水に入らせた。「Indra のために出てこい」と。その［雌牛］は、赤色の、吉兆のある、4 歳の、Vr̥tra 殺し（Indra）に属する［雌牛］として姿を現し、333［の雌牛］と共に出てきた。それゆえ赤色の、吉兆のある、4 歳の、Vr̥tra 殺しに属

する［雌牛］を与えるべきである。このように知って赤色の、吉兆のある、4歳の、Vr̥tra殺しに属する［雌牛］を与える者は、333［の雌牛］として。その［雌牛］が与えられることになる。

TS 7.1.6(4): Yama と年老いた愚かなその中で最低の雌牛、Anustaraṇī 牛

tā́m apsú prā́veśayan. "yamā́yodéhi=" íti. sā́ járatī mūrkhā́ tajjaghanyā́ rūpáṃ kr̥tvā́ tráyastriṁśatā ca tribhíś ca śatáiḥ sahódáit. tásmāj járatīm mūrkhā́ṃ tajjaghanyā́m anustáraṇīṃ kurvīta. yá evā́ṃ vidvā́ñ járatī́m mūrkhā́ṃ tajjaghanyā́m anustáraṇīṃ kuruté, tráyastriṁśac caivā́sya trī́ṇi ca śatā́ni sā́múṣmiṃ loké bhavati.

彼らはその［雌牛］を水に入らせた。「Yama のために出てこい」と。その［雌牛］は、年老いた、愚かな、その中で最低の［雌牛］として姿を現し、333［の雌牛］と共に出てきた。それゆえ年老いた、愚かな、その中で最低の［雌牛］を Anustaraṇī とするべきである。このように知って年老いた、愚かな、その中で最低の［雌牛］を Anustaraṇī とする者のためにその［雌牛］があの世界で 333［の雌牛］となることになる。

TS 7.1.6(5): 1000 番目の雌牛は Vāc である

vā́g evá sahasratamī́. tásmāt // (7.1.6.5) váro déyaḥ. sā́ hí váraḥ. sahásram asya. sā́ dattā́ bhavati. tásmād váro ná pratigŕ̥hyaḥ. sā́ hí váraḥ. sahásram asya prátigr̥hītam bhavati=. "iyáṃ vára" íti brūyād.

1000 番目の［雌牛］は他ならぬ Vāc である。それゆえ望みの物が与えられるべきである。その［雌牛］は望みの物であるから。1000［頭の雌牛］として彼によってその［雌牛］は与えられたことになる。それゆえ望みの物は受け取られるべきでない。その［雌牛］は望みの物であるから。1000［頭の雌牛］が彼によって受け取られたことになる[415]。「この［雌牛］が望みの物である」と言うべきである。

TS 7.1.6(6): 望みの雌牛は美しくあるべきである

áthānyā́m brūyād, "iyám máma=" íti. táthāsya tát sahásram ápratigr̥hītam bhavaty. ubhayataenī́ syāt. tád āhur, "anyataenī́ syāt. sahásram parástād étam" íti. yáivá váraḥ // (7.1.6.6) kalyāṇī́ rūpásamr̥ddhā, sā́ syāt. sā́ hí váraḥ. sámr̥ddhyai.

また他の［雌牛］について言うべきである。「この［雌牛］は私のものである」と。そのように［言うことによって］その 1000［頭の雌牛］は彼によって受け取られなかったものとなる。［その雌牛は］両側にまだらのある［雌牛］であるべきである。それについて［人々は］言う。「［その雌牛は］片側だけまだらのある［雌牛］であるべきである。1000［頭の雌牛］は逆側にまだらがあるべきである」と。望みの物である［雌牛］は美しく、完全に合致したものであるべきである。というのもその雌牛が望みの物だから。完全に合致するために。

---

[415] 1000 頭の雌牛は受け取るにはもらいすぎるほど多いので受け取るべきではないということが含意されているか。

TS 7.1.6(7): 雌牛を Agnīdh 祭官の場所の北に連れて、Āhavanīya 祭火のそばで木桶をかがせる

tā́m úttareṇā́gnīdhram paryāṇī́yāhavanī́yasyā́nte droṇakalaśám ávaghrāpayed. "ā́ jighra kaláśam mahy urúdhārā páyasvaty. ā́ tvā viśantv índavaḥ samudrám iva síndhavaḥ. sā́ mā sahásra ā́ bhaja prajáyā paśúbhiḥ sahá. púnar mā́ viśatād rayír" íti. prajáyaiváinam paśúbhī rayyā́ sám // (7.1.6.7) ardhayati. prajā́vān paśumā́n rayimā́n bhavati, yá evā́m véda.

その［雌牛］を Agnīdh 祭官の場所の北に引き摺り回して、Āhavanīya 祭火のそばで木桶を嗅がせるべきである[416]。「桶を嗅げ、偉大で、幅広く［乳汁を］流れ出す、豊富な乳汁をもつ［雌牛］よ。滴たちがお前に入れ、河川たちが海に［入る］ように。そのようなお前は私に 1000 の中に分け前を預からせよ、子孫と家畜たちと共に。富が再び私に入って来い」[417]と［唱える］。彼を子孫、家畜たち、富と融合させることになる。このように知っている者は子孫に富み、家畜に富み、富に富む者になる。

TS 7.1.6(8): 雌牛が東で西向きに立っている間に献供する

táyā sahā́gnīdhram parétya purástāt pratī́cyāṃ tíṣṭhantyāṃ juhuyād, "ubhā́ jigyathur ná párā jayethe ná párā jigye kataráś canáinoḥ / índraś ca viṣṇo yád ápaspṛ́dhethāṃ tredhā́ sahásraṃ ví tád airayethām" íti. tredhāvibhaktáṃ vái trirātré sahásraṃ. sāhasrī́m eváināṃ karoti. sahásrasyaiváināṃ mā́trāṃ // (7.1.6.8) karoti. rūpā́ṇi juhoti. rūpáir eváināṁ sámardhayati.

その［雌牛］と共に Agnīdh 祭官の場所を過ぎた後、［その雌牛が］東で西向きに立っている間に、献供すべきである。「お前たち 2 人は打ち勝った、お前たち 2 人は負けていない、お前たち 2 人のうちどちらも負けなかった、Indra と Viṣṇu よ、お前たち 2 人が競争した時、お前たちはその 1000 を 3 つに分割した」[418]と［唱える］。Trirātra において 1000 は 3 つに分けられた。当該の［雌牛］を 1000 に関するものにすることになる。当該の［雌牛］を 1000 と同等のものにすることになる。形（rūpá-）たちを献供する。形たちと当該の［雌牛］を融合させることになる。

TS 7.1.6(9): 雌牛の名前を雌牛の耳に囁く

tásyā upotthā́ya kárṇam ā́japed. "íḍe, ránté, ’dite, sárasvati, príye, préyasi, máhi, víśruty. etā́ni te aghniye nā́māni. sukṛ́tam mā devéṣu brūtād" íti devébhya eváinam ā́vedayaty. ánv enaṃ devā́ budhyante.
立ち上がってその雌牛の耳に囁くべきである。Iḍā よ、Ranti よ、Aditi よ、Sarasvatī よ、Priyā よ、Preyasī よ、Mahī よ、Viśrutī よ。殺されるべきでない［雌牛］（aghnyā́-）[419]よ、

---

[416] Dakṣiṇā のための牛は祭場の中を連れ回される。雌牛の状態がよいことを示すためか。
[417] ā jighra kalaśaṃ mahi VS.8.42a; TS.7.1.6.6a; BŚ.16.26: 271.10a; MŚ.9.4.1.27a. PS: ā jighra kalaśam ŚB.4.5.8.6; ApŚ.22.16.1; ā jighra KŚ.13.4.18. VC を参照。
[418] indraś ca viṣṇo yad apaspṛdhethām RV.6.69.8c; AVŚ.7.44.1c; TS.3.2.11.2c; 7.1.6.7c; MS.2.4.4c: 42.1; KS.12.14c; AB.6.15.10; JB.2.243c; BŚ.16.26: 271.17c. VC を参照。índraś ca: índraś は nom. だが voc.として使われている。その現象の詳細については、Klein [1981]を参照せよ。
[419] aghnyā-（「殺されるべきでない［雌牛］」）について、Narten [1971: 120−134] (= [1995: 175−189]) は、「乳を吸う子牛を連れた雌牛」の意味で解釈している。しかし、後藤（大島、

これらがお前の名前である。お前は私のことを善行者であると神々のところで話してくれ」と。神々に当該の者（祭主）のことを知らせていることになる。神々は彼のことに気がつく。

TS 7.1.7: Trirātra (3)

TS 7.1.7(1): 1000 番目の雌牛は祭主を天界に行かせる

(7.1.7.1) sahasratamyā̀ vái yájamānaḥ suvargáṃ lokám eti. sáinaṁ suvargáṃ lokáṃ gamayati. "sā́ mā suvargáṃ lokáṃ gamaya=" íty āha. suvargám eváinaṃ lokáṃ gamayati. "sā́ mā jyótiṣmantaṃ lokáṃ gamaya=" íty āha. jyótiṣmantam eváinaṃ lokáṃ gamayati. "sā́ mā sárvān púṇyāṁ lokā́n gamaya=" íty āha. sárvān eváinam púṇyāṁ lokā́n gamayati. "sā́ // (7.1.7.2) mā pratiṣṭhā́ṃ gamaya prajáyā paśúbhiḥ sahá púnar mā́ viśatād rayír íti. prajáyaiváinam paśúbhī rayyā́m práti ṣṭhāpayati. prajā́vān paśumā́n rayimā́n bhavati, yá evā́ṃ véda.

1000 番目の［雌牛］によって祭主は天上の世界へ行く。その雌牛は彼を天上の世界へ行かせる。「その［雌牛である］お前は私を天上の世界へ行かせよ」と［祭主は］言う。［その雌牛は］彼を天上の世界へ行かせることになる。「その［雌牛である］お前は私を光ある世界に行かせよ」と言う。［その雌牛は］彼を光ある世界へ行かせることになる。「その［雌牛である］お前は私を全ての徳ある世界へ行かせよ」と［人は］言う。［その雌牛は］彼を全ての徳ある世界へ行かせることになる。「その［雌牛である］お前は私を安定したところへ行かせよ、子孫と家畜たちと共に、再び私に富が入れ」と。［その雌牛は］彼を子孫、家畜たちによって富の上に安定させることになる。このように知っている者は子孫に富み、家畜に富み、富に富む者となる。

TS 7.1.7(2): 1000 番目の雌牛を祭官に与える[420]

tā́m agnī́dhe vā brahmáṇe vā hótre vodgātré vādhvaryáve vā dadyāt. sahásram asya sā́ dattā́ bhavati. sahásram asya prátigr̥hītam bhavati, yás tā́m ávidvān // (7.1.7.3) pratigr̥hṇā́ti, tā́m prátigr̥hṇīyād. "ékāsi ná sahásram. ékāṃ tvā bhūtā́m prátigr̥hṇāmi ná sahásram. ékā mā bhūtā́ viśa mā́ sahásram" íty. ékām eváinām bhūtā́m prátigr̥hṇāti, ná sahásraṃ, yá evā́ṃ véda. "syonā́si, suṣádā, suśévā. syonā́ mā́ viśa. suṣádā mā́ viśa. suśévā mā́ viśa" //(7.1.7.4) íty āha. syonáiváinaṁ suṣádā suśévā bhūtvā́ viśati. náinaṁ hinasti.

彼はその［雌牛］を Agnīdh に、あるいは Brahman に、あるいは Hotar に、あるいは Udgātar に、あるいは Adhvaryu に与えるべきである。1000［頭の雌牛］としてその［雌牛］は彼（祭主）によって（祭官に）与えられたことになる。その雌牛のことを知らずに受け取る者によって 1000［頭の雌牛］が受け取られたことになる。彼はその［雌牛］

西村、後藤 [2012: 11 n.8] ）は、雌牛と雄牛両方の語形を考慮して、「繁殖に重要な優良個体（Zuchtkuh, Zuchtstier）」の意味で解釈している。

[420] この文脈では、1 頭の雌牛を 1000 頭分の雌牛として与えることが話題になっている。祭主は、正しい知識を持たない祭官に対して 1 頭を 1000 頭分の雌牛として与えるが、正しい知識を持っている、この場合は唱えるべきマントラを知っている祭官には 1 頭を 1 頭分として与えることになる。

を受け取るべきである、「お前は 1 頭［の雌牛］である、1000 頭ではなく、お前を 1 頭であるものとして私は受け取る、1000 頭ではなくお前は 1 頭の［雌牛］として私に入れ、1000 頭としてでなく」と［言って］。このように知っている者は、その［雌牛］を 1 頭のものとして受け取る、1000 頭ではなく。「お前は Syonā（「柔和な」）、Suṣadā（「落ち着きのある」）、Suśevā（「愛着がある」）である。Syonā として私に入れ、Suṣadā として入れ、Suśevā として入れ」と唱える[421]。彼（祭主）に［その雌牛は］柔和で落ち着きがあり、愛着があるものとなって入り、彼（祭主）を傷つけない。

TS 7.1.7(3): 1000 番目の雌牛についての Brahmavādin たちの議論

brahmavādíno vadant, "sahásraṁ sahasratamy ánv etī̆3, sahasratamī̆ṁ sahásrā̆3m" íti. yát prā̆cīm utsr̥jét, sahásraṁ sahasratamy ánviyāt. tát sahásram aprajñātráṃ. suvargáṃ lokáṃ ná prájānīyāt. pratī̆cīm útsr̥jati. tā̆ṁ sahásram ánu paryā̆vartate. sā̆ prajānatī̆ suvargáṃ lokám[422] eti. yájamānam abhy útsr̥jati. kṣipré sahásram prájāyata. uttamā̆ nīyáte prathamā̆ devā̆n gachati. //
Brahman を議論する者たちは議論する。「1000 番目の雌牛が 1000 頭を追うのか？1000 頭が 1000 番目の雌牛を追うのか？」と。もし東へと放つなら、1000 頭を 1000 番目の雌牛が追うだろう。その 1000 頭は旗印を持たない。［その 1000 頭は］天上の世界へ［の道が］わからないだろう。西へと放つ。その雌牛を 1000 頭が追う。その雌牛は［天上の世界への道が］わかっている。天上の世界へ行く。祭主に向かって放つ。瞬時に 1000 頭が繁殖する。［その雌牛は］最後のものとして連れられ、最初のものとして神々のもとへ行く。

TS 7.1.8: Atri による Catūrātra の開催

(7.1.8.1) átrir adadād áurvāya prajā̆m putrákāmāya. sá riricānò ’manyata nírvīryaḥ śithiló yātáyāmā. sá etáṃ catūrātrám apaśyat. tám ā̆harat. ténāyajata. táto vái tásya catvā̆ro vīrā̆ ā̆jāyanta, súhotā sū̆dgātā svàdhvaryuḥ súsabheyo. yá eváṃ vidvā̆ṁś catūrātréṇa yájata, ā̆sya catvā̆ro vīrā̆ jāyante, súhotā sū̆dgātā svàdhvaryuḥ súsabheyo. yé caturviṁśā̆ḥ pávamānā, brahmavarcasáṃ tát. // (7.1.8.2) yá udyánta stómāḥ, śrī̆ḥ sā̆=. átriṁ śraddhā̆devaṃ yájamānaṃ catvā̆ri vīryà̆ṇi nópānaman, téja indriyám brahmavarcasám annā̆dyaṃ. sá etā̆ṁś catúraś cátuṣṭomānt sómān apaśyat. tā̆n ā̆harat. táir ayajata. téja evá prathaménā̆vārunddha=, indriyáṃ dvitī̆yena, brahmavarcasáṃ tr̥tī̆yena=, annā̆dyaṃ caturthéna. yá eváṃ vidvā̆ṁś catúraś cátuṣṭomānt sómān āhárati, táir yájate, téja evá prathaménā̆varunddha, indriyáṃ dvitī̆yena brahmavarcasáṃ tr̥tī̆yena=, annā̆dyaṃ caturthéna. yā̆m evā̆trir r̥̆ddhim ā̆rdhnot, tā̆m evá yájamānā r̥̆dhnoti. //

Atri は息子を望む Aurva に子孫を与えた。彼（Atri）は自分が見捨てられ（riricāná-）[423]、英雄的な力に欠け、ゆるんでいて、疲れ果てている（yātá-yāman-）と感じた[424]。彼

[421] 新しい牛を群に入れると群が荒れるので、その群れを落ち着かせるためにこのような名前をつけることが意図されている。Cf. MS 2.3.3(1); KS 28.3 pratiṣṭhitān paśūn pracyāvayati「安定した家畜たちを動かしてしまう」

[422] 訂正した。Ed lokáṃ.

[423] Kümmel [200: 427]を参照。

（Atri）はこの Catūrātra を見た。それを取ってきた。それを使って祭った。その後彼に 4 人の勇者が生まれた、よい Hotar、よい Udgātar、よい Adhvaryu、よく集会に適した者として。このように知って Catūrātra を使って祭る者には 4 人の勇者が生まれる、よい Hotar、よい Udgātar、よい Adhvaryu、よく集会に適した者として。清まる 24［詩節］からなる［Stoma］は Brahman の栄光である。高まる Stoma たちは栄華である。信仰を神とする祭主である Atri に 4 つの英雄的な力、すなわち光、Indra の力、Brahman の威光、食べ物は降りてこなかった。彼は 4 つの Stoma（9, 15, 17, 21）を伴ったこの 4 つの Soma を見た。それらを彼は取ってきてそれらで祭式をした。最初に光を得て、2 つ目に Indra の力を得て、3 つ目に Brahman の栄光を得て、4 つ目に食べ物を得た。このように知って 4 つの Stoma を伴った 4 つの Soma を取ってきて、それらで祭式をする者は最初に光を得て、2 つ目に Indra の力を得て、3 つ目に Brahman の栄光を得て、4 つ目に食べ物を得ることになる。Atri が成功させた成功を祭主は成功させることになる。

TS 7.1.9: Jamadagni による Catūrātra の開催

(7.1.9.1) jamádagniḥ púṣṭikāmaś catūrātréṇāyajata. sá etā́n póṣāṁ apuṣyat. tásmāt palitáu jā́madagniyau ná sáṃjānāte. etā́n evá póṣān puṣyati, yá evā́ṃ vidvā́ṁś catūrātréṇa yájate. puroḍāśínya upasádo bhavanti. paśávo vái puroḍā́śaḥ. paśū́n evā́varunddha. ánnaṃ vái puroḍā́śó. ’nnam evā́varunddhe. ’nnādáḥ paśumā́n bhavati, yá evā́ṃ vidvā́ṁś catūrātréṇa yájate. //

増大を望みとする Jamadagni は Catūrātra を使って祭った。彼はこれら増大を増大させた。それゆえ Jamdagni の 2 人の息子はお互いを白髪だとみなしていない[425]。このように知って Catūrātra を使って祭る者はこれら増大を増大させていることになる。Puroḍāśa が含まれる Upasad たちが行われる[426]。Puroḍāśa は家畜たちである。彼は家畜たちを得ていることになる。Puroḍāśa は食べ物である。彼は食べ物を得ていることになる。このように知って Catūrātra を使って祭る者は、食べ物を食べる者、家畜に満ちた者になる。

TS 7.1.10: Pañcarātra

TS 7.1.10(1): 1 年（Saṃvatsara）による Pañcarātra の開催

(7.1.10.1) saṃvatsaró vā́ idám éka āsīt. sò ’kāmayata=, "ṛtū́nt sṛ̥jeya=" íti. sá etám pañcarātrám apaśyat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sá ṛtū́n asṛ̥jata. yá evā́ṃ vidvā́n pañcarātréṇa yájate, práiva jāyate. tá ṛtávaḥ sṛ̥ṣṭā́. ná vyā́vartanta. tá etám pañcarātrám apaśyan. tám ā́haran. ténāyajanta. táto vái té vyā́vartanta. yá evā́ṃ vidvā́n pañcarātréṇa yájate, ví pāpmánā bhrā́tṛ̥vyeṇā́ vartate.

---

[424] Keith [19: 304]: "She deemed herself empty, without strength, weak, worn out." 原文の代名詞は男性（sá）であり、文脈上の Atri と Aurva はどちらも男性であるため、Keith がなぜ女性（She）として解釈しているのかは不明である。

[425] 裕福なので兄弟がお互いを追い出さずに暮らしていけるということか。

[426] upasad-：原義は「祭火のそばに座ること」から「夜明かし」を意味する。Soma 祭の基本形である Agniṣṭoma では、5 日間の祭日のうちの真ん中の 3 夜が Upasad に充てられる。

この［全体］は 1 年のみであった。彼（1 年）は望んだ。「私は季節たちを創り出したい」と。彼（1 年）はこの Pañcarātra を見た。それを取ってきた。それを使って祭式をした。それから彼（1 年）は季節たちを創出した。このように知って Pañcarātra を使って祭る者は繁殖する。その創られた季節たちは分離しなかった。それらはこの Pañcarātra を見た。それらはそれを取った。それを使って祭った。それからそれらは分離した。このように知って Pañcarātra を使って祭る者は悪、敵対者から自らを分離する。

TS 7.1.10(2): Sārvaseni Śauceya による Pañcarātra の開催

sā́rvaseniḥ śauceyò ’kāmayata, "paśumā́nt syām" íti. sá etám pañcarātrám ā́harat. ténāyajata. táto vái sá sahásram paśū́n prā́pnod. yá evā́m vidvā́n páñcarātréṇa yájate, prá sahásram paśū́n āpnoti. //
Sārvaseni Śauceya は望んだ。「私は家畜に富んだ者になりたい」と。彼はこの Pañcarātra を取ってきた。それを使って祭った。それから彼は 1000 の家畜たちを得た。このように知って Pañcarātra を使って祭る者は 1000 の家畜たちを得る。

TS 7.1.10(3): Babara Prāvāhaṇi による Pañcarātra の開催

(7.1.10.2) babaráḥ prā́vāhaṇir akāmayata, "vācáḥ pravaditā́ syām" íti. sá etám pañcarātrám ā́ // (7.1.10.3) aharat. ténāyajata. táto vái sá vācáḥ pravaditā́bhavad. yá evā́m vidvā́n pañcarātréṇa yájate, pravaditáivá vācó bhavati. átho enaṃ "vācás pátir" íty āhur.

Babara Prāvāhaṇi は望んだ。「私はことばを発声する者になりたい」と。彼はこの Pañcarātra を取ってきた。それを使って祭った。それから彼はことばを発声する者になった。このように知って Pañcarātra を使って祭る者はことばを発声する者となることになる。また彼のことを「ことばの主（vācás pátir）」と［人々は］言う。

TS 7.1.10(4): Catūrātra は不足、Ṣaḍrātra は過分、Pañcarātra が適切な祭式

ánāptaś catūrātró, ’tiriktaḥ ṣaḍrātró. ’tha vā́ eṣá sampratí yajñó, yát pañcarātró. yá evā́m vidvā́n pañcarātréṇa yájate, sampraty èvá yajñéna yajate.

Catūrātra は不足であり、Ṣaḍrātra は過分である。しかし、Pañcarātra こそが適切な祭式なのだ。このように知って Pañcarātra を使って祭る者は適切な祭式を使って祭ることになる。

TS 7.1.10(5): Pañcarātra の基本構造

pañcarātró bhavati. páñca vā́ ṛtávaḥ saṃvatsará. // (7.1.10.4) ṛtúṣv evá samvatsaré prátitiṣṭhaty. átho páñcākṣarā paṅktíḥ. pā́ṅkto yajñó. yajñám evā́varunddhe. trivṛ́d agniṣṭomó bhavati. téja evā́varunddhe. pañcadaśó bhavati=. indriyám evā́varunddhe. saptadaśó bhavati. annā́dyasyā́varuddhyai. átho, práivá téna jāyate. pañcaviṁśò ’gniṣṭomó bhavati. prajā́pater ā́ptyai. mahāvratávān annā́dyasyā́varuddhyai. viśvajít sárvapṛṣṭho ’tirātró bhavati. sárvasyābhíjityai. //

Pañcarātra が用いられる。一年は 5 つの季節たちである。季節たちに、つまり一年にしっかり立っていることになる。また Paṅkti は 5 音節からなる。祭式は 5 つからなる。彼は祭式を得ていることになる。Trivṛt[-Stoma] (9) が Agniṣṭoma として用いられる。彼は

光を得ていることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15) が用いられる。彼は Indra 力を得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17) が用いられる。食べ物を得るために。またそれによって彼は繁殖していることになる。Pañcaviṃśa[-Stoma] をもつ Agniṣṭoma が用いられる。Prajāpati に達するために。［Pañcarātra は］Mahāvrata（特別なヴラタ）を伴っている。食べ物を得るために。Viśvajit［-Stoma を用いる日］として全ての Pṛṣṭha[-Sāman] をもつ Atirātra が用いられる。全てを得るために。

TS 7.2

TS 7.2.1: Ṣaḍrātra

TS 7.2.1(1): Sādhya 神たちによる Ṣaḍrātra の開催

(7.2.1.1) sādhyā́ vái devā́ḥ suvargákāmā etáṁ ṣaḍrātrám apaśyan. tám ā́haran. ténāyajanta. táto vái té suvargáṃ lokám āyan. yá eváṃ vidvā́ṁsaḥ ṣaḍrātrám ā́sate, suvargám evá lokáṃ yanti.

天界を望む Sādhya 神たちはこの Ṣaḍrātra を見た。それを取ってきた。そしてそれを使って祭った。それから彼らは天界へ行ったのだ。このように Ṣaḍrātra を正しく行う者たちは天界へ行くことになる。

TS 7.2.1(2): Ṣaḍrātra は神々の Sattra である

devasattráṃ vái ṣaḍrātráḥ. pratyákṣaṁ hy ètā́ni pṛ́ṣṭhā́ni. yá eváṃ vidvā́ṁsaḥ ṣaḍrātrám ā́sate, sākṣā́d evá devátā abhyā́rohanti.

Ṣaḍrātra は神々の Sattra である。それは一目見ればわかるように山の頂上にあるものだから。このように Ṣaḍrātra を正しく行う者たちは明らかに神々に向かって昇っていることになる。

TS 7.2.1(3): Ṣaḍrātra の基本構造

ṣaḍrātró bhavati. ṣáḍ vā́ ṛ́távaḥ. ṣáṭ pṛ́ṣṭhā́ni. // (7.2.1.2) pṛ́ṣṭháir evártūn anvā́rohanty, ṛ́túbhiḥ saṃvatsaráṃ. té saṃvatsará evá prátitiṣṭhanti. bṛ́hadrathaṃtarā́bhyāṃ yanti. iyáṃ vā́vá rathaṃtarám asáu bṛ́hát. ābhyā́m evá yanti. átho, anáyor evá prátitiṣṭhanti. eté vái yajñásyāñjasā́yanī srutī́. tā́bhyām evá suvargáṃ lokáṃ yanti. trivṛ́d agniṣṭomó bhavati. téja evā́varundhate. pañcadaśó bhavati. indriyám evā́varundhate. saptadaśáḥ // (7.2.1.3) bhavati. annā́dyasyā́varuddhyā. átho, práivá téna jāyanta. ekaviṁśó bhavati. prátiṣṭhityā. átho, rúcam evā́tmán dadhate. triṇavó bhavati. víjityai. trayastriṁśó bhavati. prátiṣṭhityai.

Ṣaḍrātra が行われる。季節は 6 つある。6 つの山頂がある。Pṛṣṭha たちは季節に沿って登っていく。季節たちによって一年ができる。彼らはしっかりと一年の上に立っている。Bṛhat と Rathaṃtara によって彼らは進んでいく。Rathaṃtara はこの大地であり、Bṛhat はかの天界である。この 2 つによって彼らは進んでいっていることになる。またこの 2 つの上に彼らはしっかり立っていることになる。例の 2 つは祭式にとってまっすぐ行く道

（yajñásyāñjasā́yanī srutī́）[427]なのだ。その 2 つによって彼らは天界へ行っていることになる。Trivṛt[-Stoma] (9) をもつ Agniṣṭoma が用いられる。彼らは光熱力を獲得していることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15) が用いられる。彼らは Indra 力を得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17)が用いられる。食べ物を得るために。またそれによって彼らは繁殖していることになる。Ekaviṃśa[-Stoma] (21) が用いられる。しっかりと立つために。また彼らは自分に輝き（rúc-）を置いていることになる。Triṇava[-Stoma] (27) が用いられる。勝ち取るために。Trayastriṃśa[-Stoma] (33) が用いられる。しっかりと立つために。

TS 7.2.1(4): Sārasvata-Sattra

sadohavirdhānína eténa ṣaḍrātréṇa yajerann. ā́śvatthī havirdhā́naṃ cā́gnīdhraṃ ca bhavatas. tád dhí suvargyáṃ. cakrī́vatī bhavataḥ. suvargásya lokásya sámaṣṭyā. ulū́khalabudhno yū́po bhavati. prátiṣṭhityai. prā́ñco yānti. prā́ṅ iva hí suvargáḥ // (7.2.1.4) lokáḥ. sárasvatyā yānty. eṣá vái devayā́naḥ pánthās. tám evā́nvā́rohanty. ākróśanto yānty. ávartim evā́nyásmin pratiṣájya pratiṣṭhā́ṃ gachanti. yadā́ dáśa śatáṃ kurvánty, átháikam utthā́naṃ. śatā́yuḥ púruṣaḥ śaténdriya. ā́yuṣy evéndriyé prátitiṣṭhanti. yadā́ śatáṁ sahásraṃ kurvánty, átháikam utthā́naṃ. sahásrasammito vā́ asáu lokò. ’múm evá lokám abhíjayanti. yadáiṣām pramī́yeta. yadā́ vā jī́yerann, átháikam utthā́naṃ. tád dhí tīrthám. //

Sadas と Havirdhāna[428]をもつ者たちは、この Ṣaḍrātra を使って祭るべきである。Havirdhāna と Agnīdh の場所の 2 つは Aśvattha（神聖な木）から作られる。というのもそれ（Agnīdh の場所）が天界に向かうものだから[429]。［その 2 つは］車輪を備える。天界へ完全に到達するために。臼を基礎とする（ulū́khalabudhno）[430]支柱が用いられる。しっかりと立つために。彼らは東へ（車で）行く。というのも東は天界のようであるから。川[431]に沿って（車で）行く[432]。この［川］が神々の通る道である。それを追って彼

---

[427] JB 2.419; 421（Gavāmayana 章）にも añjasāyana-（「（天界に）まっすぐいく」）という表現がある。Schults [2015]を参照。

[428] 圧搾されるための Soma 草が載せられた荷車のことを指す。

[429] 笠松 [2011] 参照。

[430] ulū́khala-はすり鉢、músala-はすりこぎである。

[431] Sarasvatī という特定の河川を指すのではなく、TS 編纂当時には川一般のことを指していたかもしれない。Ṛgveda の時代（紀元前 1200 頃）は川が干上がるところに沿って移動していたと考えられている。後藤・山田・永ノ尾 [2009] 参照。

[432] Sārasvata-Sattra の伝説。Sarasvatī 川はインドアーリア人にとっての故郷であり、そこへ行くことが聖地巡礼の始まりであったと考えられていたが、Einoo によれば、聖地巡礼とは関連しない。Sārasvata-Sattra は家畜（特に雌牛）を連れて、1000 頭に増えるまで一年間 Sarasvatī へ行くことを意味していたとされる（後藤・山田・永ノ尾 [2009] 参照）。しかし、１年間で牛を 10 頭を 100 頭に、100 頭を 1000 頭にすることは、普通の飼育によっては不可能であろう。したがって、この文脈では略奪行あるいは野良牛の確保を指していると考えるのが妥当である。

らは登っていることになる。騒ぎながら（戦車に）乗って行く[433]。不幸を他者にくっつけてから安定へと行っていることになる[434]。彼らが 10［頭］を 100［頭］にしたら、一度［この略奪行を］終了する。人は 100（年）の寿命、100 の Indra 力をもつ。寿命、Indra 力の上にしっかりと立っていることになる。彼らが 100［頭］を 1000［頭］にしたら、一度［この略奪行を］終了する。かの世界は 1000 と同等である。あの世界を勝ち取っていることになる。これらのうちの 1 人が衰弱死したら、あるいは略奪されたら、一度［この略奪行を］終了する。というのもそれが過渡期（略奪行の潮時）であるから。

TS 7.2.2: Saptarātra

TS 7.2.2(1): Kusurubinda Auddālaki による Saptarātra の開催

(7.2.2.1) kusurubínda áuddālakir akāmayata, "paśumā́nt syām" íti. sá etáṁ saptarātrám ā́harat. téna vái sá, yā́vanto grāmyā́ḥ paśávas, tā́n ávārunddha. yá eváṃ vidvā́nt saptarātréṇa yájate, yā́vanta evá grāmyā́ḥ paśávas, tā́n evā́varunddhe.

Kusurubinda Auddālaki は望んだ、「私は家畜に富む者になりたい」と。彼はこの Saptarātra を取ってきた。それを使って祭った。それによって彼は村にいる限りの家畜たちを得たのだった。このように知って Saptarātra を使って祭る者は村にいる限りの家畜たちを得ていることになる。

TS 7.2.2(2): Saptarātra の基本構造

saptarātró bhavati. saptá grāmyā́ḥ paśávaḥ, saptā́raṇyā́ḥ, saptá chándāṁsy. ubháyasyā́varuddhyai. trivṛ́d agniṣṭomó bhavati. téjaḥ // (7.2.2.2) evā́varunddhe. pañcadaśó bhavati=. indriyám evā́varunddhe. saptadaśó bhavaty. annā́dyasyā́varuddhyai. átho, práivá téna jāyata. ekaviṁśó bhavati. prátiṣṭhityā. átho, rúcam evā́tmán dhatte. triṇavó bhavati. víjityai. pañcaviṁśò ’gniṣṭomó bhavati. prajā́pater ā́ptyai. mahāvratávān. annā́dyasyā́varuddhyai. viśvajít sárvapṛṣṭho ’tirātró bhavati. sárvasyābhíjityai.

Saptarātra が行われる。村にいる家畜は 7［種類］、荒地にいる［家畜］は 7［種類］、韻律は 7［種類］ある。両方を得るために。Trivṛt[-Stoma] (9) が Agniṣṭoma として行われる。光を得ていることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15) が行われる。Indra 力を得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17) が行われる。食べ物を得るために。またそれによって彼は繁殖する。Ekaviṃśa[-Stoma] (17) が行われる。しっかりと立つために。また彼は輝きを自分に置く。Triṇava[-Stoma] (27) が行われる。勝ち取るために。Pañcaviṃśa［-Stoma］が Agniṣṭoma として行われる。Prajāpati に到達するために。［Saptarātra は］

---

[433] 他人の土地に行くので、威嚇の意味で騒ぐということが含意されているか。後藤・山田・永ノ尾 [2009] 参照。

[434] 「不幸を他者にくっつけてから安定へと行く」という記述は、当時あるいはより古い時代にインドアーリア人による家畜の略奪があったことを示唆している。後藤・山田・永ノ尾 [2009] 参照。

Mahāvrata をもつ。食べ物を得るために。全ての Pr̥ṣṭha を含む Viśvajit が Atirātra として行われる。全てを得るために。

TS 7.2.2(3): Saptarātra の最後の日（Viśvajit-Stoma の日）に Pr̥ṣṭha を用いること

yát pratyákṣam pū́rveṣv áhaḥsu pr̥ṣṭhā́ny upeyúḥ, pratyákṣam // (7.2.2.3) viśvajíti, yáthā dugdhā́m upasī́daty, evám uttamám áhaḥ syān. náikarātráś caná syād. bṛ́hadrathantaré pū́rveṣv áhaḥsū́payanti=. iyáṃ vā́vá rathaṃtarám, asáu bṛ́had. ābhyā́m evá ná yanty. átho, anáyor evá prátitiṣṭhanti. yát pratyákṣaṃ viśvajíti pr̥ṣṭhā́ny upayánti, yáthā práttāṃ duhé, tādṛ́g evá tát. //

公然と［最終日］以前の日々において Pr̥ṣṭha（盛り上がり）たちを行うということは、公然と Viśvajit［-Stoma の日］において［行うということは］、［既に］乳を絞られた［雌牛］の近くに座って［乳搾りをする］ように、そのように最後の日はなってしまうだろう。決して 1 夜祭（Ekarātra）があってはならない[435]。彼らは Bṛhat[-Sāman] と Rathaṃtara[-Sāman]を［最終日］以前の日々において執り行う。Rathaṃtara はこの［大地］、Bṛhat はあの［天界］。この 2 つを使って彼らは逸れていかないことになる。またこの 2 つの上にしっかりと立っていることになる。彼らが公然と Viśvajit［-Stoma の日］において Pr̥ṣṭha たちを行うことは、まさに催乳された［雌牛］の乳を絞るようなことである[436]。

TS 7.2.3: Aṣṭarātra

TS 7.2.3(1): Bṛhaspati による Aṣṭarātra の開催

(7.2.3.1) bṛ́haspátir akāmayata, "brahmavarcasī́ syām" íti. sá etám aṣṭarātrám apaśyat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sá brahmavarcasy àbhavad. yá evā́ṃ vidvā́n aṣṭarātréṇa yájate, brahmavarcasy èvá bhavaty.
Bṛhaspati は望んだ、「Brahman の栄光をもつ者になりたい」と。彼は例の Aṣṭarātra を見た。それを取ってきた。それを使って祭った。その結果彼は Brahman の栄光をもつ者になった。このように知って Aṣṭarātra を使って祭る者は、Brahman の栄光をもつ者になる。

TS 7.2.3(2): Aṣṭarātra の基本構造

aṣṭarātró bhavaty. aṣṭā́kṣarā gāyatrī́. gāyatrī́ brahmavarcasám. gāyatriyáivá brahmavarcasám ávarunddhe. aṣṭarātró bhavati. cátasro vái díśaś, cátasro ’vā́ntaradiśā́. digbhyá evá

---

[435] あるいは、「決して 1 夜祭（Ekarātra）であってはならない」か。いずれにせよ、Ekarātra なる Sattra は当該 Sattra 章における他の箇所で言及されておらず、実際には存在しない Sattra であることが示唆される。おそらくここで意図されていることは、Pr̥ṣṭha、つまり、この Sattra（Saptarātra）の盛り上がりとなる日が前半の六日間に置かれてしまうと、最後の日（七日目）である Viśvajit-Stoma を用いる日に Pr̥ṣṭha を置かないことになり、最後の日に Pr̥ṣṭha を置く Sattra の形式から逸脱してしまう、ということであろう。

[436] pra-dāpaya[ti] の過去分詞 prátta-（「子牛を当てがわれた，催乳された」は、人間が子牛に母牛の乳を吸わせ、母牛に授乳の準備をさせる行為を意味する。Cf. Amano [2009: 245 n.614].

brahmavarcasám ávarunddhe. (7.2.3.2) trivŕ̥d agniṣṭomó bhavati. téja evā́varunddhe. pañcadaśó bhavati=. indriyám evā́varunddhe. saptadaśó bhavati. annā́dyasyā́varuddhyā. átho, práivá téna jāyata. ekaviṁśó bhavati. prátiṣṭhityā. átho, rúcam evā́tmán dhatte. triṇavó bhavati. víjityai. trayastriṁśó bhavati. prátiṣṭhityai. pañcaviṁśò ’gniṣṭomó bhavati. prajā́pater ā́ptyai. mahāvratávān. annā́dyasyā́varuddhyai. viśvajít sárvapr̥ṣṭho ’tirātró bhavati. sárvasyābhíjityai.

Aṣṭarātra が行われる。Gāyatrī（24 音節の韻律）は［1 Pāda］8 音節からなる。Brahman の栄光は Gāyatrī である。彼は Gāyatrī を使って Brahman の栄光を得ていることになる。Aṣṭarātra が行われる。方位（東・南・西・北）は 4 つ、間の方位（南東・南西・北西・北東）は 4 つ。彼は方位たちを使って Brahman の栄光を得ていることになる。Trivr̥t[-Stoma] (9) が Agniṣṭoma［の最初の Stoma（？）］として用いられる。彼は光を得ていることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15) が用いられる。彼は Indra 力を得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17) が用いられる。食べ物を得るために。また彼はそれによって繁殖していることになる。Ekaviṃśa[-Stoma] (21) が用いられる。しっかりと立つために。また彼は輝きを自分に置いていることになる。Triṇava[-Stoma] (27) が用いられる。勝ち取るために。Trayastriṃśa[-Stoma] (33) が用いられる。しっかりと立つために。Agniṣṭoma［の Stoma］として Pañcaviṃśa[-Stoma] (25) が用いられる。Prajāpati に達するために。［Aṣṭarātra は］Mahāvrata を含む。食べ物を得るために。Atirātra［の Stoma］として完全な Pr̥ṣṭha（最高潮）をもつ Viśvajit［-Stoma］が用いられる。全てを勝ち取るために。

TS 7.2.4: Navarātra

TS 7.2.4(1): Prajāpati が Navarātra によって飢えた生き物たちを救った神話

(7.2.4.1) prajā́patiḥ prajā́ asr̥jata. tā́ḥ sr̥ṣṭā́ḥ kṣúdhaṃ nyà̀yant. sá etáṃ navarātrám apaśyat. tám ā́harat ténāyajata. táto vái prajā́bhyo ’kalpata. yárhi prajā́ḥ kṣúdhaṃ nigácheyus, tárhi navarātréṇa yajeta=. imé hí vā́ etā́sāṃ lokā́ ákl̥ptā, áthaitā́ḥ kṣúdhaṃ nígachanti=. imā́n evā́bhyo lokā́n kalpayati. tā́n kálpamānān prajā́bhyó ’nu kalpate. kálpante // (7.2.4.2) asmā imé lokā́, ū́rjam prajā́su dadhāti. trirātréṇaivémā́ṃ lokā́ṃ kalpayati, trirātréṇāntárikṣaṃ, trirātréṇāmúṃ lokā́ṃ. yáthā guṇé guṇám anvásyaty, evám evá tál loké lokám ánv asyati, dhŕ̥tyā áśithilambhāvāya. jyótir gáur ā́yur íti jñātā́ stómā bhavanti=. iyáṃ vā́vá jyótir, antárikṣaṃ gáur, asā́v ā́yur. eṣv èvá lokéṣu prátitiṣṭhanti. jñā́traṃ prajā́nāṃ // (7.2.4.3) gachati.

Prajāpati は生き物たちを創り出した。その生き物たちは飢えに陥った。彼は例の Navarātra を見た。それを取ってきた。そしてそれを使って祭った。その結果、生き物たちのために［世界が］整った。生き物たちが飢えに陥るような時はいつでも、彼は Navarātra を使って祭るべきである[437]。というのも、この［3 つの］世界はこの［生き物たち］にとって整っておらず、彼らは飢えに陥るからである。彼は例の生き物たちのために［3 つの］世界を整えていることになる。その整いつつある［3 つの］世界の後に生き物たちのために整う。彼のためにこの［3 つの］世界は整い、彼は生き物たちに栄養を置く。彼は 3 夜でこの世界（大地）を整え、3 夜で中空を［整え］、3 夜であの世界（天界）を［整える］。彼は紐に紐を投げるように、世界に世界を投げていることになる。揺るぎなさのために、ゆるくならないように。Jyotis（「光」）、Go（「牛」）、

[437] yárhi + Opt. Cf. Delbrück [1888: 351-352].

Āyus（「命」）として知られている Stoma が用いられる。Jyotis はこの［大地］、Go は中空、Āyus はあの［天界］である。それらはこの［3 つの］世界にしっかりと立っていることになる。彼は生き物たちに認められるようになる[438]。

TS 7.2.4(2): Navarātra は長い間病気の者のために行うべし

navarātró bhavati. abhipūrvám evā́smin téjo dadhāti. yó jyógāmayāvī syā́t, sá navarātréṇa yajeta. prāṇā́ hí vā́ etásyā́dhṛtā. áthaitásya jyóg āmayati. prāṇā́n evā́smin dādhāra=, utá yádītā́sur bhávati, jīváty evá. //

Navarātra が行われる。彼は正面から彼に鋭い輝きを置いていることになる。長い間病気の者がいるなら、彼は Navarātra を使って祭るべきである。というのもこの者の息たちは保たれておらず、そしてこの者を長い間病気にさせているから。彼は息たちを彼の中に保っていることになる、そしてもし生気が抜け出て行った者になるとしても、彼は生きていることになる。

TS 7.2.5: Daśarātra

TS 7.2.5(1): Daśarātra は繁殖、Prajāpati、Virāj に関する祭式である、Daśarātra のために潔斎するなら Daśahotar を献供すべし

(7.2.5.1) prajā́patir akāmayata, "prájāyeya=" íti. sá etáṃ dáśahotāram apaśyat. tám ajuhot. téna daśarātrám asṛjata. téna daśarātréṇa prā́jāyata. daśarātrā́ya dīkṣiṣyámāṇo dáśahotāraṃ juhuyād. dáśahotraivá daśarātrā́m̐ sṛjate. téna daśarātréṇa prájāyate. vairājó vā́ eṣá yajñó, yád daśarātráḥ. // (7.2.5.2) yá eváṃ vidvā́n daśarātréṇa yájate, virā́jam evá gachati. // prājāpatyó vā́ eṣá yajñó, yád daśarātró. yá eváṃ vidvā́n daśarātréṇa yájate, práiva jāyate.

Prajāpati は望んだ、「私は繁殖したい」と。彼はこの Daśahotar[439]を見た。それを（Agni に）献供した。それによって Daśarātra を創った。その Daśarātra を使って繁殖した。Daśarātra のために潔斎しようと思う者は Daśahotar を献供すべきである。彼は Daśahotar によって Daśarātra を創り出していることになる。その Daśarātra によって繁殖する。Daśarātra とは Virāj（10 の倍数）に関する祭式である。このように知って Daśarātra を使って祭る者は Virāj に達する。Daśarātra とは Prajāpati に関する祭式である。このように知って Daśarātra を使って祭る者は繁殖する。

---

[438] jñā́tra- 「認識能力，洞察力」 (PW. ‘die Fähigkeit des Erkennens, Einsicht’) 。jñā́tram gam- の使用が次の箇所にも現れ，Caland 訳では「知識を獲得する」 (attain knowledge) とされている。PB 5.7.11: devā vai svargaṃl lokaṃ yanto ʼjñātād abibhayus ta etat saṃjñānam apaśyaṃs tena jñātram agacchan yat sujñānam anvahaṃ bhavati jñātram eva gacchanti. (Caland: The Gods, in going to the world of heaven, were afraid of ignorance; they saw this sujñāna (sāman) (‘knowledge giving sāman’), and thereby attained knowledge. In that there is day by day the sujñāna (sāman), they attain knowledge.)

[439] 森に行ってこっそり唱えるような秘匿性のある Mantra を指す。Amano [2019] を参照。これは Caturhotar に対応する祭式儀礼である。Caturhotar-では 4 名の祭官（Agnīdh、Adhvaryu、Hotar、Upavaktar）が言及される。

TS 7.2.5(2): Indra が Daśarātra によって他の神格たちから分け隔てられた神話

índro vái sadṛ́ṅ devátābhir āsīt. sá ná vyāvṛ̥tam agachat. sá prajā́patim úpādhāvat. tásmā etáṃ daśarātrám prā́yachat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sò ’nyā́bhir devátābhir vyāvṛ̥tam agachad. yá eváṃ vidvā́n daśarātréṇa yájate, vyāvṛ̥tam evá pāpmánā bhrā́tṛ̥vyeṇa gachati.

Indra は神格たちと同じような者だったのだ。彼は［彼らと］分離された（格別の）［状態］に達していなかった。彼（Indra）は（助けを求めて）Prajāpati のもとまで走った。［Prajāpati は］彼にこの Daśarātra を授けた。彼（Indra）はそれを取ってきた。それを使って祭った。それから彼（Indra）は他の神格たちと分離された［状態］に達した。このように知って Daśarātra を使って祭る者は悪、敵対者と分離された［状態］に達していることになる。

TS 7.2.5(3): Daśarātra は Trikakud（3 つの峰をもつ）祭式である

trikakúd vái // (7.2.5.3) eṣá yajñó, yád daśarātráḥ. kakút pañcadaśáḥ. kakúd ekaviṁśáḥ. kakút trayastriṁśó. yá eváṃ vidvā́n daśarātréṇa yájate, trikakúd evá samānā́nām bhavati. yájamānaḥ pañcadaśó. yájamāna ekaviṁśó. yájamānas trayastriṁśáḥ. púra ítarā. abhicaryámāṇo daśarātréṇa yajeta. devapurā́ evá páryūhate. tásya ná kútaś canópāvyādhó bhavati. náinam abhicárant stṛ̥ṇute.

Daśarātra とは 3 つの峰をもつ祭式である。Pañcadaśa[-Stoma] (15)は峰、Ekaviṃśa[-Stoma] (17)は峰、Trayastriṃśa[-Stoma] (33)は峰。このように知って Daśarātra を使って祭る者は、同類の者たちの中の 3 つの峰を持つ者となっていることになる。Pañcadaśa[-Stoma] (15)は祭主、Ekaviṃśa[-Stoma] (17)は祭主、Trayastriṃśa[-Stoma] (33)は祭主、他の［Stoma］たちは城壁。呪術をかけられている者は Daśarātra を使って祭るべきである。彼は神々の城壁を自分の周りに築いていることになり、彼にはどこからも突き崩すところがなくなる。呪術使いは彼を屈服させない。

TS 7.2.5(4): 神々が Daśarātra を城壁として Asura たちを退けた神話

devāsurā́ḥ sáṃyattā āsan. té devā́ etā́ḥ // (7.2.5.4) devapurā́ apaśyan, yád daśarātrás. tā́ḥ páryauhanta. téṣāṃ ná kútaś canópāvyādhò ’bhavat. táto devā́ ábhavan párā́surā. yó bhrā́tṛ̥vyavānt syā́t, sá daśarātréṇa yajeta. devapurā́ evá páryūhate. tásya ná kútaś canópāvyādhó bhavati. bhávaty ātmánā, párāsya bhrā́tṛ̥vyo bhavati. stóma[s] stómasyópastir bhavati. bhrā́tṛ̥vyam evópastiṃ kurute.

神々と Asura たちが拮抗していた。神々はその例の神々の城壁を見た、すなわち Daśarātra であるところのものを。彼らはそれらの［城壁］を自分たちの周りに築いた。それらには全くどこからも突き崩すところがなくなった。それから神々は栄え、Asura たちは敗退した。敵対者をもつ者は Daśarātra を使って祭るべきである。彼は神々の城壁を自分の周りに築いていることになり、彼にはどこからも突き崩すところがなくなる。彼は栄え、彼の敵対者は敗退する。Stoma は Stoma の配下である。彼は敵対者を自分の配下にしていることになる。

TS 7.2.5(5): 詩節数の多い Stoma から詩節数の少ない Stoma へ行くことは Jāmi の原因

jāmí vā́ etát kurvanti, yáj jyā́yāṁsaṁ stómam upétya kánīyāṁsam upayánti. (7.2.5.5) yád agniṣṭomasāmā́ny avástāc ca parástāc ca bhávanty, ájāmitvāya.

彼らは、より大きい（詩節数の多い）Stoma を行った後、より小さい（詩節数の少ない）Stoma を行うことで、Jāmi を作っているのだ。Agniṣṭoma の Sāman たちがこちら側とあちら側にあるということは、Jāmi をなくすためである。

TS 7.2.5(6): Daśarātra の基本構造

trivṛ́d agniṣṭomò. ’gniṣṭúd āgneyī́ṣu bhavati. téja evā́varunddhe. pañcadaśá ukthyà aindrī́ṣv. indriyám evā́varunddhe. trivṛ́d agniṣṭomó vaiśvadevī́ṣu. púṣṭim evā́varunddhe. saptadaśò ’gniṣṭomáḥ prājāpatyā́su tīvrasomò. ’nnā́dyasyā́varuddhyā. átho, práivá téna jāyate. // (7.2.5.6) ekaviṁśá ukthyàḥ saurī́ṣu. prátiṣṭhiyā. átho, rúcam evā́tmán dhatte. saptadaśò ’gniṣṭomáḥ prājāpatyā́sūpahavyà. upahavám evá gachati. triṇavā́v agniṣṭomā́v abhíta aindrī́ṣu. víjityai. trayastriṁśá ukthyò vaiśvadevī́ṣu. prátiṣṭhityai. viśvajít sárvapṛṣṭho ’tirātró bhavati. sárvasyābhíjityai. //

Trivṛt[-Stoma] (9)をもつ Agniṣṭoma が、Agni への称讃として、Agni のための［詩節が唱えられる］ときに用いられる[440]。彼は鋭い輝きを得ていることになる。また、Pañcadaśa[-Stoma] (15)をもつ Ukthya が Indra のための［詩節が唱えられる］ときに用いられる。彼は Indra 力を得ていることになる。Trivṛt[-Stoma] (9)をもつ Agniṣṭoma が、一切神[441]に関する［詩節が唱えられる］ときに用いられる。彼は増大を得ていることになる。Agniṣṭoma としての Saptadaśa［-Stoma］(17)は、Prajāpati のための［詩節］が唱えられるとき、Tīvra-Soma（鋭い Soma）として用いられる[442]。食べ物を得るために役立ち、彼はそれによって繁殖していることになる。Ekaviṃśa［-Stoma］(21)は、Sūrya のための詩節が唱えられるとき、Ukthya として用いられる。しっかりと立つために役立ち、彼は輝きを自分に置いていることになる。Agniṣṭoma としての Saptadaśa［-Stoma］(17)は Prajāpati のための詩節が唱えられるとき Upahavya[443]として用いられる。彼は招待されていることになる。2 つの Agniṣṭoma として 2 つの Triṇava[-Stoma] (27)が、両側で(＝Śastra の前後で)Indra のための詩節が朗唱されるとき、用いられる。勝ち取るために。Trayastriṃśa[-Stoma] (33)は全ての神々に関する［讃歌］たちが［朗唱される］とき Ukthya と呼ばれる。しっかりと立つために。Viśvajit として全ての Pṛṣṭha をもつ Atirātra が使われる。全てを勝ち取るために。

---

[440] stav + ṛc- (loc.) ：「ある ṛc に合わせてある Stotra を唱える」。

[441] Vaiśya の神格。MS 1.11.9.5.

[442] tīvrasoma, -sut: ukthya 型の ekāha（1 日で終わる Soma 祭）の名前とされる．Soma 飲みに難儀する者に対して勧められる．Cf. Mylius [1995: 72].

[443] upahavya- は Agniṣṭoma 型の 1 日 Soma 祭（Ekāha）の名前のことである。この祭式中に唱えられる神格の名前ははっきり言われない (anirukta) 。Indra が Śakra という別名で呼ばれることなどは anirukta の例であるが、最もよくある場合は、Prajāpati の名前がはっきり言われない場合である。

TS 7.2.6: Ekādaśarātra

TS 7.2.6(1): 季節たちが Ekādaśarātra によって子孫（時節たち）を手に入れた神話

(7.2.6.1) ṛtávo vái prajā́kāmāḥ prajā́ṃ nā́vindanta. tè ’kāmayanta, "prajā́m̐ sṛ̥jemahi. prajā́m ávarundhīmahi. prajā́ṃ vindemahi. prajā́vantaḥ syāma=" íti. tá etám ekādaśarātrám apaśyan. tám ā́haran. ténāyajanta. táto vái té prajā́m asṛ̥janta. prajā́m ávārundhata. prajā́m avindanta. prajā́vanto ’bhavan. tá ṛ̥távo ’bhavan. tád ārtavā́nām ārtavatvám. ṛ̥tūnā́ṃ vā́ eté putrā́s. tásmāt // (7.2.6.2) ārtavā́ ucyante. yá evā́ṃ vidvā́m̐sa ekādaśarātrám ā́sate, prajā́m evá sṛ̥jante. prajā́m ávarundhate. prajā́ṃ vindante. prajā́vanto bhavanti.

季節たちは子孫を望みとしていたが子孫を手に入れなかった。それらは望んだ、「私たちは子孫を創り出したい、子孫を得たい、子孫を手に入れたい、子孫に富む者たちになりたい」と。それらはこの Ekādaśarātra を見た。それらはそれを持ってきた。それを使って祭った。それからそれらは子孫を創った、子孫を得た、子孫を手に入れた、子孫に富む者たちになった。それらは季節（ṛtu-）になった。それが時節たち（ārtava-）が時節である所以である。これらは季節たちの息子たちである。それゆえ時節たちと呼ばれている。このように知って Ekādaśarātra を行う者たちは子孫を創っていることになる。彼らは子孫を得る。子孫を手に入れる。子孫に富む者たちになる。

TS 7.2.6(2): Ekādaśarātra の基本構造

jyótir atirātró bhavati. jyótir evá purástād dadhate. suvargásya lokásyā́nukhyātyai. pṛ́ṣṭhyaḥ ṣaḍahó bhavati. ṣáḍ vā́ ṛ̥távaḥ, ṣáṭ pṛ̥ṣṭhā́ni. pṛ̥ṣṭháir evártū́n anvā́rohanty, ṛ̥túbhiḥ saṃvatsaráṃ. té saṃvatsará evá prátitiṣṭhanti. caturviṁśó bhavati. cáturviṁśatyakṣarā gāyatrī́. // (7.2.6.3) gāyatrám brahmavarcasáṃ. gāyatriyā́m evá brahmavarcasé prátitiṣṭhanti. catuścatvāriṁśó bhavati. cátuścatvāriṁśadakṣarā triṣṭúg. indriyáṃ triṣṭúp. triṣṭúbhy evéndriyé prátitiṣṭhanti. aṣṭācatvāriṁśó bhavaty. aṣṭā́catvāriṁśadakṣarā jágatī. jā́gatāḥ paśávo. jágatyām evá paśúṣu prátitiṣṭhanti. ekādaśarātró bhavati. páñca vā́ ṛ̥táva, ārtavā́ḥ páñca=. ṛ̥túṣv evā́rtavéṣu saṃvatsaré pratiṣṭhā́ya prajā́m ávarundhate. ’tirātrā́v abhíto bhavataḥ. prajā́yati párigṛhītyai. //

Jyotis が Atirātra として行われる。彼らは光を前/東に置いていることになる。天界をみつけるために。Pṛṣṭha をもつ Ṣaḍaha が行われる。季節は 6 つ、Pṛṣṭha は 6 つ。Pṛṣṭha たちによって季節たちに続いて登っていることになる、季節たちによって一年に。それらは一年の上にしっかりと立っていることになる。24［詩節］からなる［Stoma］が行われる。Gāyatrī（8 の倍数）は 24 音節をもつ。Brahman の威光は Gāyatrī に関係する。彼らは Gāyatrī と Brahman の威光の上にしっかりと立っていることになる。44［-Stoma］が行われる。Triṣṭubh（11 の倍数）は 44 音節をもつ。Triṣṭubh は Indra 力である。彼らは Triṣṭubh の上に、Indra 力の上にしっかりと立っていることになる。48 が行われる。Jagatī は 48 音節をもつ。家畜たちは Jagatī（12 の倍数）に関係する。彼らは Jagatī の上に家畜たちの上に立っていることになる。Ekādaśarātra が行われる。季節は 5 つ、時節は 5 つ。彼らは季節たちの上に、時節たちの上に、すなわち一年の上にしっかりと立ちながら、子孫を得ていることになる。2 つの Atirātra が両側で行われる。出来る限り多くの子孫を獲得するために。

TS 7.2.7: Dvādaśarātra（様々な Graha の配列）（≈KS 30.3; KpS 45.6; TB 2.4.3）

TS 7.2.7(1): Indra-Vāyu の Graha

(7.2.7.1) aindravāyavā́grān gr̥hṇīyād, yáḥ kāmáyeta, "yathāpūrvám prajā́ḥ kalperann" íti. yajñásya vái kḷ̥ptim ánu prajā́ḥ kalpante. yajñásyā́kḷ̥ptim ánu ná kalpante. yathāpūrvám evá prajā́ḥ kalpayati. ná jyā́yāṁsaṃ kánīyān átikrāmaty. aindravāyavā́grān gr̥hṇīyād āmayāvínaḥ. prāṇéna vā́ eṣá vyṛ̥dhyate yásyāmáyati. prāṇá aindravāyaváḥ. prāṇénaiváinaṁ sámardhayati.

順序に沿って子孫（人々）が整って欲しいと望む者は Indra-Vāyu の［Graha］を先頭にした［Graha］たちを汲むべきである。祭式の整いに続いて子孫（人々）が整う。祭式が整わないことに続いて［子孫（人々）が］整わない（祭式が整わなければ子孫（人々）は整わない）。彼は順序に沿って子孫（人々）を整わせることになる。より小さなものはより大きなものを超えない[444]。病気の者は、Indra-Vāyu の［Graha］を最初に手に取るべきである。彼らは Prāṇa（呼息）であり、病気者は呼息から分離される存在となる。

TS 7.2.7(2): Mitra-Varuṇa の Graha

maitrāvaruṇā́grān gr̥hṇīran, yéṣāṃ dīkṣitā́nām pramī́yeta. // (7.2.7.2) prāṇāpānā́bhyāṃ vā́ eté vyṛ̥dhyante, yéṣāṃ dīkṣitā́nām pramī́yate. prāṇāpānáu mitrā́váruṇau. prāṇāpānā́v evá mukhataḥ páriharanta.

潔斎した者たちの中で衰弱死する場合には、Mitra-Varuṇa の［Graha］を先頭にした［Graha］たちを汲むべきである。Mitra-Varuṇa も呼息と吸息であり、彼らは衰弱した者の顔を包む存在となる。

TS 7.2.7(3): 両 Aśvin の Graha

āśvinā́grān gr̥hṇītānujāvarò. ’śvínau vái devā́nām ānujāvaráu paścévā́gram páryaitām. aśvínāv etásyā devátā, yá ānujāvarás. tā́v eváinam ágram páriṇayataḥ.

遅く生まれた者（anujāvará-）は両 Aśvin の［Graha］を先頭にした［Graha］たちを汲むべきである。両 Aśvin は遅く生まれた者の神格である。その両者が当該の者を先頭の周りに導いていることになる。

TS 7.2.7(4): Śukra の Graha

śukrā́grān gr̥hṇīta gatáśrīḥ pratiṣṭhā́kāmo. ’sáu vā́ ādityáḥ śukrá. eṣó ’ntó. ’ntam manuṣyàḥ. // (7.2.7.3) śriyái gatvā́ nívartaté. ’ntād evā́ntam ā́ rabhate. ná tátaḥ pā́pīyān bhavati.

繁栄に達して安定を望む者は、Śukra の[Graha]を先頭にした［Graha］たちを汲むべきである。Śukra はあの太陽なのだ。果て（antá-）は例の［Śukra-Graha］なのだ。人間は繁

[444] 年齢について、あるいは社会的な上下関係か。

栄の果てに達した後、休止する。彼は果てから果てにしがみついていることになる。彼はそれ以上悪くはならない。

TS 7.2.7(5): Manthin の Graha

manthyàgrān gr̥hṇītābhicárann. ārtapātráṃ vā́ etád, yán manthipātrám. mr̥tyúnaiváinaṃ grāhayati. tājág ā́rtim árchati.

［誰かを］呪っている者は、Manthin の［Graha］を先頭にした［Graha］たちを汲むべきである。例のそれ、即ち Manthin の容器（manthipātrá-）は、不運の容器なのだ。彼は死に当該の者（呪いの対象者）を掴ませていることになる。彼（当該の者）は突然不運に陥ることになる。

TS 7.2.7(6): Āgrayaṇa の Graha

āgrayaṇā́grān gr̥hṇīta, yásya pitā́ pitāmaháḥ púṇyaḥ syā́d, átha tán ná prāpnuyā́d. vācā́ vā́ eṣá indriyéṇa vyṛ̀dhyate, yásya pitā́ pitāmaháḥ púṇyaḥ // (7.2.7.4) bhávaty, átha tán ná prāpnóty. úra ivaitád yajñásya vā́g iva, yád āgrayaṇó. vācáiváinam indriyéṇa sámardhayati. ná tátaḥ pā́pīyān bhavaty.

Āgrayaṇa の［Graha］を先頭にした［Graha］たちを汲むべきである、彼の父や祖父が徳ある者であり、それに到達していない者は。例のその［Graha］は Vāc と、Indra 力と分け隔てられている（Vāc、Indra 力が欠如している）のだ、彼の父や祖父が徳ある者であり、それに到達していない者は。例のそれ、即ち Āgrayaṇa の［Graha］は、祭式の胸（úras-）のようであり、Vāc のようである。彼は当該の者を Vāc と、Indra 力と合体させていることになる。彼はそれ以上は悪くならない。

TS 7.2.7(7): Ukthya の Graha

ukthyā̀grān gr̥hṇītābhicaryámāṇaḥ. sárveṣāṃ vā́ etát pā́trāṇām indriyáṃ, yád ukthyapātráṃ. sárveṇaiváinam indriyéṇā́ti práyuṅkte.

呪われている者は、Ukthya の［Graha］を先頭にした［Graha］たちを汲むべきである。例のそれ、即ち Ukthya の容器は、全ての容器の中の Indra 力なのだ。彼は当該の者を完全な Indra 力と非常に結びつけることになる。

TS 7.2.7(8): Puroruc を唱える

"sárasvaty abhí no neṣi vásya" íti purorúcaṃ kuryād. vā́g vái // (7.2.7.5) sárasvatī. vācáiváinam áti práyuṅkte. "mā́ tvát kṣétrāṇy áraṇāni ganma=" íty āha. mr̥tyór vái kṣétrāṇy áraṇāni. ténaivá mr̥tyóḥ kṣétrāṇi ná gachati. pūrṇā́n gráhān gr̥hṇīyād, āmayāvínaḥ. prāṇā́n vā́ etásya súg r̥chati, yásyāmáyati. prāṇā́ gráhāḥ prāṇā́n evā́sya súco muñcaty, utá yádītā́sur bhávati, jī́vaty evá. pūrṇā́n gráhān gr̥hṇīyād. yárhi parjányo ná várṣet, prāṇā́n vā́ etárhi prajā́nāṁ súg r̥chati. yárhi parjányo na várṣat, prāṇā́ gráhāḥ prāṇā́n evá prajā́nāṁ súco muñcati. tāják právarṣati. //

「Sarasvatī よ、我らを最高の幸福に向かって導け[445]」[446]という［詩節を］Puroruc[447]として唱えるべきである。Sarasvatī はことばであり、彼は彼をことばと強く結びつけていることになる。また、「我らは決して未開の土地へ行くまい」[448]と唱える。未開の土地は死に関係しており、それによって死の土地に行くことはなくなる。彼は病気の者のために満たされた杯を汲むべきであり、病気の者の息たちに苦痛が襲い、杯は息たちであり、彼の息たちを苦痛から解放する。そして、もし生気が抜け出て行った者がいるとしても、彼は生きていることになる。さらに、Parjanya が雨を降らせない時には満たされた杯を手に取るべきであり、Parjanya が雨を降らせない時には諸生物の息たちに苦痛が襲い、杯は息たちであり、諸生物の息たちを苦痛から解放していることになる。そして、すぐに雨が降ることになる。

TS 7.2.8: Dvādaśarātra（Graha の順序）（≈KS 30.2; KpS 45.5）

TS 7.2.8(1): 10 日間で使われる Graha の種類と順序（1≈9 日目）

(7.2.8.1) gāyatró vā́ aindravāyavó. gāyatrám prāyaṇī́yam áhas. tásmāt prāyaṇī́yé ’hann aindravāyavó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāti. tráiṣṭubho vái śukrás. tráiṣṭubham dvitī́yam áhas. tásmād dvitī́yé ’hañ chukró gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāti. jā́gato vā́ āgrayaṇó. jā́gataṃ tr̥tī́yam áhas. tásmāt tr̥tī́yé ’hann āgrayaṇó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāty. etád vái // (7.2.8.2) yajñám āpad, yác chándāṁsy āpnóti. yád āgrayaṇáḥ śvó gr̥hyáte, yátraivá yajñám ádr̥śan. táta eváinam púnaḥ práyuṅkte. jáganmukho vái dvitī́yas trirātró. jā́gata āgrayaṇó. yác caturthe ’hann āgrayaṇó gr̥hyáte, svá eváinam āyátane gr̥hṇāty. átho, svám evá chándó ’nu paryā́vartante. rā́thaṃtaro vā́ aindravāyavó, rā́thaṃtaram pañcamám áhas. tásmāt pañcamé ’han // (7.2.8.3) aindravāyavó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāti. bā́rhato vái śukró, bā́rhataṁ ṣaṣṭhám áhas. tásmāt ṣaṣṭhé ’hañ chukró gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāty. etád vái dvitī́yaṃ yajñám āpad, yác chándāṁsy āpnóti. yác chukráḥ śvó gr̥hyáte, yátraivá yajñám ádr̥śan, táta eváinam púnaḥ práyuṅkte. triṣṭúṅmukho vái tr̥tī́yas trirātrás. tráiṣṭubhaḥ // (7.2.8.4) śukró. yát saptamé ’hañ chukró gr̥hyáte, svá eváinam āyátane gr̥hṇāty. átho, svám evá chándó ’nu paryā́vartante. vā́g vā́ āgrayaṇó. vā́g aṣṭamám áhas. tásmād aṣṭamé ’hann āgrayaṇó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāti. prāṇó vā́ aindravāyaváḥ, prāṇó navamám áhas. tásmān navamé ’hann aindravāyavó gr̥hyate. svá eváinam āyátane gr̥hṇāti.

Indra と Vāyu のための［杯］は Gāyatrī に属する。導入の日は Gāyatrī に属する。それゆえ、導入の日に Indra と Vāyu のための［杯］が手に取られる（あるいは汲まれる）。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。Śukra は Triṣṭubh に属する。2 日目は Triṣṭubh に属する。それゆえ、2 日目に Śukra が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。Āgrayaṇa は Jagatī に属する。3 日目は Jagatī に属する。それゆえ、3 日目に Āgrayaṇa が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。次のようにして彼は祭式に到達した、つまり韻律たちに到達するようにして。Āgrayaṇa が翌日手に取られる（あるいは汲まれる）ならば、彼らが祭式を見た場所、その場所で

[445] neṣi, nay-/nī- aor. ṣi-iptv. act. 2nd sg. Cf. Narten [1964: 163].
[446] Cf. TB 2.4.3.1
[447] Puroruc（「前に輝くもの」を意味する）は Śastra の終わりか途中に唱えられる、特定の神格名を含んだ詩節の一行のことである。Mylius [1995: 84; 92−93] 参照。
[448] Cf. TB 2.4.3.2

彼はそれを再び用いていることになる。2 番目の 3 夜は Jagatī で始まる。Āgrayaṇa は Jagatī に属する。4 日目に Āgrayaṇa が手に取られるならば、自分の拠点でそれを手に取っていることになる。そしてまた彼らは自分の韻律の周りを回っていることになる。Indra と Vāyu の［杯］は Rathaṃtara に関係している。5 日目は Rathaṃtara に関係している。それゆえ 5 日目に Indra と Vāyu の［杯］が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。Śukra は Bṛhat に関係している。6 日目は Bṛhat に関係している。それゆえ 6 日目に Śukra が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。韻律たちに到達する仕方で 2 つ目の祭式に到達した。Śukra が翌日手に取られるならば、彼らが祭式を見た場所でそれを再び用いていることになる。3 番目の 3 夜は Triṣṭubh で始まる。Śukra は Triṣṭubh に関係している。7 日目に Śukra が手に取られるならば、自分の拠点でそれを手に取っていることになる。そしてまた自分の韻律の周りを回っていることになる。Āgrayaṇa はことばである。8 日目はことばである。それゆえ 8 日目に Āgrayaṇa が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。Indra と Vāyu の［杯］は呼息である。9 日目は呼息である。それゆえ 9 日目に Indra と Vāyu の［杯］が手に取られる。自分の拠点でそれを手に取っていることになる。

TS 7.2.8(2): 10 日間で使われる Graha の種類と順序（10 日目）

etát // (7.2.8.5) vái tritī́yaṃ yajñám āpad, yác chándāṁsy āpnoti. yád aindravāyaváḥ śvó gr̥hyáte, yátraivá yajñám ádr̥śan, táta eváinam púnaḥ práyuṅkté. ’tho svám evá chándo ’nu paryā́vartante. pathó vā́ eté ’dhy ápathena yanti, yè ’nyénaindravāyavā́t pratipádyanté. ’ntaḥ khálu vā́ eṣá yajñásya, yád daśamám áhar. daśamé ’hann aindravāyavó gr̥hyate. yajñásya // (7.2.8.6) evā́ntaṃ gatvā́pathāt pánthām ápiyanty. átho, yáthā váhīyasā pratisā́raṃ váhanti, tādr̥g evá tát. chándāṁsy anyò’nyasya lokám abhyàdhyāyan. tā́ny eténaivá devā́ vyàvāhayann.

彼は例のようにして 3 番目の祭式に到達した（aor.）、つまり韻律たちに到達するようにして。Indra と Vāyu の［杯］が翌日に手に取られるならば、彼らが祭式を見たとき、それからそれを再び用いていることになる。そしてまたその韻律自身（同じ韻律）に続いて次の一周を行うことになる。Indra と Vāyu 以外の［杯］で開始する者たちというのは道から離れて道無き道を通って進んでいく。例のものは祭式の果てである、つまり 10 日目は。10 日目に Indra と Vāyu の［杯］が手に取られる。彼らは祭式の終わりに達してから、道のないところから道の中に進んでいくことになる。そしてまた、彼らがよりよく運ぶ［牛］を使って、［ある場所から別の場所へ］移動しつつ運ぶように、それはまさにそのようになっている。韻律たちは互いが互いの世界に向かって寄っていった。それら（韻律たち）を他ならぬ例のもの（10 日目）によって神々は互いに結婚させた。

TS 7.2.8(3): 3 日間ごとの最初と最後の日の Graha を同じ Graha にする

aindravāyavásya vā́ etád āyátanaṃ, yác caturthám áhas. tásminn āgrayaṇó gr̥hyate. tásmād āgrayaṇásyāyátane navamé ’hann aindravāyavó gr̥hyate. śukrásya vā́ etád āyátanaṃ, yát pañcamám // (7.2.8.7) áhas. tásminn aindravāyavó gr̥hyate. tásmād aindravāyavásyāyátane saptamé ’hañ chukró gr̥hyata. āgrayaṇásya vā́ etád āyátanaṃ, yát ṣaṣṭhám áhas. tásmiñ chukró gr̥hyate. tásmāc chukrásyāyátane ’ṣṭamé ’hann āgrayaṇó gr̥hyate. chándāṁsy evá tád vívāhayati. prá vásyaso vivāhám āpnoti, yá eváṃ véda=. átho, devátābhya evá yajñé saṃvídaṃ dadhāti. tásmād idám anyò’nyásmai dadhāti. //

4 日目とは Indra と Vāyu の［杯］の拠点である。そこで Āgrayaṇa の［Graha］は汲まれる。それゆえ Āgrayaṇa の拠点である 9 日目に Indra と Vāyu の［Graha］が汲まれる。5 日目とは Śukra の拠点である。そこで Indra と Vāyu の［Graha］が汲まれる。それゆえ Indra と Vāyu の［Graha］の拠点である 7 日目に Śukra の［Graha］が汲まれる。6 日目とは Āgrayaṇa の拠点である。そこで Śukra の［Graha］が汲まれる。それゆえ Śukra の拠点である 8 日目に Āgrayaṇa の［Graha］が汲まれる。そうして韻律たちを結婚させていることになる。このように知っている者はよりよい者との結婚へ到る。そしてまた神々のために祭式に共有物を置いていることになる。それゆえこれを互いが互いのために置いている。

TS 7.2.9:

TS 7.2.9(1): Prajāpati が繁殖を求めて Dvādaśāha を開催する神話（≈KS 34.8(1)）

(7.2.9.1) prajā́patir akāmayata, "prájāyeya=" íti. sá etáṃ dvādaśarātrám apaśyat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sá prā́jāyata. yáḥ kāmáyeta, "prájāyeya=" íti, sá dvādaśarātréṇa yajeta. práivá jāyate.

Prajāpati は望んだ、「私は繁殖したい」と。彼はこの Dvādaśarātra を見た。それを持ってきた。それを使って祭った。それから彼は繁殖した。「私は繁殖したい」と望む者は Dvādaśarātra を使って祭るべきである。彼は繁殖していることになる。

TS 7.2.9(2): Dvādaśarātra の構造、Atirātra と Agniṣṭoma の順序（≈KS 34.8(4)）

brahmavādíno vadanti, "agniṣṭomáprāyaṇā yajñā́, átha kásmād atirātráḥ pū́rvaḥ práyujyata" íti. cákṣuṣī vā́ eté yajñásya, yád atirātráu. kanī́nike agniṣṭomáu. yát // (7.2.9.2) agniṣṭomáṃ pū́rvam prayuñjīrán, bahirdhā́ kanī́nike dadhyus. tásmād atirātráḥ pū́rvaḥ práyujyate. cákṣuṣī evá yajñé dhitvā́ madhyatáḥ kanī́nike prátidadhati. yó vái gāyatrī́ṃ jyótiḥpakṣāṃ véda, jyótiṣā bhāsā́ suvargáṃ lokám eti. yā́v agniṣṭomáu, táu pakṣáu. yé ’ntare ’ṣṭā́v ukthyā̀ḥ, sá ātmā́. eṣā́ vái gāyatrī́ jyótiḥpakṣā, yá eváṃ véda. jyótiṣā bhāsā́ suvargáṃ lokám // (7.2.9.3) eti. prajā́patir vā́ eṣá dvādaśadhā́ víhito, yád dvādaśarātró. yā́v atirātráu, táu pakṣáu. yé ’ntare ’ṣṭā́v ukthyā̀ḥ, sá ātmā́. prajā́patir vā́váiṣá sánt. sád dha vái sattréṇa spṛṇoti. prāṇā́ vái sát. prāṇā́n evá spṛṇoti. sárvāsāṃ vā́ eté prajā́nām prāṇáir āsate, yé sattrám ā́sate. tásmāt pṛchanti, "kím eté sattríṇa" íti. priyáḥ prajā́nām útthito bhavati, yá eváṃ véda. //

Brahman を議論する者たちは議論している。「祭式たちは Agniṣṭoma を導入部としているのに、なぜ Atirātra が最初のものとして用いられているのか」と。2 つの Atirātra とは祭式の両方の目であり、2 つの Agniṣṭoma は両方の瞳である。彼らが Agniṣṭoma を最初のものとして用いようとするなら、彼らは外に両方の瞳を置くことになるだろう。それゆえ Atirātra が最初のものとして用いられる。彼は両方の目を祭式に置いてから、真ん中に両方の瞳を置いていることになる。Gāyatrī を光の翼をもつものとして知っている者は、光、輝きによって天界へ行く。Gāyatrī とは両翼である。中間にある 8 つの Ukthya とは胴体である。このような Gāyatrī は光の翼をもっている。このように知っている者は光、輝きによって天界へ行く。Dvādaśarātra とは 12［の部分］に分けられた

Prajāpati である。Atirātra とは両翼である。中間にある 8 つの Ukthya とは胴体である。この実在しているもの[449]が Prajāpati なのだ[450]。彼は実在しているものを Sattra によって確保しているのだ。息たちが実在しているものである。彼は息たちを確保していることになる。Sattra を行う者たちというのは全ての諸生物の息たちを伴って［Sattra を］行っていることになる。それゆえ彼らは問う、「あの例の Sattra 行者たちか？」と。このように知っている者は諸生物の中で好まれ、傑出した者になる。

TS 7.2.10: Dvādaśāha

TS 7.2.10(1): 片側だけに Agni Vaiśvānara を含む祭式としての Dvādaśāha

(7.2.10.1) ná vā́ eṣò ’nyátovaiśvānaraḥ suvargā́ya lokā́ya prā́bhavad. ūrdhvó ha vā́ eṣá ā́tata āsīt. té devā́ etā́ṃ vaiśvānarám páryauhant, suvargásya lokásya prábhūtyā. ṛtávo vā́ eténa prajā́patim ayājayan. tésv ārdhnod ádhi tád. ṛdhnóti ha vā́ ṛtvíkṣu, yá evā́ṃ vidvā́n dvādaśāhéna yájate. tè ’sminn aichanta. sá rásam áha vasantā́ya prā́yachat, // (7.2.10.2) yávaṃ grīṣmā́yáuṣadhīr varṣā́bhyo vrīhī́ñ charáde māṣatiláu hemantaśiśirā́bhyām. ténéndram prajā́patir ayājayat. táto vā́ índra índro ’bhavat. tásmād āhur, "ānujāvarásya yajñá" íti. sá hy èténā́gré ’yajata.

別のところに[Agni-]Vaiśvānara（「普遍火））がある例の［祭式］（=Dvādaśāha）は天界へと至らせる能力がなかった。例の祭式は上方へ伸ばされたのだ。そのとき神々は例の［祭式］の周りに[Agni-]Vaiśvānara を押し付けた。天界へ至ることができるように。季節たちは Prajāpati に例の［祭式］を使って祭らせた。それら（季節たち）において彼はそれを成功させた。このように知って Dvādaśāha を使って祭る者は祭官たちの中で成功することになるのだ[451]。彼らはこれを求めた。彼は樹液を春には[452]与えて、夏には大麦を、雨季たちには植物たちを、秋には米たちを、冬と寒期には豆とゴマを与えた。Prajāpati は Indra にそれを使って祭らせた。それから Indra は Indra になった。それゆえ人々は言っている。「祭式は遅く生まれた者に属する」[453]と。というのも彼が例の［祭式］を使って原初において祭ったから。

TS 7.2.10(2): Dvādaśāha において潔斎した者は食べられる（≈KS 34.2; 34.1; 34.11）

eṣá ha vái kuṇápam atti, yáḥ sattré pratigr̥hṇā́ti puruṣakuṇapám aśvakuṇapáṃ. gáur vā́ ánnaṃ. yéna pā́treṇā́nnam bíbhrati, yát tán ná nirṇénijati, tátó ’dhi // (7.2.10.3) málaṃ jāyate. éka evá

---

[449] sánt-「実在している」について、後藤 [2001]を参照せよ。

[450] 主語である指示代名詞 (eṣá sánt, m.sg. < *etát sát, n.sg.) の性と数が述語である名詞 (prajā́patir, m.sg.) の性と数に一致している。

[451] Amano [2019] によると、ha vái は yá evā́ṃ vidvā́n/véda と共起する。

[452] áha は antithetisch なアクセントを持つ動詞とよく用いられる。ここでは prā́yachad は pra-áyachat というように動詞部分にアクセントが置かれていると考えられる。Amano [2009: 536 n. 2313] 参照。

[453] Indra は 8 番目に生まれた双子の弟であるという神話へのなぞらえか。Mārtāṇḍa の神話は MS 1.6.12 (agnyādheya)にみられる。Indra が 21 番目の息子であることが示唆される箇所については、Amano [2022]を参照。

yajeta=. éko hí prajā́patir ā́rdhnod. dvā́daśa rā́trīr dīkṣitáḥ syād. dvā́daśa mā́sāḥ saṃvatsaráḥ. saṃvatsaráḥ prajā́patiḥ. prajā́patir vā́váiṣá. eṣá ha tvái jāyate, yás tápasó ’dhi jā́yate. caturdhā́ vā́ etā́s tisrástisro rā́trayo, yád dvā́daśopasádo. yā́ḥ prathamā́ yajñáṃ, tā́bhiḥ sámbharati. yā́ dvitī́yā yajñáṃ, tā́bhir ā́rabhate. // (7.2.10.4) yā́ś tṛtī́yāḥ pā́trāṇi, tā́bhir nírṇenikte. yā́ś caturthī́r ápi, tā́bhir ātmā́nam antaratáḥ śundhate. yó vā́ asya paśúm átti, māṁsáṁ sò ’tti. yáḥ puroḍā́śam, matíṣkaṁ sá. yáḥ parivāpám, púrīṣaṁ sá. yá ā́jyam majjā́naṁ, sá ápi ha vā́ asya śīrṣaṇyà niṣpádaḥ prátigṛhṇāti, yó dvādaśāhé pratigṛhṇā́ti. tásmād dvādaśāhéna ná yā́jyam. pāpmáno vyā́vṛttyai.

Sattra において人の死肉、馬の死肉を受け入れる者というのは死肉を食べているのだ。食べ物は牛である。食べ物を持ち運ぶ容器を清潔にしないと、そこから汚れが生まれる。一人が祭主として祭るべきである。というのも Prajāpati は一人で成功したから。12 の夜の間、彼は潔斎した者であるべきである。一年は 12 ヶ月である。Prajāpati は一年である。例の［祭式］は Prajāpati である。しかし[454]、苦行から生まれる者というのは生まれていることになるのだ。12 の Upasad というのは 3 つずつの夜が 4 つに分かれてあるものである。最初の 3 つで祭式を用意する（Dīkṣā の暗示）。2 つ目の 3 つで祭式に取り掛かる（Upasad の暗示）。3 つ目の 3 つで杯たちを清潔にする。4 つ目の 3 つで自身を中から清める（Soma 搾りの暗示）。彼の家畜を食べる者は彼の肉を食べていることになる。祭式用ケーキを食べる者は彼の脳を食べていることになる。炒られた米粒を食べる者は彼の糞を食べていることになる。澄ましバターを食べる者は彼の骨髄を食べていることになる。Soma を食べる者は彼の汗を食べていることになる。また、Dvādaśāha において（人間の肉を）受け取る者が彼の頭からの排泄物を受け取っていることになるのだ[455]。それゆえ Dvādaśāha を使って祭ってはならない。罪悪（pāpmán-）の分離のために。

TS 7.3

TS 7.3.1: Dvādaśarātra（10 日目、Avivākya の日）

(7.3.1.1) prajávaṃ vā́ eténa yanti, yád daśamám áhaḥ. pāpāvahī́yaṃ vā́ eténa bhavanti, yád daśamám áhar. yó vái prajávaṃ yatā́m ápathena pratipádyate, yá sthāṇúṁ hánti, yó bhréṣaṃ nyéti, sá hīyate. sá, yó vái daśamé ’hann avivākyá upahanyáte, sá hīyate. tásmai yá úpahatāya vyā́ha, tám evā́nvārábhya sámaśnuté. ’tha yó vyā́ha, sáḥ // (7.3.1.2) hīyate. tásmād daśamé ’hann avivākyá úpahatāya ná vyúcyam. átho khálv āhur, "yajñásya vái sámṛddhena devā́ḥ suvargáṃ lokám āyan. yajñásya vyṛ̀ddhenā́surān párābhāvayann" íti. yát khálu vái yajñásya sámṛddhaṃ, tád yájamānasya. yád vyṛddhaṃ, tád bhrā́tṛvyasya. sá, yó vái daśamé ’hann avivākyá upahanyáte, sá evā́tirecayati. té, yé bā́hyā dṛśīkávaḥ // (7.3.1.3) syús, té víbrūyur. yádi tátra ná vindéyur, antaḥsadasā́d vyúcyaṃ. yádi tátra ná vindéyur, gṛhápatinā vyúcyaṃ. tád vyúcyam evá=. átha vā́ etát sarparājñíyā ṛgbhí[s] stuvanti=. iyáṃ vái sárpato rā́jñī. yád vā́ asyā́ṃ kíṃ cā́rcanti, yád ānṛcús, téneyáṁ sarparājñī́. "té, yád evá kíṃ ca vācā́nṛcúr, yád átó ’dhy arcitā́raḥ, // (7.3.1.4) tád ubháyam āptvā́varúdhyóttiṣṭhāma=" íti. tā́bhir mánasā stuvate. ná vā́ imā́m aśvarathó

---

[454] tvái = tu vái

[455] Falk [1986: 38] は sattriya を「Sattra に属する（犠牲人間）」と解釈している。Cf. KS 34.8(3): puruṣasaṃmito vā eṣa. yas sattriyaṃ pratigṛhṇāti, puruṣaṃ vai so ’tti. yaṃ khalu vai puruṣam atti, na tasyāsmiṃl loke nāmuṣminn apibhavati. 例の［祭式］（＝Dvādaśāha）は人間［犠牲］に等しい。Sattra に属するもの（人間の肉か）を受け取る者は人間を食べているのだ。

nā́śvatarīratháḥ sadyáḥ páryāptum arhati. máno vā́ imā́m̐ sadyáḥ páryāptum arhati, mánaḥ páribhavitum. átha bráhma vadanti. párimitā vā́ ṛ́caḥ, párimitāni sā́māni, párimitāni yájūm̐ṣy. áthaitásyaivā́nto nā́sti, yád bráhma. tát pratigr̥ṇatá ā́cakṣīta. sá pratigaráḥ. //

例のもの、即ち十日目によって彼らは加速に進んでいるのだ。10 日目というものによって彼らは悪を離れる状態になるのだ。加速に進んでいく者たちの中で道なき道に足を踏み入れる者、（戦車が）切り株を叩く者、（戦車の）故障[456]に陥る者は取り残されるのだ。10 日目、すなわち Avivākya（「（離脱が）宣告され得ない、解明され得ない、口論され得ない」）において倒れる者は取り残されるのだ。彼は倒れた彼に離脱を宣告する者を後ろから捕まえて、完全に到達する。しかし離脱を宣告する者は取り残される。それゆえ 10 日目、すなわち Avivākya において倒れた者のために離脱を宣告してはならない[457]。あるいはむしろ[458]言っている、「成功した［Soma］祭によって[459]神々は天界へ行った。失敗した［Soma］祭によって Asura たちを負けさせた」と。まさに成功した祭式こそが祭主に属する。失敗した［祭式］は敵対者に属する。10 日目、すなわち Avivākya において倒れる者は［Soma 摂取を］やりすぎていることになる。［祭場の］外にいる傍観者である者たちは離脱を宣告すべきである。もしそこ(外)に彼ら(傍観者たち)がいないのであれば、Sadas の内側から離脱を宣告されるべきである。もしそこに彼らがいないのであれば Gr̥hapati（Sattra の長）によって宣告されるべきである。そうしてまさに宣告されるべきである。そしてこのとき彼らは Sarparājñī（女性詩人、「蛇の女王」）の［3 つの］詩節を使って Stotra を歌う。蛇の女王はこの［大地］である。「その両方、即ち、この［大地］で彼らが讃えるものはなんであれ、［そして］彼らが讃えた後で讃えるもの、その両方に到達して得た後で、私たちは（Sattra から）立ち上がろう」と。彼らはそれらによって自分の思考の中で Stotra を歌う。馬の戦車もロバの戦車もこの［大地］を一瞬で回りきることはできない。思考はこの［大地］を一瞬で回りきることができる。思考は周回することができる。そして彼らは Brahman を発声する。詩節は有限であり、Sāman は有限であり、Yajus は有限である。しかし例のものの終焉は存在しない、つまり Brahman の。彼は応唱する者にそれを開陳すべきである。それが応唱である。

---

[456] 「戦車の故障、損傷」（ratha-bhréṣa-）について、Hoffmann [1975 (1955): 32−34]、坪田 [2020: 90 n. 22]を参照。

[457] Caland の PB の訳注（Caland p.63 note）においては、Avivākya の日とは、Mantra が誤って唱えられた際に、その誤りを指摘してはいけない日であるという解釈をとっている。彼は「彼らが逸脱して言う（vyāhur）とき、彼らは余計なことをしている（ati ... recayanti）」と解釈する。

[458] Amano [2016] によると、TS に見られる átho khálu āhur は自分たちと別の人々が述べる異論について言及する場合に使われるフレーズである。

[459] Soma を飲んで吐いたりしないで Soma の効き目を保つこと。MS 2.4.1f (sautrāmaṇī): somapīthena vyṛdhyate 「Soma 飲みにおいて失敗する」。

TS 7.3.2: Dvādaśāha（各日に獲得できるもの）

(7.3.2.1) brahmavādíno vadanti, "kíṃ dvādaśāhásya prathaménā́hnartvíjāṃ yájamāno vṛ̥ṅkta" íti. "téja indriyám" íti. "kíṃ dvitī́yena=" íti. "prāṇā́n annā́dyam" íti. "kíṃ tṛ̥tī́yena=" íti. "trī́n imā́m̐ lokā́n" íti. kíṃ "caturthéna=" íti. "cátuṣpadaḥ paśū́n" íti. "kím pañcaména=" íti. "páñcākṣarām paṅktím" íti. "kím̐ ṣaṣṭhéna=" íti. "ṣáḍ ṛtū́n" íti. "kím̐ saptaména=" íti. "saptápadām̐ śakvarīm" íti. // (7.3.2.2) "kím aṣṭaména=" íty. "aṣṭā́kṣarāṃ gāyatrī́m" íti. "kíṃ navaména=" íti. "trivṛ̥tam̐ stómam" íti. "kíṃ daśaména=" íti. "dáśākṣarāṃ virā́jam" íti. "kím ekādaśéna=" íty. "ékādaśākṣarāṃ triṣṭúbham" íti. "kíṃ dvādaśéna=" íti. "dvā́daśākṣarāṃ jágatīm" íty. etā́vad vā́ asti, yā́vad etád. yā́vad evā́sti, tád eṣāṃ vṛ̥ṅkte. //

Brahman を議論する者たちは議論する。Dvādaśāha の 1 日目に祭主は祭官たちから何をもぎ取るのか。「鋭い光、Indra 力を」。2 日目には何を。「息たち、食べ物を」。3 日目には何を。「この三世界を」。4 日目には何を。「4 つ足の家畜たちを」。5 日目には何を。「五音節からなる Paṅkti を」。6 日目には何を。「六つの季節を」。7 日目には何を。「七つ足の Śakvarī[460]を」。8 日目には何を。「8 音節からなる Gāyatrī を」。9 日目には何を。「Trivṛt[-Stoma] (9)を」。10 日目には何を。「10 音節からなる Virāj を」。11 日目には何を。「11 音節からなる Triṣṭubh を」。12 日目には何を。「12 音節からなる Jagatī を」。これくらい多くのものがある。それくらい多くのものを彼はこの者たちからもぎ取る。

TS 7.3.3: Trayodaśarātra

(7.3.3.1) eṣá vā́ āptó dvādaśāhó, yát trayodaśarātráḥ. samānā́m̐ hy ètád áhar, yát prāyaṇī́yaś codayanī́yaś ca. tryàtirātro bhavati. tráya imé lokā́. eṣā́ṃ lokā́nām ā́ptyai. prāṇó vái prathamò ’tirātró. vyānó dvitī́yo. ’pānás tṛ̥tī́yaḥ. prāṇāpānodānéṣv evā́nnā́dye prátitiṣṭhanti. sárvam ā́yur yanti, yá evā́ṃ vidvā́m̐sas trayodaśarātrám ā́sate. tád āhur, "vā́g vā́ eṣā́ vítatā, // (7.3.3.2) yád dvādaśāhás. tā́ṃ víchindyur, yán mádhye ’tirātráṃ kuryúr. upadā́sukā gṛ̥hápater vā́k syād." upáriṣṭāc chandomā́nām mahāvratáṃ kurvanti. sáṃtatām evá vā́cam ávarunddhé. ’nupadāsukā gṛ̥hápater vā́g bhavati. paśávo vái chandomā́. ánnam mahāvratáṃ. yád upáriṣṭāc chandomā́nām mahāvratáṃ kurvánti, paśúṣu caivā́nnā́dye ca prátitiṣṭhanti //

例のもの、すなわち Trayodaśarātra は、完遂された（到達された、超過した）Dvādaśāha である。というのも Prāyaṇīya と Udayanīya は同じ日であるから。3 つの Atirātra が行われる。これらは 3 つの世界である。これらの世界を獲得するために。最初の Atirātra は Prāṇa（呼吸、吐く息）であり、2 番目は Vyāna（体内を循環する息）であり、3 番目は Apāna（吸息、吸う息）である。彼らは Prāṇa と Apāna と Udāna（喉から上に昇ってくる息）の上に、食べ物の上にしっかりと立っていることになる。このように知って Trayodaśarātra を行う者たちは完全な寿命へ至る。人々はこのことについて言っている。「例のものは連綿と続くことばなのだ、即ち Dvādaśāha は。その［ことば］を彼らは引き裂いてしまうだろう、もし彼らが真ん中で Atirātra を行うならば。Gṛ̥hapati のことばは散り散りになるものとなってしまうだろう」。彼らは Chandoma（Dvādaśāha の 7、8、9 日目）の後に Mahāvrata（11 日目）を行う。彼はひとつなぎに連続したことばを得ていることになる。Gṛ̥hapati のことばが散り散りにならないものとなる。Chandoma は家

[460] Śakvarī とは 7 パーダ 8 音節（合計 56 音節) ）の韻律の名前である。

畜たちなのだ。Mahāvrata は食べ物なのだ。彼らが Chandoma の後に Mahāvrata を行っているとき、彼らは家畜たちと食べ物の上にしっかりと立っていることになる。

TS 7.3.4: Āditya たちによる Caturdaśarātra の開催

(7.3.4.1) ādityā́ akāmayanta=, "ubháyor lokáyor ṛdhnuyāma=" íti. tá etáṃ caturdaśarātrám apaśyan. tám ā́haran. ténāyajanta. táto vái tá ubháyor lokáyor ārdhnuvann, asmíṁś cāmúṣmiṁś ca. yá evā́ṃ vidvā́ṁsaś caturdaśarātrám ā́sata, ubháyor evá lokáyor ṛdhnuvanty, asmíṁś cāmúṣmiṁś ca. caturdaśarātró bhavati. saptá grāmyā́ óṣadhayaḥ. saptā́raṇyā́. ubháyīṣām ávaruddhyai. yát parācī́nāni prāṣṭhā́ni // (7.3.4.2) bhávanty, ámum evá táir lokám abhíjayanti. yát pratīcī́nāni pṛṣṭhā́ni bhávanti=, imám evá táir lokám abhíjayanti. trayastriṁśáu madhyatá stómau bhavataḥ. sā́mrājyam evá gachanty. adhirājáu bhavato. ’dhirājā́ evá samānā́nām bhavanty. atirātrā́v abhíto bhavataḥ. párigṛhītyai. //

Āditya たちは望んだ。「我々は両世界において栄えたい」と。彼らはこの Caturdaśarātra を見た。それを持ってきた。それを使って祭った。それから彼らは両世界において栄えた、この［世界］とあの［世界］で。このように知って Caturdaśarātra を行っている者たちは両世界において栄えていることになる、この［世界］とあの［世界］で。Caturdaśarātra が行われる。村の植物は 7［種類］。荒地の植物は 7［種類］。両方を得るために。あちら側を向いた Pṛṣṭha たちが用いられるとき、彼らはあの世界をそれらによって勝ち取っていることになる。こちら側を向いた Pṛṣṭha たちが用いられるとき、彼らはこの世界をそれらによって勝ち取っていることになる。2 つの Trayastriṃśa-Stoma (33)が真ん中で用いられる[461]。彼らは統一王になっていることになる。［両者は］上位の王となる。彼らは同類の者たちの上位の王となっていることになる。2 つの Atirātra が両側で用いられる。取り囲むために。

TS 7.3.5: Prajāpati による Caturdaśarātra の開催

(7.3.5.1) prajā́patiḥ suvargáṃ lokám ait. táṃ devā́ ánvāyan. tā́n ādityā́ś ca paśávaś cā́nvāyan. té devā́ abruvan. yā́n paśū́n upā́jīviṣma tá imè ’nv ā́gmann íti. tébhya etáṃ caturdaśarātrám prátyauhan. tá ādityā́ḥ pṛṣṭháiḥ suvargáṃ lokám ā́rohan. tryahā́bhyām asmíṁ loké paśū́n prátyauhan. pṛṣṭháir ādityā́ amúṣmiṁ loká ā́rdhnuvan. tryahā́bhyām asmín // (7.3.5.2) loké paśávo. yá evā́ṃ vidvā́ṁsaś caturdaśarātrám ā́sata, ubháyor evá lokáyor ṛdhnuvanty, asmíṁś cāmúṣmiṁś ca. pṛṣṭháir evā́múṣmiṁ loká ṛdhnuvánti, tryahā́bhyām asmíṁ loké. jyótir gáur ā́yur íti tryahó bhavati=. iyáṃ vā́vá jyótir, antárikṣaṃ gáur, asā́v ā́yur. imā́n evá lokā́n abhyā́rohanti. yád anyátaḥ pṛṣṭhā́ni syúr, vívivadhaṁ syān. mádhye pṛṣṭhā́ni bhavanti. savivadhatvā́ya. // (7.3.5.3) ójo vái vīryàm pṛṣṭhā́ny. ója evá vīryàm madhyató dadhate. bṛhadrathaṃtarā́bhyāṃ yanti=. iyáṃ vā́vá rathaṃtarám, asáu bṛhád. ābhyā́m evá yanty. átho, anáyor evá prátitiṣṭhanty. eté vái yajñásyāñjasā́yanī srutī́. tā́bhyām evá suvargáṃ lokáṃ yanti. párāñco vā́ eté suvargáṃ lokám abhyā́rohanti, yé parācī́nāni pṛṣṭhā́ny upayánti. pratyáṅ tryahó bhavati. pratyávarūḍhyā. átho prátiṣṭhiyai. ubháyor lokáyor ṛddhvóttiṣṭhanti. cáturdaśaitā́s. tā́sāṃ yā́ dáśa, dáśākṣarā virā́ḍ. ánnaṃ virā́ḍ. virā́jaivā́nnā́dyam ávarundhate. yā́ś cátasraś cátasro díśo, dikṣv èvá prátitiṣṭhanty. atirātrā́v abhíto bhavataḥ. párigṛhītyai. //

---

[461] 14 日のうちの 7、8 日目が Trayastriṁśa-Stoma を用いる日であると思われる。つまり、1 日目から 6 日目の間で詩節数が増え、9 日目から 14 日目の間に詩節数が減る。

Prajāpati は天界へ行った。彼に続いて神々が行った。彼らに続いて Āditya たちと家畜たちが行った。そのとき神々は言った。『我々が頼って生きてきたこの家畜たちがついてきた』と。彼らはそれらの家畜のためにこの Caturdaśarātra を追加した。そのとき Āditya たちは Pr̥ṣṭha（稜線）たちを辿って天界へ昇った。2 つの 3 日によってこの世界において家畜たちを追加した。Pr̥ṣṭha たちによって Āditya たちはあの世界において成功した。2 つの 3 日によってこの世界において家畜たちが成功した。このように知って Caturdaśarātra を行っている者たちは両世界において成功していることになる、この世界とあの世界で。光、牛、命が 3 日である。光はこの大地、牛は中空、命はあの太陽。彼らはこの 3 つの世界に向かって昇っていることになる。Pr̥ṣṭha たちが片側にしかないなら、均衡を欠いてしまうだろう。Pr̥ṣṭha たちは中間にある。均衡を保つために。Pr̥ṣṭha たちは力、英雄的な力である。彼らは自分の力、英雄的な力を中間に置いていることになる。彼らは Bṛhat と Rathaṃtara とともに進んでいく。Rathaṃtara はこの大地、Bṛhat はあの太陽。彼らはこの 2 つとともに進んでいることになる。そしてまたこの 2 つの上にしっかりと立っていることになる。この 2 つは祭式へとまっすぐ進む道である。彼らはその 2 つを通って天界へ進んでいることになる。あちら側を向いた Pr̥ṣṭha たちを行う者たちはあちら側を向きながら天界に向かって昇る。3 日はこちらがわを向いている。戻ってくるために。そしてまたしっかりと立つために。両世界において成功した後、彼らは立ち上がる。これらの夜は 14 ある。それら（14 夜）のうちの 10 は 10 音節からなる Virāj である。Virāj は食べ物である。Virāj によって食べ物を彼らは得ていることになる。4 というのは 4 つの方位である。彼らは方位たちの上にしっかりと立っていることになる。2 つの Atirātra が両側で用いられる。取り囲むために。

TS 7.3.6: Indra による Pañcadaśarātra の開催

(7.3.6.1) índro vái sad̥ṅ devátābhir āsīt. sá ná vyāv̥ṛtam agachat. sá prajā́patim úpādhāvat. tásmā etám pañcadaśarātrám pā́yachat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sò ’nyā́bhir devátābhir vyāv̥ṛtam agachad. yá evā́ṃ vidvā́m̐saḥ pañcadaśarātrám ā́sate, vyāv̥ṛtam evá pāpmánā bhrā́tṛvyeṇa gachanti. jyótir gáur ā́yur íti tryahó bhavati=. iyā́ṃ vā́vá jyótir, antárikṣam //(7.3.6.2) gáur, asā́v ā́yur. eṣv èvá lokéṣu prátitiṣṭhanty. ásattraṃ vā́ etád, yád achandomā́ṃ. yác chandomā́ bhávanti, téna sattrā́ṃ. devátā evá pr̥ṣṭháir ávarundhate. paśū́ñ chandomáir. ójo vái vīryàm pr̥ṣṭhā́ni. paśávaś chandomā́. ójasy evá vīryè paśúṣu prátitiṣṭhanti. pañcadaśarātró bhavati. pañcadaśó vájro. vájram evá bhrā́tṛvyebhyaḥ práharanty. atirātrā́v abhíto bhavata. indriyásya párigr̥hītyai. //

Indra は神格たちと同じようなものであった。彼は区別されていなかった。彼は（助けを求めて）Prajāpati に駆け寄った。彼は彼にこの Pañcadaśarātra を与えた。それを取ってきた。それを使って祭った。それから彼は他の神々から区別された。このように知って Pañcadaśarātra を行っている者たちは悪、敵対者から区別されることになる。光はこの［大地］である。牛は中空である。命はあの［太陽］である。彼らはこの［3 つの］世界の上にしっかりと立っていることになる。Chandoma のないものは Sattra ではない。Chandoma たちがあるということ、それによって Sattra が［成り立つ］。彼らは神格たちを Pr̥ṣṭha たちによって得ていることになる。家畜たちを Chandoma たちによって。

Pr̥ṣṭha たちは力、英雄的な力である。Chandoma たちは家畜たちである。彼らは力、英雄的な力の上に、家畜たちの上にしっかりと立っていることになる。Pañcadaśarātra が行われる。Vajra は 15 からなる。彼らは Vajra を敵対者たちに投げつけていることになる。2 つの Atirātra が両側で行われる。Indra 力を取り囲むために。

TS 7.3.7: Indra が Pañcadaśarātra を Vajra として Asura たちを打ち負かした神話

(7.3.7.1) índro vái śithilá ivā́pratiṣṭhita āsīt. só ’surebhyo ’bibhet. sá prajā́patim úpādhāvat. tásmā etám pañcadaśarātrám vájram prā́yachat. ténā́surān parābhā́vya vijítya śríyam agachad. agniṣṭútā pāpmā́nam níradahata. pañcadaśarātréṇáujo bálam indriyáṃ vīryàm ātmánn adhatta. yá eváṃ vidvā́ṁsaḥ pañcadaśarātrám ā́sate, bhrā́tr̥vyān evá parābhā́vya vijítya śríyaṃ gachanty. agniṣṭútā pāpmā́naṃ níḥ // (7.3.7.2) dahante. pañcadaśarātréṇáujo bálam indriyáṃ vīryàm ātmán dadhata. etā́ evá paśavyā̀ḥ. páñcadaśa vā́ ardhamā́sasya rā́trayo. ’rdhamāsaśáḥ saṃvatsará āpyate. saṃvatsarám paśávó ’nu prájāyante. tásmāt paśavyā̀. etā́ evá suvargyā̀ḥ. páñcadaśa vā́ ardhamāsásya rā́trayo. ’rdhamāsaśáḥ saṃvatsará āpyate. saṃvatsaráḥ suvargó lokás. tásmād suvargyā̀. jyótir gáur ā́yur íti tryahó bhavati=. iyáṃ vā́vá jyótir, antárikṣam // (7.3.7.3) gáur, asā́v ā́yur. imā́n evá lokā́n abhyā́rohanti. yád anyátaḥ pr̥ṣṭhā́ni syúr, vívivadhaṁ syān. mádhye pr̥ṣṭhā́ni bhavanti. savivadhatvā́ya=. ójo vái vīryàm pr̥ṣṭhā́ny. ója evá vīryàm madhyató dadhate. bṛhadrathaṃtarā́bhyāṃ yanti=. iyáṃ vā́vá rathaṃtarám, asáu bṛhád. ābhyā́m evá yanty. átho, anáyor evá prátitiṣṭhany. eté vái yajñásyāñjasā́yanī srutī́. tā́bhyām evá suvargáṃ lokám // (7.3.7.4) yanti. párāñco vā́ eté suvargáṃ lokám abhyā́rohanti, yé parācī́nāni pr̥ṣṭhā́ny upayánti. pratyáṅ tryahó bhavati. pratyávarūḍhyā. átho prátiṣṭhiyā. ubháyor lokáyor r̥ddhvóttiṣṭhanti. páñcadaśaitā́s. tā́sāṃ yā́ dáśa, dáśākṣarā virā́ḍ. ánnaṃ virā́ḍ. virā́jaivā́nnā́dyam ávarundhate. yā́ḥ páñca, pañca díśo. dikṣv èvá prátitiṣṭhanty. atirātrā́v abhíto bhavata. indriyásya vīryàsya prajā́yai paśūnā́m párigr̥hītyai. //

Indra はゆるんでいて、不安定であるかのようだった。彼は Asura たちを恐れていた。彼は［助けを求めて］Prajāpati に駆け寄った。彼は彼にこの Pañcadaśarātra を Vajra として与えた。彼はそれを使って Asura たちを負けさせてから、打ち負かしてから、繁栄に達した。彼は Agniṣṭut によって自分のために悪を焼き尽くした。Pañcadaśarātra によって筋力、腕力、Indra 力、英雄的な力を、自分に置いた。このように知って Pañcadaśarātra を行っている者たちは敵たち者たちを負けさせてから、打ち負かしてから、繁栄に達していることになる。彼らは Agniṣṭut によって自分たちのために悪を焼き尽くしていることになる。彼らは Pañcadaśarātra によって筋力、腕力、Indra 力、英雄的な力を、自分に置いていることになる。これら（15 夜）は家畜に属する。（一つの）半月には夜が 15 ある。一年は半月ずつ満たされる。一年に続いて家畜たちが繁殖する。それゆえ［15 夜は］家畜に属する。これら（15 夜）は天に属する。半月には夜が 15 ある。一年は半月ずつ満たされる。一年は天界である。それゆえ［15 夜は］天界である。Jyotis, Go, Āyus が 3 日［祭］として用いられる。光はこの［大地］である。牛は中空である。命はあの［太陽］である。彼らはこの［3 つ］世界に向かって昇っていることになる。Pr̥ṣṭha たちが片側にしかないと、均衡を失ってしまうだろう。Pr̥ṣṭha たちは中間にある。均衡を保つために。Pr̥ṣṭha たちは筋力、英雄的な力である。彼らは自分の筋力、英雄的な力を中間に置いていることになる。Bṛhat と Rathaṃtara とともに彼らは進む。Rathaṃtara はこの［大地］なのだ。Bṛhat はあの［太陽］なのだ。彼らはこの 2 つとと

もに進んでいることになる。そしてまたこの 2 つの上に彼らはしっかりと立っていることになる。この 2 つは祭式にまっすぐ行く道なのだ。彼らはその 2 つとともに天界へ進んでいることになる。あちら側を向いた Pṛṣṭha たちを執り行っている者たちはあちら側を向きながら天界に向かって昇っていることになる。3 日［祭］はこちら側を向いている。（天界から）降りて戻ってくるために。そしてまたしっかりと立つために。彼らは両世界において栄えてから(祭式を)終える。これら（夜）は 15 ある。それらのうちの 10 は 10 音節からなる Virāj である。Virāj は食べ物である。彼らは Virāj によって食べ物を得ていることになる。5 つの［夜］は 5 つの方位である。彼らは方位たちの上にしっかりと立っていることになる。2 つの Atirātra が両側で行われる。Indra 力を、英雄的な力を、子孫を、家畜たちを取り囲むために。

TS 7.3.8: Saptadaśarātra

(7.3.8.1) prajā́patir akāmayata=, "annādáḥ syām" íti. sá etáṁ saptadaśarātrám apaśyat. tám áharat. ténāyajata. táto vái sò ’nnādò ’bhavad. yá eváṃ vidvā́ṁsaḥ saptadaśarātrám ā́sate, ’nnādā́ evá bhavanti. pañcāhó bhavati. páñca vā́ ṛtávaḥ saṃvatsará. ṛtúṣv evá saṃvatsaré prátitiṣṭhanty. átho páñcākṣarā paṅktíḥ. pā́ṅkto yajñó. yájñam evā́varundhaté. ’sattraṃ vā́ etát // (7.3.8.2) yád achandomā́ṃ. yác chandomā́ bhávanti, téna sattrā́ṃ. devátā evá pṛṣṭháir ávarundhate, paśū́ñ chandomáir. ójo vái vīryàṃ pṛṣṭhā́ni, paśávaś chandomā́. ójasy evá vīryè paśúṣu prátitiṣṭhanti. saptadaśarātró bhavati. saptadaśáḥ prajā́patiḥ. prajā́pater ā́ptyā. atirātrā́v abhíto bhavato. ’nnā́dyasya párigṛhītyai. //

Prajāpati は望んだ。「食べ物を食べる者になりたい」と。彼はこの Saptadaśarātra を見た。それを取ってきた。それを使って祭った。それから彼は食べ物を食べる者になった。このように知って Saptadaśarātra を行っている者たちは食べ物を食べる者たちになっていることになる。5 つの日からなる［祭式］が用いられる。一年は 5 つの季節である。彼らは季節たちの上に、一年の上に立っていることになる。そしてまた 5 音節からなる Paṅkti が用いられる。祭式は 5 つからなる。彼らは祭式を得ていることになる。Chandoma のないものは Sattra ではないのだ。Chandoma たちがあるということ、それによって Sattra が［成り立つ］。彼らは神格たちを Pṛṣṭha たちによって得ていることになる。家畜たちを Chandoma たちによって。Pṛṣṭha たちは筋力、英雄的な力なのだ。Chandoma たちは家畜たちなのだ。彼らは筋力、英雄的な力、家畜たちの上にしっかりと立っていることになる。17 の夜からなる［祭式］が用いられる。Prajāpati は 17 からなる。Prajāpati に到達するために。2 つの Atirātra が両側で用いられる。食べ物を取り囲むために。

TS 7.3.9: Viṃśatirātra

(7.3.9.1) sā́ virā́ḍ vikrámyātiṣṭhad bráhmaṇā devéṣv ánnenā́sureṣu. té devā́ akāmayanta=, "ubháyaṁ sáṃvṛñjīmahi, bráhma cā́nnaṃ ca=" íti. tá etā́ viṁśatíṁ rā́trīr apaśyan. táto vái tá ubháyaṁ sámavṛñjata, bráhma cā́nnaṃ ca, brahmavarcasíno ’nnādā́ abhavan. yá eváṃ vidvā́ṁsa etā́ ā́sata, ubháyam evá sáṃvṛñjate, bráhma cā́nnaṃ ca, // (7.3.9.2) brahmavarcasíno ’nnādā́ bhavanti. dvé vā́ eté virā́jau. táyor evá nā́nā prátitiṣṭhanti. viṁśó vái púruṣo dáśa hástyā aṅgúlayo dáśa padyā. yā́vān evá púruṣas tám āptvóttiṣṭhanti. jyótir gáur ā́yur íti tryahā́ bhavanti=. iyáṃ vā́vá jyótir antárikṣaṃ gáur asā́v ā́yur. imā́n evá lokā́n abhyā́rohanty. abhipūrváṃ tryahā́

bhavanty. abhipūrvám evá suvargám // (7.3.9.3) lokám abhyā́rohanti. yád anyátaḥ pr̥ṣṭhā́ni syúr, vívivadhaṁ syān. mádhye pr̥ṣṭhā́ni bhavanti. savivadhatvā́ya. // ójo vái vīryàm pr̥ṣṭhā́ny. ója evá vīryàm madhyató dadhate. bṛhadrathaṃtarā́bhyāṃ yanti=. iyáṃ vā́vá rathaṃtarám, asáu bṛhád. ābhyā́m evá yanty. átho, anáyor evá prátitiṣṭhany. eté vái yajñásyāñjasā́yanī srutī́. tā́bhyām evá suvargáṃ lokáṃ yanti. párāñco vā́ eté suvargáṃ lokám abhyā́rohanti, yé parācī́nāni pr̥ṣṭhā́ny upayánti. pratyáñ tryahó bhavati. pratyávarūḍhyā. átho prátiṣṭhiyā. ubháyor lokáyor r̥ddhvóttiṣṭhanty. atirātrā́v abhíto bhavato. brahmavarcasásyānnā́dyasya párigr̥hītyai. //

その Virāj は分裂して、Brahman によって神々の間に、食べ物によって Asura たちの間に留まった。その神々は望んだ。「我々は両方とも自分たちのものにしたい、Brahman も食べ物も」と。彼らはそのようなこれら 20 の夜たちを見た。それから彼らは両方とも自分たちのものにした、Brahman も食べ物も。彼らは Brahman の威光をもつ者たち、食べ物を食べる者たちになった。このように知ってこれら（夜）の間［Sattra を］行っている者たちは両方とも自分たちのものにしていることになる、Brahman も食べ物も。これら Virāj は 2 つある。その 2 つの上に様々な者たちがしっかり立っていることになる。人間は 20［の部分］からなる。手の指は 10 本ある。足の［指］は 10 本ある。それくらいの人間へと到達して、彼らは（祭式を）終えていることになる。Jyotis, Go, Āyus が Tryaha として用いられる。Jyotis はこの［大地］なのだ。Go は中空なのだ。Āyus はあの［太陽］なのだ。彼らはこの世界たちに向かって昇っていくことになる。順当に Tryaha たちが用いられる。順当に彼らは天界に向かって昇っていくことになる。片側にしか Pr̥ṣṭha たちがないと、均衡を欠いてしまうだろう。中間に Pr̥ṣṭha たちが用いられる。均衡を保つために。Pr̥ṣṭha たちは筋力、英雄的な力なのだ。彼らは筋力、英雄的な力を中間に置いていることになる。Bṛhat と Rathaṃtara とともに彼らは進んでいる。Rathaṃtara はこの［大地］なのだ。Bṛhat はあの［太陽］なのだ。彼らはこの 2 つとともに進んでいることになる。そしてまたこの 2 つの上に立っていることになる。この 2 つは祭式にまっすぐ進む道なのだ。彼らはその 2 つとともに天界に進んでいることになる。あちらを向いた Pr̥ṣṭha たちを執り行っている者たちはあちら側を向きながら天界に向かって昇っているのだ。逆向きの Tryaha が一回用いられる。（天界から）降りて戻ってくるために。そしてまたしっかりと立つために。両世界において栄えてから彼らは（祭式を）終える。2 つの Atirātra が両側で用いられる。Brahman の威光を、食べ物を包囲するために。

TS 7.3.10: Ekaviṁśatirātra

(7.3.10.1) asā́v ādityò ’smíṁ loká āsīt. táṃ devā́ḥ pr̥ṣṭháiḥ parigŕ̥hya suvargáṃ lokám agamayan. párair avástāt páryagr̥hṇan. divākīrtyèna suvargé loké prátyasthāpayan. páraiḥ parástāt páryagr̥hṇan pr̥ṣṭháir upā́vārohant. sá vā́ asā́v ādityò ’múṣmiṁ loké párair ubhayátaḥ párigr̥hīto. yát pr̥ṣṭhā́ni bhávanti, suvargám evá táir lokáṃ yájamānā yanti. párair avástāt párigr̥hṇanti. divākīrtyèna // (7.3.10.2) suvargé loké prátitiṣṭhanti. páraiḥ parástāt párigr̥hṇanti pr̥ṣṭháir upā́varohanti. yát páre parástān ná syúḥ, párāñcaḥ suvargā́l lokā́n níṣpadyeran. yád avástān ná syúḥ, prajā́ nírdaheyur. abhíto divākīrtyàm páraḥsāmāno bhavanti. suvargá eváināṁ loká ubhayátaḥ párigr̥hṇanti. yájamānā vái divākīrtyàṃ. saṃvatsaráḥ páraḥsāmāno. ’bhíto divākīrtyàm páraḥsāmāno bhavanti. saṃvatsará evóbhayátaḥ // (7.3.10.3) prátitiṣṭhanti. pr̥ṣṭháṃ vái divākīrtyàm pārśvé páraḥsāmāno. ’bhíto divākīrtyàm páraḥsāmāno bhavanti. tásmād abhítaḥ pr̥ṣṭhám pārśvé. bhū́yiṣṭhā gráhā gr̥hyante. bhū́yiṣṭhaṁ śasyate. yajñásyaivá tán madhyató granthíṃ grathnanty. ávisraṁsāya. saptá gr̥hyante. saptá vái śīrṣaṇyā̀ḥ prāṇā́ḥ. prāṇā́n evá

yájamāneṣu dadhati. yát parācī́nāni pr̥ṣṭhā́ni bhávanty, amúm evá táir lokám abhyā́rohanti. yád imáṃ lokáṃ ná // (7.3.10.4) pratyavaróheyur, úd vā mā́dyeyur, yájamānāḥ prá vā mīyeran. yát pratīcī́nāni pr̥ṣṭhā́ni bhávanti=, imám evá táir lokám pratyávarohanty. átho, asmínn evá loké prátitiṣṭhanty. ánunmādāya=. índro vā́ ápratiṣṭhita āsīt. sá prajā́patim úpādhāvat. tásmā etám ekaviṁśatirātrám prā́yachat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sá prátyatiṣṭhad. yé bahuyājínó ’pratiṣṭhitāḥ // (7.3.10.5) syús, tá ekaviṁśatirātrám āsīran. dvā́daśa mā́sāḥ páñcartávas, tráya imé lokā́, asā́v ādityá ekaviṁśá. etā́vanto vái devalokā́s. téṣv evá yathāpūrvám prátitiṣṭhanty. asā́v ādityó ná vyàrocata. sá prajā́patim úpādhāvat. tásmā etám ekaviṁśatirātrám prā́yachat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái sò ’rocata. yá evā́ṃ vidvā́ṁsa ekaviṁśatirātrám ā́sate, rócanta evá=. ekviṁśatirātró bhavati. rúg vā́ ekaviṁśó. rúcam evá gachanty. átho, pratiṣṭhā́m evá. pratiṣṭhā́ hy èkaviṁśó. ’tirātrā́v abhíto bhavato. brahmavarcasásya párigr̥hītyai. //

あの（天上の）太陽はこの（地上の）世界にあった。それを神々は Pr̥ṣṭha たちによって取り囲んでから天界へ行かせた。Para［-Sāman］たちによって下から彼らは取り囲んだ。Divākīrtya［-Sāman］によって天界においてしっかりと立たせた。Para［-Sāman］たちによって上から彼らは取り囲んだ。Pr̥ṣṭha たちによって下へ降りた。そのようなあの太陽はこの世界において Para たちによって両方から取り囲まれている。Pr̥ṣṭha たちがあるなら、天界へそれらを使って祭主たちは進んでいることになる。Para たちによって下から彼らは取り囲む。Divākīrtya によって彼らは天界においてしっかりと立つ。Para たちによって彼らは上から取り囲む。Pr̥ṣṭha たちによって彼らは下へ降りた。Para たちが上にないと、あちらに向いた者たちが天界から足を踏み出してしまうだろう。［Para たちが］下にないと、生き物たちを焼き尽くしてしまうだろう。Divākīrtya の両側で Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちが用いられる。彼らはそれらを天界において両方から取り囲んでいることになる。Divākīrtya は祭主たちなのだ。Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちは一年なのだ。Divākīrtya の両側で Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちが用いられる。彼らは一年の上に両方からしっかりと立っていることになる。Divākīrtya は背（山頂）なのだ。Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちは両脇（山の両側面）なのだ。Divākīrtya の両側で Paras-Sāman を用いる［Stoma］たちが用いられる。それゆえ背の両側に両脇がある。最大数の Graha たちが［Soma を］汲まれる。最大数の Śastra が唱えられる。彼らはそうして祭式の中間に結び目を結んでいることになる。緩んで落ちないように。7 つの［Graha］たちが汲まれる。頭にある身体諸機能は 7 つある。彼らは息たちを祭主たちに置いていることになる。あちら側を向いた Pr̥ṣṭha たちが用いられているなら、彼らはそれらによってあの世界に向かって昇っていることになる。彼らがこの世界へ降りて戻らないなら、祭主たちは狂ってしまうか、衰弱してしまうだろう。こちら側を向いた Pr̥ṣṭha たちが用いられているなら、彼らはそれらによってこの世界に降りて戻っていることになる。そしてまたこの世界において彼らはしっかりと立っていることになる。狂わないように。Indra は不安定であったのだ。彼は Prajāpati のもとに駆け寄った。彼は彼に Ekaviṃśatirātra を与えた。彼はそれを取ってきた。それを使って祭った。それから彼はしっかりと立ったのだ。多く祭式を行うものの不安定な者たちは Ekaviṃśatirātra を行うべきである。月は 12 ある。季節は 5 つある。この世界たちは 3 つある。21 番目はあの太陽である。神々の世界たちはこれくらい多くある。彼らは順序に沿ってしっかりと立っていることになる。あの太陽は輝いていなかった。彼は Prajāpati のもとへ駆け寄った。彼は彼にこの Ekaviṃśatirātra を与えた。彼はそれを取っ

てきた。それを使って祭った。それから彼は輝いたのだ。このように知って Ekaviṃśatirātra を行っている者は輝いていることになる。Ekaviṃśatirātra が用いられる。Ekaviṃśa[-Stoma] (17) は輝きである。彼らは輝きに達していることになる。そしてまた安定に［達している］ことになる。というのも Ekaviṃśa[-Stoma] (17) は安定であるから。2 つの Atirātra が両側で用いられる。Brahman の威光を取り囲むために。

TS 7.4（≈JB 2.355−358; 365−367; PB 23.21−28; 24.1−17）

TS 7.4.1: Caturviṃśarātra

(7.4.1.1) bṛ̥haspátir akāmayata, "śrán me devā́ dádhīran gácheyam purodhā́m" íti. sá etáṃ caturviṁśatirātrám apaśyat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái tásmai śrád devā́ ádadhatā́gachat purodhā́ṃ. yá eváṃ vidvā́ṁsaś caturviṁśatirātrám ā́sate, śrád ebhyo manuṣyā̀ dadhate, gáchanti purodhā́ṃ. jyótir gáur ā́yur íti tryahā́ bhavanti=. iyáṃ vā́vá jyótir, antárikṣaṃ gáur, asā́v ā́yuḥ. // (7.4.1.2) imā́n evá lokā́n abhyā́rohanty. abhipūrváṃ tryahā́ bhavanty. abhipūrvám evá suvargáṃ lokám abhyā́rohanty. ásattraṃ vā́ etád, yád achandomáṃ. yác chandomā́ bhávanti, téna sattráṃ. devátā evá pṛ̥ṣṭháir ávarundhate paśū́ñ chandomáir. ójo vái vīryàṃ pṛ̥ṣṭhā́ni, paśávaś chandomā́. ójasy evá vīryè paśúṣu prátitiṣṭhanti. bṛ̥hadrathaṃtarā́bhyāṃ yanti=. iyáṃ vā́vá rathaṃtarám, asáu bṛ̥hád. ābhyā́m evá // (7.4.1.3) yanty. átho, anáyor evá prátitiṣṭhanty. eté vái yajñásyāñjasā́yanī srutī́. tā́bhyām evá suvargáṃ lokáṃ yanti. caturviṁśatirātró bhavati. cáturviṁśatir ardhamāsā́ḥ saṃvatsaráḥ. saṃvatsaráḥ suvargó lokáḥ. saṃvatsará evá suvargé loké prátitiṣṭhanty. átho cáturviṁśatyakṣarā gāyatrī́, gāyatrī́ brahmavarcasáṃ. gāyatriyáivá brahmavarcasám ávarundhate. ’tirātrā́v abhíto bhavato. brahmavarcasásya párigṛ̥hītyai. //

Bṛ̥haspati は望んだ。「神々が私に信（śrád-）を置きますように（opt.）。私は Purohita（筆頭祭官）になりたい」と。彼はこの Caturviṃśarātra を見た。それを取ってきた。それを使って祭った。それから神々は彼に信を置いて、彼は Purohita になった。このように知って Caturviṃśarātra を座る者たちに人間たちは信を置いていることになる。彼らは Purohita になっていることになる。Jyotis、Go、Āyus という 3 つの日からなる［祭式］たちが用いられる。光（jyotis-）はこの［大地］なのだ。牛（go-）は中空なのだ。命（āyus-）はあの［太陽］なのだ。彼らはこの世界たちに向かって昇っていることになる。順当に 3 つの日からなる［祭式］たちが用いられる。順当に彼らは天界に向かって昇っていることになる。Chandoma のないものは Sattra ではない。Chandoma があるということ。それによって Sattra が［成り立つ］。神格たちを Pṛ̥ṣṭha たちによって得ていることになる。家畜たちを Chandoma たちによって。Pṛ̥ṣṭha たちは筋力、英雄的な力なのだ。Chandoma たちは家畜たちである。彼らは筋力、英雄的な力、家畜たちにおいてしっかりと立っていることになる。Bṛ̥hat と Rathaṃtara によって彼らは進む。Rathaṃtara はこの［大地］なのだ。Bṛ̥hat はあの［太陽］なのだ。この 2 つによって彼らは進んでいることになる。そしてまた彼らはこの 2 つにおいてしっかりと立っていることになる。この 2 つは祭式にまっすぐ進む道である。その 2 つによって彼らは天界へ進んでいることになる。24 夜が用いられる。一年は 24 の半月たちである。天界は一年である。彼らは一年において、天界においてしっかりと立っていることになる。そしてまた 24 音節からなる Gāyatrī が用いられる。Brahman の威光は Gāyatrī である。彼らは Gāyatrī によ

って Brahman の威光を得ていることになる。2 つの Atirātra が両側で用いられる。Brahman の威光を取り囲むために。

TS 7.4.2: 第 2 の Caturviṃśarātra

(7.4.2.1) yáthā vái manuṣyà, eváṃ devā́ ágra āsan. tè ’kāmayanta=, "ávartim pāpmā́nam mṛ̥tyúm apahátya dáivīṁ saṁsádaṃ gachema=" íti. tá etáṃ caturviṁśatirātrám apaśyan. tám ā́haran. ténāyajanta. táto vái té ’vartim pāpmā́nam mṛ̥tyúm apahátya dáivīṁ saṁsádam agachan. yá eváṃ vidvā́ṁsaś caturviṁśatirātrám ā́saté, ’vartim evá pāpmā́nam apahátya śríyaṃ gachanti. śrī́r hí manuṣyàsya, // (7.4.2.2) dáivī saṁsáj. jyótir atirātró bhavati. suvargásya lokásyā́nukhyātyai. pṛ́ṣṭhyaḥ ṣaḍahó bhavati. ṣáḍ vā́ ṛ̥távaḥ saṃvatsarás. tám mā́sā ardhamāsā́ ṛ̥távaḥ pravíśya dáivīṁ saṁsádam agachan. yá eváṃ vidvā́ṁsaś caturviṁśatirātrám ā́sate, saṃvatsarám evá pravíśya vásyasīṁ saṁsádaṃ gachanti. tráyas trayastriṁśā́ avástād bhavanti, tráyas trayastriṁśā́ḥ parástāt. trayastriṁśair evóbhavayátó ’vartim pāpmā́nam apahátya dáivīṁ saṁsádam madhyatáḥ // (7.4.2.3) gachanti. pṛ́ṣṭhā́ni hí dáivī saṁsáj. jāmí vā́ etát kurvanti, yát tráyas trayastriṁśā́ anvā́ñco. mádhyé ’nirukto bhavati. ténā́jāmy. ūrdhvā́ni pṛ̥ṣṭhā́ni bhavanty. ūrdhvā́ś chandomā́. ubhā́bhyāṁ rūpā́bhyāṁ suvargáṃ lokáṃ yanty. ásattraṃ vā́ etád, yád achandomáṃ. yác chandomā́ bhávanti, téna sattráṃ. devátā evá pṛ̥ṣṭháir ávarundhate, paśū́ñ chandomáir. ójo vái vīryàm pṛ̥ṣṭhā́ni, paśávaḥ // (7.4.2.4) chandomā́. ójasy evá vīryè paśúṣu prátitiṣṭhanti. tráyas trayastriṁśā́ avástād bhavanti. tráyas trayastriṁśā́ḥ parástān mádhye pṛ̥ṣṭhā́ny. úro vái trayastriṁśā́ ātmā́ pṛ̥ṣṭhā́ny. ātmána evá tád yájamānāḥ śárma nahyanté. ’nārtyai. bṛ̥hadrathaṃtarā́bhyāṃ yanti=. iyáṃ vā́vá rathaṃtarám, asáu bṛ̥had. ābhyā́m evá yanty. átho, anáyor evá práti tiṣṭhanty. eté vái yajñásyāñjasā́yanī srutī́. tā́bhyām evá // (7.4.2.5) suvargáṃ lokáṃ yanti. párāñco vā́ eté suvargáṃ lokám abhyā́rohanti, yé parācī́nāni pṛ̥ṣṭhā́ny upayánti. pratyáṅ ṣaḍahó bhavati. pratyávarūḍhyā. átho prátiṣṭhityā. ubháyor lokáyor ṛddhvóttiṣṭhanti. trivṛ̥tó ’dhi trivṛ̥tam úpayanti. stómānāṁ sámpattyai. prabhavā́ya. jyótir agniṣṭomó bhavaty. ayáṃ vā́vá sá kṣáyo. ’smā́d evá téna kṣáyān ná yanti. caturviṁśatirātró bhavati. cáturviṁśatir ardhamāsā́ḥ saṃvatsaráḥ. saṃvatsaráḥ suvargó lokáḥ. saṃvatsará evá suvargé loké prátitiṣṭhanty. átho cáturviṁśatyakṣarā gāyatrī́. gāyatrī́ brahmavarcasáṃ. gāyatriyáivá brahmavarcasám ávarundhate. ’tirātrā́v abhíto bhavato. brahmavarcasásya párigṛ̥hītyai. //

神々は太初において人間たちと同様であった。彼らは望んだ、「不運、悪、死を打ち払って、我々は神々の集まりの席へ行きたい」と。彼らはこの 24 夜を見た。それを取ってきた。それを使って祭った。それから彼らは不運、悪、死を打ち払って、彼らは神々の集まりの席へ行った。このように知って 24 夜の間座る者たちは、不運、悪を打ち払って、栄華に達していることになる。というのも人間にとって神々の集まりの席が栄華であるから。Jyotis が Atirātra として用いられる。天界をみつけるために。6 つの日からなる Pṛ̥ṣṭha 儀礼が用いられる。一年は 6 季節である。それに月たち、半月たち、季節たちが入り込んで、神々の集会へ行った。このように知って 24 夜の間座る者たちは一年に入り込んでよりよい集まりの席に達していることになる。3 つの 33［Stoma］が下から用いられる。3 つの 33［Stoma］が上で用いられる。33［Stoma］たちによって両方から不運、悪を打ち払って、神々の集まりの席に中間で達していることになる。というのも神々の集まりの席は Pṛ̥ṣṭha たちであるから。3 つの 33［Stoma］が継続してあるということで彼らは同種のものの結合を作っているのだ。中間に［神格名が］はっきりと言われない［Stoma］が用いられる。それによって同種のものの非結合を［彼らは作っている］。上向きの Pṛ̥ṣṭha たちが用いられる。上向きの Chandoma たちが用いられる。両方の形式によって彼らは天界へ行く。Chandoma のないものは Sattra ではないのだ。Chandoma たちがあるということ。それによって Sattra が［成り立つ］。彼らは神格たちを Pṛ̥ṣṭha たちによって得ていることになる。家畜たちを Chandoma たちによって。

Pr̥ṣṭha たちは筋力、英雄的な力なのだ。彼らは筋力、英雄的な力、家畜たちにおいてしっかりと立っていることになる。3 つの Trayastriṃśa［-Stoma］が下から用いられる。3 つの 33［Stoma］が上から用いられる。Pr̥ṣṭha たちが真ん中で用いられる。Trayastriṃśa［Stoma］は胸なのだ。Pr̥ṣṭha たちは胴体なのだ。そうして祭主たちは胴体のための鎧を纏っていることになる。不運がないように。Bṛhat と Rathaṃtara によって彼らは進む。Rathaṃtara はこの［大地］なのだ。Bṛhat はあの［太陽］なのだ。この 2 つによって彼らは進んでいることになる。そしてまたこの 2 つにおいて彼らはしっかりと立っていることになる。この 2 つは祭式にまっすぐ進む道である。その 2 つによって彼らは天界に進んでいることになる。あちら側を向いた Pr̥ṣṭha たちを執り行う者たちは、あちら側を向きながら天界に向かって登っていくのだ。6 つの日は逆向きになっている。（天界から地上へ）降りて戻ってくるために。そしてまたしっかりと立つために。両方の世界で成功してから彼らは［Sattra から］立ち上がる。Trivr̥t[-Stoma] (9) から Trivr̥t[-Stoma] (9) へ彼らは行く。Stoma たちを合計して［なんらかの数を］得るために。卓越のために。Jyotis が Agniṣṭoma として用いられる。それはこの住処である。それによってこの住処から彼らは出ていっていないことになる。Caturviṃśarātra が用いられる。一年は 24 の半月たちである。天界は一年である。一年の上に、天界の上に彼らはしっかりと立っていることになる。そしてまた 24 音節からなる Gāyatrī が用いられる。Brahman の威光は Gāyatrī である。Gāyatrī によって Brahman の威光を彼らは得ていることになる。2 つの Atirātra が両側で用いられる。Brahman の威光を取り囲むために。

TS 7.4.3: Triṃśadrātra

(7.4.3.1) r̥kṣā́ vā́ iyám alomákāsīt. sā́kāmayata=, "óṣadhībhir vánaspátibhiḥ prájāyeya=" íti. sáitā́s triṁśátaṁ rā́trīr apaśyat. táto vā́ iyám óṣadhībhir vánaspátibhiḥ prā́jāyata. yé prajā́kāmāḥ paśúkāmāḥ syús, tá etā́ āsīran. práivá jāyante prajáyā paśúbhir. iyáṃ vā́ akṣudhyat. sáitā́ṃ virā́jam apaśyat. tā́m ātmán dhitvā́nnā́dyam ávārunddháuṣadhīḥ // (7.4.3.2) vánaspátīn prajā́m paśū́n. ténāvardhata. sā́ jemā́nam mahimā́nam agachad. yá evā́ṃ vidvā́ṁsa etā́ ā́sate, virā́jam evā́tmán dhitvā́nnā́dyam ávarundhate. várdhante prajáyā paśubhir. jemā́nam mahimā́naṃ gachanti. jyótir atirātró bhavati. suvargásya lokásyā́nukhyātyai. pr̥ṣṭhyaḥ ṣaḍahó bhavati. ṣáḍ vā́ r̥távaḥ. ṣáṭ pr̥ṣṭhā́ni. pr̥ṣṭháir evártū́n anvā́rohanty, r̥túbhiḥ saṃvatsaráṃ. té saṃvatsará evá prátitiṣṭhanti.

この［大地］は禿げていて毛がなかったのだ。それは望んだ、「植物たちと林木たちを伴って私は繁殖したい」と。それはこの 30 の夜たちを見た。それからこの［大地］は植物たちと材木たちを伴って繁殖したのだ。子孫を望み家畜を望むなら、その者たちはこの［30 の夜の］間座るべきである。彼らは子孫、家畜たちを伴って繁殖していることになる。この［大地］は飢えていたのだ。それはこの Virāj（10 の倍数）を見た。それ（Virāj）を自分に置いてから、彼は食べ物を得た、植物たち、林木たち、子孫、家畜たちを。それによって大きくなった。それは勝利に富む状態[462]、広大さに達した[463]。こ

[462] jemán- m. はヴェーダ散文（TS, MS など）において nom./acc.sg. として出てくることがある。RV 10.106.6 にある jémanā は jéman- n. の inst.sg. と解釈されうる。TS, PB ではもっぱら

のように知って、この［30 夜の］間座る者たちは Virāj を自分に置いてから、食べ物を得ていることになる。彼らは子孫と家畜たちによって大きくなる。彼らは勝利に富む状態、広大さに達する。Jyotis が Atirātra として用いられる。天界を見つけるために。Pr̥ṣṭha をもつ 6 日が用いられる。季節は 6 つなのだ。Pr̥ṣṭha は 6 つなのだ。彼らは山頂たちを通って季節たちに向かって登っていることになる。彼らは一年の上にしっかりと立っていることになる。

(7.4.3.3) trayastriṁśā́t trayastriṁśám úpayanti. yajñásya sáṃtatyā. átho, prajā́patir vái trayastriṁśáḥ. prajā́patim evā́ rabhante. prátiṣṭhityai. triṇavó bhavati. víjityā. ekaviṁśó bhavati. prátiṣṭhityā. átho, rúcam evā́tmán dadhate. trivŕ̥d agniṣṭúd bhavati. pāpmā́nam evá téna nírdahanté. ’tho, téjo vái trivŕ̥t. téja evā́tmán dadhate.

33［Stoma］から 33［Stoma］へ彼らは行く。祭式を途絶えさせないために。そしてまた 33［Stoma］は Prajāpati なのだ。彼らは Prajāpati に到達していることになる。しっかりと立つために。27 の［詩節］からなる［Stoma］［Stoma］が用いられる。勝ち取るために。Ekaviṃśa[-Stoma] (17) が用いられる。しっかりと立つために。そしてまた輝きを彼らは自分に置いていることになる。Trivr̥t[-Stoma] (9) が Agniṣṭut（Agni への称賛）として用いられる。彼らは悪をそれによって焼き尽くしていることになる。そしてまた Trivr̥t[-Stoma] (9) は鋭い輝きである。彼らは鋭い輝きを自分に置いていることになる。

pañcadaśá indrastomó bhavati=. indriyám evā́va // (7.4.3.4) rundhate. saptadaśó bhavaty. annā́dyasyā́varuddhyā. átho, práivá téna jāyanta. ekaviṁśó bhavati. prátiṣṭhityā. átho rúcam evā́tmán dadhate. caturviṁśó bhavati. cáturviṁśatir ardhamāsā́ḥ saṃvatsaráḥ. saṃvatsaráḥ suvargó lokáḥ saṃvatsará evá suvargé loké prátitiṣṭhanty. átho, eṣá vái viṣūvā́n. viṣūvánto bhavanti, yá evā́ṃ vidvā́ṁsa etā́ ā́sate.

Pañcadaśa[-Stoma] (15) を用いる Indra-Stoma が開催される。Indra 力を彼らは得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17) が用いられる。食べ物を得るために。そしてまた彼らはそれによって繁殖していることになる。Ekaviṃśa[-Stoma] (17)が用いられる。しっかりと立つために。そしてまた彼らは輝きを自分に置いていることになる。Caturviṃśa[-Stoma] (24)が用いられる。一年は 24 の半月たちである。天界は一年である。一年、天

---

acc.sg. として動詞 gam と一緒に用いられる。特に jemā́nam mahimā́naṃ gam という定型句として現れる。他動詞である jay（「打ち負かす siegen, besiegen, ersiegen，勝ち取る gewinnen」）から自動詞的意味「勝利に富む/勝利を得る siegreich sein/werden」を引き出すことはできない。しかし、jemán- m.はこれと常に共に用いられる性質を表す男性の抽象名詞（Eigenschaftabstraktum）である mahimán- m. (「偉大さ，巨大さ，広大さ Größe，力 Macht」) に対する類推から，性質を表す男性の抽象名詞-mán- として機械的に形成された可能性がある。したがって、jemán- m. は「勝利」そのものではなく、「打ち負かすという性質（Eigenschaft zu siegen)、つまり，勝利に富んでいること（siegreich zu sein)」を意味している。 Schneider [2010: 135f] 参照。

[463] 「勝利に富む状態に達する」→「勝利を得る」というニュアンスの変化は、RV 1.116.2 jarimā́nam gam 「老年に至る、老いる」あるいは AB 4.26 paruṣimānam nay[i]「毛むくじゃらになる」と等置されうる。Schneider [2010: 137] 参照。

界において彼らはしっかりと立っていることになる。そしてまたこれは真ん中（祭式の折り返し点）である。このように知ってこの［30 夜の］間座る者たちは真ん中の者（祭式の折り返し点）になる。

caturviṁśā́t pr̥ṣṭhā́ny úpayanti. saṃvatsará evá pratiṣṭhā́ya // (7.4.3.5) devátā abhyā́rohanti. trayastriṁśā́t trayastriṁśám úpayanti. tráyastriṁśad vái devátā. devátāsv evá prátitiṣṭhanti. triṇavó bhavati=. imé vái lokā́s triṇavá. eṣv èvá lokéṣu prátitiṣṭhanti. dvā́v ekaviṁśáu bhavataḥ prátiṣṭhityā. átho, rúcam evā́tmán dadhate. bahávaḥ ṣoḍaśíno bhavanti. tásmād bahávaḥ prajā́su vr̥ṣāṇas.

Caturviṃśa[-Stoma] (24) から Pr̥ṣṭha（最高潮）たちへ彼らは行く。一年においてしっかりと立った後、神格たちに向かって登っていくことになる。Trayastriṃśa[-Stoma] (33) から Trayastriṃśa[-Stoma] (33)へ彼らは行く。神格たちは Trayastriṃśa[-Stoma] (33) である。神格たちにおいて彼らはしっかりと立っていることになる。27 の［詩節］からなる［Stoma］が用いられる。Triṇava[-Stoma] (27) はこの世界たちである。この世界たちにおいて彼らはしっかりと立っていることになる。2 つの Ekaviṃśa[-Stoma] (17)が用いられる。しっかりと立つために。そしてまた彼らは輝きを自分に置いていることになる。多くの Ṣoḍaśin（16）が用いられる。それゆえ生き物たちの中に多くの雄がいる。

yád eté stómā vyátiṣaktā bhávanti, tásmād iyám óṣadhībhir vánaspátibhir vyátiṣaktā. // (7.4.3.6) vyátiṣajyante prajáyā paśúbhir, yá evā́ṃ vidvā́ṁsa etā́ ā́saté. ’kl̥ptā vā́ eté suvargáṃ lokáṃ yanty. uccāvacā́n hí stómān upayánti. yád etá ūrdhvā́ḥ kl̥ptā́ stómā bhávanti, kl̥ptā́ evá suvargáṃ lokáṃ yanty. ubháyor ebhyo lokáyoḥ kalpate. triṁśád etā́s. triṁśádakṣarā virā́ḍ. ánnaṃ virā́ḍ. virā́jaivā́nnādyam ávarundhate. ’tirātrā́v abhíto bhavato. ’nnā́dyasya párigr̥hītyai.

これら Stoma たちが交差しているということ、それゆえこの［大地］は植物たち、林木たちと交差している。このように知ってこの［30 夜の］間座る者たちは子孫、家畜たちと交差している。整っていないこれらは天界へ行く。というのも彼らは上向きと下向きの Stoma たちを執り行うから。これら上方にある整った Stoma があるとき、整った者として彼らは天界へ行っていることになる。両方の世界において彼らのために整う。この［夜］たちは 30 ある。30 音節からなる Virāj が用いられる。Virāj は食べ物である。Virāj によって彼らは食べ物を得ていることになる。2 つの Atirātra が用いられる。食べ物を取り囲むために。

TS 7.4.4: Dvātriśaṃdrātra

(7.4.4.1) prajā́patiḥ suvargáṃ lokám ait. táṃ devā́ yénayena chándasā́nu prā́yuñjata. téna nā́pnuvan. tá etā́ dvā́triṁśataṁ rā́trīr apaśyan. dvā́triṁśadakṣarānuṣṭúg. ā́nuṣṭubhaḥ prajā́patiḥ. svénaivá chándasā prajā́patim ā́ptvā́bhyārúhya suvargáṃ lokám āyan, yá evā́ṃ vidvā́ṁsa etā́ ā́sate. dvā́triṁśad etā́. dvā́triṁśadakṣarānuṣṭúg. ā́nuṣṭubhaḥ prajā́patiḥ. svénaivá chándasā prajā́patim āptvā́ śríyaṃ gachanti. // (7.4.4.2) śrī́r hí manuṣyàsya suvargó lokó. dvā́triṁśad etā́. dvā́triṁśadakṣarānuṣṭúg. vā́g anuṣṭúp. sárvām evá vā́cam āpnuvanti. sárve vācó vaditā́ro bhavanti. sárve hí śriyáṃ gáchanti.

Prajāpati は天界へ行った。神々は後でどんな韻律を使っても彼に到達しなかった。彼らは 32 の夜たちを見た。Anuṣṭubh は 32 音節からなる。Prajāpati は Anuṣṭubh に関係する。

［Prajāpati］自身の韻律を使って Prajāpati に到達して、（彼）に登ってから、彼らは天界へ行った、このように知ってこの［夜］たちの間座る者たちは。この［夜］たちは 32 ある。Anuṣṭubh は 32 音節からなる。Prajāpati は Anuṣṭubh に関係する。［Prajāpati］自身の韻律を使って Prajāpati に到達して、彼らは栄華に達していることになる。というのも人間にとって天界は栄華であるから。この［夜］たちは 32 ある。Anuṣṭubh は 32 音節からなる。Anuṣṭubh はことばである。彼らはすべてのことばへ到達していることになる。全ての者たちがことばを発する者になる。というのも全ての者たちが栄華に達しているから。

jyótir gáur āyur íti tryahā́ bhavanti=. iyáṃ vā́vá jyótir, antárikṣaṃ gáur, asā́v āyur. imā́n evá lokā́n abhyā́rohanty. abhipūrváṃ tryahā́ bhavanti. abhipūrvám evá suvargáṃ lokám abhyā́rohanti. bṛhadrathaṃtarā́bhyāṃ yanti=. // (7.4.4.3) iyáṃ vā́vá rathaṃtarám, asáu bṛhát. ābhyā́m evá yanty. átho, anáyor evá prátitiṣṭhanti. eté vái yajñásyāñjasā́yanī srutī́. tā́bhyām evá suvargáṃ lokáṃ yanti. párāñco vā́ eté suvargáṃ lokám abhyā́rohanti, yé párācas tryahā́n upayánti. pratyáṅ tryahó bhavati. pratyávarūḍhyā. átho prátiṣṭhityā. ubháyor lokáyor ṛddhvóttiṣṭhanti. dvā́triṁśad etā́s. tā́sāṃ yā́s triṁśát, triṁśádakṣarā virā́ḍ. ánnaṃ virā́ḍ. virā́jaivā́nnā́dyam ávarundhate. yé dvé, ahorātré evá té. ubhā́bhyāṁ rūpā́bhyāṁ suvargáṃ lokáṃ yanty. atirātrā́v abhíto bhavataḥ. párigṛhītyai.

Jyotis、Go、Āyus という 3 つの日が用いられる。Jyotis はこの［大地］なのだ。Go は中空なのだ。Āyus はあの［太陽］なのだ。彼らはこの世界たちに向かって登っていることになる。順当に 3 つの日からなる［祭式］たちが用いられる。順当に彼らは天界に向かって登っていることになる。Bṛhat と Rathaṃtara によって彼らは行く。Rathaṃtara はこの［大地］なのだ。Bṛhat はあの［太陽］なのだ。この 2 つによって彼らは行っていることになる。そしてまたこの 2 つにおいて彼らはしっかりと立っている。この 2 つは祭式にまっすぐ進む道である。その 2 つによって彼らは天界に行っていることになる。あちら側を向いた 3 つの日からなる［祭式］たちを行う者たちはあちら側を向きながら天界に向かって登っているのだ。逆向きの 3 日が一つある。降りて戻ってくるために。そしてまたしっかりと立つために。両方の世界で成功してから彼らは［Sattra から］立ち上がる。この［夜］たちは 32 ある。それら［32 夜］のうちの 30［夜］は 30 音節である。Virāj は食べ物である。Virāj によって彼らは食べ物を得ていることになる。2 つというのは 2 つの日夜である。両方の形式によって彼らは天界へ行く。2 つの Atirātra は両側で用いられる。取り囲むために。

TS 7.4.5: Trayastriṃśadrātra

TS 7.4.5(1): Dvādaśāha と Trayastriṃśadaha は神々の Sattra である

(7.4.5.1) dvé vā́vá devasattré, dvādaśāháś ca trayastriṁśadaháś ca. yá eváṃ vidvā́ṁsas trayastriṁśadahám ā́sate, sākṣā́d evá devátā abhyā́rohanti. yáthā khálu vái śréyān abhyā́rūḍhaḥ kāmáyate, táthā karoti. yády avavídhyati, pā́pīyān bhavati. yádi nā́vavídhyati, sadṛ́ṅ. yá eváṃ vidvā́ṁsas trayastriṁśadahám ā́sate, ví pāpmáṇā bhrā́tṛvyeṇā́ vartante. ’harbhā́jo vā́ etā́ devā́ ágra áharan. // (7.4.5.2) áhar ékó ’bhajatā́har ékas. tā́bhir vái té prabā́hug ā́rdhnuvan. yá eváṃ vidvā́ṁsas trayastriṁśadahám ā́sate, sárva evá prabā́hug ṛdhnuvanti. sárve grā́maṇīyam prā́pnuvanti.

神々の Sattra は 2 つある。Dvādaśāha と Trayastriṃśadaha である。このように知って Trayastriṃśadaha[464]を座る者たちは、明らかに神格たちに向かって登っていることになる。実際に、より栄光ある者として［神格たちに］向かって登った者のように、そのようにする。もし彼がぐらつき落ちる[465]なら彼はより悪くなる。もし彼がぐらつき落ちないなら、（より栄光ある者と）同じになる。このように知って Trayastriṃśadaha を座る者たちは悪、敵対者から区別される。日を分け前として持つ[466]神々は太初においてこの［夜］たちを取ってきた。1 柱 1 柱［の神］が 1 日 1 日を分け前として受け取った。それら（夜）によって彼らは平等に成功した。このように知って Trayastriṃśadaha を座る者たちは全員平等に成功していることになる。全員が村のリーダーになる。

pañcāhā́ bhavanti. páñca vā́ ṛtávaḥ saṃvatsará. ṛtúṣv evá saṃvatsaré prátitiṣṭhanty. átho, páñcākṣarā paṅktíḥ. pā́ṅkto yajñó. yajñám evā́varundhate. trī́ṇy āśvinā́ni bhavanti. tráya imé lokā́. eṣú // (7.4.5.3) evá lokéṣu prátitiṣṭhanty. átho, trī́ṇi vái yajñásyendriyā́ṇi, tā́ny evā́varundhate. viśvajíd bhavati. annā́dyasyā́varuddhyai. sárvapṛṣṭho bhavati. sárvasyābhíjityai.

Pañcāha たちが用いられる。一年は 5 つの季節たちなのだ。季節たち、一年において彼らはしっかりと立っていることになる。そしてまた 5 音節からなる Paṅkti が用いられる。祭式は 5 つからなる。彼らは祭式を得ていることになる。3 つの Aśvin のための［Śastra］が用いられる。これら世界は 3 つある。これら世界において彼らはしっかりと立っていることになる。そしてまた祭式の Indra 力は 3 つなのだ。彼らはそれらを得ていることになる。Viśvajit が用いられる。食べ物を得るために。全ての Pṛṣṭha をもつ［Stoma］が用いられる。全てを勝ち取るために。

vā́g vái dvādaśāhó. yát purástād dvādaśāhám upeyúr, ánāptāṃ vā́cam úpeyur, upadā́sukaiṣāṃ vā́k syād. upáriṣṭād dvādaśāhám úpayanti. āptā́m evá vā́cam úpayanti. tásmād upáriṣṭād vācā́ vadāmo. ’vāntarám // (7.4.5.4) vái daśarātréṇa prajā́patiḥ prajā́ asṛjata. yád daśarātró bhávati, prajā́ evá tád yájamānāḥ sṛjanta. etā́m̐ ha vā́ udaṅkáḥ śaulbāyanáḥ sattrásyárddhim uvāca, yád daśarātró. yád daśarātró bhávati, sattrásyárddhyā. átho, yád evá pū́rveṣv áhaḥsu víloma kriyáte, tásyaiváiṣā́ śā́ntir. dvyanīkā́ vā́ etā́ rā́trayo. yájamānā viśvajít. sahā́tirātréṇa pū́rvāḥ ṣóḍaśa. sahā́tirātréṇóttarāḥ ṣóḍaśa. yá evā́ṃ vidvā́m̐sas trayastriṁśadahám ā́sata, áiṣāṃ dvyanīkā́ prajā́ jāyate. ’tirātrā́v abhíto bhavataḥ. párigṛhītyā.

Dvādaśāha は Vāc である。彼らが前から Dvādaśāha を執り行うなら、到達していない Vāc を執り行うなら、これらの者たちの Vāc は失敗するものとなってしまうだろう。彼らは後から Dvādaśāha を執り行う。到達した Vāc を執り行っていることになる。それゆえ、我々は後から Vāc によって発声する。中間で Daśarātra によって Prajāpati は生き物たちを創り出した。Daśarātra が用いられるとき、生き物たちをそうして祭主たちは創り

---

[464] trayastriṁśad-ah-á- n. は、数詞複合語（Zahlwortkomplexivkomposita）の 1 つであり、「33 の日のひとまとまり」、あるいは、trayastriṁśad-ah-á- adj. 「33 の日からなる［Sattra（sattra, n.)、あるいは、 祭式（yajñá, m)］」を意味する。

[465] VWC s.v. ava-√vidh: ¶avavídhyati TS 2.5.5.6; 7.4.5.1; áva...vidhyati RV 9.73.8; †áva-viddha- -dham RV 1.182.6; 7.69.7; MS 4.14.10.

[466] °bhāj- < √bhaj 「割り当てる zuteilen，分け前として与える als Anteil geben」，med.「分け前としてもらう als Anteil bekommen，受け取る empfangen，享受する geniessen」< *√b^{h}ag- 「分け前としてもらう，あずかる teilhaftig werden」（PW s.v. bhaj)。

出していることになる。Daśarātra のことを Udaṅka Śaulbāyana は Sattra の成功であると語っていた。Daśarātra が用いられるというのは、Sattra を成功させるためである。そしてまた最初の日々において逆側に向かって（毛［の流れ］に逆らって）なされるなら、彼にはこの鎮めがあることになる。この夜たちは 2 つの正面をもつ。Viśvajit は祭主たちである。Atirātra と一緒に前半の 16 の［日］がある。Atirātra と一緒に後半の 16 の［日］がある。このように知って 33 の日の間座る者たちには 2 つの正面をもつ子孫が生まれる。2 つの Atirātra が両側で用いられる。取り囲むために。

TS 7.4.6: Ṣaṭtriṃśadrātra

(7.4.6.1) ādityā́ akāmayanta, "suvargáṃ lokám iyāma=" íti. té suvargáṃ lokáṃ ná prā́jānan. ná suvargáṃ lokám āyan. tá etā́m̐ ṣaṭtrim̐śadrātrám apaśyan. tám ā́haran. ténāyajanta. táto vái té suvargáṃ lokám prā́jānant. suvargáṃ lokám āyan, yá evā́ṃ vidvā́m̐saḥ ṣaṭtrim̐śadrātrám ā́sate. suvargám evá lokám prájānanti. suvargáṃ lokáṃ yanti. jyótir atirātráḥ // (7.4.6.2) bhavati. jyótir evá purástād dadhate. suvargásya lokásyā́nukhyātyai.

Āditya たちは望んだ、「我々は天界に行きたい」と。彼らは天界を知らなかったし、天界に行かなかった。しかし、彼らはこの Ṣaṭtriṃśadrātra を見た。それを取ってきて、それを使って祭った。それから彼らは天界を知り、天界に行った。このように知って Ṣaṭtriṃśadrātra を座る者たちは天界を知り、天界に行っていることになる。Jyotis が Atirātra として用いられる。彼らは Jyotis を前から置いていることになる。天界を見つけるために。

ṣaḍahā́ bhavanti. ṣáḍ vā́ ṛtáva. ṛtúṣv evá prátitiṣṭhanti. catvā́ro bhavanti. cátasro díśo. dikṣv èvá prátitiṣṭhanty. ásattraṃ vā́ etád, yád achandomáṃ. yác chandomā́ bhávanti, téna sattráṃ. devátā evá pr̥ṣṭháir ávarundhate, paśū́ñ chandomáir. ójo vái vīryàm pr̥ṣṭhā́ni, paśávaś chandomā́. ójasy evá // (7.4.6.3) vīryè prátitiṣṭhanti.

Ṣaḍaha たちが用いられる。季節は 6 つある。季節たちにおいて彼らはしっかりと立っていることになる。4 つの［Ṣaḍaha たち］が用いられる。方位は 4 つある。方位たちにおいて彼らはしっかりと立っていることになる。Chandoma がないものは Sattra ではない。Chandoma たちがあることによって、Sattra が成り立つ。彼らは神格たちを Pr̥ṣṭha たちによって得ていることになる。家畜たちは Chandoma たちによって表される。Pr̥ṣṭha たちは筋力、英雄的な力なのだ。Chandoma たちは家畜たちなのだ。筋力、英雄的な力において彼らはしっかりと立っていることになる。

(≈KS 34.7(2))
ṣaṭtrim̐śadrātró bhavati. ṣáṭtrim̐śadakṣarā bṛhatī́. bā́rhatāḥ paśávo. bṛhatyáivá paśū́n ávarundhate. bṛhatī́ chándasām̐ svā́rājyam ā́śnuta=. aśnuváte svā́rājyaṃ, yá evā́ṃ vidvā́m̐saḥ ṣaṭtrim̐śadrātrám ā́sate. suvargám evá lokáṃ yanty. atirātrā́v abhíto bhavataḥ. suvargásya lokásya párigr̥hītyai.

Ṣaṭtriṃśadrātra が用いられる。36 音節からなる Bṛhatī が使用される。家畜たちは Bṛhatī に属する。彼らは Bṛhatī によって家畜たちを得ていることになる。Bṛhatī は韻律たちの自治権を獲得した。このように知って 36 の夜からなる［Sattra］を座る者たちは自治権

を獲得し、天界に行っていることになる。2 つの Atirātra は両側で使用される。天界を取り囲むために使われる。

TS 7.4.7: Ekasmānnapañcāśa[-rātra/-aha]

(7.4.7.1) vásiṣṭho hatáputro ’kāmayata, "vindéya prajā́m, abhí saudāsā́n bhaveyam" íti. sá etám ekasmānnapañcāśám apaśyat. tám ā́harat. ténāyajata. táto vái só ’vindata prajā́m, abhí saudāsā́n abhavad. yá eváṃ vidvā́ṁsa ekasmānnapañcāśám ā́sate, vindánte prajā́m, abhí bhrā́tṛvyān bhavanti.

息子を殺された Vasiṣṭha は望んだ、「子孫を手に入れて Sudās に属する者たちを打ち負かしたい」と。。彼はこの Ekasmānnapañcāśa[-rātra/-aha] (49)を見た[467]。それを取ってきて、それを使って祭った。それから彼は子孫を手に入れ、Sudās に属する者たちを打ち負かした。このように知って Ekasmānnapañcāśa[-rātra/-aha] の間座る者たちは、子孫を手に入れて敵対者たちを打ち負かすことになる。

tráyas trivṛ́to ’gniṣṭomā́ bhavanti. vájrasyaivá múkhaṁ sáṁśyanti. dáśa pañcadaśā bhavanti. pañcadaśó vájraḥ. // (7.4.7.2) vájram evá bhrā́tṛvyebhyaḥ práharanti. ṣoḍaśimád daśamám áhar bhavati. vájra evá vīryàṃ dadhati. dvā́daśa saptadaśā́ bhavanti. annā́dyasyā́varuddhyā. átho, práivá táir jāyante. pṛ́ṣṭhyaḥ ṣaḍahó bhavati. ṣáḍ vā́ ṛtávaḥ, ṣáṭ pṛ́ṣṭhā́ni. pṛ́ṣṭháir evártū́n anvā́rohanty, ṛtúbhiḥ saṃvatsaráṃ. té saṃvatsará evá prátitiṣṭhanti. dvā́daśaikaviṁśā́ bhavanti. prátiṣṭhityā. átho, rúcam evā́tmán // (7.4.7.3) dadhate. bahávaḥ ṣoḍaśíno bhavanti. víjityai.

また、3 つの Trivṛt[-Stoma] (9)が Agniṣṭoma として使用される。彼らは Vajra の先端を完全に鋭くしていることになる[468]。10 の Pañcadaśa[-Stoma] (15)が使用される。Vajra は Pañcadaśa[-Stoma] (15) であるとされている。彼らは Vajra を敵対者たちに投げつけている。10 日目には Ṣoḍaśin（16）が含まれる。彼らは Vajra に英雄的な力を託している。12 の Saptadaśa[-Stoma] (17)が使用される。食べ物を得るためにそれらが用いられ、彼らはそれによって繁殖している。Pṛṣṭha を持つ 6 日が使用される。季節は 6 つあり、Pṛṣṭha も 6 つある。彼らは Pṛṣṭha たちによって季節に向かって登っており、季節ごとに一年が形成される。12 の Ekaviṃśa[-Stoma] (17) が使用される。彼らはしっかりと立つためにそれを行い、輝きを自分に置いている。多くの Ṣoḍaśin が使用される。彼らはそれを勝ち取るために行う。

ṣáḍ āśvinā́ni bhavanti. ṣáḍ vā́ ṛtáva. ṛtúṣv evá prátitiṣṭhanty. ūnātiriktā́ vā́ etā́ rā́traya ūnā́s. tád, yád ékasyai ná pañcāśád átiriktās. tád, yád bhū́yasīr aṣṭā́catvāriṁśata. ūnā́c ca khálu vā́ átiriktāc ca prajā́patiḥ prā́jāyata. yé prajā́kāmāḥ paśúkāmāḥ syús, tá etā́ āsīran. práivá jāyante, prajáyā paśúbhir. vairājó vā́ eṣá yajñó, yád ekasmānnapañcāśó. yá eváṃ vidvā́ṁsa ekasmānnapañcāśám ā́sate, virā́jam evá gachanty. annādā́ bhavanty. atirātrā́v abhíto bhavato. ’nnā́dyasya párigṛhītyai.

6 つの Aśvin のための［Śastra］たちが用いられる。季節は 6 つある。彼らは季節たちにおいてしっかりと立っていることになる。この夜たちは不十分であり過剰であった。1

---

[467] ekasmānnapañcāśám ā́sate とあるので、ekasmānnapañcāśá-は 49 の日あるいは夜の間続く祭式のことを指していることがわかる。

[468] 同様の表現が RV 1.130.4 vájram … saṃ śyat でも見られる。

つの［夜］分少ない 50 であるという点で不十分であり、48 より多い［夜］であるという点で過剰である。実質的に不十分から、過剰から Prajāpati は繁殖したのだ。子孫を望み、家畜を望むなら、彼らはこの［夜］たちの間座るべきである。彼らは子孫、家畜たちによって繁殖する。49 とは Virāj に関係する祭式である。このように知って 49 の［夜からなる Sattra］を座る者たちは Virāj に達していることになる。食べ物を食べる者になっていることになる。2 つの Atirātra が両側で用いられる。食べ物を取り囲むために。

TS 7.4.8: 一年 Sattra の開始と終了の時期について

(7.4.8.1) saṃvatsaŕya dīkṣiṣyámāṇā ekāṣṭakā́yāṃ dīkṣerann. eṣā́ vái saṃvatsarásya pátnī, yád ekāṣṭakā́=. etásyāṃ vā́ eṣá etā́m̐ rā́triṃ vasati. sākṣā́d evá saṃvatsarám ārábhya dīkṣanta. ā́rtaṃ vā́ eté saṃvatsarásyābhídīkṣante, yá ekāṣṭakā́yāṃ dī́kṣanté. ’ntanāmānāv ṛtū́ bhavato. vyàstaṃ vā́ eté saṃvatsarásyābhídīkṣante, yá ekāṣṭakā́yāṃ dī́kṣanté. ’ntanāmānāv ṛtū́ bhavataḥ. phalgunīpūrṇamāsé dīkṣeran. múkhaṃ vā́ etát // (7.4.8.2) saṃvatsarásya, yát phalgunīpūrṇamāsó. mukhatá evá saṃvatsarám ārábhya dīkṣante. tásyáikaivá niryā́, yát sā́mmeghye viṣūvā́nt sampádyate. citrāpūrṇamāsé dīkṣeran. múkhaṃ vā́ etát saṃvatsarásya, yác citrāpūrṇamāsó. mukhatá evá saṃvatsarám ārábhya dīkṣante. tásya ná kā́ caná niryā́ bhavati. caturahé purástāt paurṇamāsyái dīkṣeran. téṣām ekāṣṭakā́yāṃ krayáḥ sámpadyate. ténáikāṣṭakā́m̐ ná chambáṭkurvanti. téṣām // (7.4.8.3) pūrvapakṣé sutyā́ sámpadyate. pūrvapakṣám mā́sā abhí sámpadyante. té pūrvapakṣá úttiṣṭhanti. tā́n uttíṣṭhata óṣadhayo vánaspátayó ’nū́ttiṣṭhanti. tā́n kalyāṇī́ kīrtír ánū́ttiṣṭhaty. "árātsur imé yájamānā" íti. tád ánu sárve rādhnuvanti. //

一年のために潔斎しようとしている者たちは Ekāṣṭakā において潔斎すべきである。Ekāṣṭakā とは一年の妻なのだ。これ（Ekāṣṭakā）においてこれ（一年）はこの夜を過ごしているのだ。彼らは直接一年を獲得して潔斎していることになる。Ekāṣṭakā において潔斎している者たちは一年の困難に向かって潔斎しているのだ。「終わり」という名前の 2 つの季節がある。Ekāṣṭakā において潔斎している者たちは一年の細切れになったものに向かって潔斎しているのだ。「終わり（anta）」を含む名前をもつ 2 つの季節がある（Vasanta と Hemanta か）。Phalgunī の満月（昔の年初）において彼らは潔斎すべきである。Phalgunī の満月とは一年の最初なのだ。最初に一年を獲得して彼らは潔斎していることになる。それには曇りの季節に（sā́mmeghye）折り返し点が（viṣūvā́n）合致するという一つの不都合がある。Citrā の満月（TS の年初）において彼らは潔斎すべきである。Citrā の満月とは一年の最初なのだ。最初に一年を獲得して彼らは潔斎していることになる。それにはなんの不都合もない。満月の夜の 4 日前に潔斎すべきである。彼らにとって Ekāṣṭakā に［Soma の］売買［の日］が合致する。それによって彼らは Ekāṣṭakā を無駄にしない。彼らにとって前半月に Soma 搾りが合致する。前半月に対して月たちが合致する。彼らは前半月に［Sattra から］立ち上がる（Sattra を終了する）。立ち上がった彼らに続いて植物たち、林木たちが立ち上がる。それらに続いて美しい名声が立ち上がる。「（ちょうど今）この祭主たちは成功した」と。それに続いて全ての者が成功する。

TS 7.4.9: Dīkṣā は火の準備、Upasad は自分の料理、Sattra は自分を Dakṣiṇā とするものである

(7.4.9.1) suvargáṃ vā́ eté lokáṃ yanti, yé sattrám upayánty. abhī́ndhata evá dīkṣā́bhir, ātmā́naṁ śrapayanta upasádbhir. dvā́bhyāṃ lómāvadyanti. dvā́bhyāṃ tvácam. dvā́bhyām ásṛd. dvā́bhyām māṁsáṃ. dvā́bhyām ásthi. dvā́bhyām majjā́nam. ātmádakṣiṇaṃ vái sattrám. ātmā́nam evá dákṣiṇāṃ nītvā́ suvargáṃ lokáṃ yanti. śíkhām ánu právapanta. ṛ́ddhyā. átho "rághīyāṁsaḥ suvargáṃ lokám ayāma=" íti. //

Sattra 行者たちは天界に行くのだ。彼らは潔斎たちによって火を灯し、Upasad たちによって自分たちを料理している ことになる。2 によって彼らは毛を切る。2 によって皮を。2 によって血を。2 によって肉を。2 によって骨を。2 によって骨髄を（合計 12）。Sattra は自分を Dakṣiṇā（ātmádakṣiṇa-）[469]とするのだ。彼らは髷を刈り取る。成功のために。そしてまた「より素早く我々は天界へ行きたい」と考えて。

TS 7.4.10: 使用される祭式次第の導入と説明（≈KS 33.2）

TS 7.4.10(1): Atirātra を最初に行うことで Agniṣṭoma, Ukthya, Atirātra を順番に行っていることになる（≈KS 33.2(1)）

(7.4.10.1) brahmavādíno vadanty, "atirātráḥ paramó yajñakratūnā́ṃ. kásmāt tám prathamám úpayanti=" íty. etád vā́ agniṣṭomám prathamám úpayanty, áthokthyàm, átha ṣoḍaśínam, áthātirātrám. anupūrvám eváitád yajñakratū́n upétya, tā́n ālábhya, parigṛ́hya, sómam eváitát píbanta āsate.

Brahman を議論する者たちは議論する。「祭式次第の中で Atirātra は最後である。なぜ彼らはそれを最初に行うのか」と。彼らは Agniṣṭoma を最初に行う。次に Ukthya を。次に Ṣoḍaśin を。次に Atirātra を。このように最初から順に祭式次第を行ってから、それらをつかみ取って、取り囲んでから、こうして Soma を飲みながら彼らは座っていることになる。

TS 7.4.10(2): Atirātra において Jyotiṣṭoma を最初に用いる（≈KS 33.2(2)）

jyótiṣṭomam prathamám úpayanti. jyótiṣṭomo vái stómānām múkham. mukhatá evá stómān práyuñjate. té // (7.4.10.2) sáṁstutā virā́jam abhí sámpadyante. dvé ca rcā́v átiricyete. ékayā gáur átirikta. ékayā́yur ūnáḥ. suvargó vái lokó jyótir, ū́rg virā́ṭ. suvargám evá téna lokáṃ yanti.

Jyotiṣṭoma を最初に彼らは行う。Jyotiṣṭoma は Stoma の中の最初である。最初に彼らは Stoma たちを活動状態にすることになる。共に歌われたそれら（Stoma）は、Virāj（10 の倍数）の数と合致する。2 つの詩節が過剰である。Go は 1 つの［詩節］によって余分であり、Āyus は 1 つの［詩節］によって不十分である。Jyotis は天界なのだ。Virāj は栄養なのだ。彼らはそれによって天界に行っていることになる。

[469] Cf. Falk [1989]; Pontillo [2023]; 大島[2010].

TS 7.4.10(3): 2 つの Rathaṃtara-Sāman と Sobhari の Brahma-Sāma（≈KS 33.2(3)）

"rathaṃtaráṃ dívā bhávati, rathaṃtaráṃ náktam" íty āhur, "brahmavādínaḥ kéna tád ájāmi=" íti. saubharáṃ tr̥tīyasavané brahmasāmám br̥hát. tán madhyató dadhati. vídhr̥tyai. ténājāmi. //

「Rathaṃtara は日中用いられ、Rathaṃtara は夜に用いられる」と Brahman を議論する者たちは議論している、「何によってそれを同種のものと結合しないもの［にするの］か」と。Saubhara[-Sāman] が 3 番目の Soma 搾りにおいて Brahmasāman として Bṛhat で使われる。彼らは中間にそれを置く。（Rathaṃtara と Rathaṃtara を）分離するために。それによって同種のものと結合しないもの［にしている］。

TS 7.4.11: 1 年 Sattra の基本要素（≈KS 33.2; 33.3）

TS 7.4.11(1): Ṣaḍaha の 1 日ごとに Jyotiṣṭoma、Goṣṭoma、Āyuṣṭoma を順番に用いる（≈KS 33.3:28.15−29.3）

(7.4.11.1) jyótiṣṭomam prathamám úpayanty. asmínn evá téna loké prátitiṣṭhanti. góṣṭomaṃ dvitī́yam úpayanty. antárikṣa evá téna prátitiṣṭhanti. ā́yuṣṭomaṃ tr̥tī́yam úpayanty. amúṣminn evá téna loké prátitiṣṭhanti=. iyáṃ vā́vá jyótir, antárikṣaṃ gáur, asā́v ā́yur. yád etā́nt stómān upayánty, eṣv èvá tál lokéṣu sattríṇaḥ pratitíṣṭhanto yanti. té sáṁstutā virā́jam // (7.4.11.2) abhí sámpadyante. dvé ca rcā́v átiricyete. ékayā gáur átirikta. ékayā́yur ūnáḥ. suvargó vái lokó jyótir, ū́rg virā́ḍ. ū́rjam evā́varundhate. té ná kṣudhā́rtim ā́rchanty. ákṣodhukā bhavanti. kṣútsambādhā iva hí sattríṇo. ’gniṣṭomā́v abhítaḥ. pradhī́ tā́. ukthyà mádhye. nábhyaṃ tát. tád etát pariyád devacakrám. yád eténa // (7.4.11.3) ṣaḍahéna yánti, devacakrám evá samā́rohanti. áriṣṭyai. té svastí sámaśnuvate.

彼らは Jyotiṣṭoma を最初に行う。それによってこの世界において彼らはしっかりと立っていることになる。彼らは Goṣṭoma を 2 番目に行う。それによって中空において彼らはしっかりと立っていることになる。彼らは Āyuṣṭoma を 3 番目に行う。それによってあの世界において彼らはしっかりと立っていることになる。Jyotis はこの［大地］、Go は中空、Āyus はあの［太陽］なのだ。彼らがこれら Stoma を行うということ、そうしてこれら三世界において Sattra 行者たちはしっかりと立ったものとして行っていることになる。共に唱えられたそれら（Stoma）は Virāj（10 の倍数）の数と合致する。二回の復唱は過分である。Go は一つの［復唱］によって過分であり、Āyus は一つの［復唱］によって不十分である。Jyotis は天界、Virāj は栄養なのだ。彼らは栄養を得ていることになる。彼らは飢餓の災難に遭わない。彼らは飢えない者たちになる。というのも Sattra 行者たちはあたかも飢餓という抑圧をもつかのようであるから。2 つの Agniṣṭoma が両側で用いられる。それら 2 つは車輪の外縁部である。2 つの Ukthya が真ん中にある。それら 2 つは車輪の中心部である。そのようなこれが回転する神々の車輪（devacakrá-）である。この Ṣaḍaha によって彼らが行くということで、彼らは神々の車輪に完全に登っていることになる。安全のために。彼らは自分たちの無事な到着に完全に至る。

TS 7.4.11(2): Ṣaḍaha の繰り返し、6、12、18、24 日間（≈KS 33.3(2) ）

ṣaḍahéna yanti. ṣáḍ vā́ ṛtáva. ṛtúṣv evá prátitiṣṭhanty. ubhayátojyotiṣā yanty. ubhayáta evá suvargé loké pratitíṣṭhanto yanti. dváu ṣaḍaháu bhavatas. tā́ni dvā́daśā́hāni sámpadyante. dvādaśó vái púruṣo, dvé sakthyàu dváu bāhū́, ātmā́ ca śíraś ca, catvā́ry áṅgāni, stánau, dvādaśáu. // (7.4.11.4) tát púruṣam ánu paryā́vartante. tráyaḥ ṣaḍahā́ bhavanti. tā́ny aṣṭā́daśā́hāni sámpadyante. návānyā́ni návānyā́ni. náva vái púruṣe prāṇā́s. tát prāṇā́n ánu paryā́vartante. catvā́raḥ ṣaḍahā́ bhavanti. tā́ni cáturviṁśatir áhāni sámpadyante. cáturviṁśatir ardhamāsā́ḥ saṃvatsarás. tát saṃvatsarám ánu paryā́vartanté. "’pratiṣṭhitaḥ saṃvatsará" íti khálu vā́ āhur, "várṣīyān pratiṣṭhā́yā" íty. etā́vad vái saṃvatsarásya brā́hmaṇaṃ, yā́van māsó. māsímāsy evá pratitíṣṭhanto yanti. //

Ṣaḍaha によって彼らは行く。季節は 6 つなのだ。季節たちにおいて彼らはしっかりと立っていることになる。両側の Jyotis によって彼らは行く。彼らは両方から天界においてしっかりと立った者として行っていることになる。2 つの Ṣaḍaha が用いられる。それらの合計は 12 日である。人間は 12 からなる。2 つの腿、2 つの腕、1 つの胴体と 1 つの頭、4 つの手足、乳房は 11 番目と 12 番目として。それらはそうして人間に続いて向きを変える。3 つの Ṣaḍaha たちが用いられる。それらの合計は 18 日である。一方は 9 日、他方は 9 日。人間の中には 9 つの生命諸機能があるのだ。それらはそうして生命諸機能に続いて向きを変える。4 つの Ṣaḍaha たちが用いられる。それらの合計は 24 日である。一年は 24 の半月たちである。それらはそうして一年に続いて向きを変える。「一年はしっかりと立っていない」と実は彼らは言っている、「それ（一年 ）は土台 より大きい」と。一年の Brāhmaṇa（秘密）（＝13 番目の月か）は、［ 1 ］月と同じ長さである。彼らは 1 ヶ月ごとにしっかりと立って行っていることになる。

TS 7.5 (≈JB 4.1; 9.4 etc. ; PB 2.374 etc.)

TS 7.5.1: 雌牛たちの Sattra

TS 7.5.1(1) : 雌牛たちの Sattra（≈KS 33.1）

(7.5.1.1) gā́vo vā́ etát sattrám āsatāśṛṅgā́ḥ satī́ḥ. "śṛ́ṅgāṇi no jāyantā" íti kā́mena. tā́sāṃ dáśa mā́sā níṣaṇṇā āsann, átha śṛ́ṅgāny ajāyanta. tā́ údatiṣṭhan. "árātsma=" íty. átha yā́sāṃ nā́jāyanta, tā́ḥ saṃvatsarám āptvódatiṣṭhan. "árātsma=" íti. yā́sāṃ cājāyanta, yā́sāṃ ca ná, tā́ ubháyīr údatiṣṭhann. "árātsma=" íti. gosattrā́ṃ vái // (7.5.1.2) saṃvatsaró. yá evā́ṃ vidvā́ṁsaḥ saṃvatsarám upayánty, ṛdhnuvánty evá. tásmāt tūparā́ vā́rṣikau mā́sau pártvā carati. sattrā́bhijitaṁ hy àsyai. tásmāt saṃvatsarasádo, yát kíṃ ca gṛhé kriyáte, tád āptám, ávaruddham, abhíjitaṃ kriyate.

雌牛たちはこの Sattra を行った、角がないから。「我々に角が生えますように」という望みを伴って。それら（雌牛）が 10 カ月間座り込んでいると、それらに角が生えた。それらは立ち上がった。「我々は（目的を）達成した」と考えて。それから、生えなかった雌牛たちは一年に達してから立ち上がった。「我々は達成した」と考えて。生えた雌牛たちも生えなかった雌牛たちも両方が立ち上がった。「我々は達成した」と考えて。一年は雌牛の Sattra なのだ 。このように知って一年間の［Sattra］を行う者たちは成功していることになる。それゆえ角がない［雌牛］は雨季の 2 カ月間を越してから 動く。

というのもそれ（雌牛）にとって［角は］Sattra で勝ち取られたものであるから。それゆえ一年間座る者の［Sattra 用の］家でなされることはなんであれ（Sattra 行者によって）到達され、獲得され、勝ち取られたものとなされる。

TS 7.5.1(2): 1 年の前半と後半の話（≈KS 33.5(2)

samudrám vā́ eté práplavante, yé saṃvatsarám upayánti. yó vái samudrásya pā́raṃ ná páśyati, ná vái sá táta údeti. saṃvatsaráḥ // (7.5.1.3) vái samudrás. tásyaitát pāráṃ, yád atirātráu. yá evā́ṃ vidvā́ṁsaḥ saṃvatsarám upayánty, ánārtā evódr̥cam gachanti=. iyáṃ vái pū́rvo ’tirātrò, ’sā́v úttaro. mánaḥ pū́rvo, vā́g úttaraḥ. prāṇáḥ pū́rvo, ’pāná úttaraḥ. praródhanam pū́rva, udáyanam úttaro. jyótiṣṭomo vaiśvānarò ’tirātró bhavati. jyótir evá purástād dadhate. suvargásya lokásyā́nukhyātyai.

一年 Sattra を行う者たちは海を泳いでいるのだ。海の向こう岸が見えない者はそこから脱出しないのだ。海は一年なのだ。2 つの Atirātra とはそれ（一年）の［両］岸である。このように知って一年 Sattra を行う者たちは災いなく出口（？）に達していることになる。前半の Atirātra はこの［大地］、後半はあの［太陽］なのだ。前半は思考、後半はことば。前半は Prāṇa、後半は Apāna。前半は開始、後半は終了。Jyotiṣṭoma が［Agni］Vaiśvānara のための Atirātra として用いられる。彼らは Jyotis を前/東に置いていることになる。天界をみつけるために。

TS 7.5.1(3): Caturviṁśa-Stoma を用いる日＝1 年 Sattra の導入の日（≈KS 33.2(4)）

caturviṁśáḥ prāyaṇī́yo bhavati. cáturviṁśatir ardhamāsā́ḥ // (7.5.1.4) saṃvatsaráḥ. prayánta evá saṃvatsaré prátitiṣṭhanti. tásya trī́ṇi ca śatā́ni ṣaṣṭíś ca stotrī́yas. tā́vatīḥ saṃvatsarásya rā́traya. ubhé evá saṃvatsarásya rūpé āpnuvanti. té sáṁsthityā áriṣṭyā úttarair áhobhiś caranti. ṣaḍahā́ bhavanti. ṣáḍ vā́ ṛtávaḥ saṃvatsará. ṛtúṣv evá saṃvatsaré prátitiṣṭhanti. gáuś cā́yuś ca madhyatá[s] stómau bhavataḥ. saṃvatsarásyaivá tán mithunám madhyatáḥ // (7.5.1.5) dadhati. prajánanāya. jyótir abhíto bhavati. vimócanam evá tát. chándāṁsy evá tád vimókaṃ yanti. átho, ubhayátojyotiṣaivá ṣaḍahéna suvargáṃ lokáṃ yanti. brahmavādíno vadanti, "ā́sate, kéna yanti=" íti. "devayā́nena patha=" íti brūyāc. chándāṁsi vái devayā́naḥ pánthā. gāyatrī́ triṣṭúb jágatī. jyótir vái gāyatrī́, gáus triṣṭúg, ā́yur jágatī. yád ete stómā bhávanti, devayā́nenaivá // (7.5.1.6) tát pathā́ yanti. samānáṁ sā́ma bhavati. devalokó vái sā́ma. devalokā́d evá ná yanty. anyā́anyā ṛ́co bhavanti. manuṣyalokó vā́ ṛ́co. manuṣyalokā́d evā́nyámanyaṃ devalokám abhyāróhanto yanty. abhivartó brahmasāmám bhavati. suvargásya lokásyābhívṛttyay. abhijíd bhavati. suvargásya lokásyābhíjityai. viśvajíd bhavati. víśvasya jítyai. māsímāsi pṛṣṭhā́ny úpayanti. māsímāsy atigrāhyā̀ gṛhyante. māsímāsy evá vīryàṃ dadhati. māsā́m prátiṣṭhityay. upáriṣṭān māsā́m pṛṣṭhā́ny úpayanti. tásmād upáriṣṭād óṣadhayaḥ phálaṃ gṛhṇanti. //

Caturviṃśa[-Stoma] (24)を用いる導入の［祭式］が開催される。一年は 24 の半月たちである。彼らは進み出しながら、一年においてしっかりと立っていることになる。それ（一年）には 360 の Stotra のための［詩節］がある。一年にはそれぐらい多くの夜（360）がある。彼らは一年の両方の形に到達していることになる。彼らは完全に立つために、安全のために続きの日々に取り掛かる。一年は 6 つの季節たちなのだ。季節たち、一年において彼らはしっかりと立っていることになる。Goṣṭoma と Āyuṣṭoma が真ん中で用いられる。彼らは一年の中間にその一対を置く。繁殖するために。Jyotis が両側で用いられる。それは解放なのだ。彼らは韻律たちをそうして解放して行っていることになる。そしてまた両側の Jyotis を含む 6 日間によって彼らは天界に行っていること

になる。Brahman を議論する者たちは議論する。「彼らは座っている。どんな［道］を通って行くのか」と。「神々に通じる道を通って」と返答すべきである。神々に通じる道は韻律なのだ。Gāyatrī、Triṣṭubh、Jagatī なのだ。Gāyatrī は Jyotis、Triṣṭubh は Go、Jagatī は Āyus なのだ。これら Stoma が用いられるとき、そうして神々に通じる道を通って彼らは行っていることになる。同じ Sāman が用いられる。Sāman は神々の世界なのだ。神々の世界から彼らは出ていかないことになる。いろいろな詩節たちが用いられる。詩節たちは人間の世界なのだ。人間の世界からいろいろな神々の世界に向かって彼らは登って行っていることになる。Abhivarta［Sāman］が Brahma-Sāman として用いられる。天界へと向かうために。Abhijit が用いられる。天界を勝ち取るために。Viśvajit が用いられる。全てを勝ち取るために。一月ごとに彼らは Pr̥ṣṭha たちを行う。一月ごとに Atigrāhya[-Graha]たちが汲まれる。一月ごとに彼らは英雄的な力を置いていることになる。月々がしっかりと立つために。彼らは月々の後に Pr̥ṣṭha たちを行う。それゆえ上方で植物たちは果実をならす。

TS 7.5.2: 雌牛たちの Sattra（≈KS 33.1）

(7.5.2.1) gā́vo vā́ etát sattrám āsatāśr̥ngā́ḥ satī́ḥ śr̥ṅgāṇi síṣāsantīs. tā́sāṃ dáśa mā́sā níṣaṇṇā āsann. átha śr̥ṅgāṇy ajāyanta. tā́ abruvan. "árātsma=. úttiṣṭhāma=. áva táṃ kā́mam arutsmahi, yéna kā́mena nyáṣadāma=" íti. tā́sām u tvā́ abruvann, ardhā́ vā yā́vatīr vā. "ā́samahā evémáu dvādaśáu mā́sau saṃvatsarā́m̐ sampā́dyóttiṣṭhāma=" íti. tā́sām // (7.5.2.2) dvādaśé māsí śr̥ṅgāṇi prā́vartanta, śraddháyā vā́śraddhayā vā. tā́ imā́, yā́s tūparā́. ubháyyo vā́vá tā́ ārdhnuvan, yā́ś ca śr̥ṅgāṇy ásanvan, yā́ś córjam avā́rundhata=. r̥dhnóti daśásu māsū́ttíṣṭhann, r̥dhnóti dvādaśásu, yá evā́ṃ véda. padéna khálu vā́ eté yanti. vindáti khálu vái padéna yán. tád vā́ etád r̥ddhám áyanam. tásmād etád gosáni. //

雌牛たちはこの Sattra を座った、角がないときに、角を欲しがりながら。それらは 10 カ月間座り込んだ。するとそれらに角が生えた。それらは言った。「我々は（ちょうど今）達成した。立ち上がろう、我々はそのために座り込んだ望みを（ちょうど今）得た」と。しかし、それらの半分かそれくらいが言った。「この 11 番目と 12 番目の月の間も座ろう。一年を完全に数えてから立ち上がろう」と。12 カ月目にそれらに角が生じた、信心によってか、信心以外によってか。角のない［雌牛］たちというのはこれらである。（12 カ月かけて）角を獲得した［雌牛］たちも（10 カ月で Sattra をやめて）栄養を得た［雌牛］たちも両方が成功したのだった。このように知っている者は 10 カ月で立ち上がって成功し、12 カ月で［立ち上がっても］成功する。実際にこれらは足を使って行っている。実際に足を使って行きつつある者は見出す。そのようなこれは成功した歩みである。それゆえこうした牛の獲得がある。

TS 7.5.3: 春分から夏至までの 3 か月間における Pr̥ṣṭha について（≈KS 33.5）

TS 7.5.3(1): Pr̥ṣṭha［-Sāman］を最後の月に用いる

(7.5.3.1) prathamé māsí pr̥ṣṭhā́ny úpayanti. madhyamá úpayanty. uttamá úpayanti. tád āhur, "yā́m vái trír ékasyāhna upasī́danti. dahrám vái sā́parābhyām dóhābhyām duhé, ’tha kútaḥ sā́ dhokṣyate, yā́m dvā́daśa kŕ̥tva upasī́danti=" íti. saṃvatsarā́m̐ sampā́dyottamé māsí sakŕ̥t pr̥ṣṭhā́ny úpeyus. tád yájamānā yajñám paśū́n ávarundhate.

最初の月において彼らは Pr̥ṣṭha［-Sāman］たちを行う。真ん中の［月］において行う。最後の［月］において行う。それについて［人々は］言っている。「彼らが 1 日の間に 3 回近くに座って［乳を絞る雌牛］は、後半の 2 回の乳搾りの後少量しか乳を出さないが、そうするとどうやって彼らが 12 回近くに座って［乳を絞る雌牛］は乳搾りされるのだろうか」と。一年を完全に数えてから彼らは最後の月に一回 Pr̥ṣṭha［-Sāman］たちを行うべきである。そうして祭主たちは祭式、家畜たちを得る。

TS 7.5.3(2): 1 年 Sattra 参加者は岸のない海を泳いでいるかのようである

samudrā́m vái // (7.5.3.2) etè ’navārám apārám práplavante, yé saṃvatsarám upayánti. yád bṛhadrathaṃtaré anvárjeyur, yáthā mádhye samudrásya plavám anvárjeyus, tādŕ̥k tát. ánutsargam bṛhadrathaṃtarā́bhyām itvā́ pratiṣṭhā́m gachanti. sárvebhyo vái kā́mebhyaḥ saṃdhír duhe. tád yájamānāḥ sárvān kā́mān ávarundhate. //

こちら側の岸もあちら側の岸もない海を一年［Sattra］を行う者は泳いでいる。彼らが Bṛhat［-Sāman］と Rathaṃtara［-Sāman］を手放すというのは、海の真ん中で船を手放すようなものである。Bṛhat［-Sāman］と Rathaṃtara［-Sāman］を省かずに行ってから彼らは土台に達する。全ての望みのためにつなぎ目が乳を出すのだ。そうして祭主たちは全ての望みを得る。

TS 7.5.4: Daśarātra (≈KS 33.8(7))

(7.5.4.1) samānyà ŕ̥co bhavanti. manuṣyalokó vā́ ŕ̥co. manuṣyalokā́d evá ná yanty. anyádanyat sā́ma bhavati. devalokó vái sā́ma. devalokā́d evā́nyámanyam manuṣyalokám pratyavaróhanto yanti. jágatīm ágra úpayanti. jágatīṃ vái chándāṃ̐si pratyávarohanty, āgrayaṇáṃ gráhā, bṛhát pr̥ṣṭhā́ni, trayastriṃ̐śā́ṃ̐ stómās. tásmāj jyā́yāṃ̐saṃ kánīyān pratyávarohati. vaiśvakarmaṇó gr̥hyate. víśvāny evá téna kármāṇi yájamānā ávarundhata. ādityáḥ // (7.5.4.2) gr̥hyata. iyáṃ vā́ áditir. asyā́m evá prátitiṣṭhanty. anyò’nyo gr̥hyete. mithunatvā́ya prájātyā. avāntaráṃ vái daśarātréṇa prajā́patiḥ prajā́ asr̥jata. yád daśarātró bhávati, prajā́ evá tád yájamānāḥ sr̥janta. etā́ṃ̐ ha vā́ udaṅkáḥ śaulbāyanáḥ sattrásyárddhim uvāca, yád daśarātro. yád daśarātró bhávati, sattrásyárddhyai. átho, yád evá pū́rveṣv áhaḥsu víloma kriyáte, tásyaiváiṣā́ śā́ntiḥ. //

同じ詩節たちが用いられる。詩節たちは人間の世界なのだ。人間の世界から彼らは出ていかないことになる。別々の Sāman が用いられる。Sāman は神々の世界なのだ。神々の世界から別々の人間の世界へ彼らは降りて戻って行っていることになる。彼らは初めに Jagatī（12）を用いる。Jagatī に韻律たちは降りて戻っているのだ、Āgrayaṇa に杯たちが、

Bṛhat に Pṛṣṭha たちが、Trayastriṃśa に Stoma たちが。それゆえより大きなものにより小さなものが降りて戻る。Viśvakarman の［杯］が汲まれる。全ての［祭式］行為をそれによって祭主たちは得ていることになる。Aditi の［杯］が汲まれる。Aditi はこの［大地］なのだ。この［大地］において彼らはしっかりと立っていることになる。別々の［杯］2 つが汲まれる。一対になるために、繁殖するために。内側で Daśarātra によって Prajāpati は生き物たちを創り出した。Daśarātra が用いられるとき、生き物たちをそうして祭主たちが創り出していることになる。Udaṅka Śaulbāyana は Daśarātra のことを Sattra の成功であると言っていた。Daśarātra が用いられるというのは、Sattra の成功のためである。そしてまた最初の日々において逆側に向かって（毛に逆らって）なされるとき、これがそれの鎮めであることになる。

TS 7.5.5: 競争相手のいる Soma 祭（≈KS 34.4; PB 9.4）

TS 7.5.5(1): 2 つの Soma 祭が同時に行われる場合（≈KS 34.4(1)）

(7.5.5.1) yádi sómau sáṁsutau syā́tām, mahatí rā́triyai prātaranuvākám upā́kuryāt. pū́rvo vā́cam pū́rvo devátāḥ pū́rvaś chándāṁsi vṛ̥ṅkte. vṛ́ṣaṇvatīm pratipádaṃ kuryāt. prātaḥsavanā́d eváiṣām índraṃ vṛ̥ṅkte. átho khálv āhuḥ, "savanamukhésavanamukhe kāryā́=" íti. savanamukhā́tsavanamukhād eváiṣām índraṃ vṛ̥ṅkte. "saṃveśā́yopaveśā́ya gāyatriyā́s triṣṭúbho jágatyā anuṣṭúbhaḥ paṅktyā́ abhíbhūtyai svā́hā". chándāṁsi vái saṃveśá upaveśáś. chándobhir eváiṣāṃ // (7.5.5.2) chándāṁsi vṛ̥ṅkte. sajanī́yaṁ śásyam. vihavyàṁ śásyam. agástyasya kayāśubhī́yaṁ śasyam. etā́vad vā́ asti, yā́vad etát. yā́vad evā́sti, tád eṣāṃ vṛ̥ṅkte.

もし 2 つの Soma が同時に絞られようとしているなら、夜の進んだ時間に早朝の暗唱の準備に取り掛かるべきである。彼は最初の者としてことばを、最初の者として神格たちを、最初の者として韻律たちをもぎとる。vṛ́ṣan［という語］を含む［詩節］を唱えるべきである。彼らの早朝の Soma 搾りから Indra をもぎとっていることになる。そしてまた実際に［人々は］言っている。「（朝昼晩）それぞれの Soma 搾りの最初において［vṛ́ṣan を含む詩節が］唱えられるべきものである」と。彼らのそれぞれの Soma 搾りの最初に Indra をもぎとっていることになる。「入場に、休憩に、Gāyatrī に、Triṣṭubh に、Jagatī に、Anuṣṭubh に、Paṅkti に、克服に、Svāhā」。入場、休憩は韻律たちなのだ。韻律たちによって彼らの韻律たちをもぎとっていることになる。Sajanīya［-Sūkta］が唱えられるべきである。Vihavya［-Sūkta］ が唱えられるべきである。Agastya の Kayāśubhīya［-Sūkta］が唱えられるべきである。これくらい多くのものがあるのだ。ある限り多くのものを彼らからもぎとっていることになる。

TS 7.5.5(2): 水瓶が割れた場合の贖罪儀礼（≈KS 34.4(2)）

yádi prātaḥsavané kaláśo dī́ryeta, vaiṣṇavīṣu śipiviṣṭávatīṣu stuvīran. yád vái yajñásyātirícyate, víṣṇuṃ tác chipiviṣṭám abhy átiricyate, tád víṣṇuḥ śivipiṣṭó. ’tirikta evā́tiriktaṃ dadhāti. átho, átiriktenaivā́tiriktam āptvā́varundhate. yádi madhyáṃdine dī́ryeta, vaṣaṭkāránidhanaṁ sā́ma kuryur. vaṣaṭkāró vái yajñásya pratiṣṭhā́. pratiṣṭhā́m eváinad gamayanti. yádi tṛ̥tīyasavaná, etád evá. //

もし早朝の Soma 搾りで水瓶が割れた場合、彼らは Viṣṇu のための、śipiviṣṭa を含む［詩節］たちを用いて Stotra を歌うべきである。祭式の部分が過分であれば、Viṣṇu Śipiviṣṭa の取り分として過分である。Viṣṇu Śipiviṣṭa はそれである。過分のものに過分のものを置いていることになる。そしてまた過分のものによって過分のものに到達してから得ていることになる。もし昼間の［Soma 搾り］において［水瓶が］割れた場合、Vaṣaṭ の発声を終結部にもつ Sāman を歌うべきである。祭式の土台は Vaṣaṭ の発声なのだ。彼らは土台にそれを行かせていることになる。もし 3 番目の Soma 搾りにおいて［水瓶が割れた］場合、全く同様にすべきである。

TS 7.5.6: 開放日の議論（≈**KS 33.7**）

(7.5.6.1) ṣaḍaháir mā́sānt sampā́dyā́har útsr̥janti. ṣaḍaháir hí mā́sānt sampáśyanty. ardhamāsáir mā́sānt sampā́dyā́har útsr̥janaty. ardhamāsáir hí mā́sānt sampáśyanty. amāvāyàyā mā́sānt sampā́dyā́har útsr̥janty. amāvāsyàyā hí mā́sānt sampáśyanti. paurṇamāsyā́ mā́sānt sampā́dyā́har útsr̥janti. paurṇamāsyā́ hí mā́sānt sampáśyanti. yó vái pūrṇá āsiñcáti, párā sá siñcati. yáḥ pūrṇā́d udácati // (7.5.6.2) prāṇám asmint sá dadhāti. yát paurṇamāsyā́ mā́sānt sampā́dyā́har utsr̥jánti. saṃvatsarā́yaivá tát prāṇáṃ dadhati. tád ánu sattríṇaḥ prā́ṇanti. yád áhar nótsr̥jéyur yáthā dr̥tir úpanaddho vipátaty, evā́m̐ saṃvatsaró vípated. ā́rtim ā́rcheyur. yát paurṇamāsyā́ mā́sānt sampā́dyā́har utsr̥jánti, saṃvatsarā́yaivá tád udānáṃ dadhati. tád ánu sattríṇa út // (7.5.6.3) ananti. nā́rtim ā́rchanti. pūrṇámāse vái devā́nām̐ sutás. yát paurṇamāsyā́ mā́sānt sampā́dyā́har utsr̥jánti. devā́nām evá tád yajñéna yajñám pratyávarohanti. ví vā́ etád yajñáṃ chindanti yát ṣaḍahásaṃtatam̐ sántam áthā́har utsr̥jánti. prājāpatyám paśúm ā́labhante. prajā́patiḥ sárvā devátā. devátābhir evá yajñā́m̐ sáṃ tanvanti. yánti vā́ eté sávanād yé ’haḥ // (7.5.6.4) utsr̥jánti. turī́yaṃ khálu vā́ etát sávanaṃ, yát sāṃnāyyám. yát sāṃnāyyám bhávati, ténaivá sávanān ná yanti. samupahū́ya bhakṣayanty. etátsomapīthā hy ètárhi. yathāyatanáṃ vā́ etéṣām̐ savanabhā́jo devátā gachanti, yé ’har utsr̥jánty. anusavanám puroḍā́śān nírvapanti. yathāyatanā́d evá savanabhā́jo devátā ávarundhate. ’ṣṭā́kapālān prātaḥsavaná ékādaśakapālān mā́dhyaṃdine sávane dvā́daśakapālām̐s tr̥tīyasavané. chándām̐sy evā́ptvā́varundhate. vaiśvadeváṃ carúṃ tr̥tīyasavané nírvapanti. vaiśvadeváṃ vái tr̥tīyasavanáṃ. ténaivá tr̥tīyasavanā́n ná yanti. //

6 日からなる［祭式］たちによって月々を完全に数えてから、彼らは 1 日を解放する（út sr̥janti[470]）。というのも彼らは 6 日からなる［祭式］たちによって月々を完全に見通しているから。半月たちによって月々を完全に数えてから、彼らは 1 日を解放する。というのも彼らは半月たちによって月々を完全に見通しているから。新月の夜によって月々を完全に数えてから、彼らは 1 日を開放する。というのも彼らは新月の夜によって月々を完全に見通しているから。満月の夜によって月々を完全に数えてから、彼らは 1 日を開放する。というのも彼らは満月の夜によって月々を完全に見通しているから。満たされた［容器］に［液体を］注ぐ者は、溢している。満たされた［容器］から［液体を］汲み上げる者は、Prāṇa をそれに置いている。彼らが満月の夜によって月々を完全に数えてから、1 日を開放するということは、そうして一年に Prāṇa を置いていることになる。それに続いて Sattra 行者たちは息を吐く。彼らは災いに遭わない. 満月に神々のための［Soma］が絞られる。満月の夜によって月々を完全に数えてから、彼らが 1

470 「1 日を解放する」というのは、1 日間は Soma 絞りをせずに Sāṃnāyya を食べることを意味している。Sāṃnāyya は元来新月祭に行われる儀礼である。大島・西村・後藤 [2012: 101]、西村 [2011] を参照。

日を開放するということは、そうして神々のための祭式によって彼らは祭式に降りて戻ってきていることになる。6 日間途切れずに展開したあとに 1 日を開放する者たちは、祭式を分断している。Prajāpati のために犠牲獣祭を行う。一切の神格たちは Prajāpati である。神格たちによって祭式を継続していることになる。1 日を開放する者たちは Soma 搾りから出ていってしまう。Sāṃnāyya とは実質的には 4 番目の Soma 搾りである。Sāṃnāyya があるということ、それによって彼らは Soma 搾りから出ていっていないことになる。一緒に［Indra を］呼び寄せてから、彼らは［Sāṃnāyya を］享受する。というのも彼らはこのとき（休憩日）にこれ（Sāṃnāyya）を Soma 飲みとしているから。Soma 搾りを分け前とする神格たちは 1 日を開放する者たちのそれぞれの拠点に行く。彼らは（朝昼晩の）Soma 搾りに対応して Puroḍāśa を調理して［献供する］。拠点ごとから Soma 搾りを分け前とする神格たちは得ていることになる。8 皿［分の Puroḍāśa］を早朝の Soma 搾りで、11 皿［分の Puroḍāśa］を真昼の Soma 搾りで、12 皿［分の Puroḍāśa］を 3 番目の Soma 搾りで、韻律たちに到達してから彼らは得ていることになる。一切神のための Caru を 3 番目の Soma 搾りの時間に彼らは調理して［献供する］。3 番目の Soma 搾りは一切神なのだ。それによって 3 番目の Soma 搾りから彼らは出て行っていないことになる。

TS 7.5.7: 開放日についての議論（≈KS 33.7）

TS 7.5.7(1): 新月の夜・満月の夜・Vyaṣṭakā の夜（≈KS 33.7(1)）

(7.5.7.1) "utsr̥jyā́3ṃ nótsr̥jyā́3m" íti mīmāṁsante brahmavādínas. tád v āhur "utsr̥jyam evá=" íty. "amāvāsyā̀yāṃ ca paurṇamāsyā́ṃ cotsr̥jyam" íty āhur "eté hí yajñáṃ váhata" íti. "té tvā́vá nótsr̥jye" íty āhur "yé avāntaráṃ yajñám bhejā́te" íti. "yā́ prathamā́ vyàṣṭakā tásyām utsr̥jyam" íty āhur, "eṣá vái māsó viśará" íti. nā́diṣṭam // (7.5.7.2) útsr̥jeyur. yád ā́diṣṭam utsr̥jéyur yādṛ́śe púnaḥ paryāplāvé mádhye ṣaḍahásya sampádyeta. ṣaḍaháir mā́sānt sampā́dya, yát saptamám áhas, tásminn útsr̥jyeyus.

「解放されるべきか、解放されるべきでないか」と Brahman を議論する者たちは熟考している。それについて［人々は］言っている、「解放されるべきである」と。「新月の夜においても満月の夜においても解放されるべきである」と言っている者たちもいる、「というのもこの 2 つが祭式を運んでいるから」と。「しかしその 2 つは解放されるべきではない」と言っている者たちもいる、「中間で祭式を分け前として持っている 2 つが」と。「最初の Vyaṣṭakā である［夜］において解放するべきである」と言っている者たちもいる、「この月は拡散（viśará-）しているのだ」と。彼らは指定された［日］を解放するべきではない。彼らが指定された［日］を解放するなら、再び 6 日からなる［祭式］の転換（paryāplāva）となる真ん中において合計されるように、6 日からなる［祭式］たちによって月々を完全に数えた後で、そのような 7 日目において彼らは解放するべきである。

TS 7.5.7(2): 開放日がある場合には、**Puroḍāśa** を準備し、**Soma** 祭の代替としての **Iṣṭi** 献供を行う（≈**KS 33.7(2)**）

tád agnáye vásumate puroḍā́śam aṣṭā́kapālaṃ nírvapeyur, aindráṃ dádhi=, índrāya marútvate puroḍā́śam ékādaśakapālaṃ, vaiśvadevā́ṃ dvā́daśakapālam. agnér vái vásumataḥ prātaḥsavanám. yád agnáye vásumate puroḍā́śam aṣṭā́kapālaṃ nirvápati, devátām evá tád bhāgínīṃ kurvánti // (7.5.7.3) sávanam aṣṭā́bhír úpayanti. yád aindráṃ dádhi bhávati, índram evá tád bhāgadhéyān ná cyāvayanti. índrasya vái marútvato mā́dhyaṃdinaṁ sávanam. yád índrāya marútvate puroḍā́śam ékādaśakapālaṃ nirvápanti, devátām evá tád bhāgínīṃ kurvánti, sávanam ekādaśábhir úpayanti. víśveṣāṃ vái devā́nām ṛ̥bhumátāṃ tṛ̥tīyasavanám. yád vaiśvadevā́ṃ dvā́daśakapālaṃ nirvápanti, devátā evá tád bhāgínīḥ kurvánti, sávanaṃ dvādaśábhiḥ // (7.5.7.4) úpayanti. prājāpatyám paśúm ā́labhante. yajñó vái prajā́patir. yajñásyā́nanusargāya=.

そうして Vasu たちを伴った Agni に 8 皿［分の］Puroḍāśa を彼らは分配すべきである。Indra のためには凝乳を、Marut たちを伴った Indra には 11 の皿に載った Puroḍāśa を、一切神のためには 12 皿［分の Puroḍāśa］を。早朝の Soma 搾りは Vasu たちを伴った Agni に属する。Vasu たちを伴った Agni に 8 皿［分の Puroḍāśa］を分配するということによって彼らは神格を分け前をもつものにしていることになる。Soma 搾りを 8 によって行なっている。酸乳が Indra に属するということ、それで彼らは Indra を分け前から排除していないことになる。真昼の Soma 搾りは Marut を伴った Indra に属する。Marut を伴う Indra に 11 皿［分の］Puroḍāśa を調理して［献供する］。彼らはそうして神格を分け前をもつ者にして、Soma 搾りを 11［皿分の Puroḍāśa］によって行う。3 番目の Soma 搾りは Ṛ̥bhu を伴う一切神に属する。一切神のための 12 皿［分の Puroḍāśa］を調理して［献供する］ということ、彼らはそうして神格たちを分け前をもつ者たちにして、Soma 搾りを 12［皿分の Puroḍāśa］によって行う。彼らは Prajāpati のための犠牲獣祭を行う。Prajāpati は祭式なのだ。祭式を休み続けないように。

TS 7.5.7(3): 21 日祭（夏至祭）後の後半の **6** か月の開始（≈**KS 33.7(3)**）

abhivartá itáḥ ṣáṇ māsó brahmasāmám bhavati. bráhma vā́ abhivartó. bráhmaṇaivá tát suvargáṃ lokám abhivartáyanto yanti. pratikūlám iva hī́táḥ suvargó loká. "índra krátuṃ na ā́ bhara pitā́ putrébhyo yáthā śíkṣā no asmín puruhūta yā́mani jīvā́ jyótir aśīmahi=" íty amúta āyatā́ṁ ṣáṇ māsó brahmasāmám bhavaty. ayáṃ vái lokó jyótiḥ, prajā́ jyótir. imám evá tál lokám páśyanto ’bhivádanta ā́yanti. //

Abhivarta［-Sūkta］に合わせて、これ（夏至祭）以降 6 カ月間（つまり 1 年 Sattra の後半）Brahma-Sāman が用いられる。Abhivarta は Brahman なのだ。彼らはそうして Brahman によって天界に向かって行っていることになる。というのも天界はあたかもここから向こう岸にあるかのようであるから。「Indra よ、我らに意志力をもたらせ、父が息子たちにするように。この道において我らを助けよ、多くの者から呼ばれる者よ。我らは生きて光に至りたい」。と あそこ（夏至祭）からやってきた者たちにとって、6 カ月間 Brahma-Sāman は用いられる。光はこの世界、光は子孫なのだ。彼らはそうしてこの世界を見ながら、挨拶しながら、やってきていることになる。

TS 7.5.8: 1 年 Sattra の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（1）

TS 7.5.8(1): Mahāvrata 祭で使用されるさまざまな Sāman（≈KS 34.5; TB 1.2.6.6−7）

(7.5.8.1) devā́nāṃ vā́ ántaṃ jagmúṣām indriyáṃ vīryàm ápākrāmat. tát krośénā́vārundhata. tát krośásya krośatvám. yát krośéna cā́tvālasyā́nte stuvánti. yajñásyaivā́ntaṃ gatvéndriyáṃ vīryàm ávarundhate. sattrásyárddhyāhavanī́yasyā́nte stuvanty. agním evópadraṣṭā́raṃ kṛtvárddhim úpayanti. prajā́pater hṛ́dayena havirdhā́ne ’ntá stuvanti. premā́ṇam evā́sya gachanti. ślokéna purástāt sádasaḥ // (7.5.8.2) stuvanty ánuślokena paścā́d. yajñásyaivā́ntaṃ gatvā́ ślokabhā́jo bhavanti. navábhir adhvaryúr údgāyati. náva vái púruṣe prāṇā́ḥ. prāṇā́n evá yájamāneṣu dadhāti. sárvā aindríyo bhavanti. prāṇéṣv evéndriyáṃ dadhaty. ápratihṛtābhir údgāyati. tásmāt púruṣaḥ sárvāṇy anyā́ni śīrṣṇó ’ṅgāni prátyacati. śíra evá ná. pañcadaśā́m̐ rathaṃtarám bhavati=. indriyám evā́varundhate. saptadaśám // (7.5.8.3) bṛhát. annā́dyasyā́varuddhyā. átho, práivá téna jāyanta. ekaviṁśám bhadrám. dvipádāsu prátiṣṭhityai. pátnaya úpagāyanti. mithunatvā́ya prájātyai. prajā́patiḥ prajā́ asṛjata. sò ’kāmayata=, "āsā́m ahā́m̐ rājyám párīyām" íti. tā́sā́m̐ rājanenaivá rājyám páryait. tád rājanásya rājanatvā́ṃ. yád rājanám bhávati, prajā́nām evá tád yájamānā rājyám páriyanti.

果てへと達した 神々の Indra 力、英雄的な力は歩み去った。彼らはそれを Krośa（「叫び声」）［Sāman］によって得た。それが Krośa［Sāman］が Krośa（「叫び声」）と呼ばれる所以である。彼らが Krośa［Sāman］を使って穴 の際で Stotra を歌うということで、祭式の果てに行った後、彼らは Indra 力、英雄的な力を得ていることになる。Sattra の成功［Sāman］を使って Āhavanīya［火］の際で Stotra を歌う。Agni を証人にした後で、彼らは成功に向かって行く。Prajāpati の心［Sāman］によって Havirdhāna の中で彼らは Stotra を歌う。彼らは彼のお気に入りになる 。彼らは Śloka［-Sāman］を使って Sadas の前で Stotra を歌う。Anuśloka を使って［Sadas の］後ろで。祭式の果てに行って、彼らは［神々の］声を分け前とする者たちになる。9 つの［詩節］によって Adhvaryu は Udgītha を歌う。人間において生命諸機能は 9 つある。彼は生命諸機能を祭主たちに置いていることになる。全ての［生命諸機能］は Indra に属する。彼らは生命諸機能の上に Indra 力を置いていることになる。Pratihāra を含まない［詩節］によって Udgītha を歌う。それゆえ人間は頭以外の手足を収縮させる。頭だけは［収縮させられ］ない。Pañcadaśa[-Stoma] (15)は Rathaṃtara で用いられる。彼らは Indra 力を得ていることになる。Saptadaśa[-Stoma] (17)は Bṛhat で用いられる。食べ物を得るために。そしてまた彼らはそれによって繁殖していることになる。21 の［詩節］からなる［Stoma］は Bhadra［-Sāman］で用いられる。2 パーダからなる［詩節］においてしっかりと立つために。妻たち は近くで歌う。一対になるために、繁殖するために。Prajāpati は生き物たちを創り出した。彼は望んだ、「私はこれら（生き物たち）の王権を巡って［獲得］したい」と。彼は Rājana［-Sāman］を使ってそれら（生き物たち）の王権を巡って［獲得］した。それが Rājana［-Sāman］が Rājana（「王に属する」）と呼ばれる所以である。Rājana［-Sāman］が用いられるということで、祭主たちは生き物たちの王権を巡って［獲得］していることになる。

TS 7.5.8(2): Mahāvrata 祭において Pañcaviṃśa-Stoma を用いる

pañcaviṁśám bhavati. prajā́pateḥ // (7.5.8.4) ā́ptyai. pañcábhis tíṣṭhanta stuvanti. devalokám evā́bhíjayanti. pañcábhir ā́sīnā. manuṣyalokám evā́bhíjayanti. dáśa sámpadyante. dáśākṣarā virā́ḍ. ánnaṃ virā́ḍ. virā́jaivā́nnā́dyam ávarundhate. pañcadhā́ viniṣádya stuvanti. páñca díśo. dikṣav èvá prátitiṣṭhanti. ékaikayā́stutayā samā́yanti. digbhyá evā́nnā́dyaṁ sámbharanti.

Pañcaviṃśa[-Stoma] (25) からなる［Sāman］が用いられる。Prajāpati に到達するために。5 つによって立ちながら彼らは Stotra を歌う。彼らは神々の世界を勝ち取っていることになる。5 つによって彼らは座りながら［Stotra を歌う］。彼らは神々の世界を勝ち取っていることになる。合計は 10 になる。Virāj は 10 音節からなる。Virāj は食べ物である。彼らは Virāj によって食べ物を得ていることになる。5 つに分かれて座った後、彼らは Stotra を歌う。方位は 5 つある。方位たちにおいて彼らはしっかりと立っていることになる。一つずつ Stotra として歌われる［詩節］によって 彼らは一か所に集まっていく。彼らは方位たちから食べ物を一か所に持ってきていることになる。

TS 7.5.8(3): Udgātar 祭官が Udgītha を歌う

tā́bhir udgātódgāyati. digbhyá evā́nnā́dyam // (7.5.8.5) sambhṛ́tya téja ātmán dadhate. tásmād ékaḥ prāṇáḥ sárvāṇy áṅgāny avaty. átho, yáthā suparṇá utpatiṣyáñ chíra uttamáṃ kurutá, evám evá tád yájamānāḥ prajā́nām uttamā́ bhavanty.

それら（詩節）を使って Udgātar は Udgītha を歌う 。方位たちから食べ物を一か所に持ってきた後、彼らは鋭い光を自分に置いていることになる。それゆえ一つの生命機能が全ての手足を助けている。そしてまた、鷹が飛び上がろうとして自分の頭を一番上にするのと同様に、祭主たちは生き物たちの一番上になっていることになる。

TS 7.5.8(4): Udgātar 祭官が玉座に座る

āsandī́m udgātā́ rohati. sā́mrājyam evá gachanti.

Udgātar が玉座（āsandī́-）に登る。彼らは大王の権限に達していることになる。

TS 7.5.8(5): Hotar 祭官がぶらんこに乗る

pleṅkháṁ hótā. nā́kasyaivá pṛṣṭháṁ rohanti.

Hotar はぶらんこに［乗る］。彼らは天空の背に登っていることになる。

TS 7.5.8(6): Adhvaryu 祭官が 2 つの草束に乗る

kūrcā́v adhvaryúr. bradhnásyaivá viṣṭápaṃ gachanty. etā́vanto vái devalokā́s. téṣv evá yathāpūrvám prátitiṣṭhanty. átho, ākrámaṇam evá tát sétuṃ yájamānāḥ kurvate. suvargásya lokásya sámaṣṭyai.

Adhvaryu は 2 つの草束（kurcá-）に［乗る］。彼らは赤黄色（bradhná-）のもの（太陽）の表面 に達していることになる。神々の世界はこれくらい多くあるのだ。それらにおいて順序に従って彼らはしっかりと立っていることになる。そしてまた、祭主たちはそうして自分たちのために踏み台となる橋を作っていることになる。天界に完全に至るために。

TS 7.5.9: 1 年 Sattra の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（2）

TS 7.5.9(1): Arkya-Sāman によって Prajāpati が生き物たちを創出した神話

(7.5.9.1) arkyèṇa vái sahasraśáḥ prajā́patiḥ prajā́ asr̥jata. tā́bhya ílāṃdenérāṃ lū́tām ávārunddha. yád arkyàm bhávati, prajā́ evá tád yájamānāḥ sr̥janta. ílāṃdam bhavati. prajā́bhya evá sr̥ṣṭā́bhya írāṃ lū́tām ávarundhate. tásmād, yā́m̐ sámām̐ sattrā́m̐ sámr̥ddhaṃ, kṣódhukās tā́m̐ sámām prajā́. íṣam̐ hy ā̀sām ū́rjam ādádate. yā́m̐ sámāṃ vyr̥ddham, ákṣodhukās tā́m̐ sámām prajā́ḥ. // (7.5.9.2) ná hy ā̀sām íṣam ū́rjam ādádata.

Arkya［-Sāman］を使って Prajāpati は幾千もの生き物たちを創り出した。彼はそれら（生き物たち）のために Ilāṃda［-Sāman］を使って切り分けられた軽食を得た。Arkya［-Sāman］が用いられるということで、祭主たちは子孫を創り出していることになる。Ilāṃda［-Sāman］が用いられる。創り出された子孫のために彼らは切り分けられた軽食を得ていることになる。それゆえ、どの年の間に Sattra が完全に成功したとしても、その年の間は生き物たちは飢える者たちになる。というのも彼ら（Sattra 参加者たち）がこれら（生き物たち）の飲み物、栄養を取っているから。どの年の間に失敗したとしても、その年の間は生き物たちは飢えない者たちになる。というのも彼ら（Sattra 参加者たち）がこれらの飲み物、栄養を取っていないから。

TS 7.5.9(2): 大きな声を出す

utkrodáṃ kurvate. yáthā bandhā́n mumucānā́ utkrodáṃ kurváta, evám evá tád yájamānā devabandhā́n mumucānā́ utkrodáṃ kurvata, íṣam ū́rjam ātmán dádhānā.

彼らは大きな声を出す。束縛から解放された者たちが大きな声を出すのと同様に、祭主たち（＝Sattra 行者たち）は神々の束縛から解放された者として大きな声を出すべきである、飲み物、栄養を自分に置いている者として。

TS 7.5.9(3): 100 の弦をもつ琴を演奏する

vāṇáḥ śatátantur bhavati. śatā́yuḥ púruṣaḥ śaténdriya. ā́yuṣy evéndriyé prátitiṣṭhanty.

100 の弦をもつ琴が用いられる。人間は 100 の寿命をもち、100 の Indra 力をもつ。寿命、Indra 力において彼らはしっかりと立っていることになる。

TS 7.5.9(4): 競争する

ājíṃ dhāvanty. ánabhijitasyābhíjityai.

彼らは競争を走る。勝ち取られていないものを勝ち取るために。

TS 7.5.9(5): 太鼓を叩く

dundubhī́nt samā́ghnanti. paramā́ vā́ eṣā́ vā́g, yā́ dundubháu. paramā́m evá // (7.5.9.3) vā́cam ávarundhate. bhūmidundubhím ā́ghnanti. yáivémā́m vā́k práviṣṭā, tā́m evā́varundhaté. ’tho, imā́m evá jayanti.

彼らは太鼓を一斉に叩く。太鼓の声というのは最高のものなのだ。彼らは最高の声を得ていることになる。彼らは大地を太鼓にして叩く。この［大地］に入った声を彼らは得ていることになる。そしてまた彼らはこの［大地］を勝ち取っていることになる。

TS 7.5.9(6): 全ての声たちを出す

sárvā vā́co vadanti. sárvāsāṃ vācā́m ávaruddhyā.

全ての声たちを彼らは出す。全ての声を得るために。

TS 7.5.9(7): 2 人が新鮮な獣の革を巡って競う

ārdré cárman vyā́yachete. indriyásyā́varuddhyā.

2 人が新鮮な獣の皮を巡って競う。Indra 力を得るために。

TS 7.5.9(8): 褒める者と貶す者

ā́nyáḥ króśati, prā́nyáḥ śaṁsati. yá ākróśati, punā́ty, eváinānt sá. yáḥ praśáṁsati, pūtéṣv evā́nnā́dyaṃ dadhāty. ṛ́ṣikṛtaṃ ca // (7.5.9.4) vā́ eté devákṛtaṃ ca pū́rvair mā́sair ávarundhate. yád bhūtechádāṁ sā́māni bhávanty, ubháyasyā́varuddhyai.

片方は貶し、片方は褒める。貶す者は彼らを清めていることになり、褒める者は清められた者たちに食べ物を置いていることになる。これらの者は Ṛṣi によってなされたことと神々によってなされたことを最初の月々を使って得ているのだ。Bhūtechad たちの Sāman たちが用いられるということは、両方を得るためである。

TS 7.5.9(9): 1 年 **Sattra** を行う者は雌雄一対であることから離れているが、**Mahāvrata** 祭では **Vedi** の内側で雌雄一対となる

yánti vā́ eté mithunā́d, yé saṃvatsarám upayánty. antarvedí mithunáu sámbhavatas. ténaivá mithunā́n ná yanti. //

一年［Sattra］を行う者たちは（雌雄）一対であること（性的な行為）から離れているのだ。Vedi の内側で二人が一対になる。それによって彼らは一対であることから離れていっていないことになる。

TS 7.5.10: 1 年 Sattra の締めくくりとしての Mahāvrata 祭（3）（≈KS 34.5; TB 1.2.6.6−7）

TS 7.5.10(1): 獣の皮を突き刺す

(7.5.10.1) cármā́va bhindanti. pāpmā́nam eváiṣām ávabhindanti. "mā́pa rātsīr mā́ti vyātsīr" íty āha. sampraty èváiṣām pāpmā́nam ávabhindanty.

彼らは獣の皮を突き刺す。彼らは彼らの悪を突き刺していることになる。「決して過ちをするな、決して貫くな」と唱える。彼らはまさに彼らの悪を突き刺していることになる。

TS 7.5.10(2): 女奴隷（**dāsī-**）たちが **Mārjālīya** 火の回りで地面を踏みつつ歌いながら踊る

udakumbhā́n adhinidhā́ya dāsyò mārjālī́yam párinṛtyanti, padó nighnatī́r idámmadhuṃ gā́yantyo. mádhu vái devā́nām paramám annā́dyam. paramám evā́nnā́dyam ávarundhate. padó níghnanti. mahīyā́m eváiṣu dadhati. //

水瓶を下に置いた後、女奴隷たちは Mārjālīya［火］の周りで踊る、足で地面を叩きつつ「この蜜」 を歌いながら。神々にとって蜜が最高の食べ物なのだ。彼らは最高の食べ物を得ていることになる。彼らは足で地面を叩く。彼らは彼ら（祭主たち）に高揚感を置いていることになる。

MS Soma 祭章の 1 年 Sattra の要素（MS 4.8.10）

（夏至祭と思われる個所）

yáthā vái śālaiváṁ saṁvatsarás. tásya, yáthā pákṣasī, eváṃ pákṣasī.
yáthā madhyamó vaṁśá, eváṃ divākīrtyàm.
yáthā vā́ idáṁ śā́lāyāḥ pákṣasī madhyamáṁ vaṁśám abhisamāgáchanty, eváṁ vā́ etát saṁvatsará sya pákṣasī divākīrtyàm abhisáṃtanoti. yád eṣá śithiráḥ syā́d, ávaśīryeta.
yáthā madhyamó vaṁśá, eváṃ divākīrtyàm.

一年は小屋と同様である。［小屋に］両翼があるのと同様に、それ（一年）には両翼がある。［小屋にとって］屋根の梁が真ん中であるのと同様に、［１年にとって］Divākīrtya は［真ん中である］。彼らが小屋の両翼を中心である屋根の梁に結合させるのと同様に、彼は１年の両翼を Divākīrtya に接続する。これ（真ん中）が緩んでいたら、［１年は］壊れてしまうだろう。［小屋にとって］屋根の梁が真ん中であるのと同様に、［１年にとって］Divākīrtya は［真ん中である］。

yád etásminn áhany eté gráhā gṛhyánté, ’hno draḍhimné ’śithiratvāya.
śukrā́grā etád áhar gráhā bhavanti. traíṣṭubho vaí śukrás. traíṣṭubham etád áhaḥ.
pratyúttabdhyai +sayattvā́ya.[471] sauryó gráho gṛhyáte. sauryáḥ paśúr ā́labhyate.
asā́ ādityá etád áhas. táṁ sākṣā́d ṛdhnoti.

例の日（Divākīrtya の日）に例の Graha たちが汲まれるのは、日が堅固となるためであり、緩まないことのためである[472]。例の日、Śukra（「白く輝くもの」、太陽を示唆）を先頭とする Graha たちが献じられる。Śukra（-Graha あるいは「太陽」）は Triṣṭubh に属するのだ。この日は Triṣṭubh に属するのだ。［それは日が］（1 年の真ん中に）支え

---

[471] 訂正した。Ed sayatvā́ya. この訂正の根拠を次に述べる。まず、sayatvā́ya という語形を認める場合、saya-tvā́ya という分析が成り立つ。そして、saya-という語形は√sā 「結ぶ binden、結びつける festbinden、縛る fesseln」（EWAia s. v. *SĀ*）から形成されるものと解釈される（例えば、PW において saya は√sā から二次的に解釈された√si からの形成とみなされている）。しかし、-a- で終わる行為者名詞（あるいは形容詞）に -tvá- を付けて抽象名詞を形成する用例は他にない。AiG II 1 p. 74 によれば、Saṃhitā 文献と TB にみられる sayatvāya は、sa-yat-tvā́ya（「結合していることのために zum Zweck des Verbundenseins」）と解釈される。sa-yát- f. は、動詞前接辞 sa-（sam-のゼロ階梯*sm̥-）「一緒に、伴って、同時に」（EWAia s. v. *sám*）と、√yat 「並ぶ sich aufstellen、しっかりとした仕方で姿勢をとる in fester Weise eine Stellung einnehmen」（EWAia s. v. *YAT*）から作られる語根複合語（Wurzelkompositum）である。この sa-yát-に、（「...であること」を意味する）抽象名詞を形成する接辞 -tvá-（語根部分は常に標準階梯になり、高ピッチアクセントは常に -tvá- に置かれる。AiG II 2 711−713 を参照）を付加した結果、sa-yat-tvá-という語形が生まれる。そして、sayattvā́ya は「一緒に並んでいることのために」、あるいは、「整列していることのために」という意味であろう。この文脈においては、1 年の真ん中である Divākīrtya の日が前後の日々としっかりつながっているということが意図されているので、この語形と意味で解釈することは妥当である。

[472] KS aśithilatvāya

留められるためであり、（前後の日々と）一緒に並んでいることのためである。Sūrya（太陽神）のための Graha が汲まれる。Sūrya のための犠牲獣が捕まえ献じられる。例の日はあの太陽である。彼はそれ（太陽）に明らかに到達していることになる。

ṣáḍ gráhā gr̥hyánte. paśúḥ saptamá ā́labhyate. saptá vaí śīrṣán prāṇā́s. asā́ ādityáḥ śíraḥ.
śīrṣán vā́ etát prāṇā́n dadhāti.

６つの Graha が献じられる。犠牲獣が７番目として献じられる。頭部には７つの prāṇa があるのだ[473]。頭部はあの太陽である。彼はこのようにして頭部に［７つの］prāṇa を置いていることになる。

（冬至祭と思われる個所）

índro vái vr̥trám ahan. sá imáṃ lokám abhyàjayat. amúṃ tú lokáṃ nā́bhyàjayat.
táṁ viśvákarmā bhūtvā́bhyàjayat. yád vaiśvakarmaṇó gráho gr̥hyáte, ’múṣya lokásyābhíjityai.
yánti vā́ etè ’smā́l lokā́d, yé vaiśvakarmaṇáṃ gráhaṃ gr̥hṇáte. párāñco hí yánti. īśvarā́ḥ prámetoḥ.
śvo bhūtá ādityáṃ gr̥hṇīran. iyáṁ vā́ áditir. iyáṃ pratiṣṭhā́. yád ādityás, asyā́m
+evá[474] prátitiṣṭhanti. táyor anyámanyam ā́ parārdhā́t pákṣaso gr̥hṇīran.
víśvam anyéna kárma kurvāṇā́ yánti. iyáṁ vā́ áditis. asyā́m anyéna prátitiṣṭhanti.[475]
tā́ ubhaú sahā́rke gr̥hṇīrann, ántaṃ gatvā́. ántam evá gatvóbháyor lokáyoḥ prátitiṣṭhanti.
ādityénāsmíṃl loké vaiśvakarmaṇénāmúṣmin //

Indra は Vr̥tra を殺したのだ。彼（Indra）はこの世界を勝ち取った。しかし、あの世界を勝ち取らなかった。それを Viśvakarman になった後に勝ち取った。Viśvakarman のための Graha が汲まれるのは、あの世界を勝ち取るためである。例の者たちはこの世界から進んでいるのだ、Viśvakarman のための Graha を汲む者たちは。というのも彼らはあちら向きに進んでいるから。彼らは衰弱死する恐れがある。翌日になった時に、彼らは Aditi のための［Graha］を汲むべきである。Aditi はこの［大地］なのだ。基盤はこの［大地］なのだ。Aditi のための［Graha］が［汲まれる］とき、彼らはこの［大地］においてしっかりと立っていることになる。彼らはその両方の［Graha］のそれぞれを向こう側（1 年の後半の終わり）まで汲むべきである。各行為を一方の［Graha］を用いて行いながら彼らは進む。Aditi はこの［大地］なのだ。彼らはこの［大地］においてもう一方を用いてしっかりと立つ。彼らはその両方を一緒に Arka[476]において汲むべきである、端（anta-）に達した後に。彼らは端に達した後に両方の世界においてしっかりと立っていることになる。Aditi のための［Graha］を用いてこの世界において、Viśvakarman のための［Graha］を用いてあの［世界］において。

---

[473] Cf. 伊澤 [2020].

[474] 訂正した。Ed avá.

[475] 訂正した。Ed pratitiṣṭhanti.

[476] KS と TB では、二つの Graha が、Arka ではなく Mahāvrata において汲まれると述べられている。KS 30.5: tā ubhau saha mahāvrate gr̥hyete. TB 1.2.3: tā́v ubháu sahá mahāvraté gr̥hyete.

KS Soma 祭章の 1 年 Sattra の要素（KS 30.5）

（夏至祭と思われる個所）

saṃtatir vā ete grahā. yathā vai śālaivaṁ saṃvatsaro. yathā śālāyāḥ pakṣasī, evaṁ saṃvatsarasya pakṣasī. yathā madhyamo vaṁśa, evaṃ divākīrtyaṃ. yad ete na gṛhyeran, viṣūcī saṃvatsarasya pakṣasī vyavasraṁseyātām. ārtim ārcheyur, yad ete gṛhyante. yathā śālāyāḥ pakṣasī madhyamaṃ vaṁśam abhisamāyacchanty, evam evaitat saṃvatsarasya pakṣasī divākīrtyam abhisaṃtanvanti. te sarve saha divākīrtye gṛhyante. yathā vai madhyamo vaṁśa, evaṃ divākīrtyam. yad vai saubalas syād, avaśīryeta. yad ete na gṛhyante, draḍhimna evānunaddhyā aśithilatvāya. śukrāgrā etad ahar gṛhyante. traiṣṭubho vai śukras. traiṣṭubham etad ahaḥ. pratyuttabdhyai +sayatvāya.[477] saurya etad ahaḥ paśur ālabhyate. sauryo graho gṛhyate. asau vā āditya. etad ahas tam eva pratyakṣam ṛdhnuvanti. ṣaḍ etad ahar atigrāhyā gṛhyante. paśus saptamas. sapta prāṇās. asā ādityaś. śiraḥ prajānām. sīrṣann eva prāṇān dadhāti. tasmāt sapta śīrṣaṇyāḥ prāṇās.

例の Graha たちは一繋ぎのもの（saṃtati-）である。一年は小屋と同様である。［小屋に］両翼があるのと同様に、一年には両翼がある。［小屋にとって］屋根の梁が真ん中であるのと同様に、［１年にとって］Divākīrtya は［真ん中である］。もし例の［Graha］たちが汲まれなければ、一年の両翼は両方向に向かってばらばらになり、災難に遭うだろう。もし例の［Graha］たちが汲まれれば、小屋の両翼を真ん中の屋根の梁に固定するように、一年の両翼を Divākīrtya[-Sāman]に一体化させ、災難に遭わない。それらすべての［Graha］は一緒に Divākīrtya において汲まれる。［小屋にとって］屋根の梁が真ん中であるのと同様に、［１年にとって］Divākīrtya は［真ん中である］。Saubala が用いられるなら、崩壊してしまうだろう。例の［Graha］が汲まれないのは、堅固となるためであり、縫い合わせられるためであり、緩まないためである。Śukra[-Graha]を先頭とする［Graha］たちが例の日に汲まれる。Śukra[-Graha]は Triṣṭubh に属するものなのだ。例の日は Triṣṭubh に属するものなのだ。支え留められるために、途切れないために。Sūrya のための犠牲獣が例の日に捕まえ献じられる。Sūrya のための Graha が汲まれる。太陽はあの［世界］なのだ。彼らは例の日に明らかにそれに到達していることになる。6 つの Atigrāhya たちがこの日に汲まれる。犠牲獣は 7 番目として［捕まえ献じられる］。生体諸機能（prāṇa-）は 7 つ。太陽はあの［世界］。頭（śiras-）は生物たちのものである。彼は頭に生体諸機能を置いていることになる。それゆえ 7 つの頭の生態諸機能がある。

（冬至祭と思われる個所）

indro vai vṛtraṁ hatvā, sa imāṃl lokān abhyajayat. tasyāsau loko ’nabhijita āsīt. taṃ viśvakarmā bhūtvābhyajayat. yad vaiśvakarmaṇo gṛhyate, ’muṣya lokasyābhijityai. yanti vā ete ’smāl lokād, ye vaiśvakarmaṇaṃ gṛhṇate. parāñca iva hi ete na rohanti. ta īśvarāḥ prametor. ādityaṁ śvo gṛhṇīran. iyam aditir. asyām eva tena pratitiṣṭhanti. ā parārdhāt saṃvatsarasyānyamanyaṃ gṛhṇīran. viśvāny anyena karmāṇi kurvāṇā yanty. asyām anyena pratitiṣṭhanti. tā ubhau saha mahāvrate gṛhyete. ’ntam evāgatyobhayor lokayor ṛdhnuvanti/ vaiśvakarmaṇenāmuṣminn ādityenāsmin. arkyam ukthaṃ bhavaty. annaṃ vā arkyam. annāda eva tena pratitiṣṭhanti //

[477] 訂正した。Ed sayatvāya.

Indra は Vr̥tra を殺した後、彼はこれら諸世界を勝ち取った。彼のあの世界は勝ち取られていなかった。彼はそれを Viśvakarman になった後に勝ち取った。Viśvakarman のための［Graha］が汲まれるのは、あの世界を勝ち取るためである。例の者たちはこの世界から進んでいるのだ、Viśvakarman のための［Graha］を汲む者たちは。というのも例の者たちは向こう側のように昇らないから。そのような彼らは衰弱死する恐れがある。彼らは Aditi のための［Graha］を翌日に汲むべきである。Aditi はこの［大地］である。彼らはこの［大地］においてそれによってしっかりと立っていることになる。彼らは 1 年の後半まで交互に汲むべきである。彼らは各々の諸行為を一方の［Graha］で行いながら進む。彼らはこの［大地］においてもう一方の［Graha］でしっかりと立つ。それら両方は一緒に Mahāvrata において汲まれる。端にやって来た後に、彼らは両方の世界において成就する。Viśvakarman のための［Graha］によってあの「世界」において、Aditi のための［Graha］によってこの［世界］において。Arka に関する Uktha が用いられる。Arka に関する［Uktha］は食べ物なのだ。彼らは食べ物を食べる者たちとしてそれによってしっかりと立っていることになる。

TB Gavāmayana 章（TB 1.2.2−6）

TB 1.2.2: 9 日間の儀礼（≈KS 33.4）

návaitā́ny áhāni bhavanti. / náva vái suvargā́ lokā́ḥ. / yád etā́ny áhāny upayánti, / navásv evá tát suvargéṣu lokéṣu satríṇaḥ pratitíṣṭhanto yanti. / "agniṣṭomā́ḥ páraḥsāmānaḥ kā́ryā" íty āhuḥ / "agniṣṭomásaṃmitaḥ suvargó loká" íti. / dvā́daśāgniṣṭomásya stotrā́ṇi. / dvā́daśa mā́sāḥ saṃvatsaraḥ. / tát tán ná sū́rkṣyam. / ukthyà evá saptadaśā́ḥ páraḥsāmānaḥ kāryàḥ. // paśávo vā́ ukthā́ni. / paśūnā́m ávarudhyai. / viśvajidabhijítāv agniṣṭomáu. / ukthyàḥ saptadaśā́ḥ páraḥsāmānaḥ. / té sā́ṁstutā virā́jam abhí sáṃpadyante. / dvé cárcāv átiricyete. / ékayā gáur átiriktaḥ. / ékayā́yur ūnáḥ. / suvargó vái lokó jyótiḥ. / ū́rg virā́ṭ. // suvargám evá téna lokám abhíjayanti. /

例の 9 日間が開催される。天界は 9 つなのだ。Sattrin たちが例の 9 日間を執り行うとき、9 つの天界の上にしっかりと立ち続けていることになる。「Paras-Sāman を持つ Agniṣṭoma が行われるべきである」と［ある者たちは］言っている、「天界は Agniṣṭoma と同等のものである」と。Agniṣṭoma には 12 の Stotra がある。1 年は 12 ヶ月である。だから、それは問題にされるべきではない。Saptadaśa[-Stoma] を持ち、Paras-Sāman を持つ Ukthya たちが行われるべきである。Uktha たちは家畜たちなのだ。家畜たちの獲得のために。Viśvajit[-Stoma]と Abhijit[-Stoma]が 2 つの Agniṣṭoma として［用いられる］[478]。Paras[-Sāman] を Sāman とする Saptadaśa[-Stoma] (17) が、Ukthya として［用いられる］。それらは共に Stotra として歌われて Virāj に対して数え合わされる。そして 2 つの詩節が余分となる[479]。Go[-Stoma] は 1 つの［詩節が］余分となる。Āyus[-Stoma] は 1 つの［詩節が］足りない。Jyotis[-Stoma] は天界なのだ。Virāj は滋養なのだ。彼らはそれによって天界を勝ち取っていることになる。

yát páraṁ rā́thantaram, / tát prathamé 'han kāryàm. / bṛhád dvitī́ye. / vairūpáṃ tṛtī́ye. / vairājáṃ caturthé. / śākvaráṃ pañcamé. / raivatáṁ ṣaṣṭhé. / tád u pṛṣṭhébhyo ná yanti. / saṃtátaya eté gráhā gṛhyante, // atigrāhyàḥ páraḥsāmasu. / imā́n eváitáir lokā́n sáṃ tanvanti. / mithunā́ eté gráhā gṛhyante, / atigrāhyàḥ páraḥsāmasu. / mithunám evá táir yájamānā ávarundhate. / bṛhát pṛṣṭháṃ bhavati. / bṛhád vái suvargó lokáḥ. / bṛhatáivá suvargáṃ lokáṃ yanti. / trayastriṁśí nā́ma sā́ma. / mádhyandine pávamāne bhavati. // tráyastriṁśad vái devátāḥ. / devátā evā́varundhate. / yé vā́ itáḥ párāñcaṁ saṃvatsarám upayánti, / ná hainaṃ té svastí sámaśnuvate. / átha ye 'muto 'rvā́ñcam upa yánti, / té hainaṁ svastí sámaśnuvate. / etád vā́ amúto 'rvā́ñcam úpa yanti. / yád evám. / yó ha khálu vā́vá prajā́patiḥ. / sá uv evéndraḥ. / tád u devébhyo ná yanti. //

---

[478] おそらく 9 日間の 1 日目に用いられる Viśvajit-Stoma と 9 日目に用いられる Abhijit-Stoma のことを指している。Agniṣṭoma は 9 日間の最初と最後の日に用いられる形式として述べられている。

[479] おそらく 9 日間の 2、3、4、6、7、8 日目に用いられる 6 つの Saptadaśa-Stoma (17) の詩節を足し合わせたとき、102 詩節となることから、それを Virāj（10 の倍数）で割ったときの余りの 2 詩節のことを指していると思われる。

Rathantara[-Sāman]に属する Para[-Sāman] であるところの［Sāman］が 1 日目に使用されるべきである。Bṛhat[-Sāman] が 2 日目に［使用されるべきである］。Vairūpa[-Sāman] が 3 日目に［使用されるべきである］。Vairāja[-Sāman] が 4 日目に［使用されるべきである］。Śākvara[-Sāman] は 5 日目に[使うべきである]。Raivata[-Sāman] は 6 日目に使うべきである。そして、そのようにして、彼らは Pṛṣṭha たちから逸脱しない。途切れることのない連続（saṃtati-）という例の Graha たちが汲まれる、Para-Sāman たちが［歌われる］とき Atigrāhya[-Graha] として。彼らは、例の [Graha] たちによってこれらの世界を途切れなくしている。一対（mithuna-）という例の Graha たちが汲まれる、Para-Sāman が[歌われる]とき Atigrāhya[-Graha] として。生け贄はこれらの [Graha] との対を得る。Pṛṣṭha[-Sāman] は Pṛṣṭha として適用される。天界は Bṛhat[-Sāman] である。彼らは Brahman を持って天界に進む。真昼の Pavamāna[-Stotra]では、Trayastriṁśi という名前の Sāman が使用される。神々は 33 である。彼らは神々を得る。ここから 1 年［Sattra］を行う者は、安全にそれを達成しない。一方、向こう側からこちら側へ［1 年 Sattra を］行う者は、安全にそれを達成する。このようにして、彼方から彼方を引き受ける。実をいうと Prajāpati である者は、まさに Indra である。そのようにして、彼らは神々から逸脱しない。

TB 1.2.3: 21 日間の儀礼の真ん中の日に用いる Graha（≈MS 4.8.10; KS 30.5）

sáṃtatir vā́ eté gráhāḥ. / yát páraḥsāmānaḥ, / viṣūvā́n divākīrtyàm. / yáthā śā́lāyai pákṣasī, / evā́ṁ saṃvatsarásya pákṣasī. / yád eté ná gṛhyéran, / víṣūcī saṃvatsarásya pákṣasī vyávasraṁseyātām. / ā́rtim ā́rcheyuḥ. / yád eté gṛhyánte, / yáthā śālāyai pákṣasī madhyamáṃ vaṁśám abhí samāyácchati, // evā́ṁ saṃvatsarásya pákṣasī divākīrtyàm abhí sáṃtanvanti. / nā́rtim ā́rchanti. / ekaviṁśám áhar bhavati. / śukrā́grā gráhā gṛhyante. / práty úttabdhyai +sayattvā́ya.[480] / sauryà etád áhaḥ paśúr ālabhyate. / sauryò ’tigrāhyò gṛhyate. / áhar evá rūpéṇa sámardhayanti. / átho, áhna eváiṣá balír hriyate. / saptáitád áhar atigrāhyà̃ gṛhyante. // saptá vái śīrṣaṇyā̃ḥ prāṇā́ḥ. / asā́v ādityáḥ śíraḥ prajā́nām. / śīrṣánn evá prajā́nāṃ prāṇā́n dadhāti. / tásmāt saptá śīrṣán prāṇā́ḥ. / índro vṛtrā́ṁ hatvā́, / ásurān parābhā́vya, / sá imā́n lokā́n abhyàjayat. / tásyāsáu lokó ’nabhijita āsīt. / táṃ viśvákarmā bhūtvā́bhyajayat. / yád vaiśvakarmaṇó gṛhyáte, // suvargásya lokásyābhíjityai. / prá vā́ etè ’smā́l lokā́c cyavante, / yé vaiśvakarmaṇáṃ gṛhṇáte. / ādityáḥ śvó gṛhyate. / iyáṃ vā́ áditiḥ. / asyā́m evá práti tiṣṭhanti. / anyò’nyo gṛhyete. / víśvāny evā́nyéna kármāṇi kurvāṇā́ yanti. / asyā́m anyéna prátitiṣṭhanti. / tā́v ā́parārdhā́t saṃvatsarásyānyò'nyo gṛhyete. / tā́v ubháu sahá mahāvraté gṛhyete. / yajñásyaivā́ntaṃ gatvā́. / ubháyor lokáyoḥ prátitiṣṭhanti. / arkyàm ukthā́ṃ bhavati. / annā́dyasyā́varudhyai. //

Paras-Sāman を［Sāman として］もつ例の Graha たちは継続（saṃtati-）である。Divākīrtya［の日］は中心（viṣūvā́n）である。小屋に両翼があるように、一年には両翼がある。もし例の［Graha］たちが汲まれなければ、一年の両翼は両方向に向かってばらばらになるだろう。彼らは災難に遭うだろう。もし例の［Graha］たちが汲まれれば、小屋の両翼を真ん中の屋根の梁に固定するように、彼らは一年の両翼を Divākīrtya[-Sāman] に対して完全に繋ぐ。彼らは災難に遭わない。［Divākīrtya の日は］Ekaviṁśa[-

[480] 訂正した。Ed sayatvā́ya.

Stoma] を用いる日として開催される。Śukra[-Graha] を先頭とする Graha が汲まれる。支え留めるために、拮抗していることのために。 Sūrya のための犠牲動物はこの日に捕まえ献じられる。Sūrya のための Atigrāhya[-Graha]が汲まれる。彼らは日を［Sūrya の］姿に合致させていることになる。そしてまた、例のものは日の貢ぎ物として支払われる。この日、7 つの Atigrāhya[-Graha]が汲まれる。頭の生体諸機能は 7 つである。諸生物の頭はあの太陽である。彼は諸生物の生体諸機能を頭の上に置く。それゆえ、生体諸機能は頭の上に 7 つある。Indra は Vṛtra を殺し、Asura を倒した後、これら（三つの）世界を勝ち取った。あの世界は彼によって勝ち取られていないものであった。彼はそれを Viśvakarman になってから勝ち取ったのだ。Viśvakarman の[Graha]が汲まれるのは、天界を勝ち取るためである。Viśvakarman の[Graha]を汲む者たちは、この世界から前進する。Aditi の[Graha]は翌日に汲まれる。Aditi はこの［大地］である。彼らはこの［大地］の上にしっかりと立っている。2 つの Graha は交互に汲まれる。彼らは一方の［Graha］によって各々の諸行為を行い続ける。彼らはもう一方の［Graha］によってこの［大地］にしっかりと立つ。その 2 つの Graha は 1 年の後半が始まるまで交互に汲まれる。その 2 つの[Graha]は共に Mahāvrata において汲まれる。Arka に関する Uktha が使用される。食べ物の獲得のために。

TB 1.2.4: 21 日間の儀礼（≈KS 33.6）

ekaviṁśá eṣá bhavati. / eténa vái devā́ ekaviṁśéna. / ādityám itá uttamáṁ suvargáṃ lokám ā́rohayan. / sá vā́ eṣá itá ekaviṁśáḥ. / tásya dáśāvástād áhāni. / dáśa parástāt. / sá vā́ eṣá virā́jy ubhayátaḥ prátiṣṭhitaḥ. / virā́ji hí vā́ eṣá ubhayátaḥ prátiṣṭhitaḥ. / tásmād antarémáu lokáu yán, / sárveṣu suvargéṣu lokéṣv abhitápann eti. //

この［祭式］は Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）。神々はこの Ekaviṁśa-Stoma をもつ（あるいは、21 の［日］からなる）［祭式］によって太陽をここ（大地）から天界へ昇らせた。そのような例のもの（太陽）はここから 21 番目なのだ。それ（太陽＝Ekaviṁśa-Stoma をもつ日）にはこちらから 10 日があり、あちらから 10 日がある。そのようなこれ（太陽）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っている。というのもこれ（祭式）は両側から［支えられて］Virāj においてしっかりと立っているから。それゆえ［彼は］この 2 つの世界（大地と天界）の間を行き続け、全ての天界において都度都度しっかりと立ち続ける。

devā́ vā́ ādityásya suvargásya lokásya / párāco 'tipādā́d abibhayuḥ. / táṃ chándobhir adṝṁhan dhṛ́tyai. / devā́ vā́ ādityásya suvargásya lokásya / ávāco 'vapādā́d abibhayuḥ. / táṃ pañcábhī raśmíbhir údavayan. / tásmād ekaviṁśé 'han páñca divākīrtyā̀ni kriyante. / raśmáyo vái divākīrtyā̀ni. / yé gāyatré, / té gāyatrī́ṣṭ̄tarayoḥ pávamānayoḥ. // mahā́divākīrtyaṁ hótuḥ pṛṣṭhám. / vikarṇáṃ brahmasāmá. / bhā́so 'gniṣṭomáḥ. / áthaitā́ni párāṇi. / párair vái devā́ ādityáṁ suvargáṃ lokám apārayan. / yád ápārayan, / tát párāṇāṃ paratvám. / pāráyanty enaṃ párāṇi, / yá eváṃ véda. / áthaitā́ni spárāṇi. / spárair vái devā́ ādityáṁ suvargáṃ lokám aspārayan. / yád áspārayan, / tát spárāṇāṁ sparatvám. / spāráyanty enaṁ spárāṇi, / yá eváṃ véda. // mahā́divākīrtyaṁ hótuḥ pṛṣṭhám. / vikarṇáṃ brahmasāmá. / bhā́so 'gniṣṭomáḥ. /

神々は太陽が天界から落下することを恐れた。彼らはそれ（太陽）に向かって５本の太陽光線を編み上げた。Divākīrtya［-Sāman］たちは太陽光線たちである。それゆえ Ekaviṁśa-Stoma をもつ日に５つの Divākīrtya［-Sāman］が用いられる。２つの Gāyatra［-Sāman］は Gāyatrī 詩節たちにおいて［歌われ］後半二つの Pavamāna［-Stotra］に属する。 Mahādivākīrtya［-Sāman］は Hotar に属する。Vikarṇa［-Sāman］は Pṛṣṭha［-Stotra］であり Brahmasāma である。Bhāsa［-Sāman］が Agniṣṭoma［-Stotra］として使用される。

áthaitā́ni párāṇi. / párair vái devā́ ādityáṁ suvargáṃ lokám apārayan. / yád ápārayan, / tát párāṇāṃ paratvám. / pāráyanty enaṃ párāṇi, / yá eváṃ véda. / áthaitā́ni spárāṇi. / spárair vái devā́ ādityáṁ suvargáṃ lokám aspārayan. / yád áspārayan, / tát spárāṇāṁ sparatvám. / spāráyanty enaṁ spárāṇi, / yá eváṃ véda. //

次に例の Para［-Sāman］たち［について］。神々は Para［-Sāman］たちによって Āditya を天界に渡らせた。彼らが渡らせた（apārayan）ということが、Para［-Sāman］たちが Para［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知っているならば、Para［-Sāman］たちは彼（祭主）を天界に渡らせる。次に例の Spara［-Sāman］たち［について］。神々は Spara［-Sāman］たちによって Āditya のために天界を確保した（aspārayan）。彼らが確保させた（asprārayan）ということが Spara［-Sāman］たちが Spara［-Sāman］と呼ばれる所以である。［祭主が］このように知っているならば、Spara［-Sāman］たちが彼（祭主）に天界を確保させる。

TB 1.2.5: 11 頭の動物犠牲（ekādaśinī）（≈KS 34.1）

ápratiṣṭhāṃ vā́ eté gacchanti, / yéṣāṁ saṃvatsaré ’nāpté ’tha / ekādaśíny āpyáte. / vaiṣṇaváṃ vāmanám ā́labhante. / yajñó vái víṣṇuḥ. / yajñám evā́labhante prátiṣṭhityai. / aindrāgnám ā́labhante. / indrāgnī́ vái devā́nām áyātayāmānau. / yé evá deváte áyātayāmnī, / té evā́labhante. // vaiśvadevám ā́labhante. / devátā evā́varundhate. / dyāvāpṛthivyā̀ṃ dhenúm ā́labhante. / dyā́vāpṛthivyór evá práti tiṣṭhanti. / vāyavyàṃ vatsám ā́labhante. / vāyúr eváibhyo +yathāyatanā́d[481] devátā ávarundhe. / ādityā́m áviṃ vaśā́m ā́labhante. / iyáṃ vā́ áditiḥ. / asyā́m evá prátitiṣṭhanti. / maitrāvaruṇī́m ā́labhante. // mitréṇaivá yajñásya svìṣṭaṁ śamayanti. / váruṇena dúriṣṭam. / prājāpatyáṃ tūparáṃ mahāvratá ā́labhante. / prājāpatyò 'tigrāhyò gṛhyate. / áhar evá rūpéṇa sámardhayanti. / átho, áhna eváiṣá balír hriyate. / āgneyám ā́labhante práti prájñātyai. / ajapetvā́n vā́ eté pū́rvair mā́sair ávarundhate. / yád eté gavyā́ḥ paśáva ālabhyánte, / ubháyeṣāṃ paśūnā́m ávarudhyai. // yád átiriktām ekādaśínīm ālábheran, / ápriyaṃ bhrā́tṛvyam abhyátiricyeta. / yád dváudvau paśū́ samásyeyuḥ, / kánīya ā́yuḥ kurvīran. / yád eté brā́hmaṇavantaḥ paśáva ālabhyánte, / nā́priyaṃ bhrā́tṛvyam abhyàtirícyate. / ná kánīya ā́yuḥ kurvate. //

不安定に例の［Sattrin］たちは向かっているのだ、彼らの１年［Sattra］が達成されていないのに[482]Ekādaśinī 祭式が達成されるとき。彼らは Viṣṇu に小さな［犠牲獣］を献じる。Viṣṇu は祭式なのだ。彼らは祭式を献じていることになる、しっかりと立つために。彼らは Indra-Agni に［犠牲獣］を献じる。Indra-Agni は神々の中で疲れ切っていない者た

[481] 訂正した。Ed yáthāyatanā́d. Cf. TS 7.5.6.4 yathāyatanā́d.

[482] saṃvatsaré ’nāpté ’tha: locative absolute の後に atha が使用される場合について Delbrück [1888]、Oertel [1926] 参照。

ちなのだ。疲れ切っていない神々であるところのその両者を彼らは獲得していることになる。彼らは Viśve Devās に［犠牲獣］を献じる。彼らは神格たちを献じていることになる。彼らは天地に乳牛を献じる。天地において彼らはしっかりと立っていることになる。彼らは Vāyu に子牛を献じる。Vāyu は彼らから宿営地（āyatana-）からのように神格たちを獲得していることになる。彼らは Aditi にヤギ、若い牝牛を献じる。Aditi はこの［大地］なのだ。彼らはこの［大地］においてしっかりと立っていることになる。Mitra-Varuṇa に［犠牲獣］を献じる。彼らは Mitra によって祭式のよく祭られた部分を鎮めていることになる。Varuṇa によって悪く祭られた部分を。彼らは Prajāpati に無角の（tūpará-）［犠牲獣］を Mahāvrata において献じる。Prajāpati のための Atigrāhya が汲まれる。彼らは日を形で完成させていることになる。そしてまた、［その］日の、例の貢ぎ物（balí-）が支払われていることになる。彼らは Agni に［犠牲獣］を献じる。［道を］認識するために。例の［Sattrin たち］は、先行する月々によって、去勢されたヤギたちを獲得する。例の牛に属する犠牲獣たちを献じられることは、両方の犠牲獣たちを得るためである。 もし彼らが余分な Ekādaśinī 犠牲祭を行えば、嫌いな敵対者のために残ってしまうだろう。犠牲獣を二頭ずつ組み合わせれば、寿命が短くなってしまうだろう。もし Brāhmaṇa を持つ例の犠牲獣たちが献じられたなら、嫌いな敵対者のために残ることはなく、彼ら自身の寿命を縮めることもない。

TB 1.2.6: 一年の締めくくりとしての Mahāvrata（≈KS 34.5; PB 5.5）

prajā́patiḥ prajā́ḥ sr̥ṣṭvā́ vr̥ttò ’śayat. / táṃ devā́ bhūtā́nāṁ rásaṃ téjaḥ saṃbhŕ̥tya, / ténainam abhiṣajyan. / "mahā́n avavarti=" íti. / tán mahāvratásya mahāvratatvám. / "mahád vratám" íti. / tán mahāvratásya mahāvratatvám. / "maható vratám" íti. / tán mahāvratásya mahāvratatvám. / pañcaviṁśáḥ stómo bhavati. // cáturviṁśatyardhamāsaḥ saṃvatsaráḥ. / yád vā́ etásmin saṃvatsaré ’dhi prā́jāyata. / tád ánnaṃ pañcaviṁśám abhavat. / madhyatáḥ kriyate. / madhyató hy ánnam aśitáṁ dhinóti. / átho, madhyatá evá prajā́nām ū́rg dhīyate. / átha, yád vā́ idám antatáḥ kriyáte. / tásmād udanté prajā́ḥ sámedhante. / antatáḥ kriyate prajánanāyaivá. / trivŕ̥c chíro bhavati. // tredhāvihitáṁ hí śíraḥ. / lóma chavī́r ásthi. / párācā stuvanti. / tásmāt tát sadŕ̥g evá. / ná médyató 'nu medyati. / ná kŕ̥śyató 'nu kr̥śyati. / pañcadaśò 'nyáḥ pakṣó bhavati. / saptadaśò ’nyáḥ. / tásmād váyāṁsy anyatarám ardhám abhí paryā́vartante. / anyataráto hí tád gárīyaḥ kriyáte. // pañcaviṁśá ātmā́ bhavati. / tásmān madhyatáḥ paśávo váriṣṭhāḥ. / ekaviṁśáṃ púccham. / dvipádāsu stuvanti prátiṣṭhityai. / sárveṇa sahá stuvanti. / sárveṇa hy ā̀tmánātmanvī́. / sahótpátati. / ékaikām úcchiṁṣanti. / ātmánn hy áṅgāni baddhā́ni. / ná vā́ eténa sárvaḥ púruṣaḥ // yád itá-ito lómāni dató nakhā́n. / parimā́daḥ kriyante. / tā́ny evá téna prátyupyante. / áudumbaras tálpo bhavati. / ū́rg vā́ ánnam udumbáraḥ. / ūrjá evā́nnā́dyasyā́varuddhyai. / yásya talpasádyam ánabhijitaṁ syā́t, / sá devā́nāṁ sā́myakṣe / talpasádyam abhíjayānī́ti tálpam ārúhyódgāyet. / talpasádyam evā́bhíjayati. // yásya talpasádyam abhíjitaṁ syā́t. / sá devā́nāṁ sā́myakṣe / talpasádyaṃ mā́ párājeṣī́ti tálpam ārúhyódgāyet. / ná talpasádyaṃ párājayate. / pleṅkhé śaṁsati. / máho vái pleṅkháḥ. / máhasa evā́nnā́dyasyā́varuddhyai. /

Prajāpati は諸生物を創出した後、疲れ果てたので横になった。神々は存在物たちのエッセンス（rása-）を、光輝を彼に集めた後、それで彼を癒した。「偉大な者（mahā́n＝Prajāpati）が疲れ果てた（avavarti, redupl. aor.）」と。それが Mahāvrata が Mahāvrata と呼ばれる由縁である。Pañcaviṁśa-Stoma が使用される。1 年は 24 の半月からなる。例の 1

年において繁殖したもの、それが食べ物に、25 番目のものになった。真ん中で行われる。真ん中（＝腹部）で、食べられた食べ物は栄養になるから。そしてまた、真ん中で生き物たちの滋養は栄養になる。そして、これが最後に行われること、そのことから、端のところで（udanté）生き物たちは繁栄する。最後に行われる、まさに繁殖のために。Trivṛt[-Stoma] が頭（śiras-）として使用される。頭は 3 部分に分かれたものであるから。［すなわち］髪、皮、骨に。彼らは逆向きの Stoma を歌う。それゆえそれはまさに似ている。彼は太っている者の後には太らない。彼は痩せている者の後には痩せない。Pañcadaśa[-Stoma] が片方の側として使用される。Saptadaśa[-Stoma] がもう片方の［側として使用される］。それゆえ、鳥は二つの半分のどちらかに身を向ける。その方が片方よりも重くなるからである。Pañcaviṁśa[-Stoma] が胴体として使用される。それゆえ、家畜たちは胴の中央が最も広い。Ekaviṁśa[-Stoma] が尻尾（púccha-）として使われる。彼らは 2 つの Pāda からなる［詩節］たちに合わせて［Stotra を］歌う。しっかりと立つためである。彼らは全体を伴って［Stotra を］歌う。胴体全体を伴って胴体を持つものは上に飛ぶからである。彼らは 1 つ 1 つの［詩節］を［胴体と分けて］残す。手足は胴体に固定されたものだから。髪の毛や歯や爪をあちこちに［残して］しまえば、その人間は全体ではない。Parimād たちが施される。それによって、それらは植え付けられる。Udumbara の木でできた寝台（talpa-）[483]が使用される。Udumbara の木は滋養、食べ物なのだ。滋養、食べ物を得るために。神々による証において、座るべき寝台を得られなかった者は、「私は座るべき寝台を勝ち取りたい」と［考えて］寝台に登って Sāman を歌うべきである。こうして彼は座るべき座を勝ち取る。座るべき寝台を勝ち取った者は、神々による証において、「私は座るべき寝台を失わないように」と［考えて］寝台に昇って Sāman を歌うべきである。彼は座るべき寝台を失わない。彼はブランコの上で歌う。ブランコは高さである。高さと食物を獲得するためである。

TB 1.2.6.6–7: 神々と Asura、Brāhmaṇa と Śūdra の革を巡った争い（≈ KS 34.5; TS 7.5.8-10）[484]

devāsurā́ḥ sáṃyattā āsan. / tá ādityé vyā́yacchanta. / táṃ devā́ḥ sámajayan. // brāhmaṇáś ca śūdráś ca carmakarté vyā́yacchete. / dáivyo vái várṇo brāhmaṇáḥ. / asuryàḥ śūdráḥ. / "imè ’rātsur imé subhūtám akrann" íty anyataró brūyāt. / "imá udvāsīkāríṇa imé durbhūtám akrann" íty anyataráḥ. / yád eváiṣāṁ̆ sukṛtáṃ, yā́ rā́ddhiḥ, / tád anyataró ’bhíśrīṇāti. / yád eváiṣāṃ duṣkṛtáṃ yā́rāddhiḥ, / tád anyataró ’pahanti. / brāhmaṇáḥ sáṃjayati. / amúm evā́dityáṃ bhrā́tṛvyasya sáṃvindante. //

神々と Asura たちは拮抗しあっていた。彼らは太陽をめぐって争った。神々は太陽を完全に勝ち取った。Brāhmaṇa と Śūdra は一枚の革をめぐって争った。Brāhmaṇa は天に属する種姓（varṇa-）なのだ、Śūdra は Asura に属する［種姓］なのだ。二人のうちどちら

[483] Cf. KS 34.5; TS 7.5.9

[484] KS 34.5 では śūdra と ārya の革を巡った争いが述べられ、TS 7.5.9 では二人の革を巡った争いが述べられる。KS 34.5 には Abhigara と Apagara、Śūdra と Ārya、Brahmacārin と Puṁścalī の 3 種のペアが述べられている。

かが、「この者たちは成功した、この者たちは幸福をもたらした」と言うべきである。
二人のうちどちらかが言うべきである、「この者（Sattrin）たちは生きながらえること
を引き起こす者たちであり、この者（Sattrin）たちは不運をもたらす者たちである」と。
彼らによってよくなされたこと、成功したことは、2 人のどちらかが生み出す。彼らに
よって悪くなされたこと、不運な成功は、2 つのうちのどちらかがそれを打ち消す。
Brāhmaṇa は完全に勝利する。彼らは敵対者の太陽を完全に手に入れていることになる。

8 参考文献

8.1 一次文献

8.1.1 Saṁhitā 文献

RV Ṛgveda(-Saṁhitā)

<Ed. Aufrecht>
Die Hymnen des Rigveda. Herausgegeben von Theodor Aufrecht. 2 Bde. 2. Auflage. Bonn: Adolph Marcus, 1877.
<Ed. Müller>
Rig-Veda-Samhitâ. The sacred hymnes of the Brâhmans together with the commentary of Sâyanâkârya. 4 vols. London: Frowde, 1890, 1890, 1892, 1892.
<Ed. Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala>
Ṛgveda-saṁhitā. With the Commentary of Sāyaṇācārya. 5 vols. Poona: Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, 1933, 1936, 1941, 1946, 1951 (2nd ed. 4 vols. 1972–).
<Ed. V. Bandhu>
Ṛgveda with the Padapāṭha and the available portions of the Bhāṣya-s by Skandasvāmin and Udgītha, the Vyākhyā by Venkata-Mādhava and Mud-gala's Vrtti based on Sāyaṇa-Bhāṣya, edited, critically, and annotated with textcom-parative data from original manuscripts and other available materials, by Vishva Bandhu, in collaboration with Bhīm Dev, Amar K, K.S.R. ācārya. 8 vols. Hoshi
arpur: Vishvashvaranand Vedic Research Institute, 1963–1966.
<Ed.(: Padapāṭha) Kṛṣṇācārya>
ṛksaṃhitāpadapāṭhaḥ (= Ṛgveda Padapāṭha. Edited by T. R. Kṛṣṇācārya).
Bombay: Nirnayasagar, 1902.
<Ed.(: Padapāṭha) Josyer>
Rigveda Samhita Pada text (=ṛgvedasaṃhitāpadapāṭhaḥ). Edited by G.R. Josyer (with the assistance of pandits). Mysore: Coronation Press, 1947.

AV, AVŚ Atharvaveda(-Saṁhitā), Śaunaka

<Ed. Roth/Whitney/Lindenau>
Atharva Veda Sanhita. Herausgegeben von R. Roth und W.D. Whitney. Dritte, unveränderte Auflage (nach der Max Lindenau besorgten zweiten Auflage) Bonn: Fred Dümmlers Buchhandlung, 1924
<Eds. V. Bandhu et al.>
Atharvaveda (Śaunaka) with the Pada-pāṭha and Sāyaṇācārya's commentary. I, II, III, IV-1, IV-2. Vishveshvaranand Indological Series 13－17. Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute, 1960, 1961, 1961, 1962, 1964.
<Ed. Shankar Pândurag Pandit>
Atharvasamhitâ with the commentary of Sâyaṇâcârya. 4 vols. Bombay: Govern-ment Central Book Depot, 1895－1898.

AVP Atharvaveda(-Saṁhitā), Paippalāda 派

AVP-Kashm. Atharvaveda(-Saṁhitā), Paippalāda 派, Kashmir 伝承

<Ed. Barret/Edgerton>
The Kashmirian Atharva Veda.
Edited by Barret, LeRoy Carr:

Book one: JAOS 26 (1906) 197－295, Book two: JAOS 30 (1910) 187－258, Book three: JAOS 32 (1912) 343－390, Book four: JAOS 35 (1915) 42－101, Book five: JAOS 37 (1917) 257－308, Book seven: JAOS 40 (1920) 145－169, Book eight: JAOS 41 (1921) 264－289, Book nine: JAOS 42 (1922) 105－146, Book ten: JAOS 43 (1923) 96－115, Book eleven: JAOS 44 (1924) 258－269, Book twelve: JAOS 46 (1926) 34－48, Book thirteen: JAOS 48 (1928) 34－65, Book fourteen: JAOS 47 (1927) 238－249, Book fifteen: JAOS 50 (1930) 43－73, Books sixteen and seventeen: American Oriental Series 9 (1936), Book eighteen: JAOS 58 (1938) 571－614, Book fourteen: JAOS 47 (1927) 238－249, Books nineteen and twenty: American Oriental Series 18 (1940). Edited by Franklin Edgerton: Book six: JAOS 34 (1915) 374－411.

<Ed. R. Vira>

Atharva Veda of the Paippalādas: conspectus of Śaunaka and Paippalāda, Paippalāda verse-index. Delhi: Arsh Sahitya Prachar Trust (Distributors: Mehar-chand Lacchmandas, Dryagang, New Delhi), 1979.

AVP-Or Atharvaveda(-Saṁhitā), Paippalāda 派, Orissa 伝承(= PS)

<Ed. D. Bhattacharya>

The Paippalāsa-Saṃhitā of the Atharvaveda. Criditcally edited from palmlief manuscripts in the Oriya script discovered by Dugamohan Bhattacharyya and one Śāradā manuscript. 4 vols. (volume 1: Consisting of the first fifteen Kāṇḍa, volume 2: consisting of the sixteenth Kāṇḍa, volume 3: consisting of the seven-teenth and eighteenth Kāṇḍas, vol.4: consisting of the nineteenth and twentieth Kāṇḍas). Bibliotheca Indica Series No. 318－319.

Kolkata(Calcutta): The Asiatic Society, 1997, 2008, 2011, 2016 (Revised edition volume 1: Kolkata: The Aisatic Society2017).

<Ed.(: I) Zehnder>

Textkritische und sprachhistorische Untersuchungen zur Paippalāda-Saṁhitā. Kāṇḍa 1. Lizentiatsarbeit im Fach Vergleichende Indogermanische Sprachwissenschaft, Philosophische Fakulität I, Universität Zürich. [unpublished]. Zürich, 1993.

<Ed.(: II) Zehnder>

Atharvaveda-Paippalāda, Buch 2, Text, Übersetzung, Kommentar. Eine Sammlung altindischer Zaubersprüche vom Beginn des 1. Jahrtausends v. Chr. von Thomas Zehnder. Beiträge zur Sprach- und Literaturwissenschaft, Reihe 3, Band 107. Idstein: Schulz-Kirchner-Verlag, 1999.

<Ed.(: V) Lubotsky>

Atharvaveda-Paippalāda Kāṇḍa five. Text, translation, commentary by Alexander Lubotsky. Harvard Oriental Series, Opera Minora vol. 4. Cambridge, Mass.: Department of Sanskrit and Indian Studies, Harvard 8 University, 2002.

<Ed.(: VI－VII) Grifiths>

The Paippalādasaṃhitā of the Atharvaveda Kāṇḍas 6 and 7: A new edition with translation and commentary by Arlo Grifiths. Groningen Oriental Studies 22. Groningen: Egbert Forsten, 2009.

<Ed.(: VIII－IX) Kim>

Die Paippalādasaṃhitā des Atharvaveda Kāṇḍa 8 und 9: Eine neue Edition mit Übersetzung und Kommentar von Jeong-Soo Kim. Würzburger Studein zur Sprache und Kultur, Indologie-Sprachwissenschaft, Band 12. Dettelbach a.M.: Verlag J.H.Röll, 2014.

<Ed.(: XIII－XIV) Lopez>

Atharvaveda-Paippalāda Kāṇḍas Thirteen and Fourteen. Text, Translation, Commentary. By Carlos A. Lopez. Harvard Oriental Series. Opera Minora Vol.6 Cambridge, Mass.: Harvard University, 2010.

MS Maitrāyaṇī Saṁhitā

<Ed. Schroeder>
Maitrâyaṇî Saṁhitâ. Herausgegeben von Leopold von Schroeder. 4 Bde. Leipzig: F.A. Brockhaus, 1881, 1883, 1885, 1886.
<Ed. Sātavalekar>
Yajurvedīya Maitrāyaṇī-Saṃhitā. Dillī: Lithogrāpharsa, s.a.. 4th ed. Pāraḍī: Svādhyāya-Maṇḍala, 1983.

KS Kaṭha-Saṁhitā (Kāṭhaka-Saṁhitā)

<Ed. Schroeder>
Kâṭhakam. Die Saṁhitâ der Kaṭha-Çâkhâ. Herausgegeben von Leopold von Schroeder. 3 Bde. Leipzig: F.A. Brockhaus, 1900, 1909, 1910.
<Ed. Sātavalekar>
Yajurvedīya Kaṭhasaṁhitā. Sampādaka Śrīpāda Dāmodara Sātavalekara. Vraja-jīvana Prācyabhāratī Granthamālā, 115. Dillī: Caukhambā, s.a. 4th ed. Pāraḍī: Svādhyāya-Maṇḍala, 1983.

KpS Kapiṣṭhalakaṭha-Saṁhitā

Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṃhitā. A Text of the Black Yajurveda. Critically edited for the first time by Raghu Vira. Lahore: Mehar Chand Lachman Das, 1932. 2nd ed. Delhi: Meharchand Lachmandas, 1968.
Raghu Vira (Ed.). (1968). *Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṃhitā. A Text of the Black Yajurveda.* 2nd ed. Delhi. (1st ed.: Lahore 1932)

TS Taittirīya-Saṁhitā

<Ed. Weber>
Die Taittirîya-Saṁhitâ. Herausgegeben von Albrecht Weber. 2 Bde. Indische Studien, 11, 12. Leipzig: F.A. Brockhaus, 1871, 1872.
<Ed. VSM>
Taittirīya Saṁhitā with the Padapāṭha and the commentaries of Bhaṭṭa Bhāskara Miśra and Sāyaṇācārya. Edited by N. S. Sontakke, T. N. Dharmadhikari, et al. 5 vols. (–IV, pt.2). Poona: Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, 1970–2007.

VS Vājasaneyi-Saṁhitā, Mādhyandina

<Ed. Paṇsīkar>
Vājasaneyi-Mādhyandina-Śukla-Yajurveda-Saṁhitā with the Mantra-Bhāṣya of Uvaṭa, the Vedadīpa-Bhāṣya of Mahīdhara. Edited by Wāsudev Laxman Shāstrī Paṇsīkar. Bombay: Nirnayasagar, 1912.
<Ed. J. Shastri>
Vājasaneyi-Mādhyandina-Śukla-Yajurveda-Saṁhitā with the Mantra-Bhāṣya of Uvaṭa, the Vedadīpa-Bhāṣya of Mahīdhara. Edited by Pandit Jagdishlal Shastri. Delhi: Motilal Banarsidass, 1971 (Repr.: 1978).
<Ed. Weber>
The Vâjasaneyi-Sanhitâ in the Mâdhyandina- and the Kâṇva-Çâkhâ with the Commentary of Mahîdhara. The White Yajurveda, pt. 1. Berlin: Dümmler–40 London: Williams and Norgate, 1852 (Repr.: Chawkhamba Sanskrit Series 103, Varanasi: Motilal Banarsidass, 1972).
<Ed. Sātavalekar>
Vājasaneyi-Mādhyandina-Śukla-Yajurveda-Saṃhitā. Aundh: Svādhyāya-Maṇ-ḍala 1946. 4th ed. Pāraḍī: Svādhyāya-Maṇḍala, 1983.

VSK Vājasaneyi-Saṁhitā, Kāṇva

→ VS <Ed. Weber>
<Ed. B.R.Sharma>
Kāṇva-saṃhitā with the Padapāṭha and the commentaries of Sāyaṇācārya, Ānan-dabodha and Anantāchārya. Edited by Dr. B.R.Sharma. 4 vols. Pune: Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, 1988 (vol.1), 1992 (vol.2), 1999 (vol.3, vol.4).

8.1.2 Brāhmaṇa 文献

AB Aitareya-Brāhmaṇa

<Ed. Aufrecht>
Das Aitareya Brāhmaṇa. Mit Auszügen aus dem Commentare von Sāyaṇācārya und anderen Beilagen herausgegeben von Theodor Aufrecht. Bonn: Adolph Marcus, 1879 (Repr.: Hildesheim: Georg Olms, 1975).

<Ed. Haug>
The Aitareya Brahmanam of the Rigveda containing the earliest speculations of the Brahmans on the meaning of the sacrificial prayers, and on the origin, performance, and sense of the rites of the Vedic religion. Edited, translated and explained by Martin Haug. 2 vols. Bombay: Government Central Book Depôt/London: Trübner 1863.

<Ed. Ānandāś.>
aitareyabrāhmaṇam. śrīmatsāyaṇācāryaviracitabhāṣyasametam. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ 32. 2 vols. Poona: Ānandāśrama 1896 (2nd ed. 1930, 1931).

<Ed. Trivandrum>
Aitareya Brāhmaṇa with the Vṛtti Sukhapadā of Ṣaḍguruśiṣya. Edited by Anantakṛṣṇa Śāstri, P.K. Narayana Pillai, SuranadKunjan Pillai. 3 vols. Trivandrum Sanskrit Series 149, 167, 176. Trivandrum: University of Travancore, 1942, 1952, 1955.

<Ed. Nirnayasagar>
Aitareyabrāhmaṇam. Bombay: Nirnayasagar, 1925 (Repr.: The Kashi Sanskrit Series256. Varanasi: Choukhambha Sanskrit Sansthan, 1987).

<Ed. Sudhakar Malaviya>
The Aitareya Brahmaṇa of the Ṛgveda with the commentary Vedārtha-Prakāś of Sāyañacārya, and 'Sarala' Hindi translation. Prācyabhāratīgranthamālā 14, 15. Varanasi: Tara Publications, 1980, 1983.

TB Taittirīya-Brāhmaṇa

<Ed. Ānandāś.>
kṛṣṇayajurvedīyaṃ taittirīyabrāhmaṇam. śrīmatsāyaṇācāryaviracitabhāṣya-sametam. 3 vols. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ 37. 3rd ed. Poona: Ānandāśrama, 1979.

<Ed. Mysore>
The Taittiriya Brahmana with the Commentary of Bhattabhaskaramisra. Ed. by A. Mahadeva Sastri, R. Shama Sastry and L. Sriniasacharya. 4 vols. Government Oriental Library Series. Bibliotheca Sanskrita, 36. Mysore: Government Brach Press, 1908–1921 (Repr.: Delhi: Motilal Banarsidass, 1985).

<Ed. P.E. Dumont>
I 4,3-4: Mél.Renou (1968) 243-253
II 1: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 108, No.4 (1964) 337-353
II 6: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 109, No.6 (1965) 309-341
II 8: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 113, No.1 (1969) 34-66
III 1: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 98, No.3 (1954) 204-223
III 2: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 101, No.2 (1957) 216-243 34
III 3: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 103, No.4 (1959) 584-608
III 4: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 107, No.2 (1963) 177-182
III 5: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 104, No.1 (1960) 1-10
III 6: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 106, No.3 (1962) 246-263
III 7,1-6;11: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 105, No.1 (1961) 11-36
III 7,7-10;12-14: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 107, No.5 (1963) 446-460
III 8-9: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 92, No.6 (1948) 447-503
III 10-12: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 95, No.6 (1951) 628-675

ŚB Śatapatha-Brāhmaṇa, Mādhyandina

<Ed. Weber>

The Çatapatha-Brâhmaṇa in the Mâdhynandina-Çâkhâ with extracts from the commentaries of Sâyaṇa, Harisvâmin and Dvivedaganga. Edited by Albrecht Weber. The White Yajurveda, pt. 2. Berlin: Dümmler–London: Williams and Norgate, 1855 (Repr.: Chowkhamba Sanskrit Series 96, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1964).

<Ed. Kalyan-Bombay>

Shrimad-Vajasaneyi-Madhyandin-Shatapath-Brâhmanam with Vedarthaprakash commentary by Shrimat-Trayibhashyakar Sayanacharya, and Sarvavidyanidha-na Kavindracharya Saraswati Shri Hari Swami. Edites by several learned persons. 5 vols. Kalyan-Bombay: Gangavishnu Shrikrishnadass, 1940.

<Ed. KāśīSkt.Ser.>

Śatapatha Brāhmaṇa of the white Yajurveda in the Mādhyandina Recension (Complete Volume) together with comprehensive Brāhmaṇa Index, Critical Introduciton and Notes. Kāśī Sanskrit Series 127. 2nd ed. Varanasi: Chawkham-bha Sanskrit Sansthan, 1984 (3rd ed. 1998).

<Ed. Ajamer>

yajurvedīyamādhyandinīyam śatapathabrāhmaṇam. Ajamer: Vaidika-yantrāla-ya, "savat 1959" (1903).

ŚBK Śatapatha-Brāhmaṇa, Kāṇva

<Ed. Caland>

The Śatapatha Brāhmaṇa in the Kāṇvīya Recension. Edited for the first time by W. Caland. Revised by Raghu Vira. 2 vols. Punjab Orientaal (Sanskrit) Series 10. Lahore: Motilal Banarsidass, 1926, 1939 (Repr.: Delhi: Motilal Banarsidass, 1983).

<Ed. Swaminathan>

Kāṇvaśatapathabrāhmaṇam. Edited and translated by C.R. Swaminathan. Kalāmūlaśāstra Series 12, 22, 30, 31. 7 vols. Delhi: Indira Gandhi National Centre for the Arts and Motilal Banarsidass, 1994－2015.

JB Jaiminīya-Brāhmaṇa

<Ed. R. Vira/L. Chandra>

Jaiminīya-Brāhmaṇa of the Samaveda. Complete Text critically edited for the first time by Raghu Vira and Lokesh Chandra. Sarasvati-Vihara-Series 31. Nagpur: International Academy of Indian Cultur, 1954 (2nd revised ed. Delhi : Motilal Banarsidass, 1986).

<Ed. Caland>

Das Jaiminīya-Brāhmaṇa in Auswahl. Text, Übersetzung, Indices von W. Caland. Amsterdam: Jonannes Müller, 1919.

<Ed.(: II 1－80) L. Chandra>

The Jaiminiya Brahmana of the Samaveda II.1－80 (Gavāmayana). Critically edited for the first time by Lokesh Chandra Sarasvati Vihara Series 21. Nagpur: The International Academy of Indian Culture, 1950.

<Ed.(: II 334－370) R.Tsuchida>

Das sattra-Kapitel des Jaiminīya-Brāhmaṇa (2,334-370) nach den Handschriften herausgegeben, ins Deutsche übersetzt und erklärt. Von Ryutaro Tsuchida. Dissertation Marburg 1979.

<Ed. (: II 1－80, II 371－442) Mukarawa>

Das Gavāmayana-Kapitel im Jaiminīya-Brāhmaṇa. Von Akiko Murakawa. Dissertation Berlin, 2007.

PB Pañcaviṁśa-Brāhmaṇa (Tāṇḍyamahā-Brāhmaṇa)

<Ed. Chinnaswāmi Śāstri>

Tāṇḍyamahābrāhmaṇa. Belonging to the Sāma veda with the Commentary of Sāyaṇachārya edited with notes, introduction, etc. by Pandit A. Chinnasswami Śastri. 2 vols. Kashi Sanskrit Series Haridās Sanskrit Granthamālā No.105. Benares: The Chawkhamba Sasnkrit Series Office, 1935, 1936.

<Ed. Ānandacandra Vedāntavāgīśa>

Táṇḍya Mahábráhmaṇa = Tāṇḍyamahābrāhmaṇam: Sāyaṇācārya-viracita-Vedārthaprakāśa-nāmadheya-bhāṣya-sahitam. Edited by Ánandacandra Vedántavágíśa 2 vols. Bibliotheca Indica, 62. Calcutta: Asiatic Society of Begal, 1870, 1874 (Repr.: Osnabrück: Biblio Verlag, 1983).

8.1.3 Śrautasūtra 文献

ĀpŚS　　Āpastamba-Śrautasūtra

<Ed. Garbe>
The Śrauta Sútra of Ápastamba belonging to the Taittiríya Saṃhitá with the commentary of Rudradatta. 3 vols. Bibliotheca Indica 92. Calcutta: Asiatic Society, 1882, 1885, 1902.
<Ed. R. S. Vajapeyee and S. N. Vajpay>
āpastambaśrautasūtram: dhūrtasvāmibhāṣya rāmāgnicidvṛtti rūdradattavṛtti yājñikasarvasva vyākhyābhirmaṇḍitam. Edited by R. Sundararama Vajapeyee and S. Narayana Vajpay. Kumbakonam, 2014.

8.1.4 その他

A　　Pāṇini's Aṣṭādhyāyī

<Ed. Böhtlingk>
Pāṇini's Grammatik, herausgegeben, übersetzt, erläutert und mit verschiedenen Indices versehen von Otto Böhtlingk. Leipzig: Hassel, 1887.
<Ed. Cardona>
Pāṇini. His work and its tradition. Volume One. Background and Introduction. Second edtion, revised and enlarged (Appendix III Aṣṭāḍhyāyīsūtrapāṭha). Delhi: Motilal Banarsidass, 1997.

Mbh　　Patañjali's Mahābhāṣya

<Ed. Kielhorn/Abhyanakar>
The Vyākaraṇa Mahābhāṣya of Patañjali. Edited by Franz Kielhorn. Third edition revised and furnished with readings, references, and select critical notes by K.V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962,1965, 1972.
<Ed. Vedavrata>
śrībhagavatpatañjaliviracitam vyākaraṇa-mahābhāṣyam. śrīkaiyyaṭakṛtapradī-peṇa nāgojībhaṭṭakṛtena bhāṣyapradīpoddyotena ca vibhūṣitam. 5 vols. Guru-kula Jhajjara (Rohatak): Harayāṇā-Sāhitya-Saṃsthānam, 1962－1963.

8.2　二次文献

天野 恭子. (2002).「マイトラーヤニー・サンヒターにおける指示代名詞の使用法」.『インド思想史研究』第 14 号, 25−43.

天野 恭子. (2006).「マイトラーヤニー・サンヒターにおける *átas* と *átra* の使用法」.『印度学佛教学研究』第 54 巻第 2 号, 877−873.

Amano, K. (2009). *Maitrāyaṇī Saṁhitā I−II: Übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa.* Bremen: Hempen Verlag.

天野 恭子. (2010).「 Maitrāyaṇī Saṁhitā IV 2,1（Gonāmika 章冒頭）の研究」. 『待兼山論叢』第 44 号哲学編, 1−17.

Amano, K. (2016a). Indication of divergent ritual opinions in the Maitrāyaṇī Saṁhitā. In Houben E. M., Rotaru J & Witzel M. (Eds): *Vedic śākhās, past, present, future*. (Proceedings of the fifth international Vedic workshop Bucharest 2011.) (Harvard Oriental Series; Opera Minora; 9.) Cambridge, Mass.

Amano, K. (2016b). Ritual contexts of sattra myths in the Maitrāyaṇī Saṁhitā. In T. Pontillo et al. (Eds.), *Vrātya Culture in Vedic Sources: Select Papers from the Panel on "Vrātya Culture in Vedic Sources" at the 16th World Sanskrit Conference (28 June−2 July 2015) Bangkok, Thailand* (p. 35−72). Bangkok: DK Publishers.

Amano, K. (2017). A ritual explanation concealing its name: Maitrāyaṇī Saṁhitā I 9 (caturhotṛ chapter). *Journal of Indian and Buddhist Studies, 65*(3), 1039−1046.

Amano, K. (2019a). A non-śrauta ritual in the oldest Yajurveda text: Maitrāyaṇī Saṁhitā IV.2 (Gonāmika Chapter). Proceedings of the 17th World Sanskrit Conference, July 9−13, 2018.

Amano, K. (2019b). The development of the uses of *ha / ha vái / ha sma vái* with or without the narrative perfect and language layers in the old Yajurveda-Saṁhitā texts. *Lingua Posnaniensis LXI* (2), 11−24.

Amano, K. (2022). Is Indra a Sun God? *Journal of Indian and Buddhist Studies 70* (3), 1039−1044.

Biswas, S. (1955). *Die Vrātyas und die Vrātyastomas.* Berlin: Freie University Dissertation.

Bodewitz, W. H. (1973). *Jaiminīya-brāhmaṇa I, 1−65. Translation and Commentary with a Study: Agnihotra and Prāṇāgnihotra.* Leiden: E. J. Brill.

Bodewitz, W. H. (1990). *The jyotiṣṭoma ritual. Jaiminīya-Brāhmaṇa I, 66−364. Introduction, translation, and commentary*. Leiden.

Böhtlingk, O., & Rudolph, R. (1855−1875). *Sanskrit-Wörterbuch.* St. Petersburg. [PW]

Bronkhorst, J. (2007). *Greater Magadha: Studies in the Culture of Early India.* Leiden/Boston: Brill.

Brough, J. (1971). Soma and Amanita muscaria. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, 34*(2), 331−362.

Caillat, C. (1989). *Dialectes dans les littératures indo-aryennes.* Paris : Collège de France, Institut de civilisation indienne.

Caland, W. (1921, 1924a, 1928). *Das Śrautasūtra des Āpastamba.* 3 Bde. (I 1.−7. Buch) Göttingen-Leipzig, (II 8.−15. Buch & III 16.−24. und 31. Buch) Amsterdam.

Caland, W. (1931). *Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa. The Brāhmaṇa of twenty-five chapters.* Calcutta.

Caland, W., & Henry, V. (1906/1907). *L'agniṣṭoma : Description complète de la forme normale du sacrifice de Soma dans le culte védique.* Paris.

Charpentier, J. (1911). Bemerkungen über die vrātya's. *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes, 25*, 355−388.

Choudhary, R. (1964). *Vrātyas in ancient India.* Varanasi: Chowkhambha Sanskrit Series Office.

Delbrück, B. (1888). *Altindische Syntax.* (Syntaktische Forschungen V.) Halle an der Saale.

堂山 英次郎. (2005). 『リグヴェーダにおける一人称接続法の研究』. 「大阪大学大学院文学研究科紀要モノグラフ編」第 45 巻-2.

Edholm, K. af. (2017). Recent Studies on the Ancient Indian Vrātya. *Electronic Journal of Vedic Studies, 1*, 1−17. Retrieved from https://hasp.ub.uni-heidelberg.de/journals/ejvs/article/view/2316.

永ノ尾 信悟. (1984). 「古代インド祭式文献に記述された穀物料理」. 『国立民族学博物館研究報告』9 (3), 521−532.

Einoo, S. (2000). 「Is the Sārasvatasattra the Vedic Pilgrimage?」. 江島惠教博士追悼記念論集『空と実在』. 607−622.　春秋社.

Falk, H. (1982). Zur Tierzucht im alten Indien. *Indo-Iranian Journal 24* (3), 169−180.

Falk, H. (1985). Zum Ursprung der Sattra-Opfer. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellshaft*. Supplement VI, 275−281. (XXII. Deutscher Orientalistentag vom 21. bis 25. März 1983 in Tübingen.) Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden.

Falk, H. (1986). *Bruderschaft und Würfelspiel: Untersuchungen zur Entwicklungsgeschichte des vedischen Opfers.* Freiburg: Hedwig Falk.

Falk, H. (1997). The puropose of Ṛgvedic ritual. In M. Witzel (ed.), *Opera Minora*, 2 (pp. 69−88). Cambridge, Mss.: Department of Sanskrit and Indian Studies, Harvard University.

Falk, H. (2001). Suicidal self-scorching in ancient India. In K. Klaus, & K. Petteri, *Vidyārṇavavandanam: Essays in honour of Asko Parpola* (pp. 131−146). Helsinki: Finnish Oriental Society.

Falk, H. (2002). Vom Vorteil des Schreckens: Gesellschaft und Männerbund in Indien. In R. Das, & G. Meiser, *Geregeltes Ungestüm: Bruderschaften und Jugendbünde bei Indogermanischen Völkern.* Bremen: Hempen Verlag.

Falk, H. (2008). The solar year in the gavāmayana of the Nidānasūtra. In L. Kulikov & M. Rusanov (eds.), *Indologica: T. Ya. Elizarenkova memorial volume, book 1* (pp. 99−114). Moscow: Russian State University for the Humanities.

Falk, H. (2012). Small-scale Buddhism. In F. Voegeli et al., *Devadattīyam: Johannes Bronkhorst felicitation volume* (pp. 491−518). Bern/Berlin/Bruxelles/Frankfurt am Main/New York/Oxford/Wien: Peter Lang.

Falk, H. (2018). The early use of *nakṣatras*. In D. Brown (ed.), *The interactions of ancient astral science* (pp. 527−532). Bremen: Hempen Verlag.

Frenz, A. (1966). *Über die Verben im Jaiminīya-Brāhmaṇa*. (Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Philosophischen Fakultät der Philipps-Universität Marbug.) Marburg: Lahn

伏見 誠. (1997a). 「Bhṛgu の他界体験物語—ŚB XI 6.1, JB I 42−44 和訳—」. 『インド思想史研究』 9, 61−77.

伏見 誠. (1997b). 「Bhṛgu の他界体験物語再考」. 『印度学仏教学研究』45 (2), 1010−1006.

Geldner, K. F. (1951). *Der Rig-Veda: Aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press (Harvard Oriental Series 33, 34, 35).

Gotō, T. (1987). *Die "I. Präsensklasse" im Vedischen: Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia.* Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.

後藤 敏文. (2001). 「サッティヤ *satyá-*（古インドアーリヤ語「実在」）とウースィア οὐσία（古ギリシャ語「実体」）—インドの辿った道と辿らなかった道と—」. 『古典学の再構築』ニューズレター第 9 号, 26－40.

後藤 敏文. (2008). 「古代インドの祭式概観 —形式・構成・原理—」『総合人間叢書』. 第三巻, 中谷英明編, 東京大学 アジアアフリカ言語文化研究所, 57—102.

後藤敏文，山田智輝，永ノ尾信悟. (2009). 「ヴェーダ時代のサラスヴァティー河をめぐって」総合地球環境研究所 2007 年成果報告書『環境変化とインダス文明』（プロジェクトリーダー長田俊樹）, 115－118.

Gotō, T. (2013). *Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background: in co-operation with Jared S. Klein and Velizar Sadovski.* Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.

Grassmann, H. (1872−1875). *Wörterbuch zum Rig-Veda.* Leipzig.

Hauer, J. W. (1927). *Der Vrātya: Untersuchungen über die nichtbrahmanische Religion Altindiens.* Stuttgart: W. Kohlhammer.

Heesterman, J. C. (1957). *The ancient Indian royal consecration: The rājasūya described according to the Yajus texts and annotated.* ’s-Gravenhage: Mouton.

Heesterman, J. C. (1962). Vrātya and sacrifice. *Indo-Iranian Journal, 6*(1), 1−37.

Heesterman, J. C. (1964). Brahmin, ritual and renouncer. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens, 8*, 1−31.

Heesterman, J. C. (1967). The case of the severed head. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens, 11*, 22−43.

Heesterman, J. C. (1982). Householder and wanderer. In T. N. Madan (ed.), *Way of life: King, householder, renouncer: Essays in honor of Luis Dumont* (p. 251−271). Delhi/Paris: Motilal Banarsidas.

Heesterman, J. C. (1985). *The inner conflict of tradition.* Chicago: The University of Chicago Press.

Heesterman, J. C. (1989). King and warrior. In J. C. Galey (Ed.), *Kingship and the kings* (p. 97−122). London: Harwood Academic.

Heesterman, J. C. (1993). *The broken world of sacrifice.* Chicago: The University of Chicago Press.

Heesterman, J. C. (1995). Warrior, peasant and brahmin. *Modern Asian Studies, 29*(3), 637−654.

Heesterman, J. C. (2012). The dakṣiṇā and the development of sacrifice. In S. D'Intino, & C. Guenzi (Eds.), *Aux abords de la clairière : études indiennes et comparées en l’honneur de Charles Malamoud* (p. 3−9). Turnhout: Brepols.

Hillebrandt, A. (1891, 1899). *Vedische Mythologie.* 2 Bde. Breslau: Wilhelm Koebner.

Hillebrandt, A. (1897). *Ritual-Litteratur, vedische Opfer und Zauber.* Strasbourg: Karl J. Trübner.

Hiltebeitel, A. (1978). The Indus valley "proto-Śiva" re-examined through reflections on the goddess, the buffalo, and the symbolism of vāhanas. *Anthropos, 73*, 767−797.

Hoffmann, K. (1975, 1976, 1992). *Aufsätze zur Indoiranistik.* 3 Bde. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.

Jamison, S. W. (1983). *Function and Form in the -áya- Formations of the Rig Veda and Atharva Veda*. (Ergänzungshefte zur Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung, Nr. 31.) Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Jamison, S. W., & Brereton, J. P. (ed. & trans.). (2014). *The Rigveda*. 3 vols. New York: Oxford University Press.

Kasamatsu, S. (2004). On the inflection of Olnd. *śíras-/śīrṣan-*, n. 'head'. *Journal of Indian and Buddhist Studies, 52* (2), 954−950

Kasamatsu, S. (2011). Vedic *svargá-*. *Journal of Indian and Buddhist Studies, 59*(3), 1091−1096.

Keith, A. B. (trans.). (1914). *The Veda of the Black Yajus Schoold entitled Taittiriya Sanhita*. 2 vols. (Harvard Oriental Series vol. 18, 19.) Cambridge: Harvard University Press.

Kim, J. S. (2009). Zur Syntax der Nomina auf -uka- im Veda. *Studien zur Indologie und Iranistik 26.* Bremen: Hempen Verlag.

Klein, J. S. (1978). *The Particle u in the Rigveda. A Synchronic and Diachronic Study.* (Ergänzungshefte zur Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung, 27.) Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Klein, J. S. (1981). The Origin of the Rigvedic *vā́yav ’ndraś ca* construction. Münchener Studien zur Sprachwissenschaft, 40, 73–91.

Krick, H. (1982). *Das Ritual der Feuergründung (Agnyādheya)*. (Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Südasiens, Heft 16.) Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.

Kuiper, F.B.J. (1984). "Was the PutIka a mushroom?" In S.D. Joshi (ed.), *Amr̥tadhārā: Professor R.N. Dandekar Felicitation Volume* (Delhi: Ajanta), 219-227.

Kümmel, J. M. (1996). *Stativ und Passivaorist im Indoiranischen.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Kümmel, J. M. (2000). *Das Perfekt im Indoiranischen: eine Untersuchung der Form und Funktion einer ererbten Kategorie des Verbums und ihrer Weiterentwicklung in den altindoiranischen Sprachen.* Wiesbaden: Reichert Verlag.

Macdonell, A. A. (1897). Vedic mythology. (Grundriss der indo-arischen Philologie und Altertumskunde III: 1: A.). Strasbourg: Karl J. Trübner.

Macdonell, A. A. & Keith, A. B. (1912). *Vedic index of names and subjects*. 2 vols. London: J. Murray.

Mayrhofer, M. (1956, 1963, 1976, 1980). *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen. A concise etymological Sanskrit dictionary.* 4 Bde. Heidelberg.

Mayrhofer, M. (1992, 1996, 2001). *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*. 3 Bde. (lndogermanische Bibliothek. II. Reihe· Wörterbiicher.) Heidelberg. [EWAia]

Mittwede, M. (1986). *Textkritische Bemerkungen zur Maitrāyaṇī Saṃhitā: Sammlung und Auswertung der in der Sekundärliteratur bereits geäußerten Vorschläge*. (Alt- und Neu-Indische Studien, 31.) Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Mittwede, M. (1989). *Textkritische Bemerkungen zur Kāṭhaka-Saṃhitā.* (Alt- und Neu-Indische Studien, 37.) Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Miyakawa, H. (2003). *Die altindischen Grundzahlwörter im Rigveda*. Dettelbach: Verlag J. H. Röll.

Murakawa, A. (2000). The Gavāmayana Portion(s) of the Jaiminīya-Brāhmaṇa: A Preliminary Study. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 12, 110–134.

Murakawa, A. (2007). *Das Gavāmayana-Kapitel im Jaiminīya-Brāhmaṇa*. Inauguraldissertation zur Erlangung des Grades eines Doktors der indischen Philologie am Fachbereich Geschichts- und Kulturwissenschaften der Freien Universität Berlin.

Myius, K. (1995). *Wörterbuch des altindischen Rituals: Mit einer Übersicht über das altindische Opferritual und einem Plan der Opferstätte*. Wichtrach.

Narten, J. (1964). *Die sigmatischen Aoriste im Veda*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Narten, J. (1971). Vedisch aghnyā- und die Wasser. *Acta Orientalia Neerlandica*, 120−134.

Narten, J. (1995). *Kleine Schriften*. Bd. 1. hrsg. von Marcos Albino & Matthias Fritz. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.

西村 直子. (2006). 『放牧と敷き草刈り—Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究—』. 東北大学出版会.

西村 直子. (2010). 「ヴェーダ文献における発酵乳と Soma の神話—sāṃnāyya を中心として」. 『論集』（印度学宗教学会）37, 114−97.

西村 直子. (2015). 「Ṛgveda X 128 Vihavya-Sūkta の展開」. 『印度学佛教学研究』63 (2), 843−837.

Oertel, H. (1926). *The syntax of cases in the narrative and descriptive prose of the Brāhmaṇas.* (Indogermanische Bibliothek, 1. Reihe: Grammatiken Achtzehnter Band.) Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.

Oertel, H. (1934). Zur Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṁhitā. *Sitzungsberichte der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Abteilung, 6*, 3−141 [=Oertel, Kl. Schr. 1, 633−772].

Oertel, H. (1994). *Kleine Schriften*. 2 Bde. Hrsg. von Thomas Oberlies. Stuttgart: Steiner.

大島 智靖. (2003). 「Taittirīya-Saṃhitā 第 7 章とサーマヴェーダ所属ブラーフマナ」. 『待兼山論叢』第 37 号哲学編, 1−18.

大島 智靖. (2006). 「dīkṣaṇīyeṣṭi と祭主の犠牲」. 『印度学佛教学研究』, 55 (1), 310−313 (200−203).

大島 智靖. (2007). 『ヴェーダ祭式におけるアグニシュトーマ祭の潔斎思想—ヤジュルヴェーダ・サンヒターのブラーフマナを中心に—』. 大阪大学.

Ōshima, C. (2009). The consecrated and vratá in the soma sacrifice. *Journal of Indian and Buddhist Studies, 57* (3), 1151−1154.

Ōshima, C. (2010). Dīkṣā́ in the Agniṣṭoma: Some Symbolic Aspects of the Sacrificer's Role. *Journal of Indological Studies*, 22, 61−86.

大島 智靖, 西村直子, 後藤敏文. (2012). 『GAV－古インド・アーリヤ語文献における牛—』. 京都：総合地球環境学研究所 インダス・プロジェクト.

大島 智靖. (2013). 「古代インドにおける死生観の一考察—ヴェーダ潔斎儀礼の中の「死」と「再生」」. 『死生学・応用倫理研究』, 18, 1125−1131 (29−51).

大島 智靖. (2014). 「Dīkṣā と Avāntaradīkṣā—ソーマ祭祭主の超人性とその論理—」. 印度学佛教学研究, 63 (1), 291−286.

大島 智靖. (2015). 「儀礼の中の死と再生—潔斎祭主を巡るヴェーダの解釈学—」. 『伊藤瑞叡博士古希記念論文集：法華仏教と関係諸文化の研究』, 611−623. 山喜房佛書林.

Parpola, A. (1967). On the Jaiminīyaśrautasūtra and its annexes. *Orientalia Suecana 16*,181–214.

Parpola, A. (1968, 1969). *The Śrautasūtras of Lāṭyāyana and Drāhyāyaṇa and their commentaries: An English translation and study I. 1: General introduction and appendices to vol. 1., 2: The agniṣṭoma (LŚS I-II, DŚS I-VI).* (Commentationes Humanarum Litterarum 42:2 and 43:2.) Helsinki: Societas Scientiarum Fennica.

Parpola, A. (1983). The pre-Vedic Indian background of the Śrauta rituals. In F. Staal, *Agni*, vol. II (pp. 41–75).

Parpola, A. (2007). Human sacrifice in India in Vedic times and before. In J. N. Bremmer (ed.), *The strange world of human sacrifice* (pp. 157−177). Leuven: Peeters.

Parpola, A. (2012a). The Dāsas of the Ṛgveda as Proto-Sakas of the Yaz I -related cultures. With a revised model for the protohistory of Indo-Iranian speakers. In M. E. Huld, K. Jones-Bley, & D. Miller (eds.), *Archaeology and Language: Indo-European Studies presented to James P. Mallory* (pp. 221–264). (Journal of Indo-European Studies Monograph 60.) Washington, DC: Institute for the Study of Man.

Parpola, A. (2015). *The roots of Hinduism: The early Aryans and the Indus Civilization.* New York: Oxford University Press.

Pontillo, T. (2023). When the sattrins "offer themselves": The plural agency in Vedic sacrifice. *Medhótá śrávaḥ I. Felicitation Volume in Honour of Mislav Ježić on the Occasion of His Seventieth Birthday.* Edited by Ivan Andrijanić, Petteri Koskikallio, Krešimir Krnic, Sven Sellmer, Przemysl Szczurek.

Pontillo, T. & Moreno D. (2016). Inquiries into Vrātya-phenomenon: an introduction. In T. Pontillo et al. (Eds.), *Vrātya Culture in Vedic Sources: Select Papers from the Panel on "Vrātya Culture in Vedic Sources" at the 16th World Sanskrit Conference (28 June−2 July 2015) Bangkok, Thailand* (p. 1−34). Bangkok: DK Publishers.

Rix, H. et al. (2001). *Lexikon der indogermanischen Verben. Die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen.* Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag. [LIV]

Rolland, P. (1970−1971). La Litanie des Quatre Oblateurs (Maitrāyaṇī Saṃhitā I, 9). *Journal Asiatique 258*, 261−279.

Rolland, P. (1973). Le Mahāvrata : contribution à l'étude d'un rituel solennel védique. *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-historische Klasse*, 51–79.

Rugtveit, M. (2007). *Vediske sattra-ritualer; rituelle statussymboler med asketiske implikasjoner.* (MA thesis in University of Bergen.)

阪本（後藤）純子. (1994). 「髪と鬚」. 『日本仏教学会年報』59, 77−90.

Scarlata, S. (1999). *Die Wurzelkomposita im Ṛgveda.* Wiesbaden.

Schneider, C. (2010) *Die Maskulinen Stämme auf -man- und -iman- im Altindischen: Wortbildung, Funktion und indogermanische Grundlagen.* Hamburg: Verlag Dr. Kovač.

Schrapel, D. (1970). *Untersuchung der Partikel iva und anderer lexikalisch-syntaktischer Probleme der vedischen Prosa nebst zahlreichen Textemendationen und der kritischen Übersetzung von Jaiminīya-Brāhmaṇa 2,371−373 (Gavāmayana I).* Dissertation Marburg.

Schroeder, L. (ed.). (1881, 1883, 1885, 1886). *Maitrāyaṇī Saṁhitā.* 4 Bde. Leipzig.

Schults, B. (2015). Reflections on the Teachings of Ahīnas Āśvatthi, with a Translation of *Jaiminīya Brāhmaṇa* 2.419 and 2.421. *Asian Literature and Translation 3* (3), 1−18.

Sparreboom, M. (1985). *Chariots in the Veda.* (Memoirs of the Kern Institute 3.) Leiden: Brill.

Sen, Citrabhanu. (1978). *A Dictionary of the Vedic Rituals, Based on the Śrauta and Gṛhya Sutras.* Delhi.

Staal, F. (1983). *Agni. The Vedic ritual of the fire altar.* 2 vols. Berkeley: Asian Humanities Press.

Strunk, K. (1983). *Typische Merkmale von Fragesätzen und die altindische 'Pluti'.* München: Verlag der bayerischen Akademie der Wissenschaften.

Thieme, P. (1935). *Pāṇini and the Veda: Studies in the early history of linguistic science in India.* Allahabad.

土山 泰弘. (2003). 「古代インドの即位儀礼と王座(āsandī)」. 『印度哲学仏教学』 18, 340-333.

Tsuchida, R. (1979). *Das sattra-Kapitel des Jaiminīya-Brāhmaṇa (2, 334-370) nach den Handschriften herausgegeben, ins Deutsche übersetzt und erklärt*. Inaugural Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde des Fachbereichs Außereuropäische Sprachen und Kulturen der Philipps-Universität Marburg/Lahn. Marburg: Mauersberger.

辻 直四郎. (1960). 『現存ヤジュル・ヴェーダ—古代インドの祭式に関する根本資料の文献学的研究—』. 東京：財団法人東洋文庫.

辻 直四郎. (1977). 『ヴェーダ学論集』. 東京：岩波書店.

坪田 さより. (2020). 「ヴァージャペーヤ祭における戦車競走儀礼の諸相：Vādhūla-Śrautasūtra 新写本に基づいて」. 『待兼山論叢』. 哲学編. 54, 75−92.

Vishva Bandhu. (1955−1977). *A Vedic Word-Concordance / Vaidika-Padānukrama-Kośa.* (Shantakuti Vedic Series / Śāntakuṭī-Vaidikagranthamālā.) [I: Saṁhitās 6 vols. 1976, 1955, 1956, 1959, 1963, 1963; II: Brāhmaṇas 2 vols. 1973, 1973; III: Upaniṣads 2 vols. 1977, 1977; IV: Vedāṅga-sūtras 4 vols. 1958, 1958, 1959, 1961; V.1: Index Ab Initio 1964; V.2: Index Ab Ultimo 1965.] Hashiapur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute. [VWC]

Wackernagel, J. & Debrunner A. (1896−1964). *Altindische Grammatik.* 3 Bde. [(1896). *Einleitung*. hrsg. von J. Wackernagel; (1957). *Introduction générale*. Neubearbeitung von L. Renou; (1896). *Lautlehre* (Bd. I). hrsg. von J. Wackernagel; (1957). *Nachträge zu Bd. I*. hrsg. von A. Debrunner; (1905). *Einleitung zur Wortlehre: Nominalkomposition* (Bd. II 1). hrsg. von J. Wackernagel; (1957). *Nachträge zu Bd. II*. hrsg. von A. Debrunner; (1954). *Die Nominalsuffixe* (Bd. II 2). hrsg. von A. Debrunner; (1930). *Nominalflexion−Zahlwort−Pronomen* (Bd. III). hrsg. von J. Wackernagel & A. Debrunner; (1964). *Register zur Altindischen Grammatik*. hrsg. von R. Hauschild.] Göttingen. [AiG]
Weber, A. (1861). *Die vedischen Nachrichten von den naxatra (Mondstationen) II.* Abhandlungen der Königlichen Akademie der Wissenschaften zu Berlin.

Weber, A. (1860). *Die vedischen Nachrichten von den naxatra (Mondstationen)*. Berlin: F. Dümmler.

Weber, A. (1862). *Über den Vedakalendar namens jyotisham.* Berlin: Königliche Akademie der Wissenshaften.

Weber, A. (1864). Über Menschenopfer bei den Indern der vedischen Zeit. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft 18*, 286−287 (= A. Weber. (1868). *Indische Strefen*. pp. 54−89). Berlin: Nicolaische Verlagsbuchhandlung.

Webster, T. D. (2016). Proto-Indo-European roots of the Vedic Aryans. *Entangled Religions 3* (1), A−V. (Project of the Käte Hamburger Kolleg (KHK) "Dynamics in the History of Religions between Asia and Europe" at the Center for Religious Studies Research Department (CERES) of Ruhr-Universität Bochum (RUB).)

Winternitz, M. (1925). *Die Vrātyas.* München-Neubiberg: Oskar Schloss Verlag.

Winternitz, M. (1927). *A history of Indian literature I. Translated by S. Ketkar and revised by the author.* Calcutta: University of Calcutta.

Witzel, M. (1989). Tracing the Vedic dialects. Pp. 97–265 in: Caillat 1989.

Witzel, M. (1997). The development of the Vedic canon and its schools : the social and political millieu. In Witzel M. (ed.), *Opera Minora, 2* (pp. 257−348). Cambridge, Mss.: Department of Sanskrit and Indian Studies, Harvard University.

Witzel, M. (2021). *The Veda in Kashmir: History and Present State of Vedic Tradition in the Western Himalayas.* 2 vols. (Harvard Oriental Series). Cambridge: Harvard.